岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (8)

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査

5

1975・3

岡山県教育委員会

中国縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査

5

序

中国縦貫自動車道建設事業の進むなかで美作～落合間の工事が完成し、昭和49年12月21日には、津山インターチェンジにおいて開通式が挙行されました。

岡山県教育委員会では日本道路公団からの委託事業として、道路建設工事に先がけて昭和44年以来、建設用地内の埋蔵文化財について緊急発掘調査を実施してまいりました。この間、遺跡の保存について公団と協議を重ねながら幾多の困難な情勢のなかで久米廃寺は高架橋による保存がなされまた、宮の前遺跡の貯蔵穴群は一部設計変更により全壊をまぬがれました。このことは、関係者の間で、埋蔵文化財の重要性に対する認識が一層高まった結果によるものと考えられます。

当委員会では、この緊急発掘調査による報告書をすでに4回に分けて刊行してまいりましたが、このたび第5分冊として高本遺跡など7遺跡に係る調査報告書を発刊する運びとなりました。

本報告書は限られた整理期間のなかでその成果を執筆、収録したもので内容的には不充分な点があると思いますが、今後の学術研究の資料に、また文化財保護の一助として活用していただければ幸甚に存じます。

なお、調査にあたって日本道路公団並びに中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会をはじめ地元関係市町村教育委員会、岡山県遺跡保護調査団、その他関係各位の御協力と御指導をいただいたことに対し厚くお礼申しあげます。

昭和50年3月

岡山県教育委員会

文化課長 小　林　孝　男

例　　言

1．本調査報告書は，日本道路公団の委託により，岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設用地にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要である。

2．岡山県内の発掘調査は，第一次整備区間と，第二次整備区間に分れ，第一次整備区間では，25遺跡あった。昭和44年３月久米郡久米町久米廃寺に着手して以来，昭和48年６月30日英田郡作東町高本遺跡の調査終了まで，じつに４年３ヵ月を要した。この調査に係る報告書は５分冊に分けて逐次刊行してゆくことになった。本調査報告書はその第５分冊である。なお第二次整備区間は現在発掘調査が進行中である。

3．中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会の設置については，昭和42年５月，岡山県考古学研究者の会からの申し入れに基づいて，対策委員に下記の諸氏を委嘱した。

勝央中学校教諭	浅野克己	（昭和47年11月～）
津山市教育委員会主事	今井　堯	（昭和44年４月～昭和46年５月）
旭第三小学校教諭	神原英朗	（昭和44年４月～昭和44年９月）
岡山大学教授	近藤義郎	（昭和47年11月～）
津山みのり学園	槙月壮介	（昭和44年４月～）
院庄小学校教諭	土居　徹	（昭和44年４月～）
津山高等学校教諭	宗森英之	（昭和47年11月～）
美作考古学研究会会長	渡辺健治	（昭和44年４月～）

4．調査は，岡山県教育委員会文化課（昭和44年度は社会教育課）が，埋蔵文化財保護対策委員会の助言をうけて実施した。

以下，年次ごとに構成員と，調査遺跡名をあげる。なお，担当調査員は津山教育事務所兼務であった。

昭和44年度

		調査遺跡名
社会教育課長	富原　昇	
主幹	神野　力	
課長補佐	花房芳忠	
〃	谷口　佾	
管理係長	光嶋尚之	
文化係長	桐野嘉雄	
文化財保護主事	故森　忠彦　高橋　護	
指導主事	神原英朗	美作国府（第一次）
主事	河本　清	

主事	葛原克人	枝川陽	久米廃寺（第一次）
	泉本知秀	栗野克己	西原遺跡

津山教育事務所

所長	福島祐一		
庶務課長	西口秀俊		
庶務係長	小西一成		
主事	山本剛		

昭和45年度

教育次長（文化課長事務取扱い）

	三村克一		
主幹	萩原一郎		天神原遺跡（第一次）
〃	神野力		押入飯綱神社古墳
文化係長	光嶋尚之		押入西遺跡（第一次）
文化財係長（故）	森忠彦		野介代遺跡
文化財保護主事	高橋護		美作国府跡（第二次）
主事	河本清	中力昭	二宮大成遺跡（第一次）
〃	橋本惣司	伊藤晃	久米廃寺跡（第二次）
〃	泉本知秀	栗野克己	穴塚古墳
〃	柳瀬昭彦		西原遺跡

津山教育事務所

所長	福島祐一	
次長	平井克己	
庶務係長	本郷恵津夫	
主事	山本剛	

昭和46年度

文化課長	神野力	
参事	萩原一郎	
文化主幹	光嶋尚之	
文化財係長（故）	森忠彦	
主任	渡辺武彦	
文化財保護主査	高橋護	天神原遺跡
主任	大山行正	押入西遺跡
文化財保護主事	河本清	沼古墳

主事	橋本惣司	伊藤晃	美作国府
〃	栗野克己	泉本知秀	二宮大成遺跡
〃	柳瀬昭彦	下沢公明	宮尾遺跡（第一次）
〃	山磨康平	井上弘	領家遺跡
〃	岡田博	池畑耕一	赤野遺跡（第一次）

津山教育事務所

所長	福島祐一	
次長	平井克己	
係長	田中篤周	
主事	春名勝	難波友広

昭和47年度

教育次長（文化課長事務取扱い）

	大原利貞		
参事	萩原一郎		
文化財主幹	富岡敬之		高本遺跡
文化主幹	原田道明		狼谷遺跡
主任	渡辺武彦		北山古墳群
文化財二係長	岡本明郎		上相遺跡
主任	大山行正		小中古墳群
文化財保護主事	河本清		小中遺跡
〃	橋本惣司		平遺跡
主事	田仲満雄	栗野克己	梶原遺跡
〃	泉本知秀	井上弘	宮尾遺跡
〃	松本和男	山磨康平	下市瀬遺跡
〃	岡田博	高畑知功	赤野遺跡
〃	二宮治夫		

岡山県開発公社

技師補	太田整	戸川孝二	
〃	大賀秋秀	林徹也	
〃	小林泰利	小倉辰之	
〃	森安広之	寺坂伸生	

津山教育事務所

所長	福島祐一	

次　長　赤木　茂

庶務係長　田中篤周

主　事　春名　勝　難波友広

昭和48年度

教育次長（文化課長事務取扱い）

岡田政敏

参　事　富岡敬之

課長補佐　水川富貴男

文化財主幹　浅原　健

文化係長　守屋　明

主　任　渡辺武彦

文化財二係長　岡本明郎

主　任　大山行正

文化財保護主事　河本　清（津山市教育委員会へ出向7月10日～）

〃　栗野克己　橋本惣司

主　事　新東晃一（鹿児島県教育委員会へ6月16日付）　高本遺跡（継続）

〃　田仲満男　松本和男　小中遺跡（継続）

井上　弘　岡田　博　下市瀬遺跡（継続）

山磨康平　高畑知功　且原遺跡

二宮治夫　浅倉秀昭　須の内遺跡

津山教育事務所　宮の前遺跡

所　長　宮島久夫　備中平遺跡

次　長　赤木　茂　谷尻遺跡（第一次）

庶務係長　田中篤周　桃山遺跡（第一次）

主　事　清輔脩身　植木遺跡

難波友広　空古墳

昭和49年度

本年度は，中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を，津山教育事務所が担当することになり，調査員は文化課から津山教育事務所へ配置換となった。

文化課長　小林孝男

参　事　富岡敬之　須の内遺跡（継続）

課長補佐　西口秀俊　宮の前遺跡（継続）

（文化財二係長事務取扱）

主幹	浅原　健	
主任	光吉勝彦	
文化財保護主事	葛原克人	
〃	伊藤　晃	
主事	枝川　陽	
〃	下沢公明	
	樋口啓子	

津山教育事務所

所長	菱川　豪	
次長	赤木　茂	
庶務係長	田中篤周	
主任	大山行正	
主事	難波友広	山本政昭
文化財保護主事	栗野克己	
主事	田仲満雄	井上　弘
	山磨康平	高畑知功
	二宮治夫	浅倉秀昭

社会教育課

文化財保護主事	橋本惣司

谷尻遺跡（第二次）
桃山遺跡（第二次）
戸谷遺跡
塔の畝遺跡
青地遺跡
岩倉古墳群
岩倉遺跡
宗金遺跡

協力者

各遺跡調査地周辺の地元の方々，また，津山市，作東町，美作町　勝央町，久米町，落合町，北房町，大佐町，新見市の各教育委員会には，有形無形の協力を得た。

久米廃寺，美作国府，宮尾遺跡については文化庁田中琢氏，奈良国立文化財研究所，沢村仁，町田章，横田拓美，佐藤興治の各氏，下市瀬遺跡の銅鐸については，三木文雄氏，その他の遺跡から出土した鍛冶炉，鉱滓については，広島大学助教授，潮見浩，住田正男，芹沢正雄の各氏から有益なご教示と，ご助言を得た。石器の材質鑑定は，岡山県教育センター上野等氏，宮尾遺跡の種子分析は，岡山大学農学部教授，笠原安夫氏，木器の材質鑑定は岡山大学農学部教授，畔柳鎮氏をわずらわした。記して感謝の意を表したい。

5．本書に用いたレベル値は，海抜高である。

6．本書に用いた地形図は，国土地理院承認済である。$\frac{1}{1000}$の地形図は，日本道路公団の**Express plan**をトレースしたものである。

7．本報告書で用いる時代区分は一般的な政治的区分に準拠し，それを補うために文化史区分と世紀を併用する。

埋蔵文化財発掘調査契約書

1　委託事務の名称

2　委　託　期　間　昭和　年　月　日から　昭和　年　月　日まで

3　委　託　金　額　金　　円

4　委託金支払場所　日本道路公団

日本道路公団大阪支社長　山川尚典（以下「甲」という。）は，岡山県知事　加藤武徳（以下「乙」という。）に頭書の発掘調査の実施を次の条項により委託する。

第1条　甲は，別紙発掘調査計画書に基づき頭書の委託金額の範囲内で，頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条　甲又は乙の都合により，委託期間を延長し，若しくは発掘調査計画を変更し，又は発掘調査を中止するときは，事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条　乙は，委託契約締結後，遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し，甲に提出しなければならない。

第4条　乙は，第3条の資金使用計画書に基づき，頭書発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2　甲は，前項の請求のあったときは，頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して，請求書を受理した日から15日以内に乙に所要の額を支払うものとする。

第5条　甲は，必要と認めるときは，頭書の発掘調査の処理状況について調査し，又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2　乙は，甲が期限を指定して中間報告を求めたときは，これに応じなければならない。

3　乙は，発掘調査の実施にあたり，作業箇所に作業表示旗をかかげ，発掘調査関係者には腕章等を着用させなければならない。

4　乙は，頭書の発掘調査が完了したときは，すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B5版30部）を作成し，委託期間内に甲に提出しなければならない。

5　乙は，費用精算調書を作成し，委託期間満了1ヵ月以内に甲に提出しなければならない。

第6条　この契約に基づく報告書，費用精算調書その他の関係書類の作成事務の取扱は，甲が特に指定しない限り乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条　乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等は，すべて甲に帰属するものとする。ただし，甲は，発掘され又は発見された埋蔵文化財に関する甲の権限を放棄するものとする。

第8条　発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については，乙が代行するものとする。

2　甲及び乙は，相互に協力して土地使用承諾書の取付けにあたるものとする。

第９条　乙の責めに帰する事由により頭書の期限内に第５条第４項に規定する報告書を提出しないときは，甲は，遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数につき，頭書の委託金額に対して日歩２銭７厘の割合で計算した金額を徴収することができる。

２　甲の責めに帰する事由により第４条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には，乙は，甲に対し日歩２銭７厘の割合で遅延利息の支払を請求することができる。

第10条　乙の責めに帰すべき事由により甲が契約を解除したときは，乙は，頭書の委託金額の10分の１を違約金として，甲の定める期限までに納付しなければならない。

第11条　この契約を変更する必要が生じたときは，甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書２通を作成し，当事者記名押印のうえ，各自１通を保有する。

昭和　年　月　日

委託者　日本道路公団大阪支社

支社長

受託者　岡　　山　　県

知　事

文化財発掘調査報告書

分　　冊	番号	遺　跡　名	所　在　地	備　考
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1	22	赤野遺跡	真庭郡落合町赤野	既刊 49年3月
	25	下市瀬遺跡	真庭郡落合町下市瀬	
	13	志戸部調査区	津山市志戸部	
	12	野介代遺跡	津山市野介代	
	11	押入西遺跡	津山市押入	
	8	梶原遺跡	津山市梶原	
	4	上相遺跡	英田郡美作町上相	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2	3	北山古墳群	英田郡美作町北山	既刊 49年3月
	10	押入飯綱神社古墳群	津山市押入	
	17	日南遺跡	久米郡久米町日南	
	18	宮尾遺跡	久米郡久米町宮尾	
	19	久米廃寺	久米郡久米町領家	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査(3)	15	美作国府	津山市総社	既刊 49年3月
	16	二宮大成遺跡	津山市二宮	
	24	西原遺跡	真庭郡落合町西原	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査4	2	狼谷遺跡	英田郡美作町楢原上	50年3月 発刊
	5	小中古墳群	勝田郡勝央町岡	
	6	小中遺跡	勝田郡勝央町岡	
	9	天神原遺跡	津山市河辺	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査5	1	高本遺跡	英田郡作東町川北	50年3月 発刊予定
	7	平遺跡	勝田郡勝央町平	
	14	沼古墳群	津山市沼	
	20	領家遺跡	久米郡久米町領家	
	21	下河内調査区	真庭郡落合町下河内	
	23	穴塚古墳	真庭郡落合町西原	
	26 〜 62	旦原遺跡 〜 岸本城址	真庭郡落合町旦原 〜 阿哲郡哲西町大竹	50年度以降

対策委員会記録

岡山県遺跡保護調査団より推薦された前記８氏を対策委員に委嘱した。対策委員会は毎月１回を定例会とし必要に応じて臨時会も開催した。昭和４４年以来、保護対策、調査方法、整理作業、報告書作成など有益なご指導とご協力により一応の成果を収めることができた。以下対策委員会の開催日、審議事項を羅列しておきたい。

年　月　日	場　　所	審　　議　　事　　項
44年５月11日	久米廃寺調査現場	現場査察 美作国府跡調査について
44年６月21日	久米廃寺調査現場	現場査察
44年７月12日	久米廃寺調査現場	久米廃寺と関連遺跡の調査について
44年８月16日	久米廃寺調査現場	久米廃寺の取扱いについて
44年９月20日	久米廃寺調査現場	美作国府の保存について 落合以西の分布調査について
44年10月18日	久米廃寺調査現場	西原遺跡の調査開始について
44年11月22日	西原遺跡調査現場	現場査察
44年12月20日	津山分庁	発掘調査状況報告（久米廃寺．西原） 落合以西の路線発表について
45年１月17日	津山分庁	発掘調査状況報告（西原遺跡） 久米廃寺の検討
45年２月28日	西原遺跡調査現場 津山分庁	現場査察 住居址と土坑墓の関連検討
45年３月20日	津山分庁	発掘状況報告（西原遺跡） 美作国府の第一次調査について
45年４月11日	津山教育事務所	中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘について
45年４月16日	落合町西原遺跡発掘現場	現場査察（西原）
45年６月27日	津山分庁	昭和45年度発掘計画について
45年７月16日	津山文化センター	発掘調査状況報告
45年７月18日	津山商工会館	現場査察（久米廃寺．押入飯綱古墳群） 天神原の調査について
45年８月29日	津山分庁	発掘調査状況報告
45年９月19日	津山分庁	発掘調査状況報告

45年10月31日	津　山　分　庁	発掘調査状況報告 現場査察（久米廃寺）
45年11月28日	津　山　分　庁	現場査察（久米廃寺） 発掘調査状況報告
45年12月15日	津　山　分　庁	発掘調査状況報告
46年２月20日		現場査察（久米廃寺．二宮大成．天神原）
46年３月31日	津　山　分　庁	昭和45年度発掘調査終了について
46年５月22日	美作国府調査事務所	現場査察（美作国府．領家） 昭和46年度調査計画について
46年６月26日	天神原遺跡調査事務所	現場査察（天神原）
46年７月29日	美作国府調査事務所	久米廃寺調査結果報告 現場査察（美作国府）
46年９月14日	津　山　市　民　寮	久米廃寺の保存について 宮尾遺跡の第一次調査について
46年９月21日	津　山　市　民　寮	昭和46・47年度の調査計画について 宮尾遺跡の取扱いについて
46年10月14日	津　山　市　民　寮	沼古墳の取扱いについて 発掘調査状況報告
46年10月23日		現場査察（領家．宮尾）
46年11月27日		現場査察（宮尾）
46年12月11日		現場査察（天神原．美作国府）
46年12月21日		久米廃寺．宮尾遺跡の保存について
47年１月29日		現場査察（赤野．領家．美作国府）
47年２月26日		現場査察（赤野．美作国府）
47年３月10日	津　山　分　庁	展示会開催について 昭和46年度発掘調査終了について
47年４月８日	津　山　分　庁	昭和47年度調査体制について 遺物の収蔵施設について
47年５月20日	勝央町．美作町．作東町	現場査察（高本．北山．狼谷．小中．平）
47年６月７日	天神原遺跡現場	天神原遺跡の調査終了について
47年７月９日	落合町．北房町	落合以西遺跡の確認調査

47年8月25日		現場査察（落合～作東間8遺跡）
47年9月30日	落合町・久米町	現場査察（下市瀬．宮尾）
47年10月31日	津山分庁	土取場の取扱いについて 工事用道路の取扱いについて
47年11月25日	落合町・久米町	現場査察（下市瀬．宮尾）
47年12月27日	勝央町・美作町	現場査察（狼谷．小中．平）
48年1月27日	勝央町・美作町・作東町	現場査察（高本．狼谷．小中．平）
48年2月3日	宮尾遺跡現場	宮尾遺跡の調査終了について
48年2月17日	津山分庁	発掘状況報告 分布調査について
48年3月28日		現場査察（下市瀬．収蔵庫．高本．狼谷．小中）
48年6月24日	津山分庁	現場査察（高本．小中） 昭和48年度発掘調査計画について
48年7月14日	落合町・北房町	現場査察（旦原．宮の前．谷尻．桃山．植木．宮）
48年8月30日	津山収蔵庫	発掘調査状況報告 報告書の作成について
48年10月8日	津山収蔵庫	久米廃寺の整備計画について 報告書の作成について
48年10月16日	津山収蔵庫	報告書の作成について
48年11月19日	津山収蔵庫	報告書の作成について
48年12月2日	落合町・北房町	現場査察（旦原．宮の前．谷尻．植木．桃山）
49年1月26日	津山収蔵庫	須内遺跡の調査計画について 報告書の作成について
49年2月15日	津山収蔵庫	北房町以西の発掘調査について 報告書の作成について
49年2月23日	津山収蔵庫	発掘調査状況報告 報告書の作成について
49年3月19日	津山農協会館	昭和49年度発掘調査体制について 報告書の作成について
49年3月26日		大佐町以西の遺跡確認調査
49年7月26日	津山商工会館	昭和49年度発掘調査計画について 報告書作成状況報告

49年8月27日 28日	新見市・哲西町	新見以西遺跡の確認調査 宮の前遺跡の保存について
49年9月26日	北房町・落合町	現場査察（宮の前．谷尻．桃山）
49年10月20日	大佐町・新見市	現場査察（戸谷．塔の畝．青地）
49年11月26日	津山市民寮	久米廃寺整備計画について 発掘調査状況報告 報告書作成について
49年12月22日	新見市	現場査察（岩倉上古墳）
50年2月4日	津山市民寮	報告書作成について
50年2月12日		報告書作成について
50年2月26日	新見市・北房町	現場査察（谷尻．桃山．岩倉）
50年3月	北房町	現場査察（谷尻．桃山）

資料　中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実施遺跡一覧表①（昭和44年２月～48年６月）　　（作成栗野）

	遺跡名	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積 m²	主な調査員	概要
1	高本遺跡	作東町川北	47.4.1 48.6.30	8	4,000	井上・松本 泉本・岡田 山磨	①弥生時代中期中葉～後期，住居址３・貯蔵穴状ピット・土器・太型蛤刃石斧扁平片刃石斧・石鏃・石庖丁・磨製石剣・サヌカイト製砥石・分銅形土製品 ②古墳時代終末期，須恵器 ③奈良～平安時代，掘立柱建物８・鍛冶炉・炉壁鉄滓・焼土・木炭片・須恵器・土師器・円面硯２・墨書土器１（郡）④中世～近世，備前焼・青磁・陶器
2	狼谷遺跡	美作町楢原	47.4.1 48.3.31	6	2,500	松本・二宮 泉本	①弥生時代中期～後期包含層・住居址６・土器・土器片紡錘・太型蛤刃石斧・台石 ②古墳時代後期，掘立柱建物６・土壙墓？28・古墳６・溝４・須恵器・土師器 ③平安時代以降，土壙墓１・土師器・備前焼
3	北山古墳群	美作町北山	47.4.1 47.11.30	4	800	松本・二宮 泉本	①弥生時代中期中葉，住居址２・土器・石斧・石鏃・石錘・石錐・石庖丁・サヌカイト破片 ②古墳時代後期，円墳４・木棺直葬・須恵器（装飾付壺）・土師器・埴輪（土師質・須恵質・円筒・ヒレ付・朝顔・人物）・勾玉・管玉・ガス玉・土玉・直刀・刀子・鎌・鋸・馬具（轡・辻金具・鉸具）・鏡 ③鎌倉山地区※弥生時代終末期～古墳時代前期，住居址42・袋状ピット・土器・石庖丁石錘・砥石・磨石・たたき石・鉇・勾玉※古墳時代後期，住居址・須恵器・土師器※鉄滓
4	上相（かみや）遺跡	美作町上相	47.7.1 47.8.31	2	500	松本・二宮 泉本	①古墳時代後期，住居址2(竈付)・掘立柱建物３・須恵器・土師器・砥石・鉄滓・炉壁・砥石
5	小中古墳群	勝央町岡	47.4.1 48.6.30	3	1,300	栗野・高畑	①弥生時代終末期，住居址８～10・土器・石皿・たたき石・石庖丁・砥石・鉇 ②古墳時代後期，円墳４（木棺直葬？）土壙墓３・須恵器・土師器・金環・刀子・馬具（轡）鉸具・鉄鏃 ③奈良～平安時代，古道・須恵器・土師器
6	小中遺跡	勝央町岡		12	4,500	栗野・高畑 松本	①弥生時代中期中葉～後期終末期～古墳時代前期？，住居址30・掘立柱建物・柵列・掘・土壙墓14・壺棺１・土器・土器片紡錘・土師器・管玉・石庖丁・太型蛤刃石斧・石鏃・石槍・砥石・たたき石台石 ②古墳時代後期，土壙１・鎌 ③奈良～平安時代，古道・掘立柱建物・須恵器・土師器・瓦質土器・鉱滓 ④中世後半～近世，墓・土製品（人形・魚・鈴）・古銭・鎌・包丁・釘・キセル・火打鎌・カンザシ
7	平（たいら）遺跡	勝央町平	47.4.1 48.3.31	10	3,000	田仲・井上	①勝田郡の郡家の一部？，奈良・平安時代，礎石建物１・掘立柱建物８・柵列１・溝・井戸・鍛冶炉７・須恵器・土師器・瓦器・緑釉（土師質・須恵質）・灰釉・青磁・文字土器（印・ヘラ書き・墨書）・硯（踏脚硯・円面硯・風字硯風字二面硯・坏蓋硯）・瓦（軒丸瓦２種・軒平瓦２種 ・平瓦・丸瓦）・管状土錘・鉄滓・ふいごの羽口・刀・刀子・釘・木の葉 ②中世，建物６・墳墓・備前焼骨壺・人骨・土師器近世陶磁器

8	梶原遺跡	勝央町福吉 津山市梶原	47.7.18 47.8.11	2	1,000	田仲・井上	①弥生時代後期，包含層・柱穴・土器 ②中世，墳墓・備前焼骨壺・人骨 ③近世墓・陶磁器・古銭・硯・キセル
9	天神原遺跡	津山市河辺	45.11.24 47.6.10	20	4,908	河本・橋本 柳瀬・下沢 新東	①先土器時代，切出状ナイフ形石器1　②弥生時代前期末・後期・終末期・住居址25・掘立柱建物7・溝・土壙5・貯蔵穴・土器・石斧・石鏃・たたき石・石皿・砥石・鉇・刀子・鉄鏃炭化材　③古墳時代後期，円墳7（木棺直葬・箱式石棺）・土壙墓・住居址2・（鍛冶炉付？）・須恵器・土師器・陶棺・鏡・鉄滓　④奈良時代・須恵器・円面硯
10	押入飯綱神社古墳	津山市押入	45.4.1 45.9.10	2	693	橋本・柳瀬	①古墳時代後期，方墳1（葺石・箱式石棺）・円墳1・土壙1・配石遺構・須恵器・土師器・刀子
11	押入西遺跡	津山市押入	45.9.5 45.11.30 47.1.7 47.3.31	8	1,470	河本・橋本 柳瀬・下沢 井上	①弥生時代中期後半，住居址9・掘立柱建物3・段状遺構・土器・太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石包丁（未製品も）・石鏃・砥石・炭火米・　②古墳時代後期，円墳2（木棺直葬）・鹿角装刀子・素環頭太刀・鉸具・鋲板・帯先金具鉄斧・鎌・鑿・釘・須恵器・土師器　③奈良時代，墳墓・須恵器骨壺2・人骨
12	野介代（のけだい）遺跡	津山市 野介代	46.2.26 46.3.31	8	270	河本・橋本 柳瀬・下沢	①弥生時代中期後半，住居址3・土器・扁平片刃石斧・石鏃・炭化材
13	志戸部調査区	津山市 志戸部	46.12.1 46.12.10	1	446	井上・伊藤	遺構なし
14	沼古墳群	津山市沼	46.12.1 46.12.9			伊藤・井上	①古墳時代，箱式石棺4？・人骨
15	美作国府址	津山市総社	45.3.5 45.3.31 46.3.9 47.3.31	14	8,167	高橋・河本 橋本・伊藤 泉本・井上 柳瀬・岡田 池畑	①弥生時代中期～後期，土壙・集石土壙・溝・土器・太型蛤刃石斧・石包丁・石鏃・砥石・織具・ヒョウタンの皮種子・桃の種子・カヤ・　②古墳時代後期土師器・須恵器・　③美作国府（西北部）・建物6・築地跡・溝・井戸5・井戸状ピット5・瓦・（軒丸瓦3種・軒平瓦3種・平瓦3種・丸瓦）・硯（蹄脚硯・円面硯・風字硯，坏蓋硯）・緑釉（土師質・須恵質）・灰釉・青白磁・須恵器・土師器・馬形土製品・墨書土器・竈形土器・瓦器・斎串状木簡・斎串・曲物・つるべ桶・籠・桃・栗・櫛・銅製刀子・刀・子釘・鉄滓・炉壁・ふいごの羽口・牛の鼻輪
16	二宮大成（おおなる）（二宮大東）遺跡	津山市二宮	46.2.4 47.2.20	1	600	栗野・泉本 山磨	①弥生時代中期・後期・終末期，住居址3・溝・ピット・炉址・土器・鉇・たたき石・石包丁・炭火材・　②古墳時代後期，住居址・円墳（横穴式石室）・陶棺3・須恵器・土師器・刀子・鉄鏃・金銅透彫鍔・馬具（鞍・杏葉）・勾玉切子玉・ガラス玉・土玉・　③飛鳥様式単弁軒丸瓦　④平安末～中世，ピット3，建物2・須恵器・土師器・備前焼・古銭・鉄滓
17	日南（ひな）古墳群	久米町宮尾	47.11.1 47.11.30	1	230	橋本・山磨 岡田	①古墳時代，箱式石棺1 ②平安時代，古道・土師器・須恵器

18	宮尾遺跡	久米町宮尾	46.9.20) 46.12.11) 47.4.1) 48.1.31)	12	7,922	橋本・岡田 山磨・井上	①縄文時代晩期，土器・石鏃，　②弥生時代中期初頭～中葉・後期，水路・土器・扁平片刃石斧・石包丁・石鏃・炭化米・管玉・　③古墳時代後期，須恵器　④久米郡の郡家跡，白鳳時代～奈良・平安時代，掘立柱建物20・柵列・門・溝・井戸1・土壙・瓦少量・須恵器・土師器・瓦器・硯（円面硯・坏転用硯）・竈形土器・緑釉・青白磁・鉄滓・ふいごの羽口・古銭・漆膜付須恵器・植物種子・藁・板材　⑤野辺地区，白鳳～奈良時代，竪穴状遺構3・鍛冶炉3・井戸状ピット・溝状遺構・須恵器・土師器・釘・鎹・円板状鉄器・釘・鉄滓・砥石・平瓦
19	久米廃寺	久米町宮尾	44.2.1) 44.3.31) 44.4.1) 45.1.31) 45.4.1) 46.3.31)	24	5,232	河本・葛原 枝川・栗野 泉本・山磨	①弥生時代中期・後期，土器・環状石斧・サヌカイト原石　②古墳時代後期，住居址？・須恵器・土師器・鉱滓　③白鳳時代創建寺院趾・奈良～平安時代，塔・金堂・講堂・僧坊？等（礎石建物5・掘立柱建物3），回廊・築地・溝・円形ピット・瓦（軒丸瓦4種・軒平瓦5種・丸瓦2種・平瓦6種・隅切瓦・熨斗瓦）・須恵器・土師器・緑釉・仏像（塑像仏は如来・菩薩・天部など・塼仏3）・円面硯・墨書土器・文字瓦・水晶・金箔・相輪・鉄鏃・釘・鎹・刀子・鉄滓・掘立柱根・流木・壁土・種子（くるみ・もも・とち）・石製銙帯
20	領家遺跡	久米町領家	46.4.1 47.3.31	12	2,900	栗野・山磨	①先土器時代，丸のみ片刃石斧　②弥生時代中期，後期，住居址13・土壙2・集石遺構1・土器・石包丁・太型蛤刃石斧・扁平片斧・石鏃・敲石・凹石・紡錘車・ガラス玉・炭化米・炭化材・カヤ　③古墳時代前期～後期，住居址19（竈付4）・時期未決住居址9・鍛冶炉1・土壙1・合口甕棺1・土師器・須恵器・土製支脚・竈形土器・金環・鉄滓・ふいごの羽口・鉄斧・砥石・ガラス玉・桃の種子・炭化材・　④奈良～平安時代，掘立柱建物16・礎石建物1・井戸1（曲物の井戸枠）・溝・土師器・須恵器・花文壺・緑釉・灰釉・青磁・刀子・鉄鏃・釘・鉄製紡錘・クサビ・鉄滓・石錘・管状土錘・瓦（軒丸瓦・軒平瓦）・石製銙帯
21	下河内（しもごうち）調査区	落合町 下河内	47.1.20 47.2.7	1	120	河本・橋本 柳瀬	①遺構なし，弥生式土器・須恵器・土師器・古銭
22	赤野遺跡	落合町赤野	47.1.20) 47.2.19) 47.4.1) 47.6.21)	3	960	河本・橋本 柳瀬・岡田 山磨	①縄文時代早期・後期・晩期，土器片・サヌカイト石鏃・すり石・黒曜石片　②古墳時代前期・後期，住居址2・土師器・須恵器　③中世（鎌倉～室町時代），館跡・建物3・L字状掘によって区画・ピット・土師器・瓦器・灯明皿・灰釉・備前焼（擂鉢・壺）・青磁碗・中世陶器・漆器片・鉄鏃・釘
23	穴塚古墳	落合町西原	45.7.27 45.9.25	2	157	中力・伊藤	①古墳時代後期，円墳1（横穴式石室）須恵器・馬具（鞍）・刀子・鉄鏃・鉄斧
24	西原遺跡	落合町西原	44.10.1 45.3.31	6	1,530	神原・河本 枝川・栗野 橋本・中力 伊藤・新東 松本・柳瀬	①縄文時代中期・後期・晩期，土器片・御物石器　②弥生時代中期・後期～終末期，住居址12・土壙10・すり鉢状ピット1・土器・石包丁・太型蛤刃石斧・両刃石斧・石鏃・砥石・鉇・分銅形土製品　③古墳時代，奈良時代以降，須恵器・土師器・管状土錘・紡錘状土製品
25	下市瀬遺跡	落合町 下市瀬	47.8.20 48.5.31	9	4,000	岡本・河本 田仲・新東	①弥生時代中期末・後期～終末期・住居址1・壺棺1・井戸1・水路・土器（特殊壺・絵画土器・スタンプ施文土器）・石包丁・石皿・たたき石・石錘・太

25	下市瀬遺跡	落合町 下市瀬	47.8.20 48.5.31	9	4,000	岡本・河本 田仲・新東	型蛤刃石斧・土玉・銅鐸・フォーク状木器・櫂状木器・槽・田下駄？・スプーン状木器・建築材・種子（桃・どんぐり・かんぴょう）　②古墳時代後期，水路・須恵器　③奈良～平安時代，礎石建物1・掘立柱建物5・井戸3・須恵器（多首壺・蓮弁付高坏）・土師器・瓦器・墨書土器・緑釉（須恵質）・青磁・管状土錘・瓦（軒丸瓦2種・軒平瓦5種）・坏転用硯（朱墨あり）・舟形木器・人形・斎串・木皿・櫛状木器・ヘラ状木製品・種子（桃）・鉄滓　④中世～近世，建物3・備前焼・近世陶磁器

中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実施遺跡一覧表②　（昭和48年7月～昭和49年11月現在）

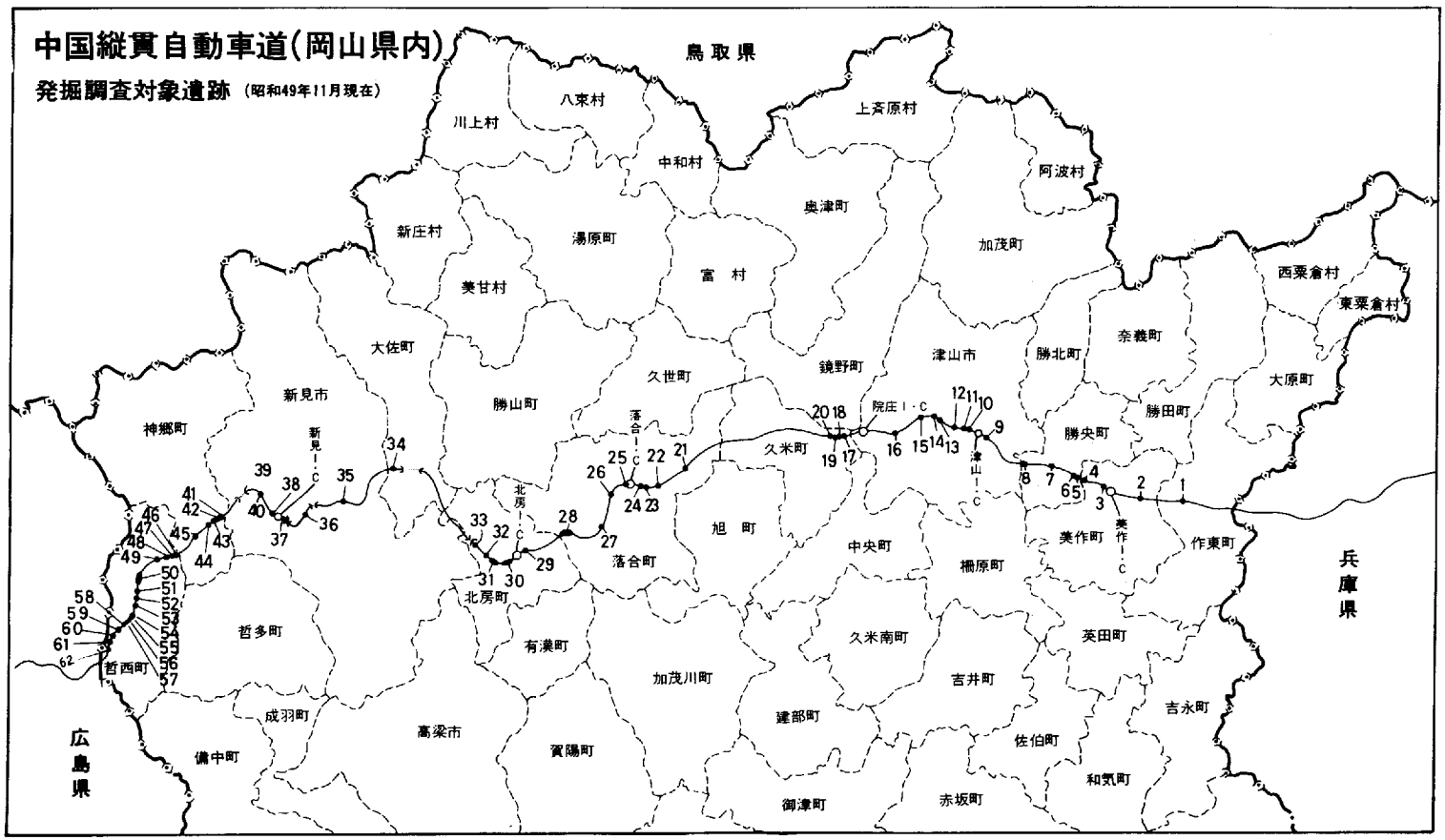
	遺跡名	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積	主な調査員	概要
26	月原（だんのはら）遺跡	落合町 西河内	48.7.17 48.12.31	5.5	m² 2,000	高畑・山磨	①弥生時代中期後半～後期・住居址7，袋状土壙8，柱穴土器溜り　②古墳時代後期古墳3，土壙墓2，土玉刀子　③奈良～平安時代，火葬土壙1・骨蔵器2（壺，坏）・建物1・柱穴　④その他土壙，溝
27	須内（すのうち）遺跡	落合町鹿田	49.1.8 49.6.30	6	2,000	橋本・松本 浅倉・井上 栗野	①縄文時代後期，晩期土器片，黒曜石片　②弥生時代中期末～後期の住居跡2弥生式土器多数太型蛤刃石斧2・扁平片刃石斧2，石鏃5（サヌカイト）・サヌカイト片・ドリル1（サヌカイト）・石匙1　③中世・建物4・柱穴・土壙7・溝・墳墓（骨壺10・五輪塔40以上・宝篋印塔3以上）須恵器・土師器・青磁片・緑釉陶器片2・灯明皿・平瓦片・鉄滓・鉄釘・銅製印（財）・刀子・骨片・炭・砂利敷
28	宮の前遺跡	落合町一色	48.4.23 49.9.30	17	7,500	橋本・二宮 浅倉	①縄文中期・晩期・土器片・貯蔵穴40・ドングリ・クルミ・木の葉　②弥生時代前期・中期・後期住居址16・炉址1・周溝墓8(円形，方形・土坑墓・棺蓋土坑墓6・箱式石棺5・土器・石鏃数十・黒曜石製石鏃1・石包丁7・石皿・たたき石・スリ石・打製石斧・磨製石斧1・太型蛤刃1・石錐10数本・石匙11・石槍2・管玉3・曲玉1・土錘・土器片紡錘　③古墳時代6世紀頃の溝・須恵器・土師器・鉄滓・炉跡　④平安時代～中世・土壙・須恵器・古銭・白磁・柱穴列3
29	備中平（びっちゅうひら）遺跡	北房町五名	48.7.17 49.3.31	9	2,500	栗野・井上 岡田	①縄文時代円形土壙1・早期土器片，乳棒状石斧2・石鏃　②弥生時代，方形土壙・土器片・石鏃　③古墳時代前期の住居址，方形土壙・古墳（横穴式石室のこわれたもの）須恵器坏・土師器・　④奈良～平安時代，建物16，溝状遺構7・井戸3・須恵器，土師器・墨書土器「吉祥」緑釉陶器片1・鉄鏃状鉄器1・鉄製円盤1　⑤中世，窯跡・鍛冶炉状遺構3・ピット・溝・炭・鉄滓・須恵器・土師器・青磁
30	谷尻（たんじり）遺跡	北房町 上水田	48.10.20 48.12.27	15	4,500	高畑・山磨	①縄文時代早期・後期・晩期包含層・石鏃・石斧・サヌカイト片　②弥生時代土壙墓29以上住居址4・柱穴溝・紡錘車・ニワトリ形土製品・太形蛤刃石斧・

30	谷尻遺跡	北房町 上水田	49.4.1) 50.3.31)	15	4,500	栗野・井上 高畑・山磨	石鏃 ③古墳時代・住居址3・包含層・須恵器・土師器 ④奈良～平安建物・柱穴・溝，土器溜り ⑤中世～近世土壙墓・井戸・建物・古銭・青磁・須恵器土師器・備前焼・瓦器・鉱滓・土錘・陶器・水晶片
31	桃山遺跡	北房町 下呰部	48.7.17) 48.9.26) 49.4.1) 50.3.31)	15	2,800	田仲・二宮	①縄文時代，後期・土器片・黒曜石 ②弥生時代，中期・後期，住居址・建物袋状ピット・太型蛤刃石斧・石鏃・石包丁（打製・磨製）・砥石・分銅形土製品 ③古墳時代，古墳1（横穴式石室）・土壙墓？・須恵器・土師器 ④平安時代，土壙墓・鍛冶炉・建物・溝・須恵器・土師器・鉱滓 ⑤中世～近世，墳墓
32	植木遺跡	北房町植木	48.10.20 49.3.28	6	1,280	田仲	①弥生時代末～古墳時代初頭，水路 ②室町時代～鎌倉時代，館跡・建物11・池？・井戸1・鉄鏃15本・たがね5本・短刀1・刀子1・火打鎌・備前焼・須恵器・宋銭28枚（永楽1枚・北宋19枚）・青白磁・砥石4・硯1・鉄滓・炉壁・ふいごの羽口・漆椀5・曲物2・井戸枠
33	空古墳	北房町 下呰部	48.9.22 48.9.25	1	20	田仲	①古墳時代，円墳，横穴式石室，古墳の墳端が一部かかる，地形測量を行なった
34	戸谷遺跡	大佐町 田治部	49.9.1 49.9.30	1	300	橋本・井上 浅倉	①縄文時代，前期，土器片 ②奈良末～平安時代，住居址1・須恵器・土師器・鉄器2点
35	塔の畝遺跡	新見市 上熊谷	49.9.1 49.9.30	1	100	井上	①平安末～中世，石積遺構（方形），須恵器・瓦質土器・五輪塔
36	青地遺跡 （旧史跡七人塚）	新見市 下熊谷	49.8.1 49.11.12	6	1,400	井上・浅倉	①縄文時代，早期・前期，土壙・土器片・サヌカイト片・黒曜石片・チャート片 ②弥生時代，中期・後期，土壙墓・住居址2・柱穴・土器片・提砥・ ③古墳時代，前期・後期，円墳（周溝のみ）・住居址1・須恵器・土師器
37	岩倉古墳群	新見市高尾	49.11.14) 50.6.30)			浅倉・岡田	①弥生時代中期，土器・住居址 ②古墳時代，前方後円墳1（箱式石棺）・横穴式石室・須恵器・土師器・鉄鏃
38	宗金遺跡	新見市西方	49.7.1		(800)	浅倉	平地よりより一段高い平坦部に土師器の散布がみられる。未調査
39	新見庄跡	新見市西方 ～高尾	49.4.1			井上	平安～室町時代の遺跡で，荘園を治めた当時の資料が東寺に保存されている。調査中
40	横見古墳	新見市西方					尾根の斜面に横穴式石室が残存する。未調査
41	追塚古墳群	神郷町 下神代					山麓に横穴式石室墳が残存しまた周辺に径10m前後の円墳状のものが認められる。未調査
42	新市谷遺跡	神郷町 下神代					丘陵斜面上に須恵器・土師器の散布がみられまた数本の段が等高線に平行して認められる。 未調査

43	岩屋城跡	神郷町 下神代					丘陵上に中世の山城が知られている。未調査
44	門前中屋遺跡	神郷町 下神代					緩斜面上に土器片の散布がみられトレンチ調査が必要である。未調査
45	塚谷古墳群	神郷町 下神代					山麓に2基の横穴式石室墳の存在が予想される。 未調査
46	佐藤遺跡	哲西町 上神代					山根屋遺跡の東方平坦地に弥生土器の散布がみられる。 未調査
47	山根屋遺跡	哲西町 上神代					緩斜面を削って作られた町道の崖に住居址の断面やピットがみられる。 未調査
48	中林遺跡	哲西町 上神代					山腹に人工的な構築物があるが性格不明，岩倉へ通じる参道かも知れない。 未調査
49	野田畝遺跡	哲西町 上神代					長光寺裏山の緩斜面でサヌカイト打製石包丁が採取されたことより弥生時代の遺構が考えられる。未調査
50	西江遺跡	哲西町矢田 ～西江					神代川の西半台地に弥生式土器，須恵器が散布し，弥生～古墳時代の集落址が予想される。未調査
51	二野古墳	哲西町矢田					畑に破壊された横穴式石室が残存する。尾根上にも2基の円墳が所在する。 未調査
52	土井遺跡	哲生町土井					舌状に延びる台地上で須恵器を採集したが遺跡の存在は明らかでない。トレンチ調査が必要である。
53	土井城跡	哲西町矢田					丘陵の尾根を4本の溝で切断し独立をさせた中世の山城である。 未調査
54	横田遺跡	哲西町矢田 横田					丘陵の谷部分より平坦面にかけて弥生式土器，須恵器が散布し柱穴もみられ弥生時代の集落址が予想される。未調査
55	荒神畝遺跡	哲西町畑木					尾根上に長方形の平坦面があり，周囲は斜面になっていることから中世の出城が予想される。未調査
56	大倉遺跡	哲西町畑木					低丘陵の平坦部に須恵器，土師器の散布がみられる。 未調査
57	忠田山遺跡	哲生町畑木 四日市					丘陵末端の緩斜面に青磁・須恵器・鉄滓の散布がみられ，中世の集落址が予想される。 未調査

58	御供川遺跡	哲西町 畑木四日市					丘陵頂上に墳丘状のものが認められ周辺で，弥生式土器片を採集していることより，弥生時代の墓地の存在が予想される。未調査。
59	四日市古墳	哲西町畑木					尾根上に径約10ｍの円墳が存在する。未調査。
60	清水谷遺跡	哲西町住吉					神代川の左岸緩斜面に弥生式土器・サヌカイト・チャート片が採集され弥生時代の集落址が予想される。未調査。
61	塚の峯古墳群	哲西町大竹					尾根上に２基の円墳が存在する。未調査。
62	岸本城址	哲西町大竹					尾根上に中世の山域が存在し，用地内に土るいの一部がかかる。未調査

○このうち久米廃寺の一部の建物と，宮尾遺跡，農業用水路を，高架橋にて保存。宮尾遺跡は建物，溝などの遺構の一部は盛土下に埋戻し。宮の前遺跡の縄文時代袋状ピット群は盛土下に埋戻して残す。他は調査後破壊。
○資料整理中などで今後も追加補正されるものもあります。
○遺跡の番号は以後の報告書に共通する。
○新見以西では49年７月に再度分布調査が実施され大巾に追加補正されたので注意されたい。



62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
岸本城址	塚の峯古墳群	清水谷遺跡	四日市古墳	御供川遺跡	忠田山遺跡	大倉遺跡	荒神畝遺跡	横田遺跡	土井城跡	土井遺跡	二野古墳群	西江遺跡	野田畝遺跡	中林遺跡	山根屋遺跡	佐藤遺跡	塚谷古墳群	門前中屋遺跡	岩屋城跡	新市谷遺跡	追塚古墳群	横見古墳群	新見庄跡	宗金遺跡	岩倉古墳群	青地遺跡	塔の畝遺跡	戸谷遺跡	空古墳	植木遺跡	桃山遺跡	谷尻遺跡	備中平遺跡	宮の前遺跡	須内遺跡	且原遺跡	下市瀬遺跡	西原遺跡	穴塚古墳	赤野遺跡	下河内遺跡	領家遺跡	久米廃寺	宮尾遺跡	南遺跡	日二宮大成遺跡	美作国府跡	沼古墳群	志戸部調査区	野介代遺跡	押入西遺跡	古墳群	押入飯綱神社	天神原遺跡	梶原遺跡	平遺跡	小中遺跡	小中古墳群	上相遺跡	北山古墳群	狼谷遺跡	高本遺跡

総　目　次

序

例　言

1．高　本　遺　跡（1）…… 1

2．平　　遺　　跡（7）…… 123

3．沼　古　墳　群（14）…… 223

4．領　家　遺　跡（20）…… 229

5．下河内調査区（21）…… 401

6．穴　塚　古　墳（23）…… 413

高本（こうもと）遺跡（1）

目　　次

第1章　調査の方法 …… 5
第1節　調査にいたる経過 …… 5
第2節　調査の概要 …… 5
第2章　歴史的，地理的景観 …… 10
第3章　調査日誌抄 …… 12
第4章　遺構・遺物 …… 15
第1節　I　区 …… 15
1号住居址 …… 15
ピット …… 21
建　物 …… 22
製鉄炉 …… 22
溝　状 …… 24
谷 …… 27
第2節　II　区 …… 29
2号住居址 …… 29
3号住居址 …… 30
ピット群 …… 33
建物（4～12） …… 56
第3節　遺　物 …… 68
縄文式土器 …… 68
弥生式土器 …… 68
石　器 …… 75
須恵器 …… 79
瓦 …… 82
硯 …… 82
第5章　ま　と　め …… 83
第1節　高本遺跡出土の弥生式土器について …… 83
第2節　歴史時代の遺構について …… 96

図　　目　　次

第1図　地形図（グリッド，第1次調査トレンチ設定図）（1/1000）…… 7
第2図　地形図（遺構の配置を含む）…… 9
第3図　高本遺跡周辺地形図及び主要遺跡分布図 …… 11
第4図　1号住居址土器出土状態実測図 …… 16
第5図　1号住居址平面図，断面図 …… 16
第6図　1号住居址出土弥生式土器　1 …… 17
第7図　1号住居址出土弥生式土器　2 …… 18
第8図　1号住居址出土弥生式土器　3 …… 19
第9図　建物1，平面図，断面図 …… 20
第10図　製鉄炉，平面図，断面図 …… 23
第11図　土層断面図 …… 25
第12図　弥生式土器4，須恵器 …… 28
第13図　2号住居址，平面図，断面図 …… 29
第14図　3号住居址，平面図，断面図 …… 31
第15図　ピット配置図 …… 34
第16図　弥生式土器　5 …… 36
第17図　弥生式土器　6 …… 37
第18図　ピット5，8，22，平面図，断面図 …… 39
第19図　弥生式土器7，土製紡錘車 …… 43
第20図　弥生式土器　8 …… 44
第21図　弥生式土器　9 …… 45
第22図　弥生式土器　10 …… 48
第23図　弥生式土器11，分銅型土製品 …… 49
第24図　弥生式土器　12 …… 50
第25図　弥生式土器　13 …… 51
第26図　弥生式土器　14 …… 52
第27図　土師器 …… 53
第28図　須恵器（土師器）溝 …… 55
第29図　建物4，平面図，断面図 …… 57
第30図　須恵器 …… 59

第31図　建物５，６，平面図，断面図 …… 60
第32図　建物５，断面図 …… 61
第33図　建物７，平面図，断面図 …… 62
第34図　建物８，平面図，断面図 …… 62
第35図　建物９，10平面図，断面図 …… 63
第36図　建物11，12平面図，断面図 …… 63
第37図　遺構全体図 …… 65
第38図　弥生式土器　15 …… 69
第39図　弥生式土器　16 …… 70
第40図　弥生式土器　17 …… 71
第41図　弥生式土器　18 …… 72
第42図　石　器 …… 73 74 75
第43図　石　製 …… 77
第44図　須恵器 …… 80
第45図　須恵器，円面硯 …… 81
第46図　弥生式土器　19 …… 90
第47図　弥生式土器　20 …… 91
第48図　弥生式土器　21 …… 93
第49図　弥生式土器　22 …… 95
第50図　建物配置図 …… 97

表　目　次

表１　II区ピット群一覧表 …… 35
表２　建物一覧表 …… 98

図　版　目　次

図版１－１　高本遺跡航空写真（南東より） …… 105
図版１－２　高本遺跡調査後遠景（北西より） …… 105
図版２－１　１区Ａ地点１号住居址，ピットＡ，Ｂ，炉検出状況（南西より） …… 106
図版２－２　１区Ａ地点建物１・２検出状況（南東より） …… 106
図版３－１　１区Ａ地点１号住居址遺物出土状況（北東より） …… 107
図版３－２　１区Ａ地点１号住居址（北東より） …… 107

図版４－１　１区Ａ地点１号住居址遺物出土状況（西より）…… 108
図版４－２　１区Ａ地点１号住居址遺物出土状況（南より）…… 108
図版５－１　１区Ａ地点１号住居址，炉（北東より）…… 109
図版５－２　１区Ａ地点ピットＡ（南西より）…… 109
図版６－１　１区Ａ地点炉及び周辺掘り込み（北西より）…… 110
図版６－２　１区Ａ地点炉細部状況（北より）…… 110
図版７－１　１区Ｃ地点溝建物３（南東より）…… 111
図版７－２　１区Ｄ地点谷部土層断面（南東より）…… 111
図版８－１　II区Ａ地点検出状況（南東より）…… 112
図版８－２　II区Ａ地点発掘風景（西より）…… 112
図版９－１　II区Ａ地点２号住居址炭化材出土状況（南西より）…… 113
図版９－２　II区Ａ地点２号住居址（南より）…… 113
図版10－１　II区Ａ地点３号住居址（南より）…… 114
図版10－２　II区Ａ地点３号住居址発掘風景（南東より）…… 114
図版10－３　II区Ａ地点３号住居址中央ピット（南より）…… 114
図版11－１　II区Ａ地点建物４，５検出状況（南より）…… 115
図版11－２　II区Ａ地点建物４（北より）…… 115
図版12－１　II区Ａ地点建物５，６（南より）…… 116
図版12－２　II区Ａ地点建物７～12及びピット１～４（西より）…… 116
図版13－１　II区Ａ地点建物５（南より）…… 117
図版13－２　II区Ａ地点溝６　（北西より）…… 117
図版14－１　II区Ｂ地点ピット群（北西より）…… 118
図版14－２　II区Ｂ地点ピット群（南より）…… 118
図版15－１　II区Ｂ地点ピット22（西より）…… 119
図版15－２　II区Ｂ地点ピット５（南西より）…… 119
図版15－３　II区Ｂ地点ピット５甕出土状況（北西より）…… 119
図版16　須恵器，円面硯 …… 120
図版17　弥生式土器，分銅型土製品…… 121

第1章　調査の方法

第1節　調査に至る経過

高本（こうもと）遺跡は，昭和42年文化財保護委員会（現文化庁）刊の全国遺跡地図岡山県分には記載されていない。遺物の散布が確認され，更に遺跡の存在が推察されたのは，昭和42年の岡山県遺跡保護調査団による，中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財分布調査によるものである。この分布調査では須恵器片・中世陶器片などが表面採集されている。昭和46年，中国縦貫道担当埋蔵文化財調査員による遺跡範囲確認調査において地形・立地条件等を観察した結果，何らかの遺構が遺存していることを推察し，「高本遺跡」と命名するに至った。

本遺跡の西約50ｍの丘陵において，かつて道路工事が行われた際，弥生時代後期の壺形土器が出土しており，加えて北方約 300ｍには奈良時代前期に創建されたと考えられている江見廃寺が存在し極めて（註1）占地良好な本遺跡においては，弥生～奈良時代にかけての遺物・遺構の存在が推察されて当然でもあった。

第一次調査は，昭和47年４月より断続的に行い，その結果製鉄炉と考えられる遺構・弥生時代中期の生活遺構の存在が確認された。遺物については，石器をはじめとして弥生時代～奈良時代にかけての土器が多量に出土した。昭和48年１月より第二次調査（本調査）を開始することとなったが，当初の調査は英田郡美作町所在の狼谷遺跡発掘担当の調査員によって「かけもち」で行われたため，実質的開始は２月上旬，久米郡久米町所在の宮尾遺跡（註3）（久米郡衙推定遺跡）の発掘調査を終了した２名の調査員が引き継いだ時点を指している。（岡田　博）

（注）（註１）高本遺跡の近くの某家に保管されている。筆者実見。
（註２）高本遺跡の北側台地上には若干の瓦片が散布している。磨滅が甚しいが，布目瓦もみられる。
（註３）岡山県埋蔵文化財発掘調査報告４（中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査２）所収　岡山県教育委員会刊1973年

〈付記〉

本稿では触れていないが1973年３月～４月にかけて県道工事による江見廃寺の一部寺域とみられる部分について発掘調査が行われた。町教委主体の調査であったが，実測・写真等高本遺跡担当調査員が援助した。この発掘調査結果は，近々報告書として刊行される予定である。

第2節　調査の概要

第２次発掘調査は約６ヶ月の中断後昭和48年１月10日より，第１次調査によって遺構を確認した地区の発掘を開始することになった。調査必要面積は第１次調査の結果約7400㎡あり，その内半分程度は，谷を含む地区で遺構面まで相当量の土量があった。調査人員は第１次調査の担当調査員の県外転出により，１月より松本が狼谷遺跡の調査と併行して行っていた。その後２月８日より久米

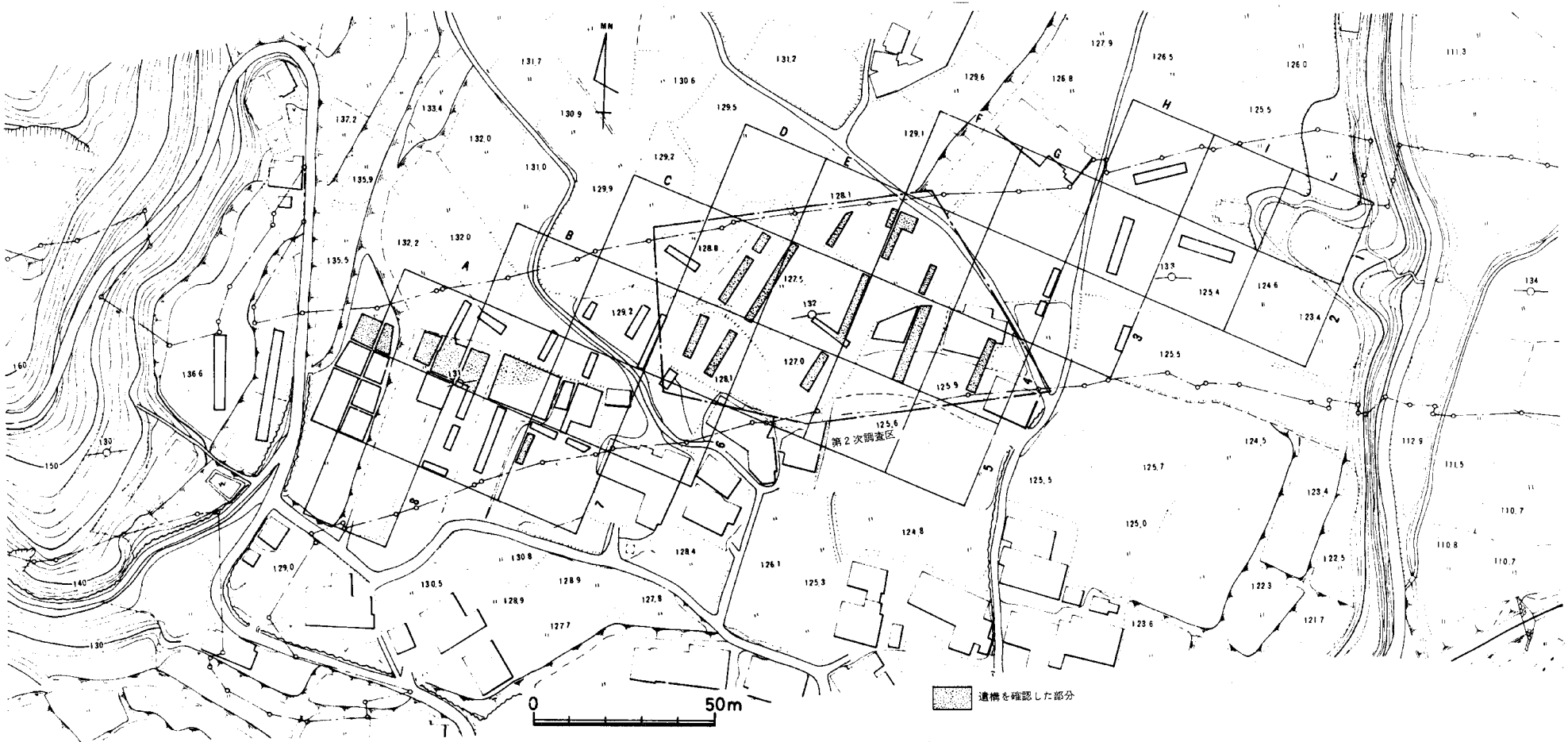
町宮尾遺跡の調査を終了した山磨，岡田両名が引継いで調査を担当し，５月より井上が加わった。調査方法は第１次調査の24ｍグリッドの大区分を基本として使用し，５Ｄ５Ｅ区の製鉄炉検出地区より遂次拡張していった。谷の拡がるＤ４，Ｅ４・５地区は第１次調査の結果，遺構面まで約１ｍ，谷底部まで２ｍ前後の深さがあり６月末の終了期限までには，谷付近の埋土除去は困難と考えられ，ユンボの導入を行った。ユンボによる埋土除去は，まず谷の部分であるＤ５，Ｅ４・５（Ｉ区Ｂ・Ｃ・Ｄ地点）を行ない，遺跡を斜に縦断する谷の大まかな規模を確認することができた。また，Ｇ４区（II区Ｂ地点）は屋敷跡のため排土場所としたが，ユンボの導入により最終的に処理を行った地区である。検出した多数のピット群は調査期限切れにより大部分の遺構を未処理のまま放棄した。

II区Ａ地点北半は二層の遺構面が確認されたが，上層の遺構面での検出は充分できなく下層（地山）での確認がほとんどであった。そのため遺構の新旧，及び遺物の層位的な把握が不可能となった部分がある。

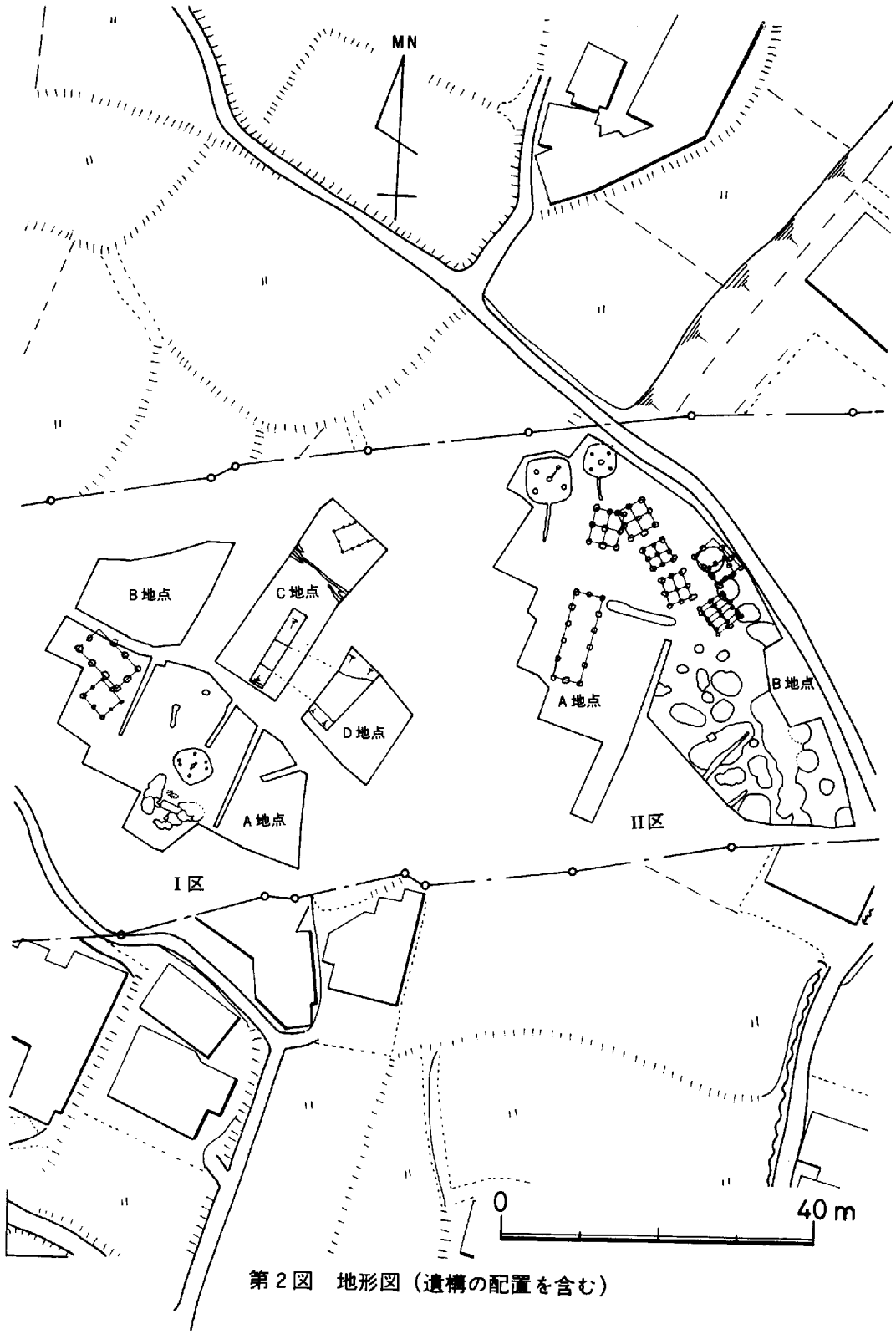
以上の第２次調査（本格調査）は対称面積7400㎡のうち実質2400㎡（このうち未処理の部分も含む）の調査を行ったのみで，なお5000㎡の未調査区域を残して終了した。

報告書掲載のＩ区Ｂ・Ｃ・Ｄ地点及びII区Ｂ地点は，ユンボを使用して拡張した地区で調査時では拡張順の番号を使用していた。その後，整理期間中に「Ｉ，II区」と共に全体の地点番号を新たに付け加えた。また，建物，住居址，及びピットの遺構番号も変更した。なを発掘調査の後半には橋本，浅倉両名が遺構測量等を応援し，報告書の作成では高畑，竹田両名が遺物実測等を行った。

報告書作成は第２次調査担当の井上，山磨，岡田の３名が第１次調査担当の泉本，第２次調査担当の松本の協力を得て，分担執筆した。〔山磨　康平〕



第１図　地形図（グリッド，第１次調査トレンチ設定図）　(1/000)



第２図　地形図（遺構の配置を含む）

第2章　歴史的・地理的景観

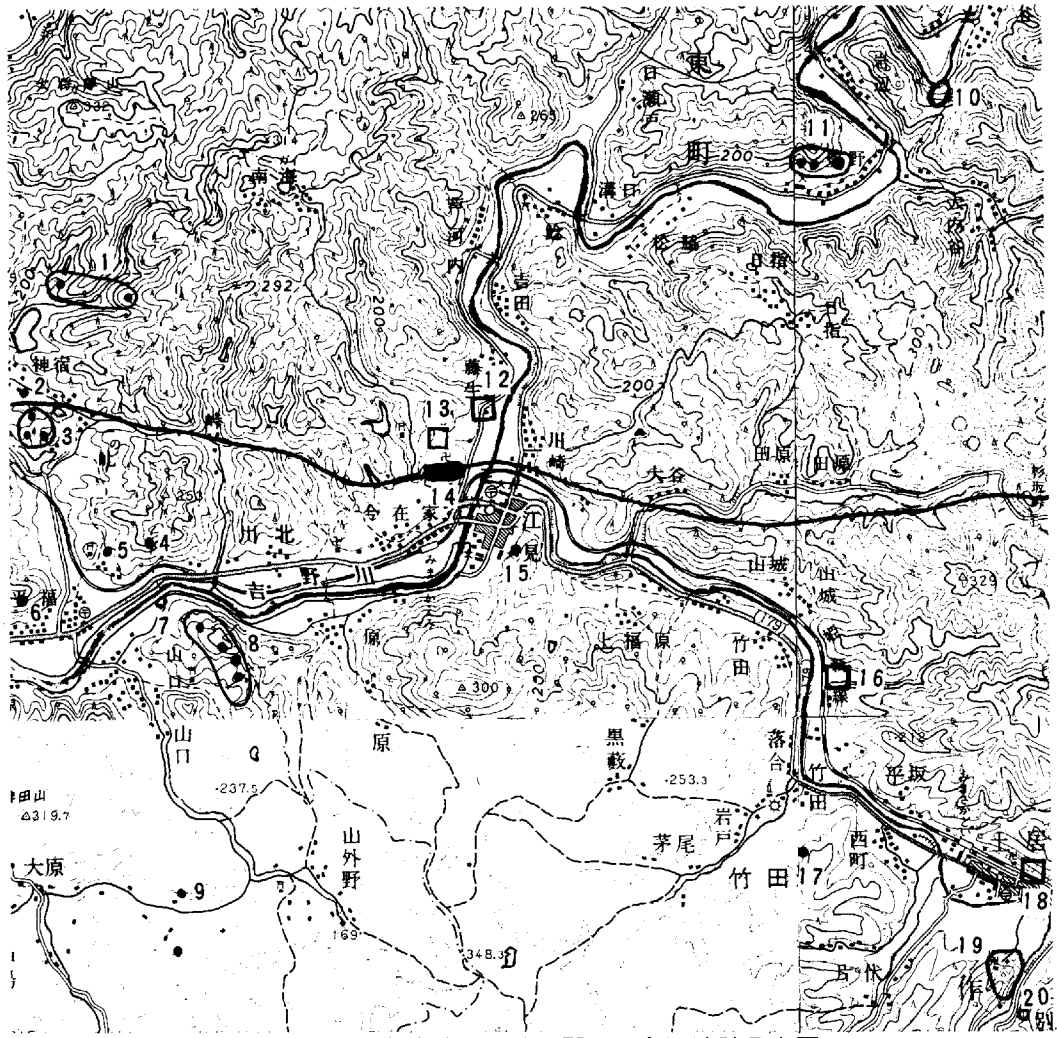
英田郡作東町江見に所在する高本遺跡は，周囲は，標高 300m 前後の丘陵に囲まれている。その丘陵の間を吉野川が貫流しており，その吉野川及びその支流に沿って，帯状に平地が展開している。その平地が，江見付近でやや広がりを見せる。高本遺跡は，吉野川の西岸にあって，その平地を望む台地上に位置する。江見は，姫路から米子に通ずる国道 179号線と，鳥取に通ずる道路との分岐点でもある。国道 179号線に沿っては，後醍醐天皇配流伝説等，同系統の伝説が連続してみられる点から，その交通路は頻繁に利用されたものであり，利用され始めた時期はさらに古くまで溯るものと思われる。

平地に接する低丘陵上には，3～4ヶ所の古墳群が知られており，また，平地を望む低台地上には，遺物の散布地が知られてはいる。しかし，十分な遺跡分布調査がなされていない現在，遺跡の分布密度は低い。さらに，霊異記にも記されている様に，鉄に関係する遺跡も存在するものと考えられる現在，他にも多くの遺跡が存在するであろうことは容易に考えられる。その中にあって，寺院址と推定される遺跡の密度は高い。つまり，数kmを隔てて3ヶ所の寺院址が知られている。それ等を列記すると，江見（闘武）廃寺，竹田廃寺，土居廃寺である。江見廃寺（12）は，英田郡作東町江見小字藤生に所在する。同廃寺址からは，奈良，平安時代の鐙瓦4種が出土しており，最近瓦塔片が発見されている。また，現地には，長径195cm，短径170cmを測る礎石が現存する。（13）は，瓦の散布地である。（16）は，作東町竹田才の堂に所在する竹田廃寺である。同寺院址からは，鐙瓦・平瓦等が出土している。時期は，奈良・平安時代である。（18）は，作東町土居茶屋元に所在する土居廃寺である。同寺院址からは，奈良時代の鐙瓦・宇瓦が出土している。

遺跡の分布調査が充分になされていない現状ではあるが，奈良，平安期に見るべきものがある。それが何に起因するものか不明であるが，少なくともこの地域における経済的発展の時期と見なすことができるであろう。また，霊異記の記載がどこまで事実を伝えるものかは不明であるが，近くでは，英田郡西粟倉村，兵庫県佐用町(註)等は鉄の産地として古くから知られている。そのことから考えれば，英田郡内には，鉄（鉄鉱石もしくは砂鉄）を産する場所が存在することも考えられる。そして，それらの所在は高本遺跡における製鉄遺構にも関連し，それの性格を考察する一助にもなるであろう。しかし，その点に関しては，今後の問題点として残される点でもある。

（註）日本国現報善悪霊異記下巻，第13

〔井上　弘〕



第３図　高本遺跡周辺地形図及び主要遺跡分布図

1 神宿古墳群	2 散布地（中池北）	3 中山古墳群	4 緑青塚古墳(前方後円墳)
5 平福狐塚古墳	6 別所古墳	7 散布地（山口）	8 古墳群（山口）
9 古墳（山外野）	10散布地(小谷・大内谷)	11豊野古墳群	12江見廃寺址
13寺院址（江見）	14高本遺跡	15古墳（江見）	16竹田廃寺址
17古墳（日向）	18土居廃寺址	19散布地（土居）	20散布地（土居）

第3章　調 査 日 誌 抄

48年1月10日　本日より昨年5月末より中断していた調査を再開する。松本主事担当。

1月11日～13日　草刈後，C7グリッドの発掘作業を開始する。

1月16日～20日　C7グリッド表土除去作業及び，遺構検出作業，巾30cm程度の溝5本と柱穴を検出。その後，この地区は未調査のまま放置する。

1月22日　ベルコン移動を行い，第1次調査により炉を確認しているI区，A地点（D－5）の表土除去作業を開始する。

1月23～31日　I区，A地点（D－5）の表土除去作業を続行する。

2月1～8日　引き続きI区，A地点（D－5）の表土除去を行う。

2月9日　本日より，山磨，岡田両主事が本遺跡の調査を担当する。松本主事と打合せ，及び引き継ぎをうける。

2月10日～11日　I区 A地点　（D－5）の表土除去作業。平遺跡よりベルコン搬入作業。

2月12日　I区A地点（D－5）の表土除去終了。第1次調査担当者，泉本氏（大阪府職員）打合せのため来跡，15日まで。

2月13日～15日　I区A地点（D－5）の包含層の掘り下げにより，大量の鉄滓が出土し始める。

2月16日　I区A地点（D－5）炉の西半は地山面まで一挙に掘り下げる。炉より北側の谷に向って大量の鉄滓堆積層があり，掘り下げに苦労する。

2月20日　I区A地点（D－5）炉の北西側を掘り下げ中，住居址（1号住居址）を確認する。

2月22日～24日　I区A地点（D－5）炉北側の掘り下げを続行。鉄滓は莫大な量にのぼる。

2月26日～3月2日　I区A地点（D－5）炉北側及び東側の鉄滓包含層を掘り下げ。

3月5日～10日　I区A地点（D－5）炉東側の掘り下げ及び地山面にて遺構の検出を行う。

3月12日　I区A地点（D－5）炉北側の1号住居址の検出を行う。半分程度を確認。

3月13日～17日　I区A地点（D－5）の北西部分の掘り下げ及び清掃を行う。

3月19日～20日　I区A地点（D－5）北側にてピットを2個確認。北西部分では比較的多くの柱穴を検出し，3×2間（建物1），2×2間（建物2）の掘立柱建物を確認する。

3月22日～23日　II区A地点（F－3）表土除去作業を開始する。第1次調査で確認した住居址（2号住居址）の検出を行う。

3月24日～28日　II区A地点（F－3）の表土除去作業。北東よりにて4～5mの円形ピットを検出。

4月1日～7日　II区A地点（F－3）表土除去作業を続行する。この間I区A地点（D－5）の遺構再検出作業とピットAの掘り下げを行う。

4月9日～18日　II区A地点（F－3）の包含層面までの掘り下げ作業及び遺構検出。一部では地山面までの掘り下げを行う。

4月19日　II区A地点（F－3）中央で，2×2間の建物3棟（建物5～7）検出。本日より谷部をユンボにて表土除去作業を開始する。（I区C地点）

4月20日～21日　II区A地点（F－3）遺構検出作業，I区C地点，ユンボにて表土除去作業。

4月23日～28日　I区C地点，包含層上面までの清掃作業。I区B地点，ユンボにて表土除去作業。

4月30日～5月2日　I区D地点，ユンボにて表土除去作業。

5月7日　I区C地点，遺構検出作業。

5月8日～12日　I区B地点，清掃及び遺構検出作業。II区A地点（F－3）遺構検出作業，5間×2間，建物4の南端拡張作業。

5月14日～15日　I区B，D地点，清掃及び遺構検出作業を続行する。

5月16日～19日　I区A地点，清掃，遺構検出状態の全景写真撮影。II区A地点（F－33）　南端拡張作業及び遺構検出作業。

5月21日　II区A地点遺構検出状態の全景写真撮影。今週より各遺構の発掘を開始する。

5月22日　II区A地点，3号住居址検出状態写真撮影及び掘り下げを開始。建物4検出状態写真撮影。I区A地点，炉関連の遺構を掘り下げ開始。

5月28日～29日　I区A地点，建物1，炉周辺掘り下げ。II区A地点，3号住居址断面実測，写真撮影，　溝6　掘り下げ開始。

5月30日　I区A地点，1号住居址検出上面までの断面実測，写真撮影，炉関連遺構掘り下げ中。II区A地点，建物4，清掃，全景写真撮影，3号住居址，柱穴掘り下げ，東西溝掘り下げ中。

5月31日　I・II区A地点，各遺構発掘続行中，　溝6　掘り下げ終了。

6月1日　I・II区A地点の各遺構掘り下げ続行。

6月2日　津山分庁舎にて係会議。

6月3日　炉周辺の掘り下げ，2号住居址の掘り下げ開始。I区A地点，グリッド壁断面実測，3号住居址掘り下げほぼ終了。

6月4日～5日　炉の周辺の掘り下げ，1・2号住居址の掘り下げ，建物4，実測，写真撮影。

6月6日　雨のため屋内にて土器洗い。

6月7日　2号住居址，建物4，周辺の割付け及び実測基準点の設定。1号住居址より多量の土器を検出する。

6月8日　ピット2の掘り下げ，建物4，周辺に遣り方を組む。

6月9日　ピット2の掘り下げ続行。建物5の掘り下げ，1号住居址の土器埋没状態の写真撮影。

6月10日　ピット2・3の掘り下げ。建物5・8・12の掘り下げ。1号住居址周辺の清掃。II区B

地点，ユンボによる表土除去を開始。

6月11日　建物1・8・12掘り下げ終了。建物5・11掘り下げ。II区B地点表土除去終了。サヌカイト製石鏃出土，建物4，実測完了，3号住居址平面図実測。

6月12日　建物5・11掘り下げ終了。2号住居址，柱穴の検出。II区B地点，遺構の検出を始める。

6月13日　県立博物館にて，中国五県文化財主幹課長会議が開催され調査員全員が傍聴する。

6月14日～16日　I区A地点炉付近割付け，I区C地点へ実測基準点の設定，建物群周辺の割付け。II区B地点の掘り下げ続行，建物4周辺の補測。

6月17日～19日　II区B地点の掘り下げ続行，炉周辺の実測，建物5・6実測。I区C地点の平板実測。

6月20日　2号住居址，柱穴，中央穴の掘り下げ，1号住居址出土土器の清掃，建物5・6掘り下げ完了，実測にかかる。

6月21日～22日　2号住居址実測完了。I区A地点一部拡張。1号住居址土器出土状態の実測。II区B地点掘り下げ続行，遺構の一部検出。

6月23日　建物7掘り下げ，I区A地点ピット掘り下げ。I区A地点ピット掘り下げ，建物5・6実測完了。

6月24日　対策委員会，建物5周辺，掘り下げ。II区B地点掘り下げ続行。

6月25日　建物9・10掘り下げ，建物7・8実測。金沢経済大学学長・吉岡金市教授炉跡見学に来跡。1号住居址の土器の取り上げ，建物6の遺物取り上げ，建物5の下層平板実測。

6月26日　雨のため屋内にて土器洗い。

6月27日　I区A地点ピットの掘り下げ。建物9・10の掘り下げ。II区B地点に多数のピット確認。3号住居址完了。

6月28日　建物7・9・10実測。1号住居址実測完了。II区B地点，遺構検出作業続行。

6月29日　雨のため，午前中遺物整理。午後ピットの掘り下げ。

6月30日　建物1の実測。建物7・9・10補測。II区B地点のピット群の掘り下げ続行。

7月1日　1号住居補測。I区D地点断面実測用トレンチを設定し掘り下げ。II区B地点ピットの掘り下げ続行。ピット断面実測。

7月2日～4日　I区C，D地点トレンチ掘り下げ。断面実測。II区B地点ピットの掘り下げ，ピット断面実測。

7月5日　高本遺跡一応の発掘を終了。撤収の準備にかかる。一部荷物の搬出。午後3時より反省会。

7月6日　荷物の搬出。I区B地点，II区B地点の平板測量。

7月7日　II区B地点の補測，全ての実測を完了。プレハブ内を片付けて高本遺跡より撤収する。

第4章　遺構.遺物

第1節　Ⅰ区

1号住居址

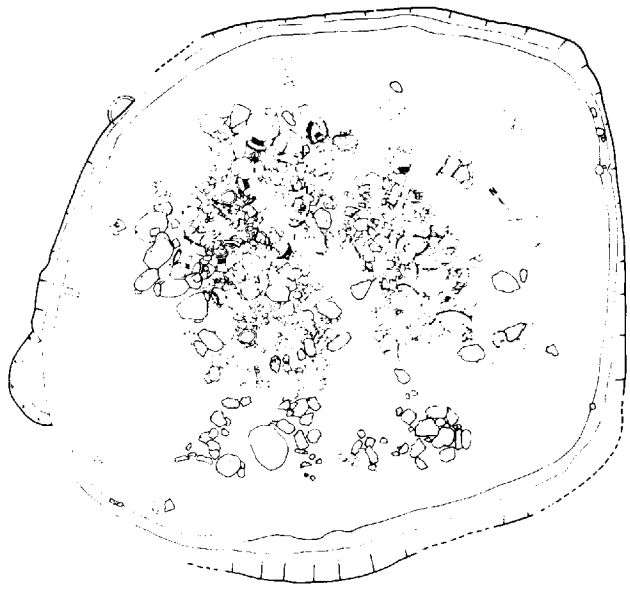
Ⅰ区A地点の中央部に位置する一辺約4～5mを測る，ややいびつな隅丸方形竪穴住居址である。無遺物黒褐色土を切り込み第3紀層の地山に床面は達している。柱は基調を4本としているが，副柱的な2本の柱穴を従属している。壁溝は浅く狭く明確なプランを描かない部分もみられる。このことは壁溝そのものの「溝」としての機能に疑問を抱かせる。中央ピットは住居址プランのほぼ中央に楕円形に掘り込まれている。その南北に近接して2本の小柱穴が存在する。この小柱穴の用途は明らかではないが，住居を構築するために必要な柱穴ではなく，中央ピット周辺の炭・灰の散布状況から中央ピットに伴うとみられる。もちろん，この住居址の場合，中央ピットは「火」に関わる設備と考えることを前提としている。中央ピット中に頸部より上半部を欠失した壺形土器がすっぽりはまりこんだ状態で出土していることを付記しておく。中央ピット内はもちろん，周辺一面に灰が散布しており，更に焼土の部分的散布も認められている。

遺物は，住居址内覆土から床面にかけて土器を主体に多量に出土している。復元可能な土器の個体数約40～50個体，1個体を形づくることが明らかな半完形品約20～30個体，小片を加えれば約90～100個分の土器片が出土している。第6～8図に掲げるのはその一部である。これらの土器の大半は，住居内中央部で出土しているが，自然埋積したものとは考えられず，むしろ一括遺棄（所有を前提として）が考えられる。住居の遺棄・放棄に伴って，居住者の使用になる土器が残されたことも考え得るが，多量の土器の占めるスペースを考慮すると居住・生活不可能であろう。したがって1号住居址そのものを土器を貯蔵するための，むろん他の物質も貯蔵した可能性もあろうが，専用竪穴とみなすことの妥当性も否定できない。ただし，構築当初よりそのような目的・用途はなく通例の住居址転用と考え得る蓋然性もあり得るのである。

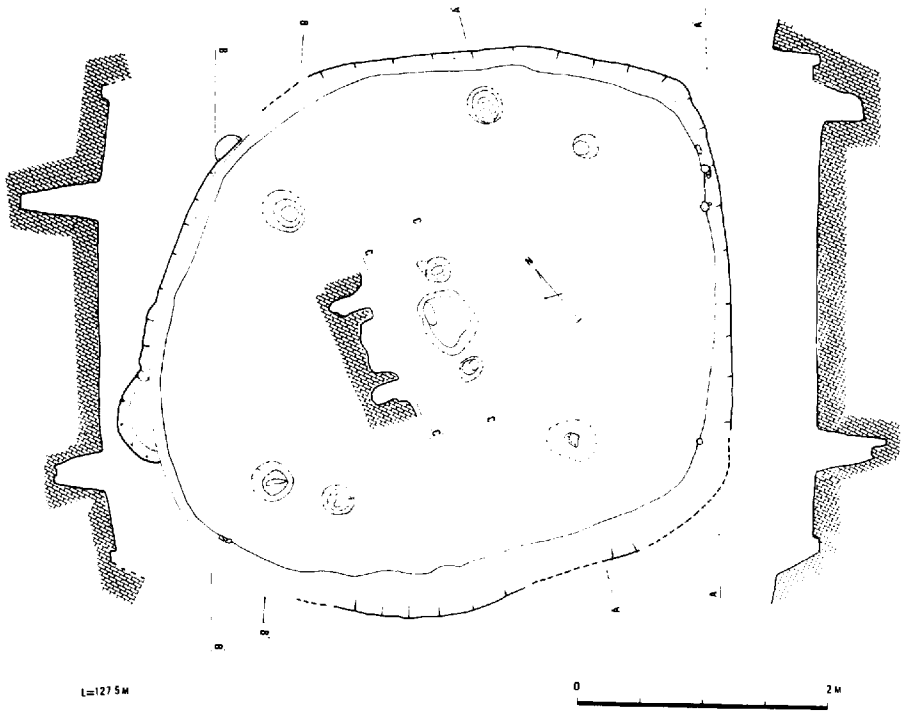
土器以外の遺物として石器があるが，第4章第3節石器の項で述べることとする。他に，石灰質（あるいはカルシウム質）固形物が出土しているが，大阪市立大学医学部島五郎名誉教授に鑑定を依頼した結果，むろん人骨・獣骨の可能性もあるが，サンゴの類，あるいは鉱物が高火度を受けて変質したものとも考えられるという所見を得た。小片のサンプル故，上記の考察以上は判明し得ないものであるが，所見をいただいたので記しておく。〔岡田〕

1号住居址出土の土器

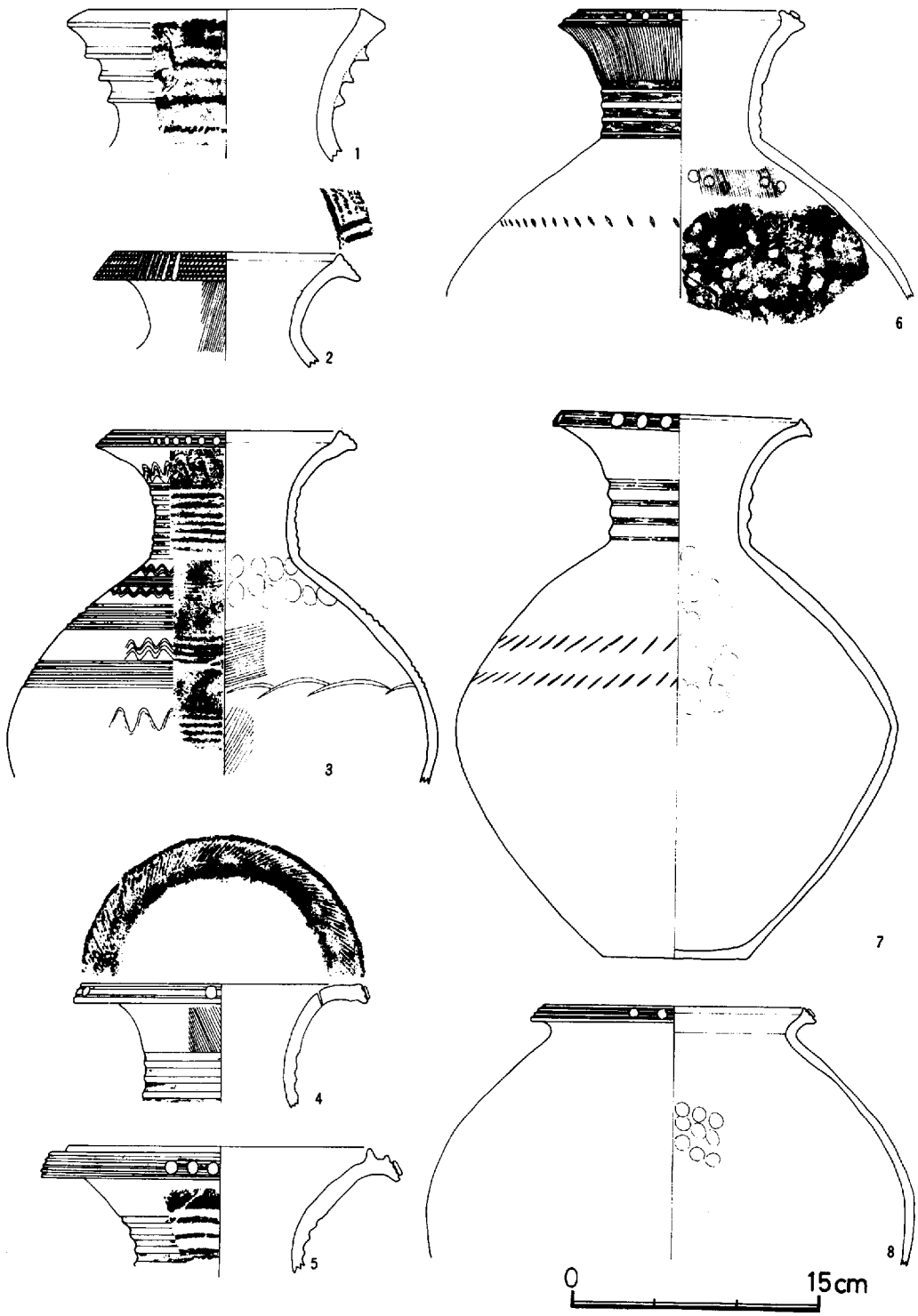
住居址内床面より，約40体個分の破片が重なりあった状態で出土しており，壺形土器，鉢形土器，高杯形土器，器台形土器，甕形土器等の各器種がみられる。ここでは，比較的保存状態が良く，各器種の特質を表わしているものを取り上げ図示した。



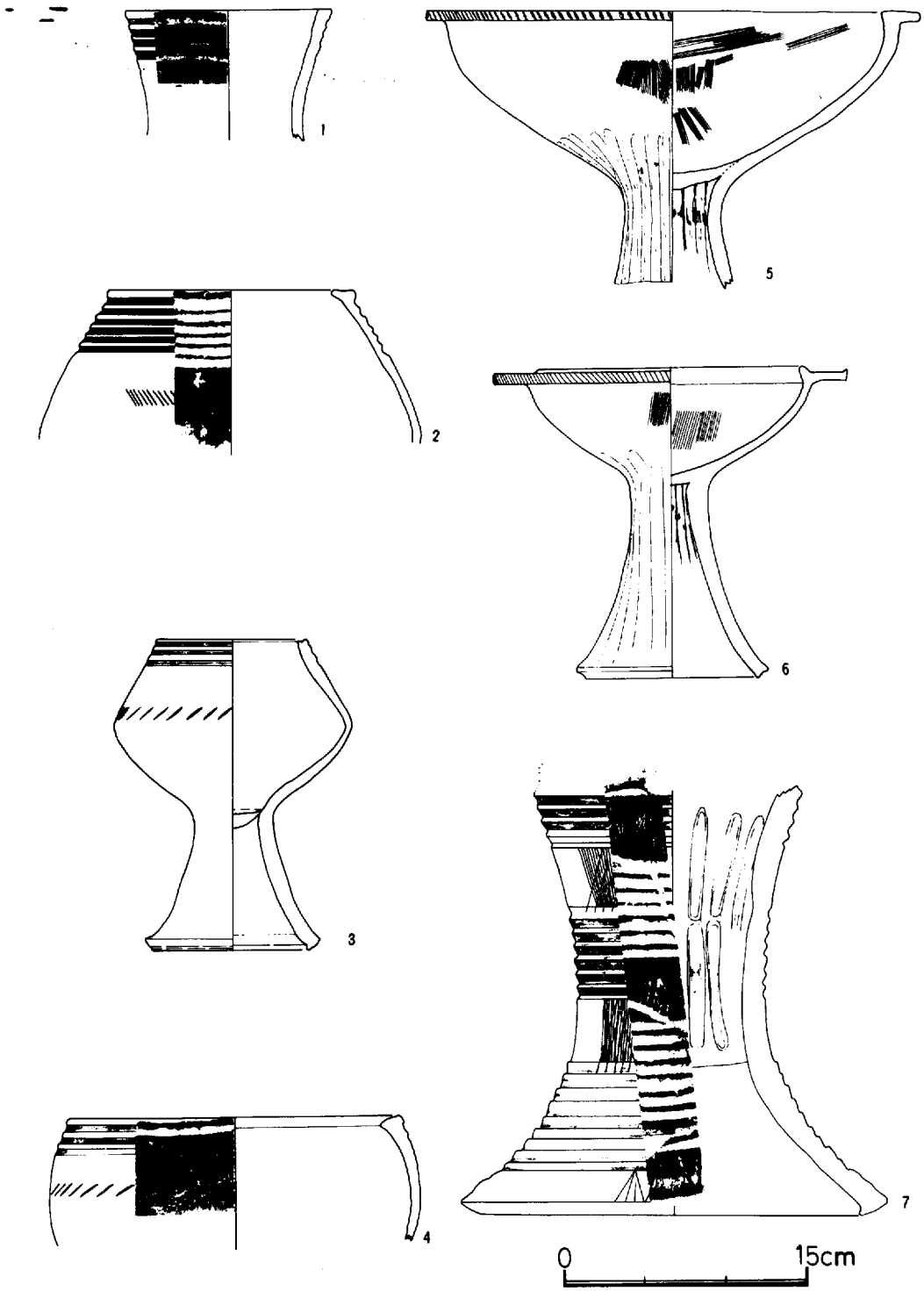
第4図　1号住居址土器出土状態実測図



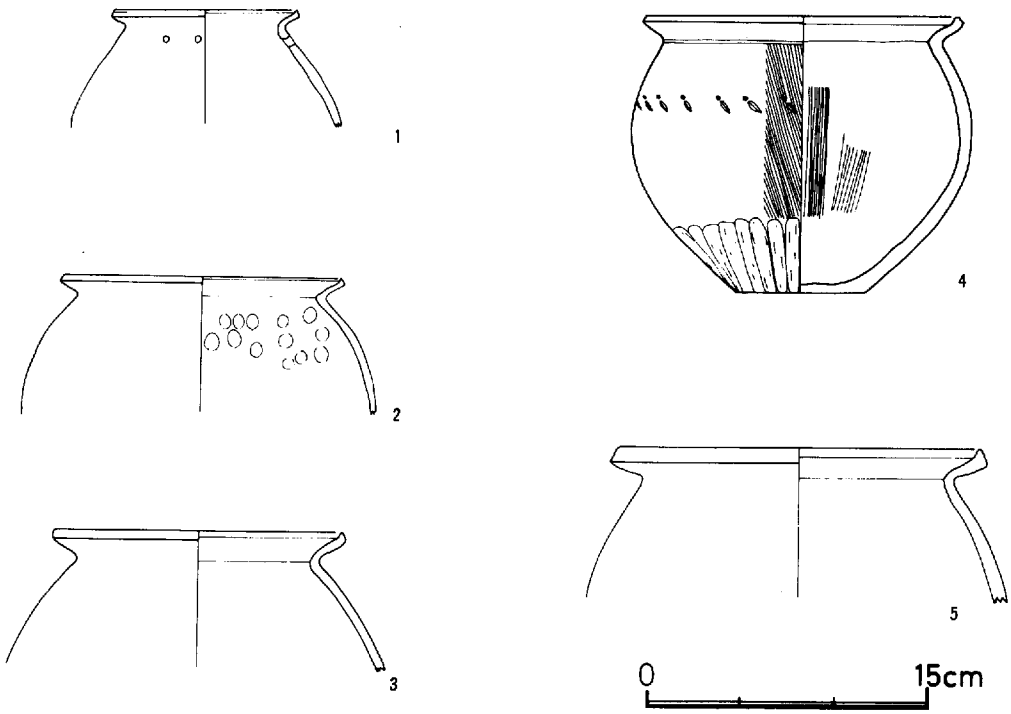
第5図　1号住居址平面図・断面図



第6図　1号住居址出土弥生式土器1



第7図　1号住居址出土弥生式土器2



第8図　1号住居址出土弥生式土器3

壺形土器（第6図・1～8，第7図・①～③）

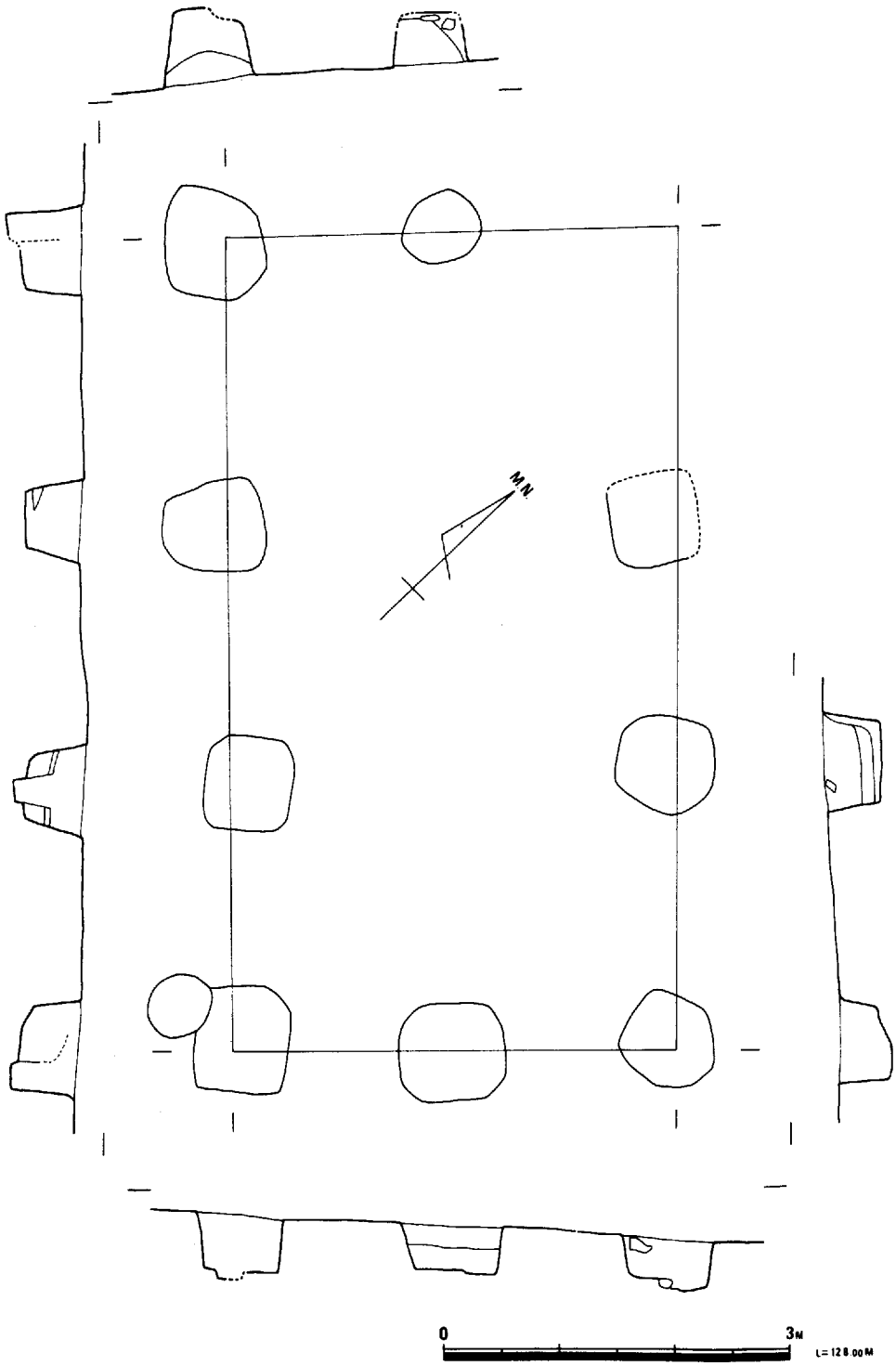
これら11点の壺形土器を形により，A・B・C・D・Eの5形態に大別を行った。

A――胴部から短い頸部でもって，朝顔形に外反する口縁部をもつもの（第6図・1・2）。

1の頸部は，ほぼ等間隔に3条の刻目貼付凸帯文で飾られている。刷毛目縦走の痕が凸帯文の剝がれた部分で観察される。2は口縁部に5条の凹線文，さらに篦描斜線上に8個単位の棒状浮文が4ヶ所ある。

B――胴部中位置に最大径をもち，胴部と朝顔形に大きく開く口縁部間に円筒の頸部を有するもの（第6図・3・4・5・6・7）。

口縁端部に2条から4条の凹線文がめぐり，円形浮文が共通してみられる。頸部においても口縁端部に2条から4条の凹線文がめぐり，円形浮文が共通してみられる。頸部においても口縁端部にみられるものより幅広の凹線文が施されている。器内面は刷毛目により整形している。3は文様において多少他のものとは相異をしめしている。他と異なる細目の凹線文が，頸部から胴部中位置にかけて櫛描波状文と交互にみられ，最も飾られた土器である。6は胴部内面に接合の際の指



第9図　建物Ⅰ平面図・断面図

頭圧痕をよくとどめており，女性的な人さし指，中指，薬指の3本を1単位として使用していることがうかがえる。7は口縁部径15.7cm，胴部26.8cm，器高32.4cmを測り，壺形土器Bの唯一の完形品である。

C——甕形土器に近似し，胴部が大きく張るもの（第6図・8）。

「く」字形の口縁部をもち，端部に3条の凹線文がめぐる。

D——頸部が細く，胴部から少し外反するが，直口に近い口縁部をもつもの（第7図・①）。

口縁部直下に2条～3条の凹線文をもつ細頸壺形土器である。

E——頸部が無く，胴部の中位置に最大径をもち，口縁部に向ってゆるく内湾するもの，脚台をもつもの（第7図・②・③）。

口線部直下に3条から6条の凹線文をもつ，③は台付無頸壺とした。

鉢形土器（第7図・4） 胴部に最大径を有し，口線部に向って内湾する鉢形土器と考える。口縁部直下に2条～3条の凹線文と篦状圧痕文がめぐる。黒斑が内外面に目立つ。

高杯形土器（第7図・5・6） 両者とも脚台より杯部までを一貫して製作し，円形粘土板で杯底を蓋したものと考えられている。下部より杯部に向ってヘラ削りがおこなわれ，脚台内面は静止しぼり目が存在する。6は口縁部内端に1条の凸帯をみる。色調乳褐色。

器台形土器（第7図・7） 上部が欠損しているが，1号住居址内より出土した土器の中では，最も保存状態がよく，器内外面とも細かい整形，仕上げの痕跡をとどめる。底径26cm，残存器高26cmを測る。器面上半は右下り，下半は左下りの刷毛目整形がみられ，その後，鋸歯文と凹線文の組合せでもって飾られている。内面においては，静止しぼり目がみられ，下半にはヘラ削り，後のナデが施されている。最下段にみられる凹線文は，他の器形のものとは異り，階段上になっている。

甕形土器（第8図・1・2・3・4・5） 口縁部径が10cmから20cmを測る「く」字形の口縁部をもつ甕形土器である。1・2・3は口縁内端部を横ナデ手法により立上がられ，シャープに仕上げている。器壁0.2～0.4cmという薄手の土器である。4は口縁部径17.1cm，胴径18.2cm，器高19.8cmをはかり上腹部は刷毛目仕上げ，下腹部はヘラ削りによって整形している。5は口縁端部の拡張がみられる。壺形土器等他の器形と比較してみると非常に装飾性に乏しいのが甕形土器である。使用目的の相異がそうさせたのかもしれない。（高畑）

ピ ッ ト

1号住居址の北約3mに位置する溝状ピットと，同じく北約8mに位置する円形のピットがある。前者は，深さ約15～20cmを測る舟底状のピットで弥生式土器片を出土しているが，正確な時期，および用途は明らかでない。後者は深さ約30cmを測り，やはり弥生式土器片を出土している。時期・用途等前者同様不明である。〔岡田〕

建 物 1

1区A地点西方に位置する2間×3間の掘立柱建物遺構である。柱掘方は比較的大きく，建物4のそれを上まわる規模である。柱穴掘方内よりの出土遺物は須恵器片・土器片・鉱滓片などが認められる。時期的にはII区建物群とほぼ同時期すなわち7世紀後半から8世紀前半にかけての遺物と考えられる。

建 物 2

建物1に隣接する掘立柱建物遺構である。柱掘方は小さく，また東柱もみられないところから雑舎建物と考えられるが，建物1に比べると，かなりの削平を受けているので検出した柱掘方プランは柱痕跡の可能性もある。時期は不明である。〔岡田〕

〈付記〉

建物1・2の北側発掘区すなわちB地点で，比較的大きな柱穴プランを検出しているが，これらは別の2棟の掘立柱建物を構成する柱穴と考えている。

建 物 3

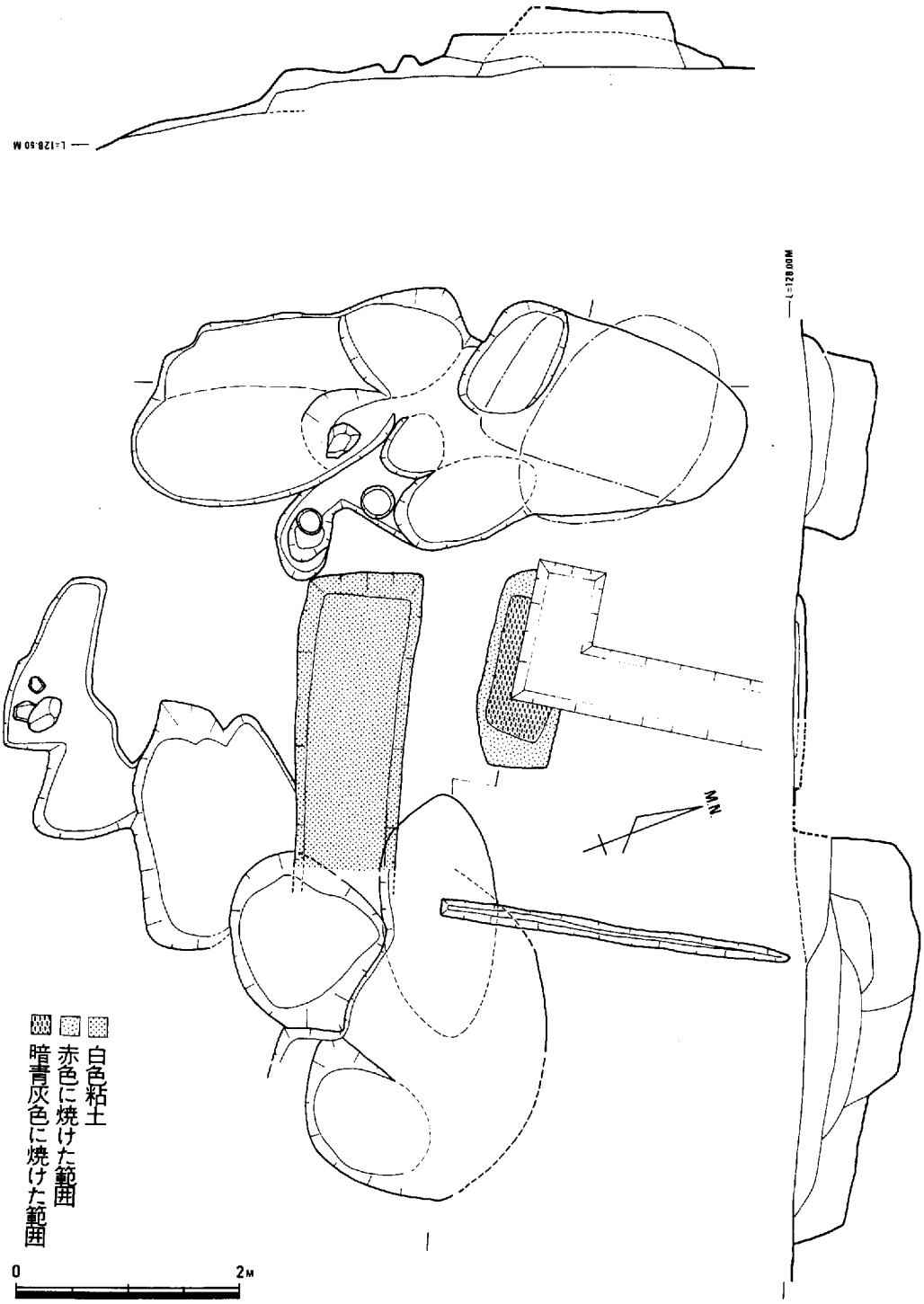
I区C地点の北端に検出した桁行3間以上×梁行2間(3.0m)の掘立柱建物である。柱穴掘り方は円形を呈し径20cm～30cm，深さ23cm～47cmを測る。柱間寸法は南側梁行では，ともに1.5m，桁行では88cm～130cmと，ふぞろいである。

柱穴内出土遺物は，南端の柱穴と南桁行柱列の北東端の柱穴より小量の弥生式土器片が出土したのみである。〔山磨〕

製鉄炉址 (第10図)

最初，トレンチ調査において，その存在が確認された遺構である。炉本体は，長径 175cm，短径75cmの小判形の平面形を呈している。炉本体の上部構造は，削平により不明であり，検出した遺構は，基底部のみである。検出した遺構は，長径175cm，短径75cmの範囲が，赤色に焼けており，その中心部分に，長径120cm，短径55cmの範囲が，青灰色，もしくは暗青灰色に焼けている。そして，その範囲には，鉄分の沈着がみられ，外表は茶褐色を呈していた。それは，まさに，鉄滓の断面を見るようであった。残存する遺構の深さは約10cmで，その上半分が青灰色に焼け，下半分が赤色に焼けていた。炉本体は地山の上に直接造られたもので，トレンチにより掘り下げてみたが，下部構造と思えるものは検出されなかった。しかし，炉を中心に，その付属施設と考えられるピット群を検出した。それ等は，不定形の穴を数回に分けて掘ったもので，その穴は，鉄滓，炉壁等で満されていた。それ等は，炉を中心に，炉を取り囲む様な配置で検出した。それ等は，炉周辺の水位を下げ，また，その穴から出土した炉壁は，表面はガラス状に溶解しており，漆黒色を呈している。炉壁体の粘土質部分には，繊維質の植物を混入している。

この遺構は，それ等が一体となって炉を形成したものと考えられる。炉の種類であるが，以下に



第１０図　製鉄炉平面図・断面図

掲げる理由から，製鉄炉と考える。つまり，鉄滓の出土量が非常に多いこと，鉄滓の中にノロと考えられる溶解したものが流れ出た状態で固まったものがみられること，炉床に(註)鉄分の沈着がみられること，炉周辺にある穴の中に多量の炉壁が見られたこと等である。以上の理由をもって，製鉄遺構と考える。炉の本体はゆるやかな斜面に，その長軸が，等高線と平行な状態で構築されていた。また，この炉と直接の関係は不明であるが約60cmの間をおいて南側に，白色粘土を検出さした。製鉄炉の造られた時期であるが，鉄滓を出土した穴の底部より，内面に同心円状の叩き目が見られる須恵器片が出土したこと。また，鉄滓が出土した層位からして，奈良～平安時代の製鉄遺構とすることができるであろう。〔井上〕

(註) 整理箱（75×40×15cm）に8分目まで入れて62箱を収納している。

溝・溝状遺構 （第37図参照）

溝1　Ⅰ区A地点の建物1と重複して検出した。溝両端は確認できなかったが，長さ550cm，巾50cmを測る。

溝2　Ⅰ区C地点北側で谷にほぼ平行して検出した。溝は数本走っていたとみられ，C地点両端に痕跡が認められた。規模は検出長9m，巾30～40cm，深さ10cm程度で北西より南東へ低下している。

溝3　Ⅰ区D地点の谷土面で検出した。溝は谷と重複しており，C・D地点の谷土層断面でも確認している。巾80cm，深さ25cm程度である。

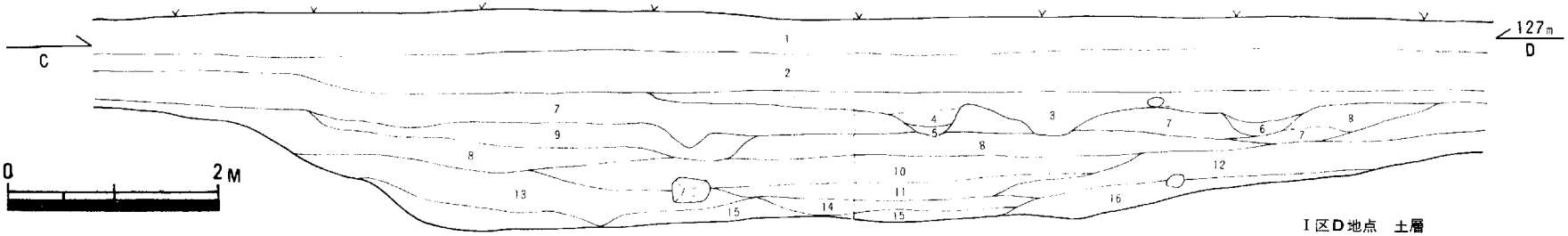
溝4　溝3と同様にⅠ区C・D地点で検出した。検出面は溝3と同一面であり，規模もほぼ同様である。溝3・4埋土は須恵器を含んでいる。

溝5　Ⅱ区A地点で建物5と重複している。溝は直角に曲っており，長さ4m，巾20cm，深さ4～5mを測る。検出面は建物5の検出面より下層で地山掘込みの竪穴住居址の周溝と考えられる。

溝6　Ⅱ区A地点のほぼ中央に検出した。建物4の北東端に接し棟方向にほぼ直角に位置している。遺構は長さ9.1m，巾1～1.2m，深さ25～30cmを測り，逆台形の断面を呈している。埋土は濃茶褐色土の上層より淡茶褐色の下層へと漸移的な堆積を示しており，ともに炭を含むマンガン質の土層である。埋土上層の東端と西端には，こぶし大から最大30cm程度の石を検出したが，規則性は認められなかった。

出土遺物は須恵器，土師器及び弥生式土器が出土した。須恵器は壺，甕，杯，高杯等の器形が認められる。土師器または弥生式土器と考えられる土器は，ほとんどが小破片で甕等の器形が認められるにすぎない。図化及び観察可能な須恵器(1)～(15)土師器(16)を第28図に掲載した。

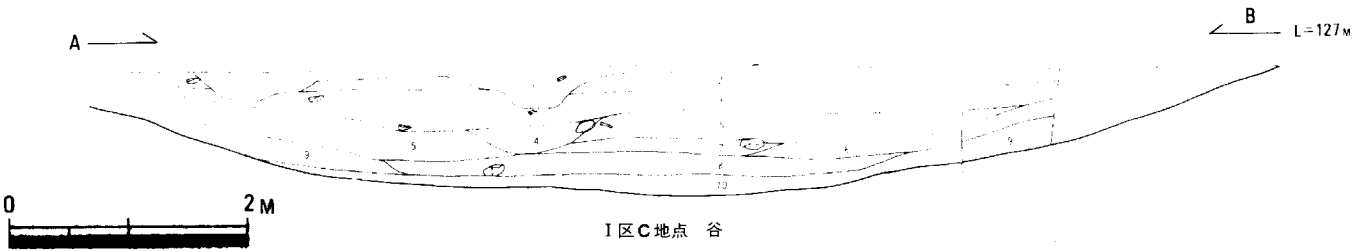
(1)は推定口径12.5cm，器高4.5cmを測る杯蓋である。口縁端部は丸味を持ち内彎している。胎土焼成とも良好で内面に一部自然釉がかかっている。(2)は推定口径12cm，器高3.9cmを測る杯蓋である。口縁端部は丸味を持ち終っている。焼成やや悪く，表面は粗い。(3)は推定口径11.6cm，器高



Ⅰ区D地点　谷

Ⅰ区D地点　土層

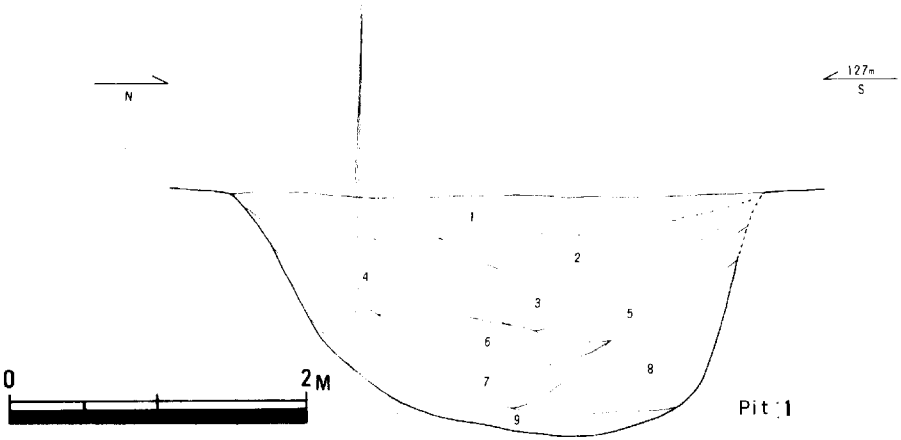
〈Ⅰ区D地点〉
1．灰青色粘質土層
2．灰茶褐土床土層
3．茶褐色土層
4．褐色土層
5．砂層
6．褐色含礫含砂層
7．黒褐色土層
8．暗灰褐色土層
9．暗灰黄褐色土層
10．黒褐色礫砂土層
11．灰黒褐色土層
12．暗灰黄褐色土層
13．暗黒褐色土層
14．灰黒土層（粘質）
15．灰黒土層（粘質）
16．暗褐色土層（砂）



Ⅰ区C地点　谷

Ⅰ区C地点　土層

〈Ⅰ区B地点〉
1．茶褐色マンガン質土層（かたい土）
2．黒茶褐色土層（ざらざらした土、土器包含）
3．淡茶褐色マンガン質土層
4．暗褐色粘質土層
5．①褐色土層（土器包含土）
5．灰褐色土層（砂質まじり）
6．褐色土層
7．砂質層
8．灰茶褐色粘質土層
9．黒褐色土層（ざらざらした土包含土）
10．黒褐色粘質土層



Pit 1

Pit 1　土層

〈Pit 1〉
1．黒褐色土層
2．暗褐色砂利土層
3．黒褐色炭まじり土層
4．暗灰黄褐色土層
5．暗褐色炭まじり土層
6．暗褐色炭まじり土層
7．灰黄褐色土層
8．黄褐色土層
9．黄色土グライ化土層

第11図　土層断面図

3.4cmを測る杯蓋である。口縁部でややくびれて，口縁端部でやや外反している。青灰色を呈し，胎土焼成とも良好である。(4)は杯蓋としてあつかったが杯身の可能性も考えられる。推定口径14cm，器高2.8cmを測る。肩部に1本の浅い凹線が施されており口縁端部で外反している。(5)～(9)は天井中央部につまみの付く杯蓋と考えられる。口縁部の内面には，かえりはみられず同様の特徴を示している。(5)・(6)・(8)は，推定口径17～17.6cmを測り，ほぼ同形同大である。(6)は推定口径15cmとやや小形で口縁部もやや丸味を持っている。(9)は推定口径28.4cm，つまみを除く器高4.1cmを測る大形の杯蓋である。天井部はやや丸味を持ち時計回りのロクロ回転である。色調は天井中央部分で淡白色，天井周辺部及び内面で淡灰色を呈し，やや軟質である。(10)は遺構内出土の唯一の完形品である。口径15.7cm，器高5.2cmを測り，貼り付け高台を有す。底部はきわめて肥厚し高台より下位に位置する。胎土には比較的大きい砂粒を含み，さほど精製されていない。色調は灰色～青灰色を呈し，普通程度の焼成である。(11)は推定口形18.7cm，器高6.7cmを測り，比較的小形の貼り付け高台を有す。(14)と比較してやや大形で薄手の作りである。色調は灰～灰白色を呈しやや軟質である。(12)は底部径8.6cmを測る杯身底部片である。(10)・(11)とくらべて小形で高台も内彎している。(13)は口径13.7cmを測る壺口縁部片である。濃灰色を呈し，胎土焼成とも良好である。(14)は長頸壺の頸部片で口径7.2cmを測る。頸部より口縁部にかけて徐々に拡張し，口縁端部でやや外反している。頸部中央には凹線を一本施している。色調は灰色を呈し，胎土焼成とも良好である。(15)は，高杯脚部片である。淡白色を呈し，焼成は悪い。(16)は推定口径18cmを測る土師器である。頸部より大きく外反し口縁端部は徐々に細くなり終っている。器面調整はハクリがはなはだしく不明である。

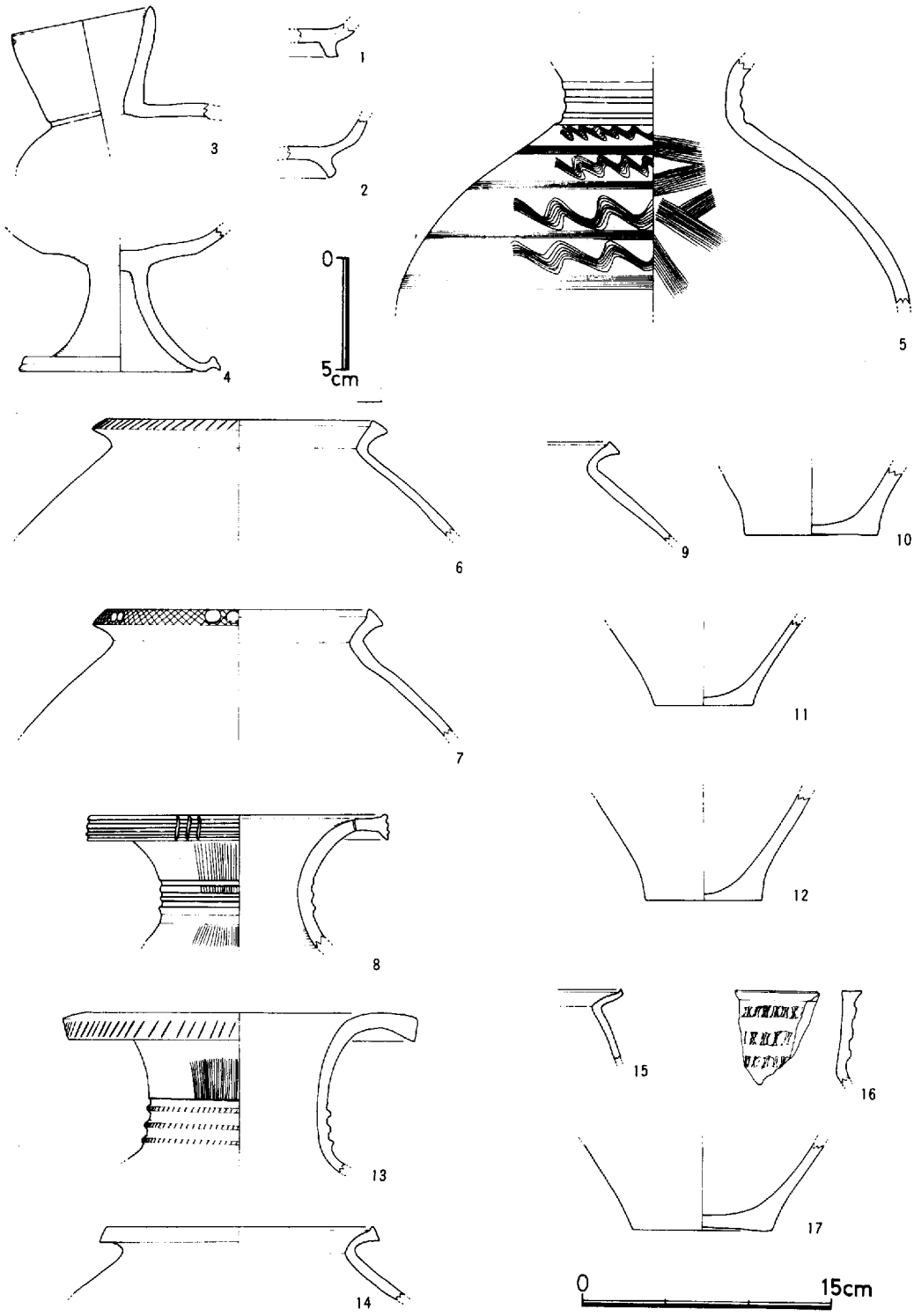
溝7　II区B地点のピット15を切っている。溝は現存長8m，巾60cm，南端の深さ20cmを測り，北端より南端まで20cm低下している。

溝8　II区B地点の南端に一部検出した。現存長3m，巾50cmを測る。未掘である。　〔山磨〕

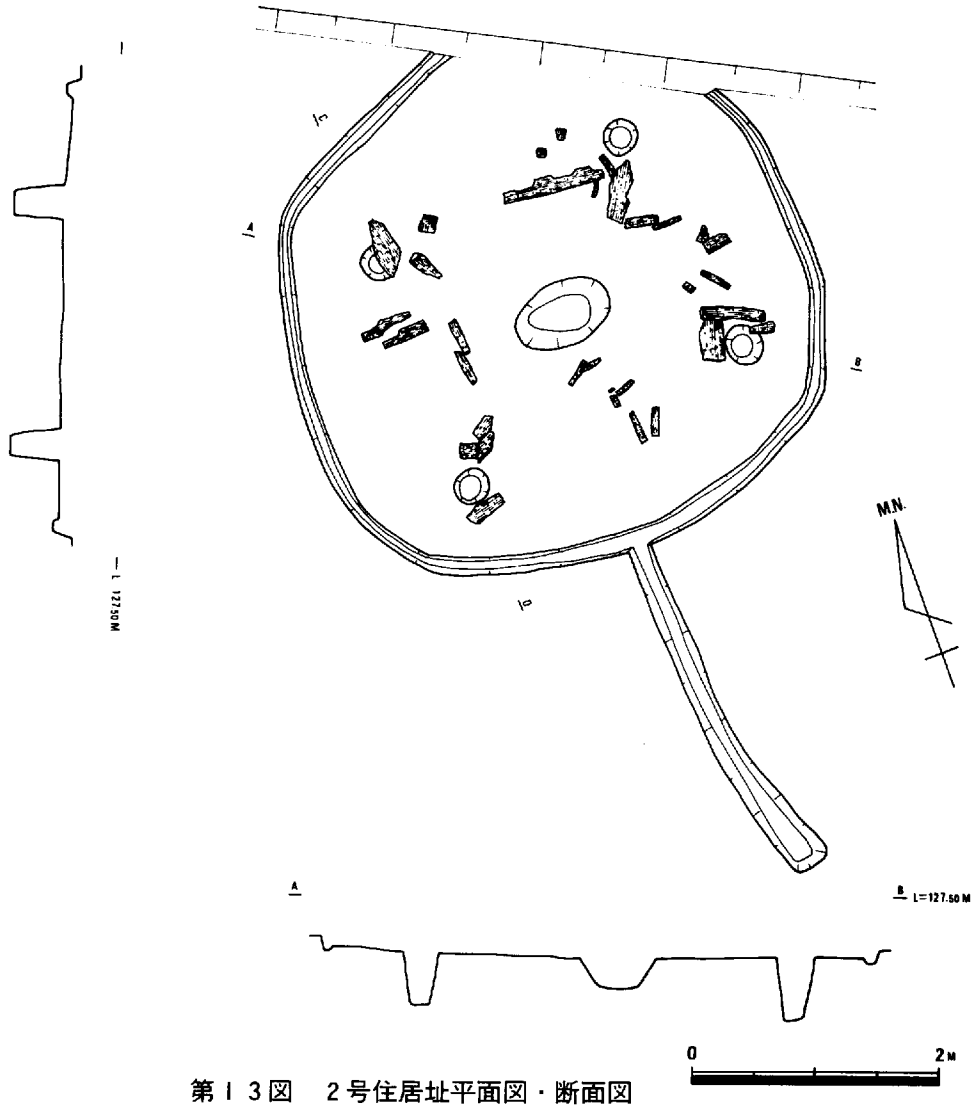
谷　（第11図）

遺跡のほぼ中央を縦断する谷はI区B・D地点のほぼ中央とC地点の南半部及び，II区A地点南端のトレンチにより確認した。谷巾は11m前後，表土よりの深さ約2m，遺構面よりの深さ1.1mを測り断面凹レンズ状を呈している。I区C・D地点の断面観察では，遺構面で各々2本の浅い溝を確認した。（溝3・4）

層位はC地点10層，D地点16層を確認し，最下層で砂層が部分的に認められた。C地点第1層はマンガン質土で須恵器を包含している（第12図1～4）。第2層以下は全て弥生式土器を包含しており，最下層（10層）では，凹線文を施さない弥生式土器が出土した（第12図13～17）。C地点最下層では晩期縄文式土器片3点を確認した。　〔山磨〕



第１２図　弥生式土器４須恵器（Ｉ区Ｃ地点谷出土）



第１３図　２号住居址平面図・断面図

第２節　II　区

２号住居址　（第13図）

内法で東西4.3m，南北4.2mを測るこの住居址は，やや形は不整形であるが，隅円方形が基本形であろう。柱穴は４個あり，南北の間隔は，東・西両列とも1.9mを測る。東西の間隔は，北側列で2.2m，南側列で2.5mを測る。住居址のほぼ中央には，長径0.8m，短径0.5m，深さ0.25mを測る中央穴がある。壁に沿っては，壁溝が一周する。さらに南側壁面の中央付近には外溝が付属する。住居址の残存する壁面は，ほぼ0.1mである。

この住居址は，火災住居であり，住居址内からは多くの炭化材を検出した。壁溝と外溝との接合については，住居址が削平を受けているため，暗渠になるものか否かは不明である。　〔井上〕

3号住居址 （第14図）

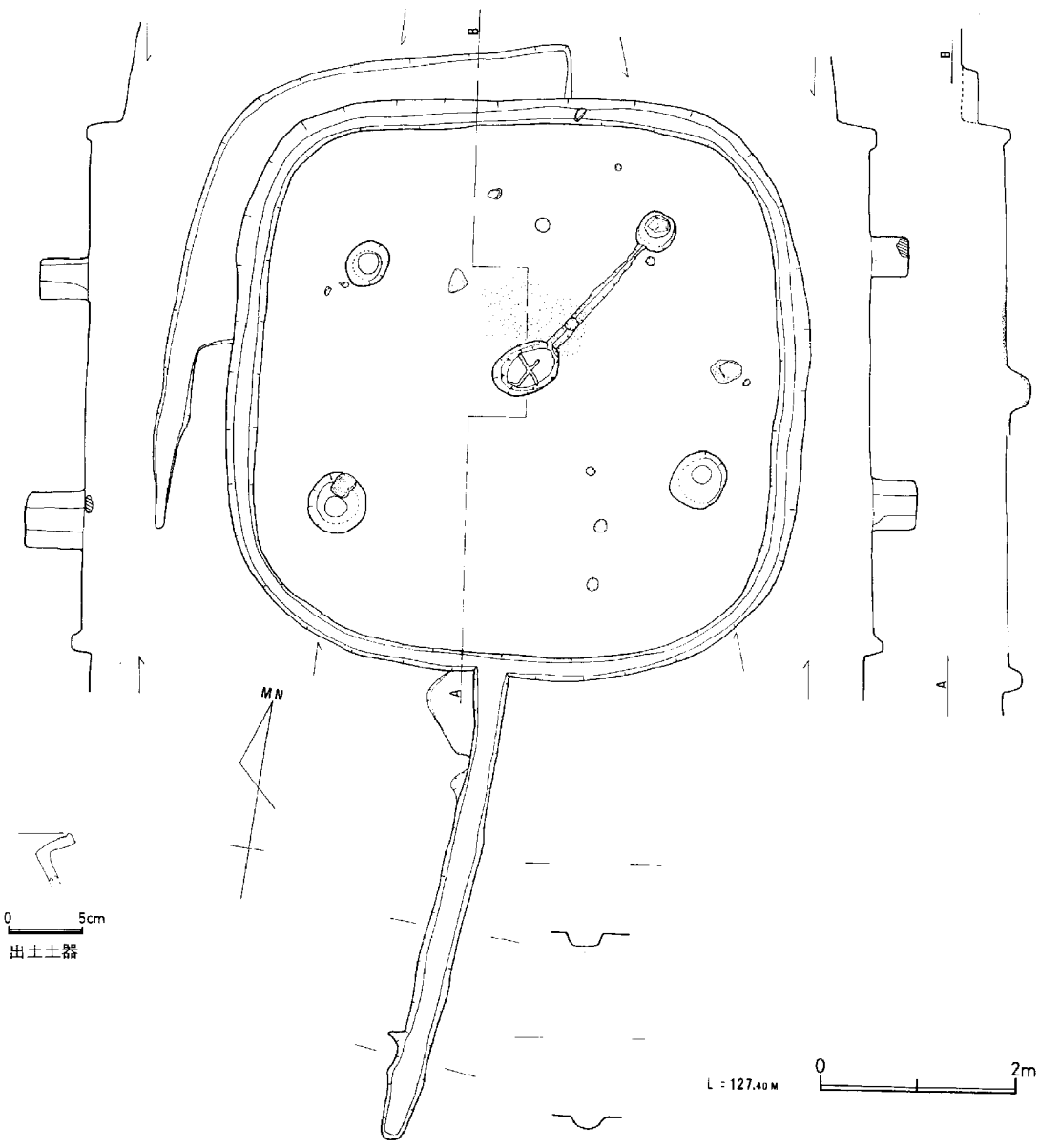
本住居址はII区A地点の北西端にて検出した。平面形態は隅丸方形を呈し，一辺5.9m，壁下の溝を除く床面積26.6m²を測る。柱穴は床面上に計10本検出したが，そのうち住居址に直接伴うものは掘り込み内の対角線上に位置する4本である。4本の柱穴はともに径40～60cm，深さ40～60cmを測り，ほぼ同規模を呈している。柱痕址は黒褐色を呈し，径20cm前後の柱と推定される。他の6個の柱穴は径10cm前後の小柱穴で本住居址に直接伴うか否か不明である。住居址掘り込み残存度は北側で床面まで40～50cm，南側では浅く10cm程度である。壁下の溝は一周しており，巾20～30cm床面よりの深さ4～8cmを測り，断面U字形を呈している。溝底部レベルは北西隅を最高として南に付属する溝と接する部分で－20cmを測る。住居址本体の南に付属する溝は長さ4.9m，巾35cm前後，深さ10～15cmを測り断面U字形を呈している。溝底部レベルは住居址本体と接する部分と溝南端では－20cm低下している。又床面上には中央ピットと北西の柱穴の間に巾6～12cm，長さ1.4m，深さ3～5cmを測る断面V字形の細溝を検出した。この溝の埋土下層は一部グライ化が認められたが溝の性格については不明である。

中央ピットの平面形態は楕円形を呈し，長径70cm，短径50cm，深さ25cmを測り，断面はスリ鉢状を呈する。ピット底面には×印状に浅い掘り込みが認められた。ピット内埋土は灰を多く含み，底面では層をなしていた。また，中央ピット北側では中央ピット内よりかき出した状態で長径1.1m×短径0.7mにわたり灰が浅く堆積していた。

遺物は十数片の土器片が埋土中，床面及び中央ピット内より出土した。ほとんどが小破片で，図示できた土器は1片のみである。第14図は埋土中より出土の甕口縁部小片である。口縁は「く」字に曲折して口縁端部は上方にやや拡がっている。口縁端部には文様は認められない。床面上では外面ヘラ磨き整形の底部が出土し，中央ピット内では小破片が出土しているが，ともに図化不可能である。

他に住居址内の床面及び壁下の溝内より大小8点の石が出土した。この内2点の石に使用痕が認められた。住居址内の東より出土した大形の石は上面にわずかに磨滅痕が認められ，調理または工作用の台石と考えられるものである。南西の柱穴に重複して出土した偏平な花崗岩質の石は使用痕が認められなかったが床面に接しており，住居使用時には何らかの機能を持ったものと考えられる。

〔山磨〕



第Ⅰ4図　3号住居址平面図・断面図

ピット群（第15・16図）

ピット 1（半掘）

Ⅰ区Ａ地点の北よりに検出した。平面形態は円形を呈し，直径3.5ｍ，深さ1.6ｍを測る。断面は底の丸いU字形を呈している。出土遺物は，弥生式土器と凹石が出土している。

出土遺物（第16図１～14）

(1)～(3)は壺形土器片である。(1)は口縁部内面に半円形の櫛描文を施し，口縁端部にヘラ圧痕文を施している。(2)・(3)は頸部より徐々に外反した口縁部を持ち，ともに頸部に凹線文を施している。(2)は，さらに口縁端部に櫛描列点文を施している。

(4)～(8)は甕形土器である。頸部はく字形に外反し，口縁端部で上方又は上・下方にやや肥厚している。(5)の内面はヘラ削りを行っており，後出の土器とみられる。(6)の口縁端部はヘラ圧痕文を施している。

(9)・(10)の底部片は外面にヘラ磨きを行ない，(10)の内面はヘラ削りを行っている。

(11)～(14)は高坏形土器片である。(11)は口縁部に水平な面を持ち，(12)は口縁部がややくびれて口縁端部で肥厚している。(13)の脚部片は下端に凹線文を施し，脚端はやや肥厚している。

ピット 2（未掘）

ピット１の南側1.3ｍの場所に検出した。平面形態は円形を呈し，直径2.8ｍを測る。未掘であるが検出状態はピット１と同様の様相を呈していた。

ピット 3（半掘）

ピット２の南側に検出した。平面形態はややいびつな楕円形を呈し，直径3.0×短径2.3ｍを測る。

ピット 4（一部掘）

ピット３の南側にほぼ接して検出した。未検出部が多く平面形態は不明である。

ピット２～４の出土遺物は少量の土器片のみで，図化不可能であった。

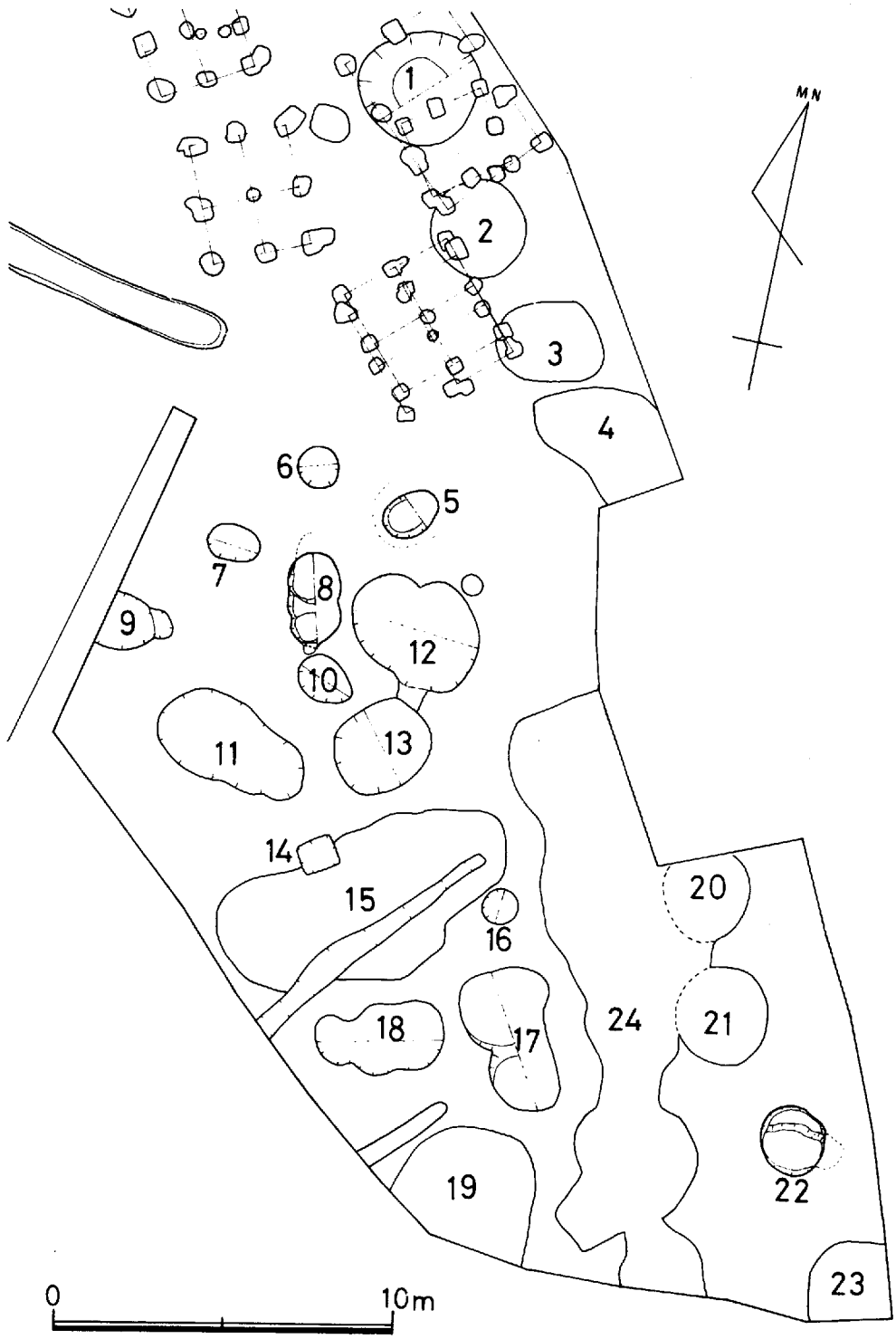
ピット 5（半掘）

Ⅱ区Ｂ地点の北よりに検出した。平面形態は楕円形を呈し，長径1.7ｍ×短径1.3ｍ，深さ 1.3ｍを測る。断面は上面より60～70cm付近で急激に広がって袋状を呈している。ピット内堆積土は７層認められ，第１層は灰茶褐色マンガン質土層で，第２～７層は粘質土層である。底部はほぼ水平で中央部分の底に接して，完形の壺形土器（第17図－１）が出土した。なお，底部の袋状末端部は充分確認できずに終了した。

出土遺物は最下層の完形の壺形土器を含めて図化できたものは６点である。

出土遺物（第17図１－６）

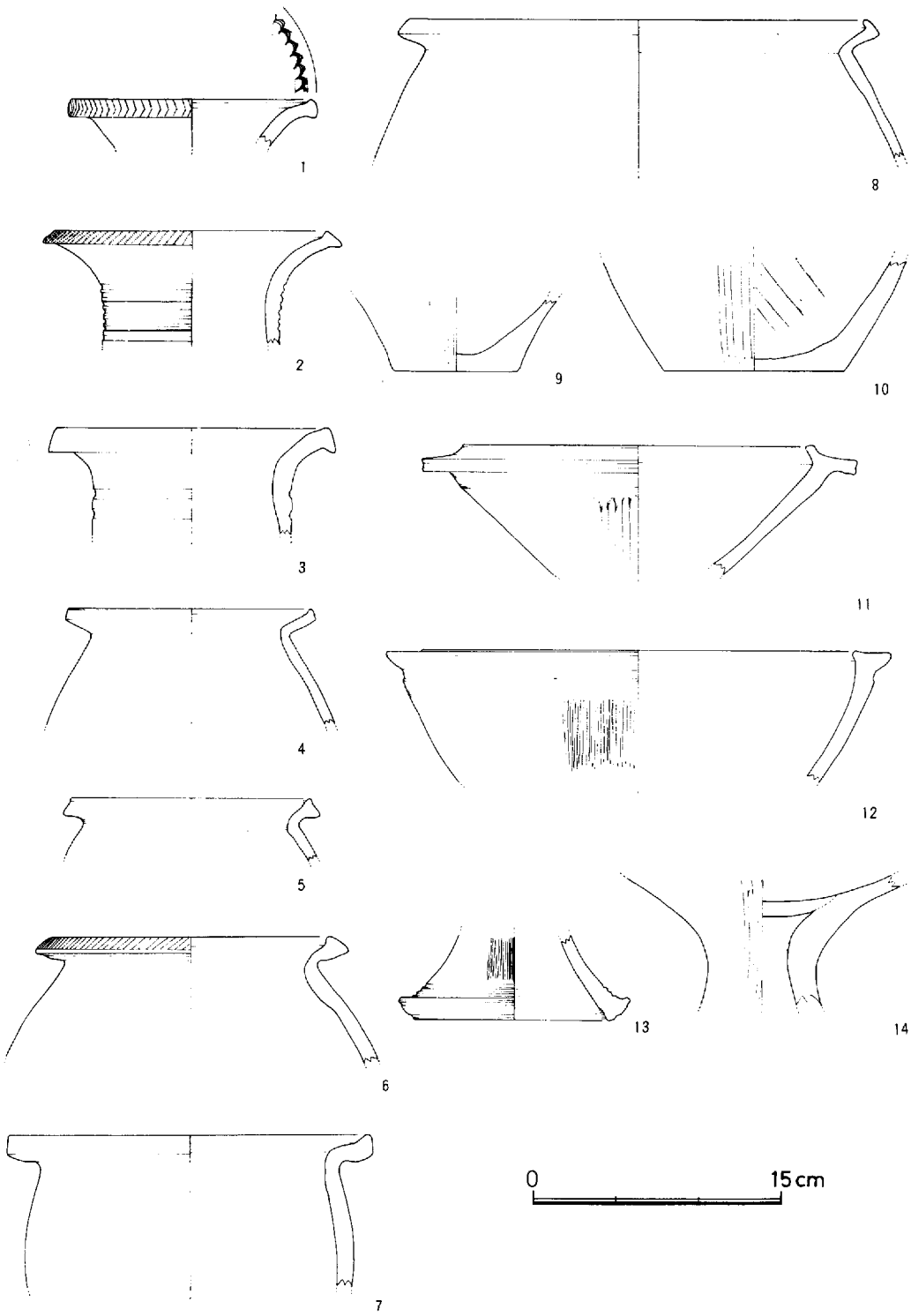
(1)・(3)は壺形土器である。(1)はピット最下層より出土した完形品で，口径16cm，器高41cm，胴部最大径33cmを測る。頸部より徐々に広がる口縁部には，断面三角形の凸帯を等間隔に３段施している。胴部はその最大径をほぼ中央に持ち，器高にくらべて薄手のつくりである。頸部より胴上半に



第１５図　ピット配置図

表Ⅰ　II区ピット一覧表

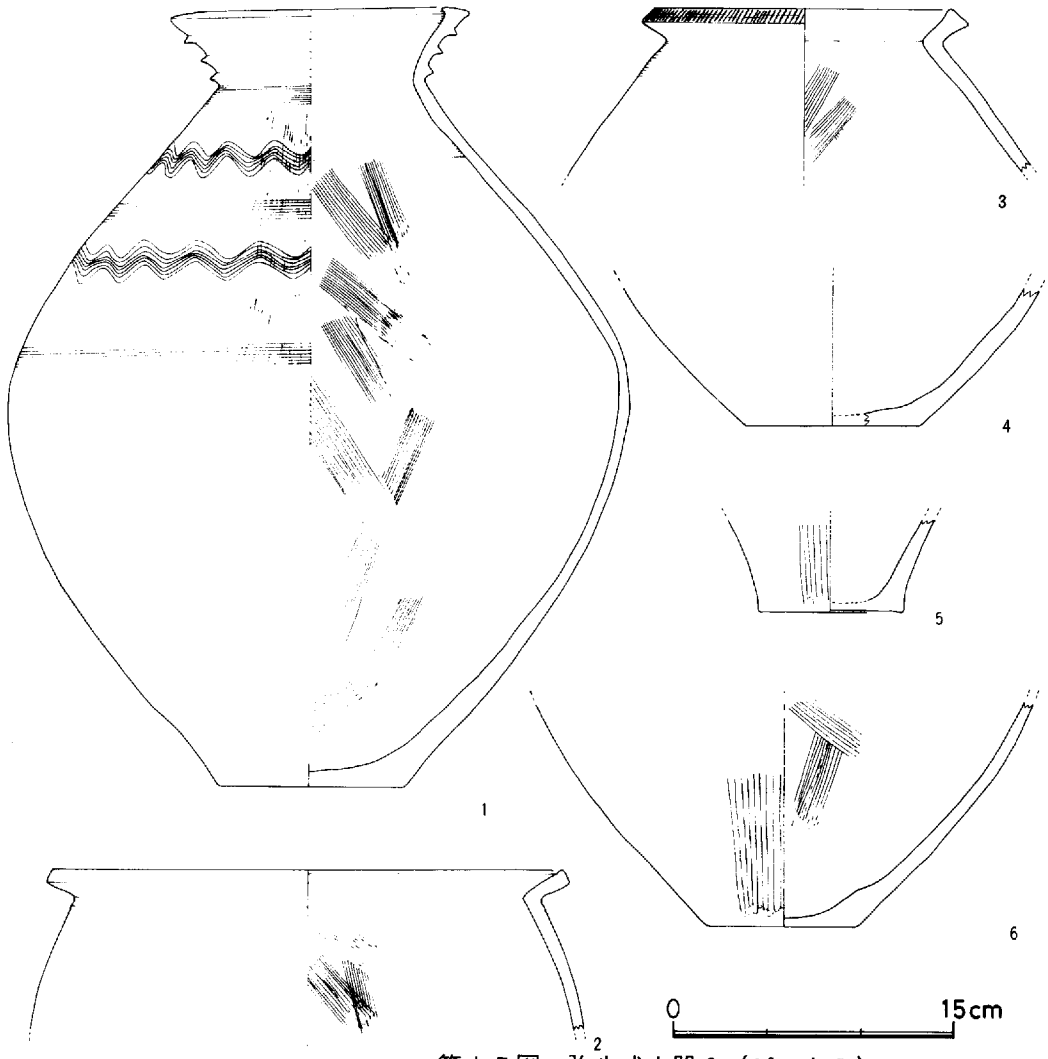
番号	平面形態	規模（m）	深さ（m）	時期	特徴	備考
1	円形	直径 3.5	1.65	弥生中期	凹線文，凹石	半掘破壊
2	円形	直径 2.8	――	弥生中期		未掘破壊
3	長円形	3.0×2.3	?	弥生中期		半掘破壊
4	不整形	――	?	弥生中期		半掘破壊
5	隋円形	1.7×1.3	1.3	弥生中期	凹線文無	半掘破壊
6	円形	直径 1.2	1.34	弥生中期	凹線文無 紡錘車	半掘破壊
7	隋円形	1.6×1.0	1.25	弥生中期	凹線文無 紡錘車	半掘破壊
8	不整長円形（重複）	2.25×1.5	1.35	弥生中期	凹線文のみ	半掘破壊
9	隋円形	約2.5×1.6	?	弥生中期	凹線文無	半掘破壊
10	隋円形	1.8×1.3	0.3	?		半掘破壊
11	長円形	4.7×2.5	1.45	弥生中期	凹線殆んど無	ほぼ掘り上
12	不整隋円形	4 ×3.1	1.36	弥生中期		半掘破壊
13	隋円形	2.9×2.5	1.3	弥生中期		半掘破壊
14	長方形	1.1×0.95	0.1	土師器		完掘
15	不整長円形	9.0×4.5	?	弥生中期	凹線文	半掘破壊
16	円形	直径 1.1	1.0前後	弥生中期		半掘破壊
17	不整長円形（重複）	直径 2.7 直径 2.0	1.1前後	弥生中期	凹線文 分銅型土製品	半掘破壊
18	不整長円形	3.8×2.1	1.15	弥生中期	凹線文	半掘破壊
19	長円形　?	――	?	弥生中期	凹線文	未掘破壊
20	円形	直径 2.5	?	弥生中期		未掘破壊
21	円形	直径 2.8	?	弥生中期		未掘破壊
22	円形	1.9×2.0	1.2	弥生中期	凹線文無	完掘
23	――	――	?	?		未掘破壊
24	不整形（重複）	長さ約18.0	?	弥生中期		未掘破壊



第１６図　弥生式土器５（ピット１）

は縦の刷毛目調整を行ない，その上に等間隔に巾１cm前後の櫛描直線文を３ケ所に施し，さらにその間にそれぞれ櫛描波状文を施し装飾している。胴半下の調整は器面が荒れており確認できない。内面は口縁部より頸部下３cmまでヨコナデを施し，それ以下底部まで斜方向の刷毛目調整を行なっている。色調は淡褐色～赤褐色を呈し焼成良好である。(3)は頸部がく字形に外反し，口縁端部に浅い凹線文を施し，その上にヘラ刻み文を施している。口縁より胴部にかけてはヨコナデ調整が行なわれているが，下端は剝離し不明である。内面は頸部より下半に刷毛目調整を行なっている。色調は淡茶褐色を呈し，胎土焼成とも良好である。

(2)は甕形土器片である。頸部はく字形に外反し口縁端部には文様は見られない。器外面は剝離し調整不明である。内面は頸部より下半に刷毛目が施されている。



第１７図　弥生式土器６（ピット５）

(4)～(6)は底部片である。(4)は焼成悪く内外面とも荒れている。(5)はやや上げ底の底部を持ち，ややくびれたのち外反している。外面にヘラ磨き調整がなされ焼成良好である。(6)は外面ヘラ磨き，内面刷毛目調整が行なわれている。

他に図化不可能であった土器には(1)と同様の櫛描直線文と波状文を施したものや，胴部内面の上半は刷毛目が行なわれ，下半にち密なヘラ磨き状の調整が行なわれている破片が出土している。

ピット6（半掘）

ピット5と同様にII区B地点の北よりに検出した。平面形態は円形を呈し，径1.2m，深さ1.34mを測る。断面は袋状を呈し，底部の東よりで，甕形土器1個体分が出土した。

出土遺物（第19図－1～4・7）

(3)は頸部より胴下半分にかけての壺形土器片である。頸部には指頭圧痕文凸帯が施されている。頸部下端より胴最大径部にかけては縦の刷毛目調整を行ない，その上面に，巾1.4cm前後の櫛描直線文を等間隔に3ヶ所施し，さらにその間にそれぞれ櫛描波状文を施している。内面は剝離により器面調整は不明である。

(4)は口径24cm，器高40cmを測るほぼ完形の甕形土器である。頸部はく字形に外反し，口縁端部はやや浅く凹んでいる。内外面とも剝離がはなはだしく底部外面に一部ヘラ磨き痕が認められたにすぎない。器全体は非常に薄手につくられており，色調は淡褐色を呈した胎土焼成良好な土器である。

(1)・(2)は底部片である。(1)は内面に圧痕が認められ，外面は剝離により不明である。(2)はやや上げ底の底部で内外面ともヘラ磨きが施されている。

(7)は長径6.5cm×短径5.5cm，厚さ0.5cmを測る土製紡錘車である。ほぼ中央に径0.6cmの孔が穿たれ，重さ20gを測る。色調は表面淡褐色，内面黒灰色を呈し，土器片を再加工してつくったと考えられる。

ピット7（半掘）

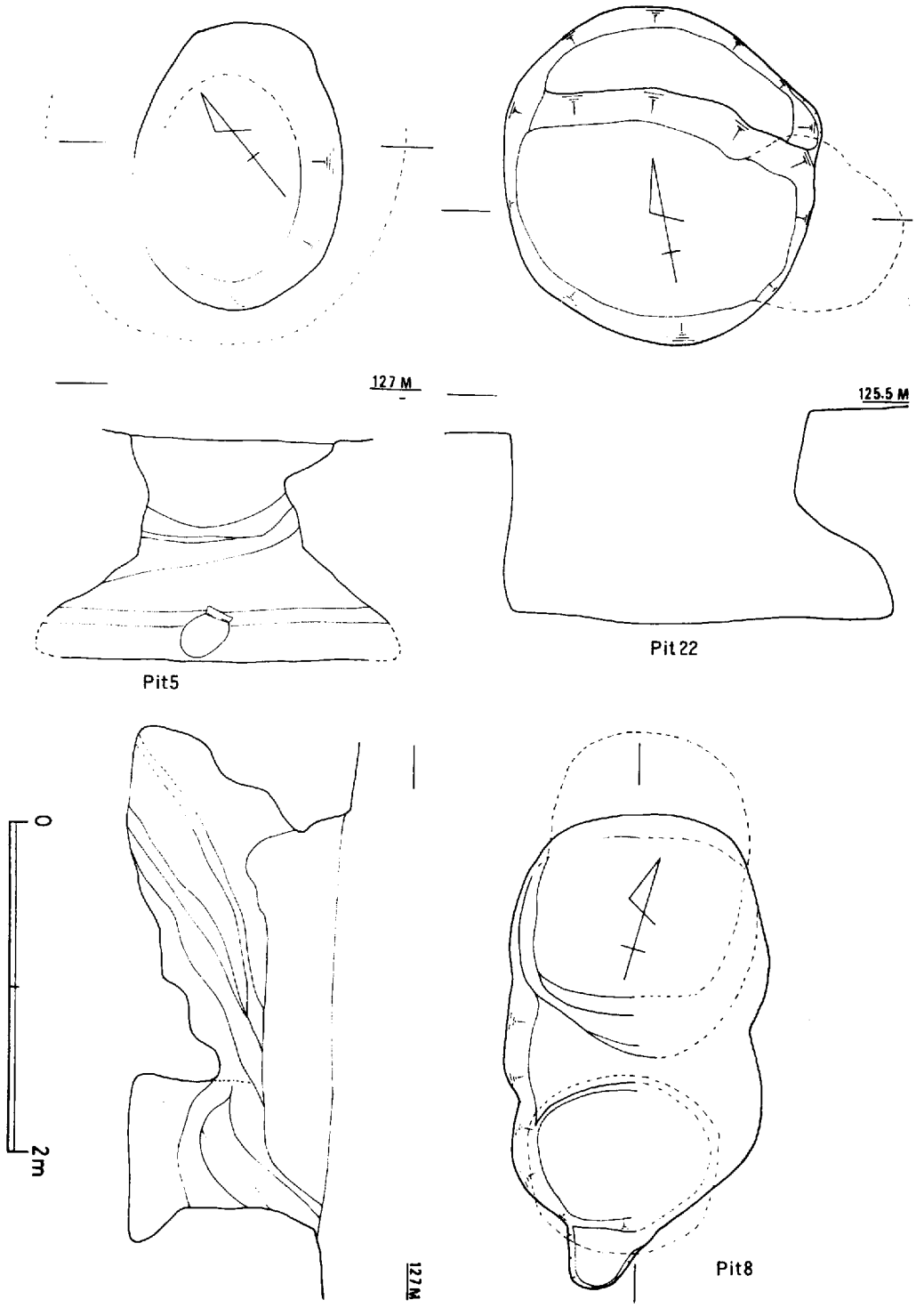
ピット6の南西2mの場所に検出した。平面形態は楕円形を呈し，長径1.6m，短径1.0m，深さ1.25mを測る。断面は袋状を呈し，ピット5とほぼ同規模の大きさである。

出土遺物（第19図－5・6・8）

(5)は頸部がく字形に外反した壺形土器片である。口縁端部は巾1.4cm前後に肥厚し，ヘラ刻み文を施しており，胴部上半には櫛描波状文を施している。内面は剝離し，調整不明である。

(6)は甕形土器片である。頸部は(5)と同様く字形に外反している。胴部は内外面とも刷毛目調整が行なわれている。色調は赤褐色を呈し，胎土焼成とも良好である。

(8)は長径5.5cm，短径4.5cm，厚さ0.6cm，重さ17gを測る土製紡錘車である。ほぼ中央に径0.7cmの孔がやや傾斜して穿たれている。色調は表面赤褐色，裏面灰色を呈し，ピット6出土のものと同様に土器片を再加工してつくっている。



第18図　ピット5・8・22平面図・断面図

ピット8（半掘）

ピット7の東側1mの場所に検出した。平面形態は不整長円形を呈し，長径2.25m，短径 1.2mと 1.5mの大きさを測る。断面観察によると直径1.2mと1.5m程度のピットが重複した状況を示している。深さはともに1.35mを測る。(第16図) 堆積土層は両ピット上面に茶褐色マンガン質土層が堆積し，以下の土層は全て粘質土層である。両ピットの第2層以下の土層の切合いは充分に観察できなかったが，北側のピットが新しいとみられる。半掘の状態では両ピットとも一方向にかたよった袋状を呈している。

出土遺物（第20図－1～6）

壺形土器(1)は口縁部上半に6本の凹線文を施し，下半には縦の刷毛目調整を行なっている。内面はやや荒いヨコナデ調整が外面の凹線文の施されている所まで行なわれ，それ以下はヨコナデ調整である。色調は淡灰褐色を呈し，胎土焼成とも良好である。甕形土器(2)～(4)は頸部よりく字形に外反する口縁部を持ち，口縁端部に1～2本の凹線文を施している。(2)は内外面とも口縁部より頸部にかけてヨコナデが行なわれ，頸部より胴部にかけて縦の刷毛目が行なわれている。色調は淡茶褐色を呈し，焼成良好である。(3)は口縁端部の凹線文上に径 0.6cm前後の円形浮文を3個1体で貼付している。器面調整は内外面とも不明である。色調は白灰色を呈し，焼成良好である。(4)は器面が荒れて調整不明である。

(5)はピット最下層より出土した底部である。器面調整は一部ヘラ磨きが認められる以外は剝離し不明である。(6)は底部が上げ底で，ややくびれたのちに外反している。外面はヘラ磨きが行なわれている。

ピット9（半掘）

II区B地点の西端に検出した。一部未確認ではあるが平面形態は楕円形を呈すと考えられる。中心の掘り方は長径約2.5m，短径1.6mを測り，断面は袋状を呈している。西端には浅い段状の掘り込みが付属している。

出土遺物（第20図－7～12）

(7)～(9)は，いずれも頸部よりく字形に外反する甕形土器片である。(7)は口縁端部にやや厚味を持たせ刻目文と径0.9cm程度の円形浮文を4個1体で対している。外面は頸部より胴部にかけて縦の刷毛目と，底部にヘラ磨きを行なっている。内面は荒れている。色調は淡褐色を呈し，焼成良好である。(8)・(9)は，いずれも口縁端部がやや肥厚している。(8)の胴部は内外面に刷毛目調整がなされ，(9)ではわずかに櫛描波状文が認められたが剝離が著しい。

(10)～(12)の底部片は，剝離により調整不明なものが多く(12)の外面にわずかにヘラ磨きが認められた。

ピット10（半掘）

ピット8の南側に接して検出した。平面形態は楕円形を呈し，長径1.8m，短径1.3mを測る。掘

り込みの深さは30cmと浅く，U字形の断面を呈している。出土遺物は皆無である。

ピット11（ほぼ掘り上げ）

ピット10の南側1.5mの場所に検出した。平面形態は長円形を呈し，長径4.7m，短形2.5m，深さ1.45mを測る。掘り込みは東端と南側中央部が部分的にえぐり込まれている。平面では確認出来なかったが，ピットの重複の可能性も考えられる。

出土遺物（第21図－1～10）

(1)は口径19cmを測る壺形土器の口縁部である。頸部より徐々に外反し，口縁端部で肥厚し下方にたれ下っている。頸部には縦の刷毛目調整が行なわれ，下半には2本の三角凸帯が貼付されている。器壁内面は口縁部上面に外面と同様に2本の三角凸帯が貼付され，それ以下ではヨコナデ調整が行なわれている。また内面の2本の三角凸帯と口縁端部上面には等間隔にヘラ刻目文が施されている。色調は淡赤褐色を呈し，胎土，焼成とも良好な土器である。

(2)～(5)は，いずれも胴部に列点文と口縁端部にヘラ刻目文を施した壺形土器である。(2)は口縁部より頸部にかけてヨコナデを行ない，頸部下端より胴部にかけて刷毛目調整を行なっている。色調は赤褐色を呈している。(3)は口縁端部が上下にやや肥厚している。器外面は口縁部より頸部下1cm程度までヨコナデ調整を行ない，胴部内外面には刷毛目調整を行なっている。色調は赤褐色を呈している。(4)は口縁端部に1本の凹線文を施し，胴部の列点文も2列である。器面は内外とも荒れている。(5)は胴部より底部にかけての破片である。外面は胴中央部分まで縦の刷毛目調整を行ない，その上に2列の列点文を施している。胴下半より底部にかけてはヘラ磨きを行なっている。内面は刷毛目調整である。色調は外面赤褐色～褐色，内面黒灰色を呈している。

(6)～(10)は底部片である。器面調整は(8)・(9)の外面にヘラ磨きが認められる以外は剝離している。

ピット12（半掘）

II区B地点の北よりで検出した。平面形態は不整楕円形を呈し，長径4m，短径3.1m，深さ1.36mを測る。断面は袋状を呈している。

出土遺物（第22図－1～13）

(1)・(2)・(4)は壺形土器片である。(1)は頸部より徐々に外反し，口縁端部でやや肥厚し，たれ下っている。器面は三角凸帯が頸部と口縁端部上面にそれぞれ2本貼付されている。色調は赤褐色を呈し，焼成やや悪い。(2)は頸部より徐々に外反し，口縁端部でやや肥厚し，口縁部外面に5本の三角凹帯を貼付している。(4)は頸部がく字形に外反し，口縁端部にヘラ刻目文を施している。口縁部より頸部下5cmまでヨコナデを行ない，胴部には縦の刷毛目調整と列点文を施している。内面は頸部下端より胴部にかけて刷毛目調整を行っている。色調は灰褐色～淡赤褐色を呈している。

(3)・(5)は甕形土器片である。頸部はく字形に外反し，口縁端部はやや肥厚している。(3)の口縁端部はヘラ刻目文を施している。外面は口縁部より頸部下端1cmまでヨコナデを行ない，それ以下は縦の刷毛目調整を行なっている。内面は口縁部より頸部下2cm程度までヨコナデを行ない，それ以

下は斜めの刷毛目調整である。色調は淡褐色を呈し，胎土焼成とも良好である。(5)の器外面は口縁部より胴部にかけてヨコナデ調整で，内面では頸部までヨコナデ調整を行なっている。色調は赤褐色を呈し，焼成良好である。

(6)は高杯形土器の坏部片である。口縁部は水平面を持ち，口縁端部でたれ下っている。口縁部内端には1本の凸帯を施し，器内外面ともにヨコナデ調整を行なっている。色調は褐色～淡褐色を呈し，胎土焼成良好である。

(7)は器台形土器片である。器外面は凹線文を施し，下端には鋸歯文を巡らしている。内面の下端1㎝はヨコナデ調整を行ない，その上2㎝程度には斜方向の刷毛目を行ない，さらにその上にヨコナデ調整を行なっている。色調は淡褐色を呈し，胎土焼成とも良好である。

(8)～(13)は底部片である。(11)は台付壺形土器の底部である。(8)・(9)・(10)・(12)には外面ヘラ磨きが認められる。

ピット13（半掘）

ピット12の南側に隣接して検出した。平面形態はやや楕円形を呈し，長径2.9ｍ，短径2.5ｍ，深さ1.3ｍを測る。断面はやや袋状を呈し，堆積土上層の中央部分にはこぶし大の石が比較的多く堆積していた。

出土遺物（第22図－14～17）

(14)は器壁の非常に薄い甕形土器片である。頸部はく字形に外反し，口縁端部でやや上向いている。色調は褐色～赤褐色を呈している。器外面は頸部下1㎝までヨコナデ調整が行なわれ，それ以下は縦の刷毛目が行なわれている。内面は頸部下2㎝程度までヨコナデ調整を行なっている。

(15)～(17)は底部片である。(17)はやや上げ底，(15)・(16)は底部がシャープである。

ピット14（完掘）

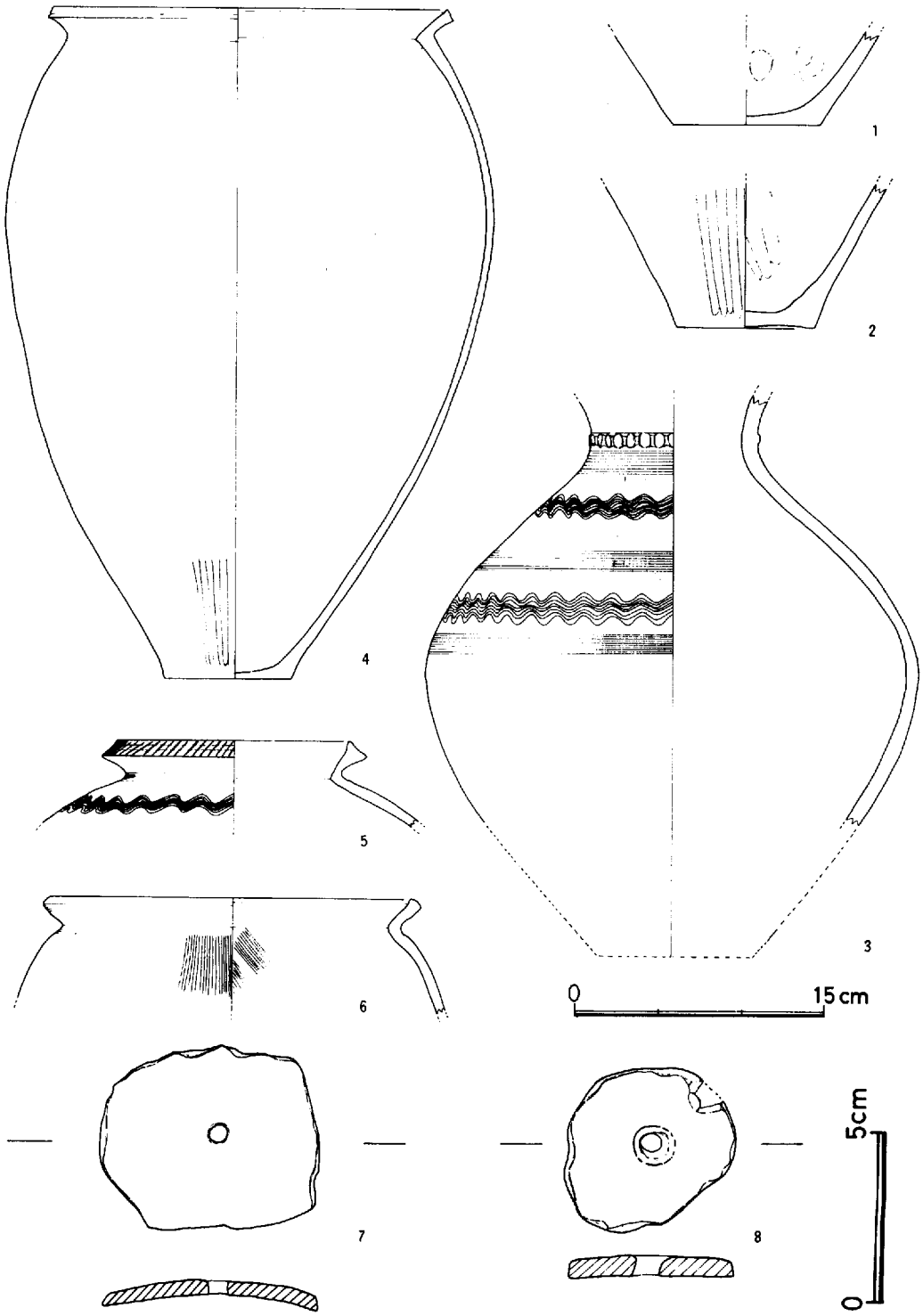
Ⅱ区Ｂ地点の中央部分でピット15を切ってつくられている。平面形態は長方形を呈し，長辺1.1ｍ，短辺0.95ｍを測り，深さ10㎝程度の非常に浅い掘り込みである。他のピットと異なり，堆積土中には灰を多く含んでいた。

出土遺物（第27図）

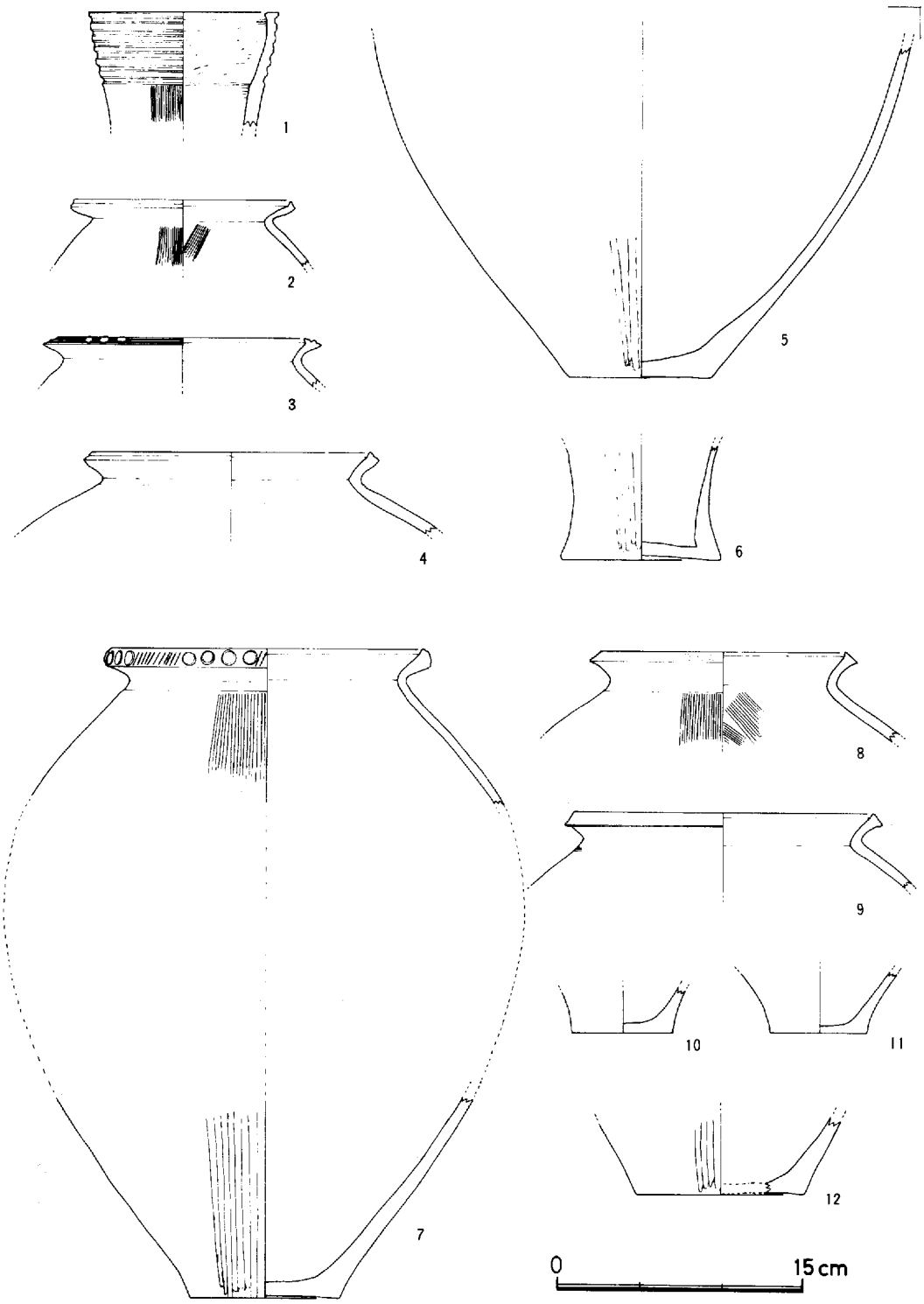
図化できたのは口縁部より胴部にかけて甕形土器片である。口縁部は頸部よりゆるく外反し，胴部外面に縦の刷毛目，内面に縦方向のヘラ削りを行なっている。色調は灰褐色～黒灰色を呈している。

ピット15（未掘）

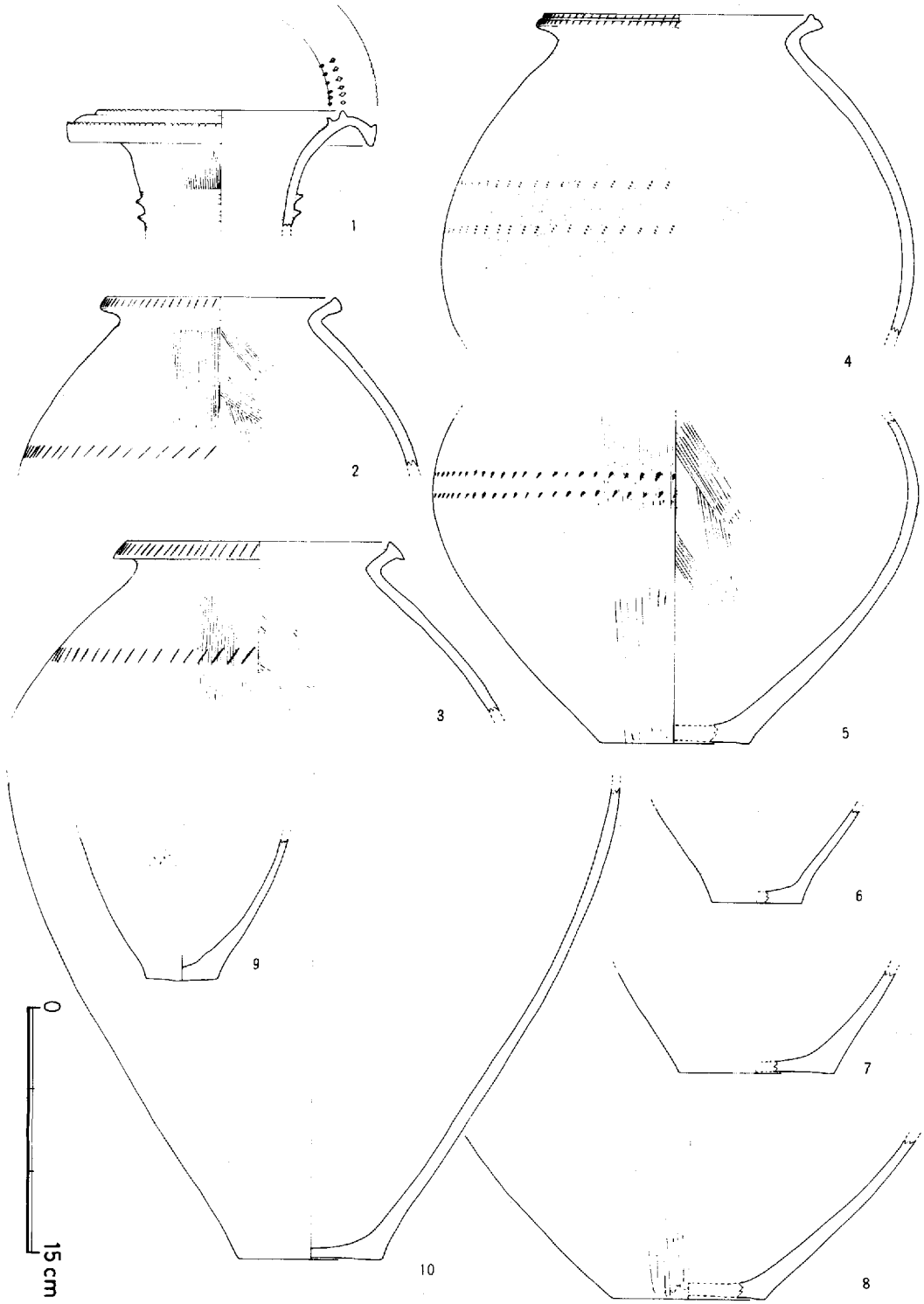
Ⅱ区Ｂ地点の中央に位置し，ピット14と巾30～90㎝，長さ8ｍの細溝によって切られている。平面形態は不整長円形を呈し，長径9ｍ，短径4.5ｍと非常に大きい掘り込みである。5㎝程度上面を掘り下げたのみで未掘のまま終了した。



第１９図　弥生式土器７土製紡錘車（１～４・７ピット６・５６８ピット７）



第２０図　弥生式土器８（１～６ピット８・７～12ピット９）



第２１図　弥生式土器９（ピット11）

出土遺物（第23図－１）

(1)は甕形土器片である。頸部はく字形に外反し，口縁部には２本の凹線文が施されている。

ピット16（半掘）

ピット15の東に隣接して検出した。平面形態は1.１ｍの円形を呈している。深さは未確認であるが１ｍ前後を測り袋状の断面を呈している。

出土遺物（第23図－２）

(2)はやや上げ底の底部を持ち，外面ヘラ磨き調整を行なっている。内面は上より刷毛目・指頭圧痕，ヨコナデを行なっている。色調は外面赤褐色，内面灰褐色を呈し，胎土焼成良好である。

ピット17（半掘）

ピット16の南東1.５ｍの場所に検出した。平面形態は不整長円形を呈しているが，　径2.７ｍと，径２ｍ程度のピットが重複している。深さはともに1.１ｍ前後を測る。両ピットの新旧は壁の崩壊により確認できなかった。

出土遺物（第23図－３～12）

(3)・(4)は頸部よりく字形に外反し，口縁端部に(3)で３本，(4)で２本の凹線文を施す甕形土器片である。器面はいずれも荒れており調整不明な点が多い。

(5)は鉢形土器か，高杯形土器の杯部と考えられる破片である。器外面の口縁部下２㎝程度には浅い凹線文状の痕跡が認められる。他は内外面ともヨコナデ調整を行なっている。

(6)は高杯形土器の杯部片である。杯底部より口縁にかけてやや内傾し，口縁部内端には１本の凸線を施し，水平につくっている。口縁部内外面ともヨコナデ調整を行ない，色調は淡褐色を呈している。

(7)は高杯形土器の脚部片である。脚部中央には16本の凹線文を施し，脚端に鋸歯文を巡らしている。内面すそ部は巾３㎝程度にヘラ削りを行ない脚端には1.５㎝程度のヨコナデ調整を行なっている。色調は灰褐色を呈している。

(8)～(10)は，いずれもやや上げ底の底部片である。器壁が荒れておりヘラ磨きが認められる以外は不明な部分が多い。

(11)は底部径16.５㎝を測る器台形土器片と考えられる。外面はナデ調整，内面ヘラ削りを行なっている。色調は淡褐色を呈し，焼成良好である。

(12)は最大巾５㎝前後，厚さ１～1.３㎝を測る分銅型土製品である。表裏面とも非常に荒れており，文様等は観察できない。色調は淡褐色を呈している。

ピット18（半掘）

ピット17の西１ｍの場所に検出した。平面形態は不整長円形を呈し，長径3.８ｍ，短径2.１ｍ，深さ1.15ｍを測る。断面は袋状を呈し，ピット両端には浅い段状の掘り込みを伴なっている。

出土遺物（第24図－１～２）

(1)は頸部がく字形に外反する甕形土器片である。口縁端部はやや肥厚し，３本の凹線文が施されている。ヨコナデ調整は，外面で頸部下１㎝，内面で1.5㎝程度まで行なっている。

(2)の底部片は焼成やや悪く，内外面とも剥離している。

ピット19（未掘）

II区Ｂ地点中央部の南端に半分程度検出した。ピット内は５㎝程度掘り下げたのみで未掘で終了した。

出土遺物（第24図－３～11）

(3)～(7)は壺形土器片である。(3)は筒状の口縁部を持ち，内面に刷毛目を行なっている。色調は暗褐色を呈している。(4)・(5)は頸部より徐々に外反し口縁端部がやや肥厚している。(4)は口縁端部に２本の凹線文と斜方向のヘラ刻目文が施されている。(5)は頸部に３本の浅い凹線文が施されている。(6)・(7)は頸部よりく字形に外反し，口縁端部に２本の凹線文を施している。(6)は口縁端部に２本の浅い凹線文と斜方向のヘラ刻目文を施している。灰褐色を呈し焼成やや悪い。(7)は頸部下端よりヘラ削りを行なっている。色調は褐色を呈し焼成良好である。

(8)は甕形土器と考えられる破片である。頸部よりく字形に外反し，口縁端部でやや肥厚している。胴部内面はヘラ削り状の調整が認められる。色調は赤褐色を呈し，胎土焼成良好である。

(9)は外面ヘラ磨き調整の底部片である。

(10)～(11)は高杯形土器片である。(10)は器高約22㎝を測る高杯形土器である。杯部は内彎し口縁端部でやや肥厚している。脚部はなめらかに拡がり，脚端で上方にやや肥厚する。杯部内面は刷毛目調整を行なっている。脚部は外面でヘラ磨き，内面の柱状部分でしぼり痕があり，下端ではヘラ削りを行なっている。色調は褐色～暗褐色を呈し，焼成やや悪い。

(11)は水平な口縁部を持つ坏部片である。内面には１本の凸帯を施し，ヨコナデ調整を行なっている。口縁端部は下方に曲り２本の凹線文を施している。色調は淡褐色を呈し胎土焼成良好である。

ピット20（未掘）

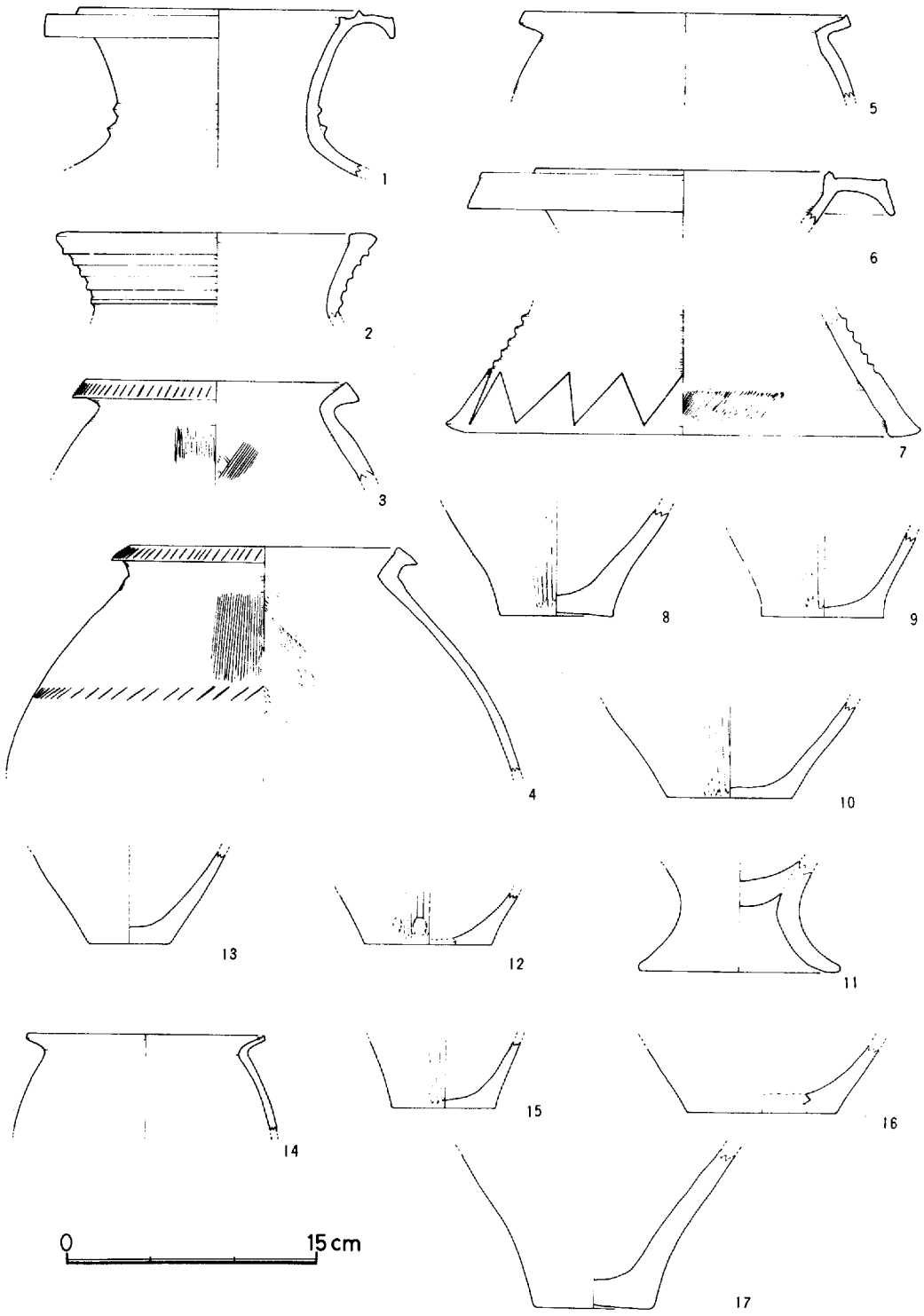
II区Ｂ地点の北西よりで検出した。平面形態は，径2.5ｍの円形を呈している。ピット内は上面を５㎝程度掘り下げたのみで未掘で終了した。

ピット21（未掘）

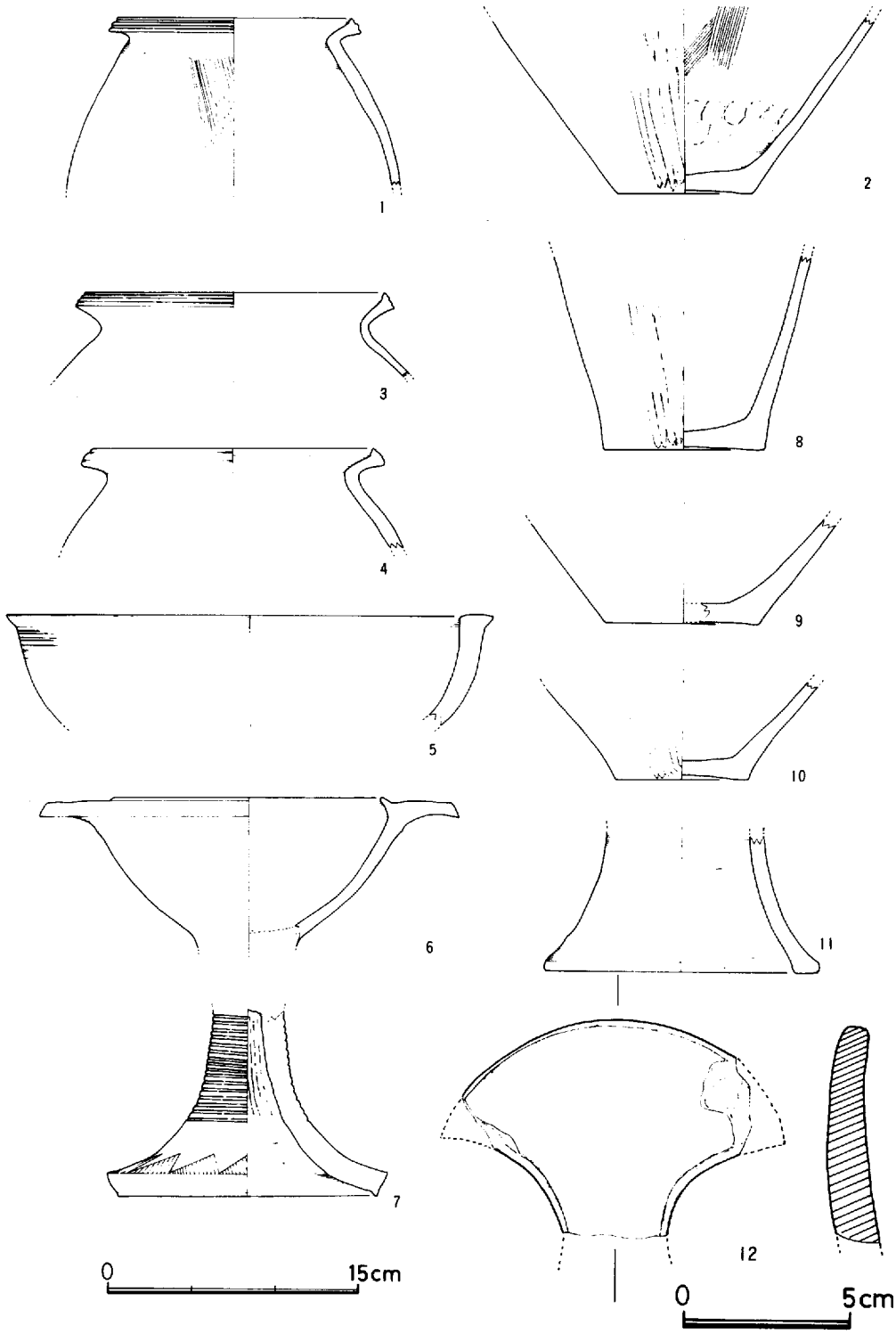
ピット20の南１ｍの場所に検出した。平面形態は径2.8ｍの円形を呈している。ピット20と同様，上面を５㎝程度掘り下げたのみ終了した。

ピット20・21出土遺物（第25図－１～６）

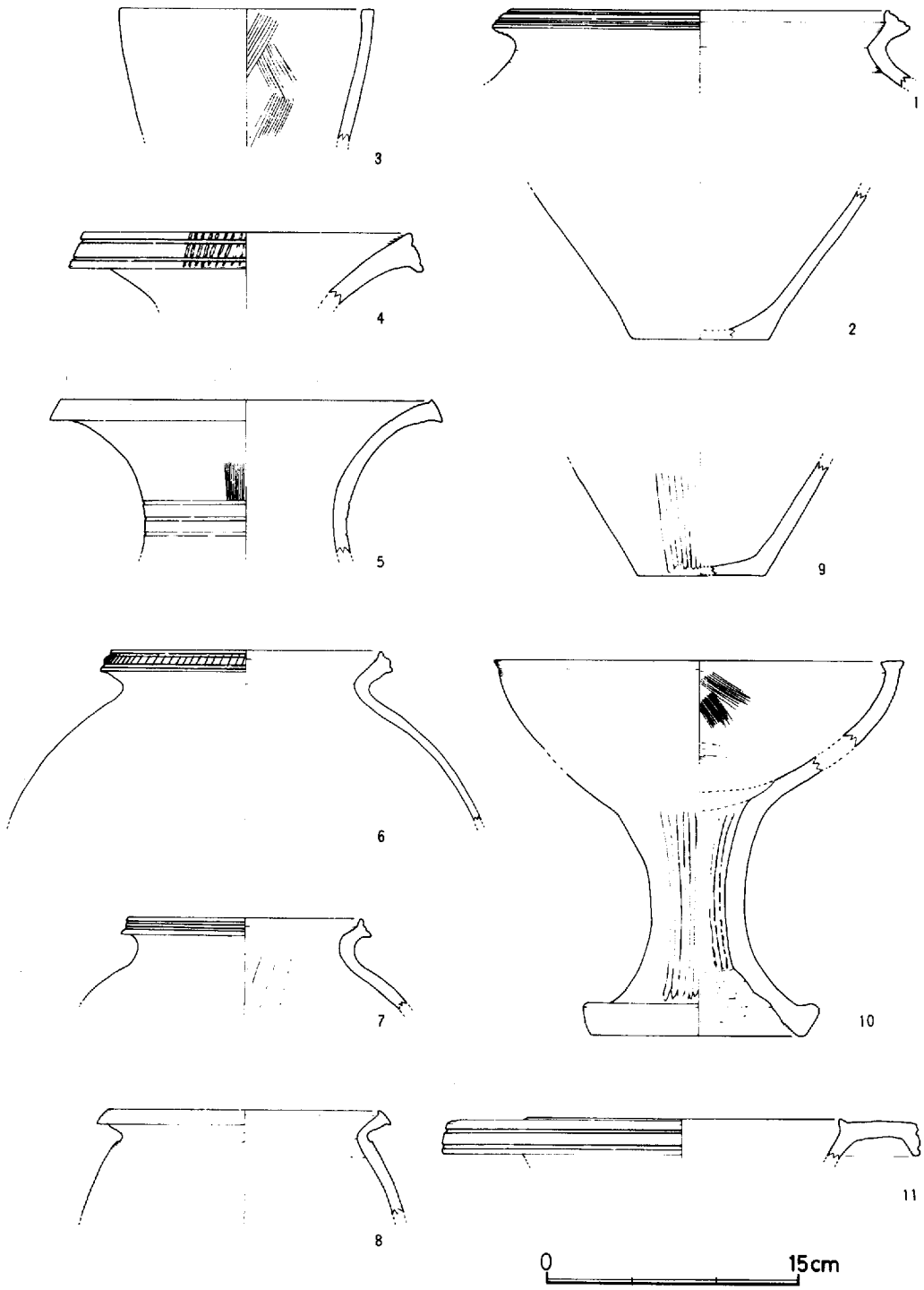
(1)は壺形土器の口縁部片である。口縁部外面には４本の凹線文を施している。色調は灰褐色を呈し，焼成やや悪い。(2)～(4)は甕形土器である。(2)・(3)は頸部より口縁部にかけてく字形に外反し，



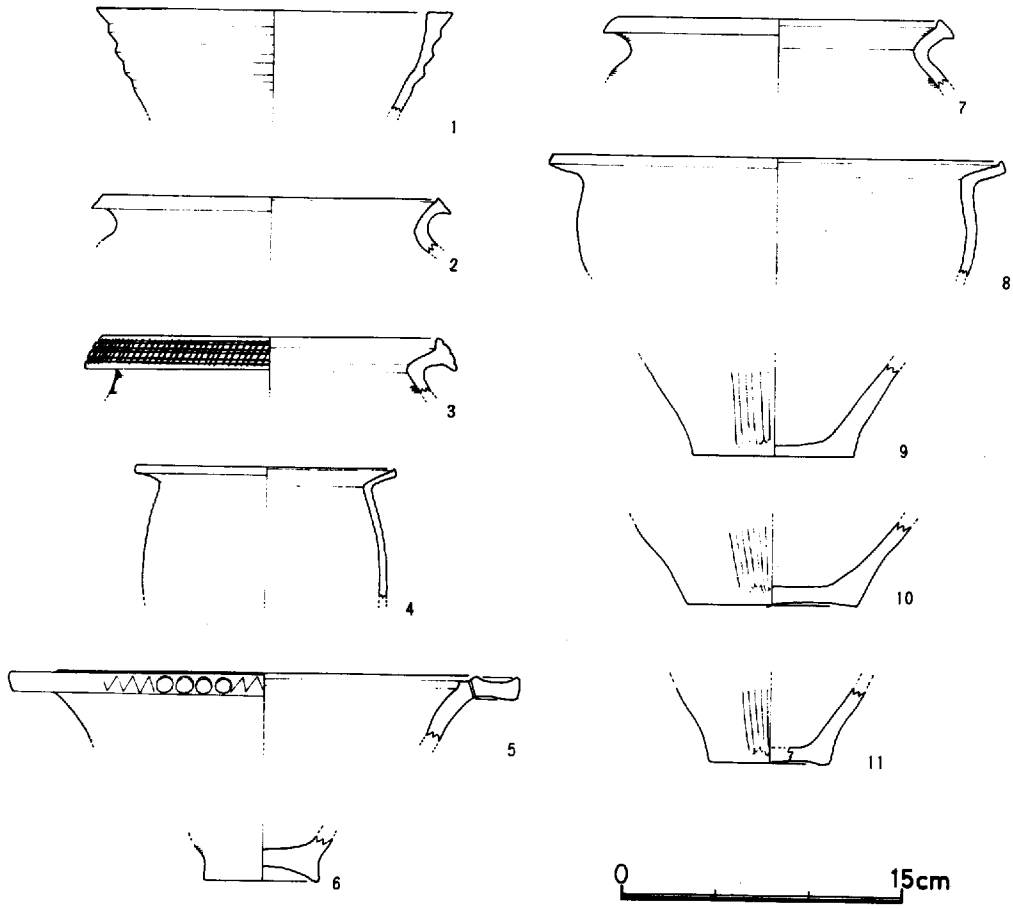
第２２図　弥生式土器10（１～13ピット12・14～17ピット13）



第２３図　弥生式土器11・分銅型土製品（１ピット15・２ピット16・３～12ピット17）



第２４図　弥生式土器12（１～２ピット18・３～11ピット19）

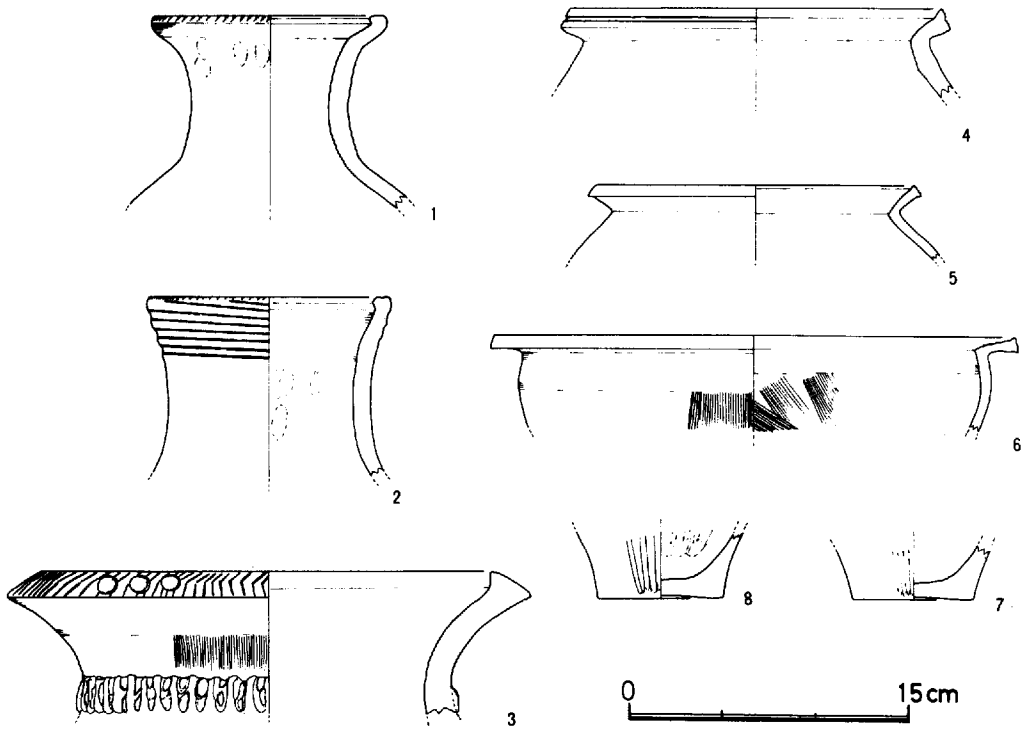


第２５図　弥生式土器13（１～６ピット20・21，７～11ピット22）

口縁端部でやや肥厚している。(3)は口縁端部に３本の凹線文と斜方向のヘラ刻み文を施している。器内外面ともヨコナデ調整を行なっている。(4)は頸部よりく字形に外反する薄手の甕形土器片である。色調は淡褐色を呈し焼成悪い。

(5)は高杯形土器片である。口縁端部に４個１対の円形浮文と鋸歯文を施している。口縁部には，上面に２本の三角凸帯を施し，２個１対の孔を８cm間隔に施している。焼成悪く，内外面とも剥離している。

(6)は0.8cm程度上げ底の底部片である。器外面はヨコナデ調整を施している。



第２６図　弥生式土器14（ピット24）

ピット22（完掘）

ピット21の南1.5ｍの場所に検出した。平面形態はほぼ円形を呈し，径1.9～２ｍ，深さ1.2ｍを測る。ピット内北側には掘り込み上面より40cmの場所に巾30～40cmのテラスが設けられている。底面はほぼ水平を保ち，西端部では半円形に巾１ｍ，奥ゆき0.6ｍえぐり込まれて袋状を呈している。ピット内堆積土は上～下層とも黒褐色を呈し，層の差は認められなかった。このピットはII区大形ピット群中唯一の完掘であった。

出土遺物（第25図７～11）

(7)は頸部がく字形に外反し，口縁端部でやや肥厚する甕形土器片である。内外面ともヨコナデ調整が認められる。

(8)は鉢形土器片である。頸部より大きく外反し，口縁端部でやや上方に拡張している。色調は暗褐色を呈し，焼成やや悪い。

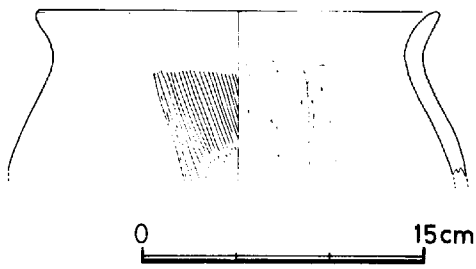
(9)・(10)の底部は，ともに外面にヘラ磨きが認められる。

ピット23（未掘）

II区Ｂ地点の東端に一部検出した。このピットも上面を５cm程度掘り下げたのみである。

ピット24（未掘）

II区Ｂ地点の中央から南端にかけて，長さ18m，巾1.2ｍ～5ｍの不整形を呈している。ピット８



第２７図　土師器（ピット14）

・17等と同様にピットの重複と考えられるが，上面を 5 cm程度掘り下げたのみである。

出土遺物（第26図－１～７）

(1)～(3)は壺形土器片である。(1)は頸部より口縁部にかけて徐々に外反し，口縁端部で内彎し，ヘラ刻み文を施している。外面は口縁部より頸部にかけてヨコナデ調整と指頭圧痕が認められる。内面はヨコナデ調整である。色調は外面赤褐色，内面灰褐色を呈し，焼成良好である。(2)は口径13cmを測る口縁部である。頸部より口縁部にかけてゆるく外反し，口縁端部にヘラ刻目文を施している。器外面は口縁端部に浅い凹線文と，口縁部に螺線状に浅い凹線文を施している。内面は口縁部より頸部上半にヨコナデを行ない，下半に指頭圧痕とナデ調整を行なっている。色調は赤褐色を呈している。(3)は頸部より徐々に外反し，口縁端部でやや肥厚する口縁部である。口縁端部には方向を異にするヘラ刻目文と，径１cm程度の円形浮文を施している。器外面は口縁部下２cm程度までヨコナデ調整を行ない，それ以下頸部まで，縦の刷毛目調整を行なっている。頸部には，巾２cmの指頭圧痕文凸帯を施している。色調は淡褐色を呈し，胎土焼成とも良好である。

(4)・(5)は頸部よりく字形に外反する甕形土器片である。(4)の口縁端部には１本の凹線文を施してている。(4)・(5)とも器内外面は剝離が著しく不明である。

(6)は鉢形土器片である。頸部より大きく外反し，L字形に近い形を呈している。ヨコナデ調整は外面で口縁部下３cmまで，内面で２cmまで行ない，それ以下は刷毛目調整を行なっている。色調は赤褐色を呈し，焼成良好である。

(7)・(8)は，いずれもやや上げ底の底部片で，外面ヘラ磨きを行なっている。(8)の内面にはヘラ削り調整が認められる。

ま と め

II区A・B地点出土のピット群は未掘又は半掘状態で終了した遺構がほとんどで，各遺構の詳細な検討は不可能であった。平面形態の特徴は，円形又は楕円形を呈したピットが比較的多く，ピット８・17の如く不整形を呈したピットも重複したものであった。断面観察の結果では袋状を呈したピットが多く，ピット22の如く部分的に袋状を呈した特異な遺構もみられた。各ピットは不充分な調査であったが，径1m前後と2.5m前後のやや大形のピットに大別できる。径１m前後の小形の円形，又は楕円形を呈すピットは，ほとんどが断面袋状又はフラスコ状を呈し，貯蔵用ピットとしての性格が強い。やや大形のピット１は断面U字形を呈しており，他のピットと性格を異にするとも考えられる。

各ピット出土の遺物は遺構上面又は，半掘での遺物がほとんどであり，又，層位的な取上げも行なってなく，かならずしも各遺構掲載の遺物が各々に伴うものとはいい難い。ピット14出土遺物は土師器が出土しており，明らかに時期が異なる。他の各ピット出土土器は，やや後出のものを含むピットも認められるが，全て弥生時代中期の土器が主体である。その中で一括資料としてある程度良好な状態であったピット1・5・6・7・8・9・11・12・22出土の遺物を取り上げる。

ピット1　壺形・甕形土器は口縁端部に櫛描列点文，ヘラ刻目文を施すものと，無文のものが認められる。壺形土器の頸部には凹線文を施している。甕形土器は口縁端部が上下に肥厚するものと，上方のみに肥厚する器形が認められる。高杯形土器は脚端に凹線文を施したものがあるが，杯部にはほとんど凹線文は施されていない。

ピット5　壺形・甕形土器ともに凹線文は認められない。短頸の壺形土器には口縁部に三角凸帯を貼付し，胴部に櫛描波状文，直線文を施している。甕形土器の口縁端部はほとんど肥厚していない。

ピット6　壺形土器は頸部に指頭圧痕文凸帯を施し，胴部に櫛描波状文，直線文を施している。甕形土器の口縁端部はほとんど肥厚していない。

ピット7　壺形・甕形土器とも凹線文は認められない。壺形土器の口縁端部は断面三角形状に肥厚し，ヘラ刻目文を施し，胴部に櫛描波状文を施している。甕形土器の口縁部はほとんど肥厚していない。

ピット8　壺形・甕形土器は凹線文が顕著に認められるものと，ほとんど認められない器形を伴っている。

ピット9　甕形土器は口縁端部が断面三角形状に肥厚し，円形浮文，ヘラ刻目文を施している。

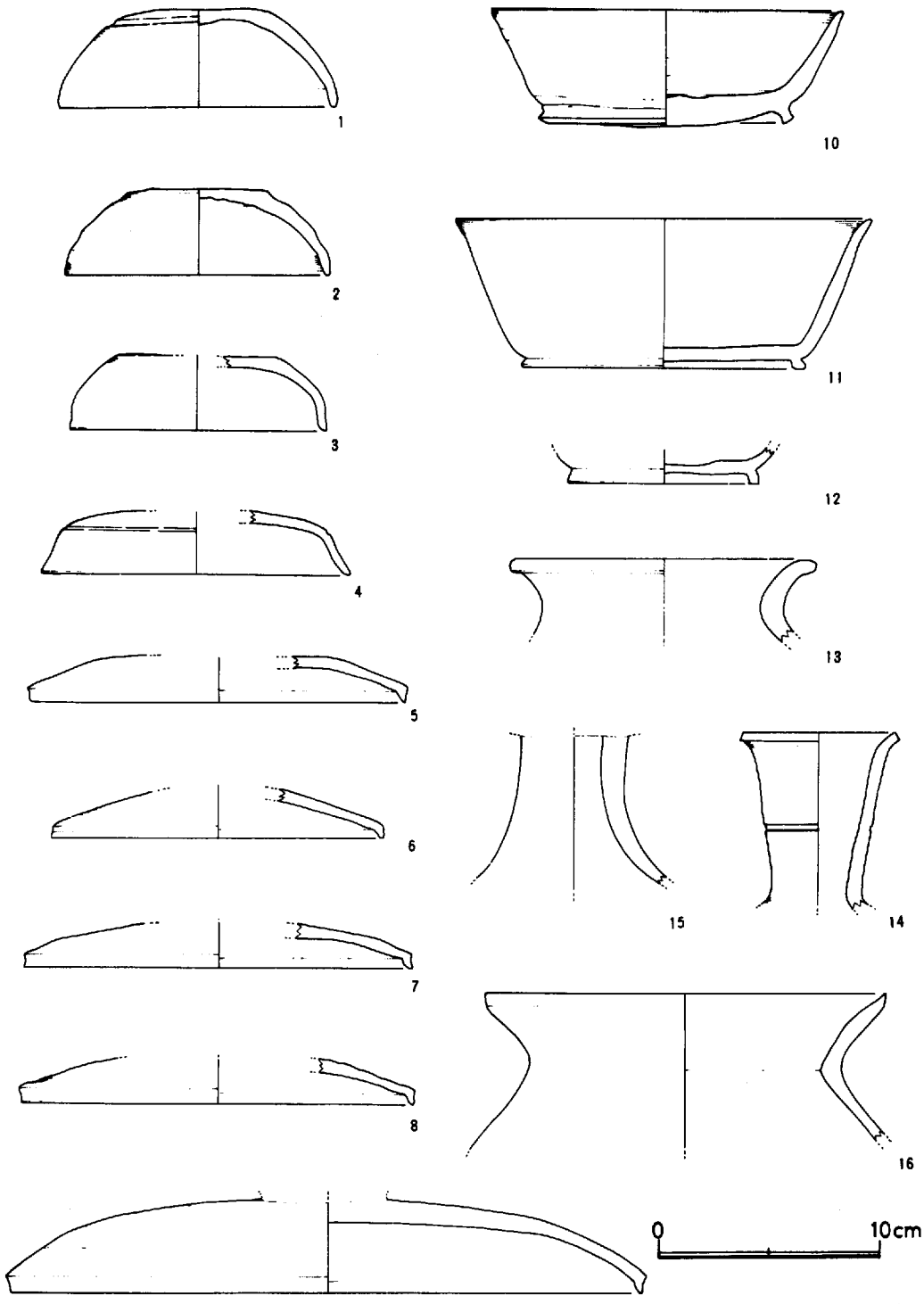
ピット11　壺形・甕形土器は口縁部及び胴部にヘラ刻目文・櫛描列点文を施しており，凹線文及び三角凸帯を施したものが一部認められる。

ピット12　壺形・甕形土器は凹線文を施したものと無文のもの，三角凸帯を貼付したものがみられる。頸部がく字形に外反した口縁部は上方又は上・下方に肥厚している。器台形土器には鋸歯文が施されている。

ピット22　甕形・鉢形土器ともに頸部はく字形に外反し，口縁端部は上方，又は下方に肥厚している。

他の各ピットは遺物の出土が少量のものや，遺構上面の出土例が多く，かならずしも各ピットに伴うものとはいい難い。しかし，各器形とも凹線文が頸部及び口縁端部に顕著に認められるものと，無文のものがあり，前述したピットと大差のないものと考えられる。

〔山磨〕



第２８図　須恵器　土師器（溝６）

建 物 4 （第２９図）

II区A地点の南に検出した桁行５間（11.24～11.30ｍ）×梁行２間（3.55～3.65ｍ）の掘立柱建物である。柱穴掘り方は一辺70cm前後の隅丸方形を基本とし，深さ35～70cmを測る。掘り方埋土は茶褐色土と茶色土を主体としている。柱痕址は西側桁行の北より３本目がグライ化により一部木質が残存している以外は炭混りの茶褐色～濃茶褐色を呈しており，直径20cm前後の柱であったと推定される。

梁行柱間寸法は175～185cmとやや差がみられるが，平均値で180cmを測り6尺等間と考えられる。桁行柱間寸柱は205～260cmと大差があるが，北側３間が205～220cm（平均212cm）両側2間が 235～260cm（平均245cm）を測り両桁行間とも相対しており，ほぼ１尺の差が認められる。北側７尺，南側８尺等間と考えられる。

建物４は１尺30～30.6cmを基本として，梁行６尺等間，桁行７，８尺等間と３種類の柱間寸法を使用して設計されたと考えられる。

出土遺物は柱穴内より，須恵器，土師器，弥生式土器及び平瓦片が出土した。ほとんどが小破片で図化可能であった２点を示した。

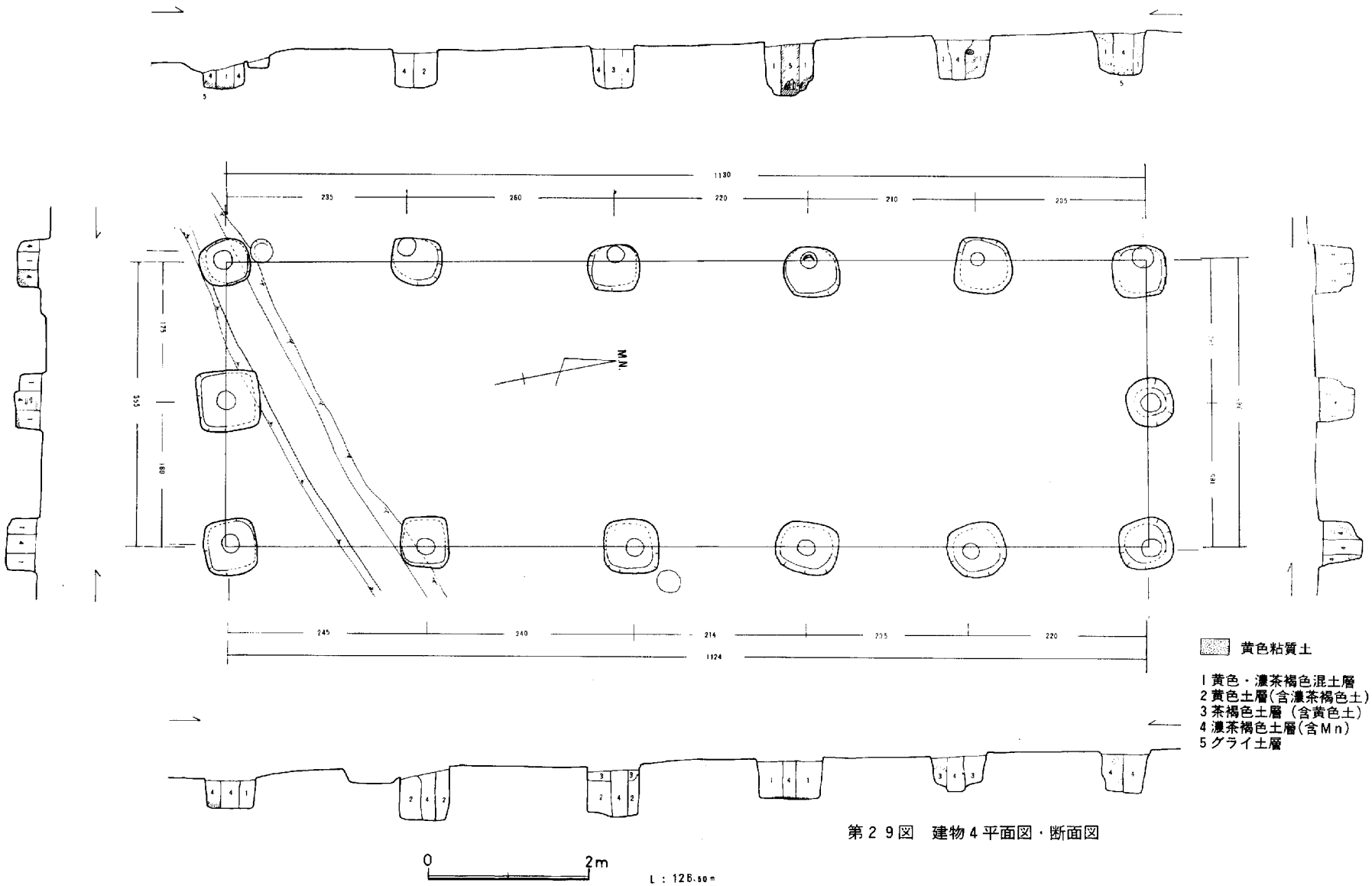
杯蓋（第30図－１）は，天井部に偏平なつまみが付いている。色調は青灰色を呈し，胎土，焼成とも良好である。杯身（第30図－２）は，底部に高台を貼り付けている。色調は灰白色を呈し，焼成やや悪い。

建 物 5 （第31・32図）

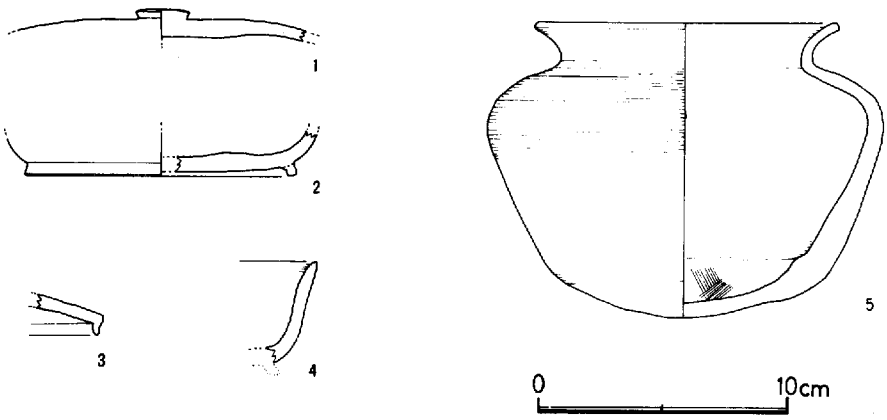
II区A地点の中央に検出した東西２間（約3.8ｍ）×南北２間（4.4ｍ）で東柱を有す掘立柱建物である。建物４の北端から 6.6ｍの間隔を置き同一線上に位置し，方向も同一である。掘り方は円形～隅丸方形を呈し，径60cm前後，もしくは一辺70cm前後，深さ60cm前後を測る。掘り方埋土は黄色,茶褐色～黒茶褐色を主体とした混り土である。柱痕址は炭を含む濃茶褐色が主体で径20～30cmの柱であったと推定される。建物東柱の掘り方は一辺80cmと最大の掘り方で柱痕址の底部には長径30cm×短径15cm，厚さ７～８cmの扁平な礎石が置かれていた。東西柱間寸法は185～195cmとやや差が認められるが，平均で187cmを測り，6尺等間と考えられる。南北柱間寸法は210～223cmと東西方向と同様やや差が認められるが平均で217cmを測り，７尺等間と考えられる。

出土遺物は柱穴内より，須恵器，土師器，弥生式土器及び鉄滓が出土した。須恵器は杯甕，壺の器形が認められた。図化可能であった３点を示した。

杯蓋（第30図－３）は，かえりは認められない。杯（第30図－３・４）は，いづれも小破片で，口径は計測できなかった。杯蓋にはかえりは認められない。短頸壺（第30図－５）は，ほぼ完形品で南西隅の柱穴掘り方の埋土内より出土した。口縁は頸部よりく字形に外反し，口縁端部に丸味を持たせている。肩はよく張り，頸部より肩部にかけて櫛描状の横線を施している。底部は丸底で凹



第２９図　建物４平面図・断面図



第３０図　須恵器（１～２建物４・３～５建物５）

凸があり，やや整形を異にしている。

建　物　6　（第31図）

II区Ｂ地点で建物５と重複して検出した。規模は北東－南西方向約360㎝，北西→南東方向約390㎝を測る２×２間の掘立柱建物である。柱穴掘り方は一辺60～70㎝の隅丸方形を呈し，深さ30～50㎝を測る。掘り方埋土は茶褐色，黒茶褐色を主体とした混り土で，柱痕址はほとんど認められなかった。北東－南西柱間寸法は約180㎝前後，北西－南東方向は約190㎝前後を測り，ほぼ６尺等間の設計と考えられる。

出土遺物は少量の須恵器，土師器，弥生式土器が出土した。全て少砂片で図化不可能であった。

〔山磨〕

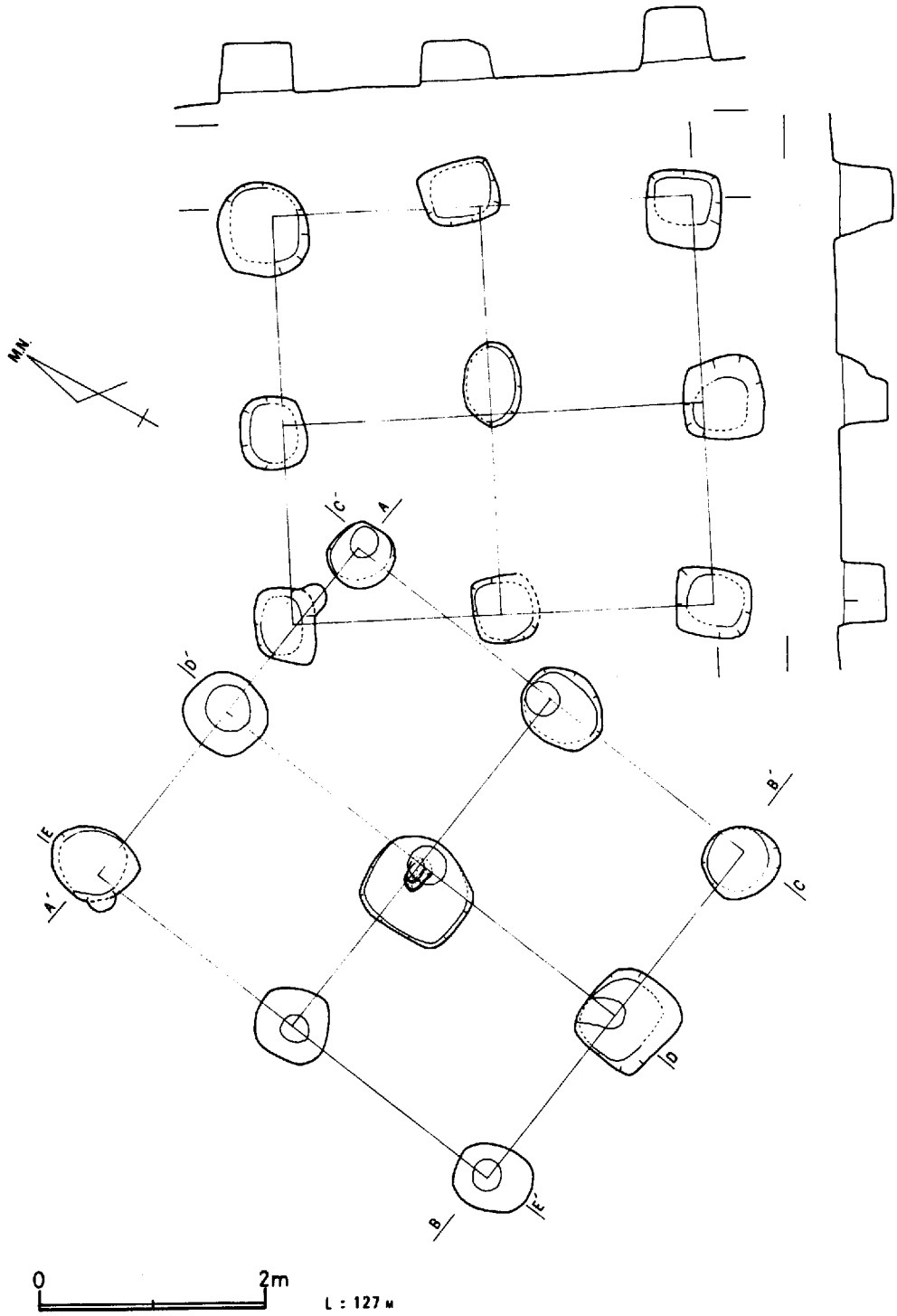
建　物　7　（第33図）

平面形が，ほぼ正方形を呈す２間×２間の建物である。柱穴は，周囲へ８本と中心へ１本の計９本の柱穴よりなる。柱穴間は，北列・南列とも，東より1.45ｍ，1.45ｍを測る。また東列は，北より1.70ｍ，1.20ｍを測り，西列は同じく北より1.40ｍ，1.50ｍを測り，東列において中央の柱穴が南側にずれている。

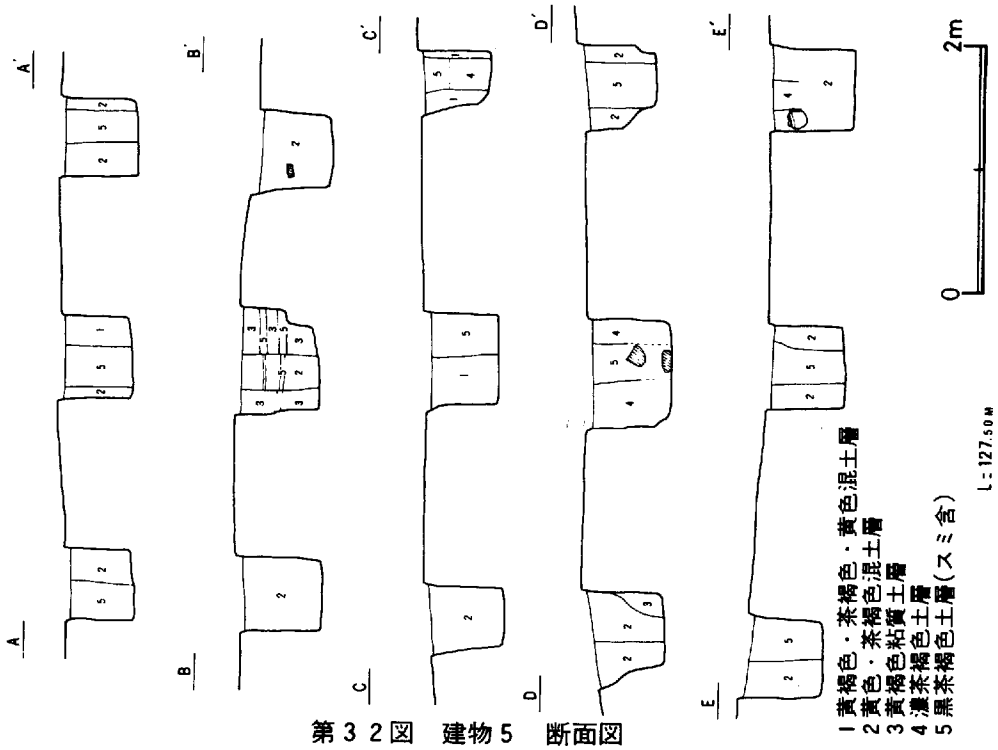
掘り方の形は一定しないが，方形が多く，一辺0.6ｍから0.8ｍを測る。検出した掘り方の深さは浅いもので0.2ｍ，深いもので0.35ｍを測る。その中にあって，中心の掘り方は，もっとも浅く，0.1ｍを測る。建物の方向は磁北に対しＮ－29°－Ｗである。

建　物　8　（第34図）

平面形がほぼ正方形を呈する２間×２間の建物である。柱穴は周囲の８本と中心の１本計９本よりなる。柱穴間は，北列・南列ともに東より1.80ｍ，1.50ｍを測る。また，東列・西列は北より1.80ｍ，1.80ｍを測る。



第３１図　建物５・６平面図・断面図



第３２図　建物５　断面図

掘り方の形は，ほぼ方形を呈し，一辺は0.6ｍから0.8ｍを測る。検出した掘り方の深さは，0.35ｍから0.5ｍを測る。建物の方向は磁北に対しＮ－22°－Ｗである。

建　物　9　（第35図）

平面形が，長方形を呈する２間×３間の建物である。建物は，10本の柱穴よりなるが，北東隅の柱穴は後世の削平により消滅しており検出できなかった。柱穴間の距離は，北側は，残存する柱穴間で1.80ｍを測り，南列は北から1.80ｍを測る。また東列は，南より1.80ｍ，1.80ｍを測り，西列は南より1.80ｍ，1.50m，1.80ｍを測る。

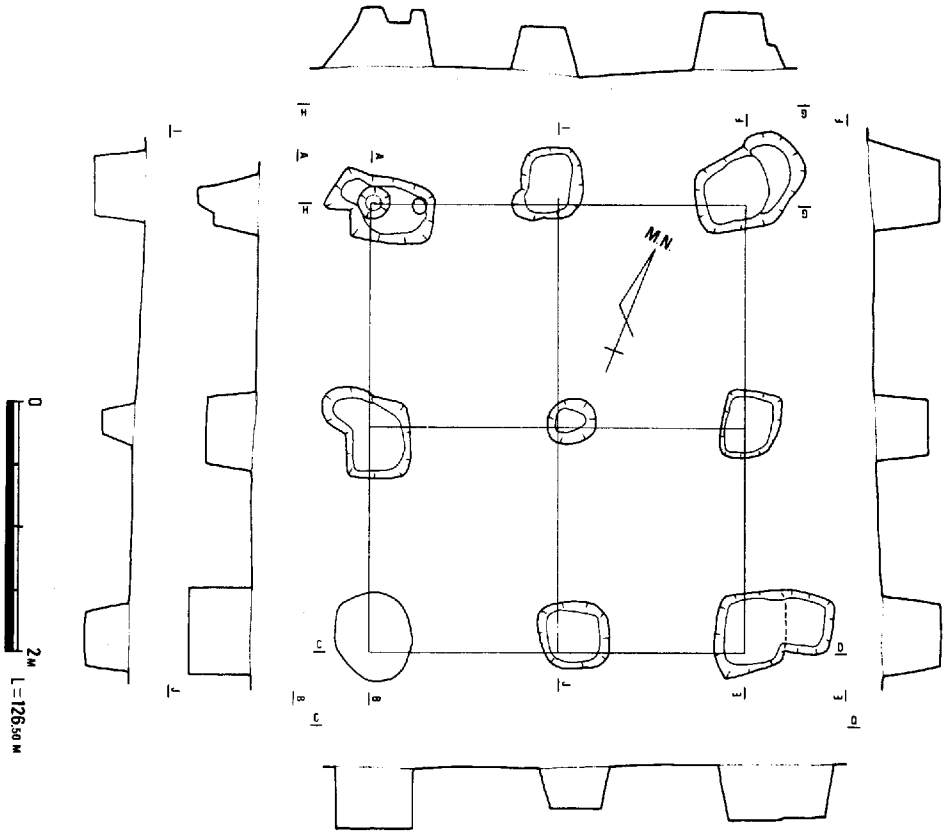
掘り方の形は，方形を基本としており，概略0.5ｍ前後を測る。掘り方の検出した深さは0.2ｍ前後で比較的浅い。建物の方向は，磁北に対しＮ－45°－Ｗである。

建　物　10　（第35図）

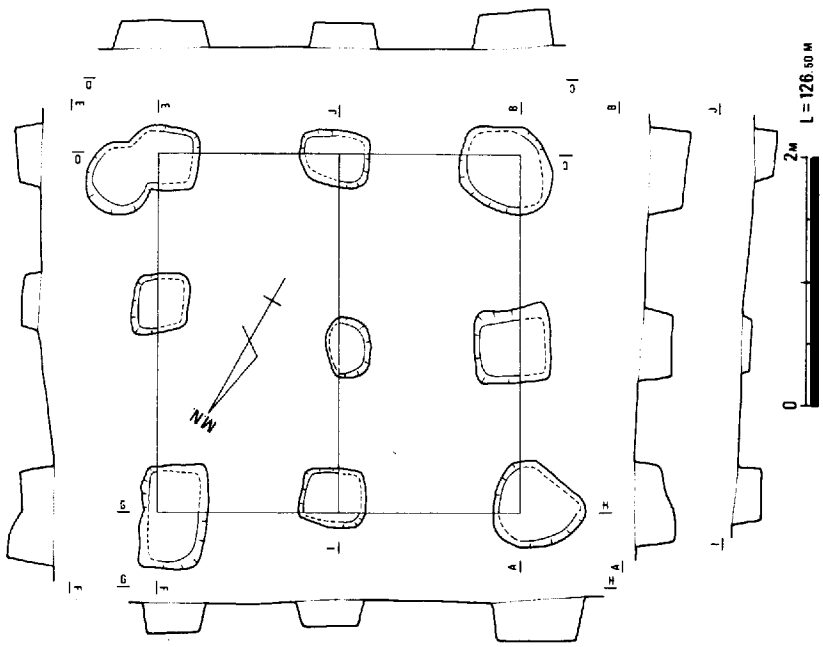
平面形がほぼ正方形を呈する２間×２間の建物である。柱穴間の距離は，北列が東から1.50ｍ，0.90ｍ，南列が東から1.20ｍ，1.20ｍを測る。また，東列は北から1.20ｍ，1.20ｍ，西列は北から1.20ｍ，1.20ｍを測る。以上のように，北列の中央の柱穴が若干西よりに造られている。

掘り方の形は方形で,その一辺は0.4ｍ前後を測る。検出した掘り方の深さは約0.2ｍを測る。

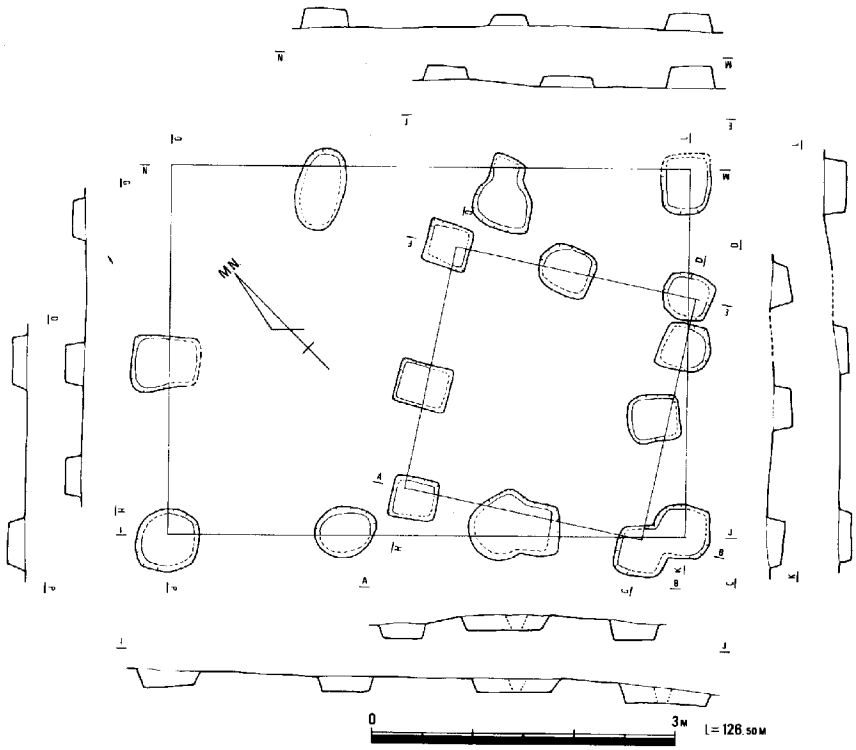
建物の方向は，磁北に対しＮ－33°31′－Ｗである。



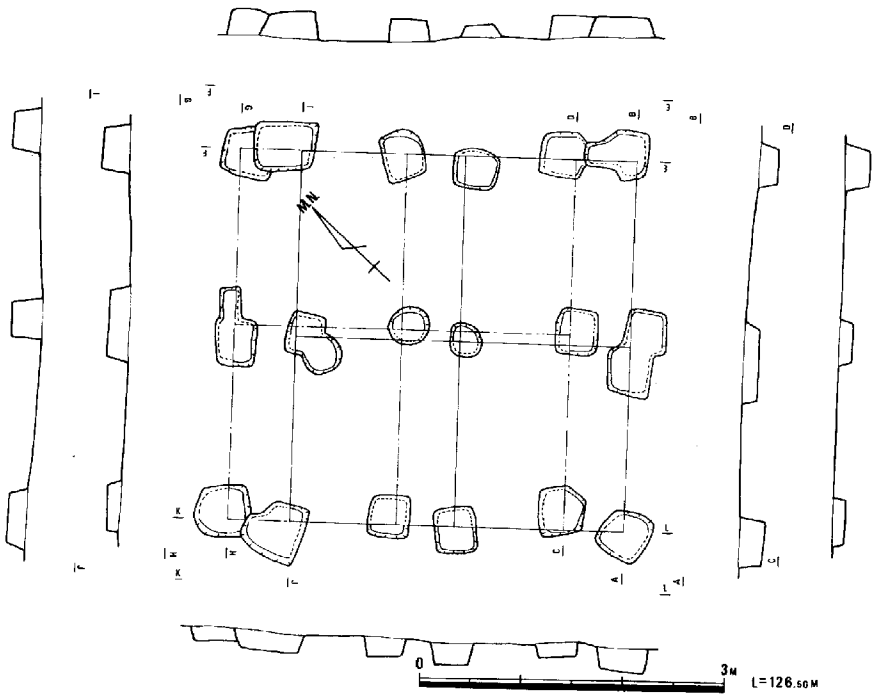
第３３図　建物７平面図・断面図



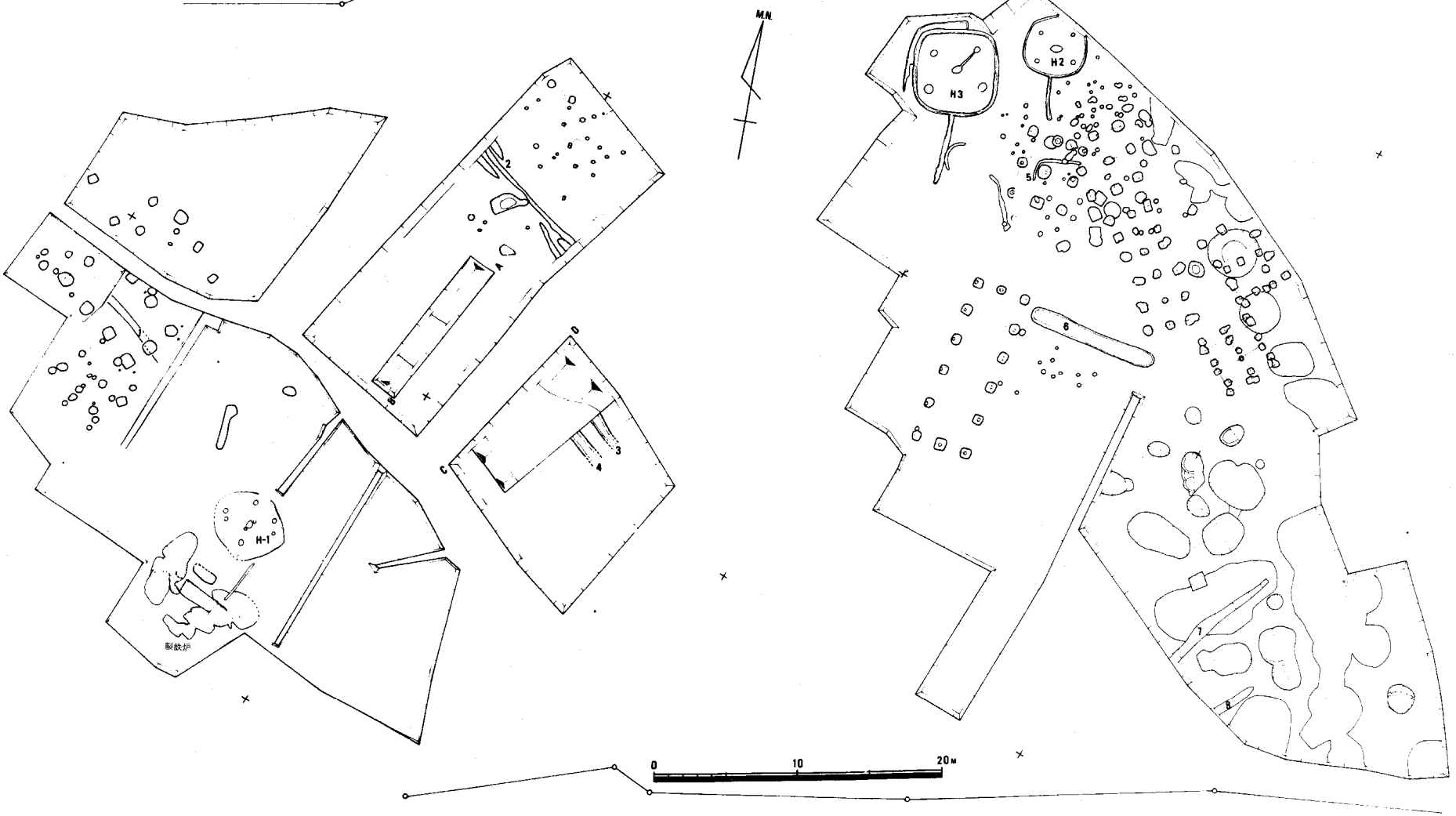
第３４図　建物８平面図・断面図



第３５図　建物９・10　平面図・断面図



第３６図　建物11・12平面図・断面図



第37図　遺構全体図

建物９・10は，一部切り合いを示しているが，その前後関係は不明である。しかし，この２棟の建物は相接した時期のものと考えられる。

建 物 11 （第36図）

平面形がほぼ正方形を呈する２間×２間の建物である。建物は，周囲に８本の柱穴と中心に１本の計９本の柱穴よりなる。柱穴間の距離は，北列が東より1.80ｍ，1.80ｍ，南列が東より1.80ｍ，1.80ｍを測る。また，東例は北より1.60ｍ，1.70ｍ，西列は北より1.60ｍ，1.70ｍを測る。

掘り方の形は，ほぼ方形を呈し，一辺が0.4ｍから0.6ｍを測る。検出した掘り方の深さは平均約0.2ｍを測る。建物の方向は磁北に対しＮ－42°－Ｗである。

建 物 12 （第36図）

平面形が，ほぼ正方形を呈する２間×２間の建物である。建物は，周囲に８本の柱穴と中心に１本の計９本の柱穴よりなる。各柱穴間の距離は，北列が東より1.70ｍ，1.90ｍ，南列が東より1.70ｍ，1.90ｍを測る。また，東列が北より1.60ｍ，1.70ｍ，西列が同じく北より1.60ｍ，1.70ｍを測る。

掘り方の形は，ほぼ方形を呈し，一辺が0.4ｍから0.5ｍを測る。検出した掘り方の深さは，平均0.2ｍである。建物の方向は磁北に対しＮ－42°－Ｗである。

建物11と建物12は一部で切り合いを示している。それの観察により，建物11は建物12より新しいものである。〔井上〕

第3節 遺　物

縄文式土器

Ⅰ区D地点の谷下層より3点の出土が認められた。ともに小破片であるが同一個体とみられる。土器片の特徴は，口縁近くに凸帯文を貼付し，口縁端部及び凸帯上に刻み目を施している。胎土はやや粗く，淡褐色を呈している。縄文時代晩期の土器片と考えられる。器面の摩滅及び小片のため図化不可能であった。〔山磨〕

弥生式土器

弥生式土器はⅠ区B・C・D地点の谷，及びⅡ区B地点のピット群検出地点とでほとんどが出土した。そのうち弥生中期の土器が90%以上を占め，後期の土器は少量であった。

中期弥生式土器

壺形土器（第38図－1～8）は，頸部より徐々に外反し，口縁端部で上下に肥厚し，凹線文を頸部及び口縁端部に施した例が多い。他に頸部に三角凸帯を貼付した器形と頸部がく字形に外反し，口縁端部がやや肥厚した器形がみられる。底部は器面が剥離したものが多く詳細には検討できない。

甕形土器（第39図）は，頸部がく字形に外反したのみのものと，上方または下方に肥厚した器形がみられる。口縁端部が肥厚した器形には1本から数本の凹線文が施された例が多い。

高杯形土器（第40図－1～17）は，杯部が腕形を呈し，口縁端部がやや肥厚して水平面を持つ器形が多い。他に口縁部が直立しているものや，口縁端部の外側につば状の水平面を持つ器形がみられる。杯部外面には凹線文を施したものが比較的外く，三角凸帯を貼付したものや無文のものもみられる。

器台形土器（第40図－20・21）は，いづれも口縁部に水平面を持ち口縁端部が下方に大きく垂れ下るものである。⑳は口縁端部外面にヘラ刻目文を施している。㉑は口縁端部外面に凹線文，ヘラ描き斜線文を施した後に円形浮文を貼付している。

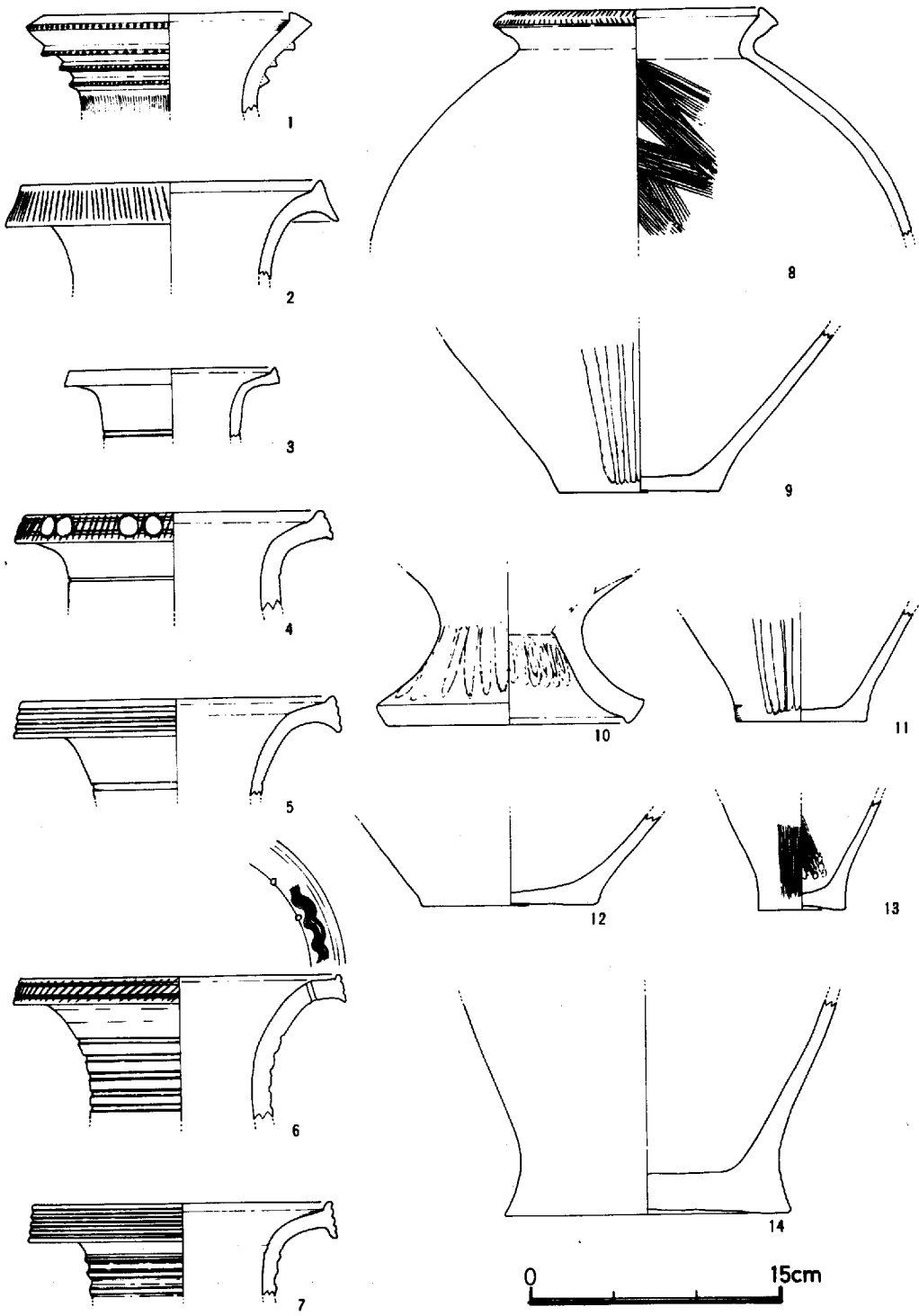
後期弥生式土器・その他（第41図）

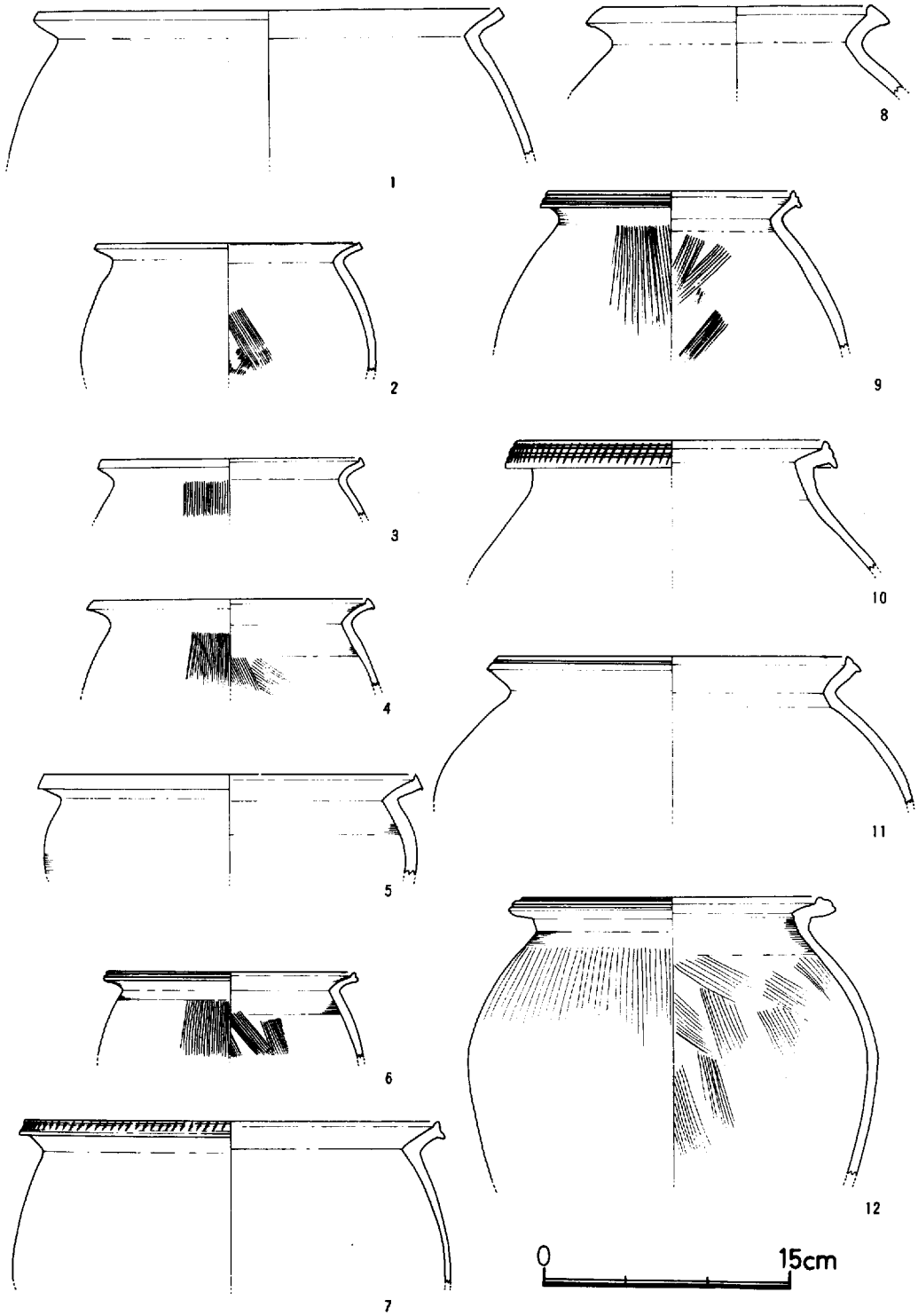
壺形土器（1～6）は，頸部よりく字形に外反し，口縁端部に凹線文を数条施した器形と，口縁端部を上方にやや拡張したものが主である。胴部内面はいづれも頸部下端よりヘラ削りを行っている。

高杯形土器（8～10）の杯部は，口縁部が直立したのち外反している。脚部は脚端が大きくひろがり，4孔を穿っている。

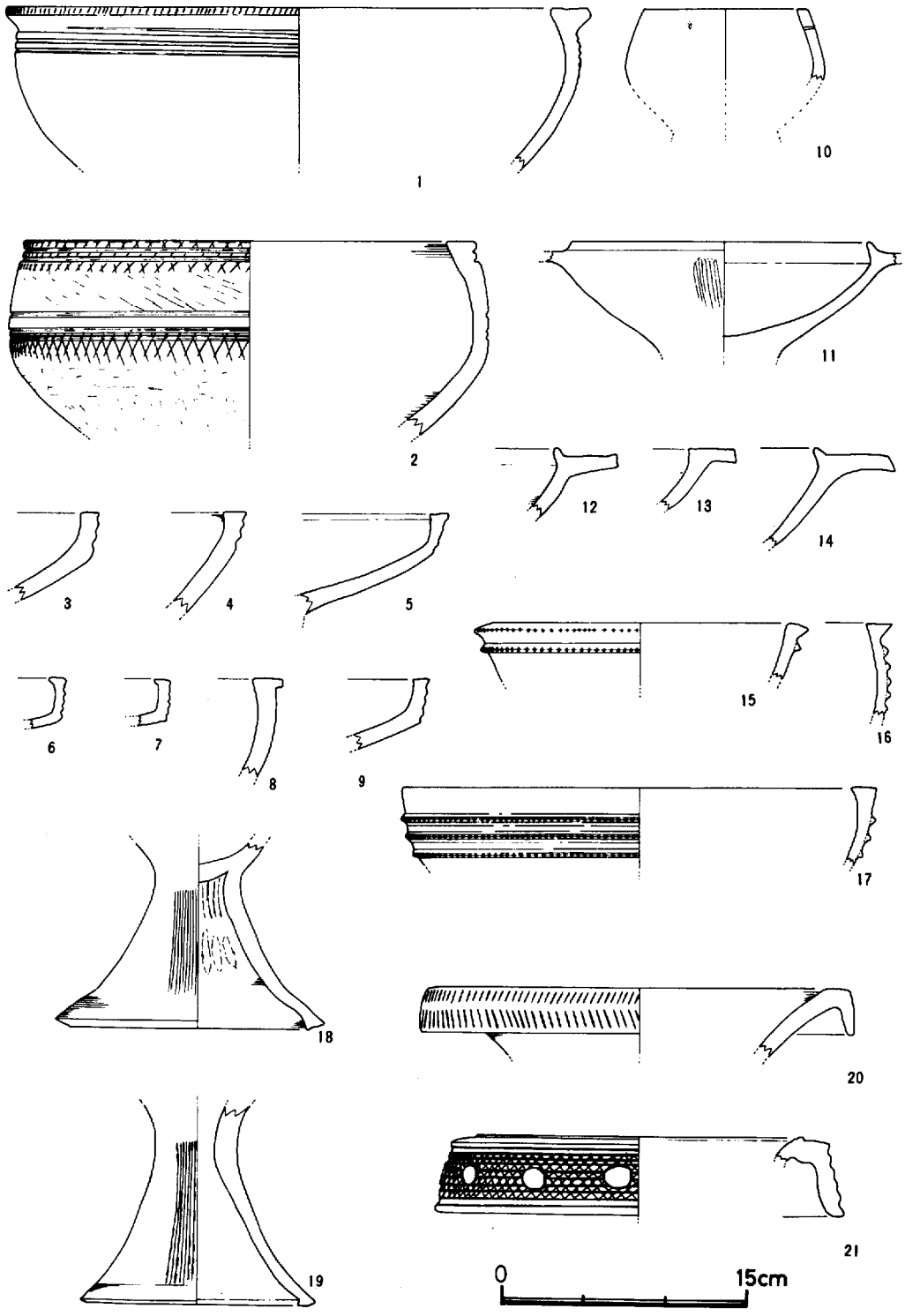
台付腕（7）には，口縁部に凹線文を1本施している。

（第41図－11～13）は，やや後出の土器である。高杯形土器⑪は，杯部に稜線を持ち大きく外反した器形である。⑫は，底部中央を穿孔している。小形丸底土器⑬は，口縁部がやや外反して，底部がやや突出した特徴を示している。〔山磨〕

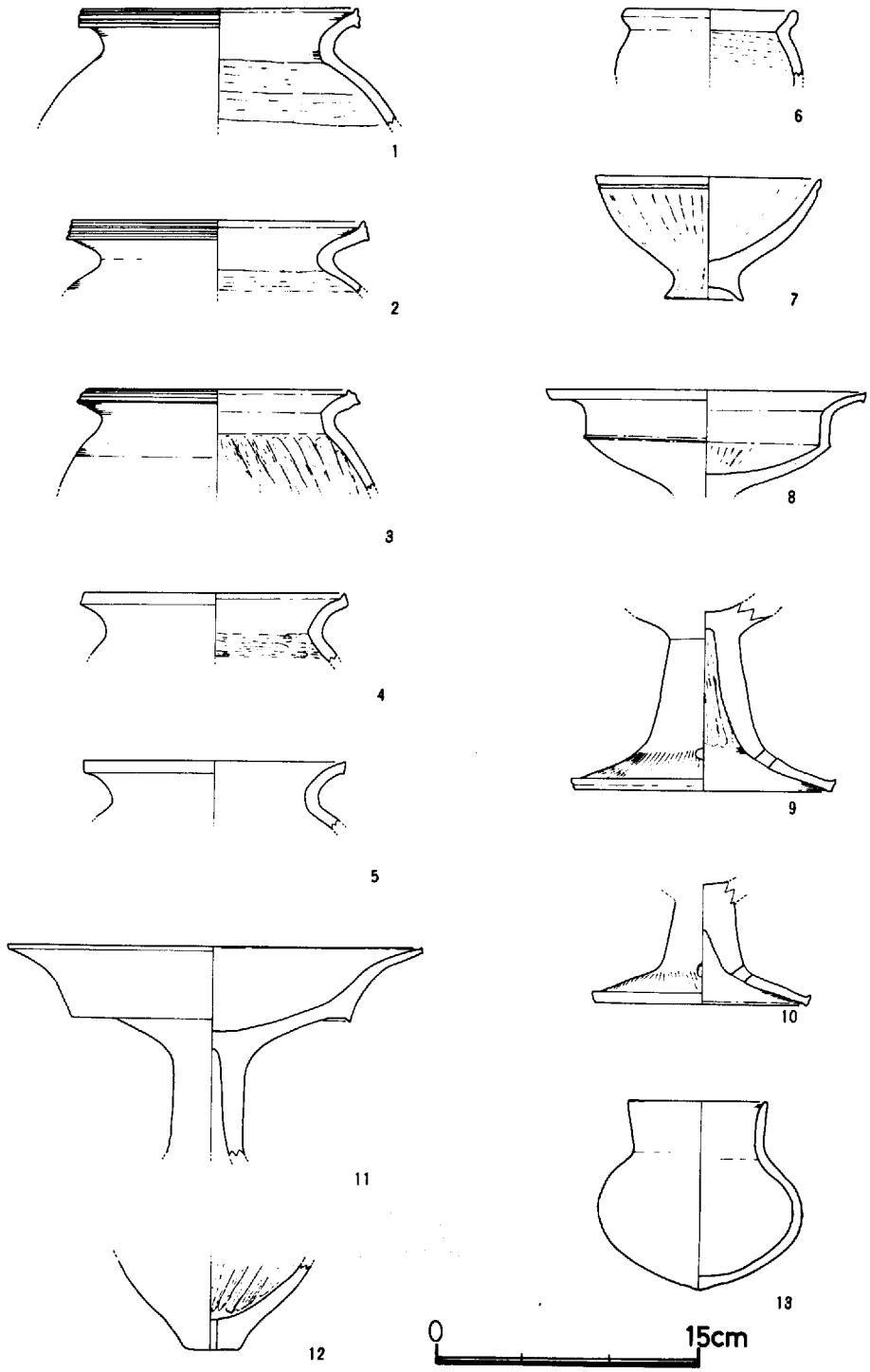

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
0
15cm



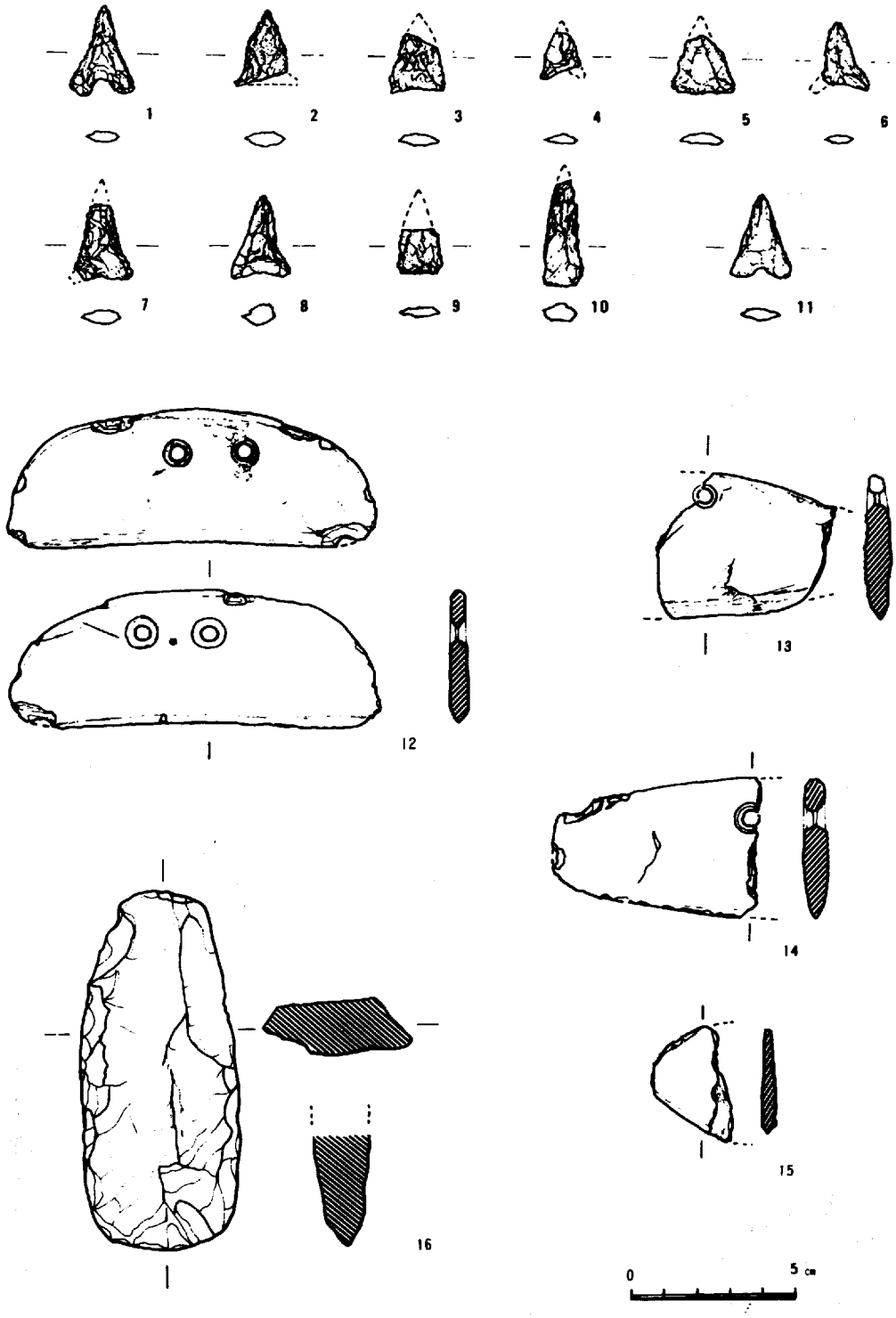
第３９図　弥生式土器16



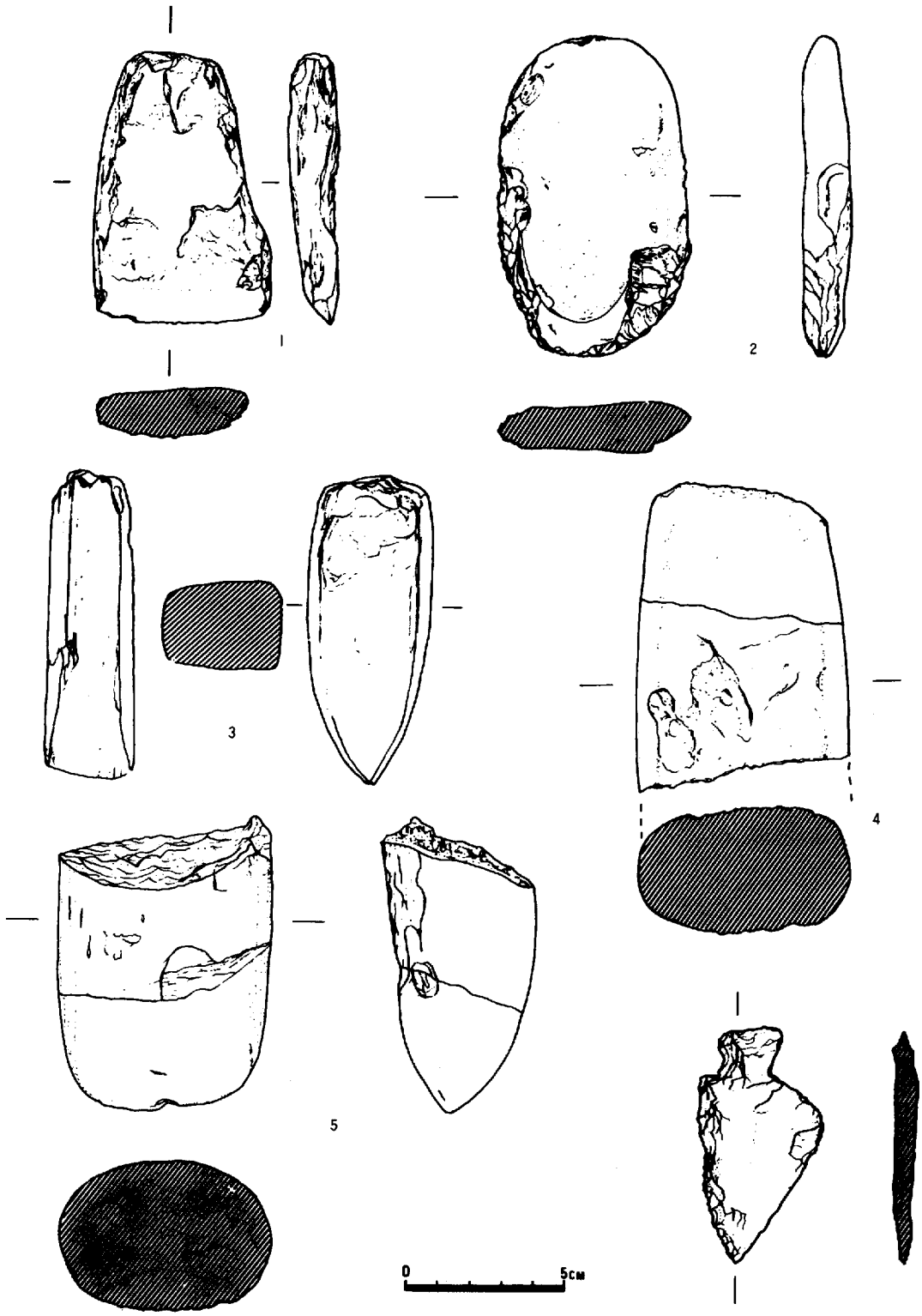
第４０図　弥生式土器17



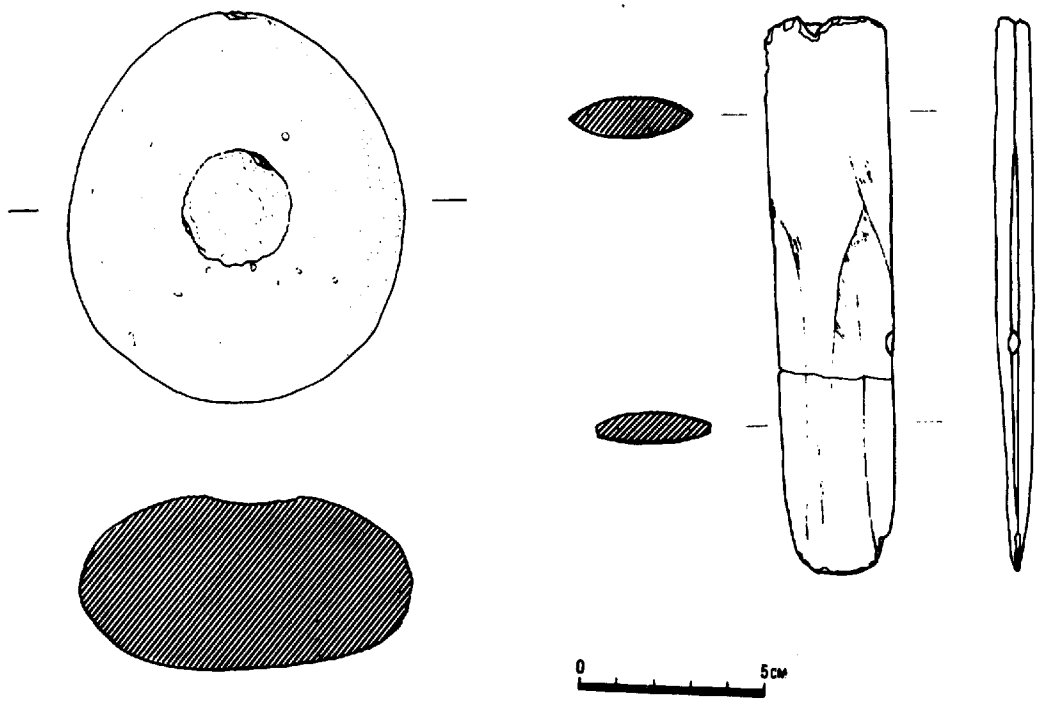
第４１図　弥生式土器18



第42－Ⅰ図　石器Ⅰ



第42－2図　石器2



第42－3図　石器3

石　　器

本遺跡発掘調査区域のほぼ全面から出土している。剝片もあわせると約200点近くあるが，いわゆる石器として明らかなものとしては約30点である。その大半は，遺構に伴わぬ表面採集あるいは発掘による揚土中より出土したものである。遺構に伴う石器としては1号住居址出土の3点（磨製石剣・石斧・石庖丁）と，3号ピットよりの2点（凹み石・石鏃）が挙げられる。

表採遺物について，明確な時期を与えることは困難であるが，常識的な判断を下せるもの以外の石器すなわち石鏃・打製石斧については，出土土器の上限である縄文晩期に一部比定できるであろうが，更に遡る可能性もある。大別して，縄文時代・弥生時代の2時期の石器が出土していることはほぼ確実であろう。

以下，主な石器について略述しておく。

(a) 石　鏃（第42－1図1～11）

出土点数は10数点であるが，そのうち11点の実測図を掲げる。11をのぞき他はすべてサヌカイト

製である。第42図－1・2・6・7などは縄文時代に比定できる形態を有するものである。10は3号ピット出土した細形の凸基無茎式の石鏃である。石鏃については，サヌカイト製が多いため風化度の相違が認められ，灰黒色ないしは黒色の本来の色調を失って白っぽい茶褐色を呈するものがみられる。おそらく，それらが縄文時代に比定できる石　であろう。第42－1図－1・2・6・7などに以上のような所見が認められる。

(b) 石庖丁（第42－1図　12～15）

第42－1図－12は，1号住居址内覆土中より出土した完形品である。石材は結晶片岩である。裏面の双孔の間に小孔が穿孔されかけた痕跡を残しているが貫通には至らない。第42－1図－13は，第1次調査によって出土した復元長約14cmと推定される破片である。(石質は不明である)第42－1図14は，1区A地点出土の破片で石質は緑泥片岩である。刃部は段状の顕著な線を形成せず腹部よりゆるやかに形づくられている。第42－1図－15は，表採の端部片で緑泥片岩製のものである。13・14に比べて軟質で剥離性に富む。

以上4点の石庖丁は，いずれも弥生時代中期～後期に比定することができる遺物である。

(c) 石　斧（第42－1図　16・第42－2図　1～15）

第42－1図－16は安山岩系の石を用いた打製石斧である。この石材は本遺跡調査区の地山すなわち第3紀層にはまりこんでいる状態で多々みかけたものである。サヌカイトにくらべるとやや軟質で剥離面は丸味を帯びている。この石斧は第1次調査において，弥生式土器と共に出土しているが，縄文時代それも晩期に比定されるものと考えられる。(II区出土)

第42－2図－1は扁平片刃石斧である。石材は石英閃緑岩で，津山市押入西遺跡(註1)などで同質の類品をみることができる。第42－2図－2は扁平両刃石斧と呼称しているものであるが，刃部以外さほど加工痕が認められない。扁平な河原石を簡単に加工しただけの，実に単純な石器である。（第42－2図－1　1区B地点出土。第42－2図－2　1区A地点出土）

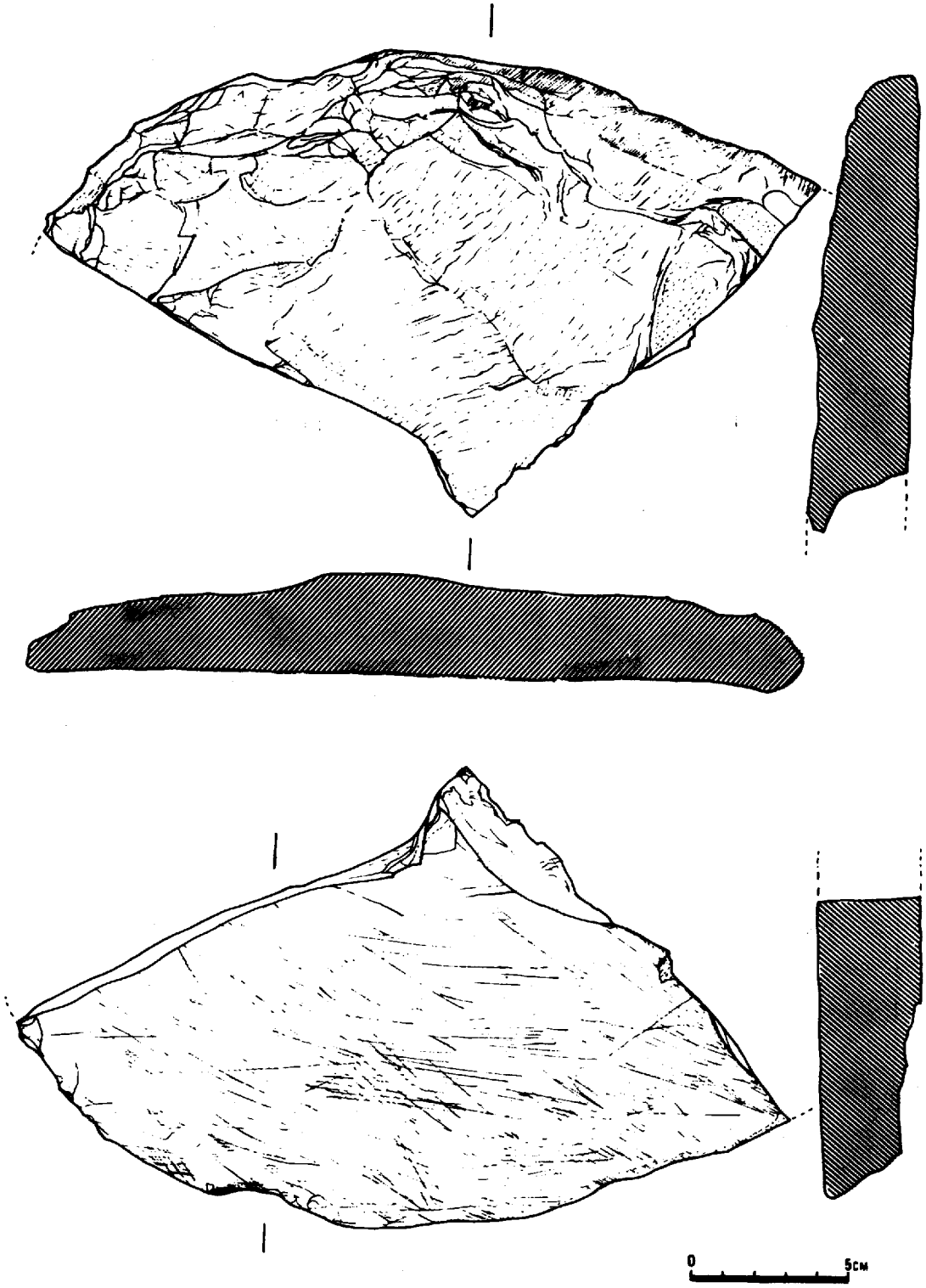
第42－2図－3は柱状石斧である。第42－2図－1と同様，石質は石英閃緑岩である。（II区B地点出土）

第42－2図－4は1号住居址出土の太形蛤刃石斧（磨製石斧）である。刃部は欠落しているが，柄の装着部分の磨滅がよく観察できる。石質は硬砂岩である。

第42－2図－5は柄頭部分を欠落した，太形蛤刃石斧片である。石質は第42－2図－4と同じ硬砂岩である。（I区B地点出土）

(d) 石　匕

第42－2図－6の1点のみ出土している。縦形の石匕でサヌカイト製になるものである。縄文時代晩期に比定することができる。（II区C地点出土）



第43図　石槨

(e) 凹　石

第42－3図－1の1点のみが出土している。3号ピット中より出土し，共伴する弥生式土器から弥生時代中期に比定することができる。表面の中央に径3cmのくぼみをもつ。石質は花崗岩で円形というより卵形に近い楕円体を呈している。

(f) 磨製石剣（第42－3図－2）

先述の第42－1図－12の石庖丁と1号住居址で伴出した遺物である。約3.5cmにわたって明確な刃部を観察することができる。石質は緑泥変岩である。畿内（摂津・河内・近江）を中心とした磨製石剣の知見に類似し分布を共有するものであろう。あるいは磨製石槍の可能性もあることも否定できない。復元形態に近いものとして，京都府舞鶴市由良川川底出土の3例をあげることができる。(註2)

(g) 石　挏（第43図）

II区C地点で出土した石挏と考えられる破片である。数個体（2～3個体）に破砕され，埋没した可能性があり，他に小片が出土している。黒色のサヌカイト製で，表面には一定に近い無数の条痕の走行が認められる。小砂粒の衝突・摩擦による一定方向の条痕と考えられるものである。表面は無数の細かな条痕が認められながら，滑沢を呈し，更に縁辺のサヌカイト剝離による鋭いエッジすら摩耗し滑らかな面となっている。

出土当初，安逸に砥石と考えていたが条痕の顕微鏡観察によって石挏の可能性が強いことを認識している。水野清一・小林行雄編「図解考古学辞典」によれば，「長さ25cm大の重厚な木葉形打製石器で，赤峰・林西などの彩陶文化に伴う。」とされ，更に「玢岩・安山岩などをつかって作り，先端は磨滅して擦痕があるので『すき』と思われるが，その重厚さよりいえば牛耕が考えられる」としている。(註3) したがって，牛耕を想定しなければならぬのであるが，今日牛耕の開始は少なくとも奈良時代以降と考えられている以上，この矛盾は避けられるべきで，やはり人力による牽引が考えられるのである。国内における類例の出土がみられないが，弥生時代全般を通じて水田耕作の具体的方法が一定不変であったとは考えられず，田代克己氏の卓見のごとく農耕そのものの基盤の変化を余儀された時点の生産形態の変動は，ひいては政治的動乱・社会的変動を引き起こす誘因となると考えられるのである。(註4) 美作地方のほぼ全域にわたる弥生時代中期～後期の居住集落の占地・立地形態が低位台地・丘陵上に偏して位置することは明らかな事実である。田代克己氏の指摘される大阪湾沿岸部の洪水による居住集落の変動の汎西日本的な可能性は妥当性のあるものと考えられる事象であろう。そういう不可避の自然現象によって生産基盤の変化，居住集落の移動によって新たな農耕基盤を開拓していく上で，従来とは異なった農耕具の存在も伝統的な諸農耕具に加えて想定される。

この石挏と考えられる石器も，以上のような観点にも立って向後，新たに把握していかねばならないであろう。

〔岡田〕

〈付記〉

磨製石剣に関しては，兵庫県教委文化課技師山本三郎氏の御教示を得た。また，石犂に関しては岡山県文化センター主任高橋護氏の有益な御意見・御指導をたまわった。記して深謝の意を表するものである。

（註）

（註１）岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査Ⅰ所収（1974年３月刊）

（註２）開館記念古代の丹後展図録所収（京都府立丹後郷土資料館刊）

（註３）図解考古学辞典，水野清一・小林行雄編（東京創元新社刊）

（註４）瓜生堂遺跡Ⅱ，瓜生堂遺跡調査会1973年３月刊。

須 恵 器

高本遺跡から出土した遺物の中では，比較的出土量が多い遺物である。しかし，その多くは小片であるため，図示できる数は，多くはない。また，完形品の出土も少なかった。

そこで，図示したものの多くは復元実測のものである。

出土した須恵器は，蓋については扁平なつまみの付くものが主体を占める。杯については，高台の付くものが主である。出土遺物の全てについて充分検討出来得ていない現状では断定的なことは言えないが，糸切底をもつ杯の出土は少ない。推定される出土した須恵器の中心的時期については蓋については扁平つまみのつく時期で，杯については，高台がつき糸切底出現以前とすることができるであろう。その概略的な時代としては，一般的に奈良時代とすることができよう。しかし，その前後の時期のものも若干は出土していることも記しておく。以下図示した須恵器について若干の説明を加える。

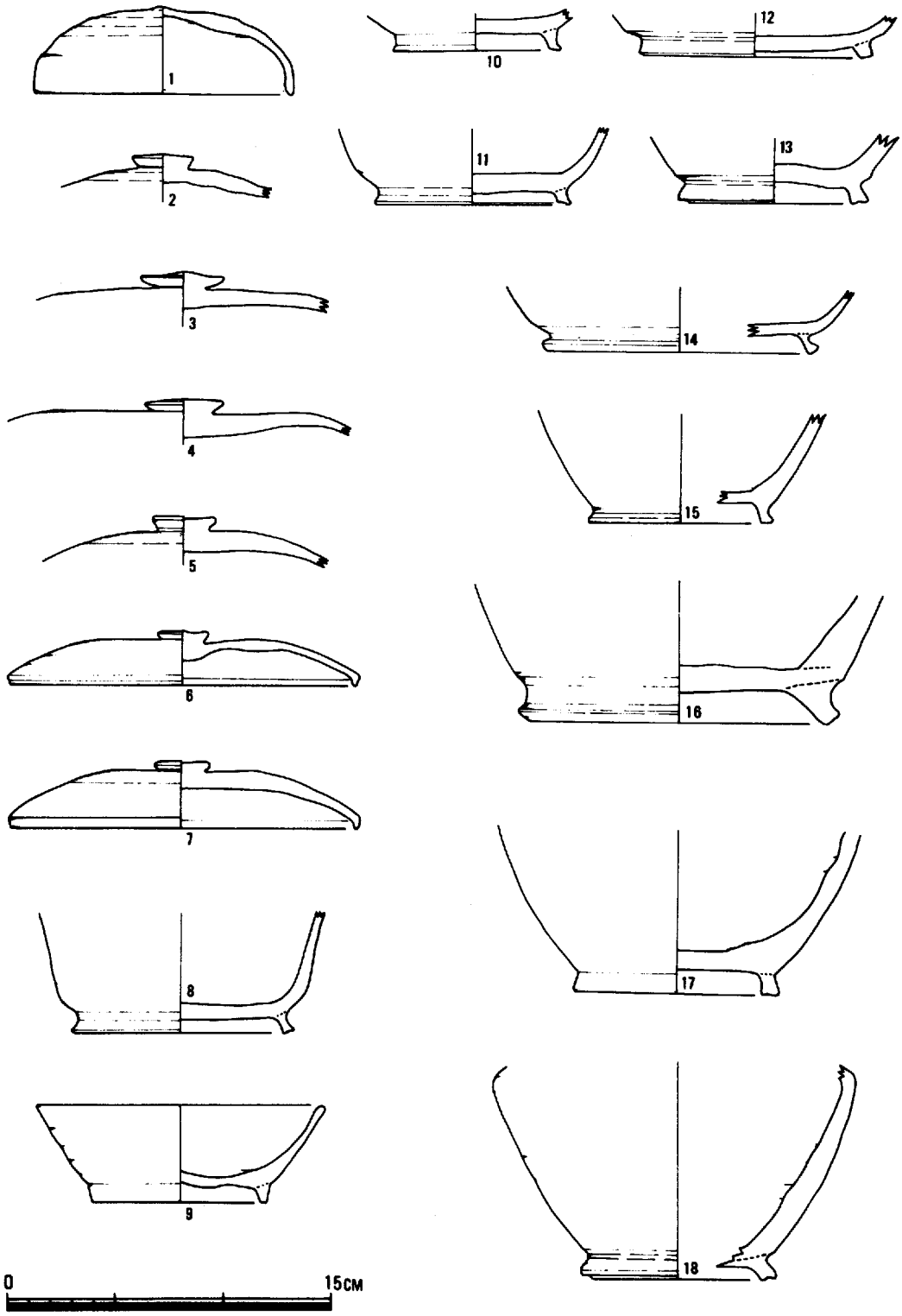
蓋（第44図１～７）

１については，全体の形状は円みをおびており，角ばる部分がない。口縁端部も円く仕上っている。外面の頂上部から½まではヘラ削りがみられる。他は全体にヨコナデによる調整がなされている。

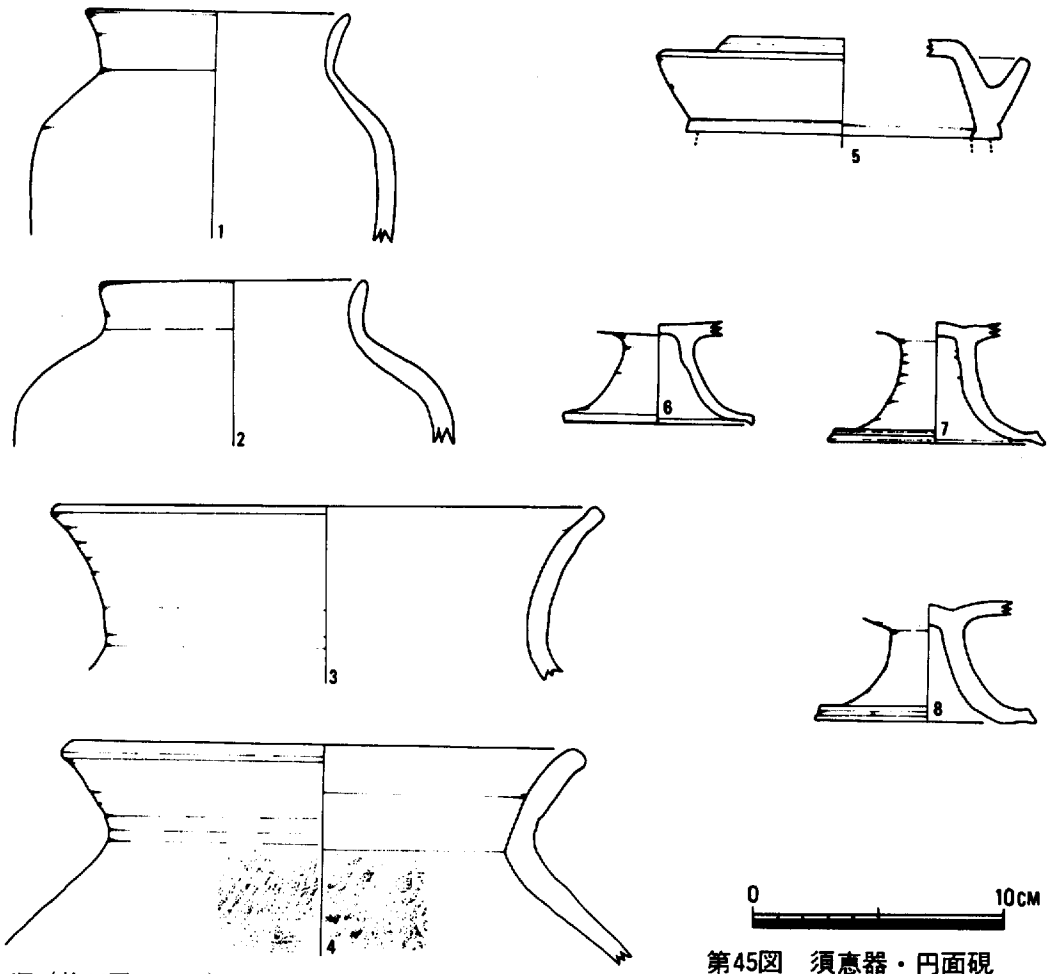
２～７は，いずれも扁平なつまみをもつものである。２・５・７は，天井部の一部分にヘラ削りがみられる。他は内外とともにヨコナデによる調整がみられる。口縁部と天井部の堺は明瞭で端部はやや内傾する。口縁端部は円く仕上げている。

杯（第44図８～12・14）

坏の調整をみると，底部はヘラ切り後に高台を貼付したものである。体部は内外ともにヨコナデがみられ，内面底部はナデによる仕上げがみられる。器形をみると，８は体部がほぼ垂直に立ち上がるもので，他は体部が開いている。８は仕上げも入念で焼成も良好であるが，９・12は焼成がやや軟調である。



第44図　須恵器



第45図　須恵器・円面硯

瓶（第44図13～18）

13は底部のみであるが，外面にヘラ削りがみられ高台は貼付であろう。高台の成形は入念である。内面はヨコナデの仕上げがみられる。仕上げは比較的良好である。15・17は，胴部の内外ともヨコナデによる調整がみられる。高台は貼付けである。形状は単調である。16は底部に体部を貼付したもので，胴部はヨコナデにより，底部内面は指頭圧によるナデがみられる。高台も貼付けで，成形は入念で形は整っている。18は肩部まで判る例である。胴部は内外ともにヨコナデがみられ，高台は貼付によるものである。

壺（第45図１・２）

いずれも短頸の壺で，１は頸部がやや外反する。口縁端部は円く，内外面ともヨコナデの調整がみられる。

甕（第45図３・４）

３・４ともに頸部はヨコナデがみられる。４の肩部外面には櫛状工具による調整後に叩き目がみられる。内面は同心円状の叩き目がみられる。

瓦

多量ではないが瓦片も出土している。しかし，字瓦・鐙瓦の出土はなかった。しかし，出土した瓦の多くは若干の磨滅がみられる。瓦はいずれも布目瓦で，布目の明瞭にみられるもので1㎠当り9×9本みられる。外面はナデによる仕上げのものがほとんどで，若干は縄目のもの，小形の方形叩のみられるものがある。

高杯（第45図6～8）

いずれも小形で短脚のものである。杯部はほとんどが欠損している。脚は，内外ともヨコナデの調整がみられ，いずれも成形は入念である。

円面硯（第45図5）

全体の形状の判るものはないが，10種類12片出土している。その内，直径の判る一例を図示した。図示したものは，脚が完全に欠損しているため，その形態は不明であるが，巾3㎝前後の方形の透しが造られていたことは判る。陸部の推定直径は9㎝である。

多くの須恵器片の中に，一片だけではあるが「郡」字の墨書土器がみられた。

〔井上〕

第5章　ま　と　め

第1節　高本遺跡出土の弥生式土器について

弥生式土器の分類

高本遺跡出土の弥生式土器は，壺・甕・鉢・高杯・器台等が認められた。そのうち形態の変化が多い壺をA～Gの8形態に，高杯をA～Dの4形態に分類した。さらに各器形を凹線文の認められるものを1，認められないものを2と細分した。

土器の詳細な記述は遺構・遺物の章で述べているため，ここでは分類した各形態の特徴を述べるにとどめた。分類した各土器は「通し番号」・「遺構又は出土地区」の順に番号を付した。

壺形土器A1（第46図1～4）

筒状の頸部を持ち，胴部のほぼ中央に最大径がくる器形である。口縁部は徐々に外反し，口縁端部でやや下方に垂れ下り肥厚している。頸部には各種の凸帯文を1～3本貼付している。(3)・(4)では三角凸帯を口縁部内面にも施している。胴部には櫛描文(1)が認められる。

壺形土器A2（第46図5～21）

壺形土器A_1とほぼ同様の形態である。口縁部は徐々に外反し，口縁端部で上下にやや肥厚している。口縁端部には数本の凹線文を施した例が多く，さらに円形・棒状浮文を加飾したものもみられる。他に無文のもの，櫛描列点文，ヘラ刻目文を施した例もみられる。筒状の頸部には，数本の凹線文をやや間隔を置き施したものと，密接して施したものとがみられる。胴部には18で壺形土器A_1と同様に櫛描波状文と直線文を施しており，6では櫛描波状文と凹線文を交互に施し，5・7では列点文を施している。

壺形土器B1（第46図22～28）

頸部はく字形に外反し，口縁端部でやや肥厚し，ヘラ刻目文を施している。胴部にはヘラ刻目文，櫛描波状文を施したものがみられる。

壺形土器B2（第46図29～32）

頸部は壺形土器B_1と同様にく字形に外反し，口縁端部でやや肥厚している。口縁端部には1～3本の凹線文を施し，さらに円形浮文，ヘラ刻目文を加飾したものがみられる。胴部には31で列点文を施している。

壺形土器C1（第47図33～36）

頸部より徐々に外反し，口縁端部は内側にやや肥厚している。頸部には凸帯を貼付したものと，削り出し凸帯を施したものがみられる。胴部は最大径を中央に持ち櫛描直線文・波状文を交互に施している。

壺形土器D1（第47図37～38）

筒状の頸部を持ち無文のものと，口縁部が外反し，口縁端部にヘラ刻目文を施したものがみられる。

壺形土器D2（第47図39～41）

筒状の頸部を持ち，口縁部の上半に数本の凹線文を施している。頸部よりやや外反した41には，口縁端部にも凹線文がみられる。

壺形土器E2（第47図42）

無頸壺形土器である。低い脚台が付くものと考えられる。口縁端部は内側に肥厚し，口縁部下に6本の凹線文が施されている。

壺形土器F1（第47図43）

頸部より大きく外反し，口縁端部でやや肥厚する大形の土器である。口縁端部にはヘラ刻目文を施し，さらに円形浮文を貼付している。頸部には圧痕文凸帯を施している。

壺形土器G1（第47図44）

頸部はく字形に外反し，口縁端部が上方にやや肥厚する小形の土器である。頸部下端には2孔が穿ってある。この器形は口縁部のみでは甕形土器と区別できない。

甕形土器1（第48図69～95）

頸部はく字形に外反し，69では胴部の最大径が中央よりやや上に位置している。口縁端部はほとんど肥厚しないものと上方又は上下方にやや肥厚するものがみられる。83・85・88・94では，口縁端部又は胴部にヘラ刻目文を施し，90では口縁端部にヘラ刻目文と円形浮文を施している。

甕形土器2（第48図96～108）

頸部はく字形に外反し，口縁端部は上・下方の肥厚が顕著である。肥厚した口縁端部には1～3本の凹線文を施し，一部にはさらにヘラ刻目文，円形浮文を施したものもみられる。

鉢形土器1（第48図45～47）

頸部はく字形に外反し，口縁端部は上方又は上下方にやや肥厚している。

器台形土器2（第47図48～51）

口縁部は大きく外反し，口縁端部が下方に垂れ下っている。口縁端部外面には48で凹線文，斜格子文，円形浮文を，49でヘラ刻目文を施している。51では頸部より脚部にかけて凹線文と鋸歯文を交互に施している。

土器底部（第47図52～68）

底部は，あげ底でややくびれて外反するものが多くみられる。外面はヘラ磨き調整を行っている。内面は刷毛目・指頭圧痕が認められる。壺形土器とみられる52は胴部のほぼ中央に最大径を持っている。

高杯形土器A$_1$（第49図109～112）

杯部は内彎し口縁部に水平面を持つ器形である。口縁部の内面に凸起を施しているものもみられる。

高杯形土器B$_1$（第49図113）

高杯形土器A$_1$と同様の水平な口縁部を持ち，口縁端部で下方に垂れ下っている。

高杯形土器B$_2$（第49図114）

水平な口縁部を持ち，下方に垂れ下った口縁部に凹線文を施している。

高杯形土器C$_1$（第49図115）

杯部の中央がやや張った椀形の器形である。

高杯形土器C$_2$（第49図116）

杯部の中央に最大径を持つ椀形の器形である。口縁部には凹線文を施し，坏部中央にヘラ刻目文を施している。脚部の拡張は著しくない。

高杯形土器D$_1$（第49図117～121）

杯部は内彎し，口縁端部でやや肥厚している。口縁部下にヘラ刻目文凸帯を施したものもみられる。脚端部はやや肥厚している。

高杯形土器D$_2$（第49図122～124）

内彎した坏部の口縁部及び中央部に凹線文とヘラ刻目文を施している。高杯形土器Dは鉢形土器と杯部のみでは区別できない。

高杯形土器脚部（第49図125～128）

脚部は三角形状に拡張するものと，脚部下半より著しく拡張するものがみられる。127・128は外面に凹線文を施し円面でヘラ削りを行っている。

土器編年

高本遺跡出土の弥生中期の土器は，分類した如く凹線文手法と凹線文手法を施さない器種とが認められた。次にこれらの各器種を弥生時代中期に編年されている周辺の遺跡出土土器と対比し検討を加えてみる。

岡山県北では唯1のまとまった遺跡として，津山市押入西遺跡を掲げることができる。本遺跡は直線距離にして高本遺跡の西20㎞に位置し，中国縦貫道建設に伴い調査された。(註1)

出土土器は，凹線文手法が顕著に認められ比較的限定された一括資料と考えられている。器種は壺形土器A$_2$・B$_2$，甕形土器1・2，器台形土器，高杯形土器A$_1$・D$_2$が含まれている。

壺形土器A$_2$は，押入西遺跡の壺形土器Ⅰに相当する。両者を比較すると押入西遺跡では，凹線文手法が極度に発達し，口縁端部と頸部には全て施されている。又，口縁端部が大きく外反し下方に垂れ下るものが認められる。胴部の最大径は壺形土器A$_2$がほぼ中央にくるのに対し，押入西遺跡出

土土器は中央より上に位置している。壺形土器B_2は壺形土器IIに類似するが　肩部が強く張っており，やや相異が認められる。凹線文手法の認められない壺形土器A_1・C_1・D_1・F_1・G_1は，押入西遺跡では出土していない。又，凹線文手法の壺形土器D_2・F_2も押入西遺跡では出土例がないが，壺形土器II・高杯形土器に類似点が認められる。

甕形土器は両遺跡ともほぼ同様の形態を持っている。押入西遺跡では甕形土器2がほとんどを占め，甕形土器1は少量の出土である。

器台形土器は両遺跡とも口縁端部に水平面を持ち，口縁端部が下方に大きく垂れ下る形態が認められる。押入西遺跡では胴部及び脚部に非常に多くの凹線文が施され，脚端はやや肥厚している。高本遺跡1号住居址出土のものは削り出し凸帯状の凹線文を施している。

瀬戸内地域の弥生中期の遺跡は類例が多い。そのうち弥生式土器集成に，弥生時代中期中葉と編年されている菰池式土器（第III様式）には，壺形土器A_1・A_2・C_1・E_1・E_2・F_1，甕形土器1，高杯形土器A_2・C_1・D_1・D_2等の器種が含まれている。(註2)

壺形土器の特徴はA・Fに凹線文はなく，D（無頸壺形土器のみに凹線文手法をもつものともたぬものの両方の器種が認められる。甕形土器1は頸部がく字形に外反し，装飾の少ない点では両者ともほぼ類似している。ただ高本遺跡出土の土器の口縁端部にヘラ刻目文を施す器形は菰池式土器には認められない。高杯形土器C・Dには凹線文を施してなく，Aに凹線文を施した器種を含んでいる。高杯形土器A_2は高本遺跡では出土していないが，苫田郡鏡野町布原遺跡に類例がある。布原遺遺出土の弥生式土器は凹線文手法のよく発達した器種が多く，津山市押入西遺跡出土土器と類似している。(註3)

倉敷市前山遺跡出土の前山I式土器は，弥生式土器集成の菰池式土器に包括される時期のものである。(註4)出土土器は壺形土器A_2・G_1，甕形土器1，高杯形土器C_2・D_1等である。

前山I式の壺形土器は，壺形土器A_1・A_2を折衷した器形で，口縁部に凹線文を施し頸部に1～2本の凸帯を貼付している。この器形は前述の菰池式土器には類例が認められる。高本遺跡では出土していない。壺形土器G_1は高本遺跡1号住居址とほぼ同様の形態を示している。甕形土器1は頸部がく字形に外反し，口縁端部のやや肥厚する特徴は同様である。甕形土器の胴部最大径は前山I式ではほとんど中央に位置している。高本遺跡では肩部に最大径が位置する器形は認められるが，中央に位置する器形は完形品がなく未確認である。高本遺跡の高杯形土器C_2は口縁端部に凹線文を施し，杯部が極端に内傾している。前山I式土器は脚部上端に凹線文を施し，杯部もゆるく内彎した器形である。

岡山市雄町遺跡出土の雄町4類は，菰池式土器中のもっとも新しいものとして分類されたものである。(註5)器形は壺形土器A_2・G_1，甕形土器1・2，器台形土器，高杯形土器D_1等である。(註6)

雄町4類の高杯形土器脚台，器台形土器には三角形及び長方形の透孔を施し，高本遺跡では鋸歯

文を施しており，やや異なる装飾である。

前山遺跡東地点の土器を標準とする前山II式土器（第Ⅳ様式土器）は，弥生時代中期後半に編年されている。(註7) 器形は壺形土器A_2・B_2，甕形土器2，高杯形土器C_1・C_2・D_1等を含んでいる。

前山II式の壺形土器A_2は頸部が直立し，施文部より上部で急に外反する特徴を持っている。この器形特徴は，高本遺跡出土の壺形土器A_2内の土器にも認められ，ほぼ同様の傾向を示している。前山II式の壺形土器B_2，甕形土器2は，高本遺跡の土器より口縁端部の肥厚が顕著である。高坏形土器C_2は高本遺跡出土土器より杯部の凹線文の発達が認められ，脚台では脚端の肥厚と三角形透孔及び沈線文の加飾がみられる。高本遺跡出土の高杯形土器D_2は口縁部に丸味を持っているのに対して前山II式では口縁端部が上方に屈曲し，屈曲部分に凹線文を施している。

岡山市雄町遺跡出土の雄町5類は，弥生式土器集成の前山II式に包括される時期である。(註8) 器形は壺形土器A_2・B_2・E_2，甕形土器2，高杯形土器C_2・D_2，器台形土器等である。壺形土器A_2・B_2は口縁端部の上下方向の肥厚が高本遺跡出土土器より顕著に認められる。雄町5類の高杯形土器D_2は前山II式内の土器と同様に杯部の上半が急激に屈曲し，屈曲部に凹線文を施す器形である。

弥生式土器集成の第Ⅳ様式に包括される仁伍遺跡出土土器は弥生時代中期終末に編年されている。(註9) 器形は壺形土器A_2・B_2，甕形土器1・2，器台形土器，高杯形土器C_2・D_2等である。

土器の特徴は，口縁端部の凹線文手法の減少がみられる。

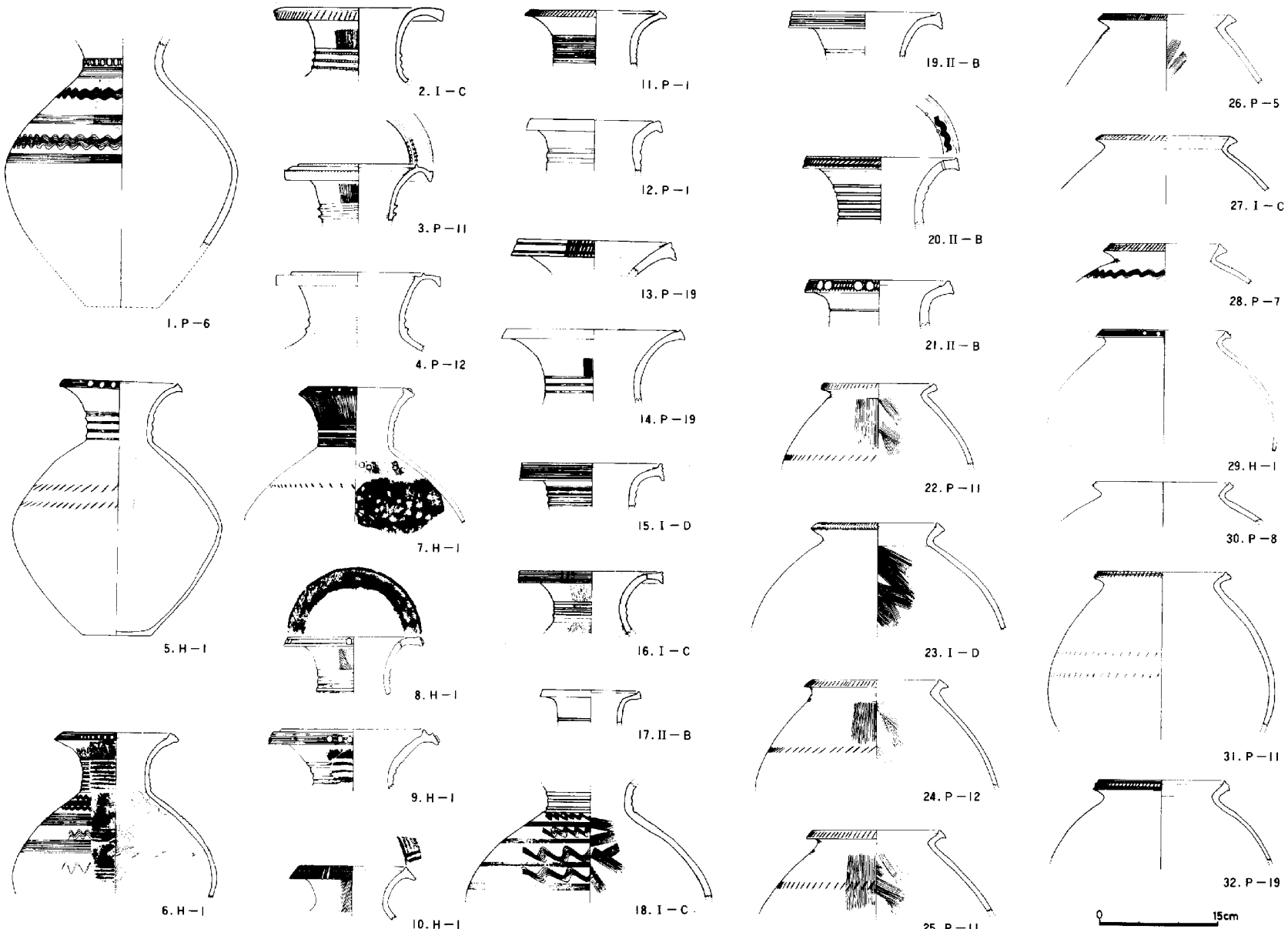
高本遺跡内では，分類した各器種が1号住居址，ピット1・5・6・8・11・12・I区C地点下層等で比較的限定された一括土器として出土している。

1号住居址は，壺形土器A_1，B_2・C_1・D_2・E_2・G_1，甕形土器1，器台形土器，高杯形土器A_1・C_2 C_2・D_2を含んでいる。ピット1出土土器は，壺形土器A_2，甕形土器1，高杯形土器A_1・D_1及び凹線文を施した脚台を含んでいる。ピット5出土土器は，壺形土器A_1，甕形土器1等である。ピット8出土土器は，壺形土器B_2・D_2，甕形土器2等である。ピット11出土土器は，壺形土器A_1・B_1・B_2を含んでいる。ピット12出土土器は，壺形土器A_1・B_1・C_2，甕形土器1，高杯形土器B_1，器台形土器等である。I区C地点谷下層出土土器は，壺形土器A_1・B_1，甕形土器$_1$等である。

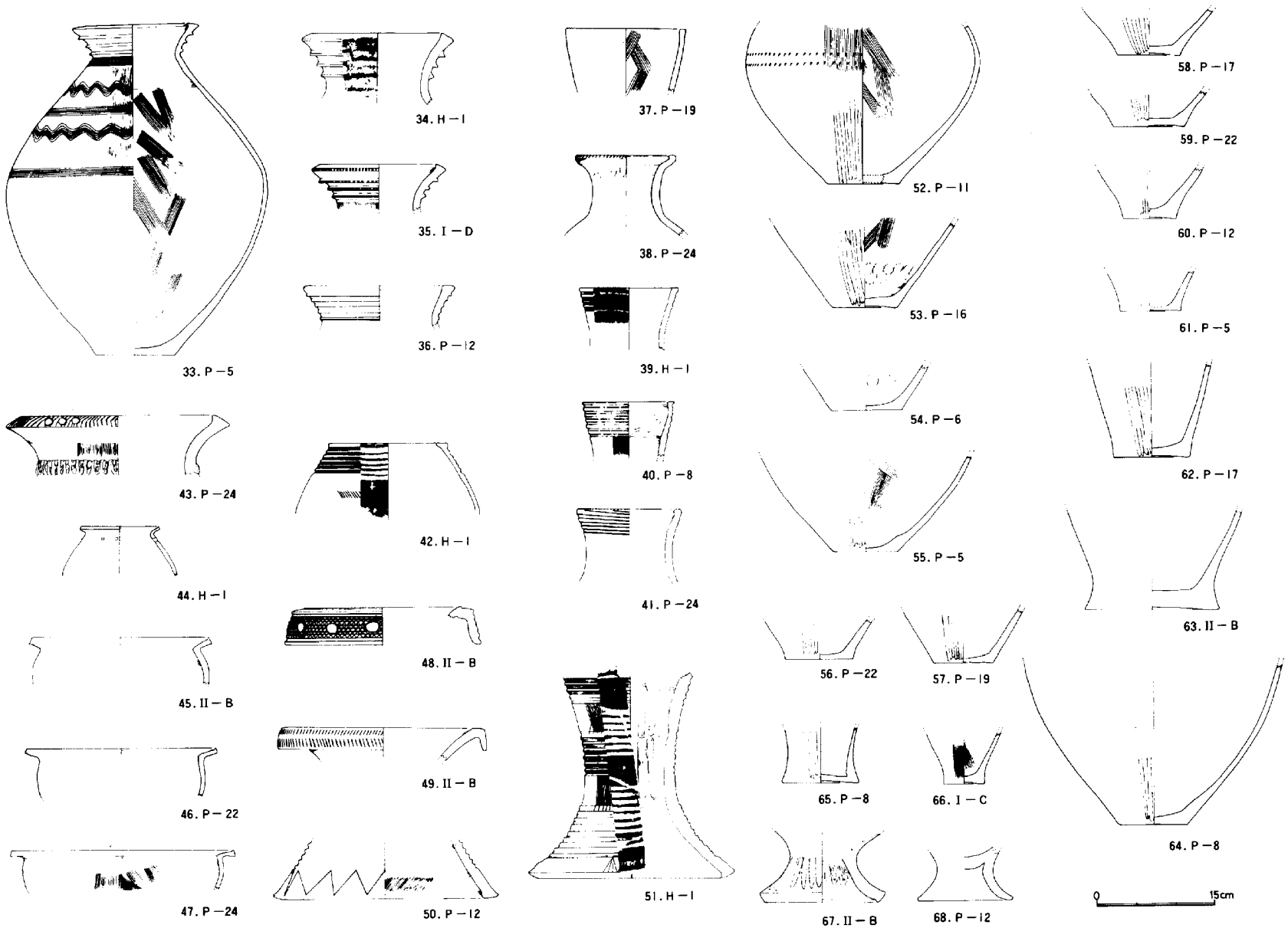
1号住居址，ピット出土土器の特徴は，凹線文手法を施した壺形土器・高杯形土器と，凹線文を持たぬ甕形土器を含んでいることである。ピット5・6・11・12・I区C地点下層出土土器は，ほとんどの器種に凹線文を持たぬ土器によって構成されており，やや古い様相を呈している。これに対しピット8出土土器は，すべて凹線文手法を施した器種によって構成されており新しい様相を呈している。

以上の検討の結果より，高本遺跡出土の弥生中期の土器様式は各器種の組み合せにより3時期を設定することができる。土器の構成は比較的出土例が多い壺・甕・高杯形土器により行った。

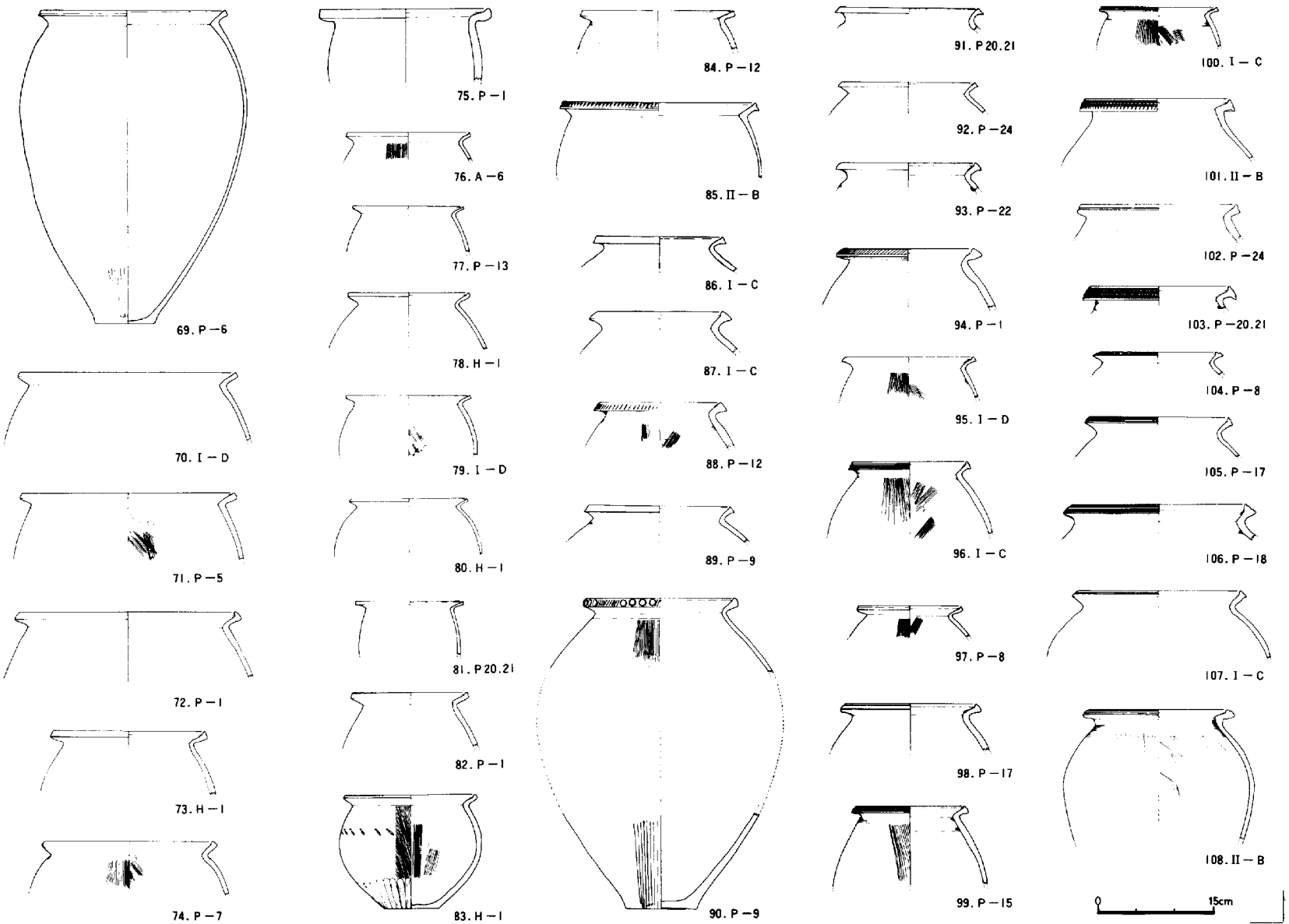
高本I式　壺形土器A_1・B_1・B_2C_1・D_1・E_1・F_1・G_1，甕形土器$_1$，高杯形土器A_1・B_1・C_1・D_1



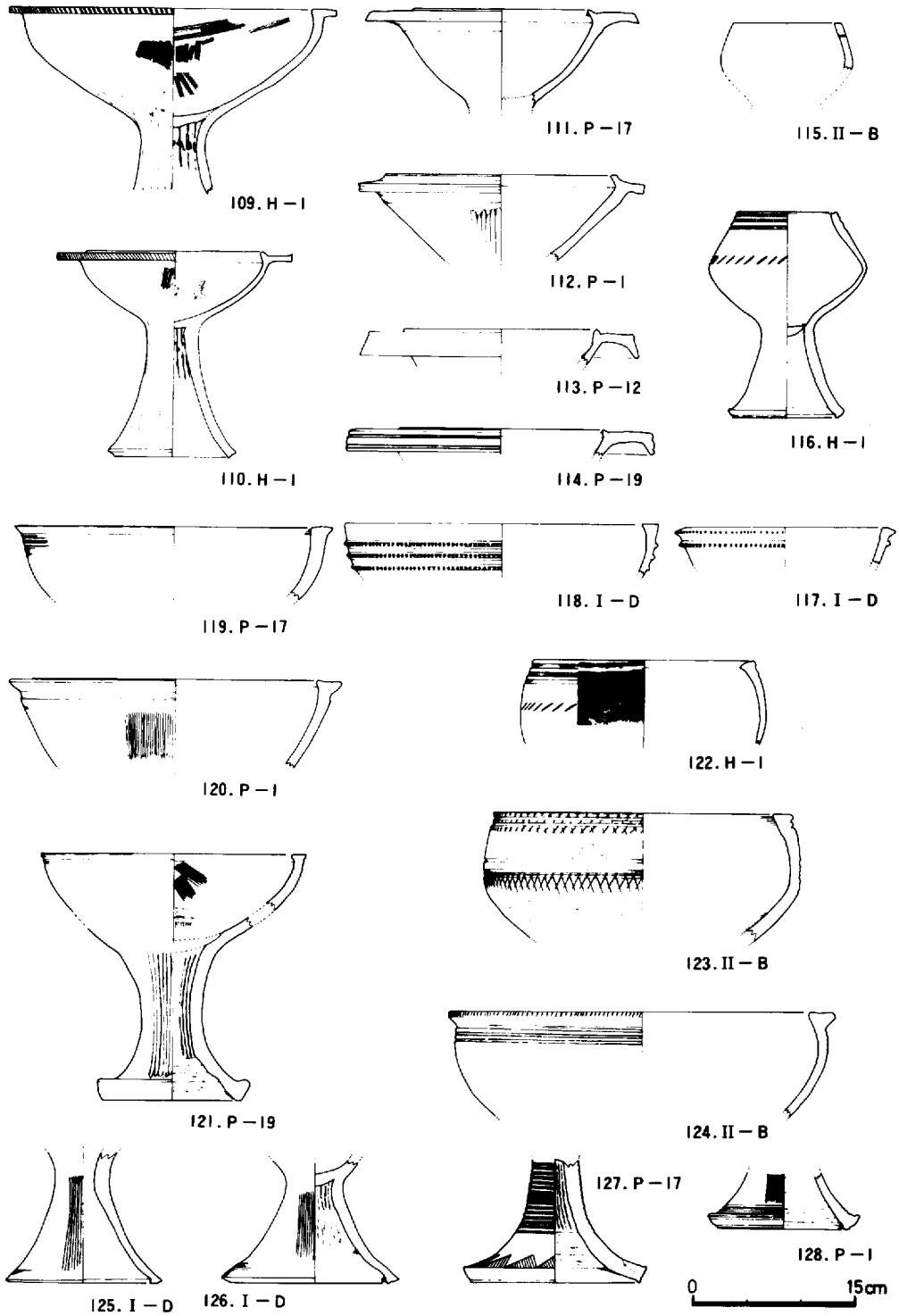
第４６図　弥生式土器19壺形土器



第４７図　弥生式土器20　壺形土器・鉢形土器・器台形土器・底部



第４８図　弥生式土器21甕形土器



第49図　弥生式土器22 高坏形土器・脚台

により構成され菰池式に包括されると考えられる。

高本II式　壺形土器A_2・B_2・C_1・D_2・E_2・G_1，甕形土器1，高杯形土器A_1・B_1・C_1・D_1・D_2により構成され，菰池式と前山II式の間に位置すると考えられる。

高本III式　壺形土器A_2・B_2・D_2・E_2，甕形土器2，高杯形土器A_2・B_2・C_2・D_2により構成され，前山II式に入ると考えられる。

高本I式は，壺形土器の一部に凹線文を施した器種が現われる段階と考えられる。高本II式は，壺形土器・高坏形土器の各種に凹線文手法を取り入れている段階である。しかし甕形土器はいまだ凹線文を取り入れてないか，取り入れても極く少量と考えられる。高本I・II式は漸移的な形態の変化を示しており，明確に一線を引くより流れとして捕えるのが妥当と考えられる。高本III式は，ほとんどの器種に凹線文手法が取り入れられている時期である。ただ甕形土器には凹線文のない器種が一部残ると考えられる。美作地方では高本III式は押入西遺跡出土にほぼ併行する時期と考えられる。（山磨）

（註）

（註1）岡山県教育委員会「押入西遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』1973年

（註2）鎌木義昌「山陽地方II」『弥生式土器集成本編』1964年

（註3）昭和48年度圃場整備事業に伴い，弥生中期～古墳時代後半にわたる遺物を採集した。

（註4）鎌木義昌「岡山県児島市福江前山遺跡」『弥生式土器集成資料編』1968年

（註5）岡山県教育委員会「雄町遺跡」『山陽新幹線建設に伴う調査1』1972年

（註6）正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土品」岡山県埋蔵文化財報告3　1973年

（註7）註4に同じ。

（註8）註5に同じ。

（註9）山本慶一「倉敷市児島仁伍遺跡」倉敷考古館研究集報第8号　1973年

〈参考文献〉

岡山市教育委員会『南方遺跡発掘調査概報』1971年

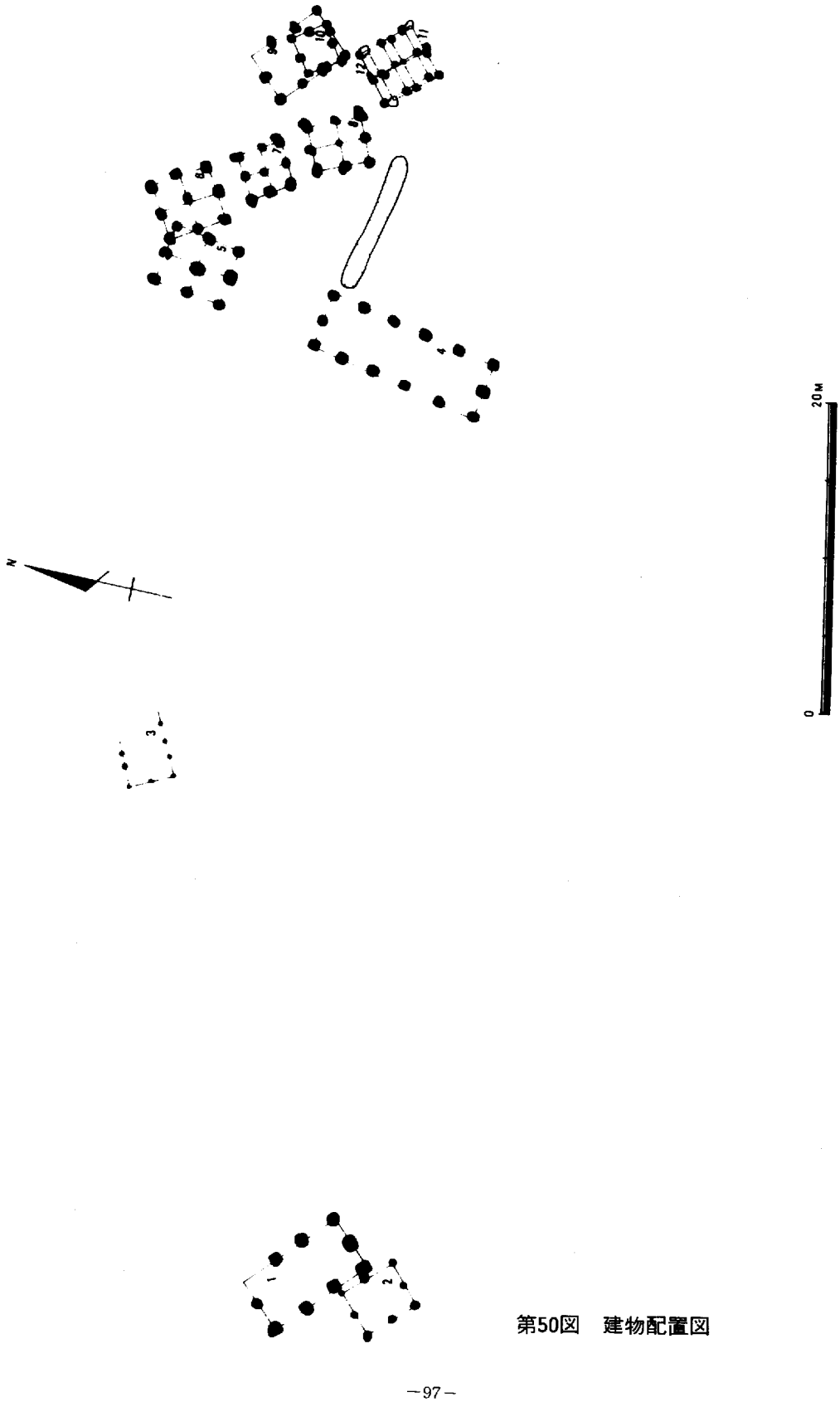
小林行雄・佐原真『紫雲出』香川県詫間町文化財保護委員会　1964年

今里幾次「播磨弥生式土器の動態」考古学研究60　1969年

第2節　歴史時代の遺構について

歴史時代の遺構について，その性格として考えられるのは，集落址，寺院址，官衙址，都城址等が考えられる。（註1）都城址については，畿外にあってはその所在は考えられない。そこで，高本遺跡の歴史時代の遺構について考えられる性格は，都城址以外のものから考えねばならない。

高本遺跡から出土している歴史時代の遺物をみると，須恵器，土師器，瓦，陶硯，鉄滓である。この内，須恵器，土師器は，ほとんどの遺跡に共通してみられる。瓦であるが，これは，寺院，官衙，豪族の私邸に使用されたと考えられる。特に地方における瓦の出土地は，寺院址と考えるのが一般的で，それに加えて官衙址が考えられている。地方における豪族の私邸の瓦葺の建物については，今一歩考究の必要があると考える。少なくとも，現在それを考古学的に説明するには資料不足と言わざるを得ないであろう。高本遺跡出土の瓦をみると，やや磨滅のみられるものが多く，包含



第50図　建物配置図

層に流入したものであろうことをうかがわせる。陶硯も10種12片と比較的多く出土している。出土遺物をさらに詳細に検討すれば，転用硯も含めて，その量は増すものと考えられる。また，一点ではあるが墨書須恵器がみられた。文字は「郡」と読める。いずれにしても，歴史時代における当遺跡において文字が使用されたことを示す資料と言えるであろう。

鉄滓であるが，高本遺跡からは，製鉄炉と考えられる遺構を検出しており，それに伴うものである。この製鉄炉遺構にしても，当遺跡の性格にともない，その評価も変ってくるであろう。

歴史時代の遺物にみられる特徴を列記してみたが，その中でも特に注目したいのは陶硯の出土量の多いことである。当時としては，陶硯を使用する範囲は限られているであろう。特に地方にあっては，それを使用する範囲はさらに限定されてくると考えられる。その範囲を，地方において推定すれば，その出土量の多さから言って，まず官衙が考えられるであろう。それに次いで，寺院，地方における官僚階層とそれを支える一部上流知識層の私邸において使用されたことが考えられるであろう。高本遺跡の歴史時代の遺物については，まず，先に述べた特徴が考えられる。

高本遺跡において検出した，歴史時代の遺構を考えるについては，以上の点を考慮して，推察を進めてゆきたい。しかし，地方における官衙遺跡と考えるとしても，その性格は多様である。つまり，官衙と考えられるものを，文献に見ると次のものが考えられる。つまり，国衙，郡衙，牧，軍団，関，郷倉等である。しかし，ここでは，その個々について論求することはできないので，先学の研究に拠ることにする。(註2)

以上の様に，官衙遺跡の性格が多様であるとすれば，文献にみえる官衙が，官衙として成立する要件を考えねばならない。そして，ある官衙の文献上にみられる要件と，検出した遺構にみられる特徴とのより重復する部分の多いものを求め，それに拠って遺跡の性格を推定する必要があろう。

表2　建物一覧表

建物番号	桁行×梁間	柱穴数	規	模
1	3×2	9(1)	740×400cm	2丈4尺4寸×1丈3尺2寸
2	2×2	8	380×320	1丈2尺5寸×1丈5寸
3	3＋α×2			
4	5×2	14	1130(1123)×370(354)	3丈7尺3寸(3丈7尺1寸)×1丈2尺2寸(1丈1尺7寸)
5	2×2	9	440×382	1丈4尺5寸×1丈2尺6寸
6	2×2	9	380(390)×366	1丈2尺5寸(1丈2尺9寸)×1丈2尺1寸
7	2×2	9	290×290	9尺6寸×9尺6寸
8	2×2	9	360×300	1丈1尺9寸×9尺9寸
9	3×2	9(1)	510×360	1丈6尺8寸×1丈1尺9寸
10	2×2	8	240×240	7尺9寸×7尺9寸
11	2×2	9	360×330	1丈1尺9寸×1丈9寸
12	2×2	9	360×330	1丈1尺9寸×1丈9寸

註　・柱穴数の（　）内は削平され，検出不能の柱穴数
・規模の（　）内の数値は両端の柱穴間の距離の異なるもの
・1尺＝30.3cmで計算し，分以下は4捨5入。

そこで，先に記した地方における官衙の中で，当遺跡と関係が無いと考えられるものをあげて，当遺跡を考える上での対照からはずしてゆくことにする。まず国衙であるが，高本遺跡の属する地域は，美作国に属する。そして，美作国府は，津山市総社（美作国苫田郡）に所在するため，明らかに当遺跡との関係はない。駅であるが，当時の大路に面していない美作国は，延喜式にも駅の記載はなく，その可能性は無いものとせざるを得ないであろう。牧であるが，牛，馬等を放つ牧場と，それを囲む柵，溝の存在と，牧に必要な建物群より成るものであろう(註3)。しかし，文献にみられる牧の所在した国に，美作国は見られず，牧の可能性もないとすべきであろう。関であるが，その所在は，軍団の所在とも関連するものであろう。また，当時の重要な交通路に接する必要もある。その点からすれば，播磨国との国堺でもあり，播磨・美作を経由して出雲国へ通ずる交通路にも接している。しかし，この交通路は，当時の大路ではなく，関を置くほどに重要視されたことは考えにくい。また軍団であるが，苫田郡で「兵庫鳴動」といった記事がみられ(註4)，少なくとも苫田郡には軍団の存在したことが考えられる。しかし，当地においては不明とせざるをえない。英多郡における郡衙の所在地はいまだ不明である。しかし，同郡内における立地，交通路，他の歴史時代の遺跡の所在から考えれば，当時における英多郡の一つの中心地であったことは否めはいであろう。その点を考慮すれば，郡衙としての可能性を否定することはできない。郷倉であるが，その存在は『延暦14年閏７月15日，太政官符』により知ることができる(註5)。また『出雲国風土記』には(註6)，２～３郷に一ヶ所の『正倉』の記載がみられる。郡内における倉院の在り方は，奈良時代末期に至っては『出雲国風土記』の例が一般的であり，太政官符がそれを追認したとみるべきであろう。とすれば，英田郡内にも数ヶ所の倉院（郷倉）の所在が考えられる。そうしてみると，当遺構を官衙と考えるならば郡衙及び郷倉としての可能性が強くなるとすることができるであろう(註7)。

高本遺跡で検出した歴史時代の遺構をまとめると，建物遺構12棟，溝１本となる。(第50図表２)（建物とは，本来は建物遺構と呼称すべきであろう。しかし，本報告書では『建物』と称している。それ等は，建物遺構の略称である。以下それに準ずる。)表を一覧しても解るように，検出した建物群の中には，２間×２間の倉庫と考えられる建物が多いことに気付く。つまり，12棟中の６棟がそうである。建物３については時期が不明であり，古代よりも下る可能性がある。そうしてみると，建物群の中で，倉庫の占める比重は高いと言える。この建物群は２群に分けることができる。つまり，Ⅰ区の建物群とⅡ区のそれである。Ⅱ区の建物群をみると，９棟の中６棟が倉庫と，倉庫の占める比率がさらに高くなる。建物群は，梁間は２間までで，それ以上のものはない。桁行は，建物３の間数の不明なものを除くと，５間を数える建物４が最大となり，３間のものが２棟で，他は２間である。このように２間×２間の建物が８棟と，この建物群の主体を成している。

高本遺跡で検出した建物遺構群を，その大きさから３群に分けることができる。しかし，１群の建物にあっても，柱間の距離に若干の差はあるが，それを分類してみる。第１群は，２間×５間の

建物である。第1群に相当するのは建物4の1棟のみであるが，当遺跡で今回検出した建物遺構の中では最大のものである。第2群は，2間×3間の建物で，建物1と建物9の2棟である。建物の規模をみれば，柱の掘り方，柱穴間の距離と，いずれも建物1が大きい。建物1は，掘り方，柱穴間の距離等，建物4のそれに近似する点が多い。第3群は，2間×2間の建物である。この群にはさらに9個の柱穴から成るものと，8個の柱穴から成るものとの2つのグループに分けられる。前者に属するものとして，建物5・6・7・8・11・12がある。後者に属するものは，建物2・10である。この建物10は，今回検出した建物としては最も小い例である。いずれにしても，その規模は近似している。また，平面形の違いからも分類することができる。つまり，建物1の様に束柱的な柱穴を持たず，建物の母屋の内部に柱穴を持たぬグループである。このグループに属するものは，建物1・2・4・9・10である。他のグループは，倉庫と考えられる建物で，建物内部に束柱的な柱穴を持つ建物である。このグループに属するものとしては，建物5・6・7・8・11・12があげられる。以上は，建物の平面形の違いにより分類したものである。

以上の建物は，いずれも奈良～平安時代に属するものと考えられる建物である。その中にあっても，掘り方の規模とその埋土の状況等から，大きく二つに分けることができる。つまり，建物1・5の第一のグループと，建物2・6・7・8・9・10・11・12の第二のグループである。しかし，第二のグループは，掘り方の切り合い等からさらに分けることも可能である。ここでは掘り方の規模，掘り方の埋土の状態，建物の方向等に共通性のみられるもので，グループをなした。そして，建物群は，第一グループの方がより古いものと考えられる。

高本遺跡で検出した建物群は，先に述べたが倉庫と考えられる建物が多い。もっとも，発掘範囲が限定されているため，遺跡全体の様相を知るには資料不足といわざるをえないであろう。であるから，今回検出した建物群については，先に述べた傾向から，その性格を推定しなければならない。いずれにしても，他の施設に付属する倉院（郡衙・寺院・地方豪族の私邸等）もしくは，郷に設置された倉院の一部分と推定することができるであろう。

出土遺物については先に述べたが，その内で陶硯の多いこと，墨書須恵器のみられることは，この遺跡を考える上でも重要である。それ等は，当遺跡の歴史時代の建物が存在した当時，その建物群の中で使用されたものと考えられる。つまり，この建物群の所在する区域には，文字を使用する人が居り，文字を必要とする場所が存在したことを示すと考えられる。その中に，1片ではあるが『郡』と墨書された須恵器の出土したことは重要である。『郡』は，『郡家』もしくは『郡衙』を意味すると考えられる。また，勝央町平遺跡では，須恵器に『郡』を押印したものと，ヘラ書きにしたものとが出土しており，他の出土遺物，遺構とあわせて，郡衙遺跡と考えられる遺跡である。つまり，高本遺跡においても，その点を考慮する必要がある。しかし，その墨書須恵器が，直接に郡衙を意味すると考えることには慎重でなければならない。いずれにしても，遺物，遺構から考えて

郡衙もしくは，それに関連する遺構と類推することは許されるであろう。つまり，郡衙に付属する倉院・もしくは郷に設置された倉院であろうとする可能性は大きいものと考える。

高本遺跡の建物群を，官の倉院と推定してみた。それは，あくまでも推定の域を出ない。またそれが倉院であるとしても，倉庫と考えられる建物以外の建物も含まれている。それらが倉庫として使用されなかったとする理由もない。ただ，検出した建物の平面形から分類したにすぎない面も持っている。また，実際にそうであったかも知れない。ここでは，まだ推論の域を出ないものとせざるをえない。そこには，今後さらに研究し，論究する必要性を感じている。

奈良時代の倉院に関する文献では「和泉監正税帳」(註8)が最も詳しいであろう。特に，倉院の在り方を具体的に知らせる点では第一等史料であろう。その記載を見ると，法倉，板倉，丸木倉，甲倉，屋といった記述の違いがみられる。それらがいずれも倉として使用されたことは，収納物を明示したもの，もしくは「空」「塞」と記し，倉を使用中であるか否かも記していることからも解る。正税帳に記されている倉の規模からそれらの差異をみたい。法倉は，2例の記載がある。それは，その長さで6丈以上を測るものである。広さにおいても2丈と，比較的大規模な建物である。板倉であるが，板倉と記されたものは12例であり，長さが2丈7尺を測るものが最も大きく，長さで2丈以上のものが3例ある。そして，長さが1丈3尺3寸を測るものが最も小さい。他の8例は1丈6尺から1丈9尺の間である。丸木倉と記されたものも12例ある。その長さにおいて最も大きいものは1丈9尺を測り，次のものが1丈8尺を測るものである。他の10例は，1丈1尺から1丈5尺2寸の間にある。甲倉と記されたものは3例ある。その長さは1丈8尺を測るもの2例，1丈6尺4寸を測るもの1列であある。以上の建物は，各グループごとに，規模においてほぼ一定したものがみられ，極端にその大きさに差違のあるものはみられない。屋と記されたものは5例ある。その長さにおいて最大のものは，4丈7尺を測り，4丈6尺1寸・4丈2尺と4丈以上を測るものが3例ある。他は，2丈6尺4寸・1丈8尺を測るものである。以上の数値をみると「屋」とされる建物は4丈以上を測るものが5例中3例と最も多いのではあるが，規模において極端な差違がみられる。その差違は大きいのであるが「屋」とされる建物には，それ等に共通する用途，もしくは共通する構造があるものと考えられる。

「和泉監正税帳」にみられる倉庫について，呼称とその規模について概観したのであるが，各々を統一する規格はみられない。しかし，倉庫の呼称別による一定の傾向はみられるようである。つまり，板倉，甲倉，丸木倉は，平面形がむしろ正方形に近い矩形を呈する倉庫である。そして，概略的には板倉とされる倉庫が一番大きく，次いで甲倉であり，丸木倉とされるものが一番小さい。また，平面形も大きい板倉より小さい丸木倉の方が，より正方形に近い矩形を呈している。これ等の倉庫は，高本遺跡で検出した建物群の中で，その規模により分類した第3群と平面形及びその規模に似るものがあり，同類のものと推測することができるであろう。表2の尺度は1尺＝30.3cmで

計算したものであり，また，距離は柱穴の中心間の距離である。そのため，実際の建物を測定した場合には，若干その数値は大きくなるであろう。板倉，甲倉，丸木倉の区別は，規模の上からは概略的には区別することができるが，建物に用いられた材料による差が最も大きいとすべきであろう。また，これらの倉庫が倉院の中で占める比率が最も高く，倉庫としては一般的な形態を呈するものであろう。

法倉であるが，この平面形は非常に長大であり，それがこの法倉の特徴とすることができるであろう。また，倉院の中での数は少なく，倉庫としては単に物を収納しておくといった使用法ではなく，特殊な用いられ方が考えられる。いずれにしても，高本遺跡からはそれほど長大な建物は検出されていない。

屋であるが，これ等の規模にはその差異が大きい。大きい建物は，長さにおいて４丈７尺を測り小さいものは，長さにおいて１丈８尺を測るものである。この小さなものは，板倉・甲倉の規模と変らず，数値からだけではそれ等との区別は困難である。少なくとも，遺跡において遺構として検出した場合には，『倉』と『屋』との区別は，構造上の差がないかぎり不可能であろう。しかし，正税帳に『倉』もしくは『屋』と区別した記載がみられることは，その構造に何らかの差違のあることをうかがわせる。

ところで，高本遺跡で検出した建物を，平面形の形態の違いから２グループに分類した。その第２グループに属するものは，我々が倉庫と考えている建物である。このグループは，規模により分類した建物の第３群にほぼ一致する。つまり第３群から建物２・３を除いたものが第２グループとなる。この様に，当遺跡で検出した建物においても，その規模においては同類とできる建物も，その形態において差違がみられるものがある。この差違は，検出した建物の呼称においてもその違いを考慮せねばならないであろう。また，この差違が「正税帳」における呼称面での違いとして表わされている可能性を全く否定することはできないであろう。(註９)

以上の様に，高本遺跡で検出した歴史時代の建物について，若干の推察を試みたのである。その結果としては，郡衙の倉院，もしくは郷の倉院としての可能性を考えてみた。そして，そのいずれの可能性も否定し得なかった。しかし以上述べたものはあくまでも一つの試案である。今後さらに論考を重ね，より確実なものを論求する必要があろう。いずれにしても，ここでは郡衙の倉院，もしくは，郷の倉院としての可能性を提示しておきたい。〔井上〕

(註)

(註１) ここで述べる歴史時代は，古代をいい，奈良～平安時代を考えている。

(註２) 福山敏夫「地方の官衙」『日本の考古学』Ⅵ　河出書房

斉藤　忠『日本古代遺跡の研究総説』吉川弘文館　昭和43年

(註３) 『延喜式』兵部省には，播磨国の駅を掲るが，その中に，越部，中川２駅がみられる。その駅は，播磨国の他の駅より小さく，美作路に沿う駅と考えられている（藤岡謙二郎『都市と交通路の歴史地理学的研究』大明堂　昭和42年）。しかし，美作国に関しては，駅の記載はない。

(註4)『続日本紀』天応元年3月条

(註5)『類聚三代格』国史大系　吉川弘文館

(註6)『出雲国風土記』日本古典文学大系　岩波書店

(註7)最近の郡衙の研究では，吉田　晶『日本古代国家成立史論』，豊崎卓『東洋史上よりみた常陸国府・郡衙の研究』がある。いずれも，示唆に富む見解が示されている。

郷倉に関しては，足利健亮氏の精力的な研究がある。その中で，郷倉は一般的には一町四方であろうことを述べられている。高本遺跡では，限定された調査であるために，倉院に関する範囲等は十分に確認できなかった。足利健亮「古代郷正倉院と推定されるコアザ『クラノマチ(ツボ)』について」『人文地理学論叢』，同「大和盆地に分布する小字『クラノマチ(ツボ)の考察」『史林』45－1，同「湖東平野の郷と正倉院」『地形図に歴史を読む』第3集

(註8)『寧楽遺文』

(註9)古代の倉庫に関しては以下に記す様な論考がある。薗田香融「倉下考—古代倉庫の構造と機能—」『史泉』6　村尾次郎「古代倉院の構造と管理—倉下とは何か—」『日本上古史研究』2の9　直木孝次郎「倉下の語義」『奈良時代の諸問題』所収，今後はそれ等を参考に，考古学的にも研究を進める必要を感じている。

おわりに

発掘調査を実施するにあたっては，調査体制，調査期間，調査実施計画等に種々の困難な問題があった。調査を行うについては，それ等の問題点が全て完全に解決したわけではない。しかし，困難な問題は伴いながらも，調査は一応終了した。不充分ではあろうが，以上に記した様な知見を得ることもできた。また，報告書を書くについては，まだ報告すべき事もあろうかとは思う。しかし今回，以上の事を報告するのが我々にとっては種々の点から考えても限界である。

調査にあたっては，下記の方々の御協力を得た。記してその謝意を表わします。(敬称略)

作東町教育委員会　有元　有範

作東町文化財保護委員会

前原　四郎　　前原　益男　　森下寿一郎　　光本　半治　　安本　通夫
安本　晏東　　安本　　実　　安本　　健　　安本　　好　　広瀬留三郎
安本　治男　　安本　太郎　　安本　泰雄　　久保　正重　　前原和三郎
高田　武夫

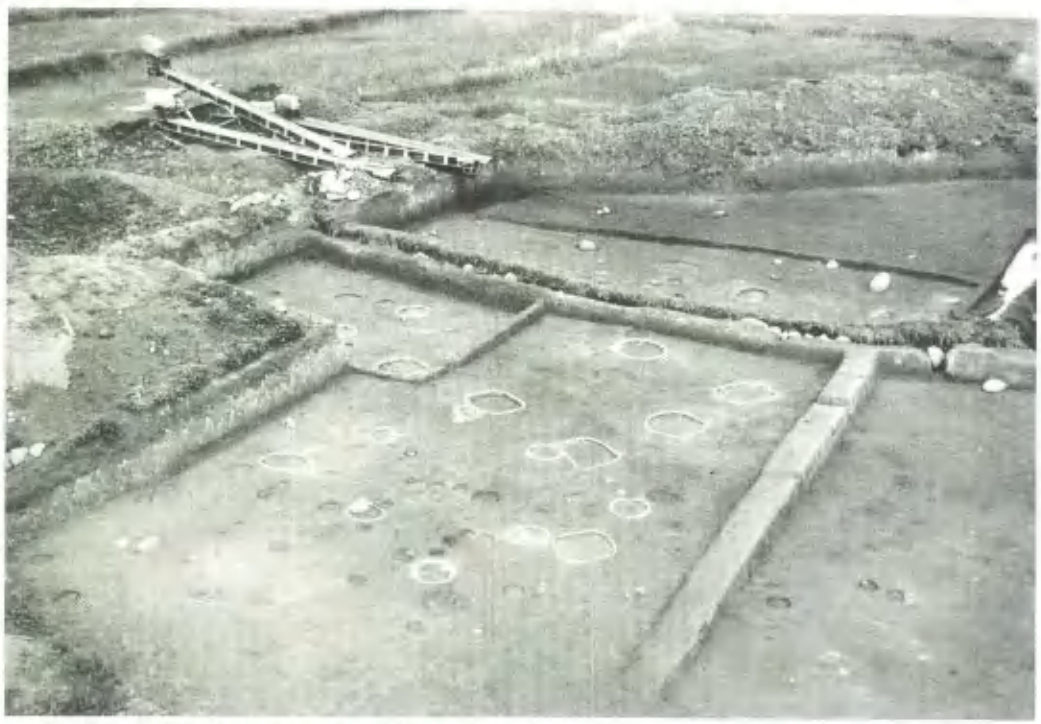
井伊たよの　　井伊ふさえ　　岡　すみえ　　黒石　君代　　黒石　つづ
安本すみえ　　光本　政子　　小林きくの　　小林あき江　　井上えつ子
久保こめの　　前原あやの　　久田　かめ　　小林　くに　　広瀬　降子
安本真知子　　安本　秋子　　安本　重子　　安本　綾子　　前原　ゆり
広瀬　典子　　安本　桃代　　光本すみの　　前原なぎえ　　小林　道代
内田　愛子　　安本　とめ　　広瀬　秋子　　高田　政枝　　上田　一子
森内つや子　　安本ますえ　　高田つる代　　前原　照子　　井伊　勝子
小林はつみ

1．　高本遺跡航空写真　　（南東より）

2．　高本遺跡　調査後遠景　　（北西より）

図版 2

1．　Ⅰ区A地点，1号住居址，ピットA・B，炉検出状況　（南西より）



2．　Ⅰ区A地点，建物1・2検出状況　（南東より）

1．　Ⅰ区A地点，1号住居址遺物出土状況　　（北東より）

2．　Ⅰ区A地点，1号住居址　　（北東より）

図版 4

1．　Ⅰ区A地点，1号住居址遺物出土状況　（西より）

2．　Ⅰ区A地点，1号住居址遺物出土状況　（南より）

1．　Ⅰ区A地点，Ⅰ号住居址，炉　　（北東より）

2．　Ⅰ区A地点，ピットA　　（南西より）

図版 6

1．　Ⅰ区A地点，炉及び周辺掘り込み　　（北西より）

2．　Ⅰ区A地点，炉細部状況　　（北より）

1．　Ⅰ区C地点，溝，建物3　　（南東より）

2．　Ⅰ区D地点，谷部土層断面　　（南東より）

図版 8

1．　II区A地点，検出状況　　（南東より）

2．　II区A地点，発掘風景　　（西より）

1．　II区A地点，2号住居址炭化材出土状況　（南西より）

2．　II区A地点，2号住居址　（南より）

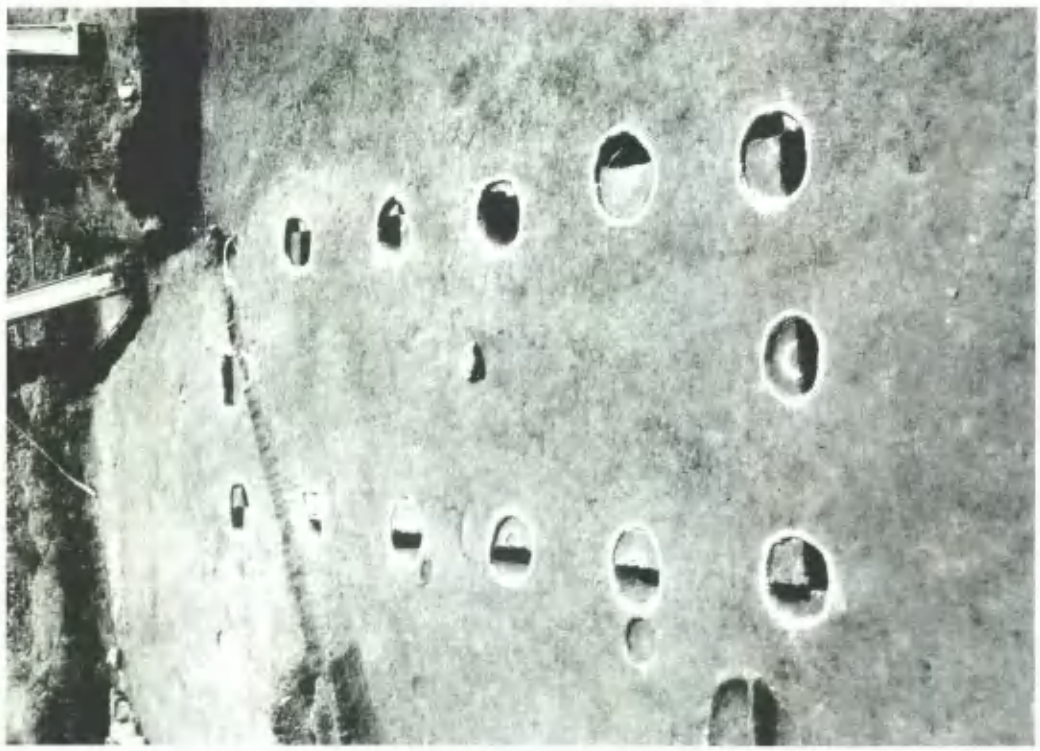
図版10

1．　II区A地点，3号住居址　　（南より）

2．　II区A地点，3号住居址発掘風景
（南東より）

3．　II区A地点，3号住居址，中央ピット
（南より）

1．　II区A地点，建物4・5検出状況　　（南より）



2．　II区A地点，建物4　　（北より）

図版12

1．　II区A地点，建物5・6　　（南より）

2．　II区A地点，建物7～12及びピット1～4　　（西より）

1．　II区A地点，建物5　　（南より）

2．　II区A地点，溝6　（北西より）

図版14

1．　II区B地点，ピット群　　（北西より）

2．　II区B地点，ピット群　　（南より）

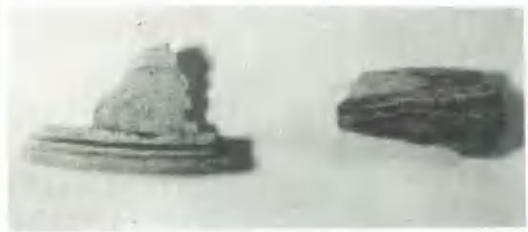
1．　II区B地点，ピット22　（西より）

2．　II区B地点，ピット5（南西より）

3．　II区B地点，ピット5礫出土状況
（北西より）

図版16

墨書陶器「郡」



須恵器・円面硯

弥生式土器・分銅型土製品

平（たいら）　遺　跡（7）

目　　次

第１章　調査の経過…… 128
第２章　歴史的・地理的環境…… 138
第３章　遺　　構…… 140
第４章　遺　　物…… 158
(1) 須 恵 器…… 158
(2) 土 師 器…… 160
(3) 施釉陶器…… 160
(4) 押印，ヘラ書，墨書陶器…… 171
(5) 瓦…… 171
(6) 陶　　硯…… 175
(7) 備前焼壺，焼成窯不明の壺…… 179
第５章　ま と め…… 182
文献ノート…… 186

図　目　次

第１図　地形図(1/1000)…… 129
第２図　グリッド設定図…… 132
第３図　東西基線断面図…… 133
第４図　南北断面図（E1）…… 135
第５図　地形図（1/50000）…… 139
第６図　建物Ⅰ．Ⅱ．Ⅲ．Ⅳ．Ⅴ．平面図…… 141
第７図　石組遺構…… 142
第８図　建物Ⅵ平面図，断面図…… 144
第９図　建物Ⅶ平面図，断面図…… 145
第10図　建物Ⅷ．Ⅸ．Ⅹ．Ⅺ　平面図…… 146
第11図　建物Ⅻ　平面図，断面図…… 145
第12図　建物Ⅵ～Ⅻ，溝の配置図…… 147
第13図　建物集成図（E1以西）…… 149

第14図　池状，井戸状遺構実測図……153
第15図　鍛治炉集成図……155
第16図　須恵器（杯）……161
第17図　須恵器（杯）……162
第18図　須恵器（杯）……163
第19図　須恵器（蓋）……164
第20図　須恵器（蓋）……165
第21図　須恵器（盤，皿）……166
第22図　須恵器（皿），土師器（高杯，盤，皿，椀）……167
第23図　灰釉陶器，緑釉陶器，須恵器……168
第24図　須恵器，甕の表裏面の拓影……169
第25図　ヘラ書，押印土器拓本……170
第26図　瓦　拓本実測図……172
第27図　瓦実測図……173
第28図　瓦拓本……174
第29図　硯実測図①……176
第30図　硯実測図②……177
第31図　硯実測図③……178
第32図　須恵器　土師器（鍛冶炉，瓦溜り関係）実測図　付備前焼実測図……180
第33図　焼成窯不明の壺実測図……181
第34図　遺構全体図（E_1以西）……188
第35図　遺構全体図（E_2以東）……189

図　版　目　次

図版1 ……191
1．東尾根上段（南西より）
2．東尾根上段（南より）
図版2 ……192
1．建物Ⅰ～Ⅳ（北より）
2．建物Ⅴ（北より）

図版３ …… 193
１．建物Ⅰ～Ⅲ（北より）
２．東尾根の段の状態（東南より）
図版４ …… 194
１．E6 S2(西より）
２．E5 S1石組遺構
図版５ …… 195
１．E4 S2　（北より）
２．E3 S1，２　（北西より）
図版６ …… 196
１．建物Ⅵ（西より）
２．E2 N1　（南より）
図版７ …… 197
１．建物Ⅷ，Ⅸ（南より）
２．建物Ⅸ（南より）
図版８ …… 198
１．E2 N1　建物Ⅹ，Ⅸ（南より）
２．E2 N1　（南より）
図版９ …… 199
１．柱根の出土状況
２．E3 S1　（南より）
図版10 …… 200
１．発掘風景（西より）
２．発掘風景（右側は工事用道路)(東南より）
図版11 …… 201
１．鍛冶炉１（南より）
２．鍛冶炉１，羽口部分断面（西より）
図版12 …… 202
１．鍛冶炉２（北より）
２．鍛冶炉２の金床(？）(点線内が熱で赤変している）（北より）
図版13 …… 203
１．鍛冶炉３およびその南の石組み（東より）
２．鍛冶炉３（東より）

図版14 …… 204
1．建物XVI および鍛冶炉4（西より）
2．鍛冶炉4（西より）
図版15 …… 205
1．鍛冶炉5（炉内に羽口が落ち込んでいる）
2．鍛冶炉5断面（南より）
図版16 …… 206
1．鍛冶炉6断面（西より）
2．鍛冶炉7断面（北より）
図版17 …… 207
1．西尾根東斜面，建物XVII（南より）
2．E1N1上面（右上隅に鍛冶炉1あり，（南より）
図版18 …… 208
1．E1N1・E2N1の境の断面にあらわれた瓦溜り（東より）
2．E1N1の境の断面にあらわれた瓦溜り（東上より）
図版19 …… 209
1．礎石をもつ建物（建物 XV)(東より)
2．建物XIII，XIV，池状遺構，井戸状遺構（西より）
図版20 …… 210
1．井戸状遺構（西より）
2．池状遺構（東より）
図版21 …… 211
須恵器（蓋）
図版22 …… 212
須恵器，土師器（杯，皿，盤）
図版23 …… 213
土師器，施釉陶器，墨書陶器
図版24 …… 214
軒丸瓦，軒平瓦
図版25 …… 215
丸　瓦
図版26 …… 216
平　瓦

図版27 …… 217
平瓦凸面部分
図版28 …… 218
平瓦凹面部分
図版29 …… 219
軒丸瓦製作手法，備前焼，焼成窯不明のもの
図版30 …… 220
円面硯，蹄脚硯
図版31 …… 221
風字硯，二面硯
図版32 …… 222
転用硯

第1章　調査の経過

1）発掘調査に至るまでの経過

縦貫道が岡山県北部を通過することとなり，道路公団は県教委に対して，幅1kmの縦貫道予定路線図を示した。これを受けて，県教委は，岡山県遺跡保護調査団を中心に，予定路線内の埋蔵文化財の分布調査を契約に先だって実施した。

この分布調査の際に，勝田郡勝央町平（滝川の西側の丘陵端部の畑）において㊞という印を押した須恵器片(第25図)が採集された。この1片の押印須恵器によって平遺跡が世に知られるに至った。

郡印須恵器が採集されたことから，平遺跡は「郡衙」の可能性が考えられた。

縦貫道の県内ルートのうち，一次整備区間（兵庫県境～落合インターチェンジ）の埋蔵文化財の分布調査資料をもとに，公団と県教委との間で発掘調査の契約を締結し，昭和47年度に平遺跡の調査を行なった。

平遺跡の調査は，昭和47年4月1日から昭和48年3月31日までの間に行ない，重要な遺構の存在が確認されたときは，保存について別途協議をするという条件付きの契約であった。

2）発掘調査の経過

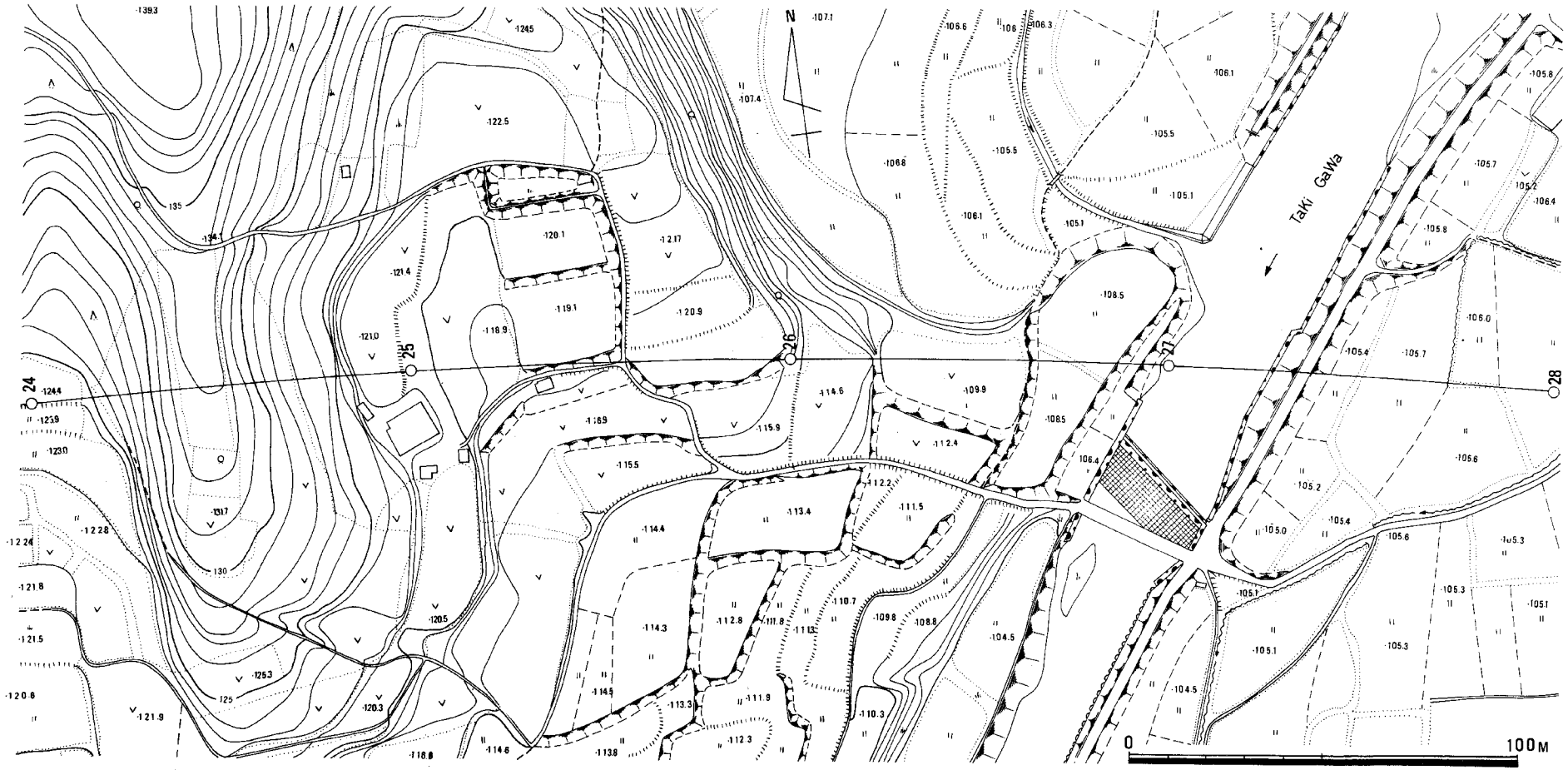
昭和47年4月10日，県教委文化課の井上・田仲の両名が担当し，地元の多くの方々の応援を得て調査を開始した。9月以降，岡山県開発公社の大賀・林・森安・小倉・小林・寺坂各技師補の協力をいただき調査を進めた。

分布調査の際に，谷（滝川の西の丘陵部分にあって，滝川に一番近い南に開口する浅い谷である）の部分でかなり多量の須恵器が散布しており，滝川の東の水田部分にもわずかながら須恵器が散布していることが確認されていた（以下，須恵器が多量に採集された谷を「谷」といい，谷の東にある尾根を「東尾根」，谷の西側にある尾根を「西尾根」という）。

調査は，まず遺跡の範囲を確認するために，東は水田部分から，西は西尾根のさらに西側にある尾根（滝川の西にあって東から3つ目の南にのびる尾根）までトレンチを設定し，掘り下げを行なった。

滝川の東の水田部分では，東から20mおきに南北に幅2mのトレンチ8本を設定した。いずれのトレンチも層序はほぼ同じで，上層から記すと次のようになる。

1層　表土層（水田耕作土）	厚さ20cm
2層　客土	厚さ5～15cm
3層　礫層，砂礫層，砂層の互層	厚さ100cm以上



第Ⅰ図　地形図(1/1000)

このような状況が，各トレンチにおいて確認され，遺物は表土層，客土および一部砂礫層中よりかなり磨滅した須恵器がわずかに出土したのみで，遺構は確認できなかった。

これらから，滝川の東には遺構は存在していないと判断して，水田部分は遺跡の範囲より除外した。

4月21日以後は，トレンチ調査を滝川の西の丘陵部分に集中させた。

6月7日～7月15日の間は，梅雨，田植え等のため発掘作業を中断して，遺物の整理を行なった引き続き8月11日までの間，平遺跡の担当調査員は，梶原遺跡(「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3」参照）の調査を行なったため，平遺跡の調査は，約2ヵ月間中断してしまった。

8月17日，平遺跡の調査を再開し，8月21日トレンチ調査を終らせた。丘陵部分に設けたトレンチは，15本，総延長590mである。

丘陵部分のトレンチ調査の結果から次の点が判明した。

① 東尾根　表土（耕作土，厚さ10～20cm）下は直ちに地山（ナメラ）となる。遺物は，表土および地山面より出土し，地山には柱穴と考えられるものが多数存在する。表土中の遺物は，奈良時代末から中世までのものが混在する。

② 谷　表土（水田耕作土，厚さ約20cm）の下に，厚さ 130cmにおよぶ須恵器・土師器・瓦を含む包含層が存在する。柱穴と思われる落ち込みも観察されるので遺構が存在していることが予想される。

③ 西尾根東斜面　表土と地山の間に，谷の包含層がのびている。

④ 西尾根上～さらに西にある尾根　表土層中より若干の中・近世の陶磁器片が出土したのみで遺構は全く確認できなかった。なお，西尾根上から東へ少し下った地点で，備前焼の壺（骨蔵器）1個と焼成窯不明の壺破片および五輪塔の一部が出土した。

以上トレンチ調査によって平遺跡の範囲を，東尾根・谷・西尾根東斜面の部分と限定した。

8月22日以後，18m角のグリッド単位に全面調査を実施した。

東尾根は，東西方向にカットされて，3段の段状の地形となっていた。いずれの段においても表土（耕土）を除去すると地山面となり，この地山面に遺構を検出した。縦貫道用地内南端の一番低い面において5棟の建物を確認した。5棟のうち4棟は，2棟ずつ重なりあっている。中の段では，ほぼ東西方向にのびる柱穴列4列を確認した。柱穴列の巾はそれぞれ約2mで，柱穴の間隔（東西方向）は1.3~1.8mと一定していない。上の段では，長径2m，短径 1.3mの楕円形のピットが1つ確認された。このピット内には人頭大の石がつまっており，その石の間から備前焼の破片が出土した。

上・中・下段とも，これらの他に多数の柱穴が確認されたが，遺構としてのまとまりは見られなかった。

5棟の建物，4列の柱穴列の柱穴内や上の段のピット内出土の遺物には中世のものが見られるの

で，中世のある時期に，この尾根はカットされ建物などがつくられ，調査時に見られた3段の段状地形が形成されたものである。

谷と西尾根東斜面には同一包含層が存在するので同時に調査を進めていき，除去した土の置き場として，調査後の東尾根を利用した。

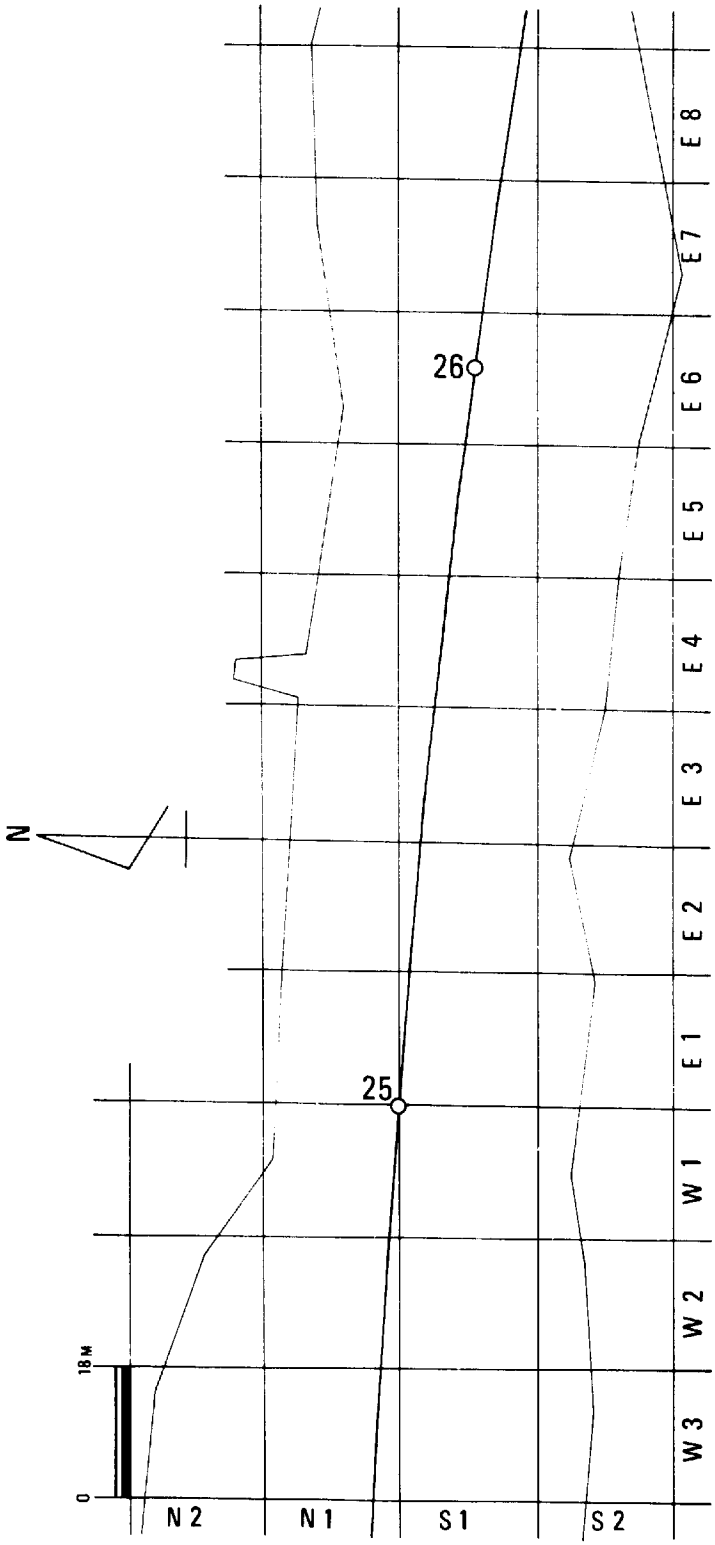
谷～西尾根東斜面にかけては非常に多くの遺物を含む包含層が堆積していた（谷の中央で厚さ 1.3mに達する）。1日の出土量がバケツに10数杯を超えることがしばしばあった。

谷・西尾根東斜面の西半分において表土層下の包含層中に建物1棟，鍛冶炉7基を検出した。これらは同一生活面に存在していると考えられる。

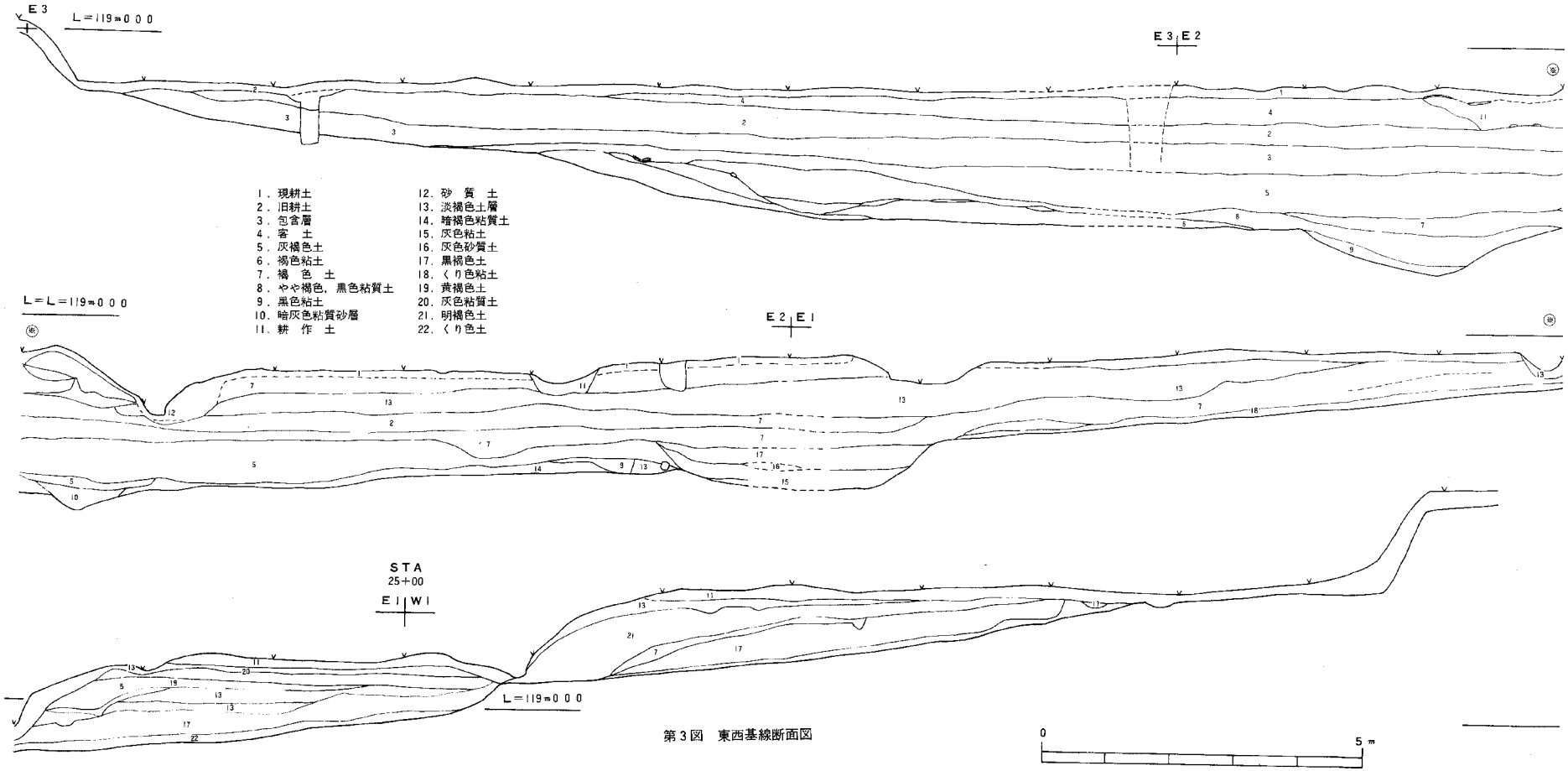
この遺構面の上の包含層からは，奈良末～平安初めと考えられる遺物が出土した。

鍛冶炉ののる面の下層にも包含層が存在し，その上層のものとほぼ同じ時期の遺物の包含層となっていた。

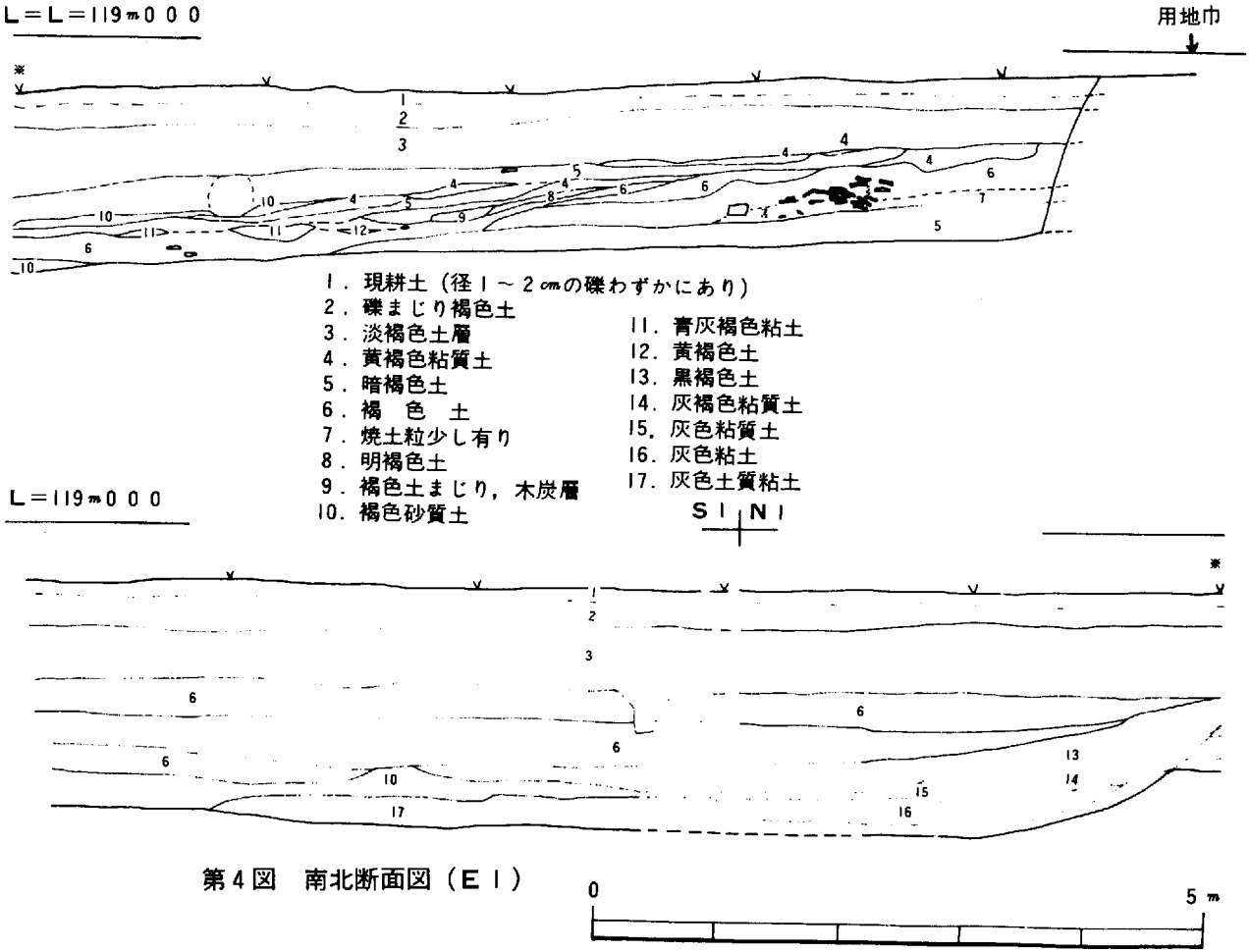
下層の包含層の下面において，10棟の建物，2本の南北にのびる溝，井戸状遺構，池状遺構を検出した。建物のう



第2図　グリッド設定図


E 3
L＝119ｍ０００
E 3 E 2
L＝L＝119ｍ０００
E 2 E 1
STA
25＋00
E 1 W 1
L＝119ｍ０００
1．現耕土
2．旧耕土
3．包含層
4．客　土
5．灰褐色土
6．褐色粘土
7．褐　色　土
8．やや褐色，黒色粘質土
9．黒色粘土
10．暗灰色粘質砂層
11．耕　作　土
12．砂　質　土
13．淡褐色土層
14．暗褐色粘質土
15．灰色粘土
16．灰色砂質土
17．黒褐色土
18．くり色粘土
19．黄褐色土
20．灰色粘質土
21．明褐色土
22．くり色土
0
5 m

第３図　東西基線断面図


L＝L＝119m000
用地巾
L＝119m000
S I N I
1．現耕土（径1～2cmの礫わずかにあり）
2．礫まじり褐色土
3．淡褐色土層
4．黄褐色粘質土
5．暗褐色土
6．褐　色　土
7．焼土粒少し有り
8．明褐色土
9．褐色土まじり，木炭層
10．褐色砂質土
11．青灰褐色粘土
12．黄褐色土
13．黒褐色土
14．灰褐色粘質土
15．灰色粘質土
16．灰色粘土
17．灰色土質粘土
0
5 m

第4図　南北断面図（E I）

ち１棟は南北３間以上×東西１間以上の礎石をもつ建物であり，別の１棟は雨落ち溝の一部が残存する南北４間×東西２間の建物で，残りのものは，１間×１～４間という大きさである。

谷～西尾根東斜面で確認された12棟の建物のうち，11棟はその長軸（もしくは短軸）の方向が磁北方向（南北）となっている。建物の方向が一定しているのは，この建物群の一つの性格を物語るものであろう。

建物・溝その他の遺構の中には前後関係のわかるものがあるが，いずれも，奈良末～平安初めの非常に短期間につくられたものであり，包含層はこれまた短期間のうちに形成されたものである。

調査は，昭和48年２月16日をもって終了した。

なお，調査途中において，縦貫道用地の北半分を工事側に明け渡した（昭和48年１月23日）。これは契約時の公団と県教委の約束によるものである。

また，鍛冶炉の内２基は保存すべく木枠を組んで取り上げた。１基は津山収蔵庫に保管しているが，他の１基は崩壊して保管不能となった。

3）整　理

遺物の整理，図面の整理，原稿作成等は津山収蔵庫で，あるいは別の遺跡の発掘現場事務所で行なった。

発掘して得た資料はすべてを整理し報告すべきであるが，その一部を整理，報告したにすぎない未整理のものも含めて資料は，津山収蔵庫に保管している。

調査ならびに整理の分担

調　査	実測・測量	井上・田仲・大賀・林・森安・小倉・小林・寺坂
	写真撮影	井上・田仲
整　理	遺物の実測	井上・田仲
	製図	井上・田仲
	遺物の写真撮影	井上・田仲
原稿執筆		井上・田仲

4）日誌抄

昭和47年４月10日　器材の搬入，器材小屋建設，滝川の東の水田部分にトレンチ設定，調査を開始

４月11日～20日　水田部分のトレンチ掘り下げ。

４月19日～28日　滝川の西の丘陵部分にグリッドを設定。

４月21日～６月６日　滝川の西の丘陵部分のトレンチ掘り下げ。

６月７日～７月15日　梅雨時期のため，発掘調査を中断して，遺物の整理を行なう。

（７月17日～８月11日　調査は引き続き中断。この間，津山市と勝田郡の境にある梶原遺跡の調査

を行なう。）

8月17日	調査を再開。
8月21日	トレンチの掘り下げを終る。
8月22日	グリッドの平面的掘り下げ開始。
8月26日～28日	Ｅ１Ｎ１の遺構検出。
8月29日～9月8日	Ｅ４・Ｅ５掘り下げ。
9月5日～7日	岡山県開発公社の大賀，林両技師補の応援を得て，グリッド設定続行。
9月11日～12日	Ｅ４Ｓ２・Ｅ５Ｓ１の遺構検出。
9月13日～14日	Ｅ４Ｓ１・Ｅ５Ｓ１の遺構掘り下げ。
9月15日・16日	Ｅ５Ｓ２・Ｅ６Ｓ２・Ｅ７Ｓ２掘り下げ。
9月20日～27日	Ｅ５Ｓ２・Ｅ６Ｓ２・Ｅ７Ｓ２遺構検出及び遺構掘り下げ。
9月26日	谷部分の掘り下げ開始。
9月28日～10月3日	Ｅ５Ｓ２・Ｅ５Ｎ１・Ｅ６Ｓ２・Ｅ７Ｓ２遺構実測及び写真撮影。
9月26日～10月16日	Ｅ２Ｎ１・Ｅ３Ｎ１・Ｅ２Ｓ１・Ｅ３Ｓ１掘り下げ。
10月16日～31日	Ｅ１Ｎ１掘り下げ。
11月	Ｅ１Ｎ１・Ｅ２Ｎ１・Ｅ２Ｓ１・Ｅ３Ｎ１・Ｗ１Ｎ１の掘り下げ遺構掘り下げ，実測，写真撮影。
12月1日～6日	Ｅ２Ｎ１・Ｅ３Ｎ１掘り下げ。
12月7日～14日	Ｗ１Ｎ１・Ｗ２Ｓ１掘り下げ，Ｅ２Ｎ１・Ｅ３Ｎ１遺構検出，遺構掘り下げ，実測，写真撮影。
12月15日	Ｗ１Ｎ１・Ｗ２Ｓ１掘り下げ。
12月16日～22日	Ｗ１Ｎ１・Ｗ２Ｓ１遺構検出，遺構掘り下げ，実測，写真撮影。
12月21日	鍛冶炉２基の取り上げ準備をはじめる。
12月25・26日	Ｅ３Ｓ１掘り下げる。
昭和48年1月5日～14日	Ｅ１Ｓ１・Ｗ１Ｓ１掘り下げ。
1月15日～20日	Ｅ１Ｓ１掘り下げ。Ｅ３Ｓ１・Ｗ１Ｓ１遺構検出，実測。
1月21日～23日	Ｅ１Ｓ１掘り下げ。Ｅ２Ｓ１・Ｅ３Ｓ１・Ｗ１Ｓ１遺構掘り下げ。
1月23日	工事用ブルドーザー，谷を通過。以後工事用車が毎日頻繁に通る。
1月25・26日	Ｅ２Ｓ２・Ｅ３Ｓ２掘り下げ。Ｅ２Ｓ１遺構掘り下げ。
1月27日～31日	Ｅ２Ｓ１・Ｅ２Ｓ掘り下げ。Ｅ１Ｓ１・Ｅ３Ｓ２・Ｗ１Ｓ１遺構検出，遺構掘り下げ。Ｅ２Ｓ１実測，写真撮影校。
2月1日～7日	Ｅ２Ｓ１掘り下げ。Ｅ１Ｓ１遺構掘り下げ。
2月8日～15日	Ｅ４Ｓ２・Ｅ３Ｓ１・Ｅ３Ｓ２・Ｅ２Ｓ２・Ｅ１Ｓ１・Ｅ１Ｓ２・Ｅ２Ｓ１・Ｗ１Ｓ１遺構検出，遺構掘り下げ，実測，写真撮影。
2月16日	実測補足。器材搬出，撤収。

（田仲満雄）

第2章　歴史的、地理的環境

山陽と山陰を分かつ脊梁として，中国山地がある。その中国山地を形成する山脈の一つに，標高1240mを測る那岐山がある。このはるかに聳え雄姿を示す那岐山も，その麓には，広大な台地が展開する。その台地の南端に接して間山丘陵があり，その南限を画する。その間山の西麓を滝川が南流しており，勝央町平付近からは，勝間田を中心に，低地がやや展開する。その低地の西北端の，滝川西岸の台地上に平遺跡は所在する。この勝間田の低地の北には，間山丘陵があり，その丘陵上，及び裾の台地上には多数の遺跡が存在する。

間山南麓の縁辺の低丘陵は，その大部分が農地に開発されている。その開発に伴って，弥生式土器，石斧，石庖丁等の遺物が出土しており，広い範囲にわたる集落の存在したことが推察される。それ等集落址の一つとして小中遺跡がある(註1)。

平遺跡の近くには，比較的多くの前方後円墳の存在が知られている。それ等は，勝間田の低地の縁辺に展開する低丘陵上に在る。そして，それ等の古墳の周辺には，さらに多く古墳が存在する。間山南面の丘陵上は，それ等の古墳による一大古墳群が形成されている（註2)。　さらに，低地の南側にみられる丘陵上にも多くの古墳が存在する。字畑屋，為本，七十の地域には，約 100基の古墳群が形成されている。

間山南麓にみられる前方後円墳，前方後方墳で，全長の判っているものについてそれを記すと，琴平山古墳48m，堂山古墳48m，岡高塚古墳65m，よつみ屺古墳23mである。

歴史時代に入ると，勝間田遺跡(２)，田井，豊久田，畑屋，七十地区の古窯址群，間山経塚等が知られる。勝間田遺跡は，平遺跡に南接して所在する遺跡で，蓮華文鐙瓦(奈良前期)，礎石，円面硯等が出土しており，蓮華文鐙瓦に先行する時期の掘立柱の建物群が知られている。また，この遺跡は，寺院址もしくは，官衙址と推定されるものであり，平遺跡との関連においても注目される遺跡である。田井，豊久田，畑屋，七十の地区には，多くの古窯址が知られているが，中でも，豊久田鎌谷の古窯址で発見された須恵器片に,「郡」字押印のものが見られ，平遺跡出土のそれとの関係が注目される古窯址群である。間山経塚（10）からは，多量の瓦経が発見されている。しかし，現在では，そのほとんどが散逸しており，わずかに数点の瓦経片が知られるのみである。

勝間田地区を中心に述べてきたのであるが，以上のように，この地域は，古くから開けており，政治的，文化的にも発展のみられた地域でもある。それ等歴史的背景のもとに，平遺跡が存在するものであり，また，それ等を背景に，平遺跡の性格を考えるべきであろう。　　（井上　弘）

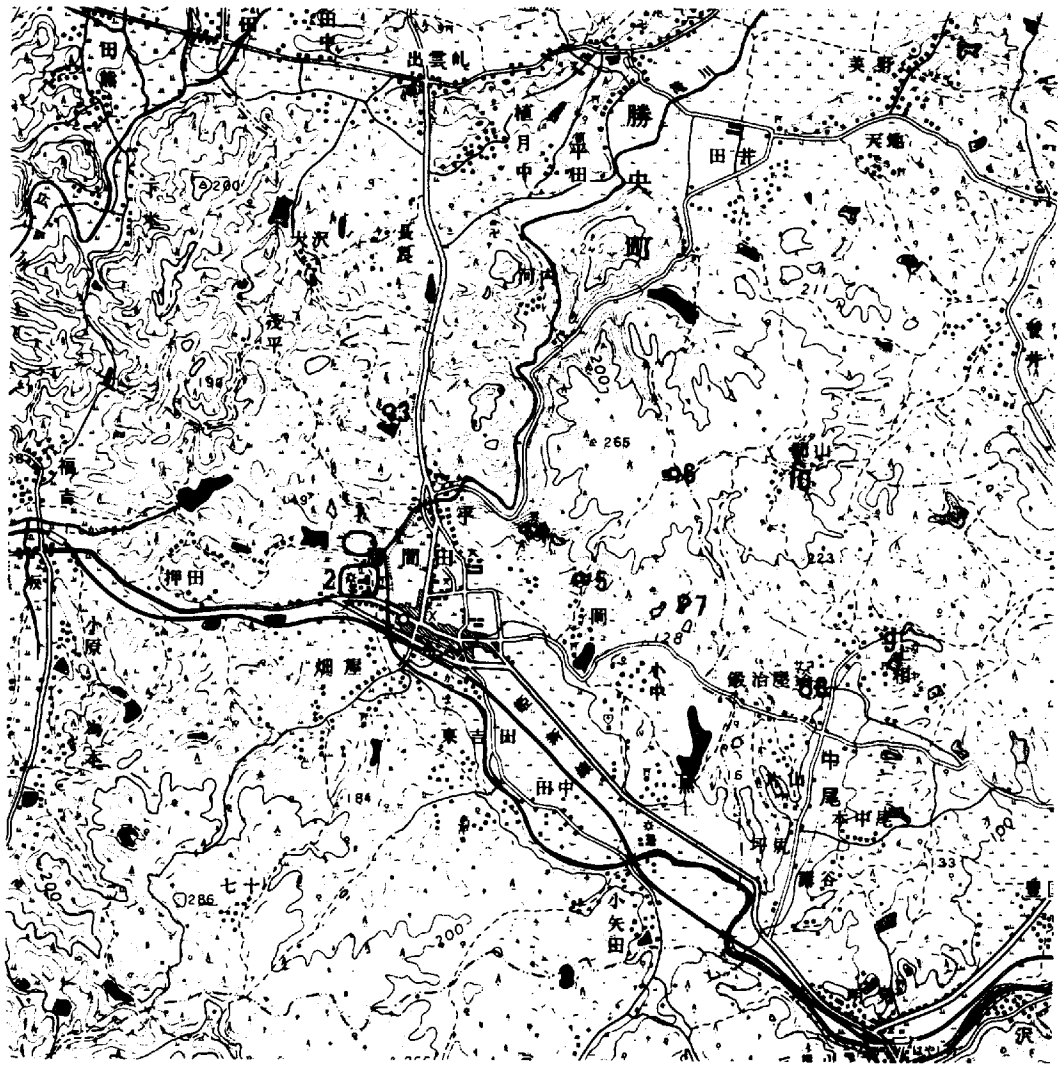
註１　「小中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７』

註２　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７

註３　「津山市史」原始・古代

註４　「岡山県埋蔵文化財報告」４

「文化財だより」19号　岡山県文化財保護協会



第5図　地形図（1/5）

1	平　遺　跡	勝田郡勝央町平
2	勝間田遺跡	勝央町勝間田川西
3	愛宕山古墳	勝央町
4	琴平山古墳	勝央町岡琴平山
5	堂山古墳	勝央町岡堂山
6	岡高塚古墳	勝央町岡高塚
7	よつみ山古墳	勝央町岡よつみだわ
8		英田郡美作町上相鍛冶屋迫
9	上相中塚古墳	美作町上相金屋
10	間山経塚	勝田郡勝央町岡間山

第3章　遺　　構

平遺跡のＥ２以東を，東尾根部と，谷部とに分けて説明していきたい。

東尾根部（Ｅ４，５，６区）

この地区からは，非常に多くの柱穴を検出した。その柱穴の直径は30～40cmである。それらの柱穴が，三段に削られた尾根の各段から検出された。しかし，その多くは一つにまとまりのある建物として組み合う関係がみられなかった。それは一つには，発掘区域が路線巾と限定されていることにもよるだろう。先にも述べたが，尾根は三段に削られている。その最上段からも多くの柱穴を検出した。しかし，それ等は建物としてのまとまりは確認できなかった。この段の東南隅近くで石組遺構を検出した。遺構は2.76ｍ×3.28ｍ四方で，深さ約0.65ｍの方形の掘り方の中に，人頭大もしくはそれよりやや大の石が多く集積していた。石は，人為的に集められたものであろうが，構造物を，構築するような，組み方はみられず，乱雑に集積するものである。石組みの間からは，備前焼の破片が出土した。また，石組を埋めた土は，きめ細かい粘質の少ない土であった。それは，同尾根上から検出された他の柱穴を埋める土とも共通しており，備前焼の出土は，それ等の時期を決める有力な手懸りとなるものであった。

中段での柱穴の検出例は，上，下二段に比べ少数であった。しかし，そのほとんどは一直線上に並ぶもので，４条の柵状の遺構となるものである。

下段は，他の段に比べ最も多くの柱穴を検出した。そして，５棟の建物を確認した。

建物Ⅰ（第６図）

２間×３間の建物で，12本の柱穴により構成される。柱穴間は，北列，南列とも，東より2.1ｍ，2.1ｍ，2.4ｍを測る。また，東列，西列は，北より2.3ｍ，2.1ｍを測る。各柱穴の掘り方の形は，円形であり，その直径は，0.3～0.5ｍを測る。また，残存する柱穴の深さは平均0.5ｍを測る。

建物II

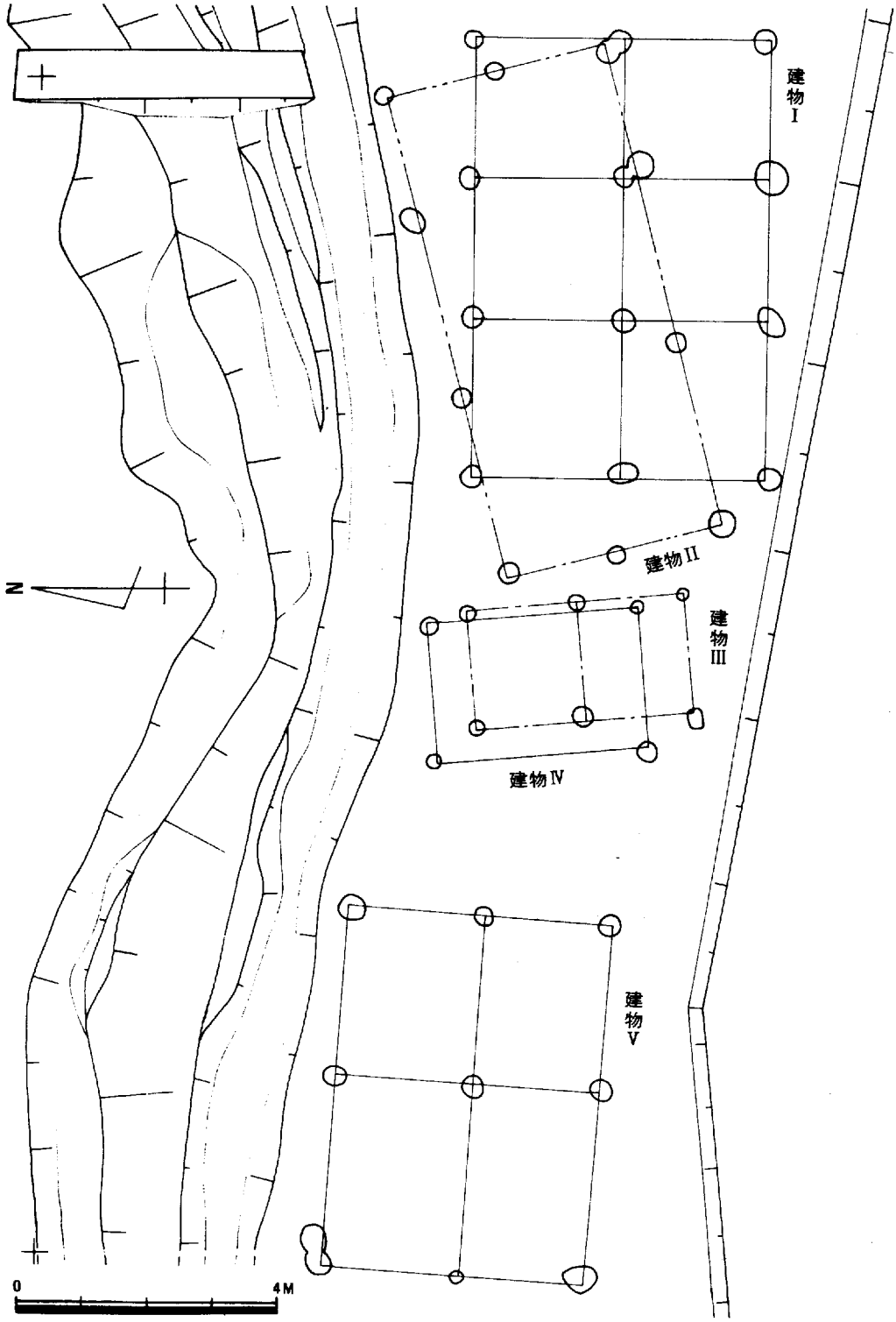
２間×３間の建物で，10本の柱穴よりなる。柱穴間は，北列，南列とも東より 2.0ｍ，2.7ｍ，2.8ｍを測る。東列，西列は北より1.7ｍ，1.7ｍを測る。柱穴の掘り方の形は円形で，直径は0.3～0.5ｍを測る。

建物III

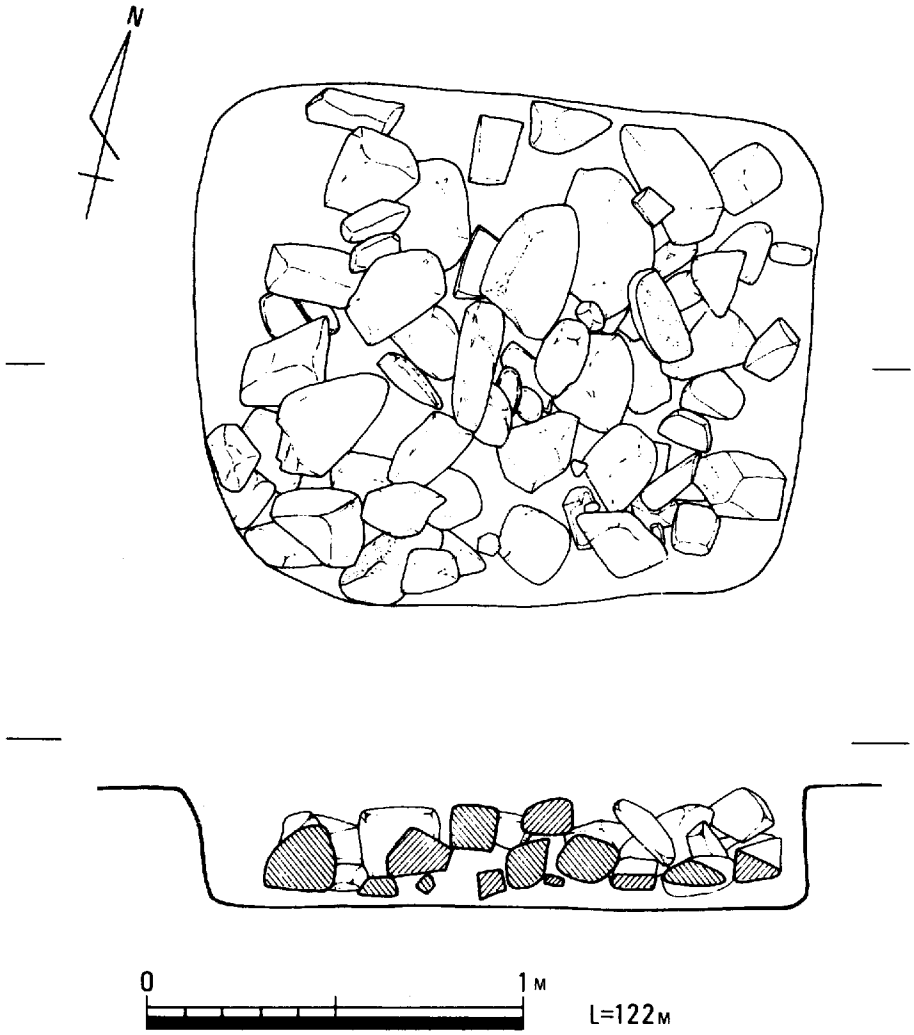
２間×１間の建物で，６本の柱穴よりなる。柱穴間の距離は，北列，南列ともに1.8ｍを測る。東列，西列は北より 1.7ｍ，1.7ｍを測る。柱穴の掘り方の形は円形で，直径は0.2～0.3ｍを測る。

建物Ⅳ

１間×１間の建物で，４本の柱穴から成っている。柱穴間の距離は，北，南列ともに2.2ｍを測る。



第6図　I・II・III・IV・V平面図



第7図　石組遺構

東，西列は 3.2mを測る。柱穴の掘り方の形は円形で，直徒は0.2~0.3mを測る。

建物V

2間×2間の建物で，9本の柱穴よりなる。各柱穴間の距離は，北列，南列ともに東より 2.7m，3.0mを測る。東列，西列，北より 2.1m，2.0mを測る。柱穴の掘り方の形は円形で柱穴の直径は，0.2~0.4mを測る。

以上のように5棟の建物を確認したのであるが，その中でも建物I，IIが建築物としては整った形状を示す。そして建物III，Vの造りが最も雑である。それ等は，建物の用途によるものか，構築された時期差によるものかは不明である。いずれにしても，5棟の建物が同時に建っていたことは

考えられないが，造られた時期の巾は，認めなければならないのであろう。しかし，年代的幅については近似した時期が考えられる。尾根地区で検出した遺構の主なものは以上である。それ等の造られた時期であるが，推定出来る手懸りは，先に述べた石組遺構である。その出土遺物からして，一般的に，中世に属するものとすることができるであろう。

尾根上にみられる段であるが，それ等は，検出した建物等が，段の裾に接して構築されていることを考えれば，建物築造に先立って，それ等建物の築造の必要に応じてその段を形成したものと考えられる。そして各段は1.3～1.5mの段差がある。

谷　部

谷部については，包含層上面と，包含層の下層との二層に分けて遺構を検出することができた。上層にあっては，直径 0.2～ 0.5 mの多数の柱穴を検出したのであるが，建物として組合さるものは確認できなかった。しかし，下層にあっては谷部の東半分で７棟の建物を確認した。それ等の建物は，その長軸もしくは短軸がほぼ同一の方向を示していた。

建物Ⅵ

南北に長い２間×５間の建物である。検出した柱穴の数は12本である。柱穴間の距離は，北列が東から2.25m,2.10m，南列が2.35mを測る。東列は北から2.10m，2.10m,2.10m,2.10m，1.80m，西列も北から2.10m，2.60m，2.20mを測る。柱穴の掘り方の形は円形で，直径0.7～0.85mを測る。

この建物の北東部に接して「L」字状に溝を検出した。その溝の方向は，建物に沿うものであり，同建物の雨落溝とも考えることができる。いずれにしても，溝と，柱穴を埋める土は同一であったことから，時期的にも近似していることは認められるであろう。

建物Ⅶ

建物Ⅵの南側に，その延長上にある１間×１間の建物である。柱穴間の距離は，北側，南側が3.35m，東側，西側が3.85mを測る。柱穴の掘り方の形は円形で，その直径は0.7～0.85mを測る。

建物Ⅷ

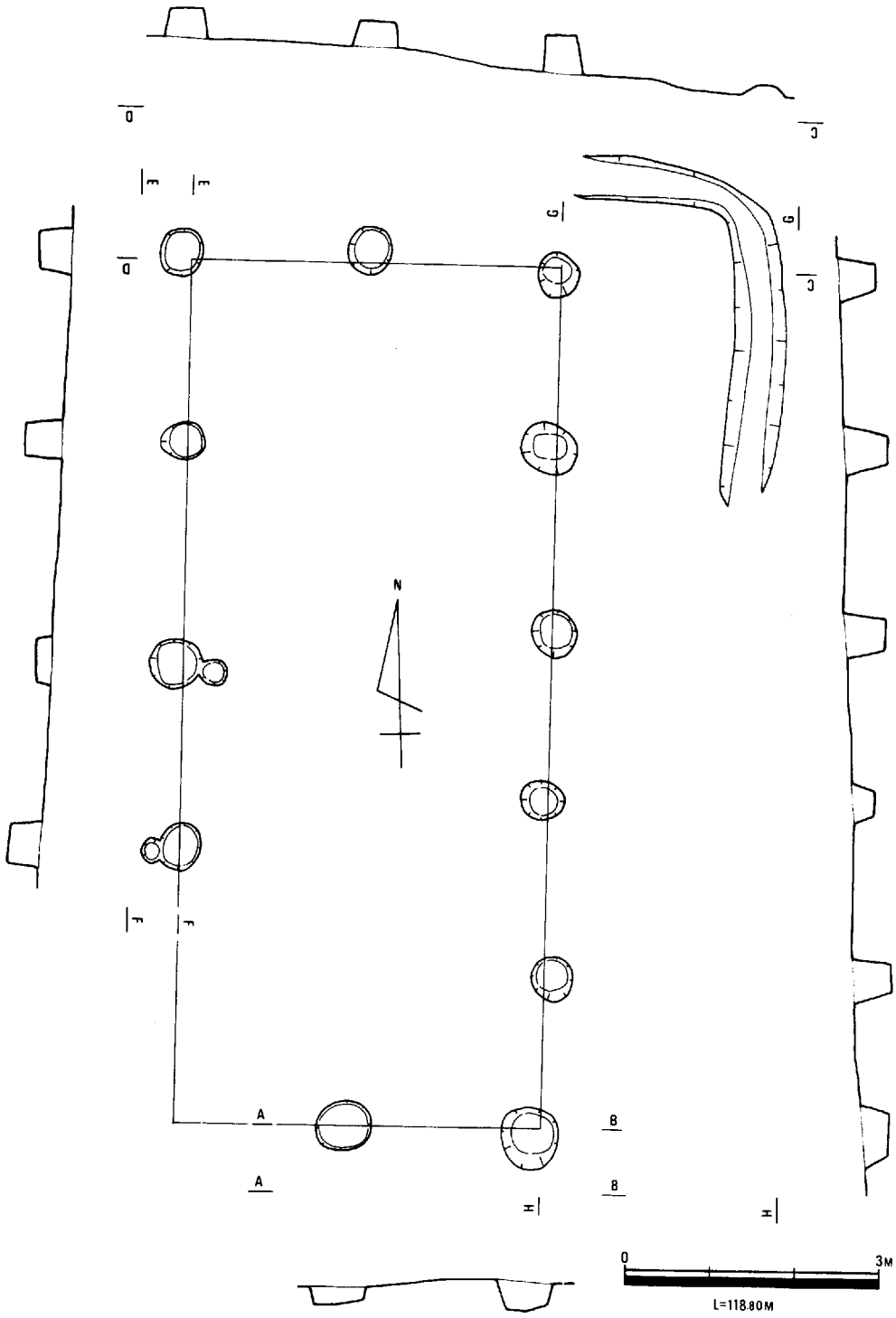
建物Ⅵの西側にある。１間×１間の建物である。柱穴間の距離は，北側，南側が2.35m，東側，西側が2.05mを測る。柱穴の掘り方の形は円形で直径は0.7～0.8mを測る。

建物Ⅸ

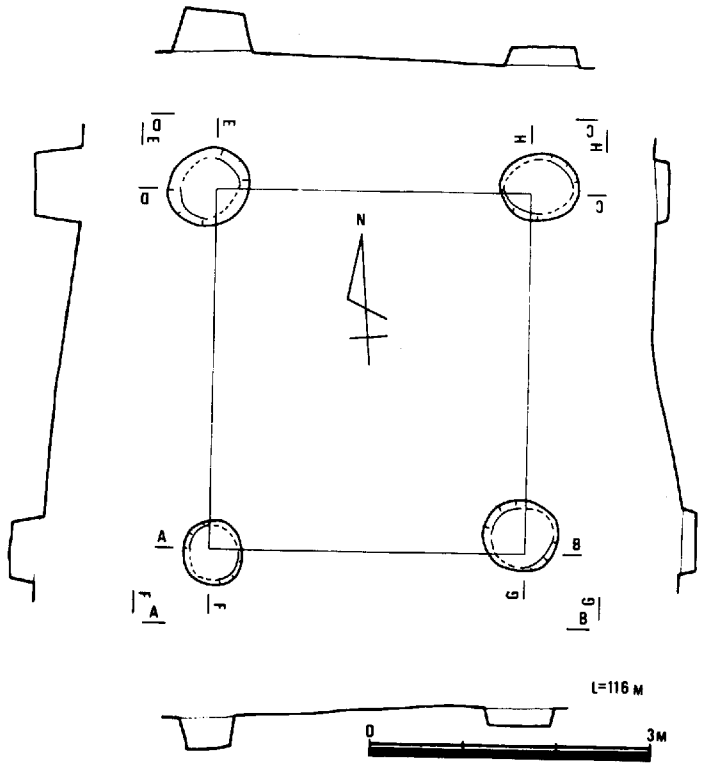
建物Ⅷと相接して検出された。建物は，１間×２間で，６本の柱穴よりなる。柱穴間の距離は，北側，南側が1.90mを測る。東列，西列は北から2.00m，1.60mを測る。柱穴の掘り方の形は円形で，直径は0.6～0.8mを測る。

建物Ⅹ

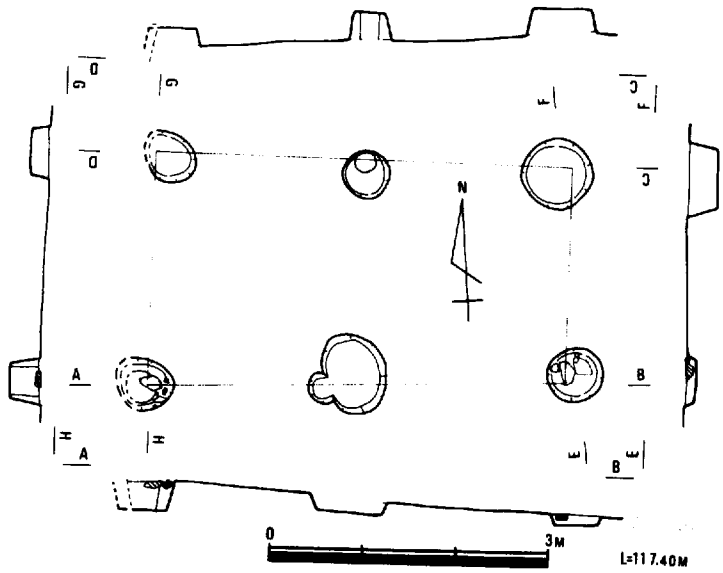
用地北限に接して検出されたので建物の全体は不明である。建物は，２間×１間以上の規模である。柱穴間の距離は，南列で東から1.80m，1.80mを測る。東列，西列は1.50mを測る。柱穴の掘り方の形は方形のもので，一辺0.45～0.6mを測る。



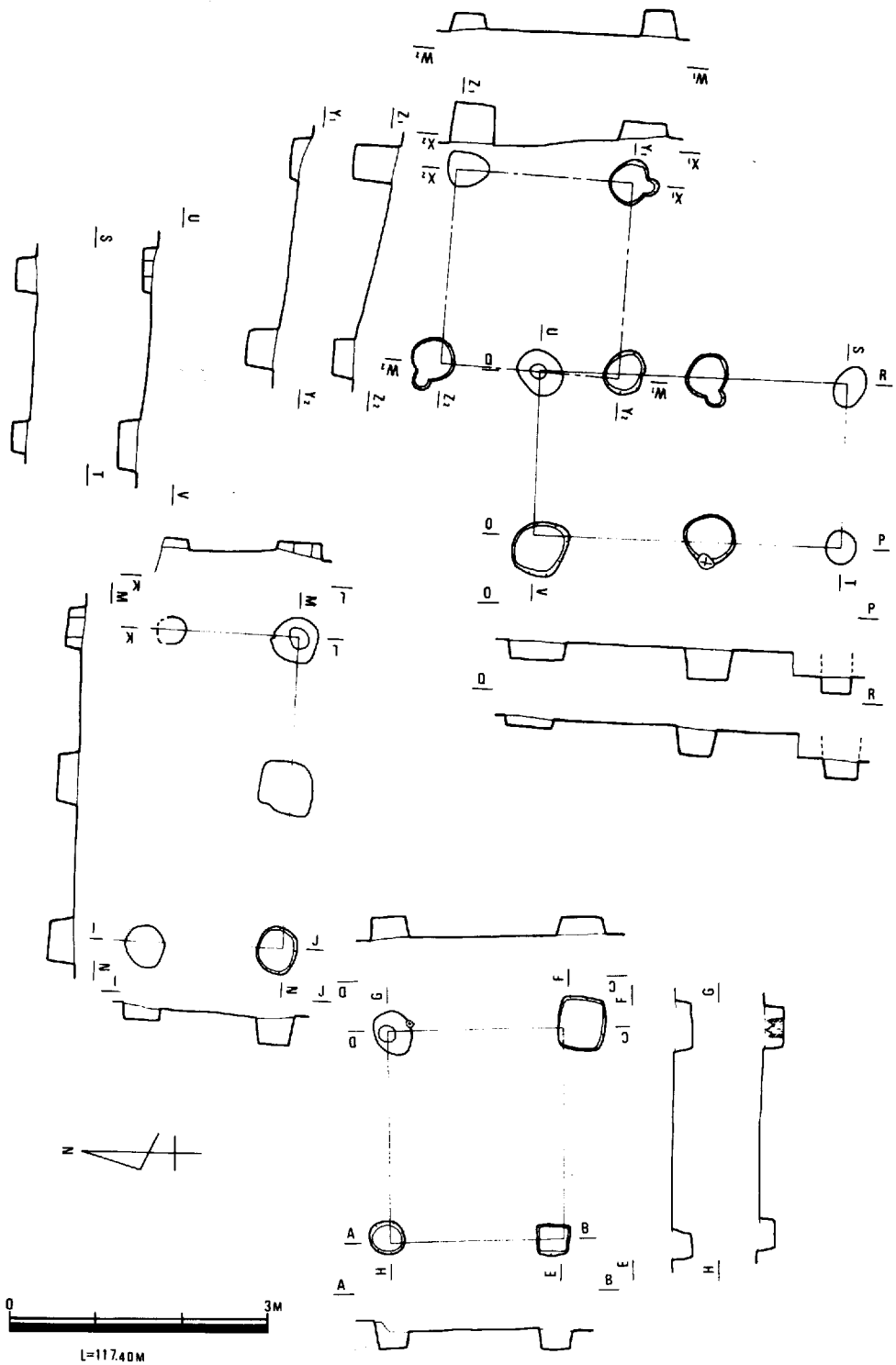
第8図　建物Ⅵ　平面図・断面図



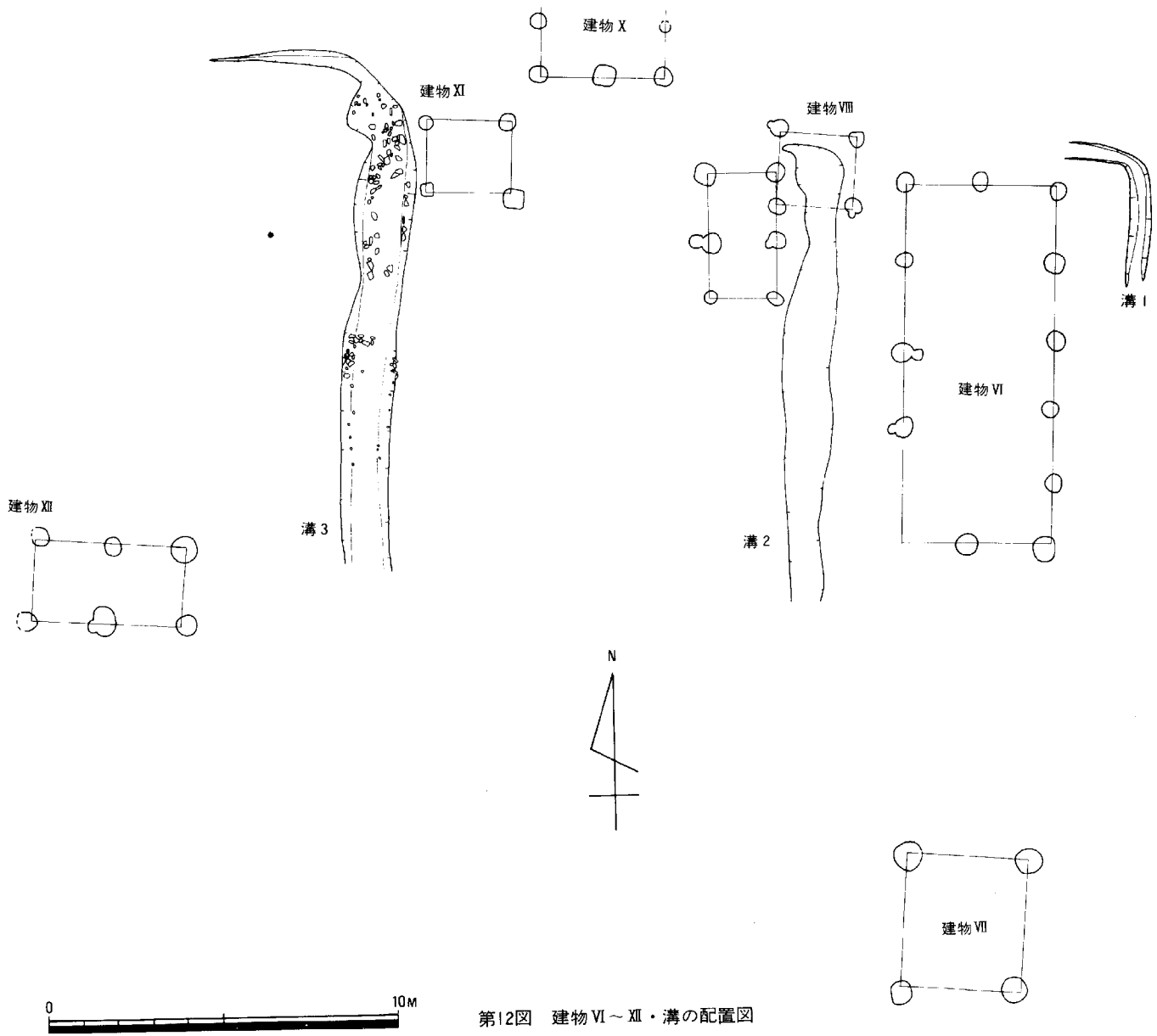
第9図　建物Ⅶ　平面図・断面図



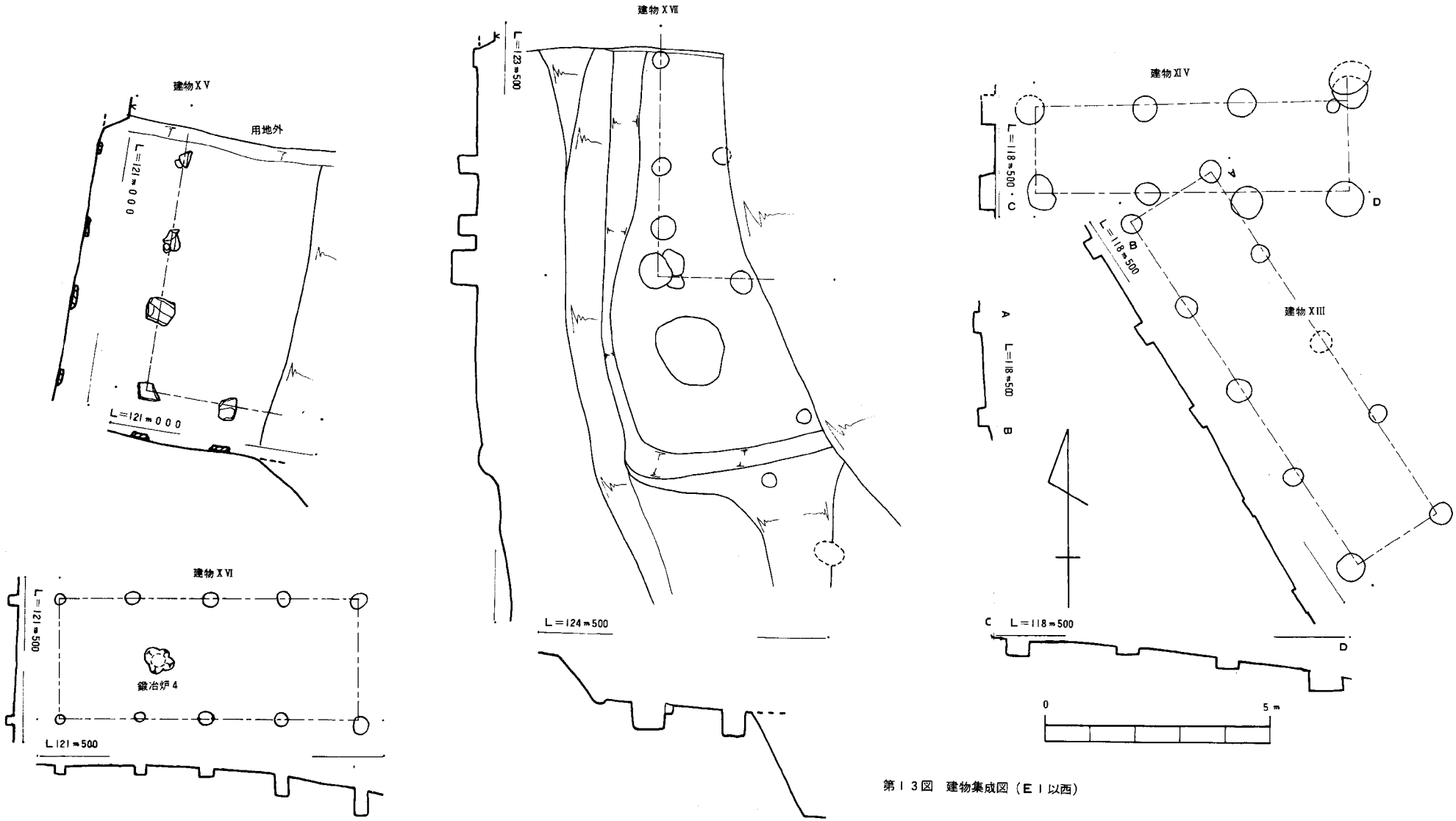
第11図　建物Ⅻ　平面図・断面図



第10図　建物Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ平面図・断面図



第12図　建物 VI ～ XII ・溝の配置図



第13図　建物集成図（E1以西）

建物XI

1間×1間の規模である。柱穴間の距離は，北，南列が1.95m，東，西列が2.00mを測る。柱穴の掘り方の形は方形のもので，一辺0.4～0.65mを測る。この建物の北東の柱穴には，柱根の木質が残存していた。

建物XII

2間×1間の建物である。柱穴間の距離は，北列，南列が東より2.25m，2.25mを測る。東列，西列は2.40mを測る。柱穴の掘り方の形は円形で，直径0.6～0.7mを測る。

溝2

建物VIIIの中から南に流れるもので，巾約1.20mの溝である。

溝3

E2N1区内で西から東に流れ，ほぼ直角に南へ流れるものである。東西に延びる部分は明確には検出出来なかったが，南流する部分は，比較的明瞭に検出した。溝の巾は平均約1.5mを測る。溝は，岸に沿って長径0.2m大の石を置く。また，岸に沿っては，杭列を検出した。溝には，多量の流水があったのであろうか，砂の堆積がみられた。その砂層の中より，多量の須恵器と土師器が出土した(第17.19.22図)。それ等の出土遺物は，平遺跡の下層に検出した建物群の築造され，使用された時期に一致するものと考えられる。それ等の時期は，一般的に奈良末～平安初とすることができるであろう。

以上のように，建物，溝等を検出したのであるが，建物は，建物VI以外は，一般的にみて小形であるが，大きくて，堂々とした建物の少ない地区である。しかし，それに比べて，出土した遺物の量は多い。その点は，この遺跡を考える上で，重要な意味をもつものと考えられる。また，建物の長軸，もしくは短軸は，同一方向を示しており，一つの企画性の存在したことを推察させる。

(井　上)

建物XIII

この建物は，包含層の下面において検出され4間×1間のものであり，長軸の方向はN－25°－W，芯心距離は2.6mを測る。この建物の建築当時の地形に合わせて建てられたものであろう。この建物がなくなった後に井戸状遺構がつくられて建物の柱穴の1つがこわされている。

建物XIV

建物XIIIのすぐ北にあって南北1間×東西2間（芯心距離は2.6m）の大きさの建物である。この建物は，隅丸方形の池状遺構を埋めた後に建てられている。

建物XV

平遺跡で検出した17棟のうち唯一の礎石をもつ建物である。

西尾根東斜面の端部にあり，建物XIII，XIVより一段高い所に位置しており，この建物の東側は削られてなくなっており，北は縦貫道の用地外に続くものと思われる。南北3間以上×東西1間以

上の規模で，芯心距離は２ｍで，残存の長軸方向はＮ－9 °－Ｅを測る。礎石の大きさは人頭の２～４倍大のものである。

建物XVI

包含層中に確認した遺構面に検出された。南北１間×東西４間の大きさで，芯心距離は南北３ｍ東西1.5mを測る。この建物の中央やや西寄りの所に鍛冶炉４がある。建物 XVI の中に鍛冶炉４がつくられていた可能性もある。

建物XVII

建物XVIの西の斜面の一段高い所に位置し，建物 XV と同様に東半分が削り取られている。南北２間×東西１間以上の建物である。芯心距離は1.8mを測り，西の斜面からの水を防ぐためと思われる溝（巾0.6～1.0m，深さ0.15～0.20ｍ）の一部が西南隅にＬ字形に残存している。

井戸状遺構

建物XIII の放棄後に，建物の柱穴の一つを含めて建物の一部と重なり合う形で窪がたれた素掘りのもので，掘り方上端の径3.0m，深さ1.0ｍの逆円すい台形に掘られており，内部にはグライ化した粘土が充満していた。粘土の間には広葉樹の葉が若干残っていた。掘り上げ後，わずかな湧水が認められた。建物XIV との共存関係にある井戸であろうか。

池状遺構

隅丸方形の掘り込みで底面はほぼ平坦になっている。隅丸方形の一辺は４ｍ，深さは 0.7ｍを測る。この底には大人の拳大の円礫が並べてあった。礫の上にはグライ化した粘土が堆積していた。当時，池として利用したものと思われる。この池が埋ってしまった後に，建物 XIV が建てられた。

鍛冶炉１

Ｅ１Ｎ１の北東隅に存在する（包含層中の遺構面上）。

径35cm，深さ15cmの穴を掘り，淡褐色粘土，暗褐色土で埋めた後に厚さ５cm以上の粘土を張って炉としている。40cm×50cmの楕円形を呈し，深さは10cmの炉本体（１次）が残っている。

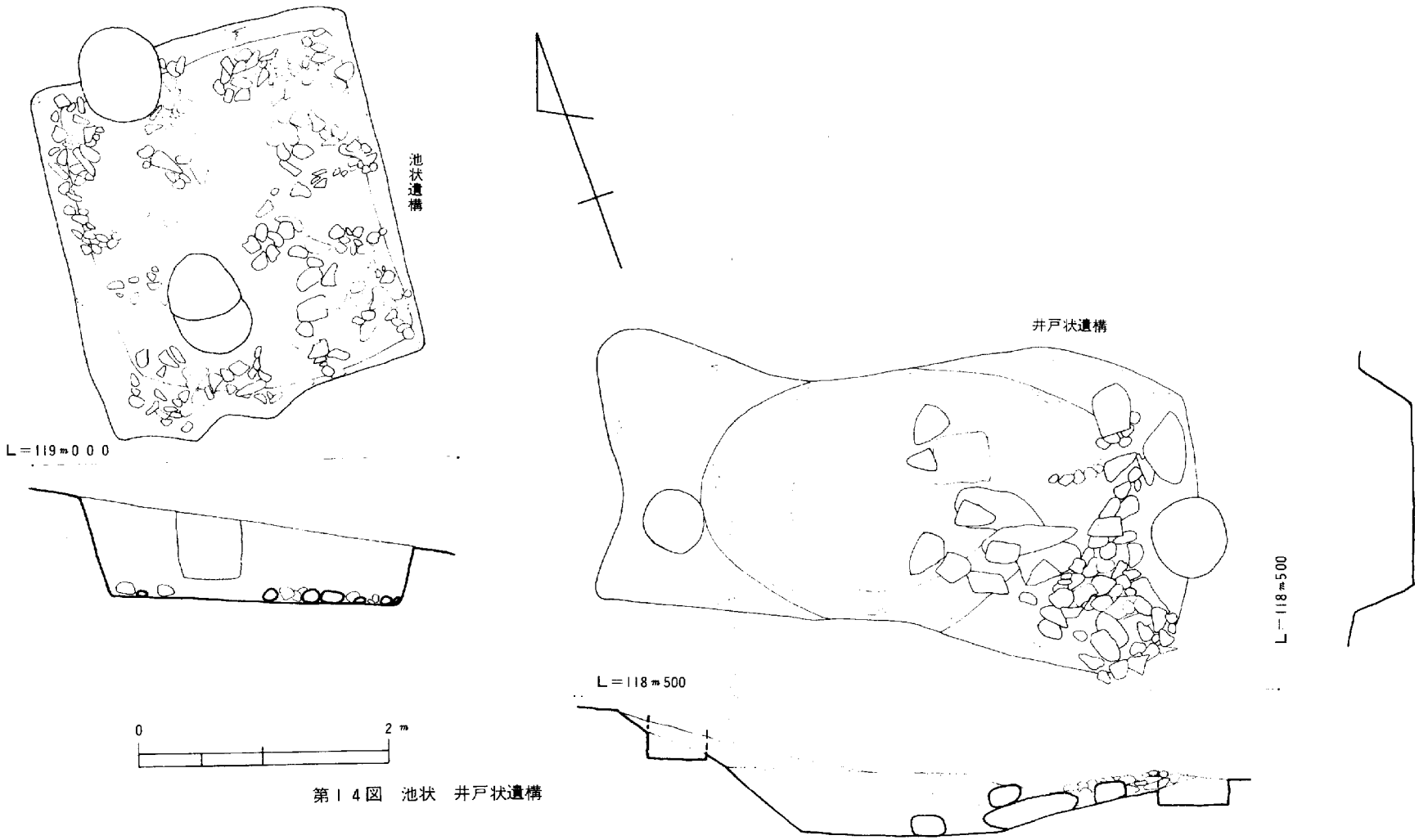
鍛冶炉１は，１次の炉面にさらに粘土（厚さ3.5cm以上）を張って２次の炉面をつくっている。２次の炉面には還元炎で焼かれた炉床が残っている。

粘土張り付けによって炉面は高くなっているが，これに伴って「羽口」の位置も高くつくりなおされている。

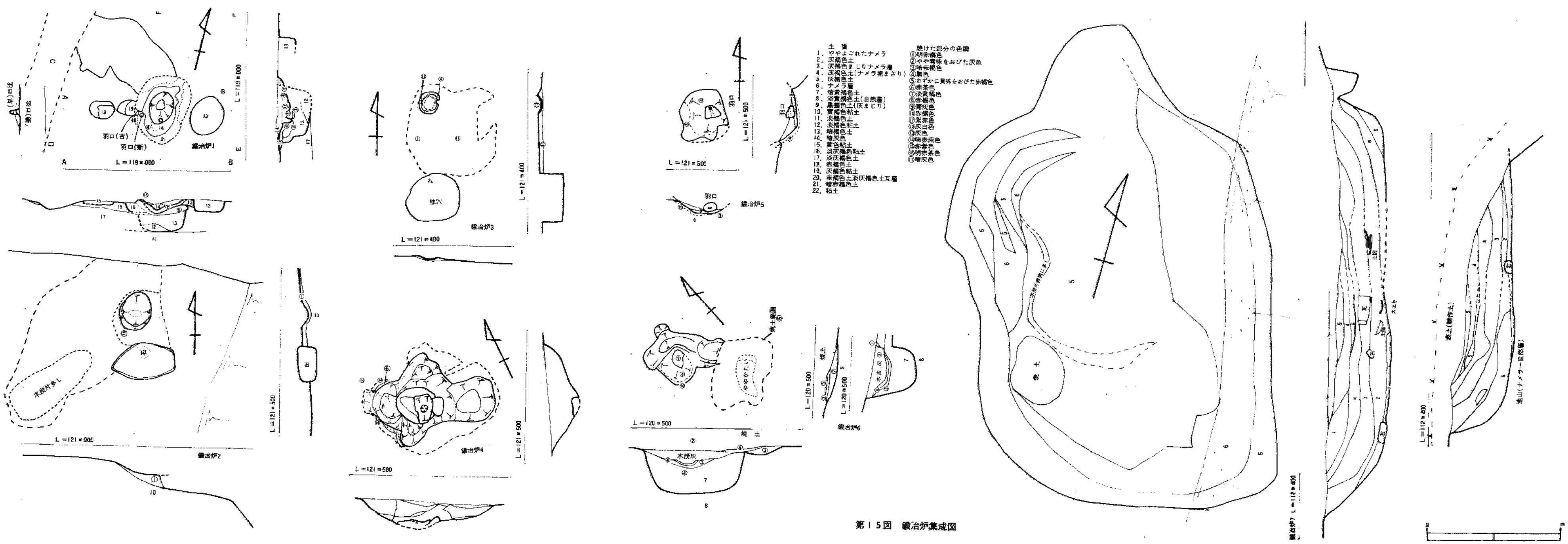
なお，この炉は，$\frac{1}{4}$切断し取り上げて，津山収蔵庫に保管している。

鍛冶炉２

鍛冶炉２は，建物 XV の中に位置しているように見える。この炉面はかなり削られていて，明赤褐色に焼けた部分（径30cm）が残っており，この焼けた部分のまわりからは，木炭片，焼土片がかなり多く検出された。また，炉と考えられる焼けた部分のすぐ南には，上面が平坦でその一部が熱を受けてやや赤味を帯びた石（50cm×35cm×15cm）がある。金床のかわりに利用されたものと思わ



第14図　池状　井戸状遺構


羽口(古)
羽口(新)
L＝119＝000
鍛冶炉1
L＝121＝400
鍛冶炉3
L＝121＝500
羽口
鍛冶炉5
木炭片多し
L＝121＝000
鍛冶炉2
L＝121＝500
鍛冶炉4
焼土
L＝120＝500
木炭層
鍛冶炉6
土　質
1．ややよごれたナメラ
2．灰褐色土
3．灰褐色まじりナメラ層
4．灰褐色土(ナメラ塊まざり)
5．灰褐色土
6．ナメラ層
7．暗黄褐色土
8．淡黄褐色土(自然層)
9．黒褐色土(灰まじり)
10．黄褐色粘土
11．淡褐色土
12．淡褐色粘土
13．暗褐色土
14．暗灰色
15．黄色粘土
16．淡灰褐色粘土
17．淡灰褐色土
18．赤褐色土
19．灰褐色粘土
20．赤褐色土淡灰褐色土互層
21．暗赤褐色土
22．粘土
焼けた部分の色調
①明赤褐色
②やや青味をおびた灰色
③暗赤褐色
④黒色
⑤わずかに黄味をおびた赤褐色
⑥赤茶色
⑦淡黄褐色
⑧赤褐色
⑨青灰色
⑩赤銅色
⑪紫赤色
⑫灰白色
⑬灰色
⑭暗赤紫色
⑮赤紫色
⑯明赤茶色
⑰暗灰色
焼土
鍛冶炉7
L＝112＝400

第15図　鍛冶炉集成図

れる。

鍛冶炉 3

鍛治炉２の南西８ｍの地点にあり，炉の底の一部が残存していた（15cm×18cmの楕円形で深さ３cm）この炉面も還元炎で焼かれた部分が残っており，炉面のまわりは楕円形に熱をうけて赤褐色に変色している。この楕円形の変色部分の一部は焼けていない。羽口の設けられた部分と考えられる。

鍛冶炉 4

この鍛治炉は，建物 XVI の中央やや西寄りの位置に検出された。鍛治炉４の覆い屋が建物 XVI である可能性がある。

鍛治炉４はやや不整形な楕円形に焼けた部分が検出された（100cm×80cm）。この中に一つの凹みを中心に四つの凹みがくっついた形で炉の全体がつながっている。数回のつくりかえの結果と思われる。中央底部には２枚の炉面（還元炎で焼かれている）の一部が残存していた。中央部分の深さは現存 25 cmである。

鍛冶炉 5

鍛治炉４の南５ｍの所で検出された。北に向けて斜めに削られているが，現存値で35cm×45cm，深さは南で15cmを測る。

炉の底には厚さ0.3cmの灰まじり黒褐色土があり，この上に羽口が落ち込んでいた。羽口の断面は７cm×12cmの楕円形で，現存長は10cmである。この羽口の中央には径２cmの円孔が見られる。鍛治炉５にセットされていた羽口であろう。

鍛冶炉 6

鍛治炉５の南東８ｍの所で検出された。この炉は，鍛治炉１と同様に，まず pit を掘り，その pit を暗黄褐色土で埋めた後に炉をつくっている。

炉面は還元炎で焼かれており，この炉の凹みには，木炭，灰がつまっていた。また，この炉に続く南東部分にも40cm×50cmの焼けた部分があり，その中央部は特にかたくなっている。

北西の炉が廃棄されたのちに，南東の焼けた土のある部分に新しい炉がつくられたが，その本体は後世に削りとられ炉の下部の焼けた部分のみが残っていた可能性もある。

鍛冶炉 7

鍛治炉６の南東８ｍの所で検出された。短径2.4m以上×長径3.5ｍの楕円形で，その深さは 0.4ｍを測る掘り方があり，この掘り方を埋めた後に炉をきずき，後世に削られて炉直下の焼土が残存しているものと思われる。この浅い pit 状の遺構が鍛治炉の下部構造とすれば，この遺跡の他の鍛治炉に比し特異なものである。この pit状の遺構の埋め土中からは，奈良末～平安初めの須恵器，土師器，瓦が少量出土している。

鍛治炉７基は同一面上につくられていたもので，それらの間の前後関係は不明であるが，いずれ

も平安時代の初め頃の所産と考えられる。　（田仲）

第4章　遺　　物

(1)須恵器

平遺跡出土の遺物の中で最も多量に出土したものである。それ等の出土量は，非常に多く，今回の報告書を書くに当っても全体に目を通したものでない。しかし全体的に見た一般的な傾向は示しているものと考えられる。

杯（第16，17，18図）

杯は器形から大きく2分することができる。つまり，高台の付くものと，高台の付かないものである。成形は全体的に入念である。

高台のつくものは，体部は内外ともヨコナデがみられ，内部底面は，ヨコナデもしくは，ナデがみられる。外部底面は，ヘラ切り後に高台を貼付するもの，ヘラ切り後ヨコナデ調整を行ない，高台を貼付するものとがある。第　図1，第　図14～17が，深いものである。それ等は，比較的大型である。立ち上りの深さは，半径に近いものもある。体部の立ち上りの浅いものは，その口径から，3種に分けることができる。立ち上りの深さは，全体に4.5cm前後である。

口径の大きさから分類すると，A．10cm以下，B．10～13cm，C．14～16cmの3種に分けることができる。それ等はいずれも，やや開きながら，ほぼ直線的に立ち上る。一部に，口縁部付近でさらにゆるくではあるが外反するものある。全体に，Aとしたものに入念整美なものがある。

高台のつかない杯であるが，その成形をみると，体部は，内外ともにヨコナデの調整がみられ，内部底面は，ヨコナデ，もしくはナデがみられる。外部底面は，ヘラ切り（第17図14～16，第18図）と，ヘラ削りのものとがみられる。一般的に，底部ヘラ削りの杯が仕上げは入念である。これ等を口径の大きさから分類すると，10～13cmと，14～16cmの2種類に分類できる。体部は，そのほとんどは，やや開きながら立ち上り，端部は丸い。中には，口縁部近くでやや外反するものもある。第18図9・14は，体部が，やや大きく開きながら立ち上るものである。それ等は，他に比べて仕上げはやや雑である。

炉明皿（第18図19～22）

いずれも，底部は糸切りで，体部は内外面ともヨコナデがみられる。

蓋（第19，20図）

蓋は，いずれもつまみの付くものである。それ等の共通する成形法をみると，天井部外面はヘラ削り，もしくはヨコナデがみられる。内面は，全体にヨコナデの及ぶものと，一部ヨコナデ，一部ナデによるものとがある。

蓋を形態により分類すると，A．天井部が丸みをもち，曲線を描いて口縁端部にいたるもの第19図4～10・16・21，第20図3～5）　B．天井部上面に平坦面があり，口縁部近くで屈曲して，段

状のものが明瞭にみられる（第19図２・３・11～15・17・19・20，第20図１・２）。他に，小形壺の蓋（第19図1，第20図１・２），薬壺の蓋（第19図18，第20図17・18）等がみられる。

第19図19は，Bに属するものであるが，この一例は，天井部上面の平坦部に，ヘラ切りの痕跡がみられる例である。第20図19にみられるものは，口縁部内面にかえりをもつもので，杯の高台様のつまみのつくものである。類似例は，美作地方では美作国府，久米郡宮尾遺跡（久米郡衙推定遺跡）からの出土例が知られている。

盤（第21図２～７）

盤の調整をみると，内外面ともヨコナデがみられ，底部外面も入念なナデもしくはヨコナデがみられる。全体に仕上げは入念で整美なものが多い。体部は，やや開きながら直線的に立ち上るものが多い。中には，口縁部近くでやや外反する例（３）もみられる。口径は，推定径であるが小さいもので18.5cmから，大きい例で26cmを測るものがある。

皿（第21図１・６～13，第22図１～６）

皿は，底部はヘラ切り痕のみられるもの，ヘラ削りによる調整がなされているものがある。体部は，内外面ともにヨコナデにより，底部内面は，中心までヨコナデの及ぶものと，ナデによるものと二種ある。一般的に，底部外面がヘラ削りなされている例（第21図８～13・第22図１～３・６）が，入念に造られている。体部は，やや開きながら直線的に立ち上るものがほとんどである。底部は，平面になるものと，弧を描くものとがある。〔盤と皿との区分は，便宜上高台を目安にした。つまり高台の付くものを盤とし，それの無いものを皿として分類した。ここでは便宜上，その様に分類したのみで，深い理由によるものでないことを断っておく。〕

鉢（第23図５・６）

いずれも貼付けの把手をもつ例である。６は，さらに高台が付くものである。体部は，弧を描きながら立ち上り，口縁部近くでさらに外反する。内外面ともにヨコナデによる調整がみられる。器形は優美である。７は，体部が，やや開きながら，直線的に立ち上るものである。形は６に比べて単純である。器体の内外面は，ヨコナデによる調整がみられる。

すり鉢（第23図７）

須恵器製のすり鉢である。体部は，開きながら，直線的に立ち上るもので，器壁は大きさに比して薄い。外面はあらくヨコナデしたもので，内面は，ヨコナデ後，不規則に縦にかき目を施したものである。かき目は雑である。

甕（第24図）

甕も出土しているが，図示出来る個体が見つけられなかったので図は割愛したが，それ等にみられる特徴を列記しておく。

外面には，叩き目のものと，掻き目のものがみられる。叩き目は，平行線状の叩きと，格子目の叩きがある。内面は，同心円状の叩き目と，掻き目のものがみられる。内面が掻き目のものは，外

面が格子目の叩きであるものがほとんどである。

(2)**土師器**（第22図７～22）

土師器は，器形の種類からすれば，蓋，高杯，皿，盤，椀に分けられる。土師器は，いずれも内外面ともに入念なヘラ磨きがみられる。

７は蓋である。形態は，須恵器のそれに似る。他に，つまみも出土している。８は高杯である。杯の部分と，脚の一部が残存している。脚は不正形の五角形である。脚は，円柱に粘土を巻き付けヘラ状工具で削り出したものと考えられる。土器は，全体を入念なヘラ磨きの後，丹彩を施している。９・10は高杯の脚部である。いずれも，円柱に粘土を巻きヘラ状工具で削り出したものと考えられる。脚の断面はほぼ正六角形を呈している。外面は入念にヘラ磨きがなされている。11も高杯の脚部である。この脚も，円柱に粘土を巻いて仕上げたものと考えられる。外面は上下にヘラ磨きがなされている。内面は，下半はヘラ削りがなされている。脚部の断面は円形である。12～18は皿である。土器の体部は，開きながら直線的に立ち上るもので，内外ともに入念なヘラ磨きがなされている。19・20は盤である。高台は貼付けで，体部はやや開きながら，直線的に立ち上る。土器は内外面ともに入念なヘラ磨き後，全面に赤色顔料を塗布している。22は椀で，器面には同じく入念なヘラ磨きがみられる。

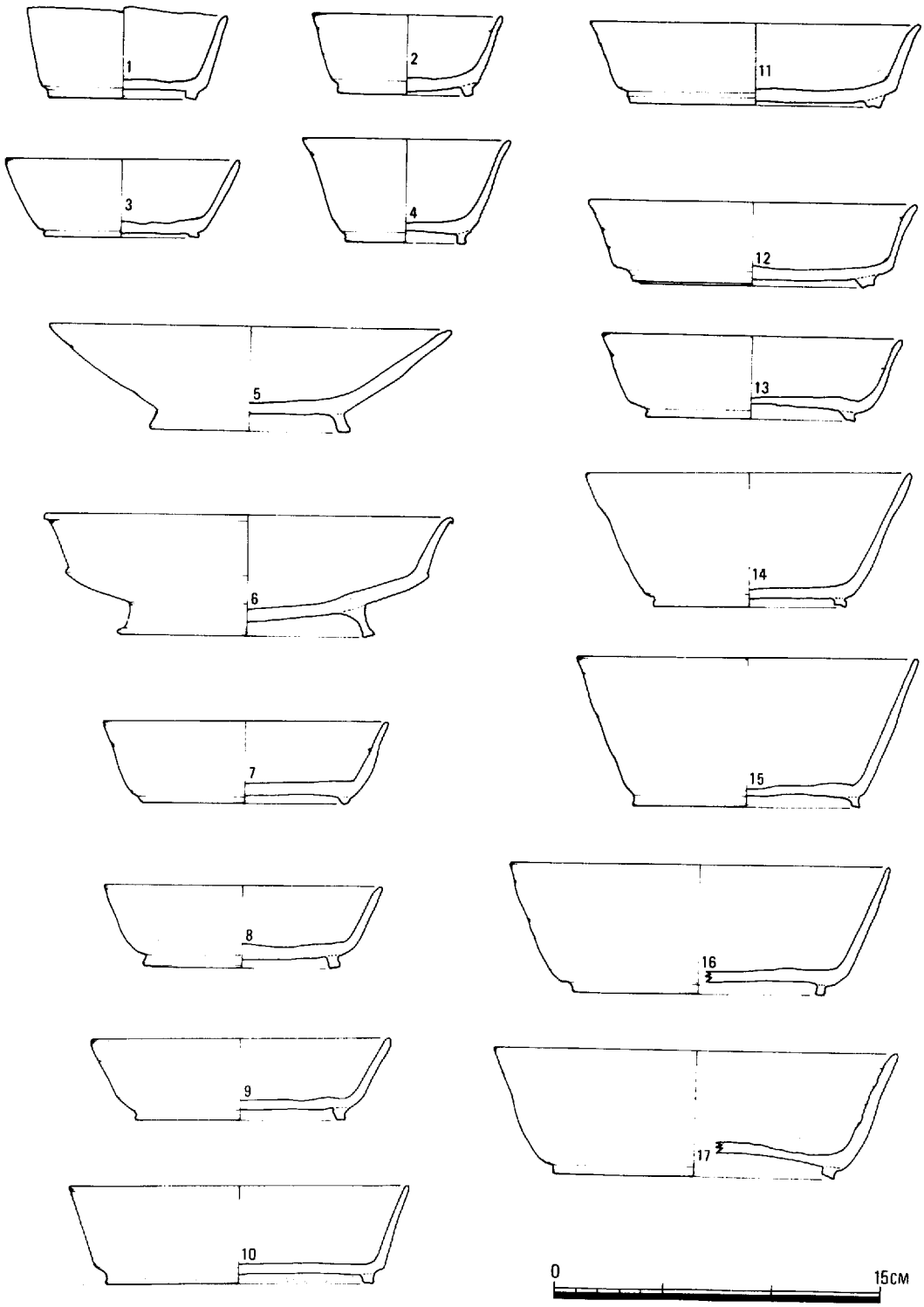
須恵器・土師器の時期であるが，概略的には，奈良末～平安初とすることができるであろう。それも第17，19，22図のものは，Ｅ２区の溝３から出土した一括遺物である。この遺物の時期が，平遺跡が存在した一つの主要な時期と一致するものと考えられる。つまり，推定される遺跡の性格が最も発揮された時期でもあると考えられる。その時期を，奈良末～平安初とすることができるであろう。そして他の図は，包含層より出土した遺物である。それだけに，先に述べた時期のものを中心に，若干は前後の時期のものも含むものと考えられる。しかし，断定できないが新しい遺物でも平安期のものと考えることができる。

(3)**施釉陶器**（第23図１～４）

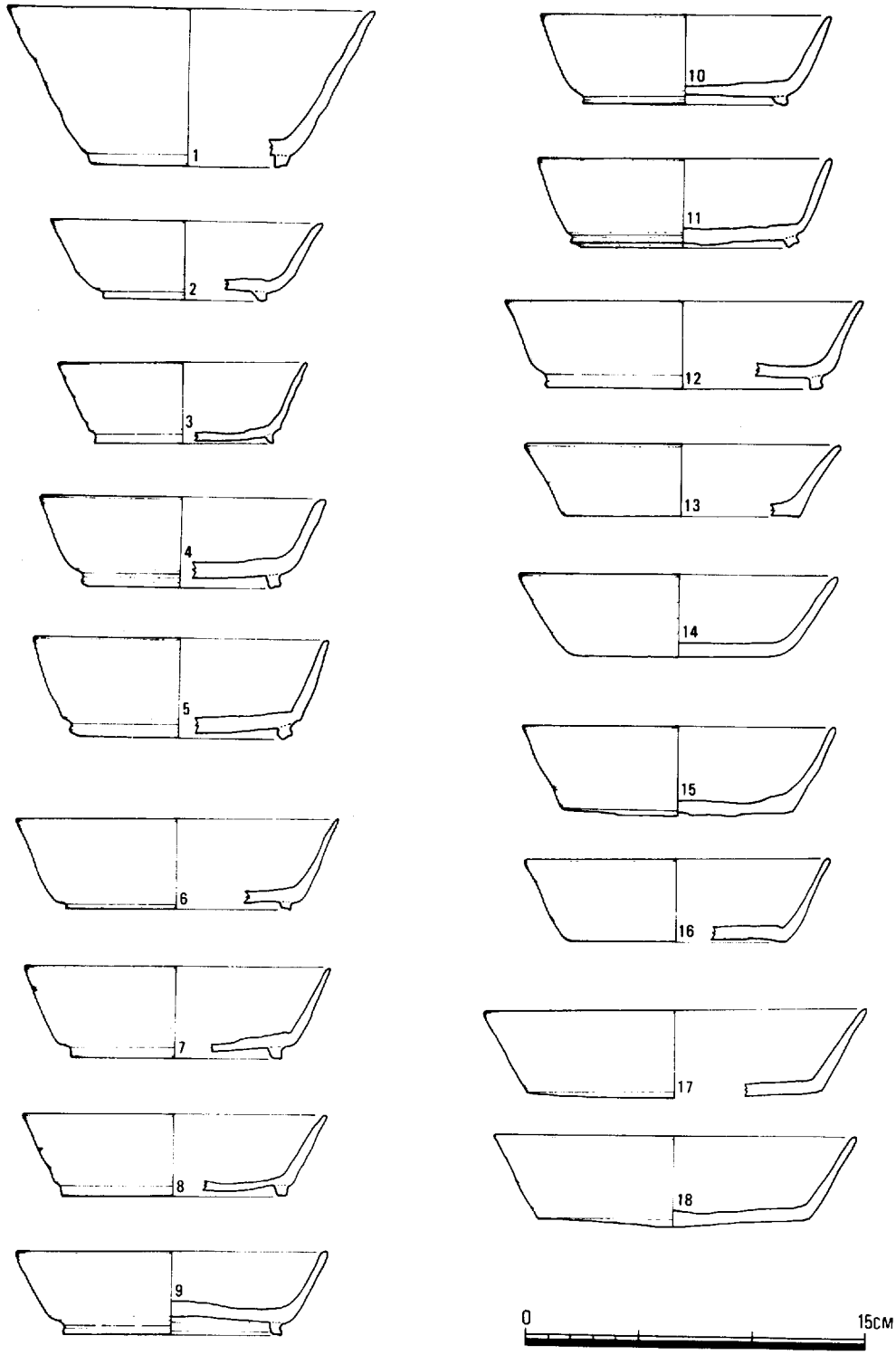
１，２は灰釉陶器である。器形は優美に造られている。釉は，内面のみで均一に施されている。釉の色は，淡緑色である。この灰釉陶器は，愛知県猿投窯のものと考えられる。出土遺物の中には若干ではあるが灰釉陶器がみられ，その流入経路は一つの問題点である。

３，４は緑釉陶器の底部である。３は，削り出し高台である。釉の色調は濃緑色と淡緑色がある。また胎土は，乳褐色を呈す軟質のものと，青灰色を呈する硬質のものとがある。その比率は，硬質10に対し軟質３の割合である。出土した破片数は約170点と，出土量は非常に多い。美作地方にあっては，美作国府址からの出土量に次いで多量に出土している。

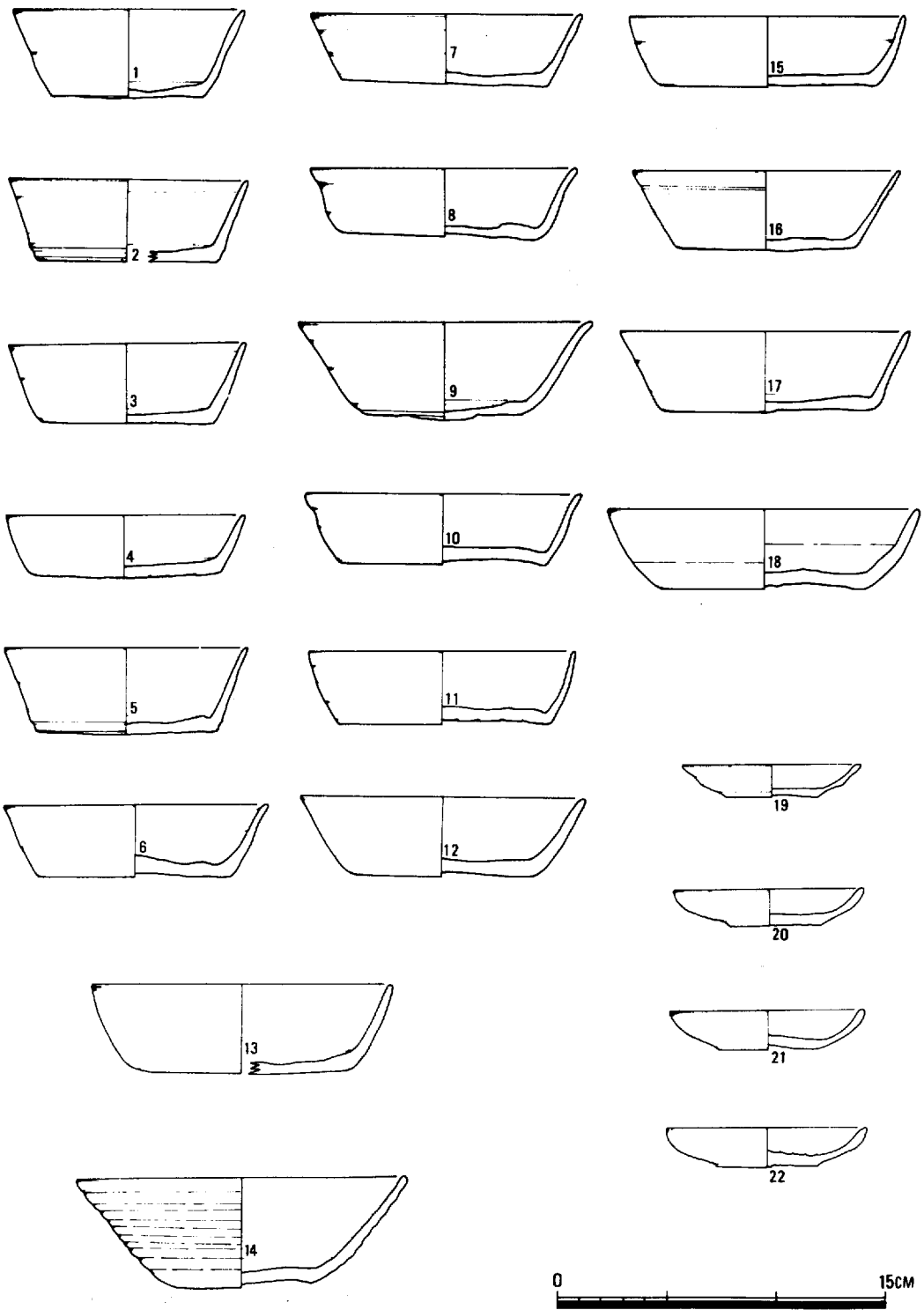
緑釉陶器の出土数の多いことは，この遺跡の性格を考える上で重要な資料となる。同時に，須恵器の出土量の多いこと，灰釉陶器がみられることも考慮に入れる必要もある。それ等を考慮すれば，同時期と考えられる建物の規模とは不均衡でもある。しかし，建物群の企画性と合せて平遺跡の性



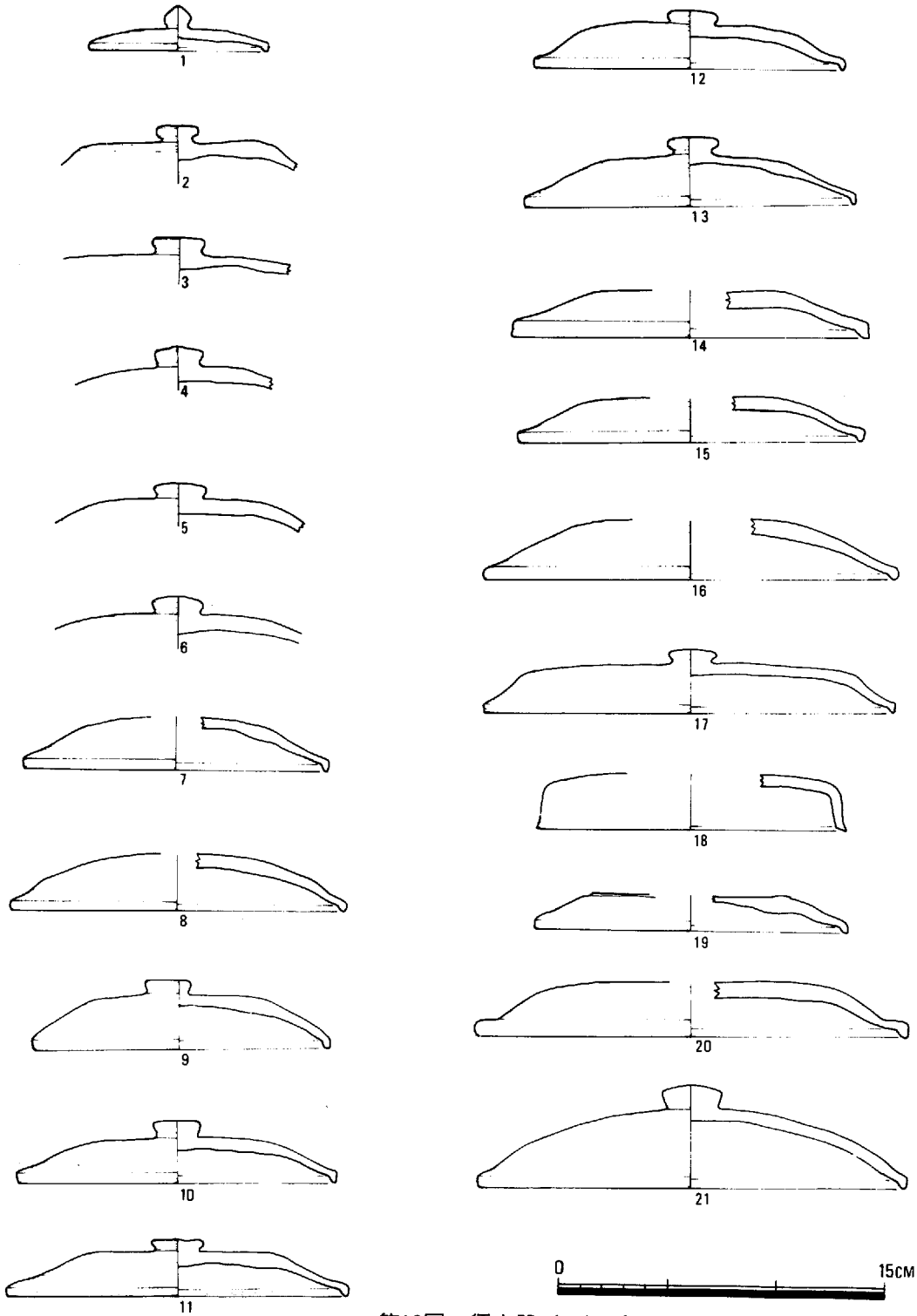
第16図　須恵器（杯）



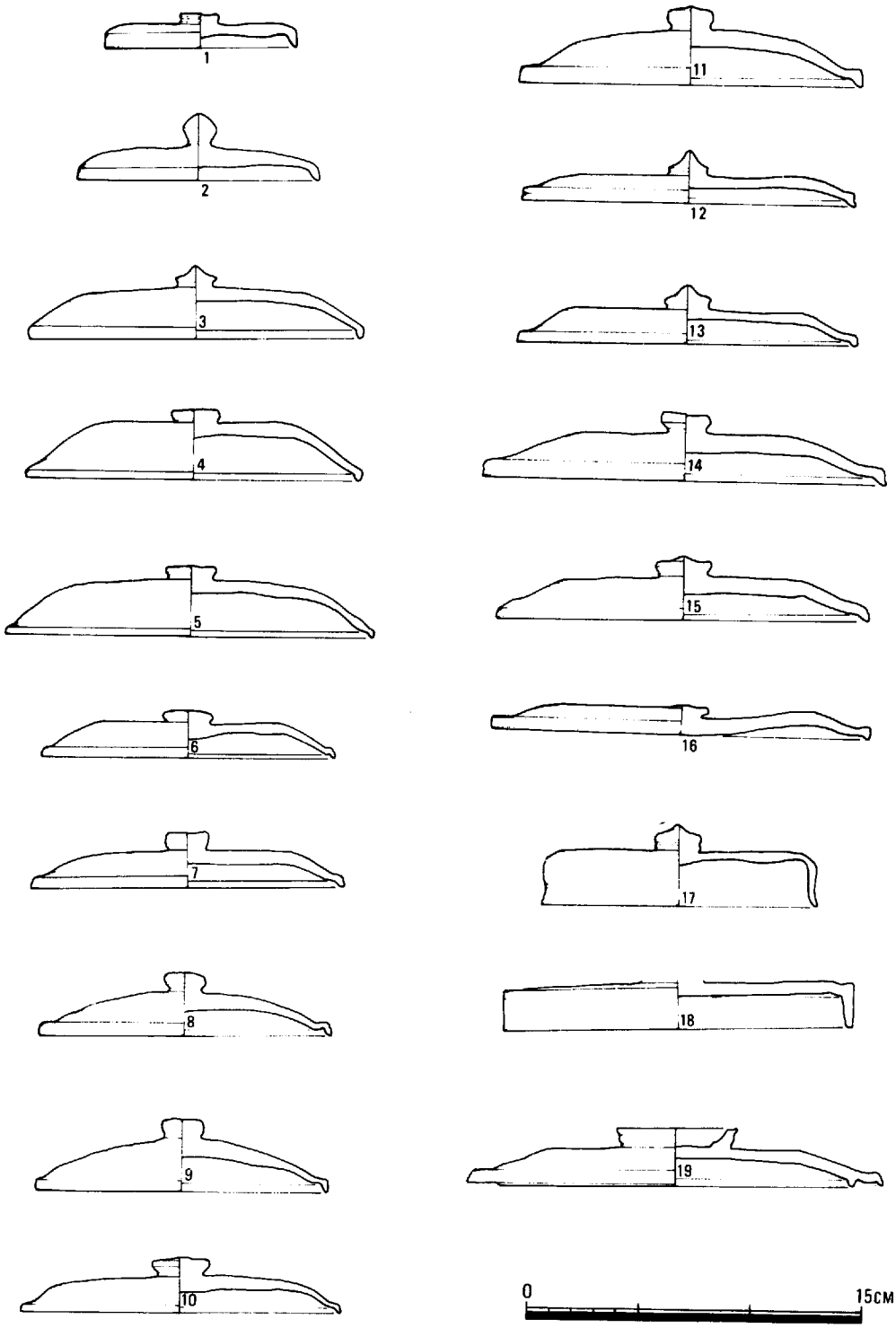
第17図　須恵器（杯）〔溝出土〕



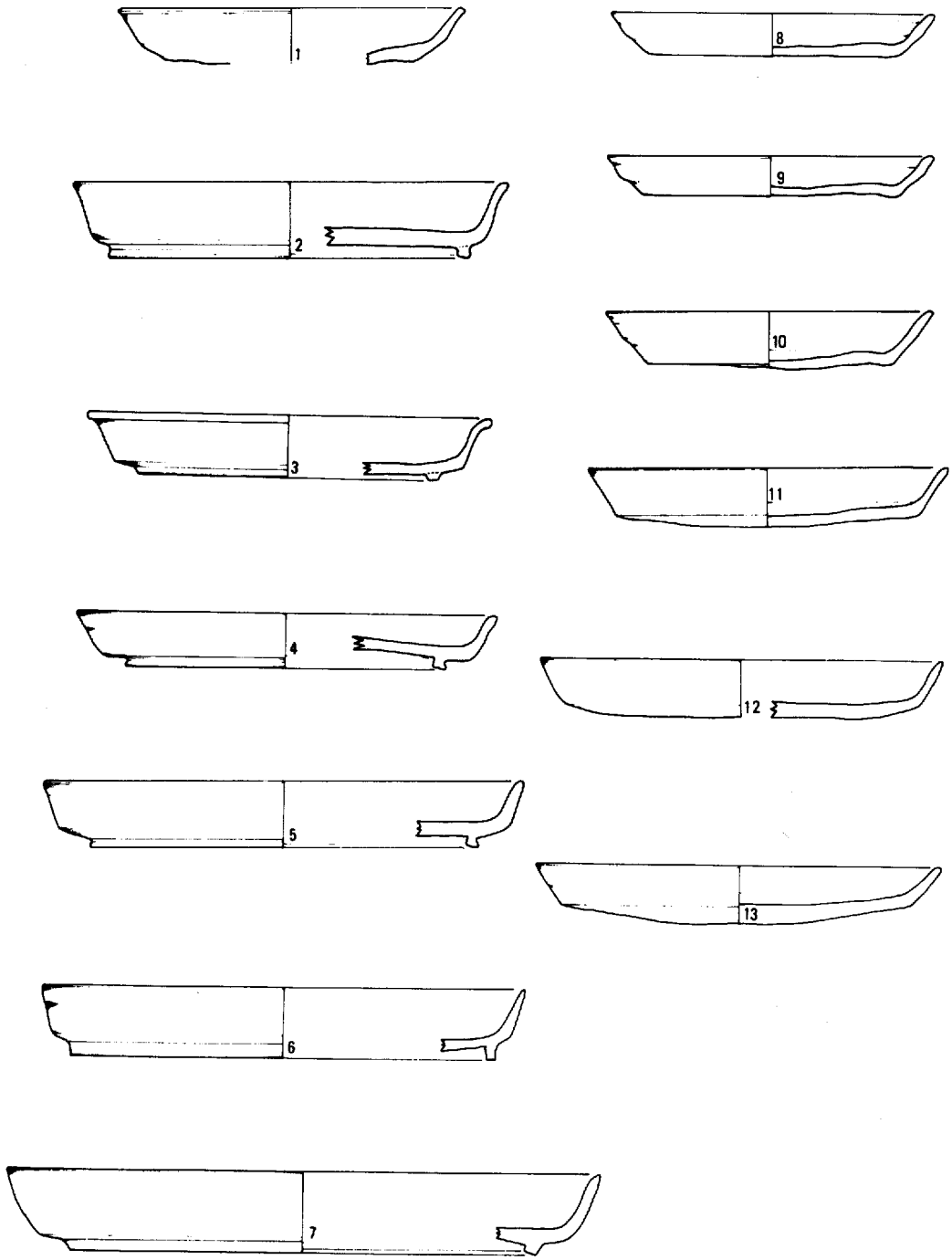
第18図　須恵器（杯）



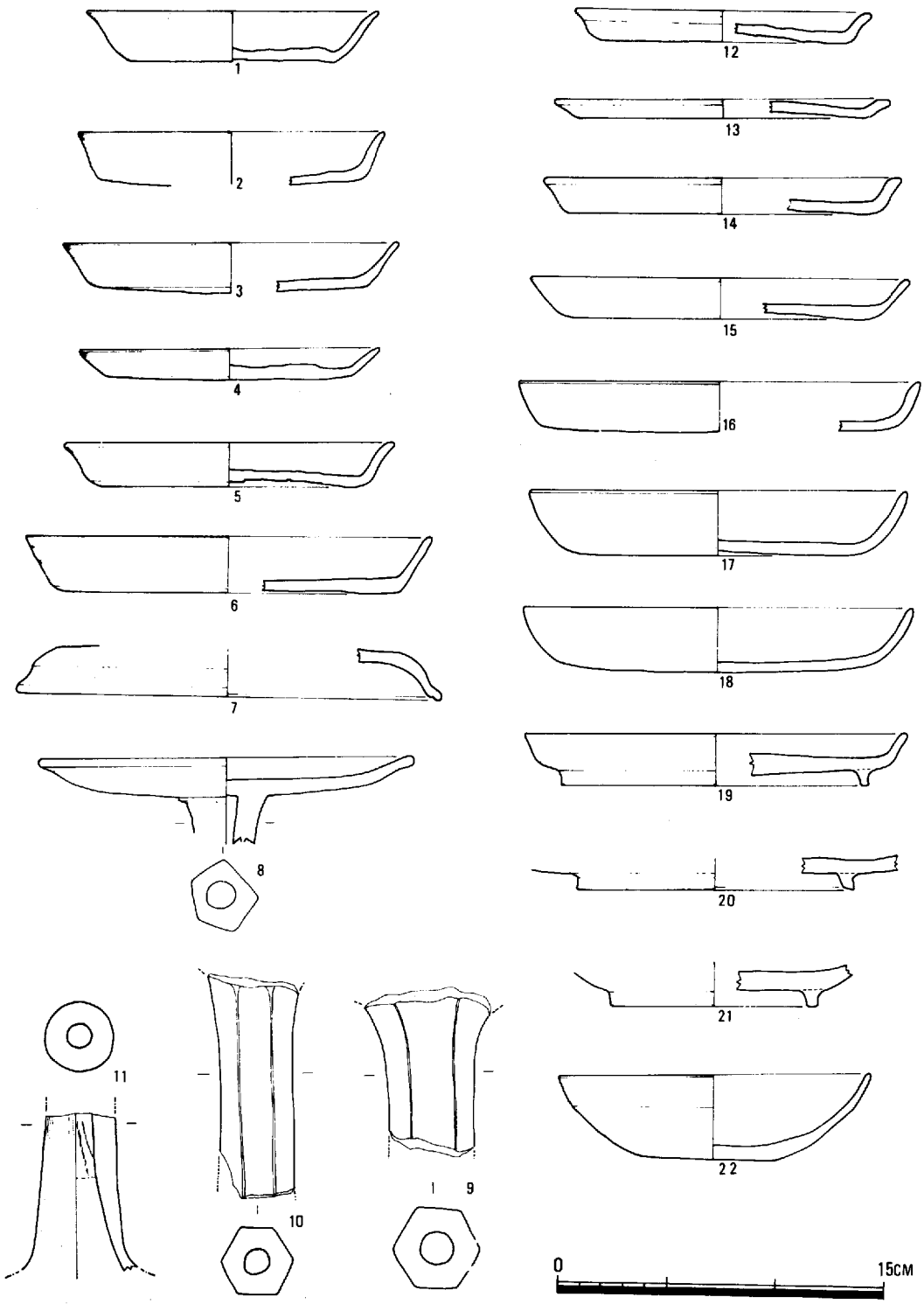
第19図　須恵器（蓋）〔溝出土〕



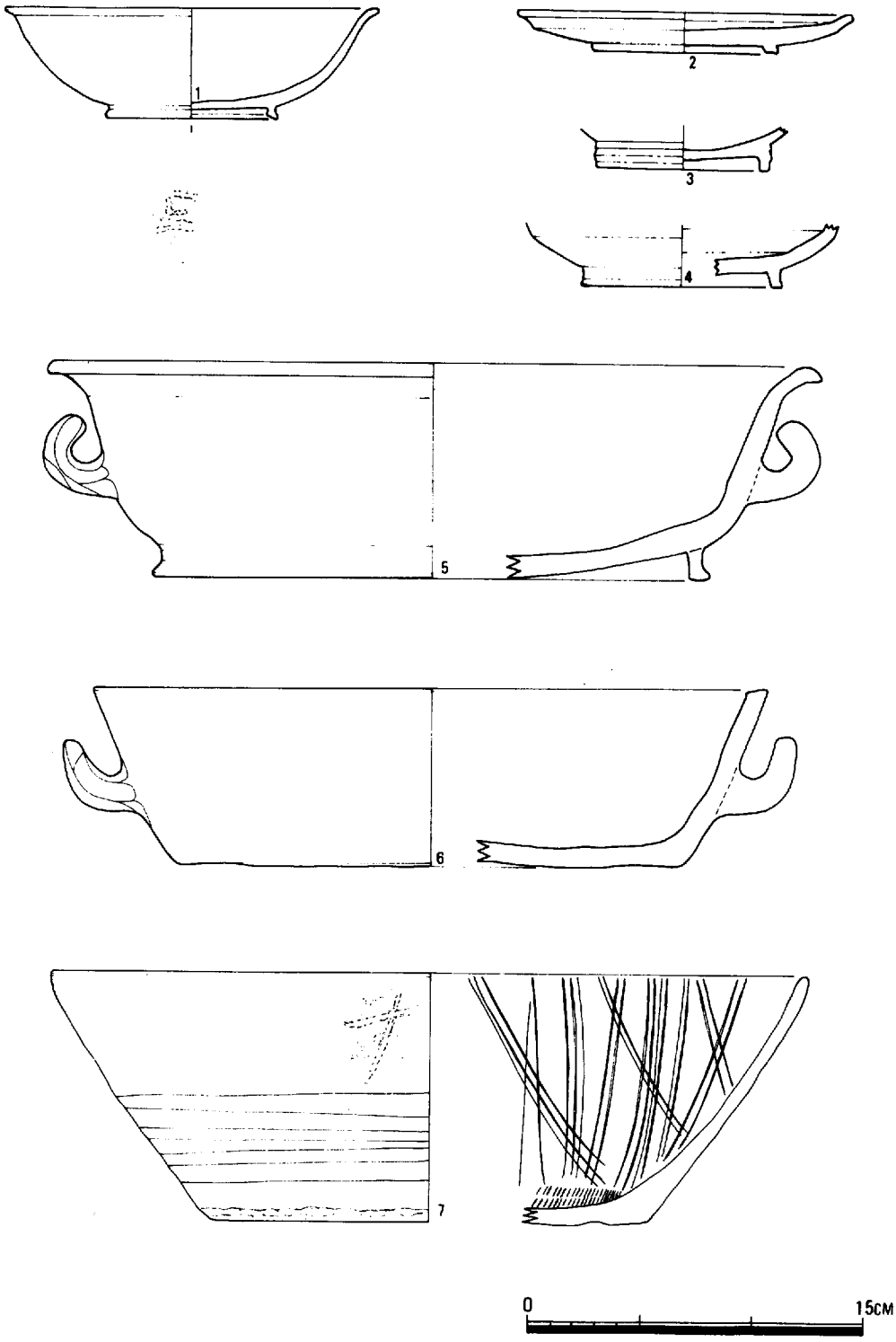
第20図　須恵器（蓋）



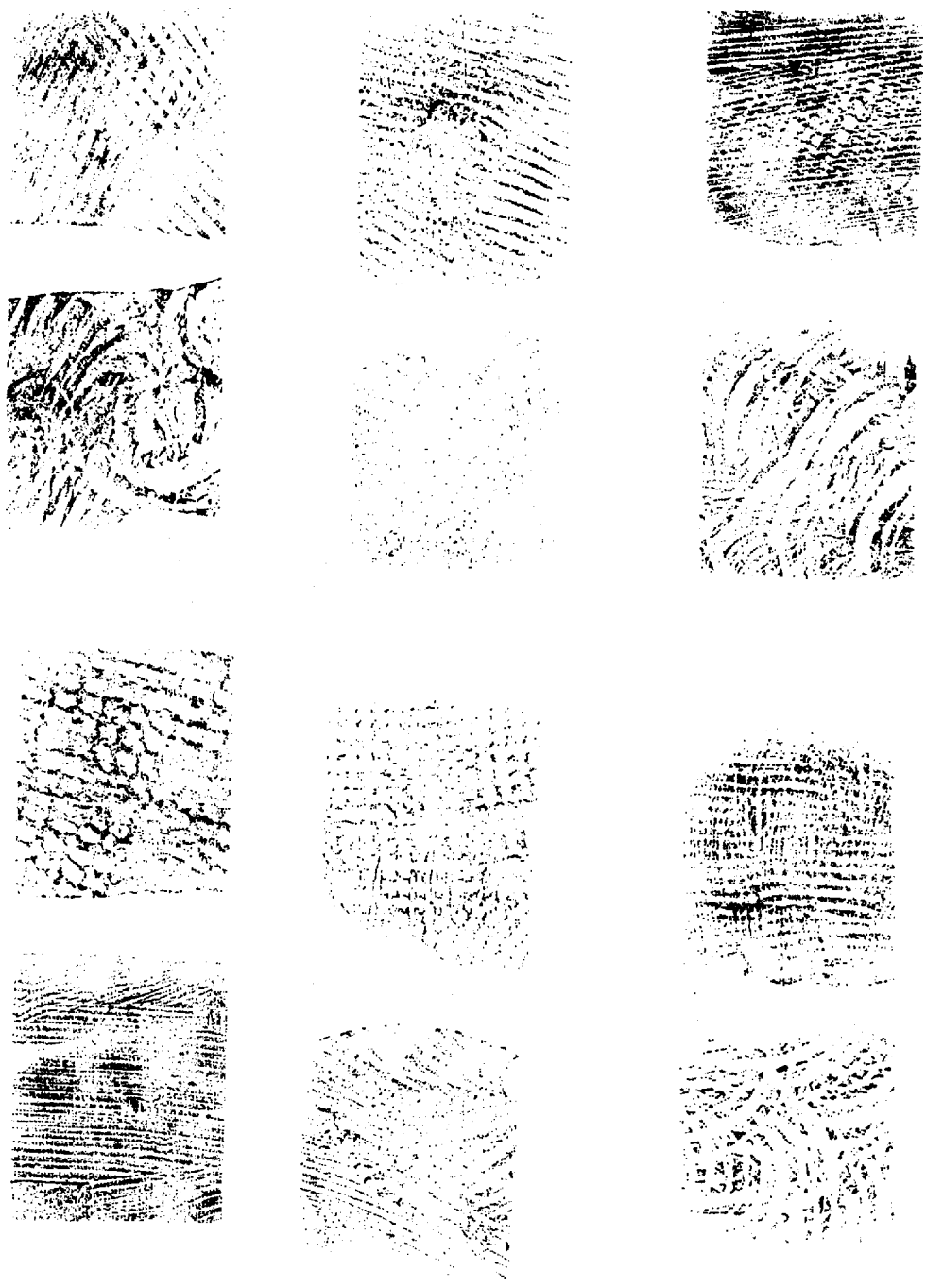
第21図　須恵器（盤・皿）



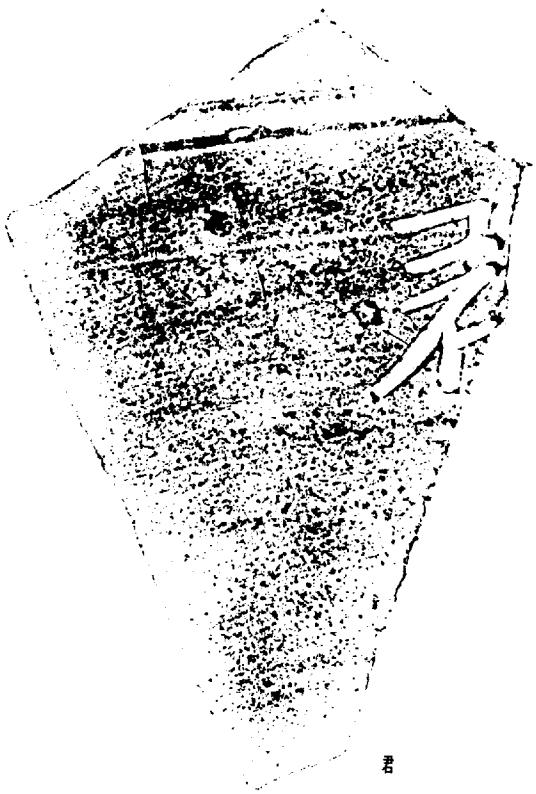
第22図　須恵器（皿）土師器（高杯・盤・皿・碗）〔溝出土〕



第23図　灰釉陶器・緑釉陶器・須恵器



第24図　須恵器甕表裏面の拓影



君

勝

嵯

郡

印

夫

第２５図　ヘラ書・押印土器拓影

格を考察する必要があろう。

(4)押印、ヘラ書、墨書陶器

押印，ヘラ書陶器（第25図）

出土した須恵器片の中には，押印，もしくはヘラ書の文字とみられるものがあった。押印陶器の内で，図中の「郡」字は，発掘に先立つ遺跡分布調査中に採集したものである。他の２つの内の１つは「印」と読める。３番目のものは「夫」と読める。その意味するところは今後さらに究明する必要があろうが，この遺跡を官衙遺跡と考えれば，あるいは「夫役」の意味とも考えられるであろう。ヘラ書は，いずれも達筆な文字で書かれており，「君」(郡の偏の部分と考えられる，)「勝」(平遺跡は，古代律令制度時代は勝田郡に属していた，)「嵯」(灰釉陶器の底部裏面）と読める。

墨書土器

須恵器の内面，もしくは外面に墨書されたものが数点あった。読める文字は，「大」「厨」等である。

（井上）

(5)瓦（第26～28図）

瓦は，包含層中より非常に多くのものが出土し，また，鍛治炉１のすぐ南側の鍛治炉面の下の包含層中に，十数枚の平瓦が須恵器（第32図）と共に積まれていた　（瓦溜り包含層中に単に積まれていただけで遺構あるいは遺構面上に伴なうものではない）。

瓦の種類には，軒丸瓦，軒平瓦，平瓦，丸瓦がある。

・軒丸瓦（第26図の１～４）

軒丸瓦には３種類がある。１は，中房に１＋８の蓮子があり，７葉の複弁が配されている。径は19.5cm。２は，中房に１＋８の蓮子があり，花弁は８葉の複弁である。径は16cm。３は，中房に１＋6の蓮子があり，花弁は13葉の単弁である。径は15.6cm。出土量は１は１例，２は２例，３は10数例を確認した。

・軒平瓦（第26図の７・８）

軒平瓦は，２種出土したが，どちらも均整唐草文のものである。

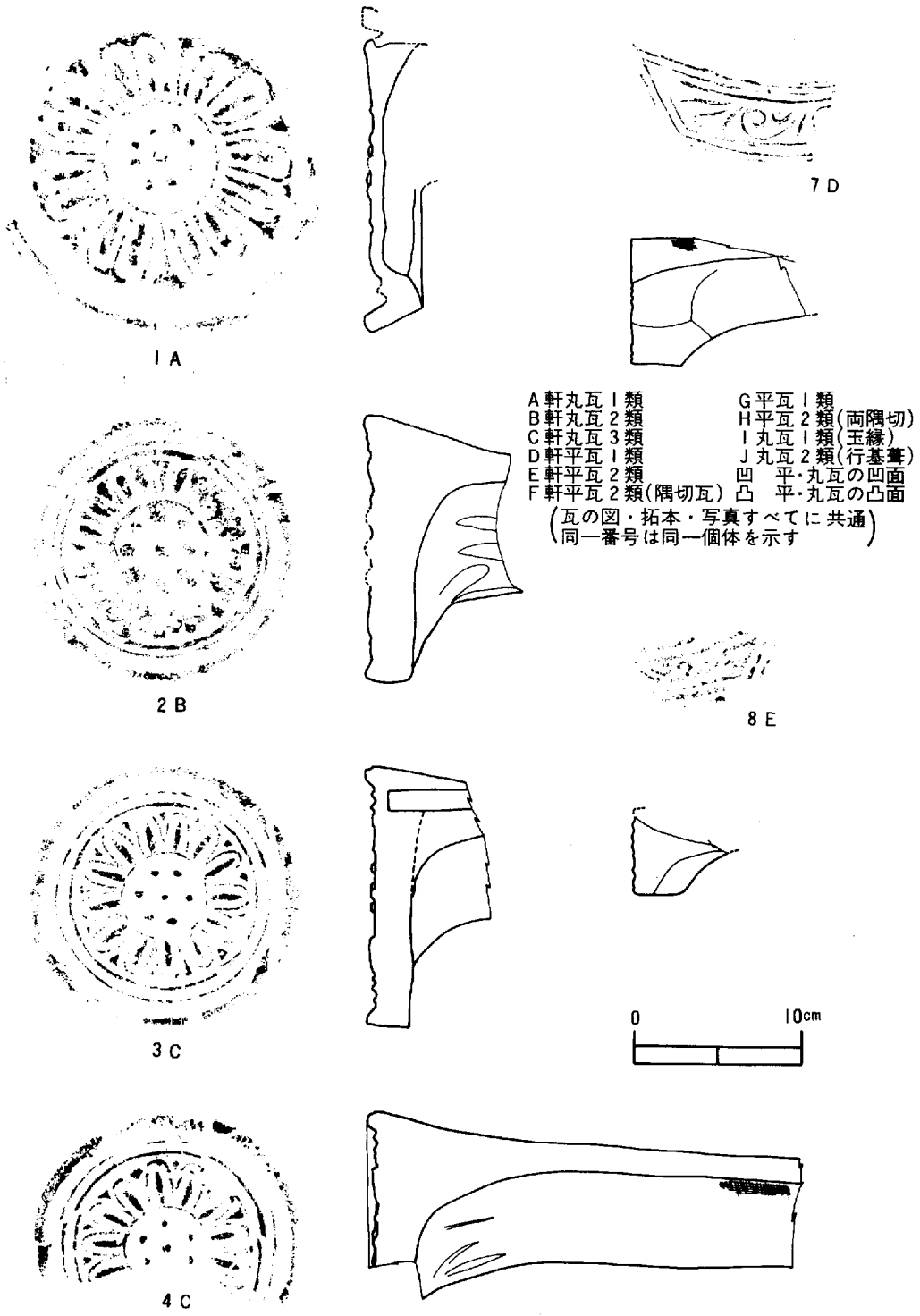
軒丸瓦と軒平瓦の組合せははっきりしない。

・平瓦

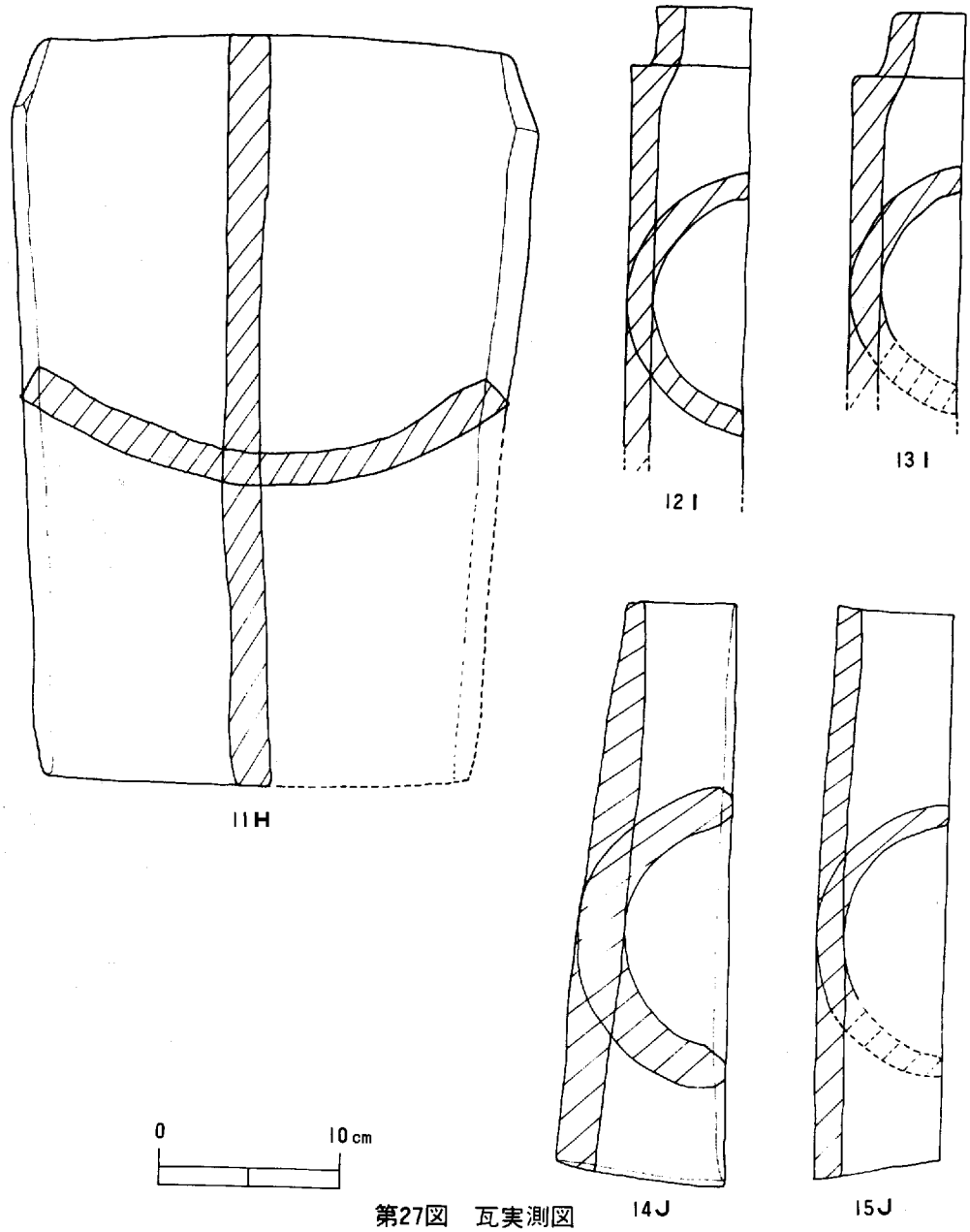
平瓦は多くの量が出土したが，長方形の一般的なものと２個所の隅を切ったもの（第27図の11）とが見られる。図示したものは，一般的にいわれている「隅切瓦」とは少し形態的に異なり，出土量もかなり多いことから，「隅切瓦」として利用されたのではなく，一般の平瓦と同じものとして葺かれたものであろう。瓦製作者（製作集団）の特異性によるものだろうか。

瓦の成形技法には，桶巻き作りと一枚作りの双方が見られ，さらに，叩き目には，格子叩き目，縄叩き目，平行叩き目がみられるが，これらのものが混在していた。

・丸瓦（第27図の12～15）


1A
7D
2B
8E
3C
4C
A軒丸瓦Ⅰ類
B軒丸瓦2類
C軒丸瓦3類
D軒平瓦Ⅰ類
E軒平瓦2類
F軒平瓦2類(隅切瓦)
G平瓦Ⅰ類
H平瓦2類(両隅切)
Ⅰ丸瓦Ⅰ類(玉縁)
J丸瓦2類(行基葺)
凹　平・丸瓦の凹面
凸　平・丸瓦の凸面
(瓦の図・拓本・写真すべてに共通
同一番号は同一個体を示す)
0
10cm

第２６図　瓦拓本実測図



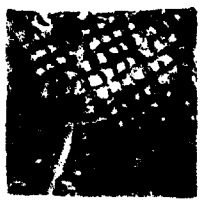
第27図　瓦実測図

16G凸

17G凸

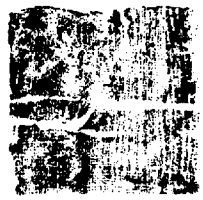
18G凸

18G凹

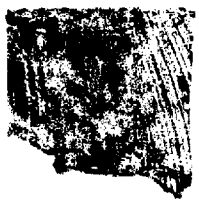

19H凸

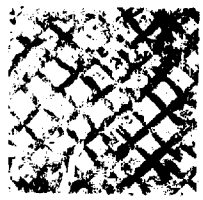
19H凹

20G凸


20G凹

21G凸


21G凹

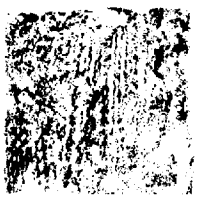

22G凸

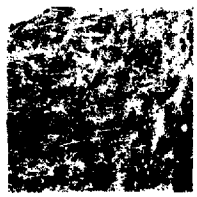
22G凹

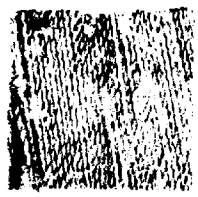
23H凸

24H凸

24H凹


25G凸


25G凹

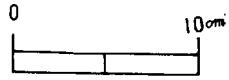

26G凸

26G凹

27G凸

27G凹

11H凹



第28図　瓦拓本

丸瓦には，玉縁をもつもの（12・13）と行基葺き（14・15）が見られる。

(6)陶硯

須恵器を焼いた窯でつくられたものばかり27例の硯が出土した。その内訳は風字硯5，円面硯15（内1は蹄脚硯），二面硯1，須恵器。蓋などの転用硯6である，これらの出土は平遺跡の性格を考える一つの材料となろう。

硯の胎土を比較すると，その大部分が異質である。これは，かな 広い地域でそれぞれ焼成されたものが，この地に集まったことを意味する。中には，愛知県猿投窯出土のものに土質・形態的に類似しているものもみられる。

・風字硯（第29図）

出土5例のうち4例を図示した。残り1例は風字硯の脚と思われるものである。

1は，海と陸の間に明瞭な境が認められない。そして，無雑作に切られた八角すい台形をなす脚2本が張り付けられている。一部に焼きぶくれがあり，硯面のほぼ全面がよく磨滅している。

2は，中凹みの方形の板状のものをこしらえ，周囲にノミか刀子と考えられる工具で削って2本の溝をつけている。この硯は東尾根上で出土し，他の硯よりも新しい時代につくられたものであろう。脚は付けられなかったと思われる。

3は，方形に近い形をしており，海と陸の境には〜状に凸起が粘土でつくられている。陸の部分はよく磨滅している。胎土や形態は，愛知県の猿投窯のもの(「陶器全集猿投窯」参照)によく似ている。

4は，薄い粘土板を張り合わせてつくっており，整形はやや粗である。硯面は少し磨滅している。

・円面硯（蹄脚硯を除く）(第30図)

円面硯（蹄脚硯を除く）は14例出土したが，9例を図示した。残り5例はいずれも別個体の脚であり，その内の1例は，推定径20cm，断面の厚さは0.5cmを測る小形のものである。

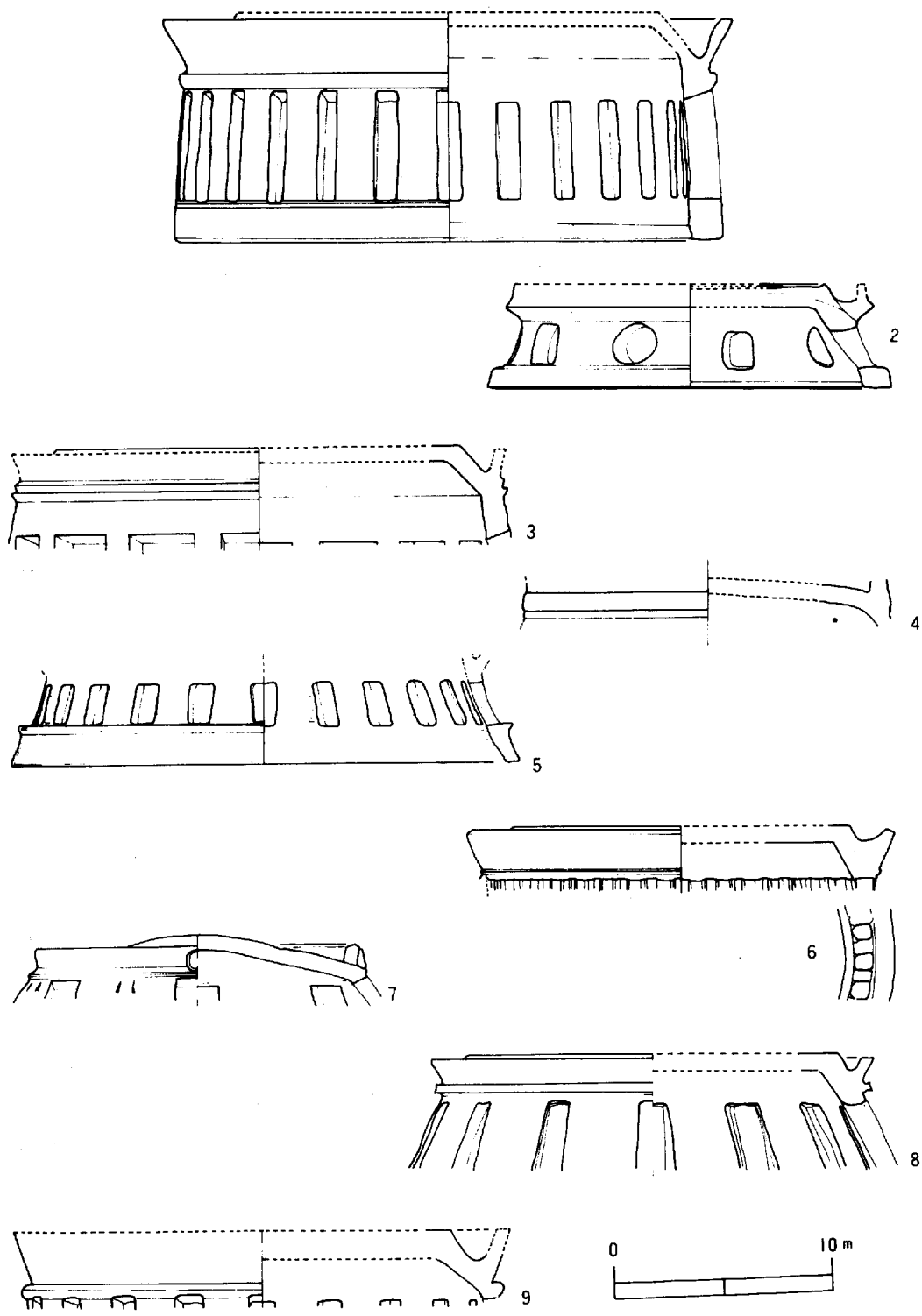
1は，径26cm，高さ推定10.5cm，陸の径推定19cmを測り，脚部はほぼ垂直に下降し，フリーハンドで長方形の窓をあけている。

2は，最大径18.5cm，高さ4.8cm，陸の径は12.3cmを測る小形のものである。脚はすそは拡がっており，円形と方形の窓が交互に計10個あけてある。平遺跡出土の硯で円形の窓のあけてあるのはこれ1例である。また，陸の周囲には，高さ0.2cmの三角凸帯がめぐらされている。

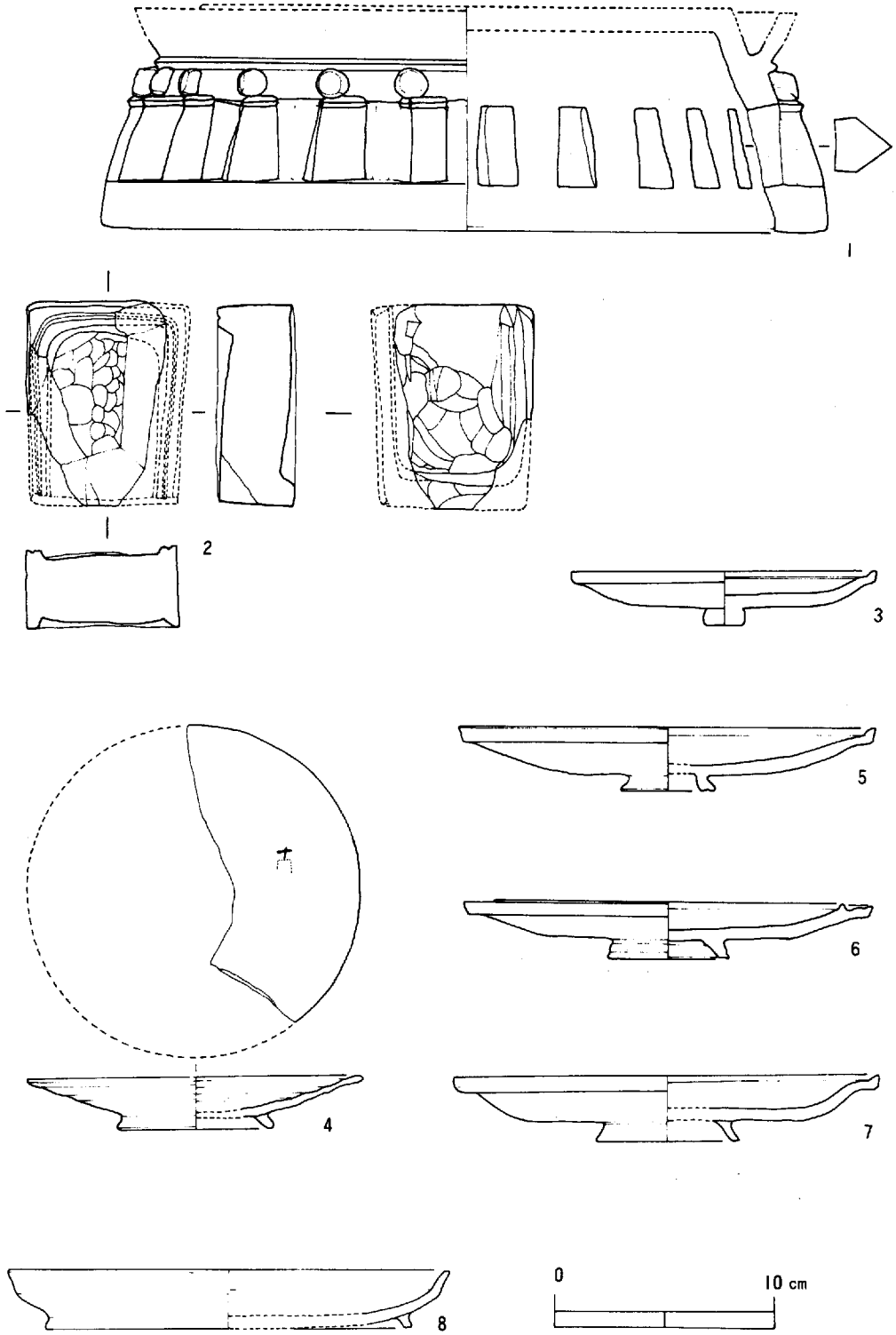
3，は最大径23cm以上，高さは4.5cm以上，陸の径は18.4cmを測る。脚はやや外にひらくと思われる。窓は定規をあてて長方形に切っている。

4は，陸が平坦でなく，丸く盛りあがるものである。脚は外にひろがるが，最大径は推定20cmで小形に属する。

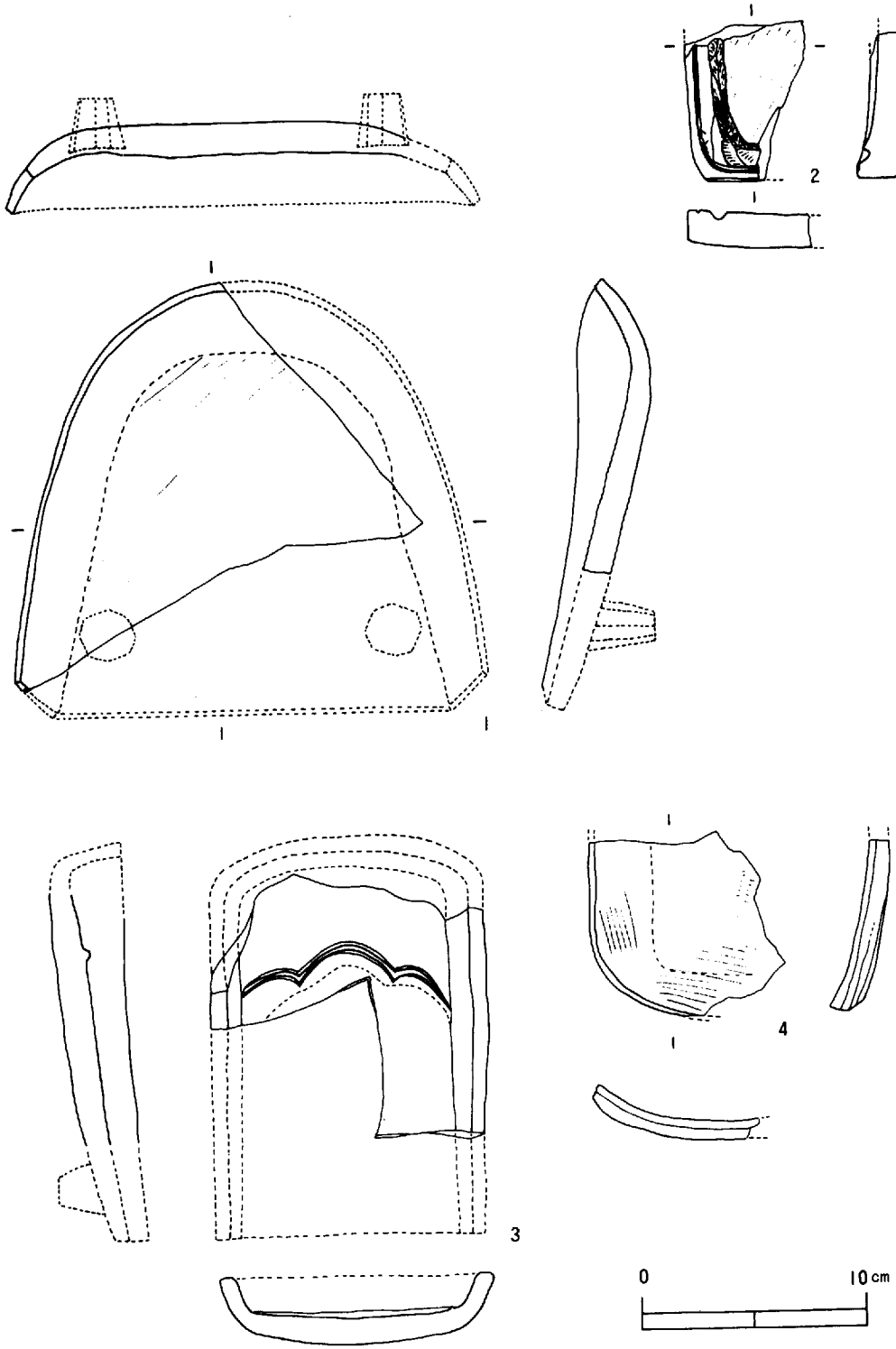
5は，最大径23.1cm，高さは推定5cm，陸の径は推定18.8cmを測るものである。脚はやや末広がりになっていて，長方形の窓をあけている。



第29図　硯実測図①



第30図　硯実測図②



第31図　硯実測図③

6は，最大径19.6cm，高さ3cm以上，陸の径15.4cmを測る。脚はほぼ垂直に下降し，他の例にくらべて多くの細い窓をあけており，窓の横の脚の角をヘラで削っている。

7は，4と同じく陸が丸く盛り上がったものである。最大径推定18cm，高さ推定5.5cm，陸の径7.7cmを測る。脚は椀を伏せたような形となろう。脚には，定規をあてて切った窓と，窓と窓の間には2条の切り目がついている。海の外縁の外側には丸い粘土を押しつけている。

8は，最大径推定24cm，高さ推定7cm，陸の径16.8cmを測る。横から見ると台形となっている。

9は，最大径22.6cm，高さ3.5cm以上，陸の径17.2cmを測る。脚はほぼ垂直に下降し，長方形の窓をあけている。

・蹄脚硯（第31図の1）

蹄脚硯は，平遺跡では1例が出土したのみである。最大径32.9cm，高さ推定10.2cm，陸の径推定24cmを測る大形のものである。脚の部分は2枚の粘土を張り合せ，その後，蹄脚になるように窓を切っている。また，それぞれの蹄脚のすぐ上部に径1.5cm，高さ1cmの円柱状の粘土を張り付けている。美作国府遺跡出土の蹄脚硯によく似た製品である（「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告5」参照）。

・二面硯（第31図の2）

7cm×9.3cm×3.6cmの直方体の粘土を用意し，ノミか刀子で無雑作に硯面を削りこんだもので，A面では削り残した縁の上に1条の溝を掘りこんでいる。A面とB面とでは，上下を逆にして裏返して硯面を削り出している。B面の縁には溝はつくられていない。A・B面とも殆んど磨滅は認められない。

・転用硯（第31図の3～8）

3～7は蓋の転用であり，8は盤の転用である。

3は，径14cmを測り，蓋のつまみは円板を張り付けたものである。

4～7は，坏の高台様のつまみがついた蓋である。4は高台付皿とも見えるもので，硯面となった部分にヘラ書きの文字とも見える痕跡がある（磨滅によってはっきりしない）。径は15cm。5～7は外見上ほぼ同じ形態を取り，6にのみ“返り”が蓋の内側についている。径は，5が18cm，6が18.5cm，7が19cmである。

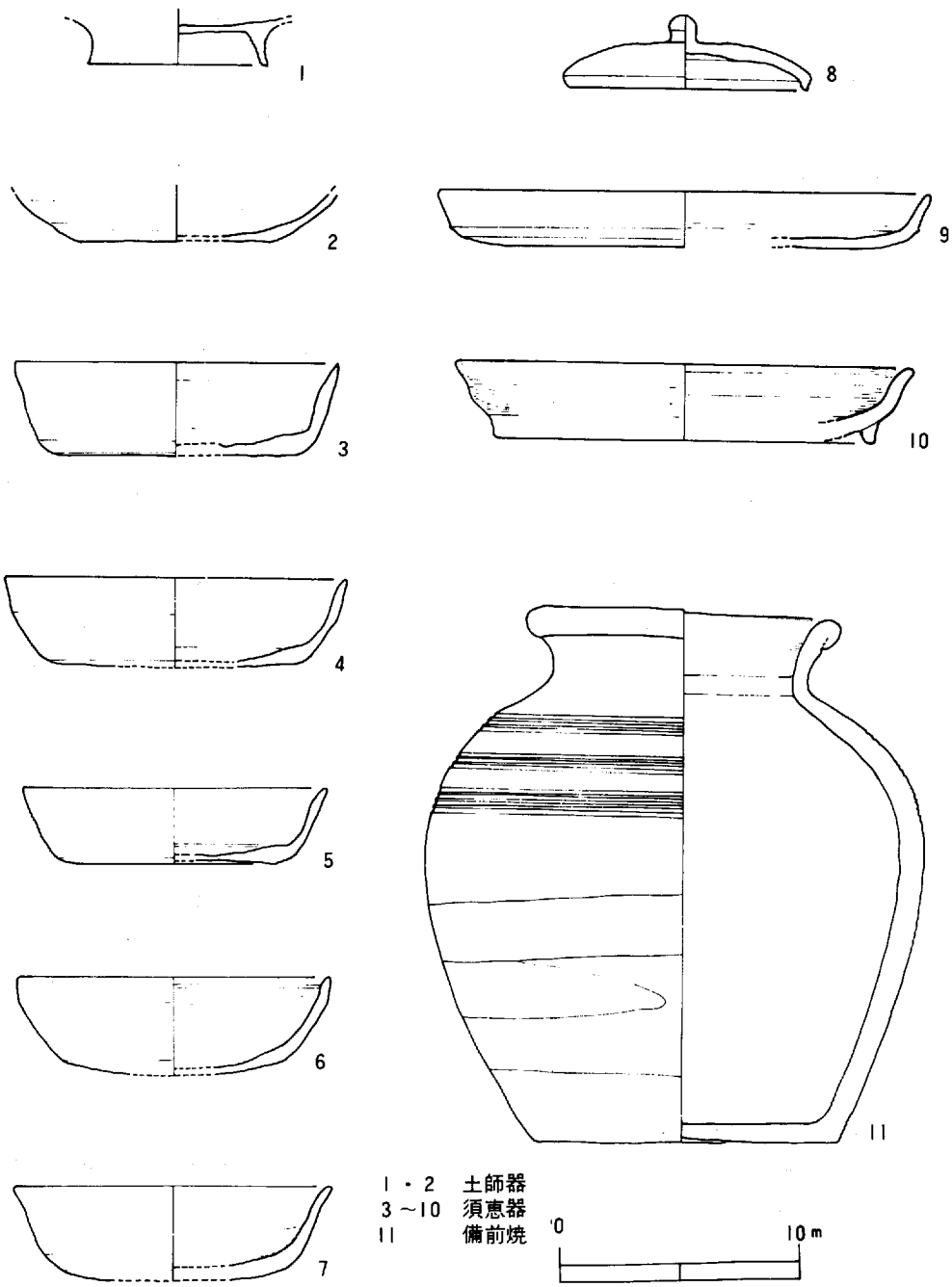
8は，径20cmで，硯として使うには安定のよい高台がついている。

（7）備前焼壺、焼成窯不明の壺

これらは西尾根東斜面から出土したものである。しかし，第2次世界大戦中に西尾根上を開墾していたときに掘り出され，壺の中に人骨が残っていたので，再埋葬されたものである。そのため，当初の埋葬形態は知るすべがない。

備前焼壺（第32図の11）は，口縁端部を外に折り返して玉縁としており，口縁部はやや外反する。肩には3～4本のくしで平行沈線を刻んでいる。

胴の下半分はヘラ削りによって仕上げている。口縁径13.1cm，最大径20.8cm，高さ22.3cmを測る。



第32図　土師器・須恵器・備前焼実測図

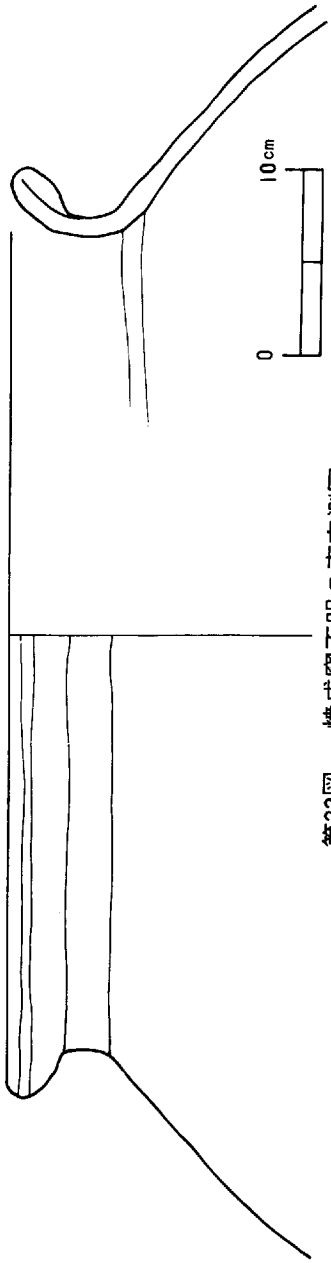
中には火葬骨が詰まっていた。

焼成窯不明の壺（第33図）は，口縁部の周の$\frac{1}{3}$が残り，口縁部から肩の一部までが現存するだけである。口縁端部は外に折り曲げて玉縁としている。口縁部の径は50cmを測る。

どちらも室町から桃山時代にかけてのものであろう。

なお，第32図の１・２は，鍛冶炉３直下出土の土師器であり，３～10は瓦溜りに瓦と共に積まれていたものである。

（田仲）



第33図　焼成窯不明の壺実測図

第5章　ま　と　め

平遺跡の調査は，縦貫道用地内のみを対象に行なったが，その結果から次の点を知り得た。

① 遺跡の東西の範囲は，東尾根，谷，西尾根東斜面の延長180mである。この内，東尾根（80m）には中世の遺構が存在する。また，谷，西尾根東斜面には，奈良末～平安初めの遺構・包含層が存在し，その範囲は東西100mである。南北の範囲は，北限は，縦貫道用地の北の，谷の谷頭までと考えられ，南限は，南にある西から東に流れる小さな谷までの南北約 200mの範囲と考えられる。

② 奈良末～平安初めの建物はいずれも大規模のものでなく，その大部分はその長軸（もしくは短軸）の方向が磁北方向とほぼ一致している。

③ 包含層からは，多量の須恵器・瓦が，また，かなりの量の灰釉・緑釉陶器が出土した。須恵器のうち，押印・ヘラ書き文字や墨書きのあるもの(“郡”・“勝”など)さらに硯（風字硯・円面硯・蹄脚硯・転用硯）などがかなり含まれている。灰釉や硯の中には愛知県猿投窯製のものも含まれている。緑釉は約170点確認された。

④ 建物群の建築・消滅から包含層の形成までの時間は非常に短期間である。

縦貫道用地内の調査ではないが，関連あるものとして次の点が確認されている（「文化財だより１９号」岡山県文化財保護協会刊・「岡山県埋蔵文化財報告４」県教委刊参照)。

⑤ 縦貫道のすぐ南の緩斜面にも，須恵器の散布がみられ，かなり大形の柱穴の存在も確認されている。

⑥ ⑤の部分と谷をへだてて，さらに南にある水田地帯には，平遺跡に先行する時期の官衙址とも考えられている遺構（建物）群が存在する（勝間田遺跡)。

以上の事実をもとに，まとめてみよう。

遺物の中に，文字（押印・ヘラ書き・墨書）のある須恵器，硯（須恵器）灰釉須恵器，緑釉土器，瓦が含まれている。これらはいずれも一般集落址ではまず見られないものであり，愛知県猿投窯製の硯や灰釉が含まれていることから考えても，律令体制に基づく中央官庁との結びつきを思わせるものである。押印・ヘラ書き文字のうち“勝”や“郡”から考えても，中央との結びつきのあるものとして“郡衙”の可能性がある。

大部分の建物のいずれも長軸（もしくは短軸）の方向が磁北方向とほぼ一致しているということから考えて，計画的に設計された建物群の一部を占めているといえる。

中央との結びつきを示す遺物や計画的につくられた建物群などから，平遺跡は，“勝田郡衙址”の一部と考えられる。郡衙のうちで，建物がいずれも小規模のものである点から考えて，雑舎的要

素をもつ一隅であろう。

縦貫道用地内の部分が，郡衙の雑舎的要素をもつ一隅とすれば，郡衙の中心的要素をもつ建物群などは，縦貫道のすぐ南の緩斜面に存在すると予想される。

勝間田遺跡は，平遺跡に先行する時期のかなり大規模な建物群をもつ官衙址と予想されている遺跡である。

勝間田遺跡と平遺跡との関係は，古い順に，勝間田遺跡掘立柱建物期→仝礎石建物期→平遺跡掘立柱建物期→仝包含層形成期→仝鍛治炉の時期と考えることはできないだろうか。

平遺跡は，遺物の出土状態から見て，奈良末から平安時代にかけての非常に短期間のうちにつくられ，放棄された遺跡である。　（田仲）

記

発掘調査に当っては下記の方々から多大の御協力を得た。記してその謝意を表する。

（敬称略）

勝央町教育委員会

城領逸平・古和正一・赤木利夫・植月静五郎・国政綱雄・植月惣市・植月昇・植月太郎・定森唯夫
平田完之・山田豊作・福田禎市・植月寛・福島波夫・国政吉郎・井上五一・長船久夫・福島常夫・
岸本松男・岸本強

植月美智子・定森豊女・河本春子・市川ゆき代・植月ふじ江・岸本厚子・国政ふさと・井上みつ子
福島美津恵・福島定代・福島やす子・福島みつ子・山田允江・早瀬あや子・井上多美子・岸本美知
江・井上英子・福島みよ子・国政やよい・植月幸子・国政とき子・山下百代・植月節子・福島かた
福島みどり。

諸國進年料雜藥

美作國卅一種

黃連十斤五兩　前胡　龍膽　人參各二斤　王不留行七斤　獨活九斤　桔梗八斤　香薷　商陸各五斤　藍漆二斤六兩　菖蒲二斤　細辛　芍藥各十斤　當歸廿一斤　漏蘆　地楡各六斤　白求十斤　黃蘗四斤　薺苨八兩　五加　藺茹各一斤六兩　白芷十四斤　大戟二斤四兩　厚朴　紫菀各二斤十兩　升麻十斤　澤寫一斤三兩　黃精三斤十兩　茵芋十一兩　桑茸二斤　樲子一斗三升　薯蕷十五兩　奉椒　蜀椒各七兩　麥門冬二斗四升　桃仁七升　車前子三升　吳茱一斗　乾棗一斗五升　鹿角一具　白殭蠶二兩

英田郡一座小
天石門別神社
⑦延喜式卷十五 内蔵寮
櫑子美作 備前 備中 備後 廿六箇國各四各
密蘇諸國所進
蘇諸國貢進番次擇数等具在民部式
⑧延喜式卷二十二 民部下
年料舂米
美作國大炊一千百石 糯廿石
凡諸國舂米運京者 美作 備前 六月卅日以前竝送納訖
年料租舂米
美作國一千斛
年料別貢雑物
美作國筆六十管 紙 麻七十斤
諸國貢蘇番次
美作國十一壺二〇各大一升 八〇各小一升
右十四箇國為第六番子午年
交易雑物
美作國 紺四七十五疋 油三石 猪脂一斗 櫑子四合 髡革卌張 鹿皮廿張 鹿角十枚 大豆十石 小豆六石 醬大豆廿石 隔三年進醬大豆十五石
⑨延喜式卷二十四 主計上
美作 備前 備中 備後
右十二國竝上絲
美作 備前 備中 備後

右廿九國輸絹
美作國行程上七日 下四日
調・白絹十疋 緋帛廿五疋 緋絲卅絇 緑絲 縹絲 皂絲各五
絇 黄絲 橡絲各廿絇 練絲二百絇 自餘輸絹 鍬 鐵 庸
白木韓櫃九合 自餘輸綿 米 中男作物 茜 苫 黒葛 搗栗
子 胡麻油 槾椒油
⑩延喜式卷二十六 主税上
諸國出擧正税公廨雑稲
美作國正税 公廨各卅万束 國分寺料四万束 文殊會料二千
束 修理池溝料三万束 道橋料一千束 救急料八万束 俘囚
料一万束 施薬院料一千束
⑪延喜式卷二十八 兵部省
諸國健児
美作國 五十人
諸國器仗
美作國 甲三領 横刀十口 弓廿張 征箭廿具 胡籙廿具
⑫延喜式卷三十一 宮内省
諸國例貢御贄
美作 甘葛煎 搗栗子 鮨年魚
⑬延喜式卷三十三 大膳下
諸國貢進菓子
美作國 搗栗子七斗 甘葛煎

文献ノート (2)

六国史、寧楽遺文、延喜式等から、美作国に関する記事のみを記載した。文献ノート(2)としたのは、『美作国府』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(6))に載せたものに続く意味である。まだ関係の記事でありながら漏れているものも多いと思う。今後、機会があれば、それ等を補充し、さらに完全を期したい。識者の御指摘を乞う。

①続日本紀　神亀五年四月辛巳(十五)
大政官奏日　美作國言　部内大庭眞嶋二郡　一年之内　所輸庸米八百六十餘斛　山川峻遠運輸大難　人馬並疲　損費極多
望請　輸米之重　換綿鐵及輕

②寧樂遺文　西大寺資財流記帳
一巻　美作國解文墾田地文圖(白紙 黄表 緺緖 一年在國印)(檜軸 神護 景雲)
田薗山野圖漆拾參巻
美作國五巻(ママ)
大庭郡田地(布巻 紙巻)並在國印

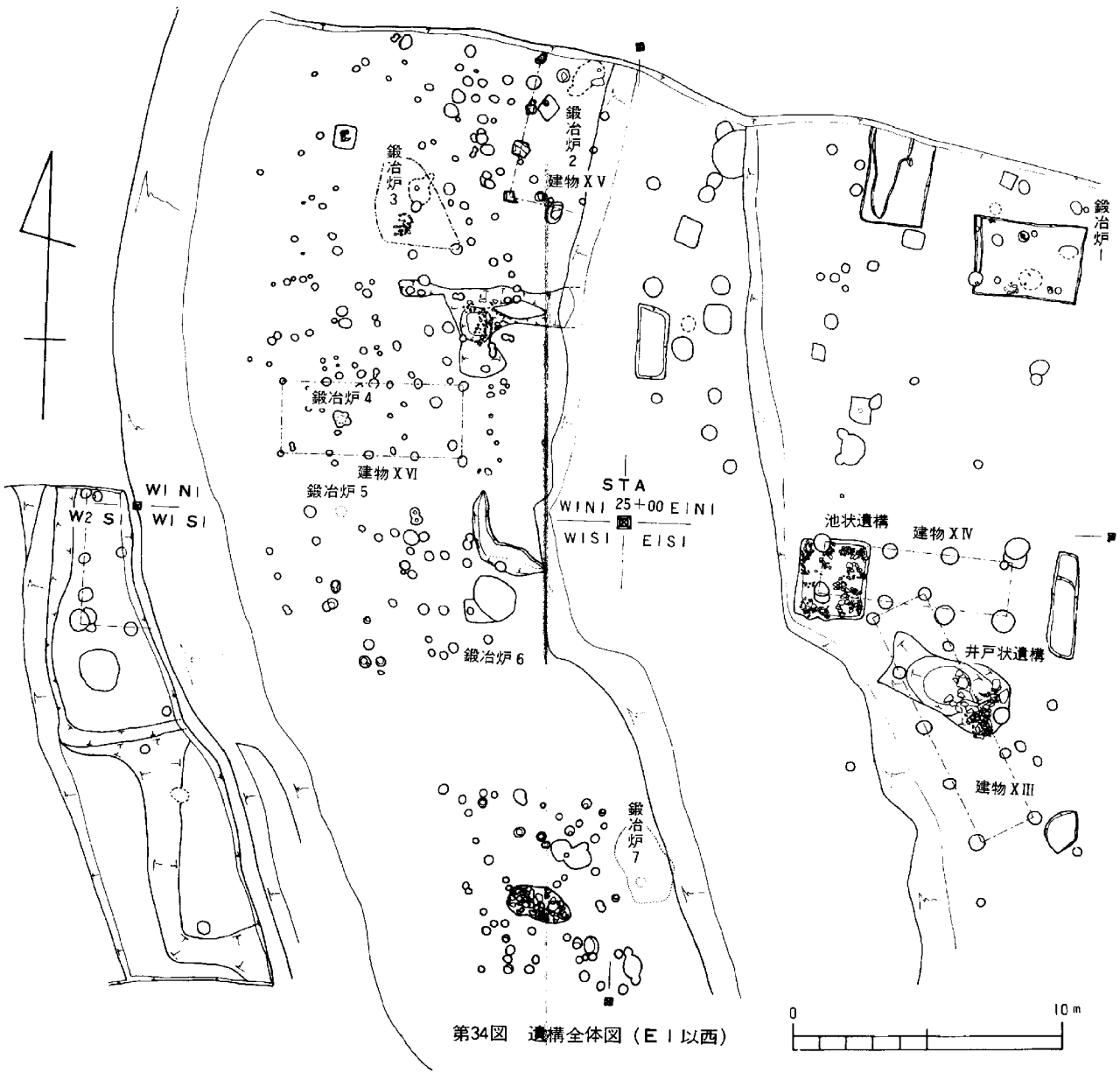
③和名抄　巻五
美作國(國府在苫東郡行程上七日 下四日)(和銅六年割備前國六郡置比國)　管七(田萬千二十一町三段二百五十六步)(本穎百二十二萬千束)
英多(安多伊)　勝田(加豆萬田)　苫田(有東西)　苫田(西)　久米　大庭(於保無波)　眞島(萬志萬)

和名抄　巻八
美作國
英田郡　英多　閼武　吉野　大野　讃甘　大原　粟井　廣井
勝田郡(加都)　楢原　林野　巨勢　川會　勝田(多)　飯岡　監湯(告)　塩月　香美　吉野　豊國　廣岡　新野　賀茂　廣野　河邊　鷹取　和気
苫東郡　苫田(多 上巳)　高野　綾部　美和　賀和　賀茂　林國　高倉
苫西郡　田中　田邊　田邑　布原　能雑　大野　香美
久米郡　大井　倭文　錦織　長岡　賀美　弓削　久米
大庭郡　大庭　美和　河内　久世　田原　布勢
眞島郡　眞島(萬萬之)　垂水　鹿田　大井　栗原　美甘　健部　月田　井原　高田

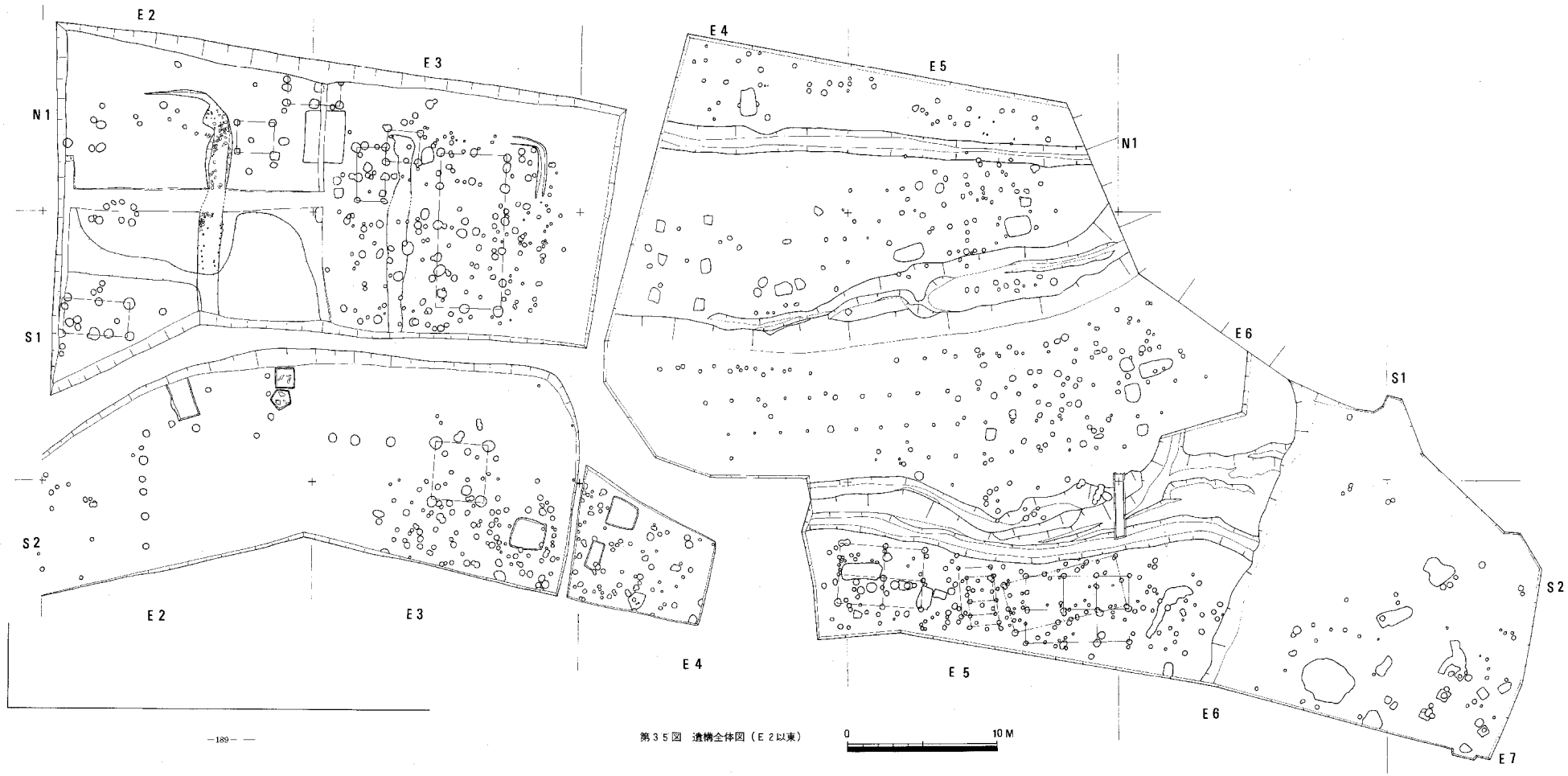
④　延喜式(巻三)神祇三
名神祭　二百八十五座
中山神社一座(美作國)

⑤延喜式(巻三)神祇三
凡但馬　因幡　美作三國以神税交易所進之弓矢　大刀者充臨時祭祓料(但馬 因幡兩國 名弓廿八張 征矢五十隻)(美作國 大刀三柄 征矢五十隻)

⑥延喜式(巻十)　神名下
美作國十一座(大一座 小十座)
大庭郡八座(並小)
佐波良神社　形部神社　壹粟神社二座　横見神社　久刀神社　兎上神社　長田神社
苫東郡二座(大一座 小一座)
高野神社　中山神社(名神大)



第34図　遺構全体図（E１以西）



第３５図　遺構全体図（Ｅ２以東）

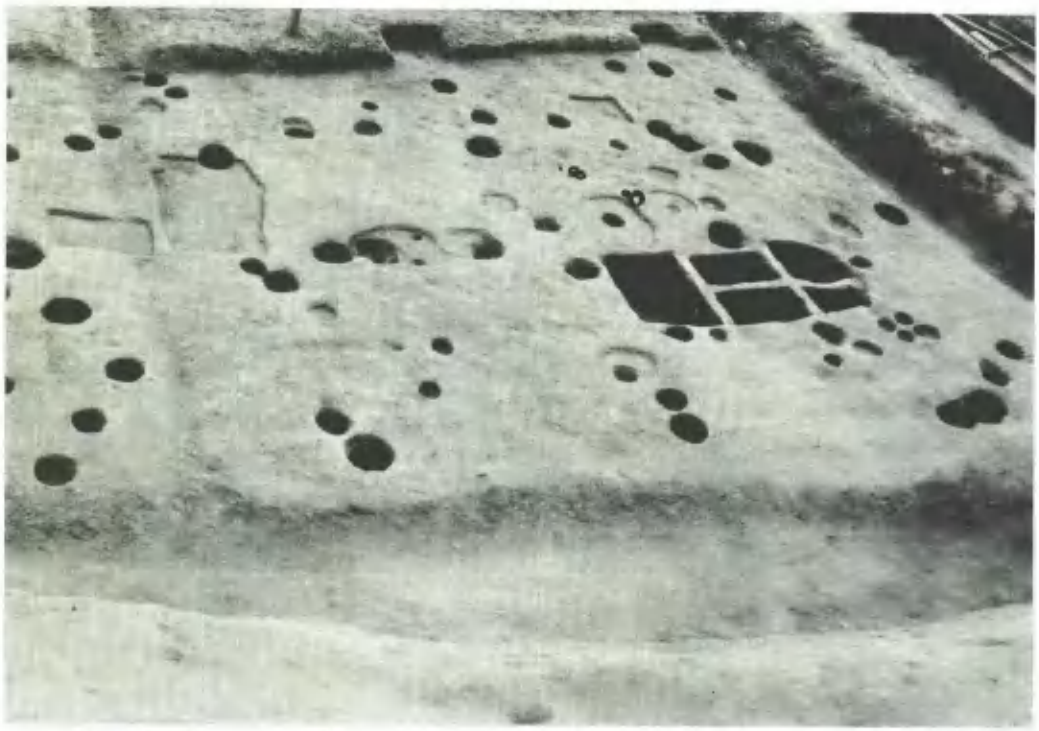
図版 I

1．　東尾根上段　　（南西より）

2．　東尾根上段　　（南より）

図版２

１．　建物Ⅰ－Ⅳ　　（北より）



２．　建物Ⅴ　　（北より）

1．　建物Ⅰ－Ⅲ　　（北より）

2．　東尾根の段の状態　　（東南より）

図版 4

1． E6S2　（西より）

2． E5S1　石組遺構

１．Ｅ４Ｓ２　　（北より）

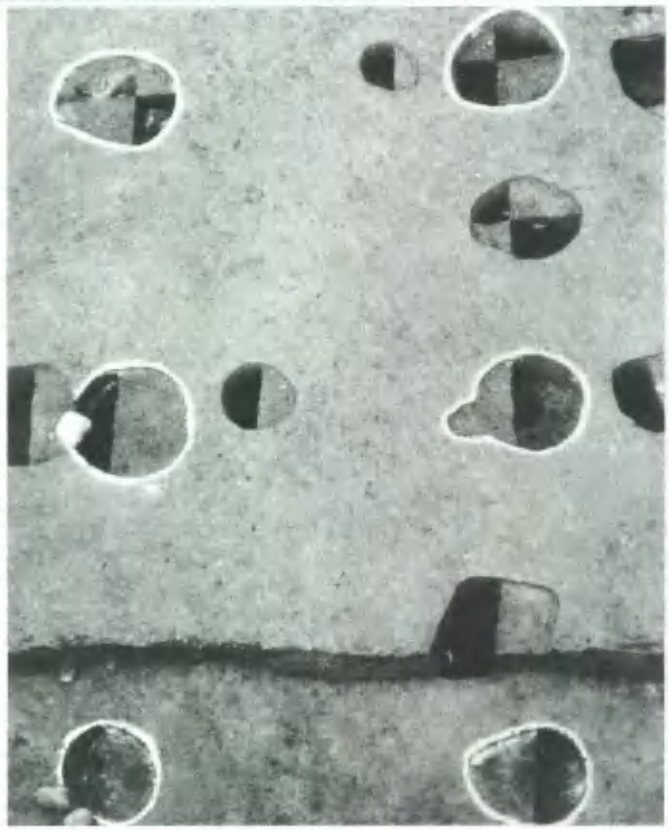
２．Ｅ３ＳＩ・２　　（北西より）

図版 6

1． 建物Ⅵ （西より）

2． E 2 N I （南より）

1．　建物X・Ⅷ　（南より）



2　建物Ⅸ　（南より）

図版 8

1. E2N1 建物X, IX (南より)

2. E2N1 (南より)

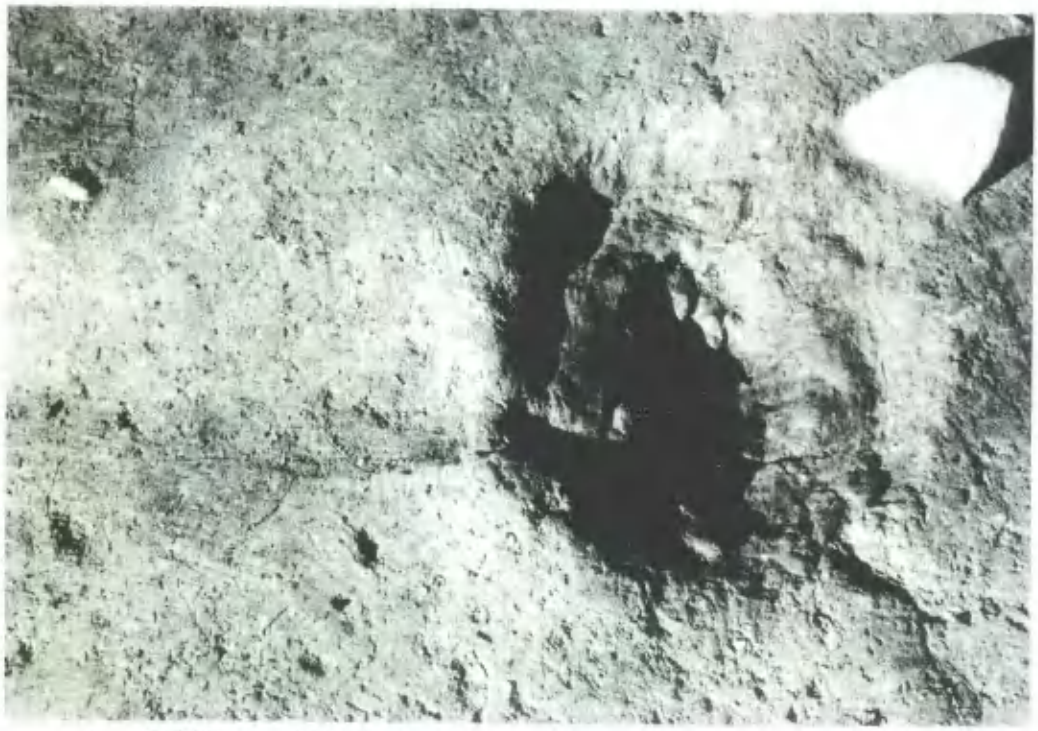
1．　柱根の出土状況

2．　E３S１　　（南より）

図版10

1．　発掘風景　　（西より）

2．　発掘風景（右側は工事用道路）　　（東南より）

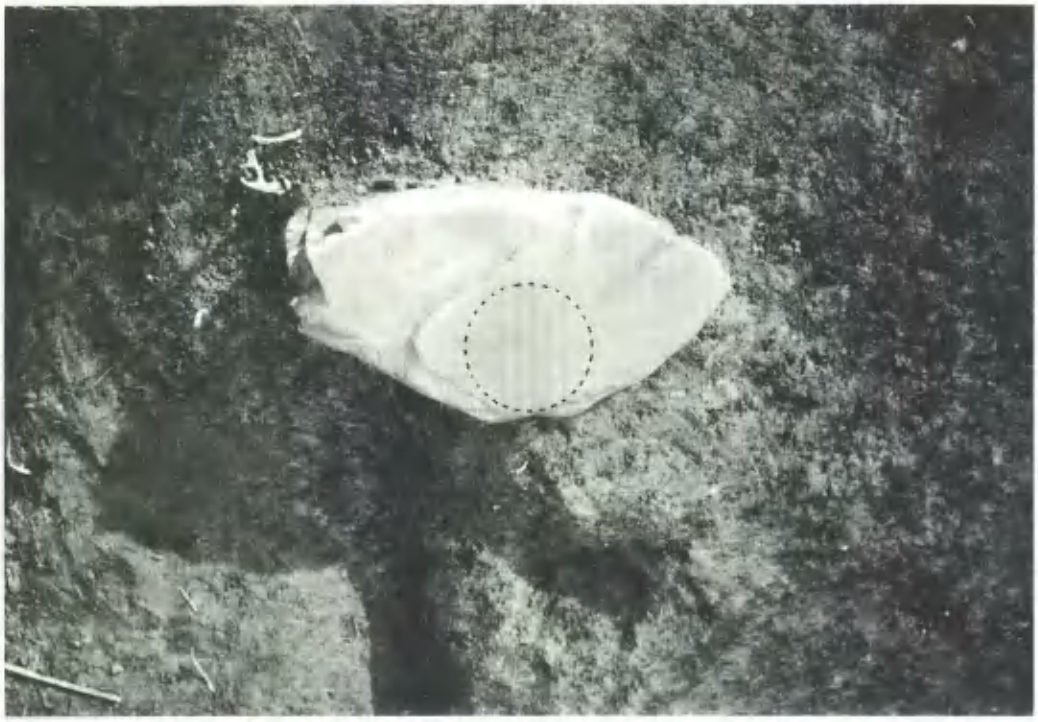


1．　鍛冶炉1　　（南より）

2．　鍛冶炉1　羽口部分断面　　（西より）

図版12

1．　鍛冶炉２　　（北より）



2．　鍛冶炉２の金床(？)(点線内が熱で赤変している)　　（北より）

1．　鍛冶炉３およびその南の石組み　　（東より）

2．　鍛冶炉３　　（東より）

図版14

1．　建物XVI　および鍛冶炉4　　（西より）

2．　鍛冶炉4　　（西より）

1．　鍛冶炉5　（炉内に羽口が落ち込んでいる）　　（南より）

2．　鍛冶炉5断面　　（南より）

図版16

1．　鍛冶炉６断面　　（西より）

2．　鍛冶炉７断面　　（北より）

1．　西尾根東斜面，建物XVII　　（南より）

2．　E－N－1上面（右上隅に鍛冶炉－1あり）　　（南より）

図版18

1．　E1N1・E2N1の境の断面にあらわれた瓦溜り　（東より）

2．　同上瓦溜り　（東上より）

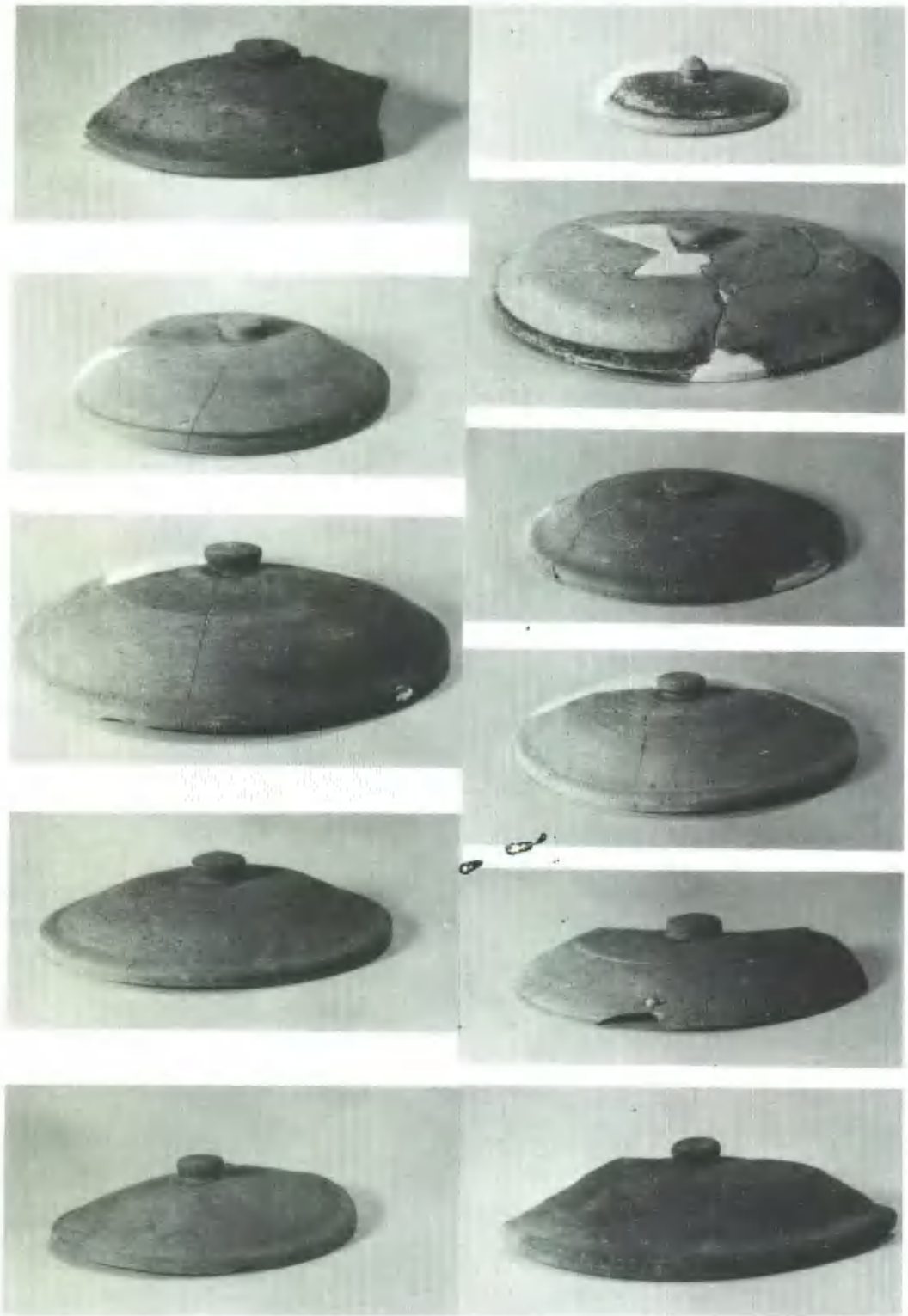
1．　礎石をもつ建物（建物XV）　　（東より）

2．　建物XIII・XVI，池状遺構，井戸状遺構　　（西より）

図版20

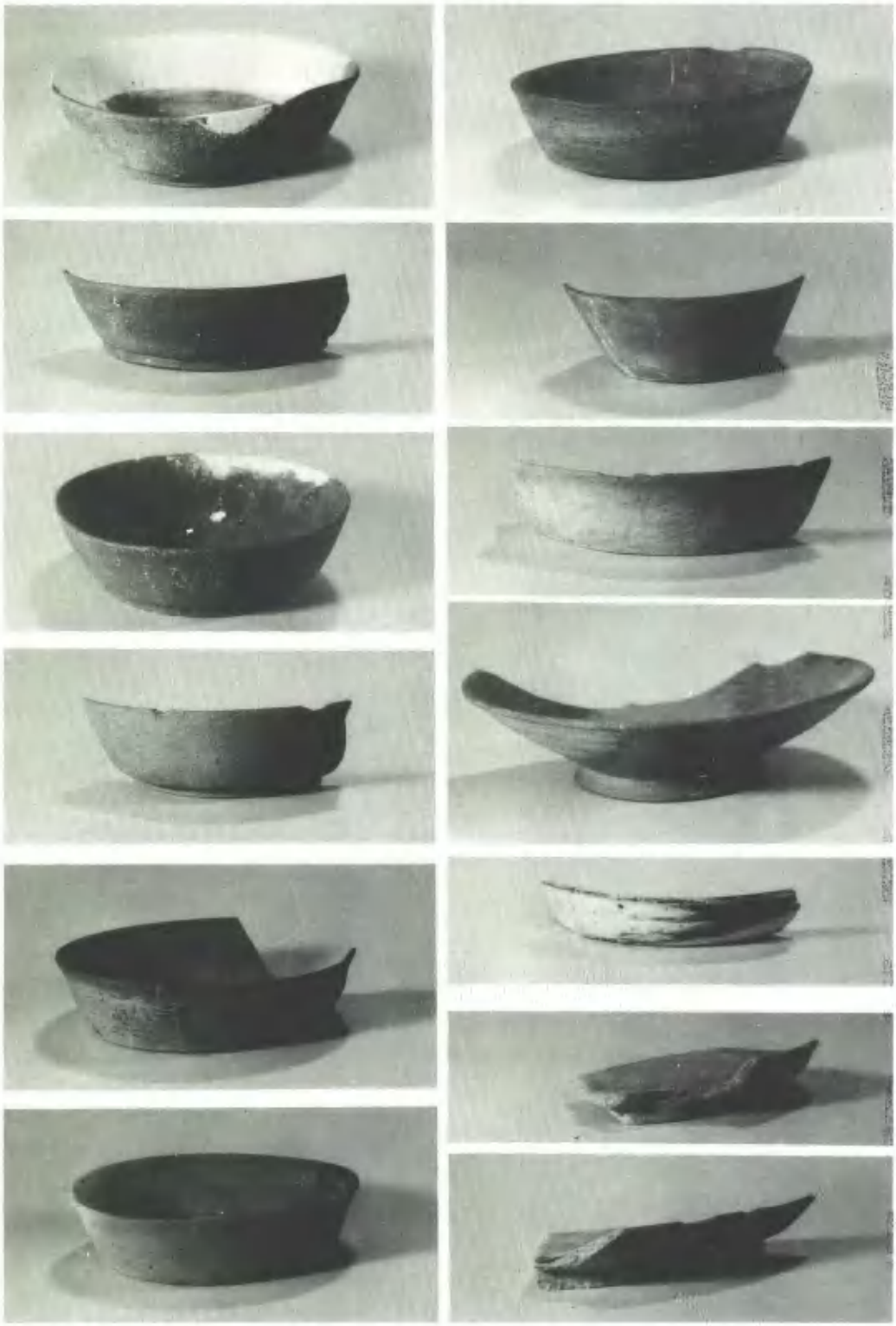
1．　井戸状遺構　　（西より）

2．　池状遺構　　（東より）

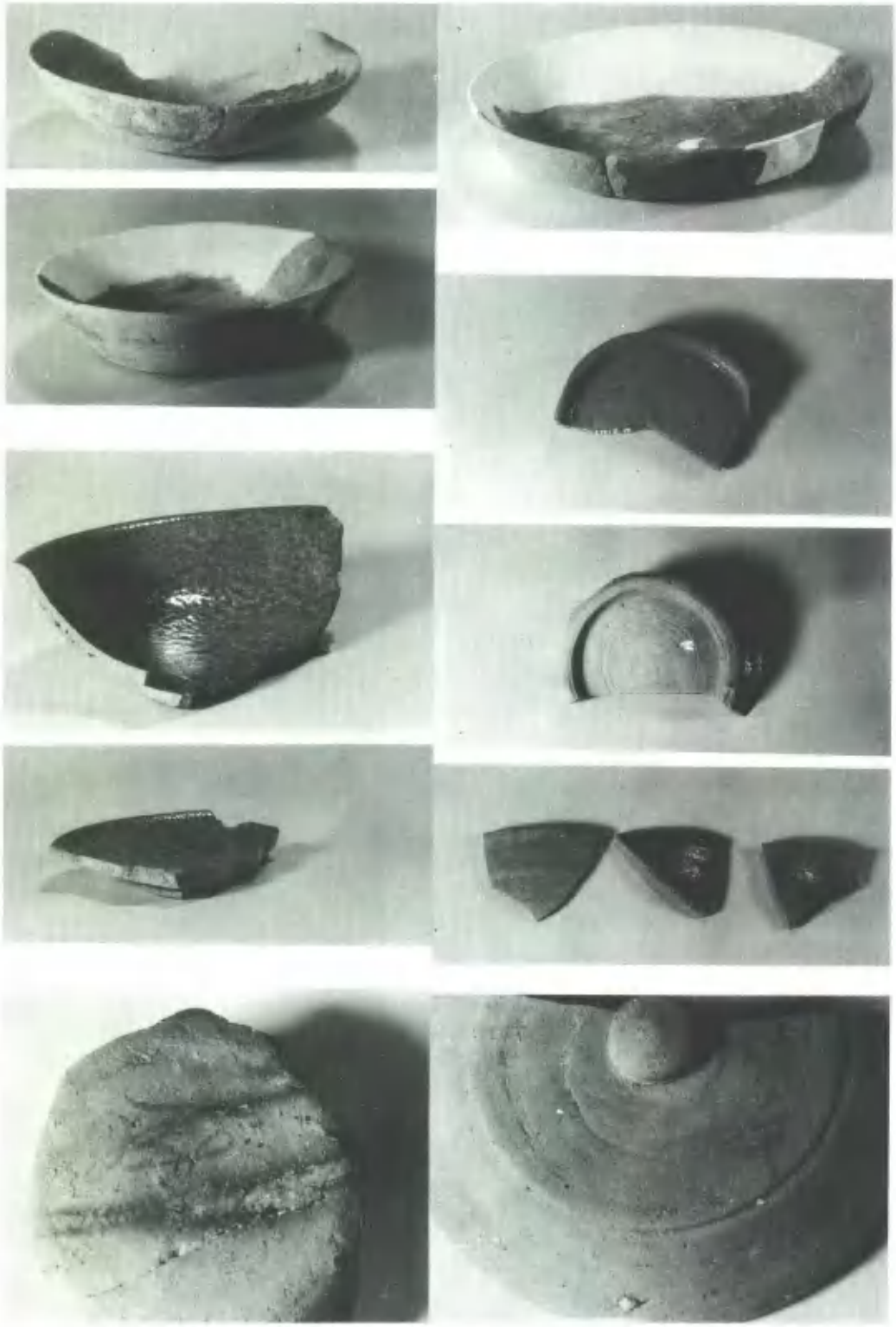


須 恵 器（蓋）

図版22



須恵器・土師器（坏，皿，盤）



土師器・施釉陶器・墨書陶器

図版24

1 A

7 D

2 B

5 C

9 F

軒丸瓦・軒平瓦

凸

14J

凹

凸

12I

凹

記号

A 軒丸瓦1類
B 軒丸瓦2類
C 軒丸瓦3類
D 軒平瓦1類
E 軒平瓦2類
F 軒平瓦2類（隅切瓦）
G 平瓦1類
H 平瓦2類（両隅切）
I 丸瓦1類（玉縁）
J 丸瓦2類（行基葺）

（記号は，瓦の図・拓本・写真すべてに共通する同一番号は同一個体を示す）

凸平・丸瓦の凸面
凹平・丸瓦の凹面

図版26

凹

10G

凸

平瓦　凹

11H

凸

図版27

18G凸

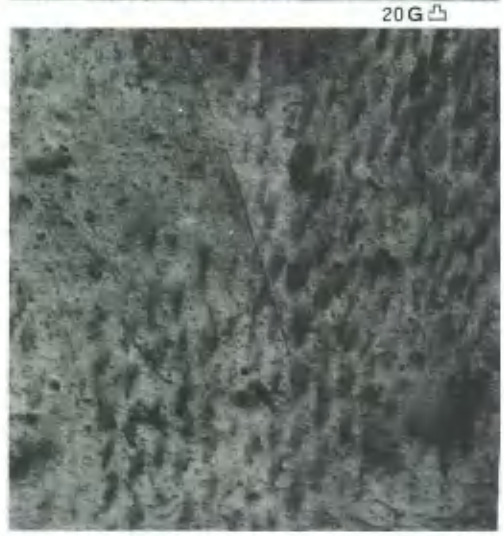
24G凸

22G凸

20G凸

平瓦凸面部分

25G凸



27G凸

図版28

18G凹

24G凹

23H凹

27G凹

平瓦・丸瓦凹面部分　11H凹

12I凹

図版29

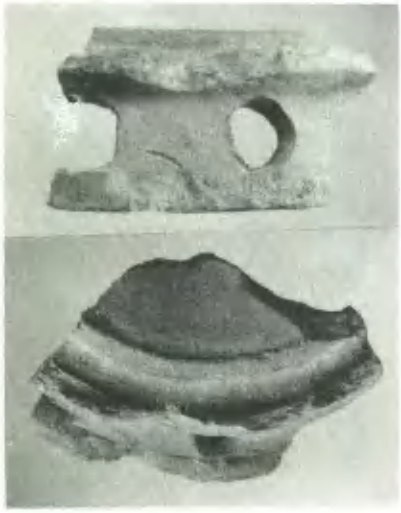
4 C

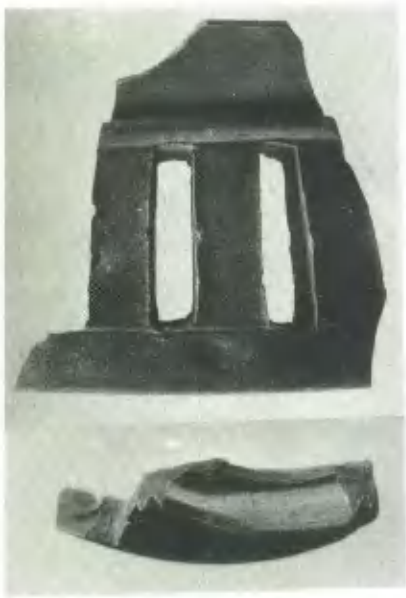
6 C

備前焼

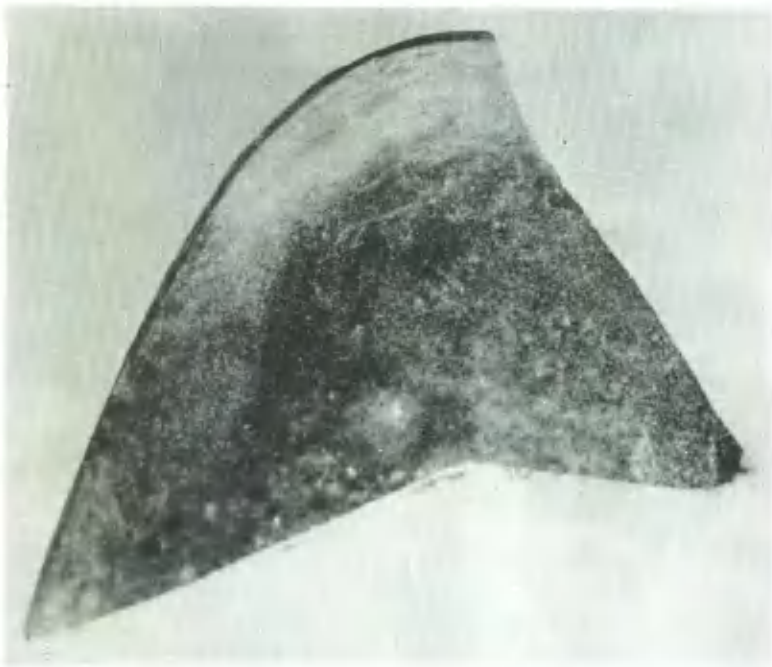
軒丸瓦の軒丸部と丸部の張りつけおよび備前焼・焼成窯不明のもの　　焼成窯不明のもの

図版30



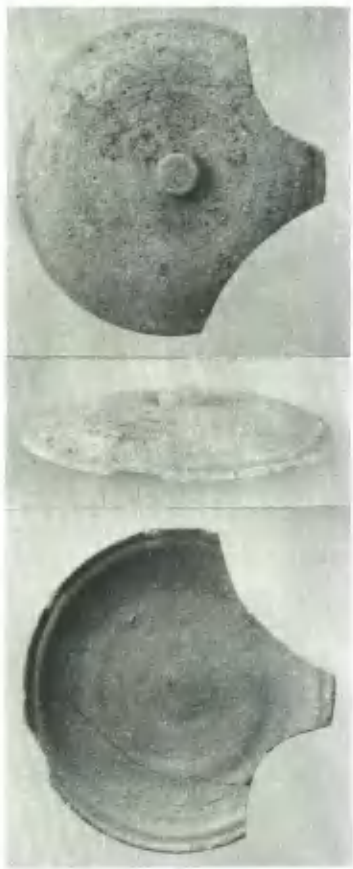


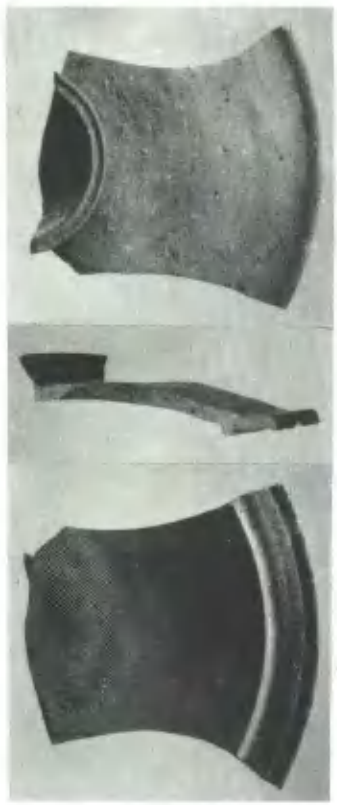
円面硯・騎脚硯

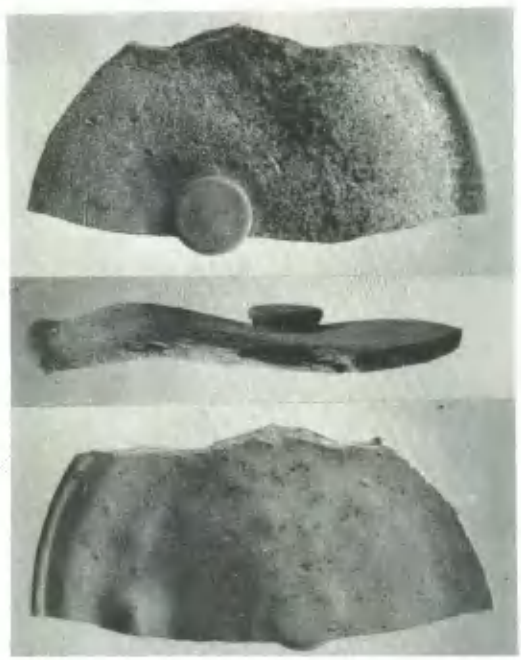


風字硯・二面硯

図版32







転用現

沼（ぬま）古墳群（14）

1．調査の経過

昭和46年度に調査を行う予定であった沼斎神社裏の沼古墳群は，10月７日，下請業者によってブルドーザーが入れられたため，急拠，12月１日～10日に発掘調査を行った。

2．位　　置

津山市内を南北に流れる宮川の東丘陵上に存する。美作国府とは丁度対岸の位置にあたる。丘陵尾根上を市道が南北に走っている。その市道をはさんで，沼斎神社裏に２～３基，津山高等工業専門学校につづく台地上に10数基の古墳群が知られ，津山高等工業専門学校建設時にも何基かの古墳が調査されたというが報告はなく詳細は不明である。

今回の調査は，ブルドーザーで踏み荒された沼斎神社裏で，箱式石棺１基（１号墳）と，市道の東側，忠魂碑が建立されている場所で，箱式石棺１基（２号墳）の調査を行った。ブルドーザーが削った土の中に沼斎神社裏では別の天井石が存在し，少くともあと１基は存在したと思われる。

なお，位置，図等については第１分冊（P155)を参照されたい。

3．1　号　墳

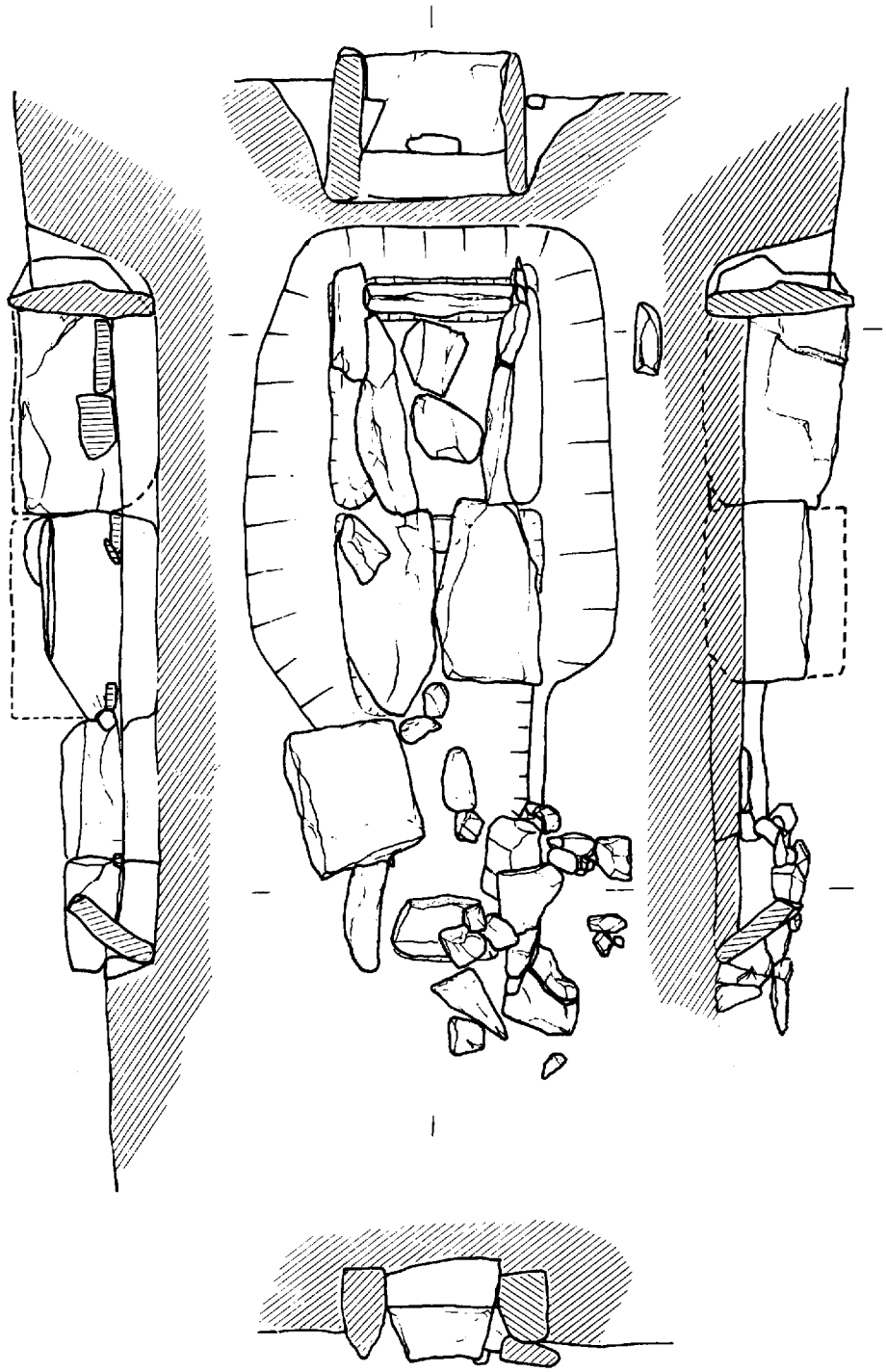
ブルドーザーが上部を削り，走っているため墳上の規模，天井石等は不明である。全長200cm，巾60cmの箱式石棺である。遺物は存在しなかった。

第１図　沼斎神社裏１号箱式棺実測図

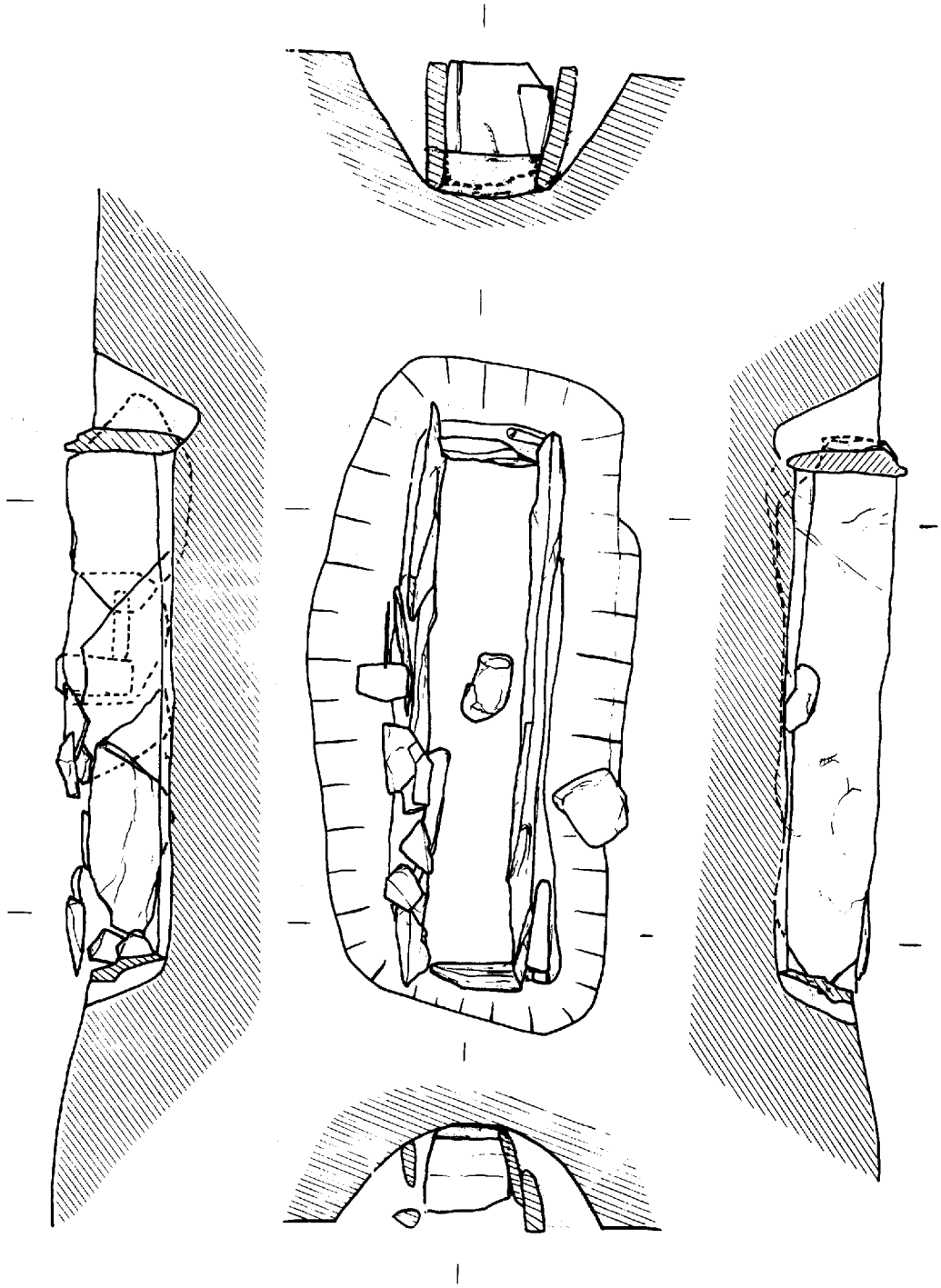
4．2 号 墳

忠魂碑建設時に削平され，墳丘は不明である。全長160cm，巾40cmの箱式石棺である。北側の側壁は1枚石を用いている。

遺物は，人頭骨が部分的に残存していたのみである。骨には丹が付着していた。



第Ⅰ図　沼斎神社裏Ⅰ号箱式棺実測図



第２図　沼斎神社裏２号箱式棺実測図

図版 I

1　沼奈神社裏古墳 I 号箱式棺

2　沼奈神社裏古墳 I 号箱式棺掘り方

図版 2

1　沼斎神社裏古墳 2 号箱式棺

2　沼斎神社裏古墳 2 号箱式棺

領家（りょうけ）遺跡（20）

目　　次

執筆者

第1章　調査の方法と経過 …… (栗野) …… 239

第1節　はじめに …… 239

第2節　調査の経過 …… 239

第3節　発掘調査の方法 …… 241

第4節　報告書作成 …… 241

第2章　発掘調査の概要 …… 242

第1節　遺構一覧表 …… 242

第2節　1　区 …… (栗野) …… 260

第3節　2　区 …… (栗野) …… 260

第4節　3　区 …… (栗野) …… 262

第5節　3区A地点 …… (山磨) …… 262

第6節　3区B地点 …… (山磨) …… 263

第7節　3区C地点 …… (山磨) …… 263

第8節　3区D地点 …… (山磨) …… 264

第9節　3区E・F地点 …… (栗野) …… 265

第10節　4　区 …… (山磨) …… 268

第3章　出土遺物の概要 …… 269

第1節　はじめに …… (栗野) …… 269

第2節　土器・土製品 …… 269

(1)　弥生式土器 …… (栗野) …… 269

(2)　31号住居址出土土器 …… (栗野) …… 270

(3)　土壙6出土土器 …… (竹田) …… 271

(4)　土 師 器 …… (栗野) …… 272

(5)　須 恵 器 …… (栗野) …… 272

(6)　木葉文様のある須恵器 …… (栗野) …… 273

(7)　建物7，柱穴出土土器 …… (栗野) …… 273

(8)　3区D地点，合口土器棺 …… (栗野) …… 274

(9)　9号住居址出土土器 …… (竹田) …… 274

(10)　26号住居址出土土器 …… (竹田) …… 274

(11)　27号住居址出土土器 …… (竹田) …… 274

執筆者
(12) 32号住居址出土土器 …… (竹田) …… 275
(13) 土器片紡錘車 …… (栗野) …… 275
(14) 土錘 …… (栗野) …… 275
(15) 瓦 …… (栗野) …… 276
(16) 陶硯 …… (栗野) …… 277
(17) 緑釉陶器 …… (栗野) …… 277
(18) 灰釉陶器 …… (栗野) …… 278
(19) 陶磁器 …… (栗野) …… 278
第3節 石器・石製品 …… (栗野) …… 279
(1) 打製石斧 …… 279
(2) 打製石器 …… 279
(3) 打製石鏃 …… 280
(4) 石庖丁 …… 280
(5) 太型蛤刃石斧 …… 281
(6) 扁平片刃石斧 …… 281
(7) 凹石 …… 281
(8) 敲石 …… 282
(9) 磨石 …… 282
(10) 石錘 …… 282
(11) 砥石 …… 282
(12) その他の石器および石 …… 283
第4節 鉄器・鉄製品 …… (栗野) …… 284
(1) はじめに …… 284
(2) 釘 …… 284
(3) 鉄鏃 …… 284
(4) 刀子 …… 285
(5) 鎌 …… 285
(6) 鉄製紡錘車 …… 286
(7) U字形鍬(鋤)先 …… 286
(8) その他の鉄製品 …… 286
第5節 その他の遺物 …… (栗野) …… 287
(1) 耳　　環 …… 287

(2) 青 銅 片 …… 287
(3) ガラス玉 …… 287
(4) 鋳帯 …… 287
(5) その他の遺物について …… 287
第4章 おわりに …… (栗野) …… 288

図 目 次

第1図 領家遺跡の範囲と久米廃寺（S＝1/3,000）（作成：栗野） …… 290
第2図 領家遺跡調査地点（S＝1/2,000）（作成：栗野） …… 291
第3図 領家遺跡トレンチ設定図（S＝1/1,000）（製図：栗野） …… 293
第4図 領家遺跡測量基準線とグリッド割り（S＝1/500）（製図：栗野） …… 294
第5図 領家遺跡遺構配置図① （製図：栗野） …… 296
第6図 領家遺跡遺構配置図② （製図：栗野） …… 297
第7図 領家遺跡遺構配置図③ （製図：栗野） …… 299
第8図 弥生時代の遺構（S＝1/500）（作成：栗野） …… 300
第9図 古墳時代の遺構（S＝1/500）（作成：栗野） …… 301
第10図 奈良時代～平安時代の遺構（S＝1/500）（作成：栗野） …… 302
第11図 1区グリッド断面図（E80m）（S＝1/60）（実測・製図：栗野） …… 303
第12図 2区南北断面図（S＝1/60）（実測：山磨・栗野，製図：栗野） …… 304
第13図 2区上畑用地北端，東西断面図（S＝1/60）（実測・製図：栗野） …… 305
第14図 2区S9～10m（南壁の反転したもの）東西断面図（S＝1/60）（実測・製図：栗野） …… 305
第15図 2区E46m南北断面図（S＝1/60）（実測・製図：栗野） …… 305
第16図 3区南北断面図（S＝1/60）（実測：栗野，山磨，製図：栗野） …… 306
第17図 3区東西断面図（S＝1/60）（実測：栗野・山磨，製図：栗野） …… 306
第18図 弥生式土器（1/3）（実測・製図：栗野・竹田） …… 307
第19図 31号住居址平面図（S＝1／60）（実測・製図：栗野） …… 309
第20図 31号住居址断面図（S＝1／60）（実測・製図：栗野） …… 310
第21図 31号住居址出土土器（1/3）（実測・製図：栗野） …… 311
第22図 3区C地点土器棺出土状態（S＝1／20）（実測：山磨，製図：栗野） …… 312
第23図 3区C地点土器棺（1/8）（実測・製図：栗野） …… 312

第24図　土壙6出土土器（$\frac{1}{4}$）（実測・製図：竹田）…… 313
第25図　建物7柱穴出土土器（$\frac{1}{4}$）（実測：栗野，製図：竹田）…… 313
第26図　3区D地点合口土器棺出土状態（S＝$\frac{1}{10}$）（実測：二宮，製図：栗野）…… 314
第27図　3区D地点合口土器棺（S＝$\frac{1}{4}$）（実測・製図：栗野）…… 314
第28図　9号・26号・32号・27号住居址出土土器（$\frac{1}{3}$）（実測・製図：竹田）…… 315
第29図　27号住居址出土土器（実測：竹田・山磨，製図：竹田）…… 316
第30図　9号・26号・32号・住居址出土須恵器（$\frac{1}{3}$）（実測：山磨・竹田，製図：竹田）…… 317
第31図　古墳時代の土器（$\frac{1}{3}$）（実測：栗野・山磨，製図：竹田・栗野）…… 318
第32図　奈良～平安時代の土器（$\frac{1}{3}$）（実測：栗野，製図：竹田）…… 320
第33図　井戸（S10）実測図（S＝$\frac{1}{20}$）（実測：山磨，製図：竹田）…… 322
第34図　石器・石製品（$\frac{1}{2}$）（実測・製図：栗野・竹田）…… 323
第35図　釘（$\frac{1}{2}$）（実測・製図：栗野）…… 324
第36図　鉄器（$\frac{1}{2}$）（実測・製図：栗野）…… 325
第37図　鉄器，その他の遺物（$\frac{1}{2}$）（実測・製図：栗野）…… 326

図　版　目　次

図版1－1　2区上畑東側全景，H—2,建物6・7，炉1（南より）（撮影　栗野）…… 327
図版1－2　2区上畑西側全景，H2，炉1（南より）（撮影　栗野）…… 327
図版2－1　2区上畑，H2全景（南より）（撮影　栗野）…… 328
図版2－2　2区南北断面N3（東南東より）（撮影　栗野）…… 328
図版3－1　2区東端部，建物3付近（南より）（撮影　栗野）…… 329
図版3－2　2区東端部，建物3付近（北より）（撮影　栗野）…… 329
図版4－1　2区東端部，建物4付近（北より）（撮影　栗野）…… 330
図版4－2　2区東端部，建物4付近（南より）（撮影　栗野）…… 330
図版5－1　2区東端部，炉穴5（南より）（撮影　栗野）…… 331
図版5－2　2区東端部，建物5付近（北より）（撮影　栗野）…… 331
図版6－1　2区中畑東半部（南南東より）建物2，土壙7，S1・6遺構（撮影　栗野）… 332
図版6－2　2区中畑東半部（北東より）（撮影　栗野）…… 332
図版7－1　2区中畑全景（西北より）（撮影　栗野）…… 333
図版7－2　2区中畑西半部（南々東より）（撮影　栗野）…… 333

図版８－１　２区中畑，炉穴４（東より）（撮影：栗野）…… 334
図版８－２　２区中畑，須恵器，甕破片（南西より）（撮影：栗野）…… 334
図版９－１　２区南北断面Ｓ１～２付近（北東より）（撮影：栗野）…… 335
図版９－２　２区南北断面，南畑Ｓ４～６付近（東より）（撮影　栗野）…… 335
図版10－１　２区南畑西方，Ｓ13溝（南より）（撮影　山磨）…… 336
図版10－２　２区南畑，Ｓ10井戸（南より）（撮影　山磨）…… 336
図版11－１　２区，Ｓ10井戸内出土，墨書土器（撮影　山磨）…… 337
図版11－２　２区，Ｓ10井戸付近出土，墨書土器（撮影　山磨）…… 337
図版12－１　１，Ｓ10井戸内出土，墨書土器土器細部（撮影　山磨）…… 338
図版12－２　３区Ａ・Ｂ地点全景（北西より）（撮影　栗野）…… 338
図版13－１　３区Ａ地点，建物９（東より）（撮影　山磨）…… 339
図版13－２　３区Ａ地点，建物25，土壙17・18（撮影　山磨）…… 339
図版14－１　３区Ａ地点，建物11（西より）（撮影　山磨）…… 340
図版14－２　３区Ａ地点，建物12（撮影　山磨）…… 340
図版15－１　３区ＡＢ地点全景（南東より）（撮影　栗野）…… 341
図版15－２　３区Ｂ地点，Ｈ１・土壙19・Ｓ20遺構（南より）（撮影　栗野）…… 341
図版16－１　３区Ｂ地点，建物７（東より）（撮影　栗野）…… 342
図版16－２　３区Ｂ地点，炉穴６（南西より）（撮影　山磨）…… 342
図版17－１　３区Ｂ地点，建物14（南より）（撮影　山磨）…… 343
図版17－２　３区Ｂ地点，１号住居址内，黄色粘土塊（北北東より）（撮影　山磨）…… 343
図版18－１　３区Ｂ地点，１号住居址内土器出土状態（南より）（撮影　山磨）…… 344
図版18－２　３区Ｂ地点，１号住居址周溝の石（南より）（撮影　栗野）…… 344
図版19－１　１，３区Ｂ地点，１号住居址土層断面（西より）（撮影　山磨）…… 345
図版19－２　３区Ｂ地点，１号住居址全景（東上方より）（撮影　山磨）…… 345
図版20－１　３区Ｂ地点，１号住居址内高坏出土状態（撮影　山磨）…… 346
図版20－２　３区Ｂ地点，１号住居址と20号居址（北西より）（撮影　山磨）…… 346
図版21－１　３区Ｃ地点（北西より）（撮影　山磨）…… 347
図版21－２　３区Ｃ地点，３号住居址（東南より）（撮影　山磨）…… 347
図版22－１　３区Ｃ地点，６・７住居址と建物７（撮影　山磨）…… 348
図版22－２　３区Ｃ地点，左から29・５・18・号住居址（東より）（撮影　山磨）…… 348
図版23－１　３区Ｃ地点，９号住居址炭化材出土状態（東より）（撮影　山磨）…… 349
図版23－２　３区Ｃ地点，９号住居址掘り上り状態（東北東より）（撮影　山磨）…… 349

図版24－1　3区C地点，土壙20，S21・S25遺構（南東より）（撮影　山磨）…… 350
図版24－2　3区C地点，8・11・19号住居址，土壙9，S22・23遺構の一部（東南東より）
（撮影　山磨）…… 350
図版25－1　3区C地点，8・11号住居址（北西より）（撮影　山磨）…… 351
図版25－2　3区C地点，S23遺構付近，炉11・12・13・など（西より）（撮影　山磨）…… 351
図版26－1　3区C地点，建物10，土壙8，S25溝（東より）（撮影　山磨）…… 352
図版27－1　3区C地点，26・27号住居址（南東より）（撮影　山磨）…… 353
図版27－2　3区C地点，27号住居址，土器出土状態（南より）（撮影　山磨）…… 353
図版28－1　3区C地点，S24遺構（南西より）（撮影　山磨）…… 354
図版28－2　3区C地点，S23・S24遺構（南東より）（撮影　山磨）…… 354
図版29－1　3区D地点土壙10（南南西より）（撮影　山磨）…… 355
図版29－2　3区D地点土壙11（南西より）（撮影　山磨）…… 355
図版30－1　3区D地点，東端部，S28・29溝など（北西より）（撮影　山磨）…… 356
図版30－2　3区C地点，土壙9（南南西より）（撮影　山磨）…… 356
図版31－1　3区C地点，炉穴17（南より）（撮影　山磨）…… 357
図版31－2　3区C地点，土壙6（南東より）（撮影　山磨）…… 357
図版32－1　3区C地点，土壙6遺物出土状態（南東より）（撮影　山磨）…… 358
図版32－2　3区C地点，土壙6埋土断面（南西より）（撮影　山磨）…… 358
図版33－1　3区C地点，土器棺（南東より）（撮影　山磨）…… 359
図版33－2　3区D地点，合口土棺器（北より）（撮影　栗野）…… 359
図版34－1　3区C地点，S26遺構石だまり（南東より）（撮影　山磨）…… 360
図版34－2　3区D地点，S27遺構石だまり（南東より）（撮影　山磨）…… 360
図版35－1　3区C・E地点，33号住居址（南東より）（撮影　山磨）…… 361
図版35－2　3区D地点，32号住居址（南東より）（撮影　山磨）…… 361
図版36－1　3区D地点，32号住居址竈の粘土散在状態（東より）（撮影　山磨）…… 362
図版36－2　3区D地点，32号住居址竈全景（南より）（撮影　山磨）…… 362
図版37－1　3区E地点，16号住居址（西南西より）（撮影　山磨）…… 363
図版37－2　3区E地点，北半部全景（西より）（撮影　栗野）…… 363
図版38－1　3区E地点全景，北半部（東より）（撮影　栗野）…… 364
図版38－2　3区E地点，北半部（北西より）（撮影　栗野）…… 364
図版39－1　3区E地点，16号住居址（西北西より）（撮影　栗野）…… 365
図版39－2　3区E地点よりD地点を望む発掘風景（北西より）（撮影　栗野）…… 365

図版40－1　3区E地点よりF地点（北西より）（撮影　栗野）…… 366
図版40－2　3区E地点（南より）（撮影　栗野）…… 366
図版41－1　3区E地点，建物19・20（南西より）（撮影　栗野）…… 367
図版41－2　3区E地点，建物19・20（北々西より）（撮影　栗野）…… 367
図版42－1　3区E地点，建物16（西より）（撮影　栗野）…… 368
図版42－2　3区E地点，S30遺構南北断面（東より）（撮影　栗野）…… 368
図版43－1　3区E地点，建物17（西北より）（撮影　栗野）…… 369
図版43－2　3区E地点，S30遺構内土器群1～4（北より）（撮影栗野）…… 369
図版44－1　3区E地点，N20m東西断面W9・W8，4号住居址(西南より)（撮影　栗野）370
図版44－2　3区E地点，N20m東西断面W8・7（南々東より）（撮影　栗野）…… 370
図版45－1　3区E地点，N20m東西断面，W1～2，21号住居址（西南より）（撮影　栗野）371
図版45－2　3区E地点，W20m南北断面N5，21号住居址（撮影　栗野）…… 371
図版46－1　3区E地点，W20m南北断面N4・3（西より）（撮影　栗野）…… 372
図版47－1　3区E地点，W20m南北断面N2付近（北西より）（撮影　栗野）…… 373
図版47－2　3区E地点，W20m南北断面N1，S32遺構（西より）（撮影　栗野）…… 373
図版48－1　3区E地点，土壙1・2・3（東より）（撮影　栗野）…… 374
図版48－2　3区E地点，土壙3（東より）（撮影　栗野）…… 374
図版49－1　3区E地点，土壙1（西より）（撮影　栗野）…… 375
図版49－2　3区E地点，土壙4（北より）（撮影　栗野）…… 375
図版50－1　3区E地点，土壙5（南より）（撮影　栗野）…… 376
図版50－2　3区E地点，土壙21（北から）（撮影　栗野）…… 376
図版51－1　3区E地点，14号住居址（西南西より）（撮影　栗野）…… 377
図版51－2　3区E地点，14号住居址竈（南々東より）（撮影　栗野）…… 377
図版52－1　3区E地点，24号住居址（西より）（撮影　栗野）…… 378
図版52－2　3区E地点，24号住居址竈付近の粘土塊（北東より）（撮影　栗野）…… 378
図版53－1　3区E地点，24号住居址竈（北西より）（撮影　栗野）…… 379
図版53－2　3区E地点，24号住居址竈の西方土器一括（北西より）（撮影　栗野）…… 379
図版54－1　3区E地点，24号住居址竈の西側土器一括（北東より）（撮影　栗野）…… 380
図版54－2　3区E地点，土壙23（南より）（撮影　栗野）…… 380
図版55－1　3区E地点，土壙24・25・26（南西より）（撮影　栗野）…… 381
図版55－2　3区E地点，28号住居址（東より）（撮影　栗野）…… 381
図版56－1　3区E地点，土器出土状態（西より）（撮影　栗野）…… 382

図版56－2　3区E地点，21号住居址（西より）（撮影　栗野）…… 382
図版57－1　3区E地点，炉14（北より）（撮影　栗野）…… 383
図版57－2　3区E地点，21号住居址埋土上層出土器台（東より）（撮影　栗野）…… 383
図版57－3　3区E地点，21号住居址埋土上層高坏（東より）（撮影　栗野）…… 383
図版58－1　3区E地点，23号住居址出土土器（南より）（撮影　栗野）…… 384
図版58－2　3区E地点，炉15（西南より）（撮影　栗野）…… 384
図版59－1　3区E地点，31号住居址発掘作業風景（西北より）（撮影　栗野）…… 385
図版59－2　3区E地点，31号住居址（西より）（撮影　栗野）…… 385
図版60－1　3区E地点，31号住居址（東より）（撮影　栗野）…… 386
図版60－2　3区E地点，31号住居址（西より）（撮影　栗野）…… 386
図版61－1　3区E地点，31号住居址（北より）（撮影　栗野）…… 387
図版61－2　3区E地点，31号住居址，中央ピット（　より）（撮影　栗野）…… 387
図版62－1　3区E地点，31号住居址，炭化した柱材No.　（西南より）（撮影　栗野）…… 388
図版62－2　3区E地点，31号住居址，柱穴No.　（西南より）（撮影　栗野）…… 388
図版63－1　3区E地点，31号住居址，柱穴No.　（北より）（撮影　栗野）…… 389
図版63－2　3区E地点，31号住居址，炭化材出土状態（西より）（撮影　栗野）…… 389
図版64－1　3区E地点，31号住居址，杭検出状態（撮影　栗野）…… 390
図版64－2　3区E地点，31号住居址，杭断面…… 390
図版65－1　3区E地点，31号住居址，甕出土状態（北より）（撮影　栗野）…… 391
図版65－2　31号住居址，壺出土状態（撮影　栗野）…… 391
図版65－3　31号住居址，台付埦出土状態（撮影　栗野）…… 391
図版65－4　31号住居址，高坏出土状態（撮影　栗野）…… 391
図版66－1　31号住居址，最初に炭化米が検出された状態（撮影　栗野）…… 392
図版66－2　31号住居址，炭化米を洗い出した状態（撮影　栗野）…… 392
図版66－3　炭化籾出土状態（撮影　　）…… 392
図版66－4　炭化籾出土状態，同一方向に並んでいる。（撮影　栗野）…… 392
図版67－1　3区F地点全景，建物21・22（西北西より）（撮影　栗野）…… 393
図版67－2　3区F地点全景，12・30号住居址全景（西南より）（撮影　栗野）…… 393
図版68－1　3区F地点，左30号住居址，右下12号住居址埋土断面（西南より）（撮影　栗野）394
図版68－2　3区F地点，12号住居址中央ピット（北より）（撮影　栗野）…… 394
図版69－1　2区全景（西南西より）右遠望に久米廃寺・宮尾遺跡（撮影　栗野）…… 395
図版69－2　3区全景（東より）向うの竹籔は4区（撮影　栗野）…… 395

図版70－1　土錘（撮影　栗野）…… 396
図版70－2　緑釉陶器（撮影　栗野）…… 396
図版71　陶磁器（撮影　栗野）…… 397
図版72　石包丁（撮影　栗野）…… 398
図版73－1　石錘・石鏃・太型蛤刃石斧・砥石（撮影　栗野）…… 399
図版73－2　砥石（撮影　栗野）…… 399
図版74－1　凹石・敲石・磨石（撮影　栗野）…… 400
図版74－2　その他（撮影　栗野）…… 400

第1章　調査の方法と経過

第1節　はじめに

領家遺跡は，岡山県久米郡久米町大字領家に所在する。領家の中でも東南端部に位置し，1区の東には大字宮尾との字境がある。小字名は上神・田尻・才の鼻などに分れており，大字名をとって領家遺跡とした。

発掘調査は，昭和46年4月から47年3月まで実施されたが，久米廃寺や二宮大成遺跡の調査と併行して進められたり，当初3名予定された調査員が2名に減少するなど，変則的な体制で調査せざるを得なかった。

調査前の推測では，奈良～平安期の遺跡で隣接する『久米廃寺』との関連で重視されていた。

今回の調査の結果，先土器時代の石斧が発見され，弥生時代中期以降古墳時代，奈良・平安時代，中世まで継続した集落址であることが判明した。

調査によって明らかになったことの一部をひろい出してみると，火災にあって多量の炭化籾を出土した弥生時代後期の住居址，岡山県では初めて確認した古墳時代の造り付の竈，集落址には珍らしい緑釉陶器，円面硯，石製銙帯等，遺構遺物の出土量が極めて多く多大の資料を得ることができた。しかし，今回の報告書作成にあたって，この膨大な資料のすべてを整理できなかった。出土遺物の仕分け，ピックアップ，復元さえ十分済んでいないので，今後さらに整理・検討を重ねる必要があるが，今回は概要を報告する。

第2節　調査の経過

領家遺跡は中国縦貫自動車道路線の分布調査（註1）によって発見された散布地である。特に路線内でも南側の畑と，路線外南側の畑にかけて多くの須恵器片が採集された。奈良～平安時代のものがほとんどで，東隣りに存在する「久米廃寺」（註2）との関連が注目されて『特に重要な遺構が発見される場合を除き完全な記録保存が必要』とされた。

昭和46年3月に路線に接続する町道の，整備事業のため一部トレンチ調査を実施したときには，遺構は検出されなかったが，奈良～平安期の遺物以外に，弥生式土器，古墳時代の須恵器もみつかり，複合遺跡の可能性を示した。またこの遺跡の土は千枚岩の風化した細礫が混在していること，又硬いことなどから土層の観察が困難であることがわかった。このことは領家遺跡の調査中終始調査員を悩ませた。

発掘調査は昭和46年4月～47年3月31日まで調査面積2,900㎡で契約され，調査は栗野克己・山磨康平の二名が担当した（註3）。当初は久米廃寺の調査と併行して進められた。当時調査対象区域内には用地買収未了地や，用地買収が済んでいても，立木，作付が残っているものもあり調査の障害となった。そこで日本道路公団や，用地局（県）と連絡調整をはかり，立木・作付の除去をすすめ

た。又，用地買収未了地には地区住民の生活用水の水源の問題があり，短期間では解決し難い状況であったので，それ以外のところから調査を開始した。まず遺跡の範囲，遺構の状況，土層の観察を目的としたトレンチ調査を実施した。その結果，1区は遺物も少量で磨滅しており厚い堆積粘土が認められるだけでこの谷には遺構を確認できる状態ではなかった。2区からは多量の瓦，須恵器などと共に柱穴が発見され注意をひいた。3区では奈良・平安時代の須恵器・柱穴，古墳時代の須恵器，弥生時代の土器と住居址などが発見された。4区では遺構・遺物の存在は確認できなかった。

トレンチ調査の結果をもとに，本格的調査の方法が検討された。そこでは二通りの意見が提案された。一つは2区と3区については全面発掘調査が必要であるという意見。もう一つは，多量の遺物は斜面上方から流されて，二次的に堆積したもので，調査地点には遺構は存在しないとする発掘調査に消極的な意見であった（註4）。そこで一応4mグリッドを一つおきに発掘し，しかるのち再検討するということになった。その結果，2区では柱穴が多く検出されたため，建物としてのまとまりをつかむには全面に広げて調査する必要がでてきた。

2区では柱穴が多く検出された中段の畑の全面発掘調査を先に実施し，上段の畑と下段の畑の西方は作業の段取をみて最後にまわした。

そのうち用地の問題も解決がつき，3区の調査を開始した。3区A・B地点の調査は「二宮大成遺跡」の調査と併行して進められ，2区の調査終了地点に排土を埋めた。

3区B～F地点は全面発掘で，おおよそ三層に遺構の検出を見たが，C地点の最下層は時間的制約のため，トレンチにより検出された遺構だけを調査した。

調査中に4区では墳丘状の高まりが発見され，別途調査が実施された。

註－1　「I調査の経過」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会1973。

註－2　久米廃寺は白鳳時代に創建された寺院址で昭和44年より昭和46年にかけて発掘調査され，塔・金堂・講堂などの中心建物群をはじめ，瓦・仏像など多量の遺物が出土している。

註－3　3名の調査員のうち1名は退職されたが調査員の補充はなく，本遺跡は実質的に2名で調査した。

註－4　地山掘込み遺構と異なり，黒色土・黒褐色土・茶褐色土など，浅い谷の部分の堆積土層中に遺構の検出される例は，本遺跡以後，主なものに「小中遺跡2区」（第4分冊収録）「平遺跡」（第5分冊収録）「桃山遺跡」（現在調査中）等があげられる。土層の観察がむづかしいため，遺構の検出が容易ではない。

発掘調査にあたっては地元の方々をはじめ，久米町教育委員会には多くの協力を願った。また調査に直接従事された作業員の労苦に対し記して謝意を表わしたい。

赤木美興志・青瀬解逸・青瀬只四・安藤克己・安藤侍郎・安藤孝子・安藤豊子・池田糸代・池田啓子・池田幸子・池田子市・池田澄江・池田末・池田節子・池田竹夫・池田富子・池田登・池田峰子・池田恵・石賀芳子・岩野勢津子・太田すみ子・尾峪知津子・岸川藤子・高下弘代・小林清子・小山能会・佐々木修一・実成充雄・徳本糸子・飛山照一・飛山裕・野条志一・野条静枝・野条とし子・灰原輝代子・灰原保子・灰原泰子・早瀬幸子・広島海三・広島文江・真名子育世・真名子栄一

真名子清一・ 三船春江・三船安江・山崎武四郎・山田艶子・山本訓

第3節 発掘調査の方法（第2図～4図）

調査区は1～4区まで分けられた。地形観察により，浅い谷部分がみられ，土地利用は地形に合わせて，水田，畑，果樹園，竹林，雑木林，墓地などに使われていた。発掘調査をする場合に山や谷部分のそれぞれを単位として発掘をする必要があるので地形の状況に応じて区分した。

1区は水田で谷の部分である。2区は農道を境としたが，2区の若干の遺構が農道の下からと1区の水田の方へ広がって検出しえたので，2区の遺構と連続するためそのまま2区に含めて表示することとした。

2区の現況は畑で主に谷の部分であるが，両端部では岩盤が露出した尾根部分もあったが2区とした。

3区は果樹園や畑として利用されておる場所で最も広い面積を有する。3区の西よりに西北から東南方向の谷があり堆積土が厚かった。東側では岩盤を掘り込んだ遺構も確認された。

4区は竹林であったが3区に近い方は雑木林となっていた。丘陵部分であり岩盤が露出する。

一方調査区とはまったく別個の方法でグリッド設定をした。（第4図）STA189+60を原点として，磁北方向を南北基準線（註—1）と定め，直角に東西基準線をとり，20m方眼に杭を設定した。この杭はのちのちまで測量用の原点とするために，心杭を用い釘を打ちポイントにした。この20m方眼の線にそって，東西あるいは南北方向に巾2mのトレンチを設定した。トレンチは未買収地点を除いたため変則的な形になった部分もある。また小さいグリッドですませた部分もある。

当初この20m方眼一つずつの名称はつけずに，原点から4mおきに設定した4m方眼の小グリッドを，原点からそれぞれの方向へ数を増すごとに方位を示す頭文字と数字でE2S3とかW8N2とか呼称した。ところが3区は案外広い面積なので20m方眼を東からA～Fまでの6地点に区分し前記のものと併用した。

遺物の処理は各遺構以外で取上げたものについては，すべて前記の小グリッドと土層名を付した。

測量はS＝$\frac{1}{20}$を基本とし，場合によってはS＝$\frac{1}{5}$，$\frac{1}{10}$を併用した。高低差がはげしいため，ほとんど平板測量による。全体図の作成にあたっては原図をマイクロ写真でS＝$\frac{1}{100}$に縮少しトレースした。領家遺跡は復合遺跡であり分層発掘を実施したことから遺構が重複するため，3枚の全体図を作成した。3枚の図はそれぞれ①第1回目に検出された遺構，②第2回目に検出された遺構と第1回目の残存遺構，③第3回目に検出された遺構と，第1，2回目の残存遺構として検出順に作成した。上面が削平されているものがあるため必ずしも年代を追って検出していない。（第5～7図）

第4節 報告書作成

調査員のうち1名が昭和49年10月～12月までの3ヶ月間，整理にあたった。もう1名の調査員は他の発掘調査に従事しながらあたった。このように限定された人員と期間のため一定の作業量を確

保できず，個々の遺構のトレースや，遺物の復元，実測が充分ではない。詳細に遺構を検討するには不充分な報告書であるが，領家遺跡の概略について記したものである。

なお本報告書作成にあたり遺物の実測・トレースなどについて，竹田勝氏の協力を得た。

註1　50,000分の1地形図（津山西部）によれば，この付近の真北と磁北との差はN6°40′Wである。

第2章　　発掘調査の概要

第1節　遺構一覧表

発掘調査した時点で、遺構の種類別に番号を付していたが、中には他種のものが混在するので報告書作成の段階で分類しなおした。またあらたに作成した番号もある。そこで収蔵庫にある遺物については旧番号で整理されているので、今後、資料として活用する際、混乱しないよう「遺構番号新旧対象表」を伴せて作成した。①住居址（H）、②建物（T）、③土壙（D）、④炉および焼土（炉）、⑤その他の遺構（S）、⑥遺構番号新旧対象表として各遺構は( )内の記号と番号でよぶことにしている。大きさや、数などで確実でないものは( )を付した。

(1) 住居址一覧表(H)

遺構番号	遺構種類	プラン	付属施設	大きさ	柱穴	遺物 土器 埋土	遺物 土器 床面	遺物 その他	備考
H 1	住居址	円形	周溝	6 m	5+(1?)	7世紀前半 須恵器	弥生後期中葉	たたき石 高杯・器台	3区 B
H 2	住居址	円形	炉 ? 周溝		1+?		弥生中期中葉	壷	2区上畑
H 3	住居址	円形		(4.3m以上)	4+?	須恵器	弥生後期		3区 C
H 4	住居址	円形	周溝	(6～7m)		弥生後期	弥生後期	石庖丁 1	3区 E
H 5	住居址	方形	炉 周溝	一辺約6m?	2+?		弥生後期	石庖丁1完形	3区 C
H 6	住居址	方形		一辺4.5m?	2+?	七世紀前半	七世紀前半?		3区 C
H 7	住居址	方形	炉 周溝	一辺4.0m 程度か	不明	七世紀前半	七世紀前半?		3区 C
H 8	住居址	方形	炉 周溝	一辺 4m～5.5m	3+?				3区 C

遺構番号	遺構種類	プラン	付属施設	大きさ	柱穴	遺物			備考
						土器		その他	
						埋土	床面		
H 9	住居址	方形	炉	一辺5m	2+(2?)=4?	六世紀後半	六世紀後半	ふいごの羽口 杯身・杯蓋・高杯壺	3区C
H 10	住居址	方形	中央部に凹み	一辺5m	2 + ?	須恵器		H9より古い	3区C
H 11	住居址	方形		一辺4m	2+2=4	須恵器			3区C
H 12	住居址	円形	周溝 床溝 中央ピット	(7.2)m×8m	7 ?		弥生中期?	H30より古いガラス玉	3区F
H 13	住居址か?	方形?	周溝	一辺6m以上	不明		7世紀前半か?		3区F
H 14	住居址	方形	かまど 炉	一辺4.5m	2+(2?)		7世紀前半		3区E
H 15	住居址	方形?	炉 周溝	一辺4.5m以上	不明		7世紀前半?		3区E
H 16	住居址	方形	周溝	8~9.60m	あり		6世紀後半	ふいごの羽口 杯身	3区E
H 17	住居址	方形		一辺6m?	不明	7世紀前半	7世紀前半		3区E

遺構番号	遺構種類	プラン	付属施設	大きさ	柱穴	遺物			備考
						土器		その他	
						埋土	床面		
H 18	住居址	方形		不明	なし	弥生か			3区C
H 19	住居址	方形	炉	一辺5.45m	2 + ?	七世紀前半	七世紀前半		3区C
H 20	住居址	方形		一辺 (6.3m以下)	あり	土師器	土師器	須恵器なし たたき石	3区B
H 21	住居址	円形	炉 周溝	5.4 m	3 + ?	弥生後期	弥生中期? 弥生後期?	上層器台高杯	3区E
H 22	住居址	方形	炉	一辺5m以上	あり	七世紀前半?			3区F
H 23	住居址	?	周溝?	4m以上	不明	弥生後期		完形品あり（つぼ）	3区F
H 24	住居址	方形	かまど 周溝	4.65m ×4.85m	4	六世紀後半	六世紀後半	完形品あり 杯身3・高杯2	3区E
H 25	住居址	方形	炉	一辺4.7m	あり	七世紀前半	七世紀前半		3区E
H 26	住居址	方形	周溝	6.5 m	不明	六世紀後半	六世紀後半	土師器・ワン 須恵器・杯身	3区C

遺構番号	遺構種類	プラン	付属施設	大きさ	柱穴	遺物			備考
						土器		その他	
						埋土	床面		
H 27	住居址	方形	周溝	4.8 m	2	五世紀	五世紀		3区C
H 28	住居址	円形	炉址 周溝	5.8 m	8	弥生後期	弥生後期	柱穴より 小型ツボ	3区E
H 29	住居址	方形		一辺5.5m以上	不明	6世紀後半？			3区C
H 30	住居址	円形	炉 周溝 2本	4.6 m 5.2 m	2 + ？	弥生中期か？	弥生中期末？	H12より新	3区F
H 31	住居址	円形	周溝	7.8m ×(6.2m)	8	弥生後期 扁平片刃石斧	弥生後期初頭	建物16の北 炭化米・石斧・石庖丁・壺・高杯等完形品	3区E
H 32	住居址	方形	かまど 炉 周溝	6.7m ×6.5m	2 + (2?) ＝4	六世紀後半	六世紀後半	ガラス玉	3区D
H 33	住居址	円形			不明		弥生後期	石庖丁	3区C E

（2） 建　物　一　覧　表（T）

遺構番号	時期	柱数	間×間	場所
T 1	平安末か	7 ～ 8 ＋ ？	4×2 （8.8m×4.1m）	2区北
T 2	奈良～平安	9 ＋ ？ 5 ＋ ？	7×2 （15.8m×4.2m） 5×？ （10.63m）	2区北
T 3	奈良～平安	7 ＋ ？	3×2 （6.1m×4m）	2区北
T 4	七世紀代	11	3×2（×3） （4.8m×3.1m）	2区北
T 5	七世紀代か？	5 ＋ ？	3×（1） 5.55m×4.625m	2区北田
T 6	奈良～平安	7 十（1？）	2×2 （4.4m×4m）	2区上の畑
T 7	四世紀後半	3 ＋ ？	2×？ （3.2m）	2区上の畑
T 8	平安時代？	3 ＋ ？	2×？ （3m）	2区南

遺構番号	時期	柱数	間×間	場所
T 9	?	6	2×1 (2.8m×1.7m)	3区C
T 10	8世紀前半か?	6 + ?	2×(3) (3.2m×5.1m)	3区C
T 11	?	3 + ?	2×(3.1m)	3区A
T 12	?	3 + ? 2 + ?	2 (2.6m) 1 (2m)	3区A
T 13	奈良・平安	礎石2+(6) すえつけ穴5+(1)	3×1 4.75m×1.75m	3区B
T 14	?	7 + 2	(2)×2 2.7m×2.7m	3区B・D
T 15	奈良時代か?	9 + 1	2×3 (4.05m×7m)	3区C・D
T 16	奈良時代か?	4 + ?	(2)×(1) (3.6m×1.5m)	3区E
T 17	平安時代(灰釉)	8 + 2	2×3 (4.3m×6.3m)	3区E

遺構番号	時期	柱数	間×間	場所
T 18	平安（灰釉）	6 ＋ ？	（1）×2　（3.9m×4.8m）	3区 E
T 19	奈良末～平安？	7 ＋ ？	2×（2） 4.5m×4.8m	3区 E
T 20	奈良末～平安	4	1×1 1.5m×2.1m	3区 E・F
T 21	平安末	4	3　（5.7m）	3区 F
T 22	平安末	4	3　（5.1m）	3区 F
T 23	平安か	3	2　（4.2m）	3区 E
T 24	不明	5	4　（3.4m）	3区 C
T 25	？	10 ＋ ？	（7.7m）	3区 A

（3） 土　坑　一　覧　表　（D）

遺構番号	形	大きさ	深さ	時期	備考	位置
D 1	長楕円形	1m×2.5m	50cm	奈良時代	土師器杯＼ 須恵器杯／ 一括	3区E
D 2	長楕円形	1.25m×2m	40cm	奈良時代	石だまり	3区E
D 3	長楕円形	2.40m×3.20m	40cm	平安時代	大ガメロ縁部	3区E
D 4	円形	1.07m	25cm	不明	遺物ナシ	3区E
D 5	円形	1.10m	85cm	弥生中期か？		3区E
D 6	円形	1.4m	100cm	弥生後期	壺2・高杯3（破片）	3区C
D 7	円形	1.12m	38cm	奈良末～平安	石	2区北
D 8	長楕円形	3.1m×1.3m	30cm	奈良時代？		3区C

遺構番号	形	大きさ	深さ	時期	備考	位置
D 9	円形	1.1m		6世紀後半	はそう	3区C
D 10	長楕円形	2.9m×1m	45cm	平安末		3区D
D 11	楕円形	1m×0.65m	45cm	平安末		3区D
D 12	円形？	1.75m	50cm	？	半分	2区北
D 13	円形	1.25m	27cm	平安時代		2区北
D 14	楕円形	1.33m×1.13m	42cm	七世紀	石1個	2区東
D 15	長楕円形	2.4m×1.55m	32cm	奈良末～平安時代	石31個以上埋める。	2区東
D 16	円形	0.91m×0.71m	18cm	奈良末～平安時代		2区東
D 17	不整方形	0.84m×0.74m	59cm	近世	近世墓坑	3区A

遺構番号	形	大きさ	深さ	時期	備考	位置
D 18	不整円形	63cm×52cm	30cm	近世	近世墓坑	3区A
D 19	長方形？	巾3m，奥行2m	70cm	奈良末～平安	この付近には10～30cmの浅い凹みがある。	3区B
D 20	楕円形	140cm×180cm	30cm以上	古墳時代		3区C
D 21	円形袋状	80×65cm 中の最大径112cm	70cm	弥生中期？	H21の床面より 伴うかどうか，	3区E
D 22	円形	80cm	40	古墳時代	H24の北	3区E
D 23	円形	120cm×90cm	49cm	古墳時代後期 六世紀後半	H24の付属施設の可能性あり 炭化桃の種子，須恵器	3区E
D 24	楕円形	88cm×62cm	24cm	弥生後期	H4の中	3区E
D 25	長方形	80cm×74cm	H4より−30cm H28より−18cm	弥生後期	H4の中央ピットの可能性あり	3区E
D 26	楕円形	240cm×186cm	22cm	弥生後期	H32の中	3区E
D 27	長方形？	155cm×85cm	44cm	弥生	H33の西	3区E

（4）焼土および炉址（炉）

遺構番号	種類	大きさ	時期	備考	位置
炉 1	炉	83cm×58cm	奈良末　平安		2区北
炉 2	焼土と灰	50cm×40cm	不明		2区北
炉 3	焼土と灰	50cm×50cm	不明		2区北
炉 4	炉穴	88cm×73cm 深さ16cm	不明	T 1より古い。	2区北
炉 5	炉穴	80cm×85cm 深さ24cm	奈良末～平安	T 3に付属するものか？	2区北
炉 6	炉穴	78cm×52cm 深さ35cm	古墳時代	土器一個体 実測図あり。	3区B H22の西
炉 7	焼土	76cm×82cm	奈良末～平安		3区B
炉 8	炉と焼土	炉　40cm×34cm 焼土　20cm×20cm 焼土　15cm×15cm	古墳時代後期？		3区C

遺構番号	種類	大きさ	時期	備考	位置
炉 9	焼土	20cm×15cm	古墳時代後期		3区C
炉 10	焼土	34cm×28cm 24cm×18cm	古墳時代後期		3区C
炉 11	焼土	48cm×28cm 27cm×32cm 27cm×18cm	古墳時代後期		3区C
炉 12	焼土	55cm×45cm	古墳時代後期		3区C
炉 13	焼土	75cm×45cm 40cm×43cm	古墳時代後期		3区E
炉 14	炉と焼土	炉34cmの円形 まわりに焼土	古墳時代後期		3区E
炉 15	炉と焼土	炉34cm×26cm深さ4cm 焼土90cm×50cm 焼土50cm×40cm	古墳時代か？		3区E
炉 16	焼土	150cm×90cm	奈良末～平安	この部分だけでなくS 32遺構全体に広がっていた。	3区E
炉 17	炉穴	110cm×54cm 深さ15cm	古墳時代？	長方形で非常によく焼けた壁をもつ。	3区C

(5) その他の遺構 (S)

遺構番号	種類	大きさ	時期	備考	位置
S 1	溝	巾 35 cm, 深 9 cm	奈良末～平安	西から東へ傾斜	2区北
S 2	溝	巾 27 cm ～ 60 cm 深 15 cm	奈良末～平安	西から東へ傾斜 北から南へ傾斜	2区北
S 3	溝	巾 46 cm ～ 50 cm	奈良末～平安	東から西へ傾斜	2区北
S 4	溝	巾 18 cm ～ 27 cm 深 7 cm	奈良末～平安	東から西へ傾斜	2区北
S 5	段	巾 32 cm, 高 30 cm	奈良末～平安		2区北
S 6	溝	巾 65 cm ～ 70 cm 深 約 39 cm	七世紀		2区北
S 7	溝	巾 70 cm ～ 90 cm 深 約 19 cm	七世紀		2区北
S 8	溝	巾 35 cm ～ 75 cm 深 約 20 cm	不明	炉 2・3, T1 より古	2区北

遺構番号	種類	大きさ	時期	備考	位置
S 9	溝	巾 4.5 m	奈良末～平安末まで	北から南へ傾斜	2 区
S 10	井戸	堀方，直径55 cm，深35 cm 曲物，直径55 cm，深26 cm	奈良末～平安時代	曲物の周囲には石をつめている。 墨書土器	2 区南
S 11	段	高さ 30 cm	奈良～平安時代		2 区南
S 12	溝	巾 75cm～ 125cm 深 10cm～ 42cm	七世紀代	東から西，北から南へ傾斜	2 区北
S 13	溝		奈良末～平安時代		2 区南
S 14	段と溝	段，高低差 70 cm 溝，巾 50 cm，深 8 cm	新	東から西へ	3 区 A
S 15	段と溝	段，高低差約 40 cm 溝，巾20～40 cm，深10 cm	近世	近世墓造成面を作成のもの，東側の南北溝は現水道の管のため，	3 区 A
S 16	溝	巾 30 cm ～ 115 cm 深 30 cm	新？		3 区 A
S 17	溝	巾 60 cm ～ 120 cm 深 47 cm	現在まであった畑の溝である。		3 区 A

遺構番号	種類	大きさ	時期	備考	位置
S 18	溝	巾 40 cm ～ 60 cm	奈良末～平安		3 区 B
S 19	段	高低差 12 ～ 30 cm	奈良末～平安		3 区 B
S 20	溝	巾 30 cm ～ 70 cm 深 15 cm	奈良末～平安	3区D地点まで，途切れているが，延長する。	3 区 B
S 21	段と平坦面	高低差 20 cm 東西 5 m	六世紀後半	H 20によって切られている。	3 区 C
S 22	段と平坦面		七世紀前半		3 区 C
S 23	段と柱穴	約35 cmの段の下に平坦面が東西に20m？	古墳時代後期	炉が8～13とした焼土が伴うだろう。	3 区 C
S 24	溝と平坦面	東西 17 m	弥生時代？		3 区 C
S 25	溝	巾 48 cm，深 10 cm	奈良末～平安時代	T 10のに伴う溝か？	3 区
S 26	石だまり	約4.3 m × 2.5 mの範囲	弥生後期	石だまりの中に土器片がみられる。	3 区 C

遺構番号	種類	大きさ	時期	備考	位置
S 27	石だまり	約5m×5mの範囲	古墳時代後期	石だまりの中に須恵器片がみられる。	3区D
S 28	溝	巾 40cm 深 12cm	奈良末～平安時代		3 D
S 29	溝	巾 50cm 深 20cm	奈良末～平安時代		3 D
S 30	?	7.5m×4mの平坦面	平安時代	縁釉，灰釉陶器，大甕，杯5ケ所	3 E
S 31	崖と溝	崖約1mの高低差 溝巾約30cm深3cm～15cm	平安時代	T18の平坦部造成のため作られたもの。	3区E
S 32	溝と平坦面	巾 30～80cmの溝	奈良末～平安	炉16とした焼土が広がる。	3区E
S 33	溝	巾約1m深さ10cm	奈良末～平安		3区EF
	土器棺	土坑ははっきりしないが142cm×95cmである。	弥生時代中期	1個体分破片	3区C
	合口土器棺	土坑は確認していない。	古墳時代前期	2個完形品	3区D

(6)遺構番号新旧対象表

旧住居址

新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧
H 1	H 1	H 11	H 10	H 19	H 20	H 26	H 30	H 31	H 40
H 2	H 2	S 32	H 11	S 22	H 21	H 27	H 31	H 32	H 41
H 3	H 3	H 12	H 12	H 20	H 22	H 28	H 32	S 27	H 42
H 4	H 4	H 13	H 13	S 21	H 23	炉 14	H 33	H 33	H 43
H 5	H 5	H 14	H 14	H 21	H 24	H 29	H 34	H 10	H 44
H 6	H 6A	H 15	H 15	H 22	H 25	T 7	H 35		
H 7	H 6B	H 16	H 16	H 23	H 26	S 23	H 36		
H 8	H 7	S 30	H 17	H 24	H 27	S 24	H 37		
H 9	H 8	H 17	H 18	H 25	H 28	S 27	H 38		
H 10	H 9	H 18	H 19	H 16	H 29	H 30	H 39		

旧建物

新	旧	新	旧
T 1	T 1	T 14	T 11
T 2	T 2	T 15	T 12
T 3	T 3	T 16	T 13
T 4	T 4	T 17	T 14
T 5	T 5	T 18	T 15
T 9	T 6	T 19	T 16
T 13	T 7	T 20	T 17
T 6	T 8		
T 10	T 9		
T 9	T 10		

旧柱穴列

新	旧
H 31	H 40
H 32	H 41
S 27	H 42
H 33	H 43
H 10	H 44

第2節　1区（第3図）

この地区は東端を久米廃寺8区と接しており、そのときのトレンチ調査の結果では東半部ではすでに遺物の散布や遺構の存在がみられなかった。そこで領家遺跡のトレンチ調査では、最初にS20mの基準線にそって巾2mのトレンチを設定した。このトレンチでは地山までの間に0.2m～1mの灰色粘土層が水平に堆積しておりマンガンの状態などから水田耕作土と考えられた。この土層から出土する遺物はすべて磨滅しており、地山面でも遺構は検出されなかった。また1区の谷中央部付近に坪掘りを2ケ所実施した。(第11図) この坪掘りでは水田下約2mまで発掘すると砂利層にあたった。途中の堆積層の観察では第2層より、若干の瓦・須恵器の磨滅したものが出土したのと、第6・7層より弥生式土器と推定される細片が出土しただけで何らの遺構も検出されなかった。

以上約60㎡のトレンチ発掘調査の結果により全面発掘調査は行なわなかった。

第3節　2区（第5・6図）

2区は領家遺跡の東半部の谷で、弥生時代・古墳時代・奈良末～平安時代の各時期の遺構を検出した。

発掘調査は当初明確な遺構が検出されなかったことから、4mグリッドを一つおきに掘搾し、原則として、その後全面の分層発掘を実施した。現在農道に使用している部分の調査は実施できなかったが，東端部では遺構の延長が認められたので、その部分は農道をつけ替えて、拡張調査をした。2区の発掘平面積は1.019㎡であるが、分層発掘により遺構の検出を2回以上実施したものを加えれば、約1.400㎡である。

トレンチによる断面観察をもとに土層を分類し、分層発掘の基準とした。以下その大別を示す。(第12～15図)

A層.　茶褐色土、表土＝耕作土

B層.　やや明るい茶褐色土、千枚岩混り。

C層①　やや暗い茶褐色土、千枚岩混り

C層②　黒灰色、あるいは黒茶褐色で灰が混っているような土、千枚岩混り、奈良末～平安時代の遺物多し。

D層　暗茶褐色土、ややマンガン質、砂礫の多い部分もある。古墳時代後期。

E層①　黒褐色土マンガン質、弥生式土器を含む。

E層②.　黒色土層、弥生式土器を含まない。

F層.　黄褐色粘質土
G層.　黄色砂利層　　遺物は出土しない。
H層.　千枚岩岩盤

以上の基本的層序は、3区の層序と比較したばあい若干の土質の相違があってもほぼ変らないも

ので、1区を除いた本遺跡の基準土層となる。これらの土層には、必ず千枚岩の細かく割れた礫が混り、乾燥すると発掘作業に支障をきたすほど硬くしまる層となる。これは特にB層に多かった。また遺構検出面までの堆積土は厚く大変な作業量であった。

2区の谷の湧水点は用地外北方約80mのところで調査区より約15m程高い所にあり、現在でも井戸として使用されていた。そのため、調査中はいつも水が湧水していたし、堆積土は3区に比べて粘質を帯びていた。以下発掘調査の概要を時代別にのべる。

A、弥生時代の遺構は住居址を一軒検出したのみである(2号住居址)。遺物の発掘状態はS9溝の下層の黒色粘土層(E層)より、弥生時代中期の土器片が出土している(第14図)このことより当時から、低く浅い谷が存在したと推察できる。また南畑の西方、建物8付近の下層より、太型蛤刃石斧が出土している。遺物の出土量は少ないが2区全体に出土がみられる。

B、古墳時代の遺構としては、建物2棟と溝2本および土壙が検出できた。

建物7は柱穴が3本ならび、柱穴内より土製支脚や、細かい刷毛目の土器片(第25図)がみられ、古墳時代初頭頃のものと考えられる。

古墳時代後期の土器片は、六世紀前半の須恵器坏(第31図14)がD層より出土したり、六世紀後半の須恵器片と竈形土器片が一ケ所にまとまって出土(図版8－2)している。

S6・7溝付近のD層には、七世紀前半の土器と鉄滓が多くみられた。**建物4、土壙14、S12溝**などもD層を除去して検出したもので、七世紀前半以前という時期が考えられる。建物3は奈良以降のものであるが、建物4とほぼ同一場所に存在し、規模もそれに近いもので、同一場所への建て直しが数回あったものと推定できる。

C、2区においては確実に奈良時代を想定できる遺構はみられない。奈良末～平安期の遺物包含層であるC層を除去することによって検出される遺構がほとんどである。特にS9溝より東側の柱穴群の柱間距離や配列などより建物2・3・5としたものは、柵列であるのか建物であるのかは速断し難い。このことは検出しにくい土層であることと、斜面のため低い方の柱穴が削平されていることによるものだろう。

建物1はS9溝などより新しいもので、炉2・3とならんで2区では最も新しい時期に所属する遺構である。

建物5はD層上面で一部の柱穴を確認していたが農道のつけ替えのため調査があとにまわされたものである。建物5の東側の柱穴は削平を受けていたため一本しか検出できなかった。この柱穴より東側は急に深くなる溝状の遺構である。南北方向に延長するものと推測されたが、1区S20mの東西トレンチ部分では削平されているため検出できなかった。

S9溝は巾広く掘り上げたが、本来は巾約1m程の溝が長期にわたり流路を変えたもので(第13・14図)、平面では細別し難く断面で確認したのみである。

2区南の畑(農道より南)では、遺構が少なかった。東端部は削平のため柱穴が4本みられただである。S9溝の延長を遺構として検出できなかったが、延長線上(E9付近)からS11遺構にかけては奈良末～平安期の遺物が非常に多かった。これらの遺物はC層から出土するもので、須恵器が多く、土師器は少ない。また瓦や鉄滓もかなり多く出土した。

S13溝は地山千枚岩岩盤を掘込んで作られていた。

井戸址

遺構は2区B地点西半の谷のほぼ中央に検出した。掘方は径55cm深さ35cmを測りほぼ円形を呈す。掘方内には径40cm、巾26cmを測る曲物を置き裏ゴメに10～15cm大の石と瓦片を使用している。出土遺物は底部に墨書痕が認められる須恵器の坏が出土した。

以上2区の発掘調査の概要を時代別にのべた。2区ではさらに南側に遺物の散布が多くみられ、北側でも若干の遺物の散布があり、用地外に遺構の広がる可能性がある。

第4節　3区（第5・6・7図）

3区はSTA189+80の所にある農道を2区との境とし、そこから西方約60mまでの範囲の畑地である。面積が広いので20mグリッドを東方よりA～F地点まで分類した。A・B地点では、ほとんど表土はぎをするだけで、千枚岩岩盤の露出がみられ、それに遺構が検出されたのに対し、C地点の北半部を除いたC・D・E・F地点では遺構検出面までの土層が厚く、遺物包含層も、弥生時代、古墳時代、奈良～平安時代の各時期のものがあり、それぞれの時期の遺構を分層発掘した。

3区の基準土層は、ほぼ2区と同様であるため、A～H層の記号をそのまま使用した。(第16・17図) しかし2区の堆積土と比較してみると、2区の方が粘土質を帯びている(註－1)

3区の発掘面積は1.967㎡であるが、2～3回目の分層発掘面積を加えれば、約3.200㎡になる。以下各地点ごとに調査概要をのべる。

註-1　2区の谷では、湧水点が用地外北方約80mの所にあり、現在井戸として使用している。そのため、発掘調査中でも水がにじみだしてきたのに対し、3区の谷の湧水点は用地の南に接している井戸の湧水点がある。このため、2区に比べて3区に粘土質の土壌の発達が少ない。

第5節　3区A地点（第5・6図）

遺構検出面はすべて千枚岩の岩盤上で遺構も岩盤を掘込んでいる。遺構面は表土下10～20cm前後で現われ遺構残存度もあまり良好でなく、包含層も確認できなかった。検出遺構は建物4棟、土坑2、溝2である。

建物9は桁行2間×梁間2間の南北棟である。柱穴は北端の3本が良好で径40～60cm、深さ50～60cmを測る。遺構が傾斜面にあるため南側では柱穴の残りも浅い。建物9の東側に位置する**建物10**(柱列)、コ字状の溝S15及び土坑17、18は一括した近世墓の遺構と考えられる。土坑内の出土遺物は皆無で埋土も非常に新しいものであった。

建物11、建物12は遺構の残りが悪く詳細は検討できない。A地点南端を東西に走る溝S17及びこれと交差する溝S16は現代の畑の段の溝である。

第6節　3区B地点（第5・6図）

遺構検出面の北半はA地点と同様に千枚岩の岩盤を掘込んでいる。検出遺構は竪穴住居址2、掘立柱建物1、礎石建物1、炉2、溝3、土坑1である。

1号住居址は千枚岩の岩盤を掘込んでおり、床面まで最大70cmを測る。南半は削平により床面も認められない。住居址の平面形は径6m程度の円形に近いものとみられる。また住居址北側に巾0.6mの間隔を置き段状の掘込みが認められた。柱穴は掘込み内に検出した5本と南側の削平部分に想定される1本を含めて計6本の柱穴により構成されていたものとみられる。1号住居址の北側に付属する段状の掘込みは中国縦貫道路線内の津山市押入西遺跡の段状施設と同様のものと考えられる　この施設を伴う住居址は後述する31号住居址にも認められた。遺物は弥生時代後期の特徴を持つ土器が出土した。

20号住居址は1号住居址内の埋土を切込んんでつくっている。しかし1号住居址の発掘時には20号住居址西半の遺構上面に土層観察用の畔を残していたため20号住居址の検出がおくれた。そのために1号住居址内の切込みが充分確認できなかった。出土遺物は1号住居址内で一部混入しているが土師器を伴っている。

1号住居址の西側に接して2間×2間の掘立柱**建物14**を検出した。建物14内には岩盤掘込みの炉穴を検出したが伴うか否か断定しがたい。

建物13は現存3間×1間を測る遺跡内唯一の礎石建物である。遺構面は岩盤を切込んで東西6m、南北4mにわたり水平な面をつくっている。礎石は方形の平面を呈す1辺0.4m程度のものを使用しており北側に2個残存していた。礎石の掘方は不整形の浅いもので栗石の中で久米廃寺の瓦を少量使用していた。

B地点の南半は東西に2本の段、または溝状の遺構（S18・19）とL状に曲る溝（S20）及び炉7径3m程度の土坑19を検出した。東西方向を走る溝は、2区B地点の溝1・6と方向を同じくしており関連した遺構と考えられる。

第7節　3区C地点

この地点は浅い谷の西半に位置し、検出面は北半で岩盤を切込み、南半では2～3層の堆積土層を各層より切込み複雑な様相を呈していた。また各遺構とも傾斜面に位置しているため竪穴住居址、建物等の南半は削平され完存する遺構はほとんど認められなかった。

検出遺構は竪穴住居址14、掘立柱建物2、住居址又は段状の遺構4、溝1、土坑4、土器棺1、集石1、炉6等である。

建物10は桁行2間×梁間2間の南北棟である。北端3本の柱穴は隅丸方形を呈し、一辺70～80

cm、深さ50～60cmを測り比較的大形の掘方である。北側に検出した溝(**S 25**)は建物と共存するものと考えられる。**土拡10**は建物を切込んでおりやや新しいものである。

建物10の東側に東西15mにわたり、岩盤掘込みの段状遺構を検出した。この遺構に平行して径50程度の柱穴が等間隔に配列されている。さらに段状遺構の南側には同一面に点々と炉(**9～13**)が認められた。段状遺構、柱穴列及び炉はともに関連した遺構と考えられる。

竪穴住居址は弥生時代後期から古墳時代にわたるもので、この地点では多数検出した。遺構は斜面上に位置しているためほとんどが半分以下であった。平面形は方形又は隅丸方形を呈すものが多く、円形を呈すものは弥生時代後期の3号、33号住居址の2軒であった。

方形を呈す**9号住居址**は火災にあっており、炭化材やカヤ状の炭化物が床面に放射状に多量に出土した。規模は一辺5mを測り、4本柱で構成されていたものと考えられる。3、9号住居址の間には方形の住居址が重複して認められた。

26・27号住居址は建物10を検出した面より下層で掘込みを確認した。26号住居址は27号住居址埋土後に構築したと考えられるが、貼床は認められなかった。

27号住居址の南側に検出した**炉17**は長辺80cm、短辺60cm、深さ10cmを測る長方形の炉である。炉は赤褐色を呈し非常に堅く焼けている。

段状遺構(**S 23**)の北側及び南側には下層より岩盤掘込みの竪穴住居址と段状遺構及び竪穴住居址の周溝と考えられる遺構を多数検出した。いずれも削平と重複により残存度は悪く半分以下であった。

土坑6は径1.5m、深さ1.0mを測りやや袋状を呈している。この遺構は貯蔵用のピットと考えられる。

土坑9は径1.1m、深さ30cmを測る浅い掘込みである。この土坑と重複して下層より口縁部を欠損した土器棺が出土した。

27号住居址に接して東側に約5mにわたり弥生式土器を多量に含む集石遺構(**S 26**)を検出した。3区のD地点に検出したものと同様で、集石には規則性は認められなかった。

第8節　3区D地点

検出遺構は掘立柱建物1、土坑2、溝状遺構2、竪穴住居址1、集石遺構1、土器棺1である。

建物15、土坑10・11は同一検出面で、C層(包含層)を切り込んでいる。規模は桁行3間×梁間2間の掘立柱建物である。柱穴掘方は隅丸方形を呈し一辺70～90cm、深さ25～60cmを測る。南端の東西例は柱穴ではなく栗石状の集石が認められ、礎石を使用していたとも考えられる。

32号住居址　は調査後半のトレンチにより、建物15の遺構検出面下(D層の切込み)より検出した。規模は一辺6.5mを測る方形の竪穴住居址で、カマドを有している。壁下の掘込みは北側で最大50cm、南半は削平され床面のみである。柱穴は北半に3mの間隔を置き2本検出したのみで南半では精査

したにもかかわらず確認できなかった。

カマドは住居址北辺のほぼ中央の壁に接して検出した。粘土の拡がりは長径2m×短径1mにわたり、住居址北壁の中にはカマドの煙道部を検出した。カマドは壁に近い場所では天井部も残存し、ほぼ中央には支脚状の粘土の痕跡を確認した。32号住居址の東側には3区C地点と同様の土器を含む集石(S27)を検出した。規模は東西5m×南北5.5mにわたっている。集石は部分的に密な所も認められるが規則性はなく、石除去後にも掘込み等は確認できなかった。

土器棺はD地点の南端で32号住居址と同様トレンチにより検出した。これは甕形土器2個をもって口縁部を合わせて棺としている。長軸は東西を向き、ほぼ水平に埋置している。伴出遺物は皆無であった。

D地点下層はトレンチにより確認した32号住居址と合口土器棺を調査したのみである。東半部のトレンチでは焼土等の遺構が認められたが拡張できず放棄せざるをえなかった。

第9節　E・F地点（第5・6・7図）

F地点は面積が少なく、E地点と一連の調査を実施したのでE・F地点は節を分けずに記述する。遺構の関係が複雑なことから、時代別に概要をのべる。

A．弥生時代の遺構は住居址6棟と、土壙6を検出した。上層にはすべて古墳時代以降の包含層が存在した。遺構検出にあたっては黒色土(E②層)を掘込んだものが多く検出は容易ではなかった。

住居址のプランはほとんど円形である。**23号住居址**のプランは壁が直線状であるが、周溝状の溝は北東に行くとやや東へ曲がり、本来は円形プランであった可能性がある。

21号住居址は中央部を電柱の穴によって、東南半を29号住居址とトレンチによって切られている。柱は4本と考えられるが、東北のものは浅く、岩盤が浅く凹んでいるだけである。西北のものは重複しているが、他の柱穴ではみられない。以上の柱穴以外に2本の柱穴がみられるが、西側のものは床面にある炉址を切断しているので、この住居址に伴なわないと考えられる。周溝は西半部で検出できたが、東北半部では岩盤のため存在せず、南半部では黒色土のため検出できなかった。本住居址内南側に**土壙21**があり、これは袋状ピットであった。この土壙は住居址の床面に浅い窪みがあり土がやや異なることから検出されたものである。土壙21からは弥生時代中期後半の土器片が出土している。21号住居址は埋土上層からは弥生時代後期中葉頃の器台・高坏・壺(第18図12～15)などが一括して出土している。

4号住居址はトレンチ調査によって発見されたもので、28号住居址によって切られている。土壙25は、炭や灰が混った土で埋っており、形態や位置などから4号住居址の中央ピットの可能性がある。柱は6本と考えられる。

28号住居址は、南半部が削平されているが6本の柱穴と、床面の中央からやや南よりに炉址を検出した。北側の周溝に接する柱穴の上面から完形の土器(図版56－1、第18図11)を発掘した。土壙

26は床面下に検出された浅い窪みで、本住居址より古いと考えられる。

31号住居址は炭化粟が多量に存在することがきっかけで検出したものである。(第19図)

南半部は削平のため不明な点が多いが、やや楕円形のプランを有する。主柱穴は8本で、柱穴の断面(第20図)観察によれば、柱は垂直ではなく外側にやや傾斜している。中央やや南よりに中央ピットが存在し、中央ピットより東北と西南にある柱穴は、棟上げ柱の可能性がある。さらに山側の高い方に段状施設を有する。段状施設の外に土堤状のものが無いか注意してみたが、検出できなかった。本住居址は火災により放棄された状態で、住居址埋土には多量の炭化粟が残存し、材木が炭化したものも多量に認められた。この住居址は発掘の段階として最後になったため、充分な精査はできなかった。住居址内埋土は米粒を洗いだすため3m×2m×60cmの板枠を作成ビニール張りにした中に入れ水を張って軟らかくし、水で洗い出しを実施した。この結果約四俵半(18斗)の炭化米を得ることができたが、埋土をそのまま角切りにして保存したものや、細かにくだけたもの、あるいは洗い流されてしまったものもあり、総量を推定すると五俵を越す量と考えられる。住居址埋土内での炭化米の分布は壁に近い方が多く中央部は少ない傾向があり炭化材の下に特に集中していた。そこで炭化粟は住居址内部に存在したことはまず動かしがたい。また炭化米の集中している部分を観察すると粟粒でありその方向が一定して並んでおり、それが交差しているものもあるため(図版66－3・4)稲束の状態で保管されていたことをうかがい知ることができる。(註－1)段状施設より床面に放射状に出土した炭化材は板状のもので垂木ではない。すべて段状施設の途中までしか検出されないことは下端部が埋められていたと考えられる。炭化材は詳細な検討はできなかったが、他に注意されたこととして、A断面(第20図)の中央部の材木断面のように太い柱の焼け方は芯の方は焼けないで周りだけ焼けた結果、輪状の炭化材として残ったといえる。また柱No1・5は立ったまま焼け残っており、木目を観察すると柱No5は心材ではなく、割った木を柱にしているらしい。この柱も地上に露出していた部分だけが炭になっており、柱穴内部に埋まっていた部分は炭化せずに腐朽しきって炭化米が混った土となっている。床面には直径4～8cmぐらいの小さな穴がみられ断面(図版64)を観察すると深さ約15cm程で掘り方も見られず「杭」痕跡と考えられる。杭の配列状態は明確につかむことができなかったが住居址中央部にはなく壁に近い方に多いことがうかがえる。中央ピット以外に、柱6と柱7の中間の南側に炉址がみられた。中央部は赤く焼け、周辺部はやや薄くなっている。住居址内埋土からは、弥生時代中期～後期の土器片や扁平片刃石斧もみられたが、住居址床面の遺物は火災に逢い放棄されたもので生活に使用された一括資料として出土している。壺形土器が一点と、高坏・台付椀などが、中央ピット周辺部から検出された。他には甕が3点まとまって、西壁よりに検出された。石器は台石状のもの一点と、石庖丁3点、石斧1点、砥石1点が検出された。

30号住居址は12号住居址上に貼床をしており(図版68－1)12号住居址より新しい。貼床は断面に

記録しただけで削平した。柱穴は床面の残っているところに2本みられる。南半部の柱穴は確認していないが、配列は4本柱となるであろう。中央ピットは石がつまっているもので、さらに南東部に炉址もある。周溝は西側でもう一本だぶっており建て直しが考えられる。

12号住居址は柱穴7本でまとめたがやや不整形である。東南側が削平されているので床面も残存しておらず、検出ミスがあるかもしれない。中央ピットはやや東よりに存在し、床溝が、存在する。西北側で埋められた周溝が存在し、この住居址は拡張されたことがうかがえる。

他に土坑5がある。これはS30遺構の西北角に検出されたもので、土坑21と同じく袋状ピットである。

E・F地点より出土する弥生式土器は中期後半より、後期にかけてのものである。

B、古墳時代の遺構は方形の住居址が7軒と土坑2が検出されている。

16号住居址は南半部は削平されており、柱穴の確認も十分でない。周溝に黄色粘土がやや多く、土坑22が伴う可能性がある。炉14も伴う可能性があるが、東側周溝が明瞭でないため確定できない。

24号住居址は、14・15号住居址より古い。4本柱で、西南辺に竈を有する。竈は上部が削平されているが、高杯形土器(第31図 7)を支脚としてふせていた。竈は砂を混入した粘土で作られており内面の壁がやや赤色に焼けていた。竈の西には甕の破片が一括出土した(図版53－2)。住居内床面に須恵器坏蓋・身が存在したほか、粘土塊が4点あった。東北辺には，もう一本周溝があり、土坑23も存在するが、本住居址との関係は明確ではない。**土坑23**からは、須恵器坏、砥石、焼桃種子が出土している。

14号住居址は四本柱と考えられるが南側では検出しえなかった。竈が北辺にあるが、土坑1によって破壊されている。中央部に小さい炉址がある。

15号住居址は周溝と床面に炉址を検出しただけで詳細は不明である。

17号住居址は周溝が明確ではなく住居址ではないかも知れない。

25号住居址は鞴口や、鉱滓がやや多く、西辺に炉址が検出されたが、竈はなく、もう一段高い所に別の住居址のコーナーが検出された。炉15は東端部に中央が凹んだ非常によく焼けた炉があり、発掘後に気がついたが鍛治炉の可能性がある。25号住居址に伴う可能性もある。

22号住居址も住居址の一部がわずかに残っているだけで、23号住居址にかかる所に炉址を残す。

13号住居址は一部検出しただけで、南半部は用地外である。埋土中に石が非常に多い。

C．奈良～平安期の遺構では土坑1が奈良期の土器を出土した他は、ほとんど平安期に属するものと考えられる。特に建物18と、S30遺構は、灰釉陶器と共に甕が出土し、平安時代前半期の資料として興味深いが、今回整理しえなかった。

S30、建物18はS31遺構を伴うもので、山側を大きく整地し細い溝を設け、その整地面に建物を建てたと考えられる。

本地区における柱穴はほとんど奈良－平安期に属するものと考えられるが、斜面のためかあまりうまくまとまらない。まとまったのは8ケ所であるが、それも深さ、直径、距離など不統一のものもある。3区E・F地点では奈良－平安期の土器はC層から多量に出土している。

註-1 住居址内部に稲束を保管する理由を考えてみる必要がある。一般に弥生時代には高床の倉庫が存在し、これに米を保管したと考えられている。また貯蔵穴から炭化米が多量に出土したこともあるが、住居址内の例で、これほど多量に出土した例は知らない。可能性として以下の二例をあげて置く。①乾燥のため住居址内に持ち込んだ。②種籾として保管するため。いずれにせよ稲束の置かれた位置を考えると、壁に近く集中していることから、壁側に棚を設けるか、さしわたしの棒か紐状のものが必要である。東南アジアの民俗例で、住居内の壁上に棚を設け種籾を保管する例を聞いたことがあり、(松本清張、江上波夫、大林太良氏の「北ベトナム古代文化の旅」、朝日新聞昭和48年12月、この時の様子がテレビで放映された(昭和48年12月14日、NHKニュース特集「ベトナム古代文化の視察について」)。以上のことより②の可能性が強いと思うが他の類例を待ちたい。

第10節　4区

4区は領家遺跡の主要地域の西方　mに位置する。この区は領家遺跡の発掘中に地元の人より路線内に古墳とみられる高まりが3ケ所認められるとの情報を得ていたが、領家遺跡調査中には発掘調査は行わなかった。

トレンチによる確認調査は官尾遺跡担当調査員が次年度の6月18～22日まで行った。位置は尾根をやや下った斜面上に3ケ所認められ、それぞれトレンチにより確認を行った。結果はいづれも盛土と考えられるものは非常に新しく、遺物も皆無で3基とも古墳とは認められなかった。

第3章　出土遺物の概要

第1節　はじめに

領家遺跡からは，先土器時代，弥生時代，古墳時代，奈良～平安時代，と各時期にわたる遺物が多種多様に出土している。その量は整理箱に250箱をこえ，若干広げて整理したり，復元作業をすると300箱を越す量となる。中国縦貫自動車道関係の遺跡では，久米廃寺は別にして，美作国府・平遺跡とならんで遺物の多い遺跡である。遺物のピックアップや復元作業は完全には行なえなかった。

今回は，その中でも一括資料を中心として整理した土器と，包含層出土の各種遺物について簡単にふれておく。

第2節　土器・土製品

(1) 弥生式土器（第18・21・23・24図）

〈中期〉　断片的な資料が多く，ピック・アップも十分ではないため，若干の資料を示したにすぎない。壺形土器（第18図1）は頸部に浅い凹線をもつもので，口縁部は大きく外反し，上面に凹線文と半裁竹管による斜格子文をもち，口唇部外面に2条の凹線と刻み目を施したものである。頸部上端部では非常に細かい刷毛目が特徴的である。第23図の土器は，土器片がかたまって出土することによって気がついたもので土器棺と考えられる。土坑の掘り方は不明確である。土器の上には数片の石が置かれていた。胴部以下が残存，頸部以上は欠失しており，最大径68cm，口径20cm，現存高76cmで特大の土器である。全体に淡黄褐色で3ヶ所に黒斑がある。胎土は硬質で0.5mm前後の白色砂粒を含み，赤褐色砂粒も混る。胴部外面上半は横位，下半部は斜位のヘラ磨きで，内面上半は，やや細い刷毛目，下半部は荒い刷毛目が施されている。

高坏形土器（第18図2・3）は，椀形の坏部の破片で，口縁端部はやや外方に拡張するもので，口縁外面上端部が凹み，巾の広い凹線文状をなすものもある。

以上の土器は，中期後半でも古い方に属すると考えられるもので，「押入西遺跡」出土土器と比較(註1)してみると，壺形土器の頸部凹線文の巾や，高坏形土器の形態から先行するものと考えられる。

〈後期〉　前葉の資料として31号住居址出土土器（第21図）をあげることができる。美作では，今までにこの時期の資料はまとまって発見されていない。第18図9の高坏形土器も前葉のものである。

中葉の資料は多い。(以下第18図参照) 23号住居址出土（4・5）のものや，21号住居址上層一括資料（12～15），土坑6出土土器（第24図）などがまとまっているが，ここに掲げた土器はほとんど同時期のものと考えられる。壺形土器で長頸壺は非常に少ない。土坑6－1はやや短かめの長頸壺で，土坑6－2も長頸壺のたぐいであろう。第18図4のような短頸壺に代表される。口縁端部は上

下に拡張し，浅い凹線文が四条施されている。内面ヘラ削りは頸部まで達している。甕は（第18図6）口縁部が上下にやや拡張し，浅い凹線となっている。壺形土器にはS字状スタンプ文(8)や，はりつけ文(12)がある。スタンプ文は，二宮大成遺跡2区出土のものと酷似するので検討したところ，同範ではなかった。(註2)高坏形土器には(10)のように口縁部が外方にはり出した特別なものと，口縁部がゆるく外反し二重口縁になっているものとの2種類が存在する。器台形土器は装飾のない小形のもの(13)がみられる。山陰の九重式土器の影響を受けたと考えられる土器が2点ある。(第18図17，第24図4）後葉の土器は少ない。

（註1）「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会　1973年。
（註2）「二宮大成遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』岡山県教育委員会　1973年　P128。

(2) 31号住居址出土遺物（第21図）

埋土からは弥生時代中期～後期の土器片も出土しているが，未整理のため今回の報告では省いた。床面から出土した土器6点は一括出土遺物として今後の指標となるもので重要と思われる。

壺（1）

頸部の短い壺が一点だけ出土している。頸部から口縁部にかけてはやや厚手で小さく外反する。口縁端部は肥厚し傾斜している。外面には3条の凹線文を施す。頸部は巾の広く浅い刷毛目が斜めに，上半部は横位の篦磨き，下半部は縦位の刷毛目で器面調整されている。これらは上から下へ順を追って作業している。胴部最大径は胴部上位$\frac{1}{3}$のところにある。底部は平底である。頸部上位から頸部内面にかけては横ナデで，胴部内面の上部には刷毛目が残されているが，上半部は横位の，下半部は縦位に篦削りされている。胴部はかなり薄手である。

甕（2・3・4）

大中小の3点ある。口縁部はゆるく外反し，屈曲部内面は丸味を帯びているのが特徴である。口縁端部は肥厚し，外面には2条の凹線文を施している（2・3）。小型甕の場合は傾斜した口唇部だけで無文である。胴部外面は刷毛目で整形されている。(2)は頸に近い所は巾の広く浅い刷毛目，その下がやや細い刷毛目で底部に近い方は剥離のため詳細にはわからないがヘラ磨きの可能性がある。頸部から内面上部までは横ナデで，胴部内面最上部に指頭圧痕があり，そこから下は縦位の篦削りである。(3)の胴部は縦位の刷毛目で調整されており，胴部上位から内面上部までは横ナデで内面上部には指頭圧痕と，一部篦削りが残っている。内面は全体にわたり篦削りののちにうすく刷毛目調整されており，篦削りは目立たない。(4)は頸部に浅い線がみえるが，口縁は横ナデで，胴部外面はほぼ平滑になっているが器面調整は不明，内面篦削りは屈曲部まで達している。底部は（2・3・4）とも平底である。胴部最大径は壺形土器と同じく，胴部上位$\frac{1}{3}$程度のところに存在する。

台付鉢（5）

やや厚手で口縁部がわずかに内側にかたむくが，垂直に立ち上っている。巾2㎝ぐらいで外面には浅い沈線が4条ほどあり，口唇部上面とともに細かい刷毛目で調整されている。外面はナデ調整だが内面は篦磨きされている。台部は低く外反している。

高坏（6）

長脚で浅い坏部をもっている。坏口縁部は外方に拡大し上面に4条の浅い凹線文が施されている。坏部内面は上からみて羽状で五角形になるよう篦磨きされており，上部は横位篦磨きである。外面上部は横ナデ，下部は羽状六角形になるよう篦磨きされている。坏部と脚部は一つづきに作られており，坏部中央の孔は円盤で塞いでいる。円盤接合部分は荒い刷毛目が施されている。脚部外面には縦ナデののち6条を単位とした櫛描文が施されている。上から横位のものが6段，裾部には縦位に10ヶ所，そして円孔は縦位の櫛描文の間に10ヶ所，横位の櫛描文の最下段には裾部10ヶ所の櫛描文の直上に一つおきに割り付けて5ヶ所穿孔されている。脚裾部には1条の凹線文が施されてやや肥厚している。末端部は斜めになり4条の凹線文が施されている。脚部内面は横位篦削りで上部には篦削りのため縦に段がついている。これは絞り目の部分を削ったためかも知れない。

31号住居址出土土器

番　号	高　　さ	最大径	備　　考
1	36.7 ㎝	28.7 ㎝	完形接合
2	24.6～26.5	20	完形接合，石膏復元
3	19.7	15.5	完形接合，石膏復元
4	11.7	10.2	完形接合，石膏復元
5	14.3	8.5	完形一部接合
6	20.5	23.2	完形接合

その他の出土遺物として，石包丁，石斧，砥石，台石，炭化米などがある。

(3) 土坑6出土土器（第24図）

1は長頸壺で，外反した口縁端部に退化凹線をとどめる。頸部には縦方向の刷毛目の上からヘラでラセン状に沈線を施している。胎土にやや砂粒を含み褐色を呈す。

2も長頸壺のたぐいであろうが，頸部には縦方向の刷毛目が認められる。厚い口縁端部には退化した凹線がある。胎土には多くの砂粒を含む。

3は高坏で内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されている。

4は高坏か器台になりそうである。外面はヘラ磨きがなされ，その上に丹が塗られている。この土器は山陰的な様相をもつものである。

これらの土器は，弥生時代後期でも比較的古い時期のものであろう。

(4) 土師器（第25・27・28・29・31・32図）

古墳時代初頭から奈良～平安時代まで，断続的であるが各時期のものが出土している。完形品は少なく破片となっており復元整理作業が済んでいないものがほとんどである。

〈古墳時代〉　建物7の柱穴出土土器は，一応古墳時代に入れたが，弥生時代終末期との接点が明確ではない。3区D地点の合口土器棺は，岡山県南部のものと比較すれば，王泊五層出土の土師器に類似している。(註1)また27号住居址出土土器は王泊4層出土土師器と類似しており，おおまかに年代を追える。炉穴6出土土器（第31図5）も須恵器を伴う直前のものであろうか。6世紀代の土師器で須恵器と共伴するものがみうけられるが図示できるものは少ない。9号住居址のものが最も古く，続いて24号住居址出土高坏2点（第31図6・7）や甕（図示できず）があるが，詳細は今後の検討を待ちたい。

〈奈良～平安時代〉丹塗り皿が3点（第32図11・12・13）図示できた。11は土坑1から奈良時代後半の須恵器などと共に出土したもので，口縁部にくせがあり，他の2点はやや後出のものと考えられる。

黒色土器について若干ふれておく。美作地方において現在までの報告例は皆無である。本遺跡において1点だけであるが確認できた。第32図9である。淡々赤褐色の土師器内面を，ていねいに箆で磨きあげ漆黒色に仕上げたもので，口辺部外面もせまく漆黒色になっている。他に須恵器・土師器の坏，あるいは灯明皿の口辺部が黒色になったものもあるが，これは重ね焼きの時露出していた口縁部だけが黒色になり「縁黒」と呼ばれるもので，黒色土器ではない。いずれにしても量的には少ない。

（註1）坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』昭和31年。

(5) 須恵器

〈古墳時代〉（第30・31図）

最も古い須恵器としては，坏身（第31図14）が単独出土している。次に9・24・25・26・32号住居址出土のものが，6世紀中葉～後半のものである。ほとんど坏身しか図示しなかったが，他に高坏・甕・甕などもも出土している。7世紀前半の須恵器も出土している。

〈奈良～平安時代〉（第32図）

本遺跡では特に包含層中より多量に出土している。器種は坏・皿・灯明皿・高坏・壺・甕などが存在する。一括資料としては，S30遺構と土坑1～3出土のものが土師器と共伴し，編年に欠かせぬ資料である。

坏類の一部で図化することのできたものについて述べる。

坏蓋（1～4）は，擬宝珠形のつぶれて平坦に近いつまみのつくものが多く，つまみは接合してあるためはずれたものもある。蓋上面には箆おこしのあとが残っているもの（2・3）もあり，

そのあとを横ナデしている。口縁部までは斜めに下り，やや凹んでいる。口唇部は垂直方向からやや内傾気味に屈曲している。内面は横ナデによる凹凸がある。小形の蓋(1)は，蓋上面と傾斜面の境がやや角張っている。(3)がやや軟質で灰色であるほかは青灰色軟質である。

坏身は高台の付くものと付かないものがあり，前者をA類（5・6・7・10),後者をB類（14・16・20）とする。A類のうち5・6・7は篦おこしのあと高台をつけて横ナデしている。5は高台がしっかりし体部のたちあがりが高い。これらの坏は青灰色硬質であるのに対し，(10)は灰白色軟質で口唇部内外面が黒ずんで，縁黒となっており，高台もやや丸味をおびている。

B類にもほとんど篦おこしの痕跡がある。体部は斜めに立ちあがり，全体に横ナデである。(20)は底部外面に墨書が存在する。第1字目は「中」という字であるが，以下判読できない。(16)は(10)と同じく，内外面とも横ナデの凹凸が目立ち縁黒であり，胎土も灰白色でやや軟質である。

皿（8）は高台のやや高いもので，内外面ともていねいに篦磨きし，光沢をもつものである。胎土は砂粒を含まず，水簸された良質の精製粘土だけを使用したもので淡灰青色硬質である。

灯明皿は，本遺跡より2点（18・19）出土しただけであり，いずれも前記の須恵器とは共伴せず，後出のものと考えられる。2点とも淡青灰色で硬質の胎土，縁黒である。(18)の半底部糸切は周まわして止めており，同心円状のすじが中央で2分され，左右でやや高さが異なる。(19)は貝殻状の糸切である。

本遺跡出土土器の中には，この灯明皿以外には糸切底のものはみられない。

(6) 木の葉文様のある須恵器（第32図17）

須恵器短頸壺の肩の部分に木の葉文様のヘラ描きがある。2点あって15m も離れて出土しているが同一個体である。口縁径約12cmで垂直に1.1cm程立ち上り，口唇部は外側に肥厚している。肩の方へゆるやかに下り段がつく。段の下側に巾1cm程の細長い木の葉文が3枚ある。青灰色硬質の須恵器で，白色と黒色の砂粒が混る。表面は自然釉の風化したものが付着している。出土場所　①3区E地点，W7N1，C層　②3区D地点，W3S2，C層，720221。

(7) 建物7，柱穴出土土器（第25図）

3本の柱穴がならぶが，西から1・2・3と番号をつけた。遺構上面はすでに削平されており，北側の調査ができなかったため遺構の性格については不明な点が多い。土器1は直径37cmのもので下端部はまがりかけているので，あまり長胴化するものではない。口唇部にややくせをもっており，内外面とも非常に細かい刷毛目調整されている。土器2は土製支脚で，上部にある3本の突出部の1本が欠け，台部下半が欠失している。手ずくねで指圧痕が残っている。現存高13.2cm，円筒部直径7.2cmで空胴ではなくつまっている。突出部は2個が同じほうを向き，もう1つは反対方向を向いており，直径3～5cm，長さ約5cmの粘土を円筒部にとりつけたものである。

(8) 3区D地点，合口土器棺（第26・27図）

調査終了期限のせまった頃，D地点の下層にトレンチによる遺構検出を実施した際発見したものである。掘り方はあまりはっきりしないが，土器は横に置かれ，口を合せた状態で出土した。細片となった土器は復元できた。土器1は2重口縁，2は口縁が外反し口唇部をおさえてあるもので，両者ともに球形の胴部を有する。整形は両者共ほぼ同じで口縁から頸部にかけては横ナデ，胴部外面上半部は刷毛目，下半部は平滑で，これは目立たない刷毛目仕上げのようである。胴部内面は外面と呼応して，上半部は横位のヘラ削り。下部は指頭圧痕が目立ち，器壁は2～3㎜程の薄いところもある。

(9) 9号住居址出土土器（第28・30図）

9号住居址からは土師器と須恵器が出土したが，量的には須恵器の方がやや多い。

土師器は図示できるものは少なく，甕2個のみである。第28図1・2は口縁が「く」の字状に外反したもので，最大径は胴部上半にある。口縁は内外面とも横ナデをし，胴内面はヘラ削り，外面は刷毛状工具による整形がなされている。

須恵器の坏（第30図1～6）は，口縁端部にくせをもつものが多く，内外面とも丁寧に作られている。天井部，底部のヘラ削りは3・4・5・6が左方向へ，その他は不明である。

これらの土器は住居が焼失した時に使用されていたもので，型式的には多少新旧があるようだが，一括のものである。時期は6世紀も後半までは下らないだろう。

(10) 26号住居址出土土器（第28・30図）

26号住居址内には土師器と須恵器が認められたが，図示できたのは土師器の椀（第28図3）1個体と，須恵器の坏（第30図7～12）6個体であった。

土師器の椀は床面上より出土したもので，半球状を呈す。

須恵器の坏は大形化し，蓋は端部に凹みがついている。ヘラ削りの方向は7・9・12が左，8・10・11が右である。いずれも内面は横ナデされているが，12は中心に同心円のタタキ目が残っている。

これらの土器は住居址の埋土や床面上のものもあるが，だいたい9号住居址の須恵器より後出のものではなかろうか。

(11) 27号住居址出土土器（第28・29図）

27号住居址の土器はすべて土師器で，甕・壺・小形丸底壺・高坏・椀などの器形が認められる。

甕（第29図1・2・7）は外反する口縁にほぼ球形の胴部をもち，口縁部内外面は横ナデ，胴部内面はヘラ削り，外面は刷毛で整形される。胎土には砂を多く含み，赤褐色・褐色を呈す。

壺（第29図3・4）は2重口縁をなすもので，いずれも肩がはっている。肩内面には指頭圧痕がみられ，指で押えつけ平滑化した後ヘラ削りがなされている。小形丸底壺（第29図5・6・8）の

うち6は口縁部に1ヶ所孔をあけ，外面は刷毛整形後ヘラ磨きがなされている。口縁内面にも丁寧なヘラ磨きが施されている。胎土も精選された粘土を用い，堅ちである。

高坏（第28図8～11）は坏部に段のつくものと，つかないものがある。(11)は脚柱がややふくらみをもつ。

さて，これらの土師器はどのへんの時期に位置するものであろうか。美作においては比較する資料にめぐまれていないため，短絡的ではあるが岡山県南部のものと比較すれば，王泊四層出土の土師器に類似し，また走出遺跡出土の土師器とも似ている。走出遺跡の土師器は王泊四・三層に併行するもので，須恵器を若干伴っている。王泊においては四層では須恵器は伴なわず，三層において伴っている。また備中北部であるが，谷尻遺跡において古式須恵器が王泊四・三層類似の土器と伴出している。したがってその頃に一般の集落で須恵器が使用されだしたのであろう。27号住居址はいまだ須恵器を使用していない（先進地では使用している）須恵器使用開始直前ぐらいの時期ではなかろうか。

（註1）坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』（昭和31年）
（註2）間壁忠彦「岡山県笠岡市走出の祭礼遺跡」『倉敷考古館研究集報』第2号（1966年）
（註3）上房郡北房町谷尻に所在する。中国縦貫自動車道路線内を現在調査中である。

(12) 32号住居址出土土器

32号住居址は北壁にカマドを有するもので，土師器と須恵器が出土しているが，土師器は甕など煮炊するものが中心をなしている。

土師器の甕（第28図4～7）は，口縁がくの字状に外反しただけのものであるが，(6)は端部が内側にやや丸味をもつ。口縁部内外面は横ナデを施し，胴外面は刷毛目を残し，内面はヘラ削りである。胎土は砂粒を多く含み，器表はザラザラしている。(5)は外面にススが付着している。

須恵器は坏（第30図13～18），高坏（第30図19），短頸壺（第30図20）が出土している。⑳は胴下半をクシ状工具で横ナデしている。

これらの土器は，26号住居址の須恵器などよりも後出的であり，6世紀の後半に位置しないだろうか。

(13) 土器片紡錘車（第37図17）

1点だけである。土器片を直径6.1cmの円形に加工し，中央に約5mmの孔を穿ったものである。紡錘車の厚さは4～6mmで彎曲しており，表面は赤褐色～暗褐色で細かい刷毛目，内面は指によるナデで，弥生時代中期の甕の破片と推察される。出土は3区C地点，W4N2，E層，720330。

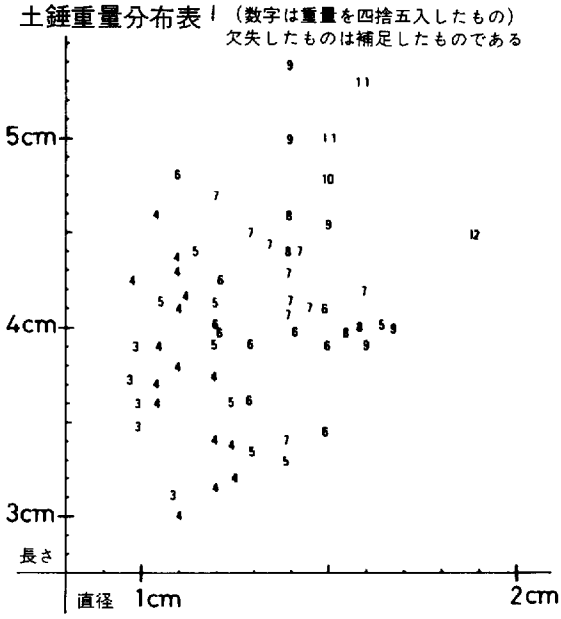
(14) 土錘（図版70－1）

管状土錘が98点出土している。A層5点，A・B層6点，B層19点，C層67点，D層1点である。このうちA層B層は，畑造成のため下層を掘り起したり流れたりした土が混じることを考えると，

主体はC層であろう。C層は奈良末～平安期の遺物が出土しているので，管状土錘の所属時期を決められるであろう。

管状土錘は完形に近いもので，大きさをみてみると最小のものが2.8g，最大のものが11.9g，長さは2.95cm～5.4cm，巾0.9cm～1.8cmである。これをみると長さの比率が1.8倍，巾が約2倍，重さは約4倍と重量が2乗で大きくなっている。土錘の統計表を作成してみると同一重量の数字の分布が垂直方向に広がり，水平方向に狭い傾向がみられる。焼け具合により若干の出入りがあるが，巾が増すことによって重量が増えていることがわかる。

3～4gのものに中央部にふくらみをもたないものがやや多いほかは，中央部がふくらんで両端部が細くなっているものが多い。漸進的に大きくなっており，明確なグループ分けは困難であるがA－4・5・6g，B－7・8g，C－9～12gに大別できるようである。



管状土錘の孔の部分を割れたものによって観察すると，禾本科植物の茎の外面の線状のものがみられ，なかには節を有するものもある。また黒色の炭化物の付着したものがみられる。これらのことにより，稲あるいは芒などの禾本科植物の茎に粘土をまきつけ，平坦なものの上でころがし形を整えて焼き上げたものであろう。中心孔の穴の直径は約2.5mm～5.5mmまであり，0.3～0.4mmのものが多い。直径が太いほど孔の直径もやや大きい傾向がみられる。

灰色硬質に焼けて自然釉のかかった須恵質のものが1点ある。赤褐色に焼けたものは全体の約$\frac{1}{4}$で他は黒色～灰色のものが多い。須恵器の生焼のものもあると思われる。砂粒が混じったものもあり，須恵器の胎土と同じである。

(15) 瓦

領家遺跡から出土する瓦はすべて「久米廃寺」より発見された瓦の一部である。特に2区の包含層より多量に出土したほか，各地点に散布していた。軒丸瓦は久米廃寺3類としたものだけで他の種類は検出されず，軒平瓦は2類とした重弧文以外に，4類とした均正唐草文が1点だけ出土している。平瓦・丸瓦は分類していないが，ほぼ各種揃っていると思われる。領家遺跡から出土する瓦の量は，屋根を葺くほどの量は出土しておらず，他の目的により持ってこられたものだろう。中には，つめ石のかわりに使っているものがある。

(16) 陶硯（第37図13）

円面硯１点だけである。転用硯については現在のところ確認していない。上部の皿の部分だけで脚の下半部は欠失している。直径10.4cm，現在高約2.7cmである。陸部の直径は７cmで中央は約４mm凹み，磨滅がはげしく滑らかである。陸部の周囲には断面三角形で１mm程の高みがめぐる。海はU字形で巾１cm，陸部よりの深さ5.5mmを測る。縁は陸部より2.5mm高くなっている。外縁の所にヘラによる鋸歯文がめぐっており，脚部とは断面三角形の凸帯で区画されている。脚部は４本を１組とした縦位のヘラ描きがあり，透しを模したものと思われる。須恵器であり硬質，胎土は青灰色で白色砂粒の小さいものが目立つ。出土は３区D地点，W４S３，C層，720220。

(17) 緑釉陶器（図版70－２）

本遺跡出土のものはすべて須恵質である。黄褐色や，灰白色のものの一部にはやや軟質のものもあるが，土師質とはいえない。ピックアップした破片は14片であるが，接合や同一個体として識別できるため11個体分である。全体に緑釉の色は薄緑色のものが多く，濃いものは２片（１・５）だけである。釉は底部まで全面にかけてある。（３・８・11）の破片は薄緑色の表面のところどころに淡黄色の斑点がみえる。斑点の直径は約3cm～2cmまでで，その中心にはナイフの先でつついたような点がある。二彩を意識したものか，偶然になったものか判断しかねる。

器形はすべて小形の皿か椀の類と思われる。高台の形には蛇ノ目高台のもの(9)のほかに，蛇ノ目の退化したような形のもの（２・６・10・12）がある。また糸切底(7)と付高台状のもの(13)を合せて４種類に分けられる。

緑 釉 陶 器 破 片 一 覧

番号	器形	胎 土	釉 色	その他，大きさ，高 台	出 土
1	皿	須恵質 灰色	緑	耳・直径12～13cmになる	２区，E11，S５ 灰茶褐色土層
2		須恵質 一部黄褐色	薄緑色	蛇ノ目状高台，台径6.3cm皿か碗	２区，E９，S１ 溝（平安期？）
3	碗	須恵質 灰白色	淡黄緑色	３・11と接含８・６同一個体	３区E，W７N３ A層
4		須恵質 灰色	薄緑色	皿か碗	
5	皿？	須恵質 灰白色やや軟	薄緑色	糸切底？	２区，E７，N３ 溝付近
6		須恵質 灰色	青緑色	巾のせまい蛇ノ目高台 台径６cm皿か碗	３区E，W９N３ S30遺構埋土内
7		須恵質 灰白色	薄緑色	糸切底，台径3.8cm	２区，E９，S２ C層，灰茶褐色層
8	碗	須恵質 灰白色	淡黄緑色	３・11と同一個体	３区E，W８N３ S30遺構埋土内

8		須恵質灰色	薄緑色	8は2片ある。口径14cm？	
9	碗？	須恵質灰色	薄緑色	蛇ノ目高台，台径7.7cm　碗？	3区C，W2N1 B～C層
10	皿	須恵質黄灰色	薄緑色	蛇ノ目状高台，10，12と接合。口径15cm，台径6.3cm，高さ2.7cm	3区E，W7N1 C層
11	碗	須恵質灰白色	淡黄緑色	3·11と接合8と同一個体 口径14～16cm	3区E，W8N3 S30遺構埋土上層
12	皿	須恵質黄灰色	薄緑色	10・12と接合	3区D，W3S3 C層
13	皿？	須恵質灰色	薄緑色	台径6cm	3区D，W3S2 C層

(18) 灰釉陶器

2個体分の存在がみられる。S30遺構より出土したものと，建物18（T18）より出土したもので，器形は皿である。細片となっており未整理のため図示しなかった。

(19) 陶磁器（図版71）

破片が12点出土しており，2区に集中している。しかも2区の中央を南北に流れる溝（S9）に集中しているのが注目される。(1・3・7）については青白磁ではなく近世陶器の可能性もある。特に(3)は，A層すなわち表土から出土している。他のものについては青磁と考えられる。その中でも奈良末～平安期の土器の包含層より出土した(2)が層位的に古い。他は溝（S9）でも上層より発見されたもので，溝中の他の土器片の整理に手をつけていない現在，共伴関係は明らかでない。

高台のついたものは4点みられるが，なかでも(12)は巾がせまく，高い高台を有するもので注目される。この破片と同一個体と思われる（6・9）と共に内面に猫描状の櫛描文がみられる。(2)には櫛を列点状につけたもので，前者のものと共に，珠光青磁の系統のものと考えられる。

胎土は(7)がやや白色なのに比べて，他は灰白色で硬質である。

陶磁器破片一覧表

番号	器形	高台	釉	備考	出土
1	碗か皿	巾7mm，高さ7mmの削り出し高台	青緑色，風化して白くなっている。		2区E11，S2 茶褐色土層
2	皿　口径11cm	ヘラ削り部分があるが高台部無し	薄緑灰色，ガラス質，ヒビ割れ	櫛描き	2区E12，S3 C層
3	皿口径11.4cm	箆削り	白色	新？	2区E12，S4 A層
4	碗　口径18cm	なし	淡青白色	同一個体	2区E9，N4 溝
5	碗　口径18cm	なし	ガラス質 ヒビ割れ	同一個体	2区E9，N4 溝

6	碗　口径19cm		淡青白色	櫛描き文様 6.9.12は同一個体	2区E9，N4 溝
7	碗	な　し	淡黄白色 ヒビ割れ	篦削り文様	2区E9，N3 溝
8	碗	巾7mm，高さ9mmの削り出し高台，直径7.1cm	淡青白色		2区E9，N3 溝
9	碗		淡青白色	櫛描文様 6.9.12は同一個体	2区E9，N2 A層
10	不　明	巾4mm，高さ5mmの削り出し高台 直径4.45cm	淡青白色		2区E9，S1 溝
11	碗	な　し	淡緑色	外面たてのヘラ	2区E9，S2 茶褐色土層
12	碗	巾のせまくて高い削り出し高台 巾2～7mm 直径6.4cm　高さ15mm	淡青白色	櫛描文様 6.9.12は同一個体	2区E8，N3 溝

第3節　石器・石製品

(1) 打製石斧（第34図1・2）

1は丸鑿片刃石斧状のものである。表面はかなり風化してザラザラで薄緑色がかった灰褐色である。材質は火成岩系統のものと思われる。石の目が横にとおったところがある。図は書きにくいため稜線を点線であらわした。長さ14.35cm，巾3.95cm，厚さ2.3cmを測る。横断面図は三角形で底辺は片丸状を示している。周囲を打ち欠いて作成しているが，縦に稜線が通る面では両側からの打ち欠きは中央部まで達しており交互するところもある。反対側の片丸状の面では縁辺部打ち欠きがほとんどで，まれに中央平坦面まで達するものでも浅く目立たない。刃部先端部はやや滑らかであるが，局部磨製といいきれるほどでもないがやや丸鑿状となっている。片丸側がわずかに凹んでいる。出土位置は3区C地点，3号住居址の西北に隣接した場所で，住居址の壁の外側で掘り出された。層位的には地山は，①千枚岩岩盤　②黄褐色粘土（礫混り）　③黒色土（通常無遺物）であり，この土層を切込んで弥生時代以降の遺構が造られている。この②と③の境目は明確なものではなく，漸進的であり，暗茶褐色状で，ここから発見された。周囲の土も観察してみたが伴出遺物は発見されず，単独資料である。

2は緑色片岩製の扁平な短冊形石斧で，長さ11.7cm，巾5.3cm，厚さ1.2cmである。板状に剝離した石材の周囲を打ち欠き形を整えたもので，その打ちかきは，縁辺部だけで中央まで達せず階段状剝離をしている。下半分の約5.5cmの縁は，やや磨滅しており，石鍬ともいえる。石材の目は長軸に対して直角にとおっている。31号住居址の埋土上層より出土したもので時期不明。

(2) 打製石器（第34図3）

材質はチャート，全体は茶色であるが，一部あずき色の部分がある。また一部には厚さ1.5cm程の風化して白色になった自然面が残っている。2.2cm×3.85cm×1.9cm，13.6gの小さいもので，全部で

四面ある。プラットフォームが残っており，表の剝離にはポジティブバルブがみられ，裏面にはネガティブバルブがみられる。それぞれの打ち欠きによって断面が三角形になった末端部分が細かに欠けており，この部分が使用されたものと考えられる。出土場所は（1区，E21S6，710422）トレンチ調査の折に，灰色粘土層（旧水田耕土）より磨滅した須恵器片などと出土したもので，層位的に年代を決定できない。先土器時代の遺物の可能性もあろう。

(3) 打製石鏃（図版73－1，番号は左から1～4とする。）

4点出土している。調査中には1点出土しただけであまり気がつかなかったが，調査後3点表採している。ベルトコンベアーを使い，唐鍬・スコップで掘るため，調査中の見落しがあろう。すべてサヌカイト製である。弥生時代のものであろう。

石 鏃 一 覧 表

番号	長さcm	巾 cm	厚さcm	重さg	形 態	出 土
1	2.65	1.7	0.34	1.65	平基三角	3区E，W7N3，C層凹み（31号住居址埋土？）
2	2.69	1.56	0.35	1.6	柳 葉	表採 7207上旬
3	2.1	(1.17)	0.24	(0.5)	凹基三角	表採 7207上旬
4	(1.76)	(1.6)	0.31	(0.6)	凹基三角	表採 7207上旬

(4) 石包丁（図版72）

磨製のものが14点出土している。写真右列上から1～6，左列上から7～12，真中上から13・14という番号をつける。ほとんど弥生時代後期に属すると考えられる。11だけは中期に属するものらしい。材質は黒色のものが1点あり，粘板岩状のものである。他は薄緑色～暗緑色であり，緑色片岩B類としたものは暗緑色の結晶の目立つものである。

石 包 丁 一 覧 表

（ ）は現在値

番号	長 cm	巾 cm	厚さcm	重さg	材 質	備 考
1	13.92	5.2	1.1	107	黒色片岩	3区E，H33床面，完形
2	11.9	5.95	0.95	91	緑色片岩B	3区C，H5床面，完形
3	11.2	(3.46)	0.85	(57)	緑色片岩B	3区E，H31炭化米の中より
4	10.32	3.93	0.43	27	緑色片岩A	3区E，H31柱2の中より
5	(8)	4.55	0.68	(40.7)	緑色片岩B	2区南，E7S4，D層
6	(8.13)	4.75	0.85	(48.3)	緑色片岩B	3区E，H31 埋土下層
7	(6.35)	5.09	0.97	(44.2)	緑色片岩B	2区北，E7S1 表土

8	(7.29)	3.57	0.65	(29.4)	緑色片岩A	3区E,W7N3,C層,凹み(H31埋土)
9	(6.4)	3.92	0.76	(28.5)	緑色片岩A	3区E,W9N5土坑1より(H4埋土)
10	(5.45)	(4.77)	0.81	(31.4)	緑色片岩B	2区北,E14S2,黒茶褐色土(3層目)
11	(5.56)	(3.83)	0.75	(21.5)	緑色片岩A	3区F,H12,中央ピット内
12	(4.68)	3.58	0.59	(15.3)	緑色片岩A	3区D, W2S1 D層
13	(2.58)	3.93	0.63	(11.8)	緑色片岩B	3区E,W9N5黒褐色土(H4埋土)
14	3.9	(4.7)	0.69	(17.7)	緑色片岩B	3区E, H31西南部下層

(5) 太型蛤刃石斧（図版73－1）

2点ある。1つは完形品で長さ12.25cm，巾5.33cm，厚さ4.08cm，重さ416.5g，材質は硬砂岩状のものであるが，白い結晶が少しあり薄緑色（表面は薄茶色に風化している。）3区C地点W1N1，C～D層，720122出土，とのメモがありS24遺跡の包含層より出土したものである。頭部は平坦面がなく斜めになっている。全面磨製であるが，刃部以外は若干敲打痕が残っている。特に刃部の表面は滑らかで他の表面は風化してやや荒い。

もう1点は頭部の大半が欠失したもので，長さ8.34cm，巾5.68cm，厚さ4.07cm，重さ303g，材質は石包丁の緑色片岩Bとしたように暗緑色の結晶が多く，さらに白色の結晶が多いものである。緑色片岩の一種と思われる。やや刃部巾の方が広くなっている。全面研磨されているが，敲打痕が若干残っている。2区E6S4，溝C層，720315出土，奈良末～平安時代の包含層より出土したもので，弥生時代の遺構には伴なっていない。いわば表採に近い出土状態である。

(6) 扁平片刃石斧（図版73－1，下段右から2つ目）

完形品が1点31号住居址の埋土上層より出土している。長さ10.92cm，巾5.82cm，厚さ1.63cm，重さ273g，材質は緑色片岩である。かなり剝離痕が残っており側面には平坦面がない。全形は長方形で片刃であるが，裏面からも丸く刃の方へ研ぎ込んでいる。

(7) 凹石（図版74－1，上段）

花崗岩製のものが3点出土しているが，3は閃緑岩に近く緑色が多いが，他は白色をおびる。

1はやや丸味を持った石に，深さ約5mmと7mmの凹みが，表裏対象の位置に存在する。側面は一周するように敲き石として使用している。

2はやや扁平な石で表裏と側面の左右対象の位置に凹みがあり，それぞれ深さ約5mm，4.7mm，3.3mm，3.2mmの浅い凹みが存在する。さらに周囲も平坦になるほど敲打されている。

3は平坦面の中央に直径約3cm，深さ約5.6mmの凹みがある。裏面は大きく剝離しており，全形は扁平になっているが，本来のものかどうか不明である。他の加工は不明。

奈良末～平安期の包含層より出土した例もあるが，おそらく弥生時代のものだろう。

凹石一覧表

番号	長さcm	厚さcm	重量g	巾 cm	材質	凹み	出土
1	1.2	9.4	6.65	700	花崗岩	2	2区
2	9.5	7.8	4.1	550	花崗岩	4	3区C,W2N1,B～C層 720128
3	13.4	14.1	(4.2)	1100	花崗岩	1	3区C,W7N1,C層 720217

(8) 敲石（図版74－1，下段左から3点）

1は丸味をもつやや細長い石の両端に，わずかな敲打痕がみられるもので，完形品である。

2は断面扁平で細長い石の両端が欠けているもので，片側は大きく欠失している。わずかに敲打痕がみられる。

3は断面がやや方形の細長い石の一端が大きく欠失しているもので，特に敲打痕はないが，おそらく敲き石として使用したものとして考えられる。

3点とも古墳時代の住居址より出土している。1はよくみかける敲石であるが，2・3は大きく欠失している。

敲石一覧表

番号	長さcm	巾 cm	厚さcm	重量g	材質	出土場所
1	16.4	10.1	7.5	1710	花崗岩	3区B地点，20号住居址出土
2	18.5	7.6	3.7	660	砂岩	3区D地点，32号住居址No.2
3	(15.4)	5.9	5.3	630	片岩	3区D地点，32号住居址No.4

(9) 磨石（図版74－1）

花崗岩で長さ8.1cm，巾7.5cm，厚さ4.6cm，重さ400gである。やや扁平な丸味をもつ石で，表裏の平坦な面はやや滑らかで，周辺はざらっとしている。顕著な磨痕は認められないが，片手で持てる手頃な石である。太型蛤刃石斧の1としたものと同一出土であり，弥生時代のものと思われる。（3区C，W1N1，C～D層，住居址か，720122とのメモあり）

(10)石錘（図版73－1，上段左端）

砂岩製，半分以下に欠損しているが，短かい円筒状のもので，中央に0.95cmの孔が完通している。全面磨製，2区北S1E11，黒茶褐色土層（奈良末～平安期包含層）出土1点だけである。

(11) 砥石（図版73－1）

現在10点あり，時代別に述べる。

A．弥生時代に所属するのは，1・2の2点である。長方形で一度半折したものをそのまま使用している。古墳時代以降のものに比べれば，小型品しか出土しておらず，形のうえでも使用面

が極端に弧状になっていない。1は弥生時代後期前葉頃，2は後期中葉頃である。

B．古墳時代に所属するものは3～7の5点ある。3はトレンチ調査の折出土，炉14に伴うと思われるが確かではない。6世紀後半（3～6）と，7世紀前半（7）に所属するものと考えられる。欠損して小さくなったもの（3・6）でも再使用している。

C．奈良末～平安時代の包含層より出土したもので8・9・10の3点である。

砥石はすべて砂岩質の石材を使用しているが，荒砥，中砥，仕上砥として分類したように，それぞれ質の相異がある。

砥　石　一　覧　表

番号	長さcm	巾 cm	厚さcm	重さg	材　質		出　　土
1	(6.4)	3.54	2.35	88.5	暗赤色硬砂岩	中　砥	31号住居址柱穴⑦
2	(8.1)	3.2	2.7	100	灰色硬砂岩	中　砥	21号住居址埋土上層
3	(6.6)	5.7	2.7	110	淡黄灰色硬砂岩	仕上砥	W6N5トレンチ発掘の時
4	19.1	11.7	6.7	1630	淡黄灰色硬砂岩	仕上砥	32号住居址埋土上層
5	(14.5)	8	7	910	白色砂岩	荒　砥	3区C,W3N1,D層
6	(10　)	6.7	(2.8)	230	暗赤褐色硬砂岩	中　砥	土坑23より出土
7	(4.9)	6	(2)	70	淡黄灰色硬砂岩	仕上砥	3区E,W8D4,D層
8	(19)	6.1	15.6	1530	淡赤灰色硬砂岩	中　砥	3区C，W5N3
9	(7.7)	4.1	3.8	100	淡赤灰色砂岩	荒　砥	3区E,W7N2,C層
10	(6.8)	3	5	100	暗赤褐色硬砂岩	仕上砥	3区D,W1S2,C層

（1．荒　砥＝ざらざらして表面が荒いもの
2．中　砥＝中間のもの
3．仕上砥＝表面が非常になめらかなもの）
1.はすぐわかるが2.と3.の区分は判断しにくい。

(12)　その他の石器および石（図版74－2）

①　扁平で細長い河原石の両側辺を打ち欠き，紐を止めるようにしたものが1点ある。長さ18.7cm，巾8cm，厚さ3.6cm，重量630g。出土は3区C，W4N1D層となっており，古墳時代後期の須恵器の包含層より出土している。打製石錘の一種と考えられるが，所属時期については判断しにくい。

②　安山岩の剝版がある。3区E，W7N1黒色粘土層（土器を含まない）から出土しており，層位的には弥生時代以前の土層であるが，人工品かどうか判断しかねる。その他丸味をもった河原石が包含層や住居址より出土しており，何の使用痕も認められないが，意図的に生活の場へ持ってきた石と考えられる。ただし6は両側辺に凹みがあり，加工痕として認められないが

石錘としての使用も考えられる。

その他の石一覧表

番号	長さcm	巾 cm	厚さcm	重量g	石材	出土
3	10.8	10.2	3.9	700	砂岩	21号住居址上層，弥生時代
4	21.9	10.9	3.3	1120	砂岩片岩	32号住居址No.3，古墳時代
5	15.2	15	5.7	2030	花崗岩	32号住居址No.5，古墳時代
6	21	17.7	2.7	1570	砂岩	3区C，W5N1，C層 奈良末～平安時代

第4節　鉄器・鉄製品

(1) はじめに

ほとんど遺構に伴なわず包含層より出土したもので総数40点である。釘・鎌・紡錘・鍬(鋤)先・鉄鏃・刀子・その他と種類も多い。所属時期は古墳時代後期～平安時代と思われるが，いずれも包含層中より出土したもので厳密な時期決定はしがたい。

(2) 釘（第35図）

21点あり，すべて方形の断面をもつ，頭部はL字状に折曲げたものがほとんどで，1点だけ円頭状のものがある⑽。これは直径2.45cm程の半円球状の頭部である。(1)だけがほぼ完形品（長さ12.6cm以上・断面1.1cm×0.7cm）で，他は折損しており，原形を察するのはむずかしい。断面をみると長方形になったものもあり厳密に方形とはいい難いが，一辺が約1cm～0.5cmの巾がある。一辺が小さくとも⑳のように長いものもあり一概にはいい難いが3寸～4寸（約12cm）前後の長さだったのではなかろうか。

釘の時期は古墳時代のものはなく，すべて奈良・平安期以降の包含層より出土している。久米廃寺から約500点出土している鉄製品のほとんどが釘であり領家遺跡のものより種類が多い。(註1)

（註1）岡山県教育委員会「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』（昭和49年）

(3) 鉄鏃（第37図，1～4）

細根斧箭式のものが3点，雁股式のものが1点，計4点出土している。(1)は先端へいくにしたがいやや広がるもので，鏃身の長さ7.3cm，逆棘のないやや斜めの関をもつもので，茎部は4.5mmの方形の断面をもち欠失しているが，現在長さ2.9cmを測る。(2)は関の部分が明確ではない。厚さ6mmでやや厚く刃部がしっかりつくられている。茎部は6×3mmで扁平である。(3)は小型品で茎部が欠失している。(1)と同じような撥形である。茎は一辺が3.5mmの方形である。(4)は雁股式のものでU字状になった先端部分の内側にだけ刃がついている。関の部分がやや肥厚している。茎部は断面方形で一辺が3.5mmを測る。

鉄鏃計測表

単位cm

番号	全長	巾	身長	茎長	身厚	茎厚	備考
1	(10.2)	2.6	7.3	(2.9)	0.6	0.5	3区C，W2N1 BC層
2	(9.4)	1.7	9.4	(—)	0.6	—	3区，W8N3，A層けずりヒビ割れひどい。
3	(4.3)	1.8	4.2	(0.1)	0.4	0.35	2区，E13S3，4層目南北溝状遺構
4	(5.8)	3.9	5.4	(0.4)	0.6	0.4	2区，E9S2，黒褐色土層包含層

(註) (3)が7世紀前半の遺物包含層より出土した他は奈良時代。

(4) 刀子（第37図，5～9）

5点ある。(5)は巾がせまく関の部分も明確ではないが，右側に木質部とも思われるものがあり刀子とした。(6)は大型品であるが，欠損しており茎の部分が不明である。(7)は刃部が欠損している。刃関があるが，棟の方にある関はずれているうえ反対むきなのでどういう事かわからない。(8)は全体に分厚く刃部が明確でないので，あるいは他の道具の可能性もある。(9)は棟関であるが刃関が不明である。

奈良末～平安期の包含層より出土している。

刀子計測表

（ ）は現在長

番号	長さcm	巾 cm	厚さcm	備考
5	(9.6)	0.7	0.35	2区，E12S3，黒灰色土層 （C層）
6	(11.2)	2	0.4	2区，E12S2，黒灰色土層 （〃）
7	(6)	1.3	0.47	2区，E13N2，黒茶褐色土層（〃）
8	(5.1)	(1.9)	0.65	2区，E9S2，黒灰色土層 （〃）
9	(4.9)	1	0.35	2区，E11S2，黒灰色土層 （〃）

(5) 鎌（第36図2・3・10）

確実なもの1点，鎌と考えられるもの2点，計3点ある。

②長さ17.8cm，巾3.1cm，厚さ0.27cmを測る。先端部が欠けているが鎌である。角を一ケ所折曲げてある。根元が巾3.1cm，中央部巾2.75cm，先端部3.08cmで，中央の巾がややせまい。使用による減少であろう。刃は両面から次第に厚さが減じている。（3区トレンチ，W6N3AC層），表土はぎのときC層（奈良～平安期）から掘出したものである。

③長さ8cm，巾3.2cm，厚さ0.27cmで断面では片面が平坦で反対側はやや丸味をもっており，片刃となっている。（領家遺跡710502）とメモがあるが出土状態は不明である。鎌と思われる。

⑩長さ6.9cm，巾3cmで厚さ3mmの鉄板の一部が折れ曲っている。刃もついており，左上だけの折り曲げをみたら鎌の欠損したものと考えられる。右下の部分がやや曲っており気になるが，折損したとき曲ったものと考えたい。（2区E11S1，黒茶褐色土層，奈良末平安期？）

(6) 鉄製紡錘車（第36図4）

直径5.7cm，厚さ約0.4cmの縁がやや薄い円盤に直径0.5cmの円形棒状のものを貫通させたもので，棒状部分は両端とも欠失している。現存長さ5cmである。（2区E11S1，第3層）奈良末～平安期の包含層より出土している。

(7) U字形鍬(鋤)先（第36図5）（註2）

やや厚めの鉄製品で，片側に溝がある。欠損しているが，図のように巾17.7cm，高さ19.5cmに推定復元した。現在長さ17cm，巾3cm，刃の方は厚さ6～7mm溝が切ってある方は厚さ3～5mmと薄い。（3区C，W3N2，D層）

(8) その他の鉄製品（第36図1・6・7・8・9）

①巾1.8cm，長さ3.1cmである。厚さ1.8mm程の鉄板の2ヶ所を折り曲げてあるもので，他にも波うっている部分もある。不明鉄片である。7世紀前半の包含層より出土している。（2区E13S3～4，第4層茶褐色砂礫層）

⑥断面がやや長方形で，関の部分に鑢がついている。先端部が平坦となっており，それで用を成すものと思えないので欠失しているのであろう。棒状鉄器としておこう。現在長さ20.2cm，巾1.3cm×0.9cm，錐は厚さ約0.2cmの鉄板で約2cm×1.55cmの楕円形のものである。茎は7.5mm×6.5mm，長さ約8.1cmである。（3区C地点，W5N3，黒褐茶色土層，C層〔奈良末～平安期〕）

⑦は円孔の部分で折損しているもので，現存長7.44cm，巾1.18cm，厚さ0.3cmである。茎部分であろうか。（2区，E13S4，茶褐色土層，第2層）平安期以降の土層である。

⑧棒状の鉄を約4.7cmのコ字状に曲げたもので用途不明。断面は5mm×7mmと6mm×7mmを測る。（2区，E10N1，黒灰色土層，奈良末～平安期土層）

⑨太さ約0.8cmの断面形の棒を耳環状に曲げた鉄環である。末端は0.4cm離れている。

（註1）岡山県教育委員会「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』昭和49年3月
美作地方の奈良～平安時代の遺跡からの釘の出土は少ない。①「平遺跡」②「美作国府跡」数点出土している。③「宮尾遺跡」V区（蔵人地点）では数点出土しており，7世紀後半～8世紀前半にかけてのものということである。以上のように官衙あるいはそれに隣接する地点で発見されており，領家遺跡の場合も久米廃寺に接している。
中国縦貫自動車道に関連した遺跡では，他に古墳から出土している釘があるほかは，中世の遺跡から出土している。（落合町①「赤野遺跡」3点・「須内遺跡」数点・北房町「植木遺跡」20余点），以上のものと比較すると久米廃寺が異常に多いほかは，領家遺跡も注目される。

（註2）鉄製紡錘車は岡山県内の例では，作東町「高本遺跡」（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9）より出土している。7世紀前半頃のものという。

第5節　その他の遺物

(1) 耳環（第37図10・11）

2点出土している。(10)はあまり剝離していないが，表面は緑青色で金色部分はみられない。欠けた部分の中は黒色である。未端は1.8㎜程あいている。両端部とも絞り目がある。大きさは 3.2㎝×2.9㎝（2区，E11S１～２，黒茶褐色土層，段の部分）　(11)は剝離がひどく，内側にわずかに表面の金銅が残存しているにすぎない。全体に緑青色，未端は約2.5㎜あいている。大きさは2.6㎝×2.5㎝（２区，E12S３，第４層，溝〈S７遺構〉７世紀前半）　(10)は上層より出土しているが，(11)と同時期のものだろう。

(2) 青銅片（第37図12）

2.2㎝×1.6㎝，厚さ3～3.7㎜の破片で，復元すると直径３㎝である。３区E地点S30遺構の埋土より出土しており，平安時代である。この大きさから思いあたるのは「筒形銅器」であるが，年代的にそぐわない。もっとも古墳時代の遺物も出土するので，可能性がないわけではない。

(3) ガラス玉（第37図）

ガラス玉は３点出土しているが，14が古墳時代のもので，他は弥生時代のものと考えられる。

番号	高さ㎜	直径㎜	色　調	出　土　場　所
14	3.5	4.5	薄　緑　色	32号住居址　埋土上層
15	5.4	5.7～6	コバルトブルー	30号住居址，周溝(ヒビ割れあり)
16	2.1	3～3.5	コバルトブルー	排土より表採

(4) 銙帯（第34図４）

黒色粘板岩製の銙帯が１点出土している。楕円形に似たもので2.9㎝の直線で切断したような一辺を有する。丸鞆といわれるもので長方形の透しが無い形式である。長さ2.79㎝，巾2.36㎝，厚さ0.65㎝で全面研磨している。裏面には剝離面の残ったままのところもある。また２ケ所に糸を止める孔がある。これは１ケ所に２孔を穿ち，中で連結しているもので孔の直径は細い所で約 1.4㎜であるが，連結している部分はそれよりやや細く計測できない。出土位置は３区E地点W７N１のC層中で，奈良末～平安期の包含層中より出土した。

（注）久米廃寺より出土した石帯（第34図５）を参考に掲載したが，これも領家遺跡出土のものと同じく丸鞆の部分だけである。透しを有するもので，裏面に３ケ所の孔がある。美作地方での発見例は，この２例だけである。

(5) その他の遺物について

竈形土器の破片の出土は多い。６世紀後半～７世紀前半の須恵器に伴うものと，奈良末～平安期の包含層に伴うものがある。未整理のため形態その他の特徴を述べることができない。

鉄滓と鞴口は６世紀後半～７世紀前半頃の住居址や包含層から出土するものと，奈良末～平安期

の包含層より出土するものがある。それぞれの時期に所属するものと考えられるが，未整理のためかなり多量に存在するということを指摘するにとどめる。

第4章　おわりに

領家遺跡の遺物散布範囲のほぼ中央を東西方向に，中国道が通過し，本遺跡は南北に分断された。久米廃寺・宮尾遺跡の場合は保存の可能性もあり，特に奈良～平安期の遺構を重視し，下層の遺構についてはあまりふれていない。

本遺跡の場合は，重なりあったすべての包含層について発掘を試みたため，各時期の遺構，遺物が見出され，この地域の歴史を考えるうえでは欠かせない資料となった。

中国道によって調査された周辺遺跡のおおまかな変遷をみることによって，本遺跡の性格を考えたい。

先土器時代末と縄文時代については断片的な資料であり，遺構の存在も確認されていない。

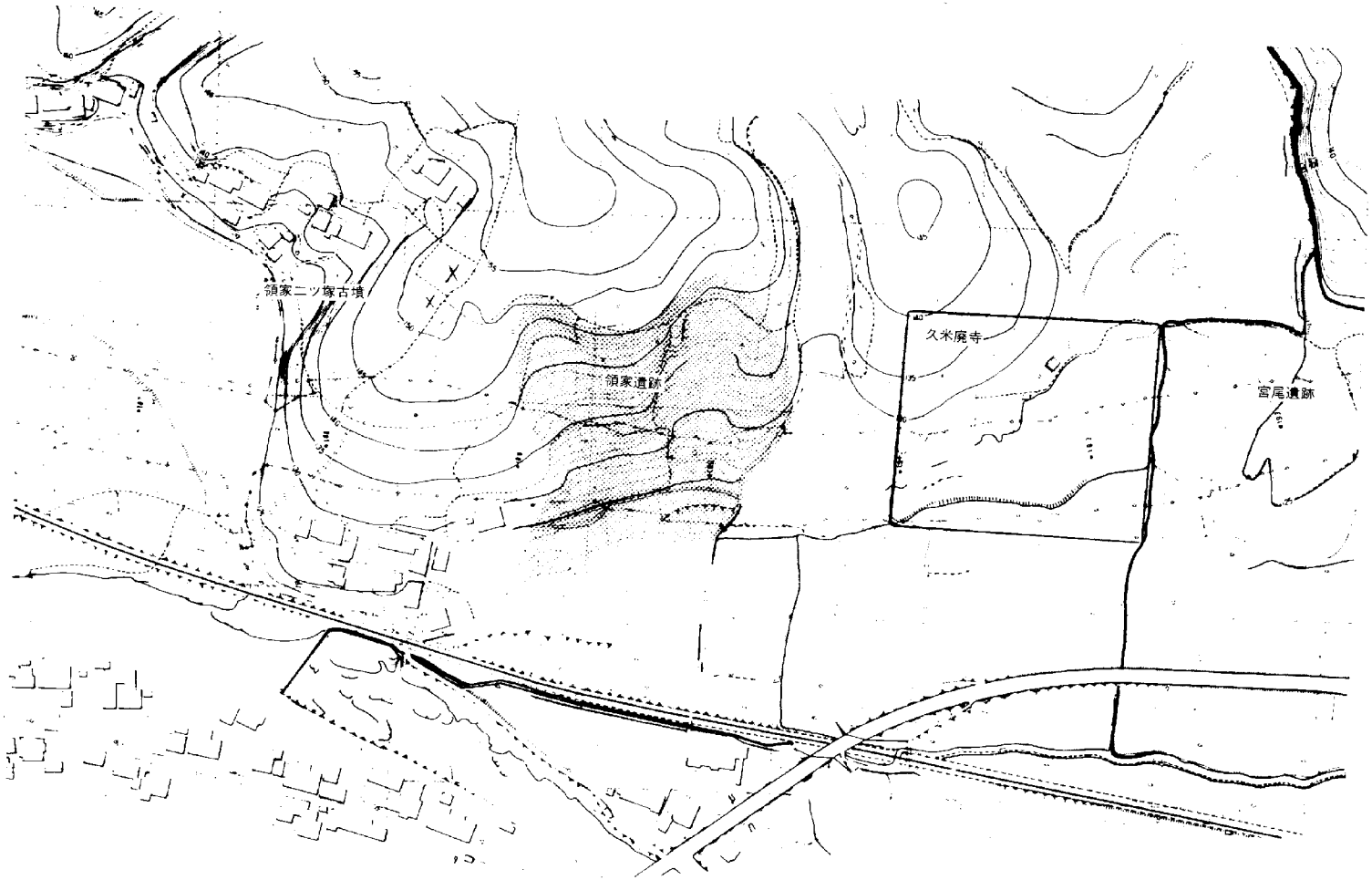
宮尾遺跡1区の弥生時代前期についても同様であるが，弥生時代中期の農業用水路が作られた時点より，この地域の開発が進展したものと考えられ，各遺跡で中期の土器片が発掘されるとともに，領家遺跡では中期後半の住居址の存在が確認された。

弥生時代の後期以降になると領家遺跡では，各種遺構が多く確認され，土器片も多くなり，やや安定した生活が営なまれたことがうかがえる。古墳時代前期～中期については資料がやや少なく，地点の移動があることも考えられる。古墳時代後期の6世紀後半には遺構も遺物も多量になり，6世紀後半～7世紀代には領家遺跡－久米廃寺－宮尾遺跡と一連の台地上に，鉄滓を伴った各種遺構が存在する。その中には鍛冶炉もあり，製鉄が盛んであったことがうかがえる。このことは，久米廃寺－宮尾遺跡（久米郡衙）成立の基盤である可能性を持つ。

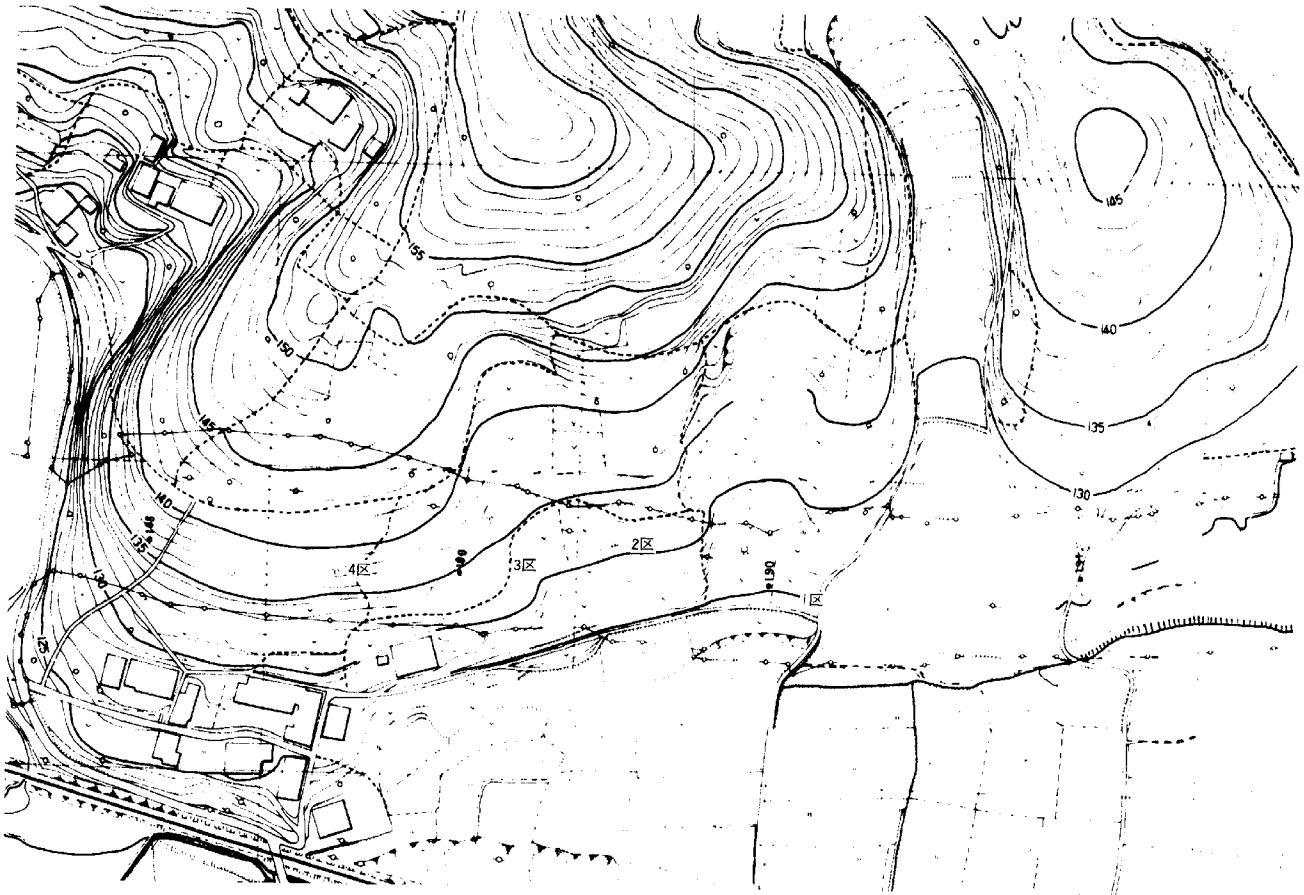
奈良～平安期の本遺跡では，礎石建物あるいは緑釉陶器，石製銙帯の存在など，普通の集落とは考えられず，久米郡衙，久米廃寺を成立させた有力者の集落と考えられる。

各遺跡の変遷

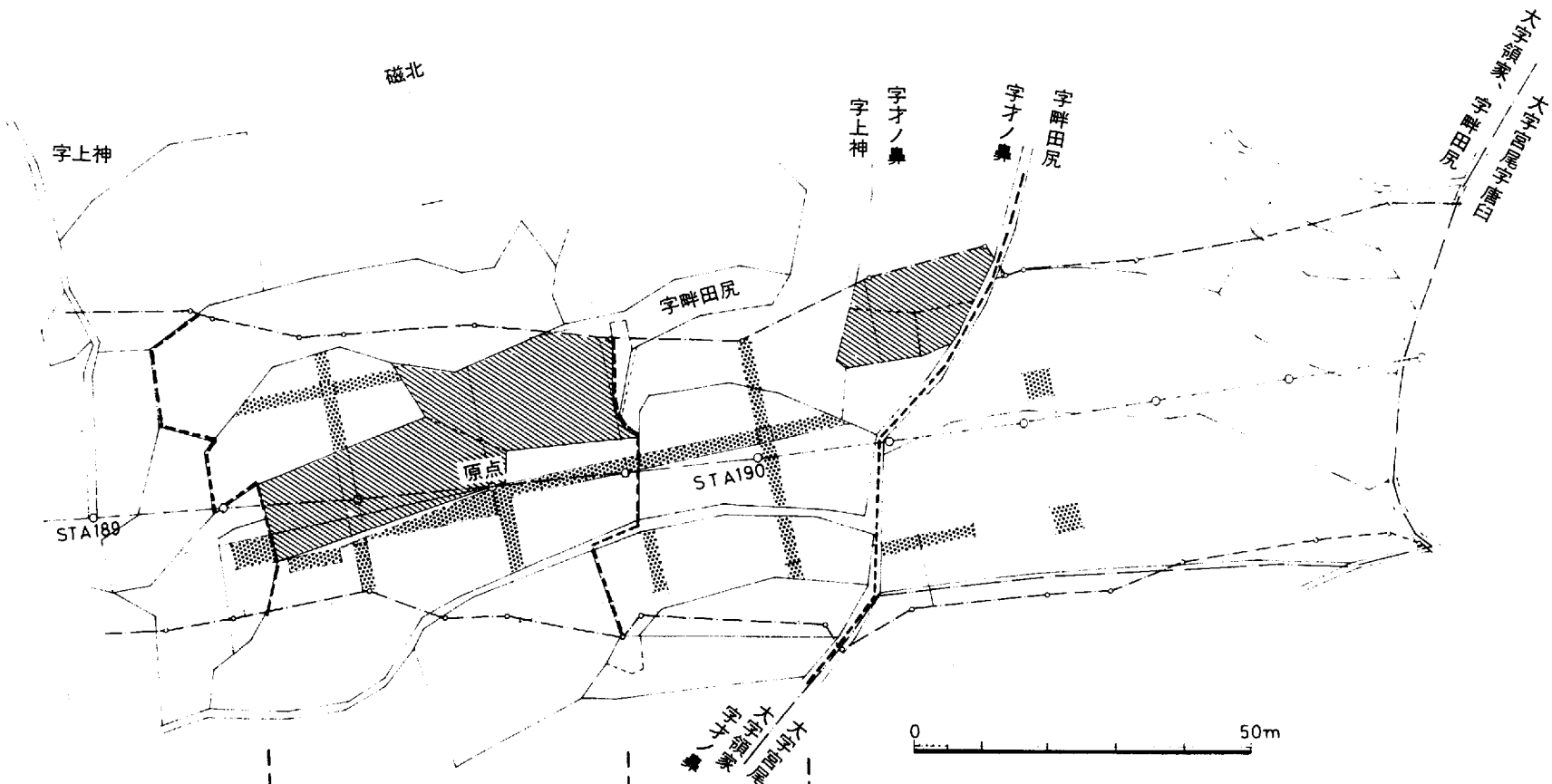
時代／遺跡名		先土器時代	縄文時代	弥生時代 前	弥生時代 中	弥生時代 後	古墳時代 前	古墳時代 中	古墳時代 後	奈良時代	平安時代	鎌倉時代
領家遺跡			△		▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬
久米廃寺					△	△		○		▬	▬	
宮尾遺跡	1区				△		▬	▬				
	2区 3区 4区				○			○		▬	▬	▬
	5区							○				
日南遺跡								○			○	



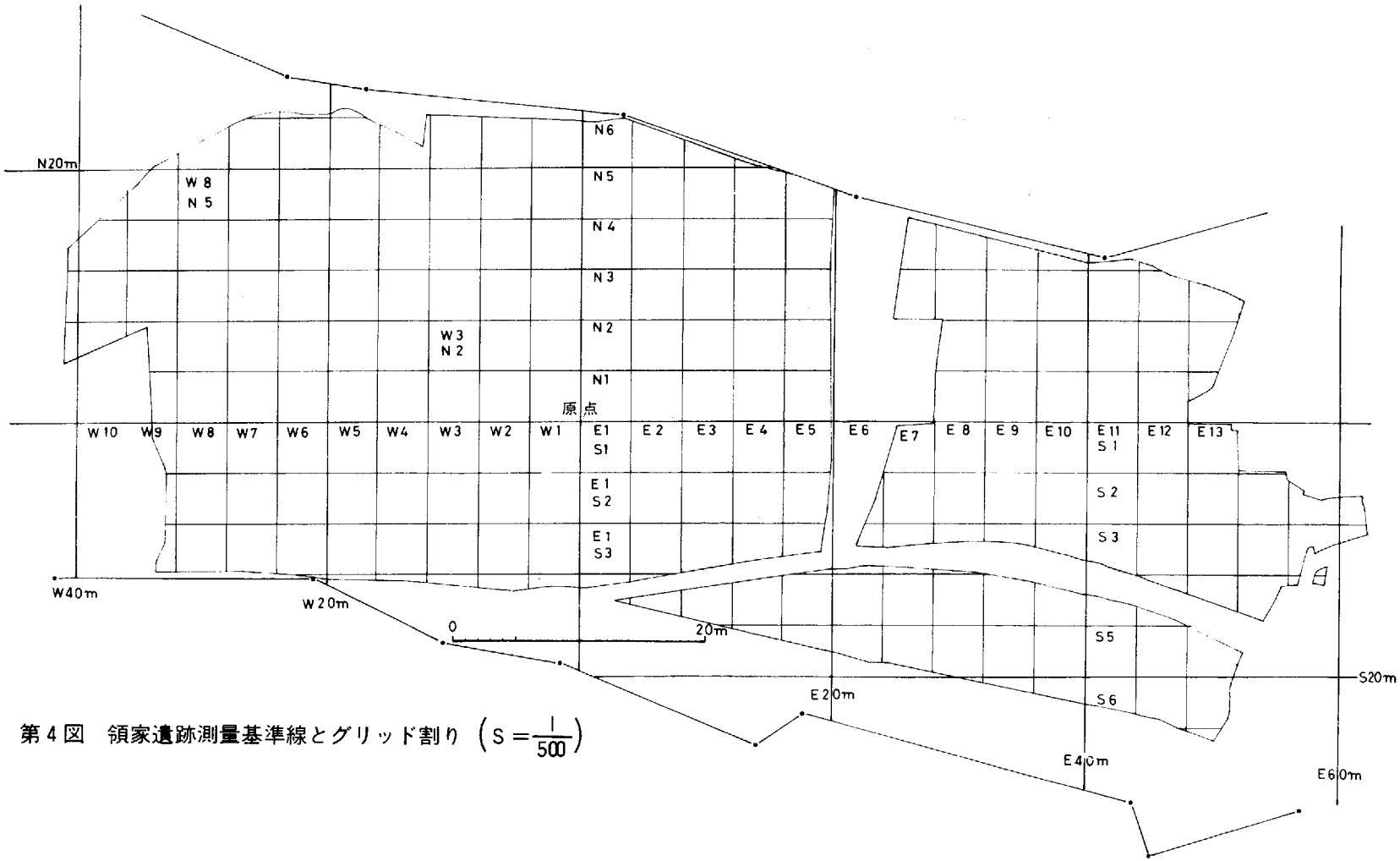
第１図　領家遺跡の範囲と久米廃寺（Ｓ＝1/3000）



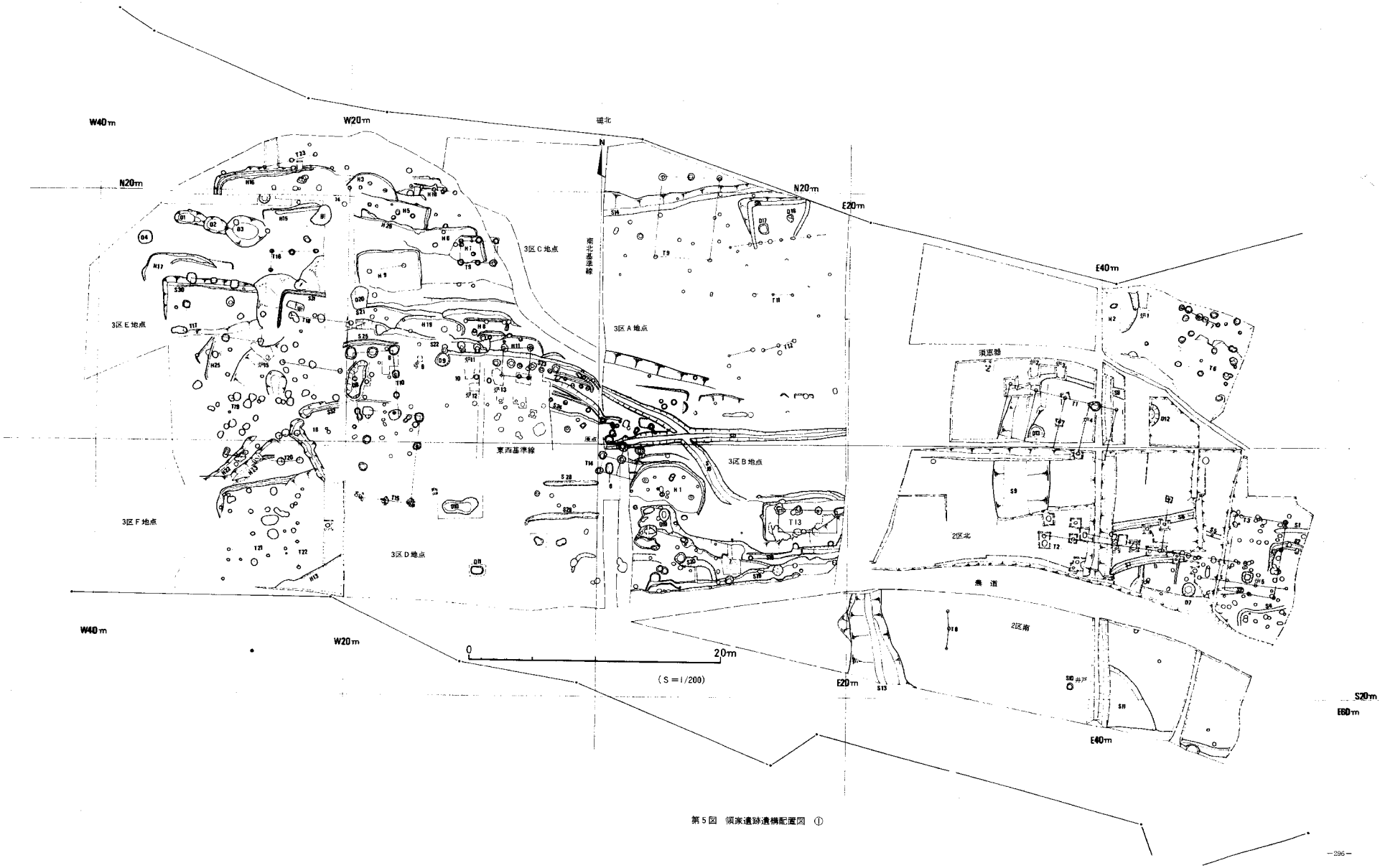
第２図　領家遺跡調査地点（Ｓ＝１/2000）



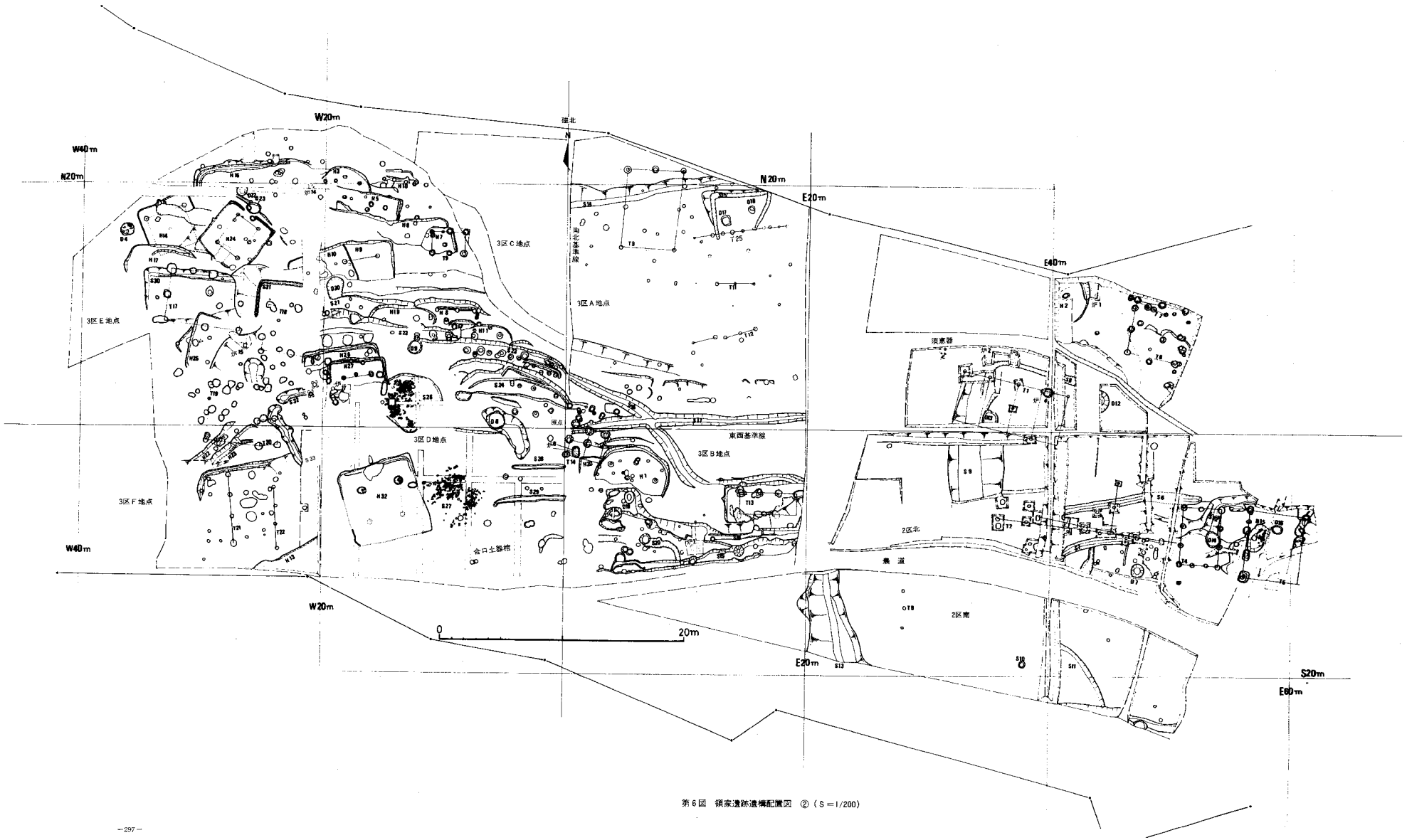
第3図　領家遺跡トレンチ設定図（S＝1/1000）



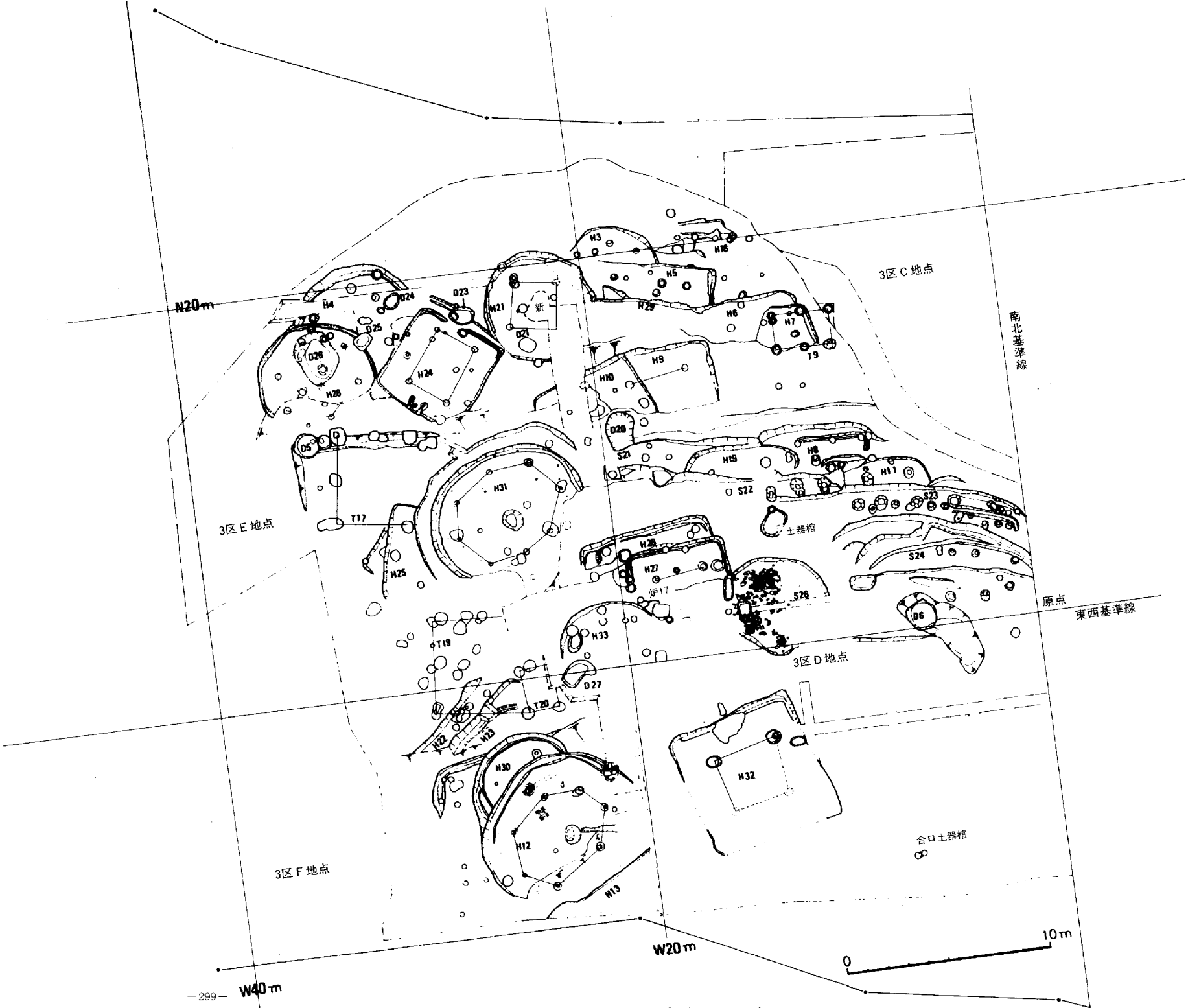
第4図　領家遺跡測量基準線とグリッド割り $\left(S=\frac{1}{500}\right)$



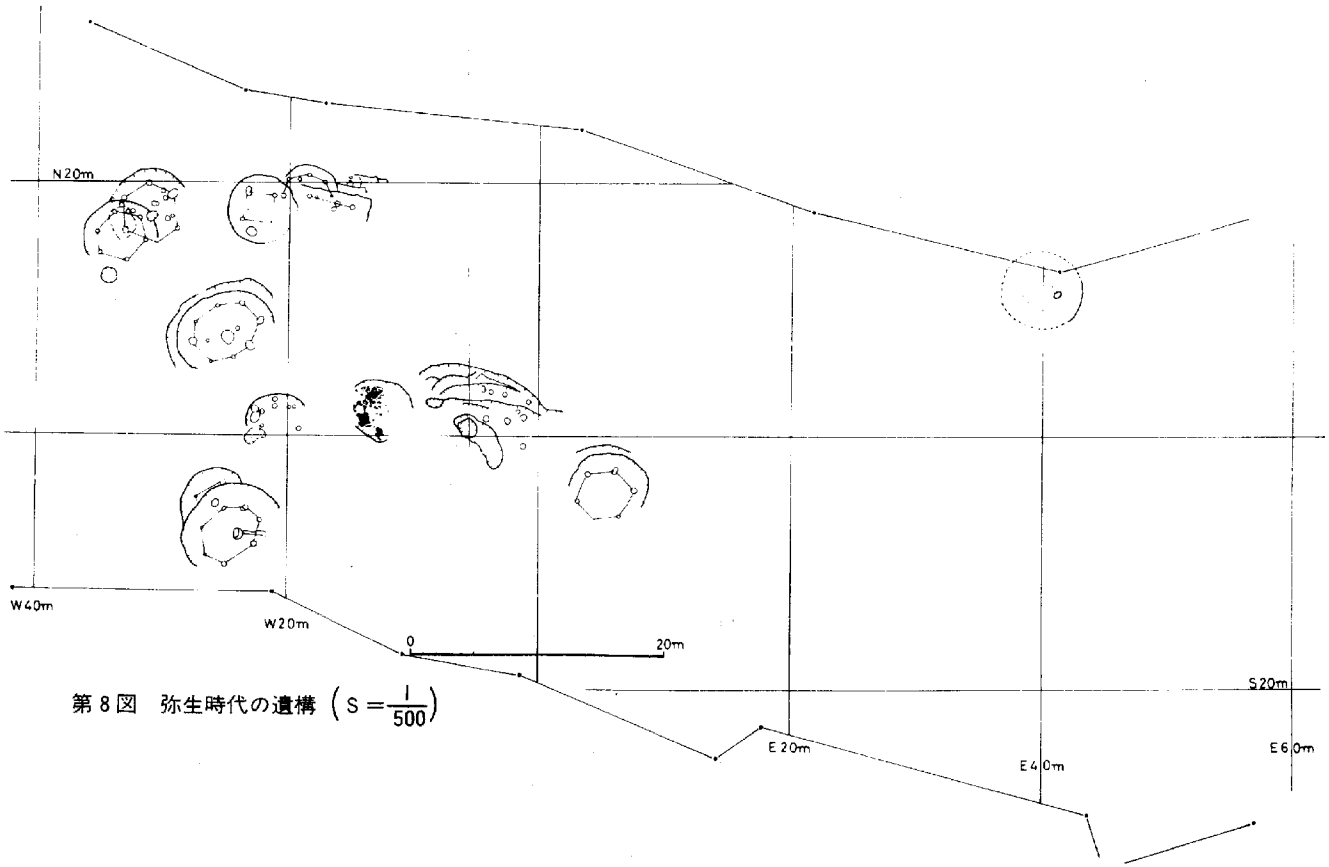
第5図　領家遺跡遺構配置図 ①



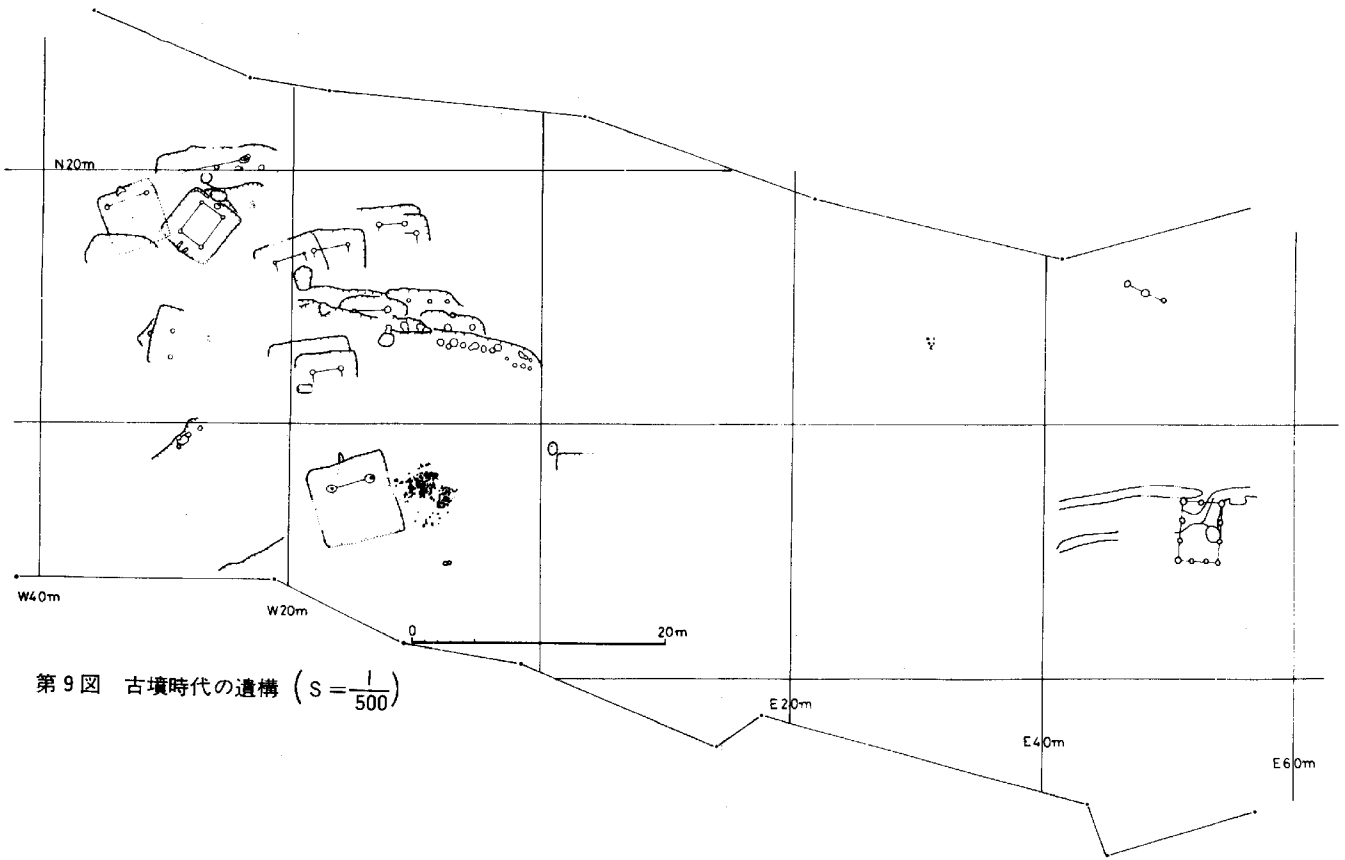
第6図　領家遺跡遺構配置図　②（S＝1/200）



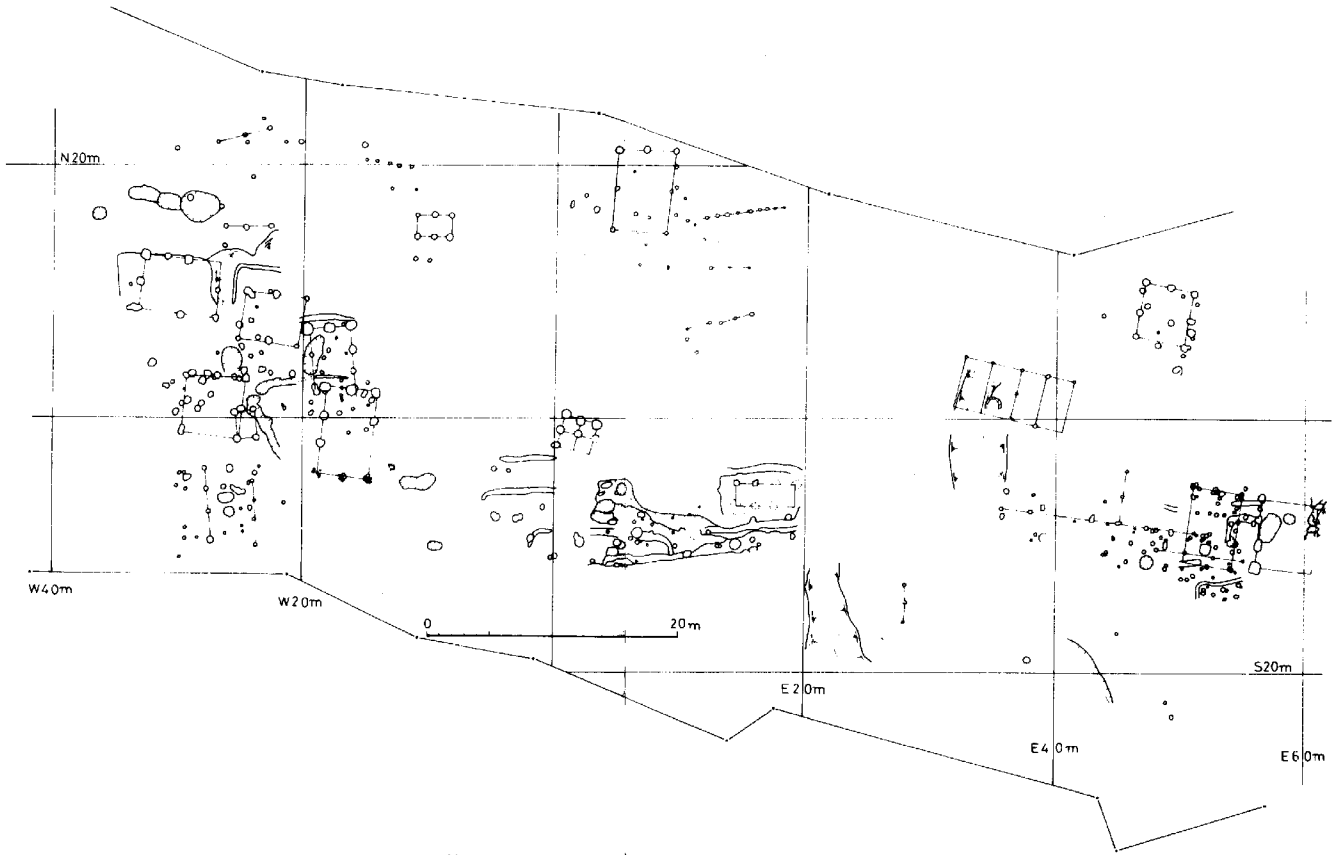
第７図　領家遺跡遺構配置図　③（Ｓ＝Ⅰ/200）



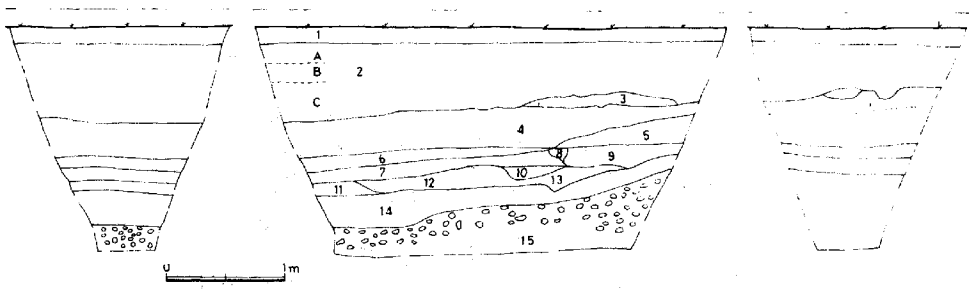
第8図　弥生時代の遺構 $\left(S=\frac{1}{500}\right)$



第９図　古墳時代の遺構 $\left(S=\frac{1}{500}\right)$

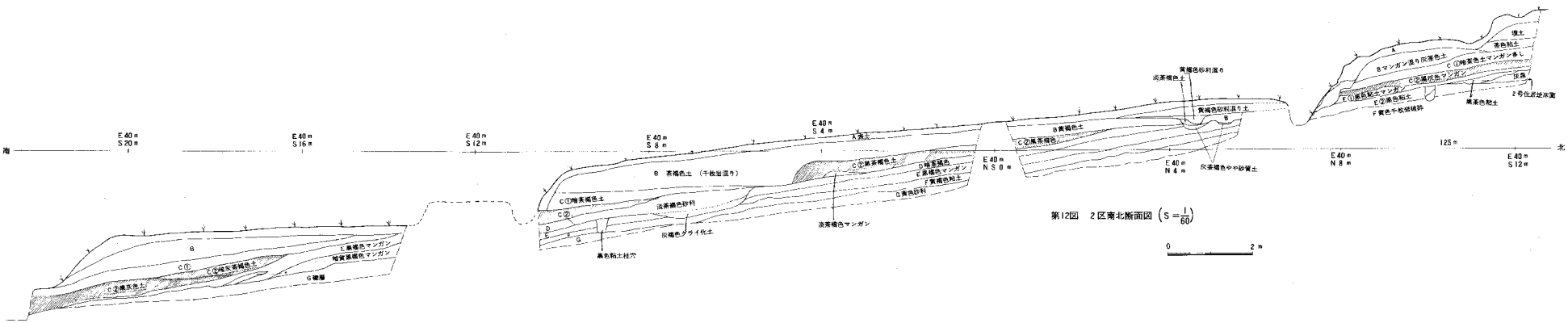


第10図　奈良時代～平安時代の遺構（S＝1/500）



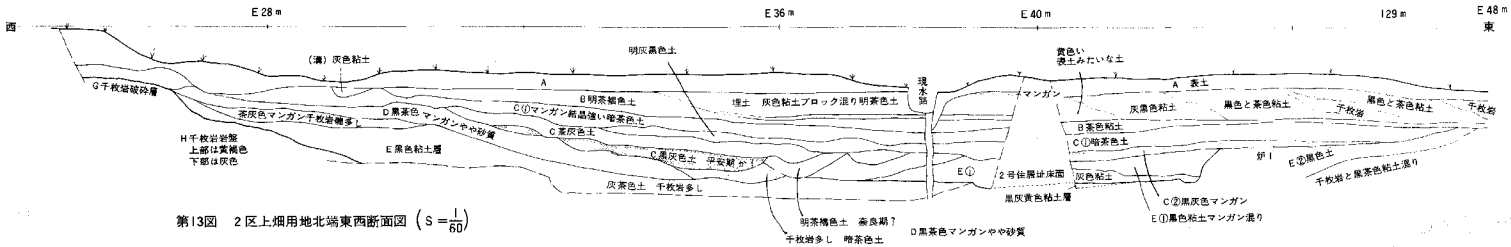
第11図　I区グリッド断面図（E80m）　$\left(\frac{1}{60}\right)$

1．灰褐色粘土（現水田耕土）
2．旧水田耕土で5～6層に分けられるだろう。
　マンガン・管鉄は下に特に多い。
　遺物＝瓦・須恵器など磨滅している。
　A灰色粘土
　B灰褐色鉄分多い
　C灰白色粘土。
3．茶灰色粘土。
4．茶色粘土（黒色がかっている。）
　下部に千枚岩0.5cm程の小さいもの多く
　斑点になる。
5．茶色粘土（黄味がかっている）
6．黒褐色粘土（茶色を帯びる）
7．黒灰色粘土（砂美・粗砂多し）　弥生式土器片?
8．灰色粘土
9．茶褐色粘土
10．茶灰色粘土
11．灰黄色粘土（灰色強い）
12．灰色粘土炭混り
13．灰黄色粘土
14．黄灰色粘土（黄色強い）
15．灰青色砂利層（下層は砂利が少なく砂が多い）
　（水糸し＝122m）

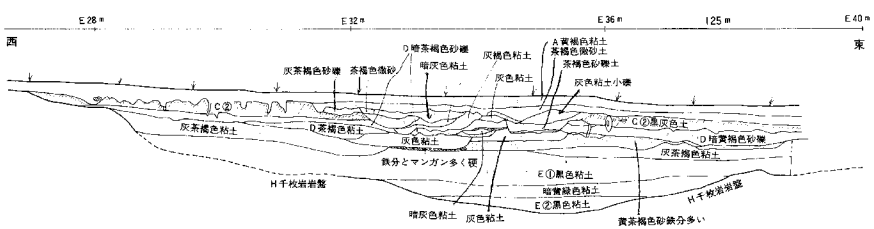


第12図　2区南北断面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

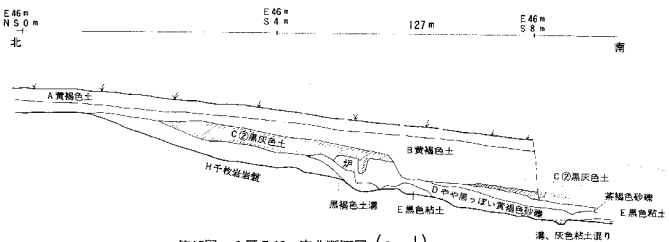
0　2 m



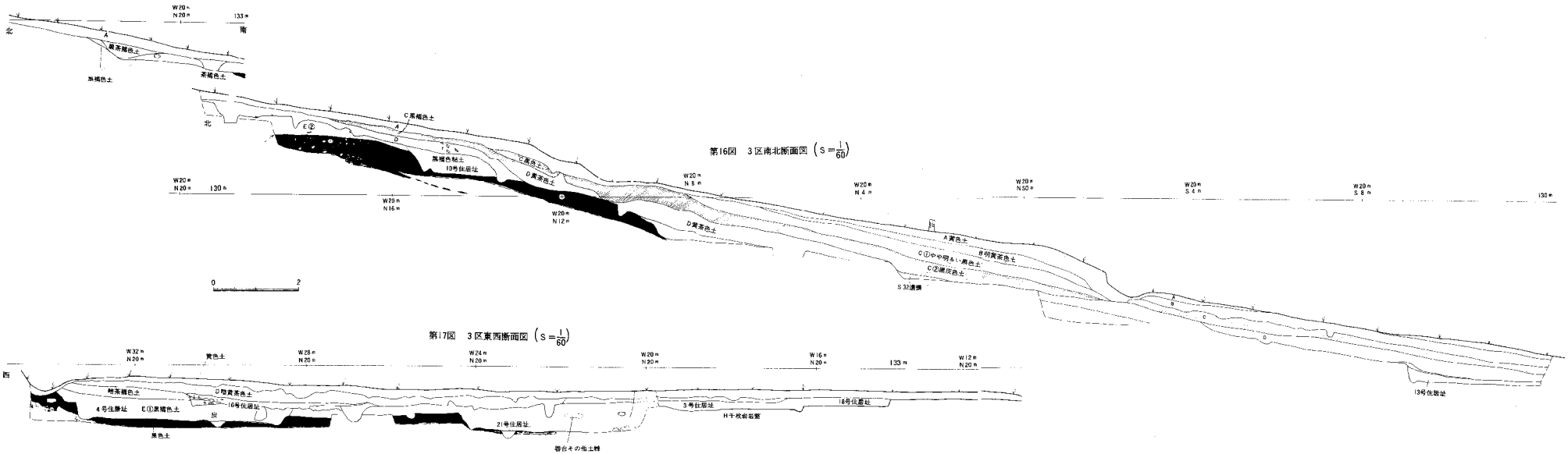
第13図　2区上畑用地北端東西断面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



第14図　2区S 9 ～10 m　(南壁の反転したもの) 東西断面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

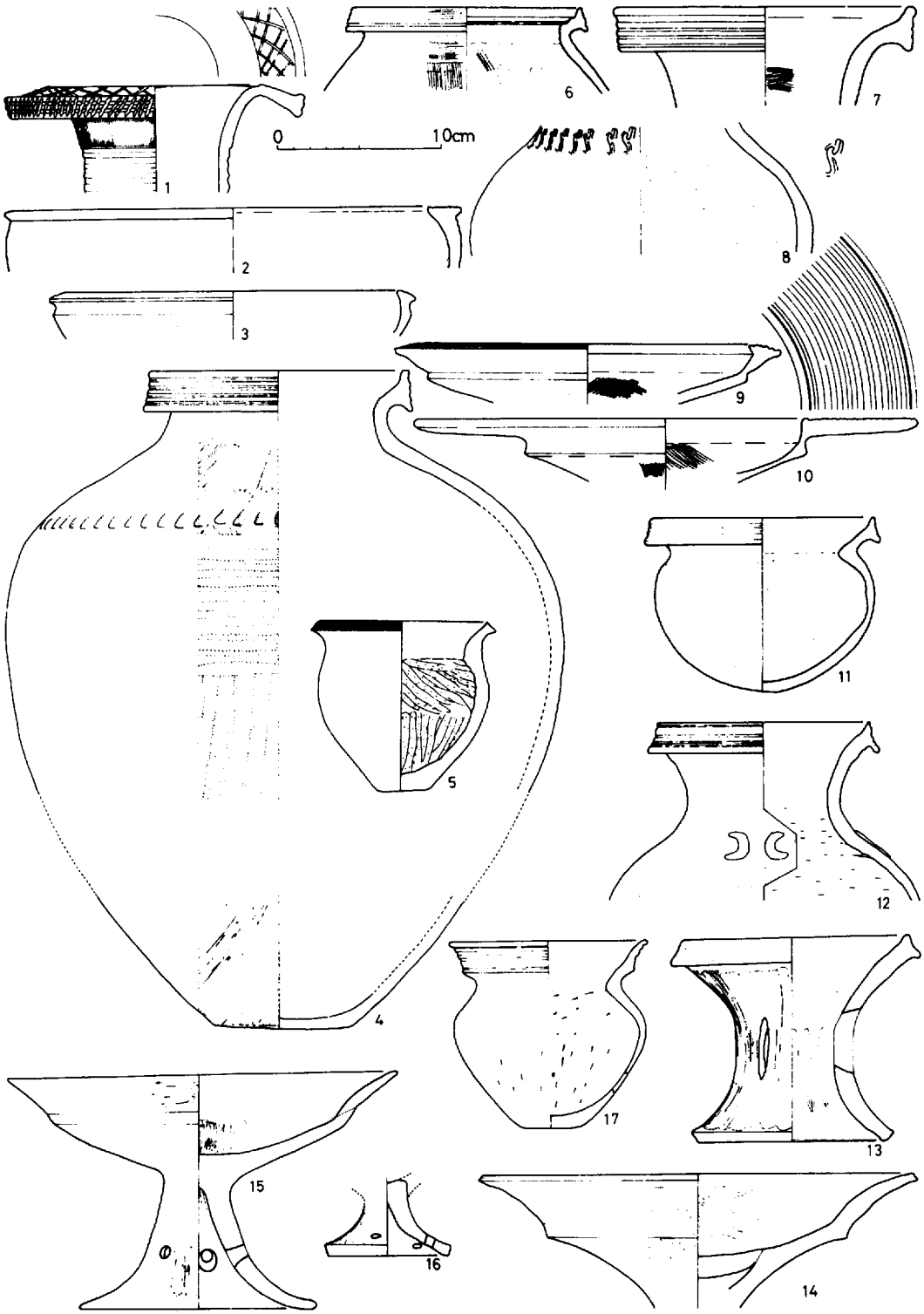


第15図　2区E 46 m 南北断面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



第16図　3区南北断面図（S＝1/60）

第17図　3区東西断面図（S＝1/60）

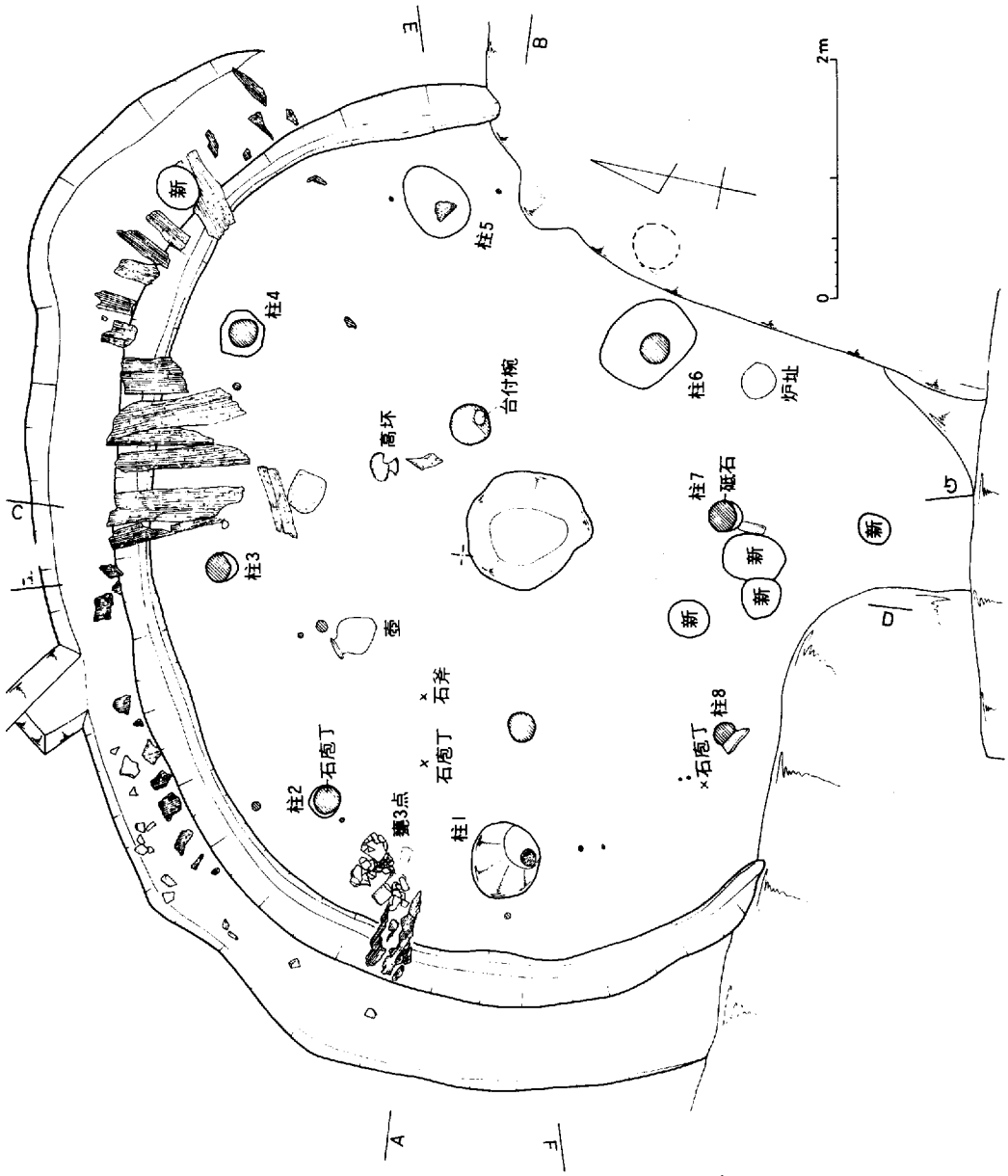


第18図　弥生式土器 $\left(\frac{1}{4}\right)$

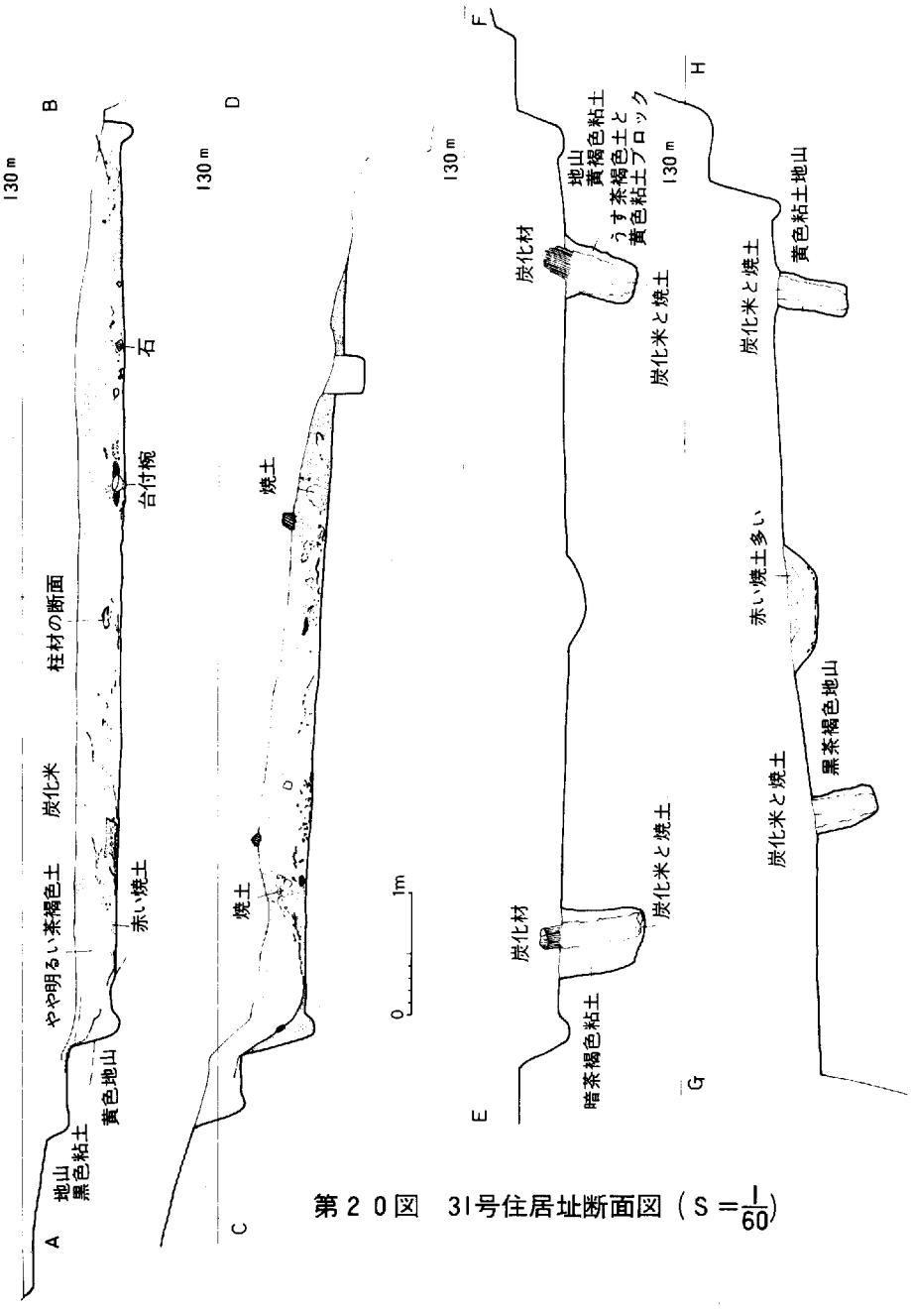
第18図　付　表

（　）は復元あるいは現存値

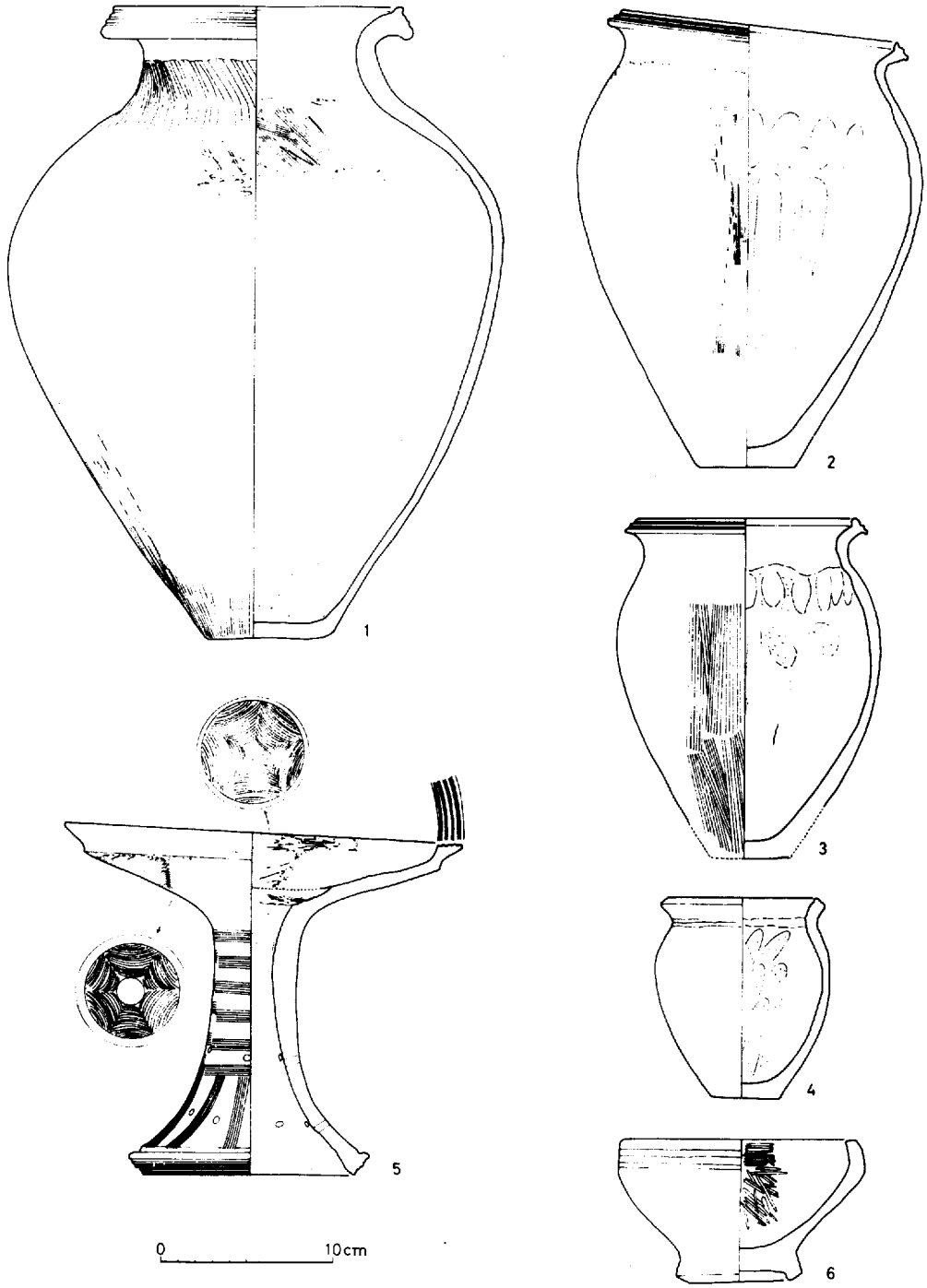
番号	高さ　cm	最大径cm	備　　考	出　土　位　置
1	(6.5)	18.4	一　　部	2号住居址　柱穴
2	(3.7)	(27.9)	破　　片	3区E，W6N2，C層
3	(2.8)	(22.5)	破　　片	3区E，W6N2，E層
4	(40.4)	34.1	復　　元	23号住居址
5	10.4	11.4	完　　形	23号住居址
6	(5.1)	(17.5)	破　　片	3区E，W6N2，E層
7	(6.1)	(18.6)	破　　片	3区E，W6N2，C層
8	(8)	(21)	破　　片	3区E，W7N3，C層
9	(3.6)	(23.7)	破　　片	3区E，W6N2，C層
10	(3.9)	(30.9)	破　　片	3区C，W4N　，E層
11	10.2	14.5	完　　形	28号住居址，柱穴上
12	(11)	(19)	破　　片	21号住居址上層
13	12.85	15.3	完形に接合	21号住居址上層
14	8.3	27	坏部のみ	21号住居址上層
15	16.7	24	完形に接合	21号住居址上層
16	(4.7)	7.7	脚部のみ	2区，E11N3C1層
17	11.6	12.2	完　　形	3区D，W5S1，E層



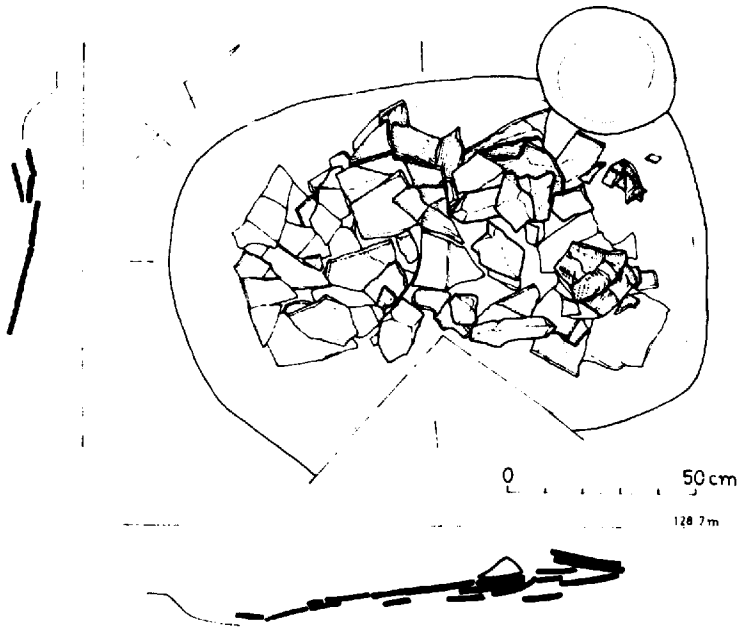
第19図　31号住居址平面図（S＝1/60）



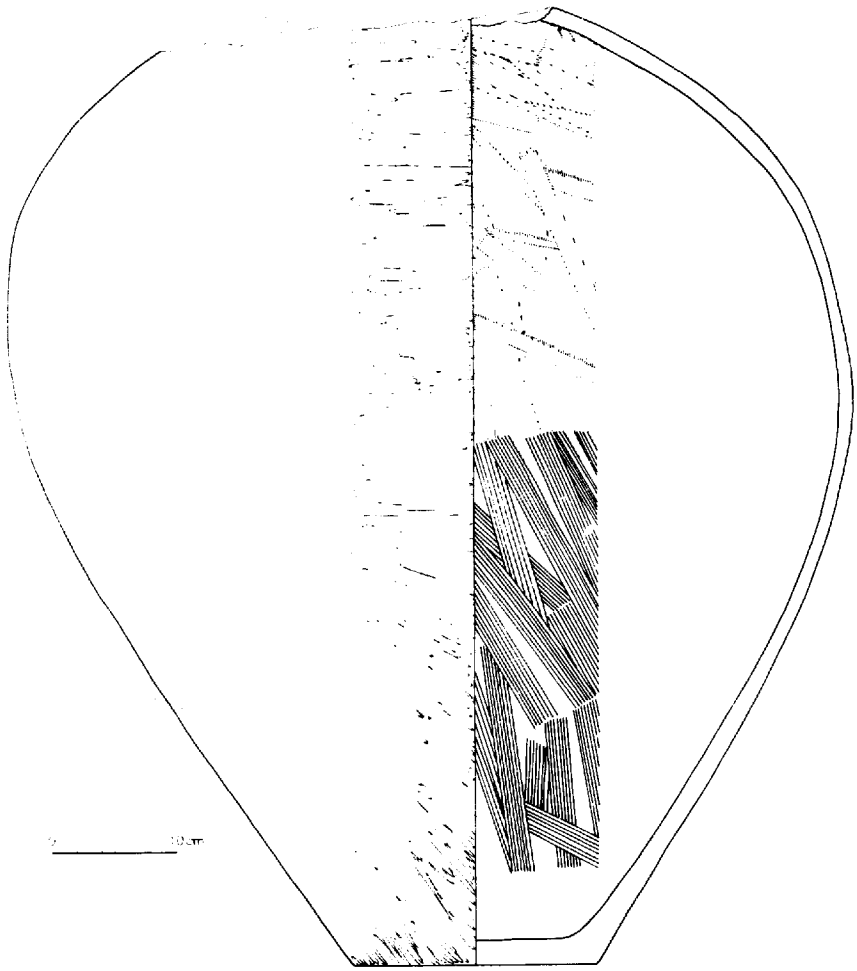
第２０図　31号住居址断面図（S＝1/60）



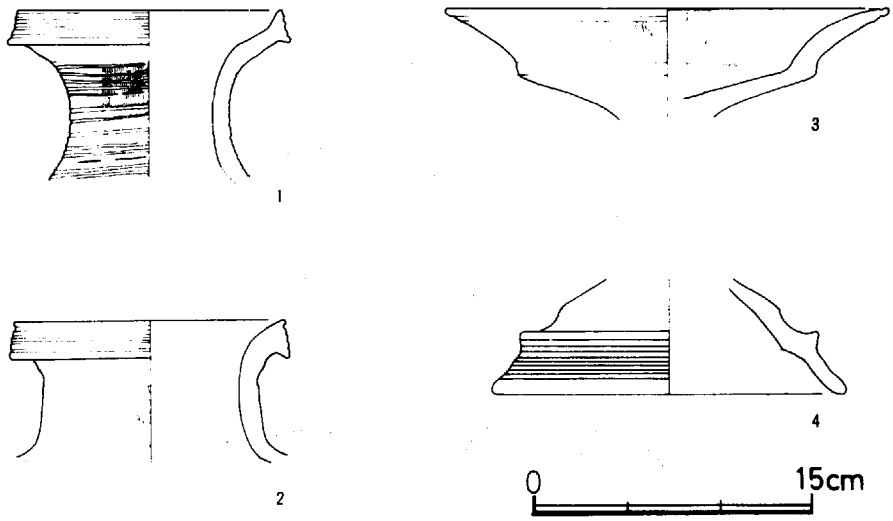
第21図　31号住居址出土土器 (1/4)



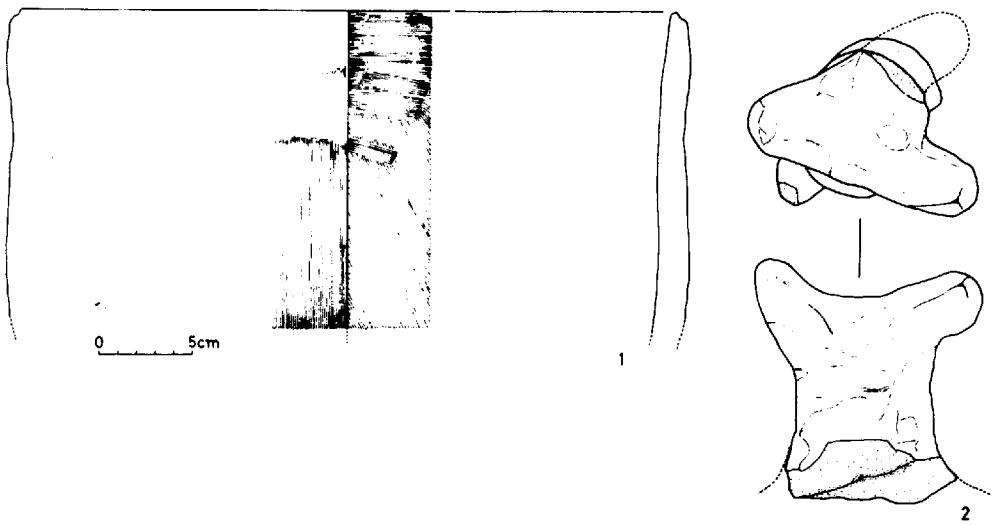
第22図　3区C地点土器棺出土状態（S＝1/20）



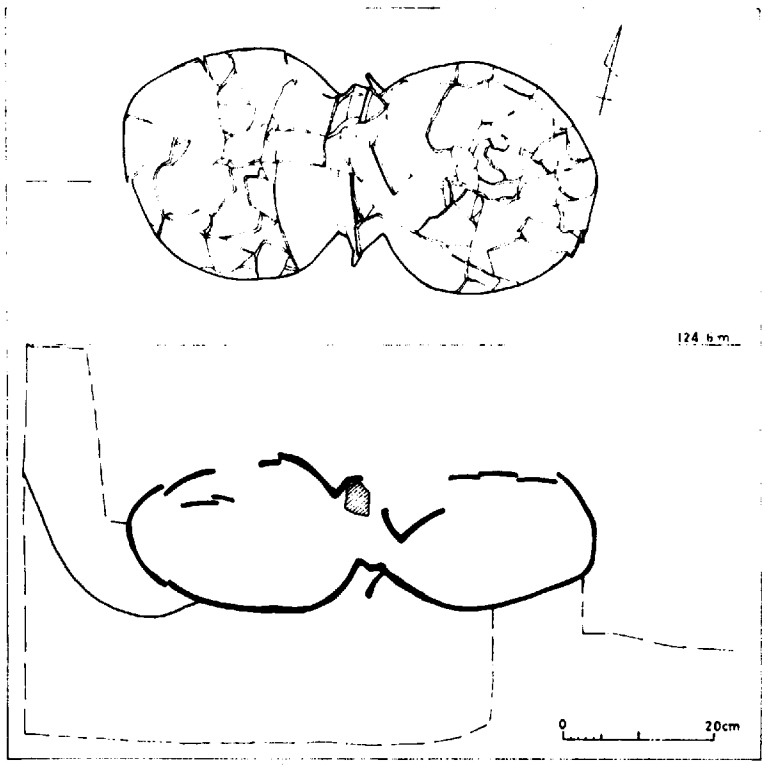
第23図　3区C地点土器棺（1/6）



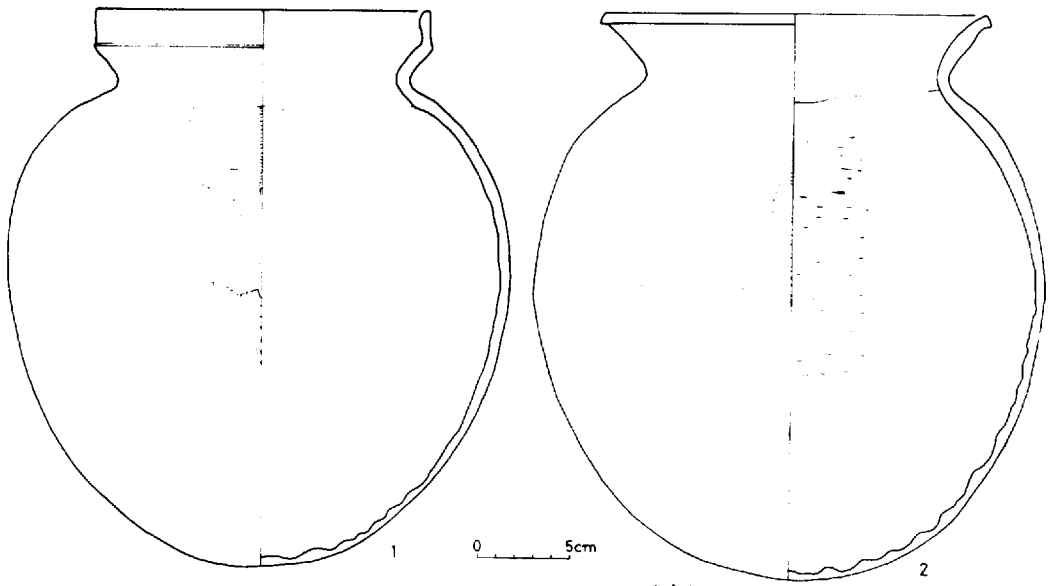
第24図　土壙6出土土器 $\left(\frac{1}{4}\right)$



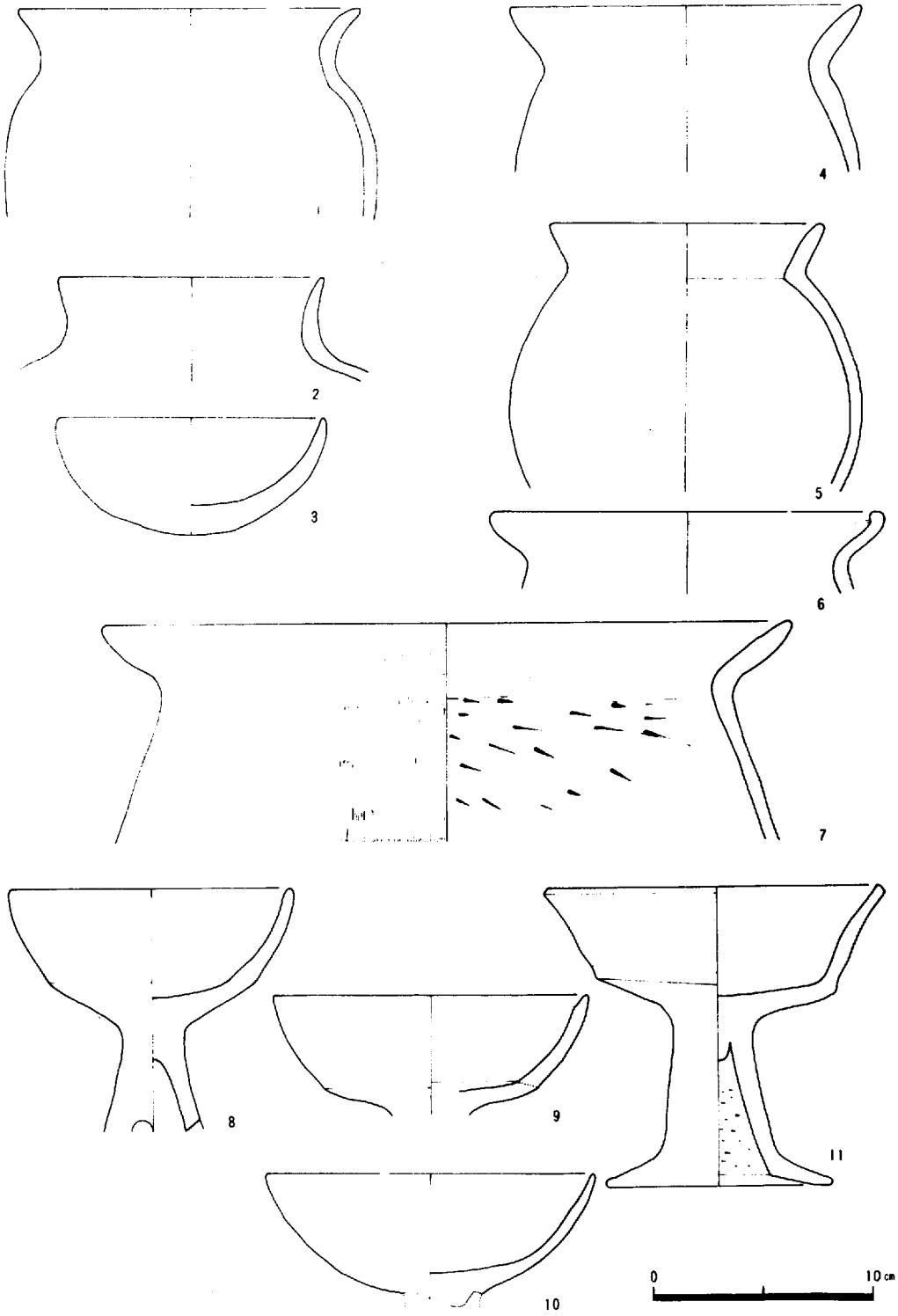
第25図　建物7柱穴出土土器



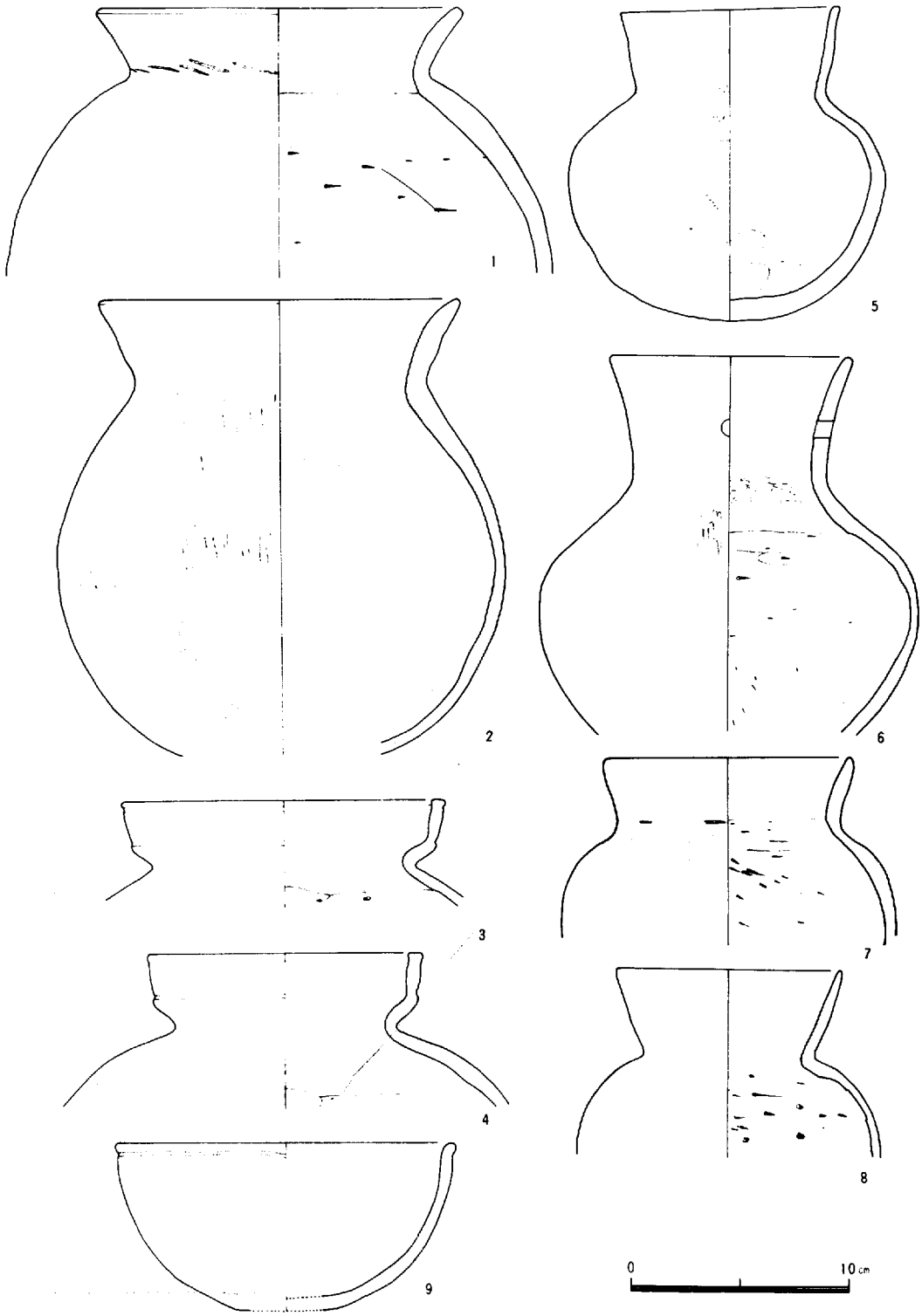
第26図　3区D地点合口土器棺出土状態 $\left(S=\frac{1}{10}\right)$



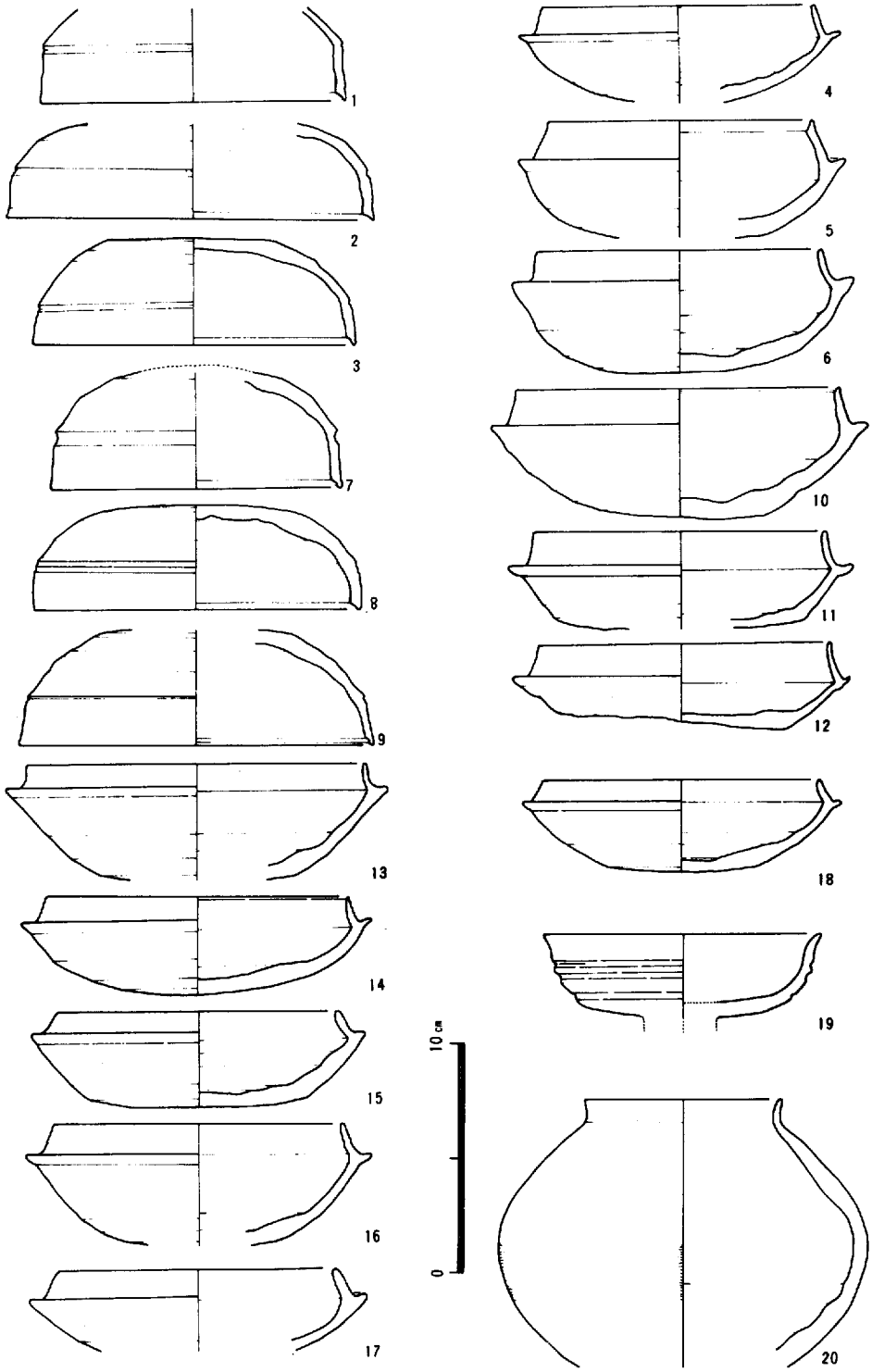
第27図　3区D地点合口土器棺 $\left(\frac{1}{4}\right)$



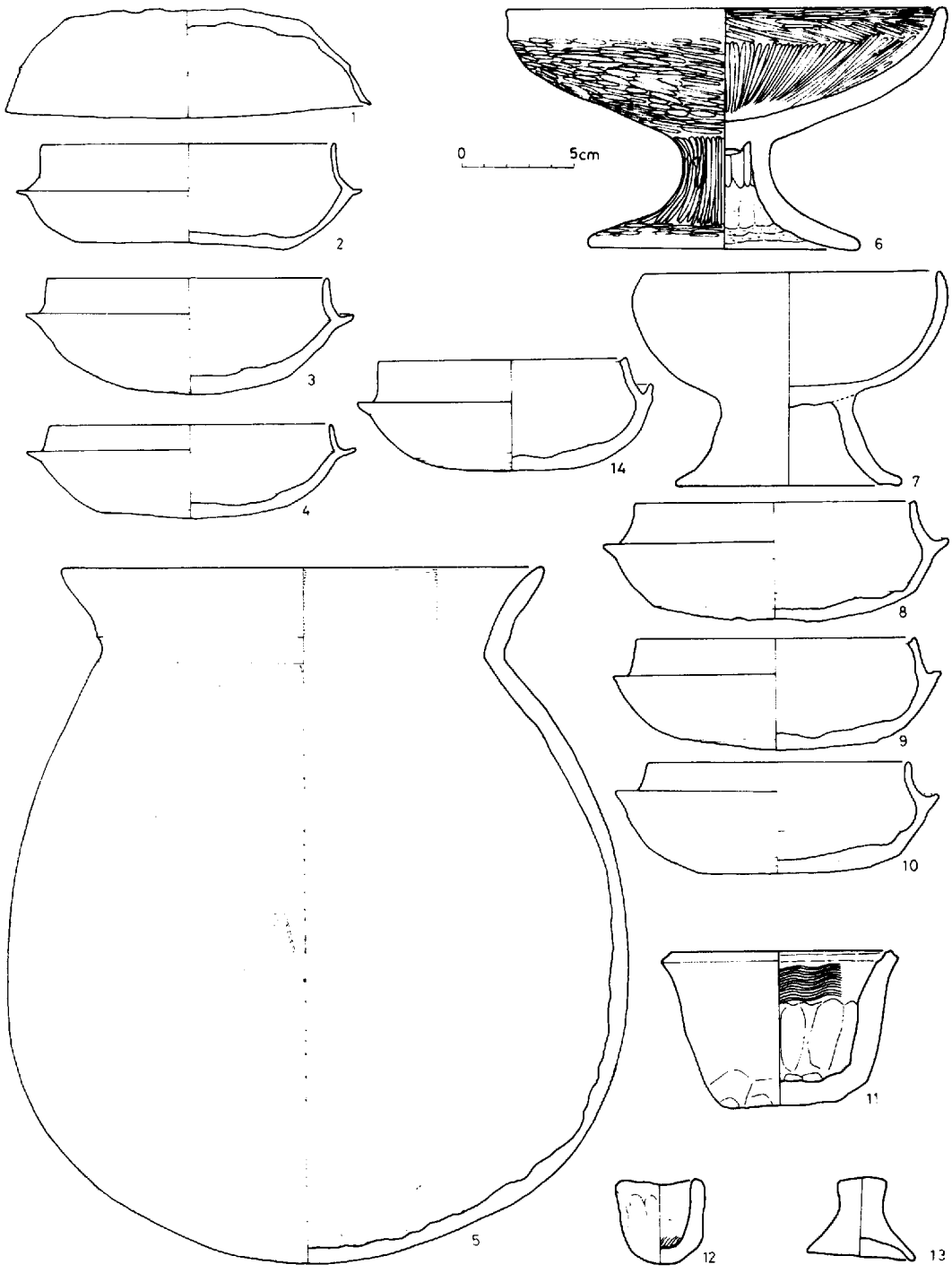
第28図　9号住居址(1・2)、26号住居址(3)、32号住居址(4・7)、27号住居址(8～11)出土土器 (S = 1/3)



第29図　27号住居址出土土器 $\left(S=\frac{1}{3}\right)$



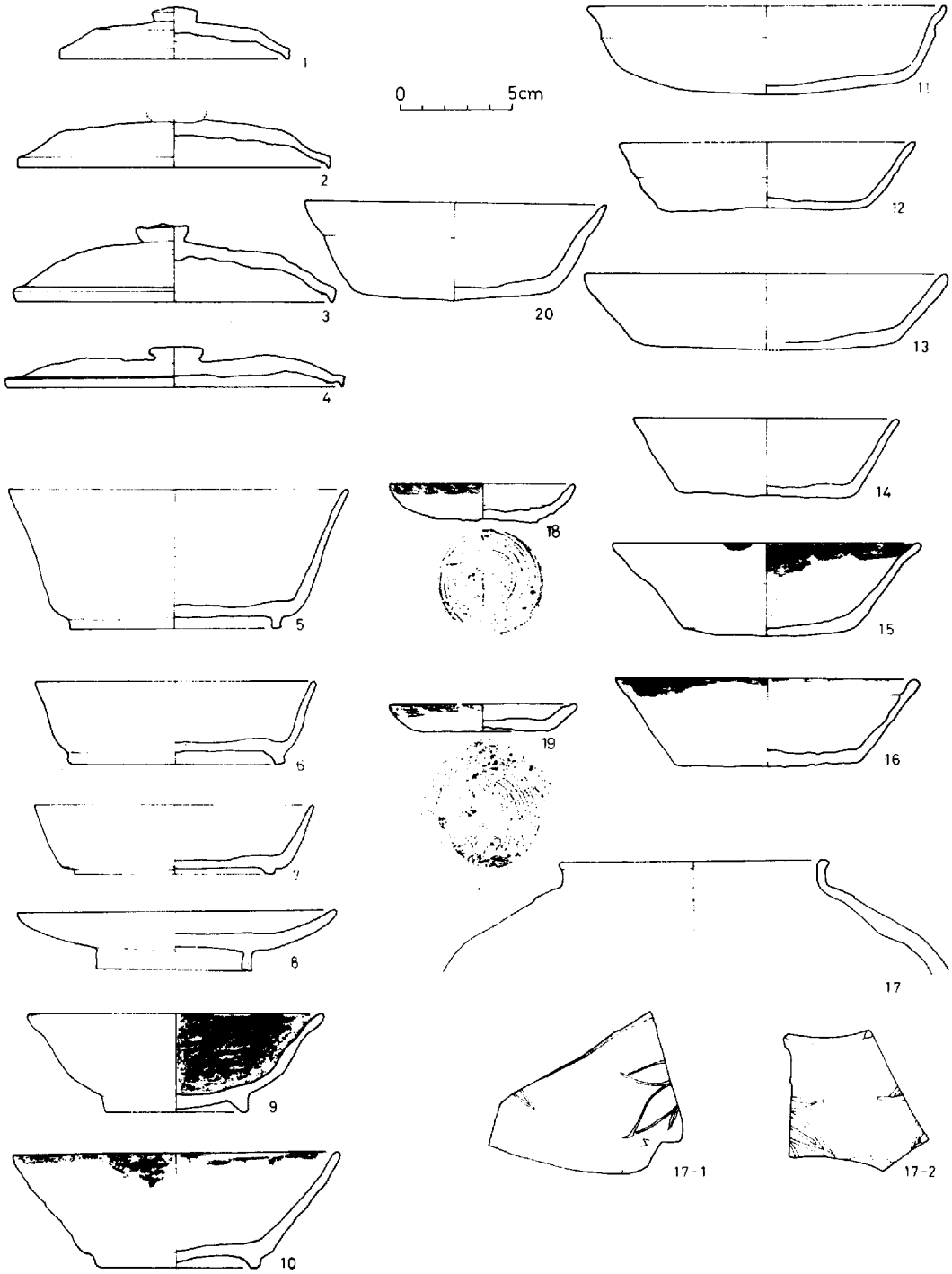
第30図　9号住居址(1～6)、26号住居址(7～12) 32号住居址 (13～20)、出土土器 $\left(S=\frac{1}{3}\right)$



第31図　古墳時代の土器 $\left(\frac{1}{3}\right)$

第31図　付　表

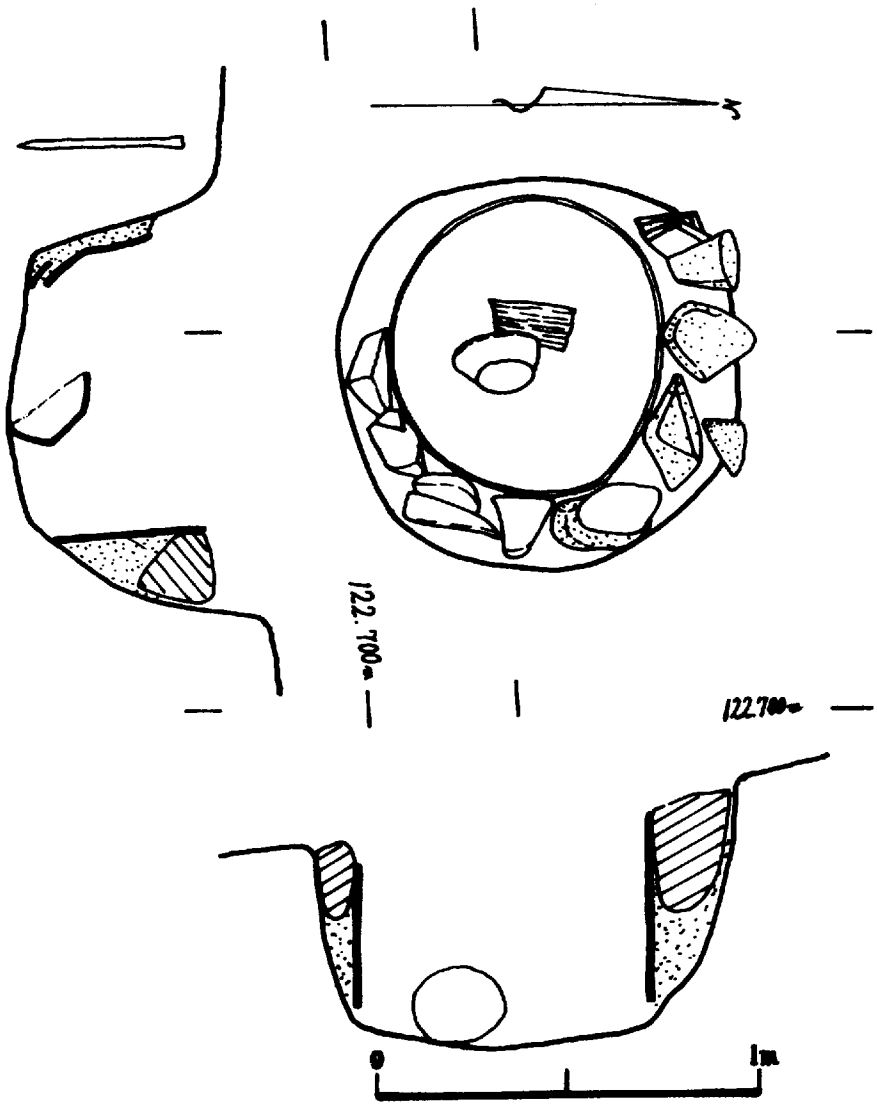
番号	最大径cm	高さ　cm	備　　考	出　土　位　置
1	約15	4.7	歪み完形，須恵器	25号住居址
2	15.4	4.8	完形，須恵器	3区E，W6N4，D層
3	14.6	5.2	やや歪み，完形，須恵器	3区D，W5N1，D層
4	14.7	4.2	完形，須恵器	3区E，W6N3，D層
5	27.6	31.1	復元完形，土師器	3区B，炉穴6の中
6	19.55	10.73	完形接合，土師器	24号住居址床面
7	14	5.84	完形，土師器，丹塗	24号住居址竈
8	15.25	5.3	完形，薄灰色，須恵器	24号住居址床面
9	14.4	5.02	完形，淡赤褐色，須恵器	24号住居址床面
10	14.2	5	完形，灰白色，須恵器	24号住居址床面
11	10.55	7.02	完形，手づくね，土師器	3区C，W5N1，D層
12	4	3.8	完形，手づくね，土師器	3区E，W7N4
13	4.8	3.8	弥生式土器？	3区E，W9N5，C層
14	13.94	5	やや歪み，須恵器	2区，E8N1



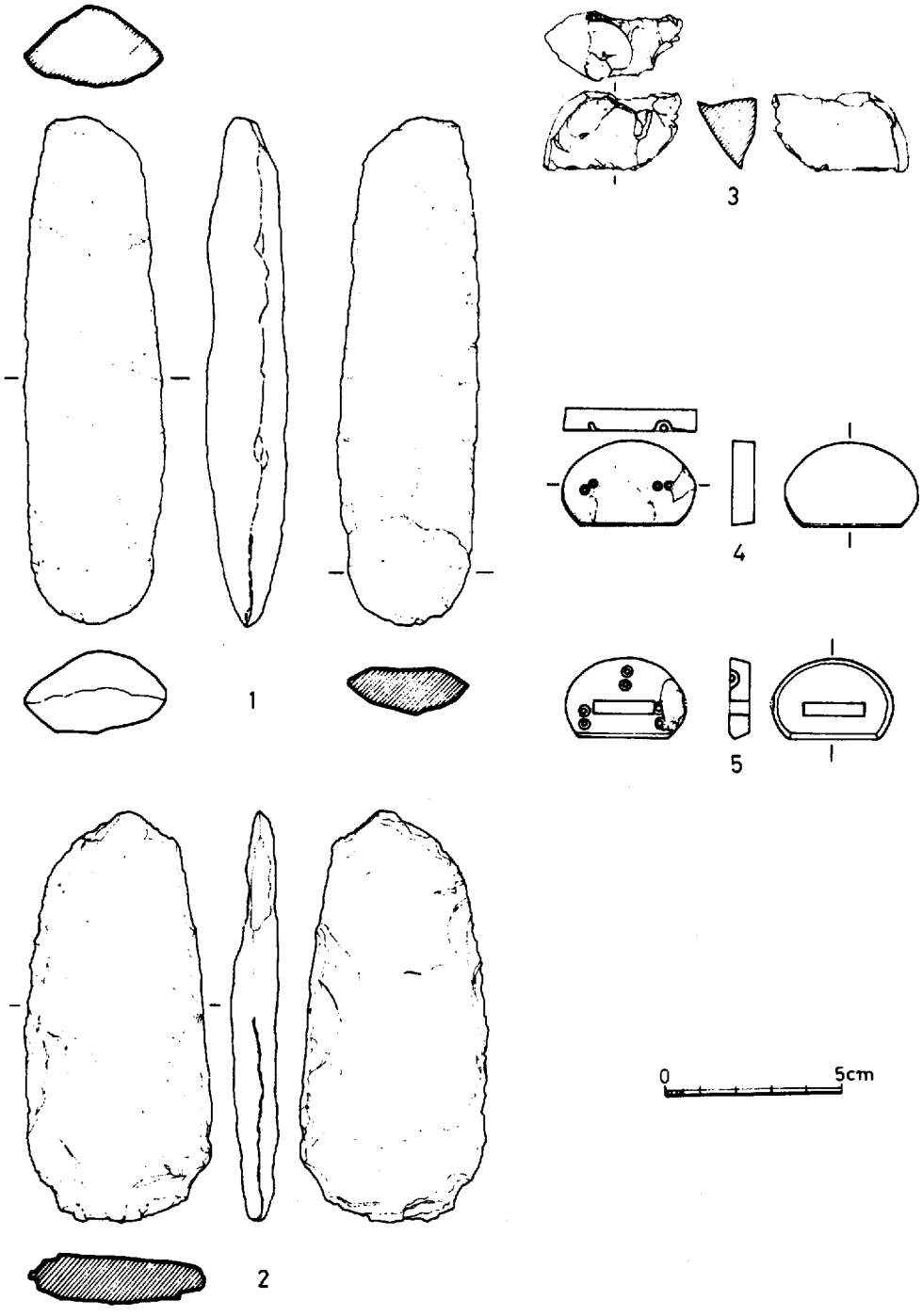
第32図　奈良～平安時代の土器 $\left(S=\frac{1}{3}\right)$

第32図　付　表

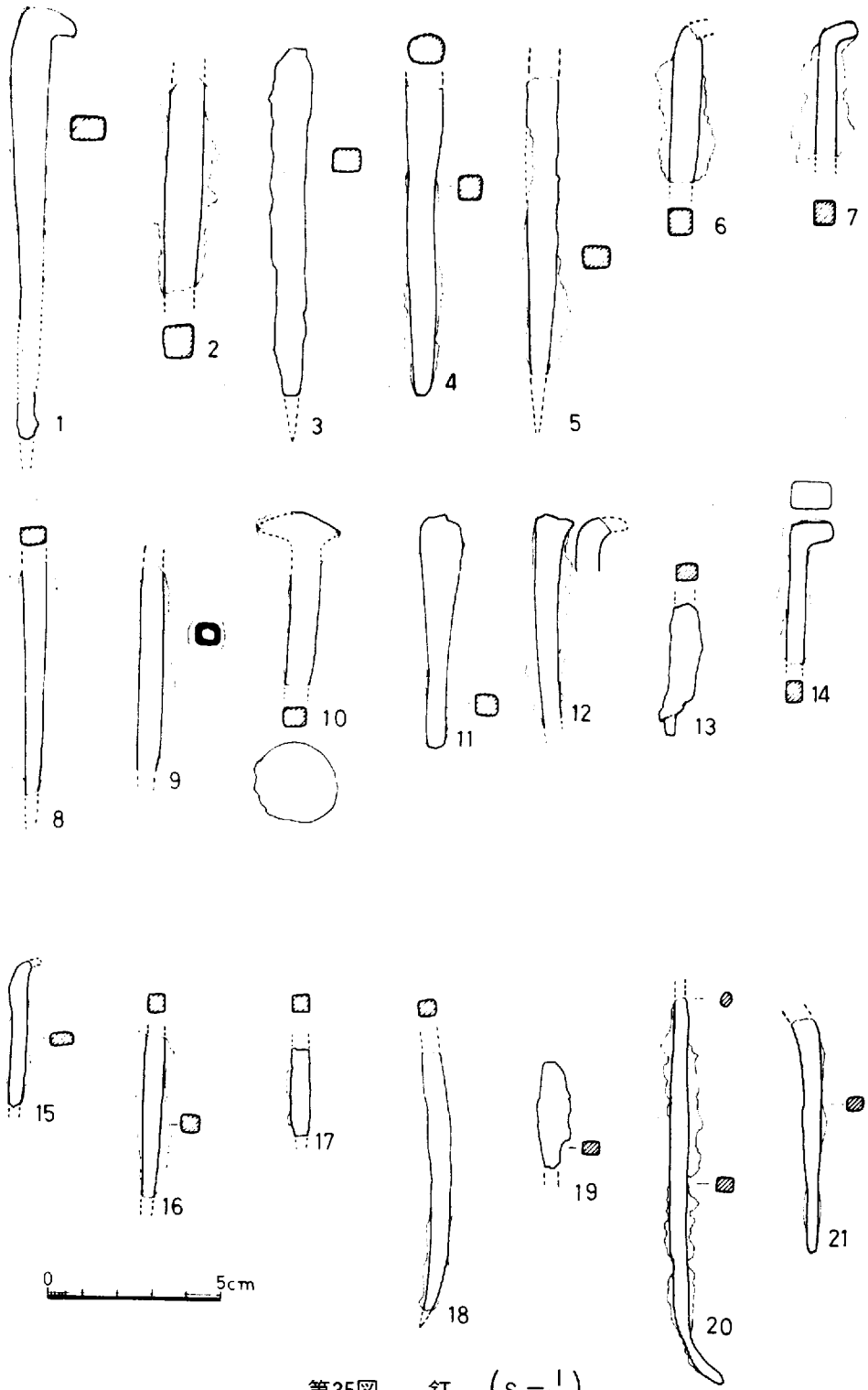
番号	最大径cm	高　さcm	備　　考	出　土　位　置
1	10.2	2.3	須　恵　器	3区E，W7N5，C層
2	13.9	2.1	須　恵　器	2区，E10S3，C層
3	14.3	3.4	須　恵　器	2区，E11N3，B層
4	15.1	1.8	須　恵　器	3区E，W6N5，C層
5	15.1	6.2	須　恵　器	3区C，　　C層
6	12.6	9.5	須　恵　器	3区E，W7N5，C層
7	12.4	3.15	須　恵　器	3区E，W6N5，C層
8	14.3	2.7	須恵器，ヘラミガキ	S30遺構，埋土
9	13.2	4.4	土師質，内面漆黒色	3区E，W7N5，C層
10	14.6	5.2	灰白色，やや軟質，縁黒	3区E，W6N3，C層
11	15.9	3.9	土師器，丹塗り	3区E，土坑1
12	13.1	3.7	土師器，丹塗り	3区E，　C層
13	16.1	3.4	土師器，丹塗り	3区E，W6N2，C層
14	11.7	3.5	須　恵　器	2区，　　C層
15	13.7	4.2	淡赤褐色，縁黒	3区E，W6N1，C層
16	13.4	4	灰白色(瓦質?)，縁黒	2区，　　C層
17–1			須　恵　器	3区E，W7N1，C層
17–2			須　恵　器	3区D，W3S2，C層
18	8.2	1.7	須恵器，縁黒	2区，E9N3，溝中層
19	8.4	1.2	須恵器，縁黒	2区，E9～10S1B層
20	13.4	4.4	須恵器，黒書土器	2区，井戸（S10）



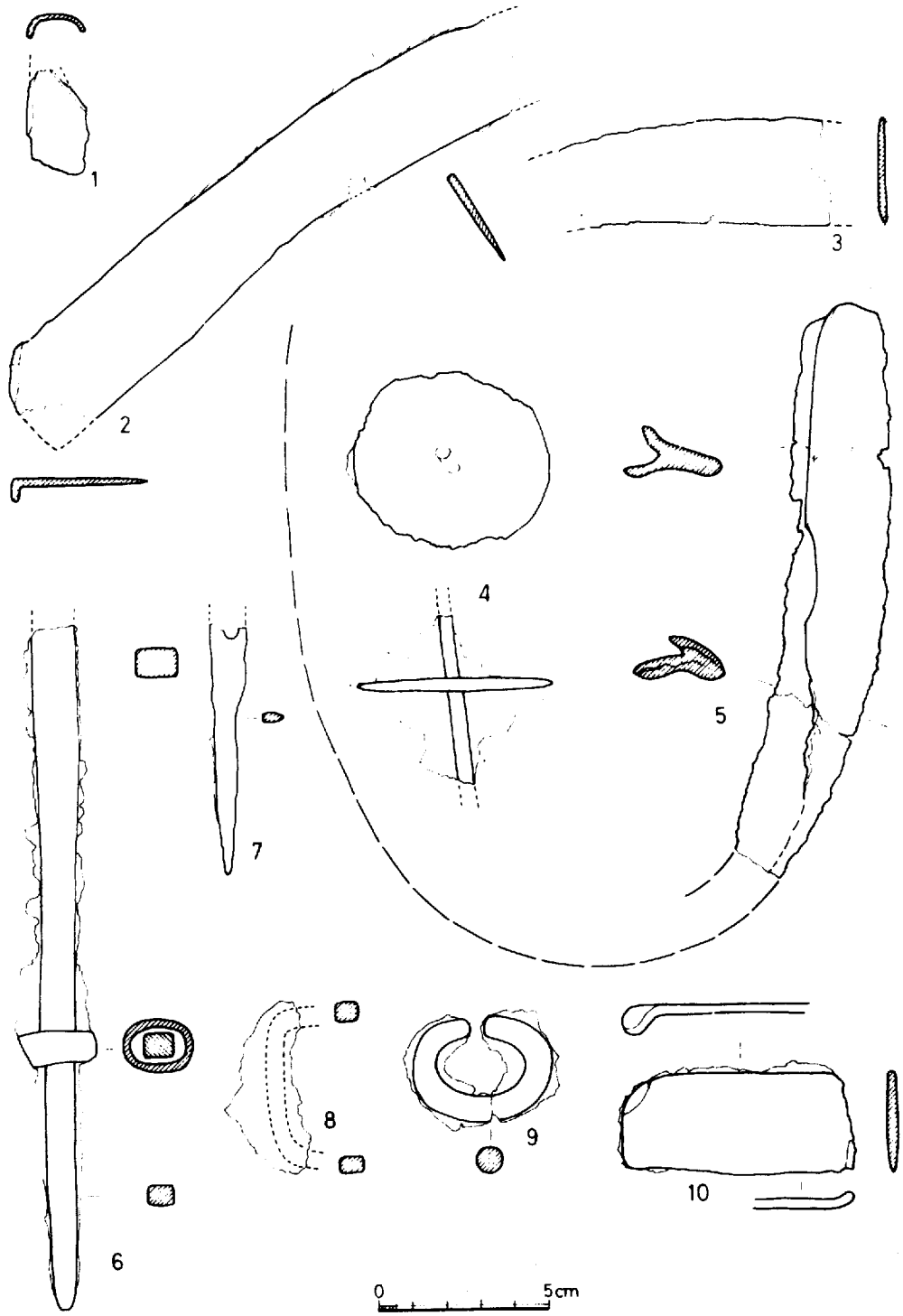
第33図　井戸（S10）実測図 $\left(S=\frac{1}{20}\right)$



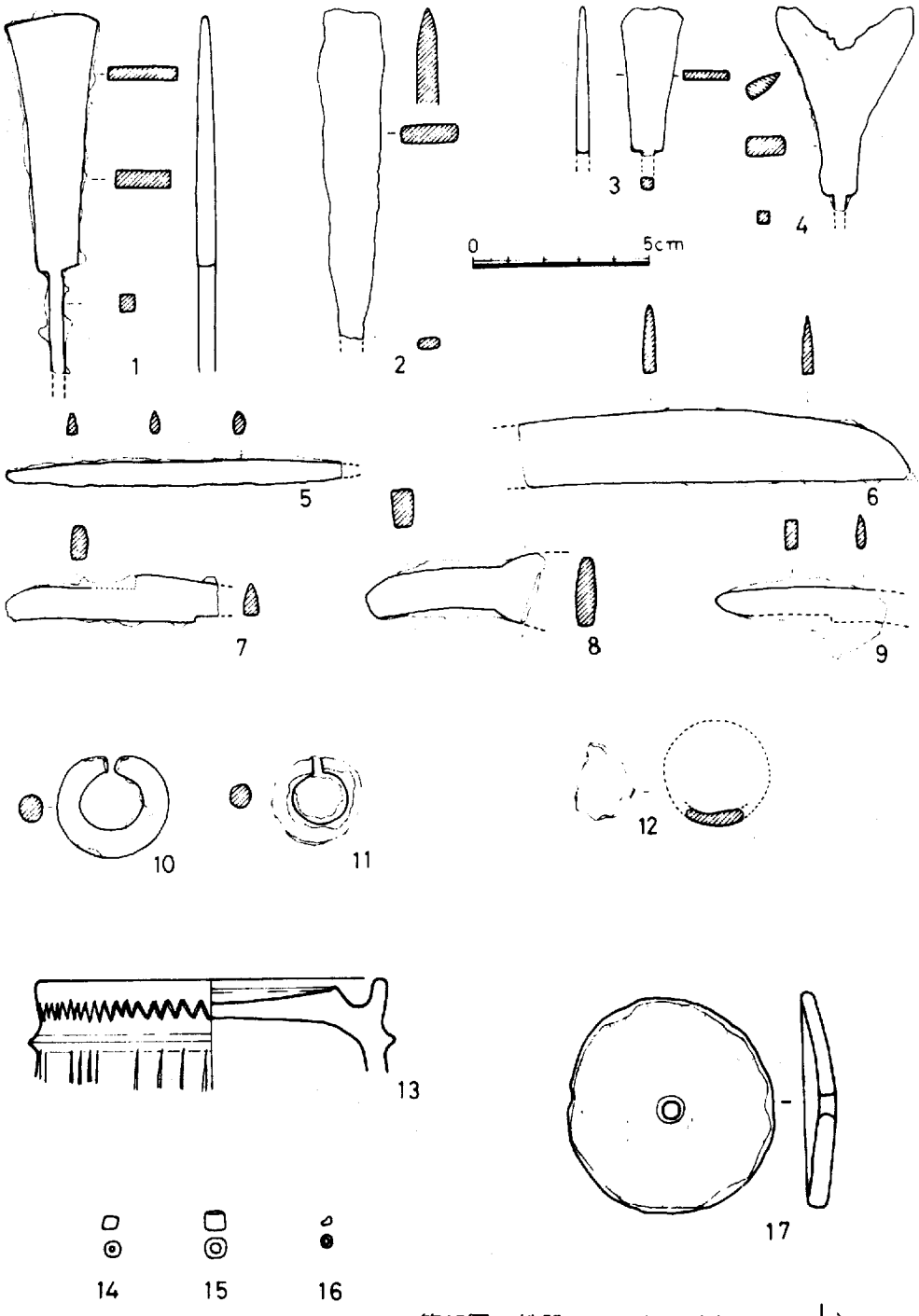
第34図　石器・石製品 $\left(S=\frac{1}{2}\right)$



第35図　釘　$\left(S=\frac{1}{2}\right)$



第36図　鉄　器　$\left(S=\frac{1}{2}\right)$



第37図　鉄器、その他の遺物（S＝$\frac{1}{2}$）

1．　2区　上畑東側全景，H2，建物6．17，炉1　　（西より）

2．　2区　上畑西側全景，H2，炉1　　（南東より）

図版 2

1． 2区 上畑，H2 全 景 （南東より）

2． 2区 南北断面 No. 3 （東南東より）

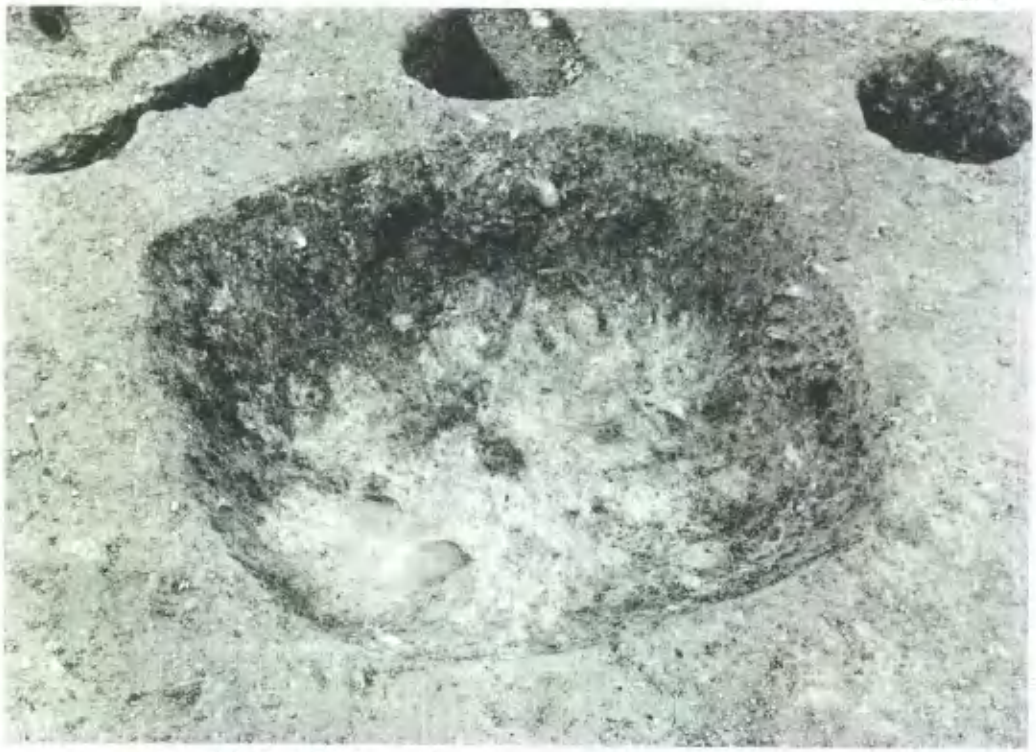
1．2区　東端部　建物3付近　（南より）

2．　2区　東端部　建物3付近　（北より）

図版 4

1．　2区　東端部　建物4付近　　（北より）

2．　2区　東端部　建物4付近　　（南より）



１．　２区　東端部　炉穴５　　（南より）

２．　２区　東端部　建物５付近　　（北より）

図版６

１．２区　中畑東半部（南南東より）建物２．土坑７．ＳＩ・６遺構

２．　２区　中畑東半部　　（北東より）

1． 2区 中畑全景 （西北より）

2． 2区 中畑西半部 （南南東より）

図版 8

1．　2区　中畑　炉穴4　　（東より）

2．　2区　中畑，須恵器・竈破片　　（南西より）

1．　2区　南北断面　S 1 － 2付近　（北東より）

2．　2区　南北断面，南畑S 4 － 6付近　（東より）

図版10

1．　2区　南畑　西方，S13　溝　　（南より）

2．　2区　畑，S10井戸　　（南より）

1．　2区　S10井戸内出土　墨書土器

2．　2区　井戸出土　墨書土器

図版12

1、S10井戸内出土墨書土器細部

2．　3区　A・B地点　全景　　（北西より）

1．　3区　A地点　建物9　　（東より）

2．　3区　A地点　建物25，土壙17・18　　（西より）

図版14

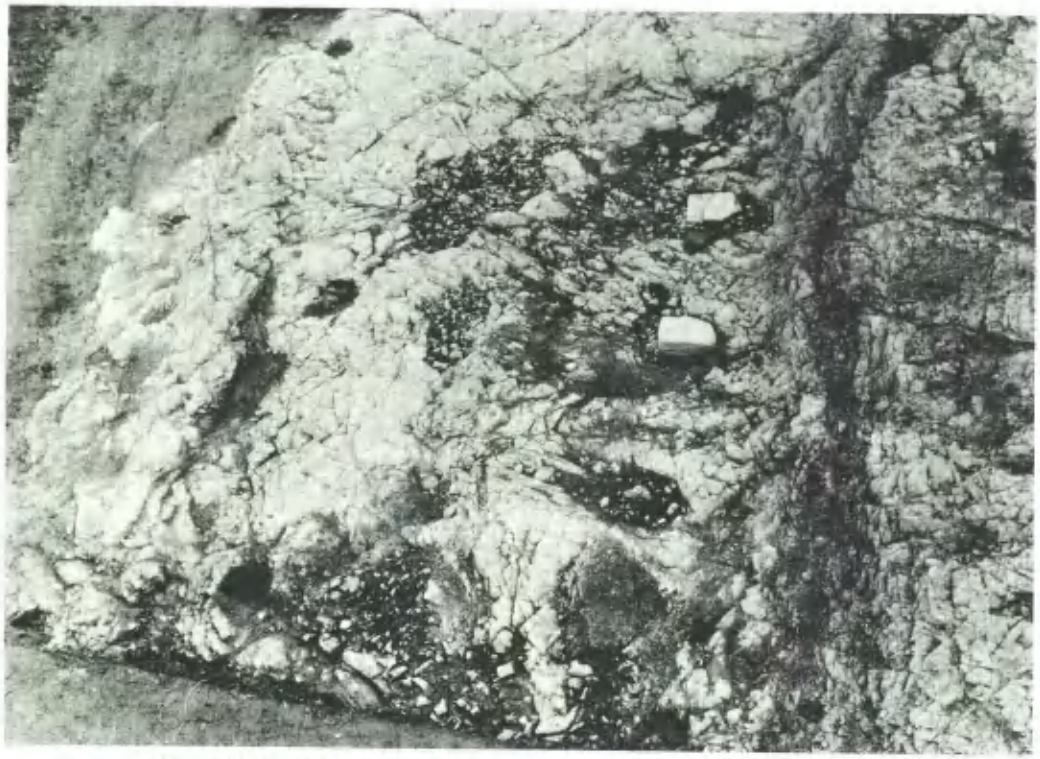
1．　3区　A地点　建物11　　（西より）

2．　3区　A地点　建物12　　（東より）

1．　3区　AB地点　全景　　（南東より）

2．　3区　B地点　H I・土壙19・S20遺構　　（南より）

図版16



1．　3区　B地点　建物7　　（東より）

2．　3区　B地点　炉穴6　　（南西より）

1．　3区　B地点　建物14　　（南より）

2．　3区　B地点　1号住居址内，黄色粘土塊　　（北北東より）

図版18

1．　3区　B地点　1号住居址内　土器出土状態　（南より）

2．　3区　B地点　1号住居址　周溝の石　（南より）

1．　3区　B地点　1号住居址　土層断面　　（西より）

2．　3区　B地点　1号住居址　全景　　（東上方より）

図版20

1．　3区　B地点　1号住居址内　高坏出土状態

2．　3区　B地点　1号住居址と20号住居址　（北西より）

1．　3区　C地点　　（北西より）

2．　3区　C地点　3号住居址　　（東南より）

図版22

1．　3区　C地点　6・7号住居址と建物7　（東より）

2．　3区　C地点　左から29・5・18号住居址　（東より）

1．　3区　C地点　9号住居址　炭化材出土状態　　（東より）

2．　3区　C地点　9号住居址　掘り上り状態　　（東北東より）

図版24

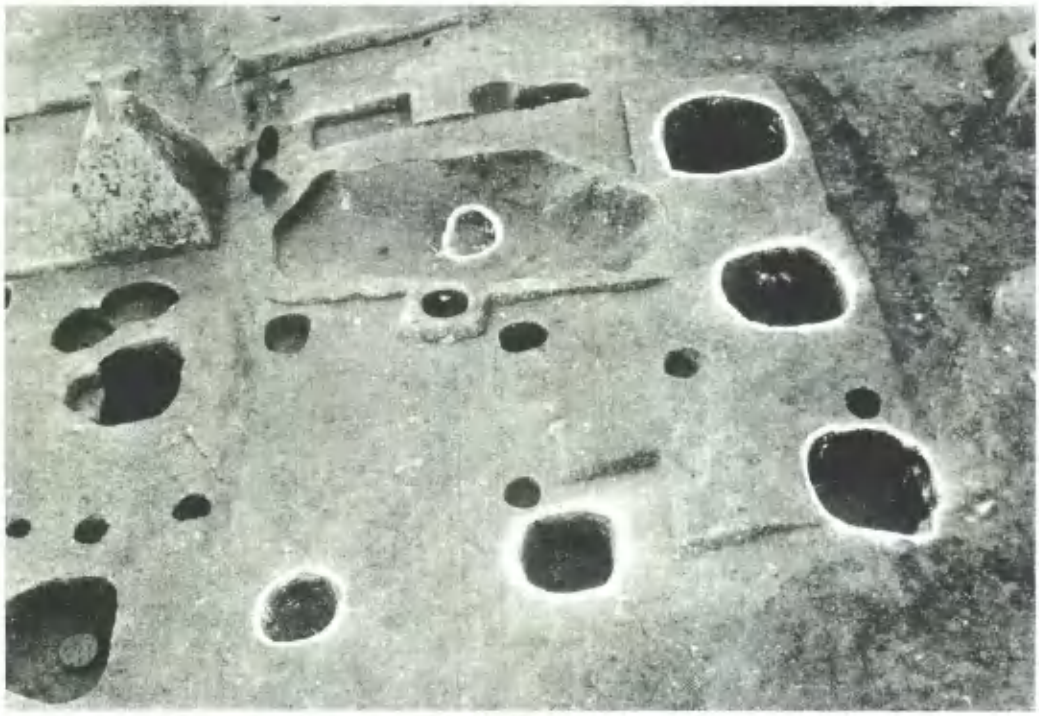
1．　3区　C地点　土壙20，S21・S25遺構　　（南東より）

2．　3区　C地点　8・11・19号住居址，土壙9，S22・23遺構の一部

1．　3区　C地点　8・11号住居址　（北西より）

2．　3区　C地点，S23遺構付近，炉11・12・13など　（西より）

図版26



1．　3区　C地点，建物10，土壙8，S25溝　　（東より）

2．　3区　C・D地点，建物15　　（北より）

1．　3区　C地点，26・27号住居址　　（南東より）

2．　3区　C地点，27号住居址，土器出土状態　　（南より）

図版28

1．　3区　C地点，S24遺構　　（南西より）

2．　3区　C地点，S23・24遺構　　（南東より）

1．　3区　D地点，土坑10　　（南南西より）

2．　3区　D地点，土壙11　　（南西より）

図版30

1．　3区　D地点，東端部，S28・29溝など　（北西より）

2．　3区　C地点，土壙9　（南南西より）

1．　3区　C地点，炉穴17　（南より）

2．　3区　C地点，土壙6　（南東より）

図版32

1．　3区　C地点，土壙6遺物出土状態　（南東より）

2．　3区　C地点，土壙6埋土断面　（南西より）

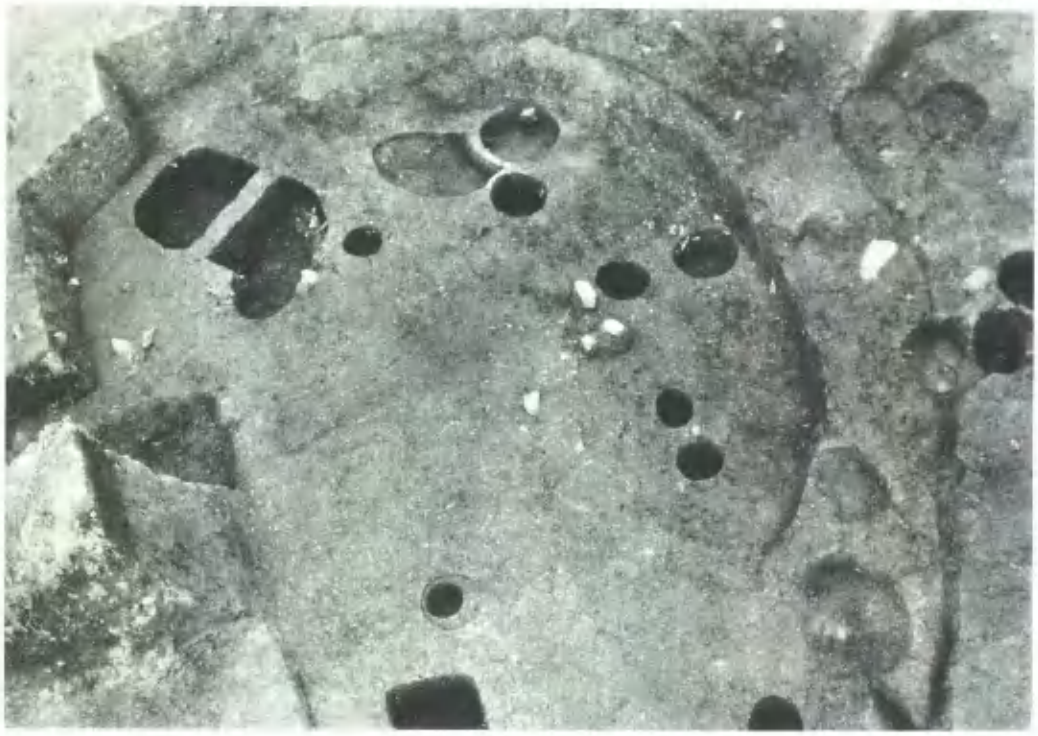
1．　3区　C地点，土器棺　　（南東より）

2．　3区　D地点，合口土器棺　　（北より）

図版34

1．　3区　C地点，S26遺構石だまり　（南東より）

2．　3区　D地点，S27遺構石だまり　（南東より）



1．　3区　C・E地点，33号住居址　　（南東より）

2．　3区　D地点，32号住居址　　（南東より）

図版36

1．　3区　D地点，32号住居址　竈の粘土散在状態　　（東より）

2．　3区　D地点，32号住居址，竈全景　　（南より）

1．　3区　E地点，16号住居址　　（西南西より）

2．　3区　E地点，北半部全景　　（西より）

図版38

1．　3区　E地点全景　北半部　　（東より）

2．　3区　E地点，北半部　　（北西より）

1．　3区　E地点，16号住居址　（西北西より）

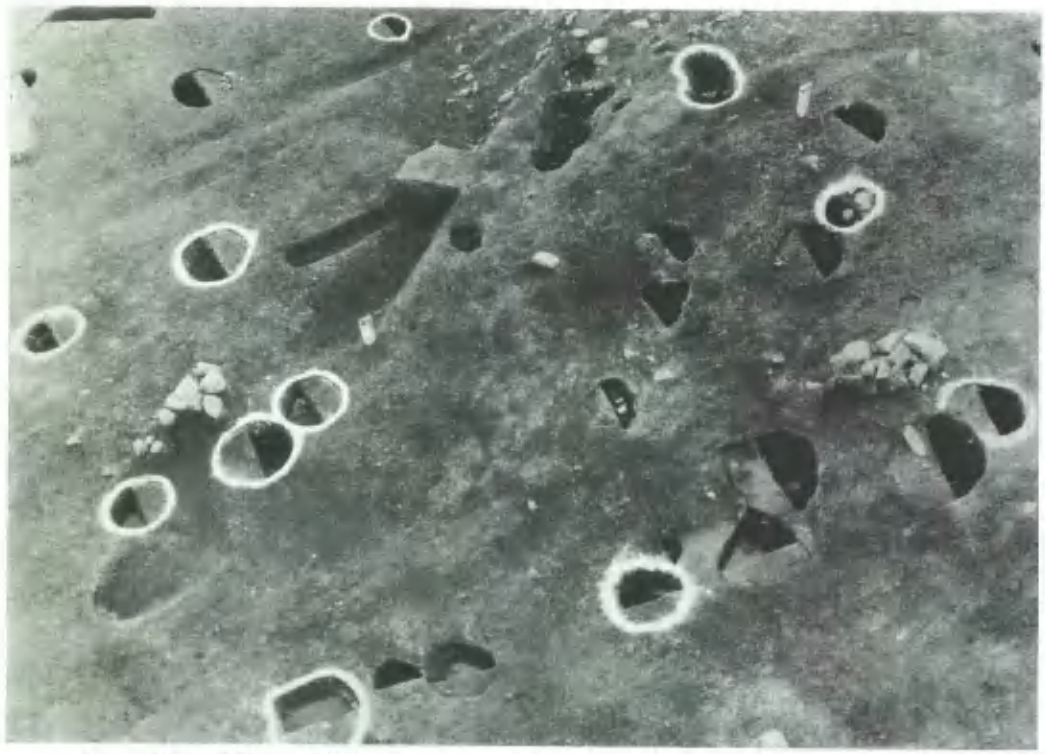
2．　3区　E地点より　D地点を望む，発掘風景　（北西より）

図版40

1．　3区　E地点より　F地点を望む　　（北西より）

2，　3区　E地点　　（南より）

1．　3区E地点，建物19・20　（南西より）



2．　3区　E地点，建物19・20　（北北西より）

図版42

1．　3区　E地点，建物16　　（西より）

2．　3区　E地点，S30遺構南北断面　　（東より）

1．　3区　E地点，建物17　（西北西より）

2．　3区　E地点，S30遺構内土器群1～4　（北より）

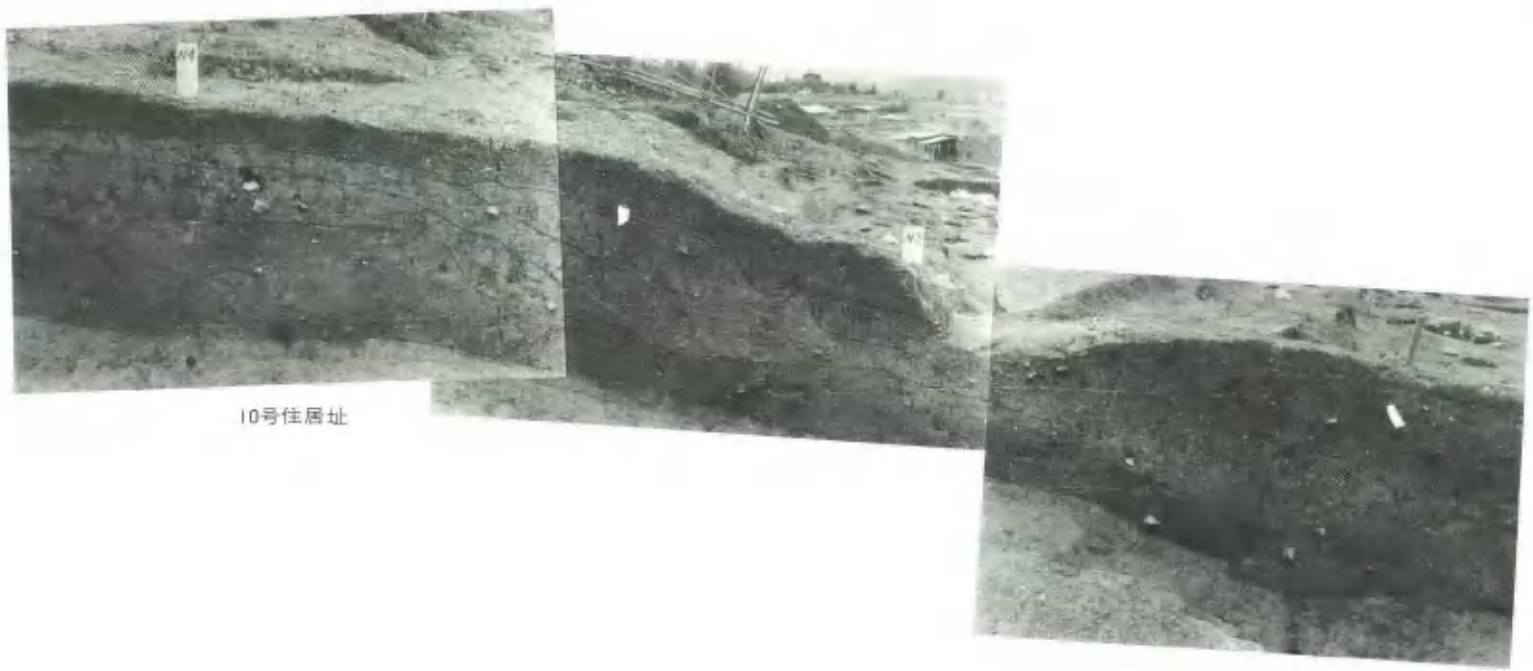
図版44

1．　3区　E地点N20m東西断面W9・W8，4号住居址　（西南より）

2．　3区E地点N20m東西断面W8・7　（南々東より）

1．　3区　E地点，N20m東西断面，W1－2，21号住居址　（西南より）

2．　3区　E地点，W20m南北断面N5・3　21号住居址　（西より）



10号住居址

S25溝

2．　3区　E地点，W20南北断面NN

1．　3区　E地点，W20ｍ南北断面N２付近　　（北西より）

2．　3区　E地点W20ｍ南北断面N１，S32遺構　　（西より）

図版48

1. 3区 E地点 土壙1・2・3 (東より)

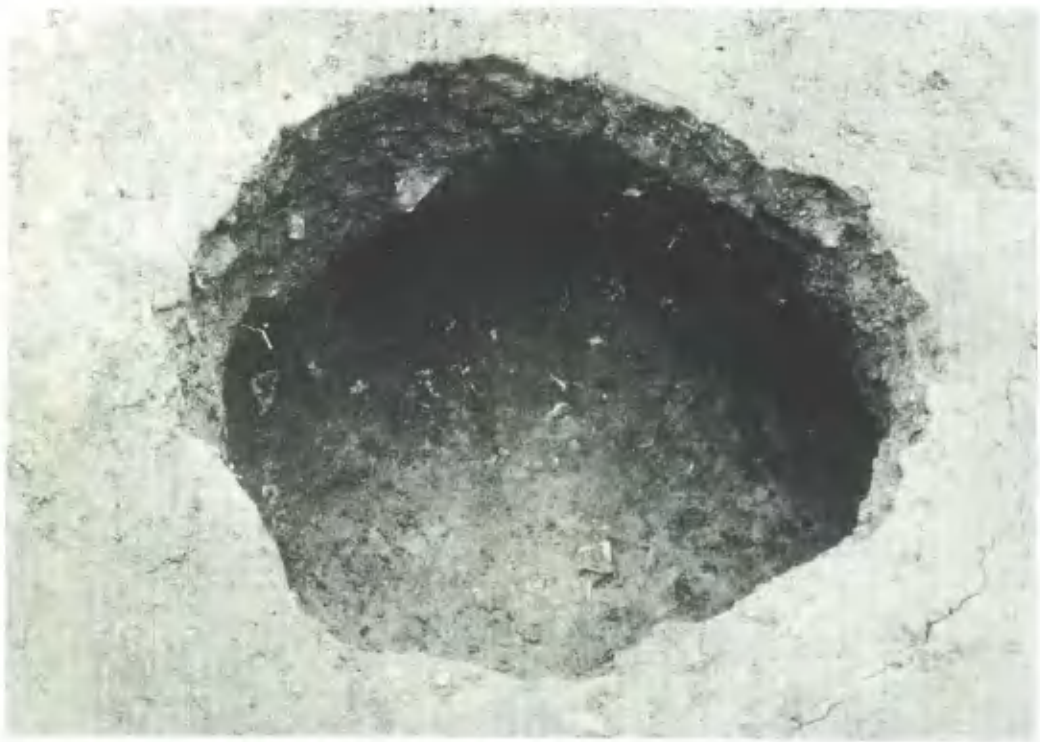
2. 3区 E地点 土壙3 (東より)

1．　3区　E地点，土壙1　　（西より）

2．　3区　E地点，土壙4　　（北より）

図版50

1．　3区　E地点，土壙5　　（南より）



2．　3区　E地点，土壙21　　（北から）

1．　3区　E地点，14号住居址　　（西南西より）

2．　3区　E地点，14号住居址　竈　　（南南東より）

1．　3区　E地点，24号住居址　　（西より）

2．　3区　E地点，24号住居址　竈付近の粘土塊　　（北東より）

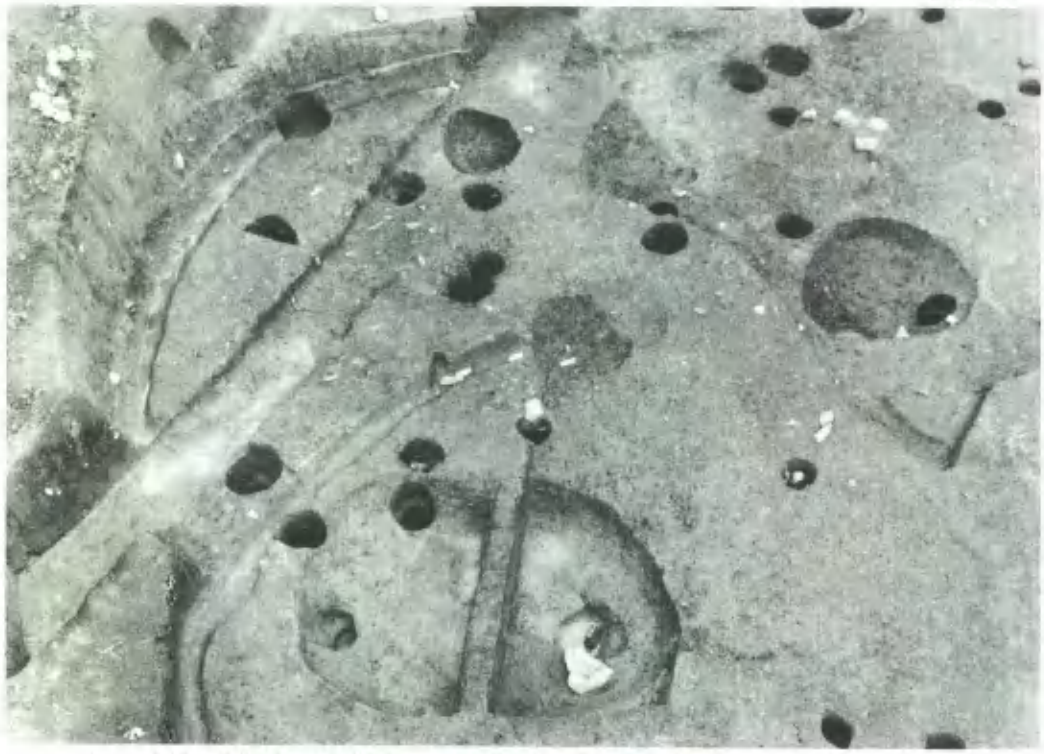
1．　3区　E地点，24号住居址　竈　（北西より）

2．　3区　E地点，24号住居址　竈の西方土器一括　（北西より）

図版54

1．　3区　E地点，24号住居址　竈の西側土器一括　（北東より）

2．　3区　E地点，土壙23　（南より）



1．　3区　E地点，4号住居址，土壙24・25・26　（南西より）

2．　3区　E地点，28号住居址　（東より）

図版56

1．　3区　E地点，28号住居址内　土器出土状態　（西より）

2．　3区　E地点，21号住居址　（西より）

1．　3区　E地点，炉14　（北より）

2、3区E地点21号住居址埋土上層
出土器台（東より）

3、3区E地点21号住居址埋土上層
出土・高坏（東より）

図版58

1．　3区　E地点，23号住居址　出土土器　　（南より）

2．　3区　E地点，炉15　　（西南より）

1．　3区　E地点，31号住居址　発掘作業風景　（西北より）

2．　3区　E地点，31号住居址　（西より）

図版60

1．　3区　E地点，31号住居址　　（東より）

2．　3区　E地点，31号住居址　　（西より）

1．　3区　E地点，31号住居址　　（北より）

2．　3区　E地点，31号住居址，中央ピット　　（東より）

図版62

1．　3区　E地点，31号住居址，炭化した柱材No. 5　（西南より）

2．　3区　E地点，31号住居址，柱穴No. 1　（西南より）

1．　3区　E地点，31号住居址，柱穴No.　　（北より）

2．　3区　E地点，31号住居址，炭化材出土状態　　（西より）

図版64

1．　3区　E地点，31号住居址，杭　検出状態

2．　3区　E地点，31号住居址，杭断面

1．　3区　E地点，31号住居址　甕出土状態　（北より）

2．　31号住居址　壺出土状態

3．　31号住居址，台付椀出土状態
4．　31号住居址，高坏出土状態

1．　31号住居址，最初に炭化米が検出された状態

2．　31号住居址，炭化米を洗い出した状態

3．　炭化籾出土状態

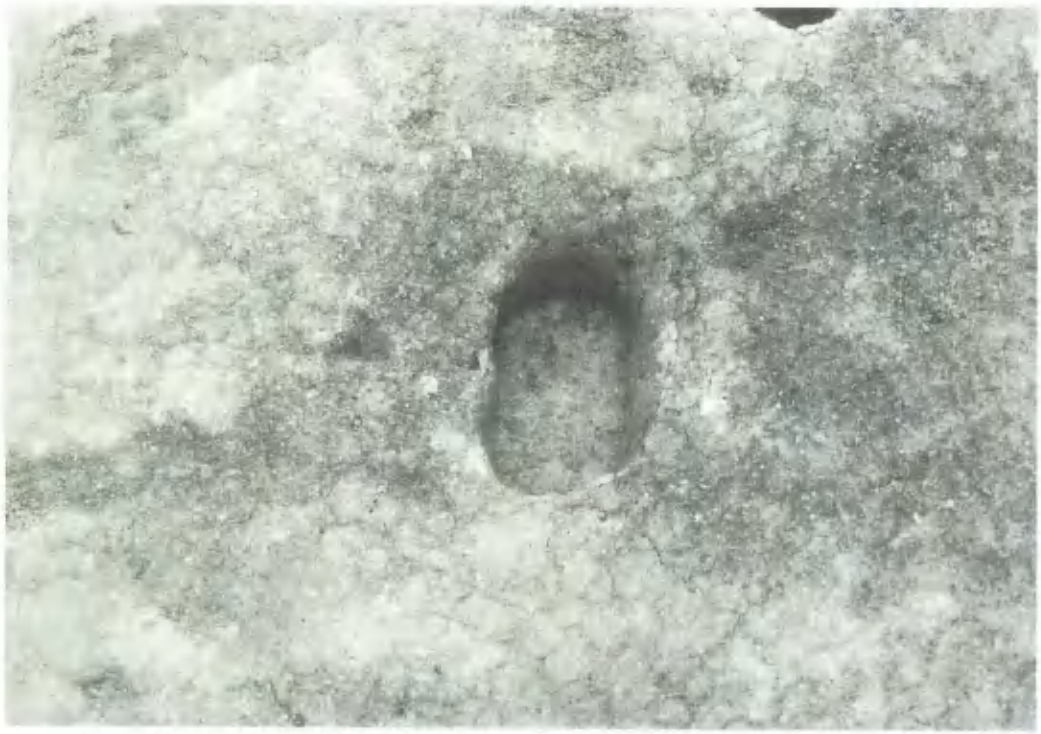
4．　炭化籾出土状態，一定方向に並んでいる

1．　3区　F地点，全景，建物21・22　　（西北西より）

2．　3区　F地点，全景，12・30号住居址全景　　（西南より）

図版68

1．　3区　F地点，左30号住居址，右下12号住居址埋土断面　（西南より）



2．　3区　F地点，12号住居址中央ピット　（北より）

▲1. 2区 全景 (西南西より)
右遠望に久米廃寺・宮尾遺跡

◀2. 3区 全景(東より)向うの竹藪は4区

図版70

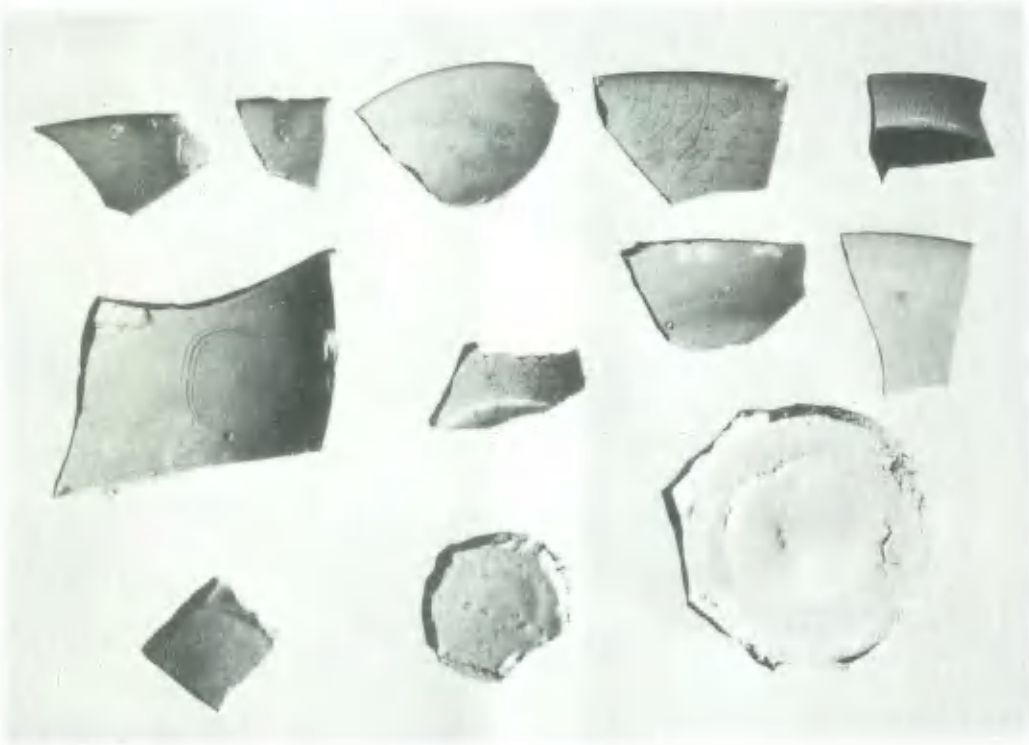
1．　土錘

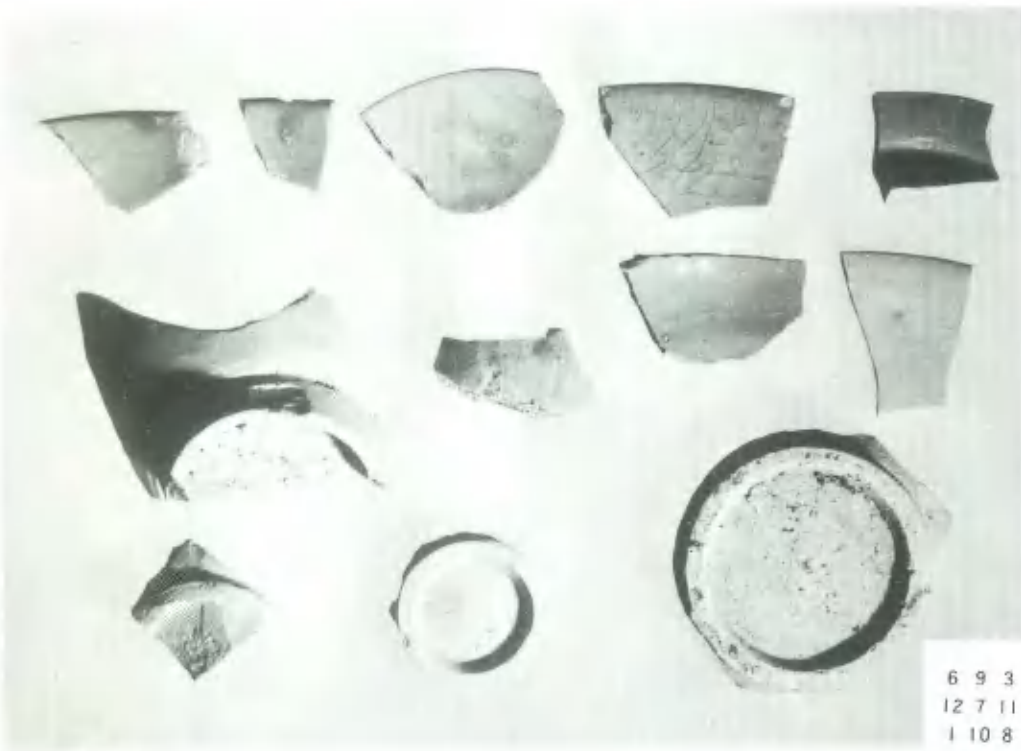
9
6
7

10
12
2

11.8
8　3
4　1
5　13

2．　緑釉陶器





6 9 3 5 2
12 7 11 4
1 10 8

陶磁器

図版72

7 1
8 2
9 3
10 4
11 13 5
12 14 6

石 包 丁

1． 石錘，石斧太型蛤刃石斧・打製石斧・扁平片刃石斧　（砥石1）

1 2 3 4 5
6 8 9 10
7

2． 砥 石　1，2，3，4，5
6
7，8，9，10

図版74

凹　石
1，2，3

敲　石
1，2，3，磨石

1．　凹石・敲石・磨石

2．　その他の石　1，2，3，4
5，6

下河内遺跡（21）

目　　次

1．調査の経過…… 402
2．遺跡周辺の地理的歴史的環境…… 403
3．調査の概要…… 406
4．まとめにかえて…… 409

図　目　次

1図　落合周辺の遺跡分布図…… 403
2図　遺跡地形図，トレンチ配置図…… 406
3図　出土遺物…… 408

1．調査の経過

本遺跡は，分布調査で，須恵器・土師器片・備前焼片等の散布地として調査の対象遺跡とした。

昭和47年１月20日から，トレンチによる確認調査を開始した。

調査員は津山市天神原遺跡の調査と併行していたために調査員に余裕がなく，調査員が常駐できないという変則な調査であった。

調査は対象地を当初下河内東遺跡，下河内西遺跡と呼称していたが，近接地であるうえに遺跡の性格も出土遺物にも大差が認められないことから同一の遺跡とし，下河内遺跡と呼称した。

トレンチは遺構の広がりを確認するためＷ１～Ｗ３・Ｅ１～Ｅ６の９を設定した。

調査地を西区と東区に区分し，西区のトレンチにＷ１～Ｗ３，東区のトレンチにＥ１～Ｅ６を設定した。調査は河本清，橋本惣司，柳瀬昭彦が担当し，本報告は橋本が執筆した。

日誌抄

昭和47年１月20日

Ｗ１～Ｗ３トレンチの設定。Ｗ１とＷ３は傾斜に直交するもので，Ｗ２は水田に設定した。

昭和47年１月21日～22日

Ｗ１トレンチ掘り下げ。

傾斜上面では表土層が厚く，須恵器・瓦器片が出土した。下層は暗褐色のかたくしまった亜角礫層で，無遺物層である。

昭和47年１月24日～26日

Ｗ２トレンチ，Ｗ３トレンチ掘り下げ。

Ｗ２トレンチからは遺構・遺物とも検出できなかった。Ｗ３トレンチは緩傾斜地で，耕土層から須恵器片が少量出土したが，遺構は検出できなかった。

Ｅ１～Ｅ６トレンチ設定。

昭和47年１月27日～28日

Ｅ４トレンチを掘り下げたが，耕土層の下は亜角礫層をなし，遺構は検出できなかった。Ｅ３トレンチでは，現水田耕土・旧水田耕土を除去後，褐色土層を検出した。須恵器片・弥生式土器片が出土した。Ｅ１・Ｅ２トレンチは亜角礫層にあたり，遺構は検出できなかった。

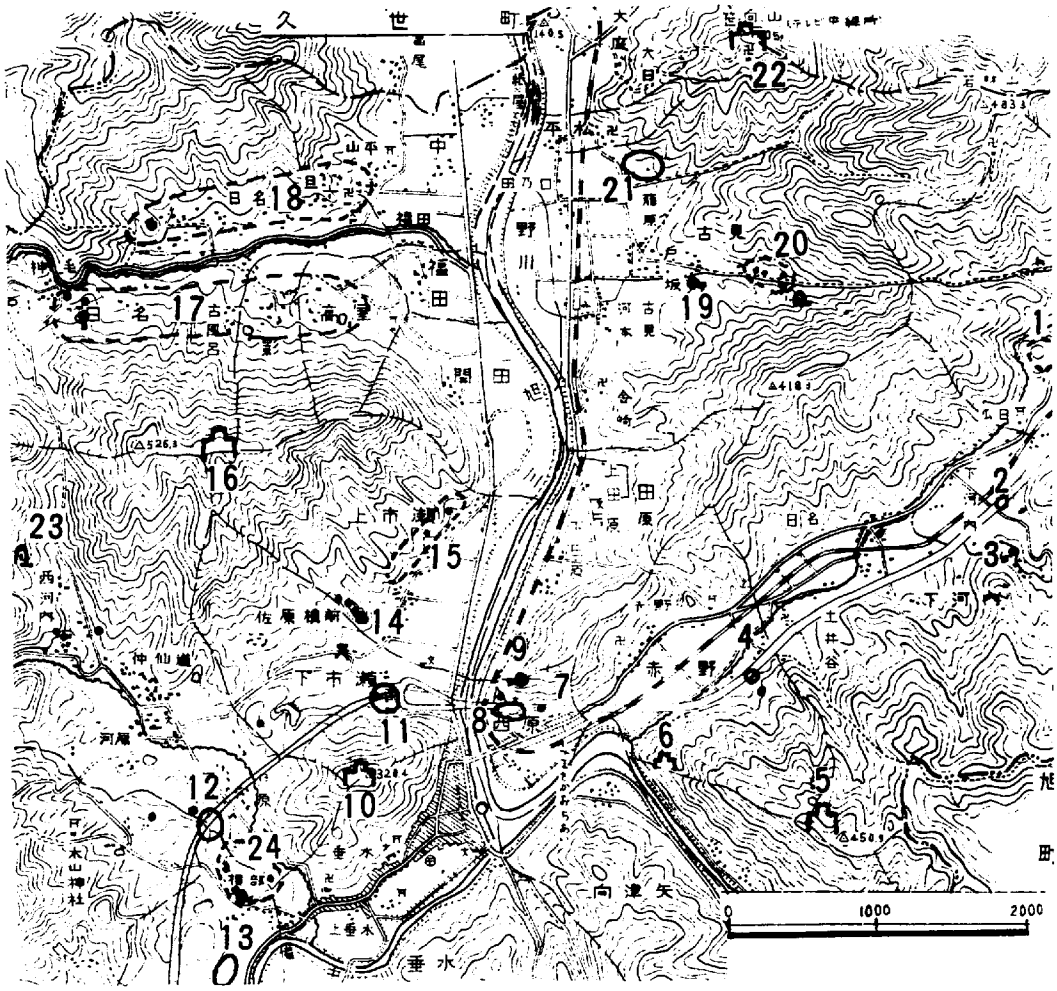
昭和47年１月29日

Ｅ５・Ｅ６トレンチ掘り下げ，須恵器，土師器，備前焼片が出土した。対策委員会現地見学。

昭和47年２月５日

補足調査。

2．遺跡周辺の地理的歴史的環境



○ 集落址　古墳，古墳群　窯址　山城址

1 赤田古墳群	② 下河内調査区	3 久保谷古墳
4 赤野遺跡	5 土器尾城址	6 逆巻城址
7 穴塚古墳	⑧ 西原遺跡	9 川東車塚
10 注連山城址	⑪ 下市瀬遺跡	⑫ 旦の原古墳
13 井手井倉遺跡	14 真桐の前古墳群横	15 上市瀬古墳群
16 宮山城址	17 日名B古墳群	18 日名A古墳群
19 天王塚	20 戸坂古墳群	21 藤原遺跡
22 篠向城址	23 西河内古窯址	24 横部古墳群

番号を○印でかこんだ遺跡は中国縦貫自動車道建設にともない岡山県教委が調査した。

第1図　落合周辺の環境（1/50,000）

地理的環境

行政的には真庭郡落合町西原に属する。ゆるやかに蛇行しながら南流する旭川は，中流域では最も広い沖積平野である。

この低地をとりまく山地はいずれも 450m前後の定高性をもつ吉備準平原の遺物である。山頂部に平坦部をもち，急峻な斜面が開析されて小さな谷が入りくんでいる。山麓部には第三紀中新統の緩斜面や低丘陵が，戸坂，高屋，上市瀬，下市瀬，赤野，下河内などにみられる。

これらの中新統の前面に洪積統の河岸段丘が戸坂，上市瀬，下市瀬，西原，赤野に点在し，古代の集落と重なって集落や水田化している。下市瀬遺跡は注連山の北麓の洪積段丘上に位置し，旭川の旧河道が段丘のすぐ東に残っている。狭長な河内川の低地の左岸は急な斜面と山麓斜面をなす第三紀層と赤野遺跡がのる洪積段丘がせまっている。赤野遺跡はこの比高17mの古墳状をなす洪積段丘上に位置している。また旭川が東へ流れを変える左岸の西原には差別侵蝕によって標高127.5～128.5mの段丘と130～132mの段丘の二段の洪積段丘があり，西原遺跡が立地している。段丘の縁辺の用水路が沖積地との境界をなしている。沖積地は水田となっていて，標高126mを測る。ルーズな砂利層や粘土層が互層をなしている。

旭川の低地の中央部，縁辺部の開田，田原下市瀬付近には河跡もみられ氾濫原の時期が長かったと思われる。

若林山地の南西に派生する山地と注連山との狭隘部をぬけて備中川を合流した旭川は東に向きをかえて，西流する河内川を合流して，吉備準平原を深く刻んで再び南流する。

真庭郡落合町は美作の西部に位置し，水陸交通の交差点として栄えてきた。旭川を往来する高瀬舟は国鉄姫新線の開通まで備前国との主要な交通機関であり，落合は物資の集散地であった。

歴史的環境

縄文時代

昭和44年度，岡山県教委が調査した西原遺跡では，中期，晩期の土器片数個，黒曜石片と遺物型石器（註１）が出土している。また赤野遺跡（註２）からは早期，晩期の土器片，黒曜石片が出土している。この付近においてはこれらの遺跡以外では明らかでない。

弥生時代

藤原遺跡，下市瀬遺跡（註３），西原遺跡，下河内調査区が確認されている。いずれも低地をのぞむ丘陵，または段丘上に位置し中～後期が主体の集落址である。また，分布調査では戸坂で石庖丁，手ぐすね土器が採集されており，槇の前で石庖丁が採集されている。旦の原遺跡からも弥生時代中期の土器片や後期の集落が明らかになっている。（註４）十分な分布調査が実施されていないので明らかでないが，旭川の氾濫をさけて段丘上，丘陵縁辺と低地との接する緩斜面に集落が存在してい

たと考えられる。

古墳時代以降

川東車塚は真庭郡最大の前方後円墳で全長約60ｍを測る。旭川の狭隘部の眺望にすぐれた山頂に位置し，前方部やや広がりをもつ後円部中央に盗掘孔があるが，主体部の構造は明らかでない。

天王塚は旭川左岸の低地をのぞむ丘陵上に位置する全長25ｍの前方後円墳である。前方部は広がりをもたず，後円部中央の盗掘孔断面に礫床が観察できる。

槇の前古墳は，全長20ｍの小型の前方後円墳である。日名Ａ古墳群，Ｂ古墳群は40数基より構成されている後期の群集墳である。その中で神の毛１号墳，ムスビ山古墳はともに全長約21ｍの小前方後円墳で，横穴式石室をもち，土器類，武具類，装身具などが出土している。６世紀後半の時期と考えられるてい。横部古墳群には全長約20ｍの前方後円墳がある。

これらの他，後期古墳の横穴式石室墳は多く，古見戸坂古墳群，上市瀬古墳群などは３～５基で構成され，戸坂１号墳は陶棺を内蔵しており，鉄鏃，大刀，刀子，鍬先などの他多くの須恵器，土師器と３対の耳環が出土している。(註５)。

昭和45年調査をした穴塚古墳（報告書予定）は約12ｍの石室をもつ巨石墳である。

赤野，下河内，西河内にも横穴式石室が点在する。下市瀬遺跡で発見されたシガラミは古墳時代に低地の縁辺部が拓かれて水田化がすすんでいたことを示していたる。戸坂古墳群の近くに三基の古窯址がある。

奈良朝時代以降

美作の西部に位置する真庭郡は「倭名抄」によると旭川を境に左岸が大庭郡，右岸が真島郡となっており，田原，河内，垂水，大庭などその郷名が残っている。奈良，平安時代については下市瀬遺構の建物址，瓦類，須恵器，井戸の他，西河内古窯址，旦の原遺跡からは奈良時代の須恵器が出土している。また井手井倉遺跡からは奈良時代～平安時代の土器片が採集されている。大字高屋に真島郡衙の存在を主張する説もある。平安時代には，神社や，寺院の建立や，真島庄，河内庄などの名もみられるが詳かでない。鎌倉時代以後，江戸時代初期については断片的な文献と点在する山城などから組みたてる他はない。

梶原景時が美作国の守護職となったことは東鑑十一に記載がある。14世紀中頃から山名氏と赤松氏の抗争が活発化する中で山城館，堡，構などが築かれはじめたと考えられている。しかし，それよりも早く正平15年（1360）山名氏の進攻により落城した篠向城などの山城も築かれている。その後尼子氏，浦上氏，毛利氏，宇喜多氏らの勢力争いの場となり，宮山城，注連山城，土器尾城逆巻城などが築かれた。(註６）これらの山城の外に小規模な居館がその山麓，低地に営まれていたと思われる。美作は天正12年以後は宇喜多氏の統治下にあったが，関ヶ原の敗戦により，小早川氏統治

下に入り更に慶長８年，森氏の統治下に入ることになる。

註１　「西原遺跡出土の石器」河本　清，枝川　陽，栗野克己『考古学雑誌』第58巻第２号

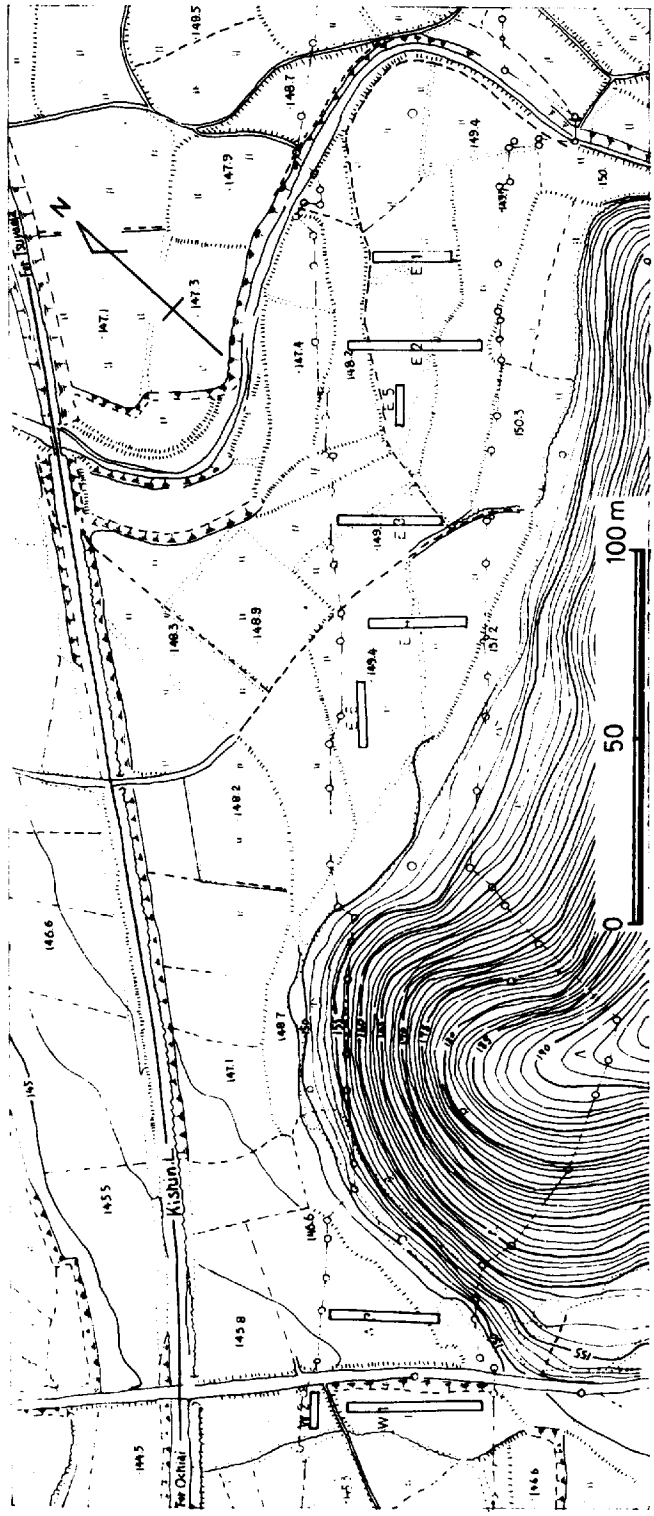
註２　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（３）1973

註３　同　上

註４　昭和48年度岡山県教委が発掘調査を実施した。

註５　岡山県埋蔵文化財報告３（1973）「美作落合町古見戸坂１号墳」橋本惣司，新東晃一，山磨康平

註６　美作古城史（一）昭和28年　寺阪五夫



第２図　地形図とトレンチ配置図

３．調査の概要

西区

本遺跡の中央部に変成岩を基盤にする山塊が急斜面をなして落ち，南西部分は崖錘状に緩やかに傾斜し畑地となっている。Ｗ１・Ｗ２トレンチでは耕土下には茶褐色を呈する崖錘堆積物が約20～30cmの層をなし，須恵器片を含む。遺跡は確認できなかった。Ｗ３トレンチは耕土下に砂利層があり，遺構はなかった。

東区

Ｅ１～Ｅ６トレンチを設定し

た。Ｅ１～Ｅ３トレンチは，耕土層・亜角礫を含む黄褐色土層となり，遺物・遺構は検出できなかった。Ｅ４トレンチでは耕土層下に旧水田層があり，礫を含む褐色土層からは備前焼擂鉢，瓦器，須恵器・土師器・弥生式土器片が出土した。Ｅ６トレンチからは，奈良時代の須恵器片が出土している。

以上のことから，東区東半部は久保谷川の氾濫で遺構は存在しないが，西半部から用地北西部にかけては，河内川が形成した低い沖積段丘であり，弥生時代～中世にかけての生活面となり得たと思われる。本調査においては遺構を明らかにできなかったうえに，出土遺物は少量で遺跡の性格を明確にし得なかった。

出土遺物

弥生式土器（３図－１）

甕形土器で底部を除いて半分以上が残っている。口縁部はにぶく外反し，口縁端部は上下に肥厚し外面には退化した細い凹線文が施されている。頸部は短かく，内外面ともに横なでによる整形である。

胴部は球形をなし，肩はなく，外面は刷け目が施され，内面には指頭圧痕がみられる。弥生時代後期初頭と考えられる。

須恵器（３図－２）

須恵器蓋の破片で内側は研磨されており，転用硯と思われる。高台の形態からみて，奈良時代の遺物と考えられる。

図化できなかったが，高台付の坏底部片も出土している。

土錘（３図－３）

長さ4.5cm，最大径1.4cmの紡錘形をなす。時期は明らかでない。

瓦器（３図－４）

器面は灰黒色を呈し，口縁部より２cm下に凸帯がめぐる。外面にススが付着しており，土鍋と思われる。

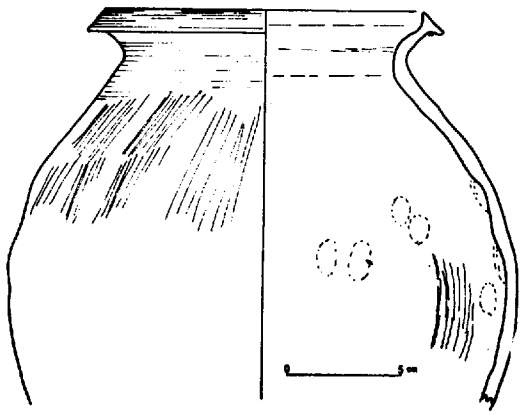
宋銭（３図－５）

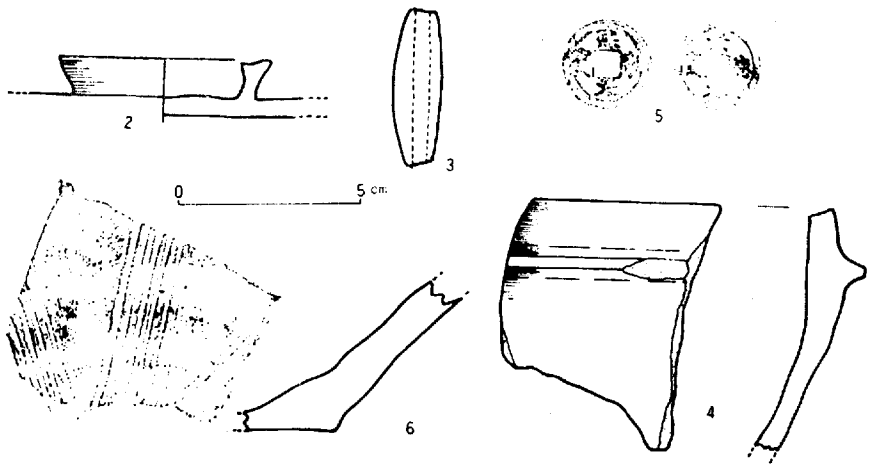
景徳元宝（北宋1004～07）

熙寧元宝（北宋1068～77）

備前焼擂鉢（３図－６）

灰白色を呈し，内面には６本単位の条線が放射状に施されている。





第３図　出土遺物

4．まとめにかえて

本調査で出土した遺物は弥生時代後期から室町時代まで，時代差がはげしいが，明確な遺構が検出されておらず，その性格を明らかにし難い。しかし，河川の氾濫をうけない沖積段丘上が古くから生活面として利用されたことが考えられ，狭い低地においてさえ，有為な生活空間であったことは，他の地域においても同様に考え得る資料を得た。

河内川を中心とした狭い袋小路的地形区をなす低地内に点在する遺跡は古墳時代のものが最も多いが，赤野遺跡からは縄文時代の遺物が少量出土している。弥生時代の遺物は本遺跡出土の甕形土器以外にその数は少ないが，点在する沖積段丘上に存在する可能性がある。

古墳は赤田古墳群，久保谷古墳などがいずれも後期古墳に属する。古墳時代集落址については赤野遺跡で方形の住居址が検出されている。本遺跡で奈良時代の須恵器が少量出土している。遺構に伴わないので速断はできないが，須恵器坏片や須恵器蓋の転用硯片は付近に遺構の存在をうかがわせる。

本調査で最も多く出土した遺物は，瓦器，備前焼，青磁，宋銭，瀬戸焼の天目茶碗などの中世に属するものである。これらの遺物は赤野遺跡出土のものときわめて類似している。(註) すなわち，鎌倉～室町時代に比定できるもので，本遺跡が立地する沖積段丘上に遺構が存在することが考えられる。

註　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3

「赤野遺跡」１９７３　岡山県教育委員会

下河内遺跡遠景

出土遺物

穴塚古墳(23)

目　次

1．調　査　の　経　過……414
2．位　置……416
3．古　墳　の　構　造……416
4．石　室　の　規　模……421
5．出　土　遺　物……421
第1図　穴塚古墳地形図……417
第2図　穴塚古墳石室実測図……419
第3図　穴塚古墳石室平面図……421
第4図　穴塚古墳出土遺物……422

図　版　目　次

図版1－1　南側（商店街の道路）より望む……423
2　南側より……423
2－1　南側（石室入口前面）より望む……424
2　調査前の入口……424
3－1　背後より望む（山あいを旭川が流れる）……425
2　背後より……425
4－1　背後の山より見る……426
2　盛土および掘り方……426
5－1　正面より……427
2　東側より……427
6－1　西側より……428
2　西側より……428
7－1　南西側より……429
2　石室内部……429
8－1　石室内部より羨道……430
2　背後より……430

●穴塚古墳は、昭和45年７月27日より約２ヵ月間にわたり、真庭郡落合町西原で緊急発掘調査を行った記録である。

●発掘調査は、中力昭、伊藤晃が担当し、河本清、柳瀬昭彦、福岡澄男の協力を得た。

●位置、地形については西原遺跡（第３分冊）の図を参照されたい。

1．調 査 の 経 過

日本道路公団の事業である縦貫道建設に伴い、昭和45年７月27日より緊急に発掘調査することになり、対策委員の方々のご助言により県文化課によって調査を実施した。

以下日誌の抜き書きである。

○調査日誌（抄）

45年７月27日（晴）落合町宿舎に到着。諸器搬入。

７月28日（晴）草刈り、旧墓地の石垣こわし、写真（調査前）。

７月29日（晴）草刈り、古墳全景写真、羨道部調査。

７月30日（晴）地形測量開始、石室内清掃をはじめる。

７月31日（曇のち雨）測量続行、石室内清掃中直刀らしきもの検出。

８月１日（曇）測量、玄室内出土の土を調べる。玄室内床面確認。

８月２日（曇）測量図修正、玄室内土中の土器検出。

８月３日（晴）須恵器出土、人骨らしきもの検出。

８月５日（晴）玄室及び羨道部埋土の除去、清掃、埋土内の遺物再確認。

８月６日（晴）玄室内清掃完了、羨道部埋土の除去。

８月７日（雨）雨のため作業中止、出土遺物の整理。

８月８日（晴のち雨）トレンチ設定部の墓の石垣こわし、雨激しく作業中止。

８月９日（晴）地形測量補足、遺物整理、写真撮影。

８月10日（晴）東トレンチ掘り始め、羨道部前面掘り下げ、夜石室内撮影。

８月11日（晴）羨道部前面掘り下げ（地山面まで）東トレンチ掘り下げ、割り付け準備。

８月12日（晴）羨道部前面東トレンチ地山面まで掘り下げ完了、割り付け。

８月13日（晴）人夫休み（３日間）、プラン図作成、割り付け。

８月14日（雨）台風９号のため雨激しい、プラン図修正、床面遺物取り上げ。

８月15日（雨）　〃　　遺物整理。

８月18日（晴）北トレンチ西トレンチの掘り下げ開始。

８月19日（晴）昨日の作業続行、石室内割り付け、夜会議出席。

８月20日（晴）明治以降の人骨出土、処理のため作業進まず。

８月21日（雨）遺物、図面整理。

8月22日（晴）石室内割り付け完了、縦断セクションほぼ完了。

8月23日（晴）石室内実測はじめる。

8月24日（晴）石室内実測、東トレンチ南側掘り進める。

8月25日（晴）石室内実測、西トレンチ南側掘り始める。

8月26日（晴）石室内実測、西トレンチ南側掘り始める。

8月27日（晴）石室内実測、西トレンチ南側掘り始める。

8月28日（晴）石室内実測、西トレンチ南側掘り始める。

8月29日（晴）石室内実測、縦横断盛土セクション写真。

8月30日（晴）石室内実測ほぼ完了、写真撮影。

8月31日（晴）東トレンチの掘り下げ続行。

9月2日（晴）天井石露出、作業開始。

9月3日（晴）天井石露出作業。

9月4日（晴）東半部の掘り方追求、西南部掘り進める、天井石露出。

9月5日（晴）天井部東半部清掃、新しい人骨出土のため作業中止。

9月6日（晴）人骨処理できず作業中止。

9月7日（晴）天井石上面縦断セクションの実測、写真。

9月8日（晴）人骨処理（町教委）、天井石実測。

9月10日（晴）天井石全面清掃（写真用）。

9月11日（晴）天井写真、割り付け、西トレンチセクション実測、写真。

9月12日（晴）天井石割り付け続行。

9月14日（晴のち雨）天井石割り付け続行。羨道部前面堤取りこわし。

9月15日（曇のち雨）写真撮影、午後雨のため中止。

9月16日（曇のち雨）天井石割り付け、東側掘り方掘り進める。

9月17日（晴）現場見学会。

9月18日（雨）雨のため作業中止、出土遺物実測、写真整理。

9月19日（曇のち雨）雨のため作業中止、実測図整理、遺物実測。

9月20日（晴）天井石実測はじめる。掘り方セクション清掃、写真、実測。

9月21日（晴）天井石プラン図作成、実測。

9月22日（雨）遺物実測。

9月23日（雨）実測図遺物の整理。

9月24日（晴）天井石実測完了。

9月25日（雨）小雨の中で作業続行、全作業ほぼ完了。

2．位　　置

落合の地は、その名が示すように旭川を本流として西から上房郡呰部、中津井に源を発する備中川、そして東から落合町西河内奥山に源を発する河内川等々の小中河川が合流している。地質はほとんど水成岩で、第4紀新層よりなっている。

落合地区においては、旭川本流に沿って、ほとんど平野らしい平地も認められないけれども、備中川、河内川等々の小中河川ぞいの辺狭な谷間に沿って水田が開かれている。旭川本流沿いは過去においても当然旭川の氾濫原としてたびたび洪水にあった可能性が強く、開発もむしろ備中川、河内川等々の小中河川沿いの沿いの谷間の方がより安全性が高かったであろうと思われる。この旭川の東岸段丘面には弥生時代から人々の生活がはじめられている。先に調査された西原遺跡は、弥生時代中期以降の生活跡であり住居址をはじめ、数多くの遺構が検出されているし、過去において有隣中学校（現落合中学校有隣校舎）、校庭拡張工事においても、弥生式土器片、須恵器片多数が出土しているという。

また、背後の山塊上には、前半期古墳に含まれると思われる川東車塚（前方後円墳）が存し，山頂にも弥生時代の包含層が存在している。穴塚古墳はこの遺跡群の東端に位置し，弥生時代の包含層を削平して構築されている。

3．古墳の構造

現状において、この古墳の墳丘部分は近世以来現在までの墓地として利用され、墳丘および墳端部は一部採土の痕を認めるほど変形していた。

したがって本来の墳形について、円墳あるいは方墳である断定をにわかにくだしがたい状態であった。ただ北側の残存の部分がわずかに弧状を描くように判断できるところから直径20ｍをくだらない円墳であったろうと推定される。

また、古くから入口が開口していたため、横穴式石室の内部も戦時中防空壕として使用されたり，戦後まもなく好事家等によって、床面の下まで盗掘にあっている部分もあった。

穴塚古墳の築造される以前の旧地形は緩斜面であるが古墳を築造するために、旧地表（弥生包含層）および地山を掘りこんだいわゆる掘り方から記すと、幅７ｍ（東壁外側から約１ｍ、西壁外側から約２ｍの余裕がある。）長さ約９ｍ、深さ約 1.5m（最深部分）、斜面下部では、１ｍ前後掘りこんで石組みを行なっている。

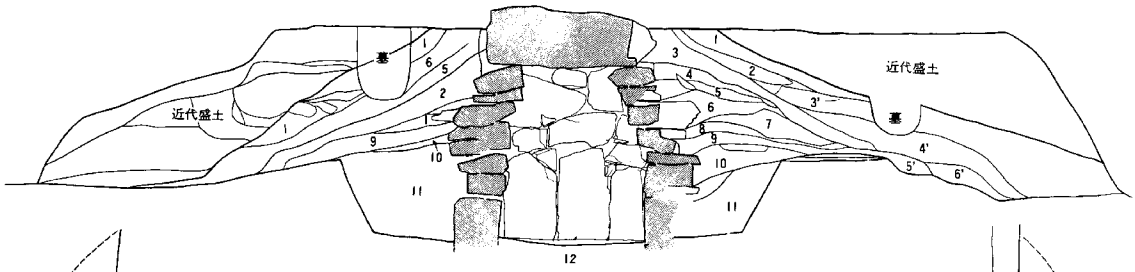
玄室床面は、地山の淡黄色粘土層をそのまま床面にしているが、ほぼ床面全体が荒らされており，築造当時の床に密着して発見された遺物としては，奥壁付近で小鉄刀および人骨片が確認できたにすぎない。

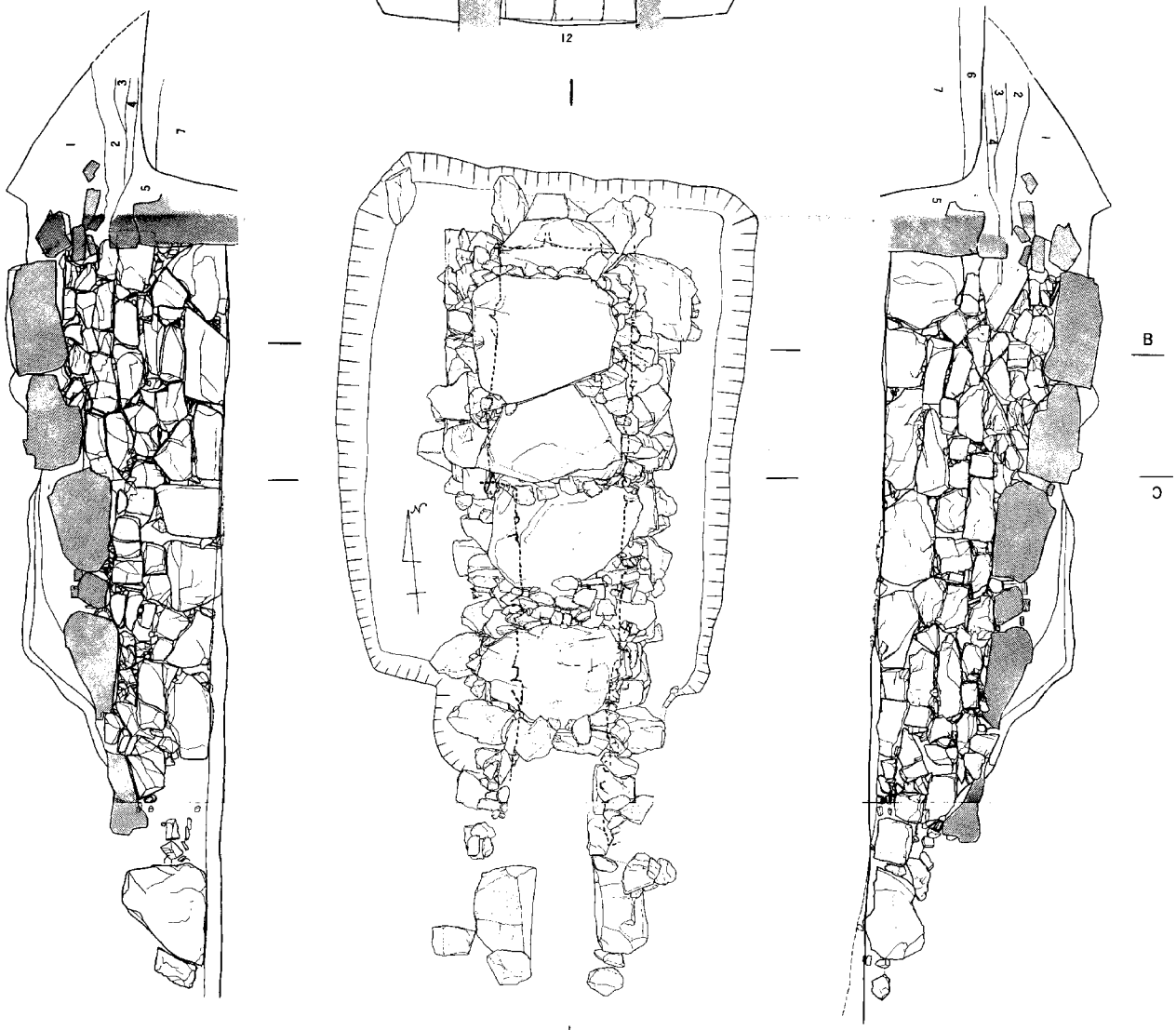
羨道部床面は，約 1.5mから両側壁最下段の石が，すべて見えるまで削られ，ゆるやかなU字状になっており，数次にわたりかき出された様相を呈していた。

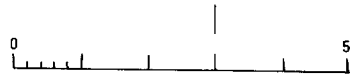
第１図　穴塚古墳地形図（縮尺1/100）

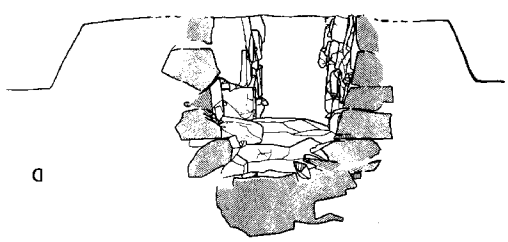
第2図　穴塚古墳石室実測図（縮尺1/80）

1褐色土層
2茶褐色土層
3'暗茶褐色(れきを含む)土層
3暗黒色、茶褐色(粘土)土層
4茶まじり暗褐色土層
4'灰黒色（粘土）土層
5淡黄色（粘土）土層
5'茶褐色粘粘土）土層（
6淡黒色（粘土）土層
6'黄褐色（粘土）土層
7茶黄色(粘土質で礫を含む)土層
8淡黒色(黄斑点を多く含む粘土質)土層
9茶褐色（粘土質）土層
10茶褐色土層
11茶褐色（れき多し）土層
12淡黄色（粘土）地山層
（一部上面は弥生の包含層である）









1茶褐色土層
2暗茶褐色土層
3暗褐色土層(斑黄色粘土)
4暗茶褐色土層(斑黄色粘土
5黒色土層(旧表土層
6茶褐色(旧表土層
7淡黄色(粘土)地山層

4．石室の規模

横穴式石室は，全長約12mの左片袖式である。玄室の数値から記すと，長さ3.8m，巾２m，高さ2.7mで，羨道は長さ8.2m，巾が袖部で1.5m，入口付近において１mを計測しえた。

石室奥壁の構築は，最下段3コの石は地山に掘り込んで竪積みにし，第２段目から横積みにしている。そのほか石をたてて使用しているのは玄室と羨道との境の袖石のみである。玄室および両側壁は，最下段からすべて横積みにして７段に積み重ね，床面と天井面での差は約１mで，いわゆる持ち送りの型をとっている。羨道部は，３～４段積みでほぼ垂直にあがっている。天井部は，玄室部で２枚，羨道部で３枚現存していたが，羨道部をおおいつくすには，南部の入口付近にもう１枚あったものと想定される。

さらに，それぞれの天井石の間隔をうめるように20×40cmの角礫や河原石等がつめられている。

全体として，この石室は羨道部が非常に長い特徴をもつといえる。

第３図　穴塚古墳石室平面図
（縮尺1/100）

5．出 土 遺 物

床面における遺物は，小鉄刀（１）のみで，あとは馬具（鉸具）鉄鏃，鉄斧，須恵器が出土しているが，すべて遊離された状態であった。

小鉄刀（１）は，全長30cm，中心8.5cm，巾１cm，６cmの所に径0.3cmの目くぎ穴があり，端部に木質が部分的に残存している。刃渡り22cm，巾2.3cmである。

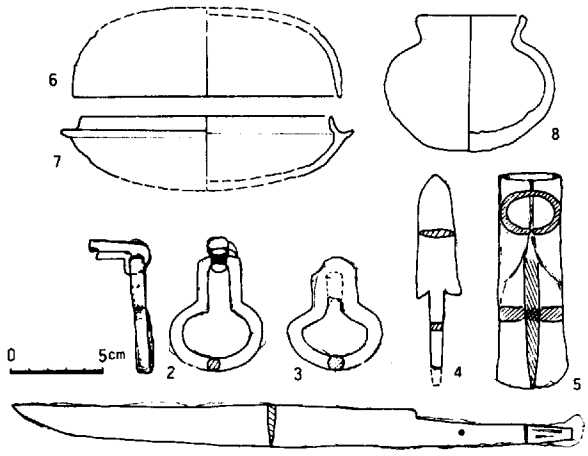
馬具(２，３）は，鉸具と思われるもので，金張りを行なっている痕跡がみられる。

鉄鏃（４）は，全長約11cm，最大巾２cmをはかる。

鉄斧（５）は，全長11.5cm，刃幅４cm，袋はほぼ円形を成している。

須恵器杯蓋（６）は，小破片であるが，口径14cm，高さ約５cmと思われる。杯身（７）も小砂片である。口径13.5cm，高さ４cmをはかる。

薬壺（８）は，ほぼ完形で口径5.5cm，高さ7.4cmあり，内部には丹がつまっていた。



第４図　穴塚古墳出土遺物

図版 I

I　南側（商店街の道路）より望む

図版 2

1　南側（石室入口前面）より望む

2　調査前の入口

1　背後より望む（旭川から山あいを流れる）

2　背後より

図版 4

1　背後の山よりみる

2　盛土および掘り方

1　正面より

2　東側より

図版 6

1　西側より

2　西側より

1　南西側より

2　石室内部

図版 8

1　石室内部羨道より

2　背後より

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(8)

中国縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査 5

昭和50年3月　印　刷
昭和50年3月　発　行
発行　岡山県教育委員会

印刷　岡山県津山市椿高下38
作州日報印刷